

【アンコもどき小説】 や  
る夫と叢雲とステンノ  
は世界を渡りながら世  
界の危機を回避するよ  
うです

北部九州在住

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

やる夫スレでするのはめんどいお。

だから小説でするお！

そんなのりで始めた実験作。

ネタは話の下に出してゆく予定。

# 目次

60

テンプレ転生シーン	最初のサイコロ	
1		
入即出やる夫の現状		12
鴨が葱を背負ってやつてくる		19
PRタイムという名前の演習航海		25
チュートリアル準備編		33
ある意味メガテンシナリオ進行中		39
世のメガテニスト達を尊敬するしかない		
仲魔集めと悪魔合体回		50
チートオリ主特権の悪の組織の潰し方		
クロスオーバーは出汁を作るがごとく味		
をかけ合わせるべし		72
ハメ殺しが確定しているので、尺稼ぎの		
方に苦労した話		82
後始末と次の準備		92
あの時代にやばいやつが居るのならばこ		
の時代にもやばいやつは居る		102
タルカジャ!タルカジャ!!		109
掛け金を釣り上げすぎて降りることがで		
きなくなつたギャンブラーとそれを見て		
にやつくディーラー		117
おいでませ学園都市		124

学園都市一日目から二日目朝	—	131	第四次聖杯戦争介入	その4	—	228
学園都市二日目朝から三日目朝	—	141	第四次聖杯戦争介入	その5	—	237
天海市攻略準備編	その1	148	Intermission	その1	—	—
天海市攻略準備編	その2	156	248	—	—	—
天海市攻略準備編	その3	163	Intermission	その2	—	—
世の中はうまくいかない上にさらに厄介	—	172	255	—	—	—
事がやってくる	—	172	聖杯戦争拡大	その1	—	264
この物語は監獄戦艦ではありません。念	—	182	聖杯戦争拡大	その2	—	273
の為	—	182	聖杯戦争拡大	その3	—	280
叢雲航海日誌	—	191	ありがとうクリプター人類が忘れても俺	—	—	292
第四次聖杯戦争介入	その1	198	は君たちの偉業を忘れない	—	—	—
第四次聖杯戦争介入	その2	207	人類救済？そんなことより潰しあいだ！	—	—	—
第四次聖杯戦争介入	その3	217	—	—	—	302

ですべらーど	310	冬木市の一番長い夜	その2	404
反省会	321	冬木市の一番長い夜	その3	413
サーヴァントドラフト会議……の予定	328	冬木市の一番長い夜	その4	420
だった	328	冬木市の一番長い夜	あとしまつ	
優雅の代償	338	427		
やばいやつにやばいものを渡すとやばい	345	第四次聖杯戦争あとしまつ	その1	
事態しか引き起こさない	345	442		
羹に懲りて膾を吹く	354	第四次聖杯戦争あとしまつ	その2	
一手遅らせ一駒入手	363	449		
藤丸立香のレア鯖	370	第四次聖杯戦争あとしまつ	その3	
状況整理	378	457		
アサシン掃討戦	386	第四次聖杯戦争あとしまつ	その4	
冬木市の一番長い夜	396	466		
その1				

洋上人狼	その 2	569
洋上人狼	その 1	559
猫の手の確保	その 5	552
猫の手の確保	その 4	543
猫の手の確保	その 3	534
猫の手の確保	その 2	522
猫の手の確保	その 1	515
大天使ミカエルの陰謀		508
みらいからの使者	その 3	501
みらいからの使者	その 2	495
みらいからの使者	その 1	489
冬木市災害対策訓練		479
CPOでの雑談		474

668	第○回カルデア連絡会議	その 1	662
	ザ・ライト・スタッフ		656
	大英帝国円卓会議	その 3	649
	大英帝国円卓会議	その 2	640
	大英帝国円卓会議	その 1	633
	洋上人狼	あとしまつ	622
	洋上人狼	その 8	614
	洋上人狼	その 7	606
	洋上人狼	その 6	594
	洋上人狼	その 5	585
	洋上人狼	その 4	579
	洋上人狼	その 3	

第○回カルデア連絡会議 その2

674

査問会

680

接待風景

687

横須賀基地食堂の一コマ

693

船頭多くして船山に登る その1

700

船頭多くして船山に登る その2

707

船頭多くして船山に登る その3

713

船頭多くして船山に登る その4

720

ターミナル開発 その1

726

ターミナル開発 その2

732

ターミナル開発 その3

739

ターミナル開発 その4

748

ターミナル開発 その5

754

ターミナル開発 その6

763

プリズマ・コース探索 その1

771

プリズマ・コース探索 その2

779

プリズマ・コース探索 その3

786

プリズマ・コース探索 その4

792

対ヴォルケンリッター対策仲魔作成

799

閑話 小ネタ劇場

811

892	プリズマ・コース防衛戦	その5	その5	951
885	プリズマ・コース防衛戦	その4	その4	944
870	プリズマ・コース防衛戦	その3	その3	937
855	プリズマ・コース防衛戦	その2	その2	930
	閑話 小ネタ劇場	その4	閑話 小ネタ劇場	922
834	プリズマ・コース防衛戦	その1	その1	914
			プリズマ・コース防衛戦	
			あとしまつ	
			904	
			プリズマ・コース防衛戦	
			その6	
			826	
			817	
			849	
			その5	
			あとしまつ	



麻帆良学園訪問	その1	
麻帆良学園訪問	その2	
麻帆良学園訪問	その3	
閑話 小ネタ劇場	その6	
麻帆良学園訪問	その4	
麻帆良学園訪問	その5	
麻帆良学園訪問	その6	
麻帆良学園訪問	その7	
閑話 小ネタ劇場	その7	
更に続く猫の手の確保	その1	
更に続く猫の手の確保	その2	
更に続く猫の手の確保	その3	
更に続く猫の手の確保	その4	

1048 1040 1032 1025 1018 1011 1002 994 988 980 973 967 960

更に続く猫の手の確保	その5	
更に続く猫の手の確保	その6	
沖繩沖海戦	その1	
沖繩沖海戦	その2	
沖繩沖海戦	その3	
沖繩沖海戦	その4	
沖繩沖海戦	その5	
沖繩沖海戦	その6	
沖繩沖海戦	その7	
戦果報告会	あとしまつ	

1151 1136 1128 1116 1105 1098 1091 1082 1074 1067 1061 1055

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

side

1202

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

を乗り切るようです その1

1159

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

を乗り切るようです その3

1211

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

を乗り切るようです その1 一般将兵

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

side

1175

を乗り切るようです その3 一般将兵

1222

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

side

1222

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

を乗り切るようです その2

1185

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

を乗り切るようです その4

1227

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

を乗り切るようです その2 一般将兵

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

を乗り切るようです その4 一般将兵

side

1239

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

を乗り切るようです その5

1245

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

を乗り切るようです その6

1253

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

を乗り切るようです その7

1262

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

を乗り切るようです その8

1273

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

を乗り切るようです その9

1293

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

を乗り切るようです その10

1302

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れて一年戦争

を乗り切るようです リザルト

閑話 小ネタ劇場 その8

始動

学園都市暗闘 その1

1342

1329

1322

1313



1609	入即出やる夫のバカンス	その4
1599	入即出やる夫のバカンス	その3
1592	入即出やる夫のバカンス	その2
1578	入即出やる夫のバカンス	その1
1572	インターミッション	その2 後編
	インターミッション	その1 前編
		15661560

1681	入即出やる夫のバカンス	その10
1673	入即出やる夫のバカンス	その9
1658	入即出やる夫のバカンス	その8
1650	入即出やる夫のバカンス	その7
1641	入即出やる夫のバカンス	その6
1633	入即出やる夫のバカンス	その5
1620	入即出やる夫のバカンス	その5

まだまだ続く猫の手の確保 その1

1690

まだまだ続く猫の手の確保 その2

1697

まだまだ続く猫の手の確保 その3

1704

まだまだ続く猫の手の確保 その4

1711

まだまだ続く猫の手の確保 その5

1719

猫の手を押し付けられた麻帆良学園の一

日

1727

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです その1

1733

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです その2

1740

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです その3

1748

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです その4

1758

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです その5

1766

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです その6

1773

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです その7

1782

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです その8

1791

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです この世界線で

の星一号作戦

1800

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです その9

1813

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢  
雲とステンノとマシユを連れてグリプス  
戦役を乗り切るようです ジャブロー基  
地宇宙港にて

1821

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢  
雲とステンノとマシユを連れてグリプス  
戦役を乗り切るようです その10

1829

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢  
雲とステンノとマシユを連れてグリプス  
戦役を乗り切るようです その11

1838

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス  
戦役を乗り切るようです その12

1845

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢  
雲とステンノとマシユを連れてグリプス  
戦役を乗り切るようです その13

1853

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢  
雲とステンノとマシユを連れてグリプス  
戦役を乗り切るようです 戦闘終了後の  
グリプスにて

1861

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢  
雲とステンノとマシユを連れてグリプス



戦役を乗り切るようです その14

1867

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢

雲とステンノとマシユを連れてグリプス

戦役を乗り切るようです その15

1873

舞台と観測者

思考実験 対アーカード

思考実験 対ロンドン

思考実験 対ミレニアム

思考実験 対ゴルゴ13

衛宮切嗣探索 その1

鯖整理 その1

鯖整理 その2

鯖整理 その3

聖杯戦線 その1

聖杯戦線 その2

1946193719301926

1918191219061899189418891881



# テンプレ転生シーン 最初のサイコロ

「いやまあ、私だってプロジェクトが一通り成功したことについては文句は言いませんよ。」

けど、『じゃあ、今度はシェア獲得プロジェクトチームのリーダーは君ね』と上からの命令にブラックが確定しましてね。

私なにか悪いことしましたか!?

このプロジェクト、人気ジャンルだから他神様多いし、天国と地獄だけでなく多元世界の調整やらでブラック勤務一直線なんですけどおーーーーーーー!!!」

おかしい。

死亡してうきうきとチート転生と思ったら、目の下にくま作った女神が涙目で愚痴つてやがる。

「大体おかしいと思いませんか?」

いくら人気世界だからって閻魔よろしくぶちこんでも大体なんとかなるって。

まだ綺麗に滅んでくれれば、こっちもお役ごめん別部署へ……」

また女神。

自分の担当する世界デイスリ始めたぞ。

なんかいつちやった目で天井見上げてぼやき出したし。

「しかもあれですよ。

チートつけます。ハーレムつけますって言っても誰もこの世界にやっこないんですよ！

なんですか！

ほんのちよつと主神格と戦うことを強要するだけでみんなびびって!!

死ぬ時は一瞬だから楽ですよって笑顔でアピールしても、ご活躍をお祈りしていませんって！

そんなにみんなSFいやですか！

そんなにエルフがいいですか！

出してあげましょーじゃないですかって言ってもみんな断りやがって！

辞めてやる！

今度こそ女神辞めてやるんだから!!」

多分これそのまま去った方が良かったのだろう。

だが、お人好しかつ少しスケベな俺は見た目だけは良い女神についつい声をかけてしまった。

「ちなみに、その世界ってどんなのです?」

『女神転生』……って! 居たの!?

ちよつと待つて!

そのまま去らないで!!

色々つけるから、茶菓子も用意するから、見捨てないでえ!!!」

「そりゃ、あの世界どの結末行つても最終的には人間ろくな終わり方しないじゃないですか」

女神必死の泣き落としに負けた俺は、女神相手に問題点を指摘する。

神界大決戦ゆえのレベルインフレが、色々と問題を浮き彫りにする。

「まず主神をボコつてオシマイならこんな事になっていませんよね。」

結局、その主神の座にその主人公が座つてしまうから論外です。

女神様の仕事軽減を考えたら、終わりを考えないと結局オリ主がラスボスに成りかねない。

それを解決するには一つしかありません」

女神様が複数のレイヤーを画面に浮かべながらメモを取る。

このレイヤー一つ一つが世界らしい。

ホログラムよろしく綺麗に重なる世界は見ているだけでちよつと楽しい。

「多重クロス。」

重要なのは、今回システムの売り込みによるシェア獲得が目的だから、派手に重ねていざとなったら別世界に逃亡エンド。

少なくともこれでいつでも打ち切れ（エタレ）ます」

投げっぱなしジャーマンでも終わらせられるのが強みである。

この物語は、新しいシステム（書き方）をここで売り込むという目的がある。

それさえ達成するならば、終わりなんてぶつちやけどうでもいい。

最後神隠しエンドでも、隕石による人類滅亡エンドでもその過程こそが重要なのだ。

「ふむ、ふむ。」

じゃあ、貴方、それで転生してみない？」

「は？」

がっしりと肩を掴まれる。

そのワガママバディのどこにそんな力があつたのかと思うが、顔は女神でなく幽鬼である。

ブラック業務イクナイ。

「チートつけるわよ。

ハーレムつけるわよ。

出来る限り、望みを叶えるから、どうかこのプロジェクトの生贄になつてほしいのよ

！

ぶつちやけ、途中でエタらせてもいいからさあ」

おかしい。

女神の誘惑のはずだが、今の俺には悪魔の脅迫に聞こえる。

エタつていいから好き勝手……なるほど。エタるのは制止力という訳だ。

どっちにせよ、断れる状況に無かった。

「で、転生特典は。

どうせ制限があるんだろう？」

「あらよく分かつているわね。

歴史の改竄は、うまくやらないと制止力が働いて、つまり私が上に叱られてという訳。

今回のプロジェクト、『多重世界におけるキャラクターの優劣の判定』。

そこさえ気をつけてくれれば、力でも女でも金でもチートし放題」

おい。

力に溺れると言つてないか？この女神？

「あらっ？」

英雄力と色を好むってね。

それぐらい、今回のシステムが受けて他の神様（作者）が採用してくれたら構いはしないわよ。

とりあえず、転生特典はこんなのでどうかしら？」

すつと光の柱が二つ出てきて、一神と一隻が姿を表した。

なるほど。

俺がやっていたゲームという訳だ。

「女神特典として、貴方が生前提督業をしていた艦娘とマスターをしていたサーヴァントをつけてあげるわ。

その方がやりがいがあるだろうし、まあ、ボーナスみたいなものよ」

それはちよつと心惹かれるな。

頑張つてケツコンカッコカリしたあの艦娘や最初のサーヴァントに会えるのは悪くない。

「特型駆逐艦、5番艦の叢雲よ。

あんたが司令官ね。

ま、せいぜい頑張りなさい！」



改二スタイルの彼女の左手の薬指に指輪を確認。

デレ雲だった。

「うふふ……女神を現界させようだななんて……」

面白くて憐れな人ね。貴方……お名前は？

なんて嘘。

二日に一度ぐらいランチを共にして、週に一度ぐらい、観光にでかける程度のお友達

でしょ♪

よろしくね」

手に『女神のきらめき』を確認。

デレンノというかジュリエットだった。

「二人共よろしく。

で、女神」

「な、何よ……」

俺の真顔に女神がたじろぐ。

それを気にせず淡々二人を指さした。

「この二人、女神転生に連れられていって大丈夫なのか？

二人共LV100越えているんだが？」

なお、ステンノは聖杯ぶちこんでLV100。

嫁雲に至っては、LV175である。

神様相手でも負ける気がしない。

「だからここ最近流行しているアンコ神を使った、同期率というのを利用するわけ。

それぞれの世界から、女神転生世界に連れてきた事になるから、それに合うかどうかで強くなったり弱くなったりするわけ。

もちろん、長く居たり霊地を確保して体を馴染ませたら、レベルがあがる寸法よ」

「なんとなく理解ができてきた。

多元世界という事は、ホーム世界が女神転生として、そこからFGO世界に行ったら、

叢雲は更に修正を受けるけど、ステンノはLV100として使える訳だ」

こっちの言葉に頷きながら、女神は俺の目を見ずに説明を続ける。

つまり、ボードの裏側を読むために顔をボードで隠しやがった。

「では、最初の女神転生世界における同期率を決めましょう。

何がでるかな？何がでるかな？

それはサイコロ任せよ♪」

叢雲

同期率71%

LV175の71% || LV124

ステノ 同期率74%      Lv100の74% || Lv74

主人公 司令部Lv2%      Lv120の2% || Lv2

マスターLv76%      Lv150の76% || Lv114

出た数字が一つを除いてそこそこ高い。

でこれについて女神が解説してくれる。

「艦娘とサーヴァントについては省いていいわね。

貴方は、艦娘保持者としては新米、もしくは持っている事が奇跡って思われているわ。

たしかに、そのレベルだとね」

そりやそうだ。

女神転生においてレベル100越えは神をぶん殴れるレベルである。

それでもハメ殺されかねないのがあの世界の怖い所なのだが。

「マスター。

つまり魔術師としてはかなり名が通っているわね。

ちなみに転生は赤ちゃんスタートがいい？」

「止めておこう。

適当に経歴をでつちあげて、そこからスタートさせてくれ」

「そう。」

赤ちやんからだど、同期率UPボーナスがあるけど今回はパスと。

まずはホーム世界を設定し、そこを中心に動くといいわ。

原作（イベント）に絡んだりして、体をその世界に合わせて、最後はその世界の危機を回避したらクリアって訳。

ただ、深く他の世界に絡むと、他の世界の危機が逆流するから気をつけてね。

つまり、女神転生世界だからこそ、深海棲艦が出てきたり、人類焼却されたりというのが女神転生世界でも発生するという訳」

まて女神。

という事は、この時点で三世界の危機をなんとかしろと言っていないか？

「……………てへっ♪」

なるほど。

この女神が駄女神であると確信した瞬間である。

「これで転生の条件は終わりだけど最後、名前は何にする？」

そりゃ決まっている。

こんな荒唐無稽で、すちやらか最低オレツエーのエター予定物語にふさわしい名前は一つしか無い。

「入即出やる夫」

これは、駄女神様から任務を与えられたやる夫が、いろんな世界を渡りながら、世界の危機を乗り越える最低蹂躪物語である。

その運命と未来は、サイコロだけが知っている。

おまけ

「ちなみになんでマシユじやなかったんだ？」

「デミ・サーヴァントだから、座からコピーするの面倒くさかったのよ」

納得。

## 入即出やる夫の現状

目が覚めた。

とりあえずお決まりの台詞を言ってみようと思う。

「……知らない天井だ」

「何、バカなこと言っているのよ」

横から声がすると叢雲が。

「あら、こういうのも悪くはないわ」

反対側に振り向けばステンノが。

たしかにハーレムである。

だが、そのハーレム云々を前に、俺は二人に声をかけた。

「おはよう」

「おはよう。やる夫」

「おはよう。マスター」

挨拶は大事である。

やる夫の社会的地位	76	100で高い
やる夫の経済力	97	100でお金持ち
やる夫の魔術	14	1で東洋100で西洋魔術

「あの駄女神、ここまでチート特典揃えてくれたのか……」

「あら？」

それは苦難に対する先払いじゃないの？」

「言わないでくれ。」

実はそうじゃないかと、疑っているんだから」

「で、どうするの?」

入即出『司令官』」

日本の霊的護国組織ヤタガラス。

その構成員で、海上自衛隊所属の二佐相当官。

これ、海の悪魔は俺が出張するという事だな。きつと。

「叢雲。」

お前、メンタルモデルできるか？」

「もちろん♪」

「とうか、ここ、私の船の中」

「そこでやつと窓を見る。」

そこには横須賀の町並みが広がり、海上自衛隊の艦艇の中にちんまりと武装をつけずにこの船が棧橋に繋がれていた。

「うふふ。」

「叢雲さん。」

「貴方付喪神になっているわよ」

「えっ!？」

「なにそれ？」

「公的身分が確保された結果、経歴まで作られていた。」

「陰陽師の家系の入即出家は太平洋戦争にて没落。」

「一人で生き抜いた果てに修行した結果、叢雲とステンノを得て今の地位を得ると。」

「既にこの時点で成功者である。」

「数年後に東京に核ミサイルが飛んでこなければだが。」

「うわっ!？」

「やる夫ちよつと見なさいよ!!」

「金庫にこんなに金塊が!!!」



成功した結果、莫大な富が艦長室の金庫に眠っていた。

というか、魔術素材やアイテムもたつぷりある。

「なんとなく分かってきたわ。

因果が逆なのよ。

私達という存在の後に、結果が逆算される。

これが駄女神の言っていた、アンコ神の効果ね」

とりあえず理解した。

そして、その上で行動しなければならぬ。

「とりあえず飯を食べるとしよう。

それから情報収集だ」

制服は三人分用意されていた。

叢雲は三佐相当官、ステンノは一尉相当官である。

一応海上自衛隊の作法は頭に入ってるらしいが、皆の奇異の視線が集まってしまう。

「なるほどな。

ここに配属されたのはつい最近で、それを横須賀司令部は知らないか、あまり良く思っていないと」

三人共朝ごはんはカレーである。

食べながら今度は己についたデメリットを確認する。

「国家組織についているのは強みであると同時に、弱みでもあるな。」

お上の命令には逆らえん」

俺への命令系統は3つ。

純粋にヤタガラスからの命令なら問題はない。

もう一つの護国組織であるクズノハからの命令は筋違いではあるが、大体従ったほうが良いことがあるというか、そういう場合、ろくでもない悪魔と対峙している可能性が高い。

問題はゲームで演出できないリアルな所だった。

『海上自衛隊からの命令については、協力できる限りにおいて協力すべし』  
これである。

断つてもいいが、断るならばそれ相応の理由を用意しなければならない。

組織の上の人間は、すべからず政治というものに巻き込まれるのだ。

もつと厄介なのが、来る途中で見えた星条旗である。

当たり前だが、この世界の日本は日米安保条約を結んでいる訳で。

米軍の要請というのが実にめんどくさいのだ。

米軍が直接言うならまだしも、海自経由でお願いされたら断れない。

ありがたいというか、ありがたくないというか、俺は数年後に自衛隊のクォーターと米国大使がこの東京に核ミサイルをぶつ放すのを知っている。

とりあえずその阻止をしなければならぬのだが、下手したら加担命令すら来かねない。

「とりあえず、情報だ。」

地図と新聞を買うか」

で、船に戻って地図を見て頭を抱える俺。

駄女神への呪詛も忘れない。

「学園都市に麻帆良学園に冬木市に海鳴市もある。

介入し放題だな……」

そりやたしかに有名所ではあるが、闇鍋のようにぶっこむのはどうだろうか？

罵倒しながら俺は新聞の日付を見る。

1993年、8月23日だった。

つまり、ほとんどが原作開始前である。

「あいつ？」

関西呪術協会に名簿が乗っているわよ」

調べれば調べるほど、世界が、設定が生えてゆく。

その怖さを俺は味わいつつ今後の方針を考えることにした。

# 鴨が葱を背負ってやってくる

叢雲が船であるという事は、どこかに所属しないとイケない訳で、当然横須賀地方隊に所属となった。

で、問題は装備である。

「叢雲。」

お前の装備どんなのがついてる？」

「二応元の装備は全部ついているみたい。

後は、艦娘の装備もついているわね。

無理のない範囲で」

これは、対空カッターインと先制爆雷の装備の事で、今の叢雲の装備はこんな感じである。

5 inch 単装砲 Mk. 30 2基2門 ☆10

13号対空電探改 ☆10

25mm三連装機銃 集中配備 ☆10

四式水中聴音機 ☆10

### 3式爆雷投射機集中配備

「全部コントロールできるのか？」

「無理ね。」

多分4つまでしかコントロールできないみたい。

単独でコントロールするにはこれが限界なんでしょうね」

イベントの対空対潜装備の名残なのだろう。

色々がんばった装備が残っているのは素直にありがたい。

魚雷を載せない事でスペースの確保に努力する艦娘とメンタルモデルのすり合わせに感動すら覚えるが、単独で艦を運用できるということは単独で全てを管理しなければならぬ事を意味する。

それは叢雲がどれだけ凄かろうとどうしても出来てしまう隙だ。

とはいえ、メンタルモデル化して人が入れるスペースができた事の意味を考えると、こう考えてもいい。

叢雲の手が足りない所を人がやっちゃってもいいんだと。

そんな事を考えていたら、ある事に気づく。

「叢雲。」

お前の補給ってどうするんだ？」

「この身体なら普通の食事で大丈夫だけど……」

そこで言葉を詰まらせる叢雲。

船の運営、ましてや軍艦の運営にはそれ相応のお金がかかる。

金庫の豊富な資産の理由をやつと理解した。

「あらあらたいへんね。」

私なんて、マスターからの魔力供給だけで十分なのに」

fat e 世界の魔力供給には、性行為もある。

気づいた叢雲が顔を真っ赤にして、いつもの決め台詞を言う。

「酸素魚雷をつて、積んでないじゃない!!」

「失礼します。」

入即出二佐相当官。

警備隊司令が挨拶に伺いたいとの事」

無線から聞こえる声に俺はうかつを悟つて舌打ちをする。

丁寧なお願いは実質的な命令に等しいからだ。

しかも、向こうの方が上である。

(早く挨拶に来やがれ!)

と、暗に言っている訳だ。

俺は叢雲を通じて返事をした。

「今すぐにこちらから挨拶に向かうと伝えてくれ」

「警備隊司令の咲川海将補です。」

君たちの事は市ヶ谷から聞いています。

邪魔はするつもりはないから、邪魔をしないでくれ。

以上だ」

案の定、サイコロの目が悪かった所がこう言う風に作用している。

まあ、追い出されなかつただけよしとしよう。

「すいませんね。」

市ヶ谷がらみで、うちの司令ピリピリしちやって」

差し出した手を令呪を隠して手袋をした手で握って俺は挨拶をする。

司令が悪い警官役なら、こっちは良い警官役なのだろう。

「幕僚の美野原一佐です。」

何かあつたら私に言ってください」

「入即出二佐相当官です。」

「こちらの上からできるだけ協力するように仰せつかっております」



「具体的にはどのような事が出来るので？」

「ゴジラのやられ役ですか」

俺の冗談に美野原一佐が笑う。

受けてくれたみたいだが、その後の言葉は穏便ではなかった。

「何かが協力できるかについては、後日また話合いしましょう。」

あなた方を見にお客さんも大勢来ているみたいですよ」

「使い魔の存在があるわ。」

注目されているわね」

ステンノが耳元で囁くと、叢雲も小声で呟く。

「私をガン見している米軍艦艇がいるんですけど」

叢雲の言葉に俺は領きながら、ステンノに尋ねる。

「何処が来ている？」

「時計塔に関東魔法協会と関西呪術協会。」

米軍と一緒に居るのはメシア教かしら？」

十字教と聖堂教会も人を出しているみたいね」

そんなやりとりを見ながら、美野原一佐が尋ねる。

「ちなみに、そちらの上とは何処を指せばいいのでしょうか？」

「ヤタガラスは宮内庁の秘密機関という位置づけですが、公的には宗教法人の一組織ですから。」

霊的なあれやこれやで、色々闇が深いのは自覚していますよ」

太平洋戦争の敗戦によって、日本の霊的守護は決定的なまでに弱められた。

学園都市なり麻帆良学園なんかができているのはその影響と言ってもいい。

そんな状況で、霊的組織的には弱小部類に入るヤタガラスに期待の大型新人発見である。

他所がスカウトという名前の引き抜きを狙わない訳がない。

地位の高さはこう言うデメリットがある訳だ。

俺はため息をついて美野原一佐にお願いすることにした。

「美野原一佐。」

これのお披露目を何処かでするので、適当に出港できる理由を作ってくださいませんか？」

## PRタイムという名前の演習航海

この叢雲、元は吹雪型駆逐艦なのだが、大体2000トンほどある。

で、この時期の海上自衛隊にはあぶくま型護衛艦があつて、こいつと大体大きさが一緒らしい。

「じゃあ、出港しよう」

「……出撃するわ!」

早朝。

まだ日も出きっていない。

俺の声に叢雲が返事をし、彼女が動かすことで乗り込んでいた自衛隊員の皆様がおつと声を上げる。

「こやこや。」

凄いいものですな」

副長代理として乗り込んできた、新島三佐が感嘆の声を出す。

今回はデモンストレーション航行という事で、海上自衛隊の方をお誘いしたのだが、向こうからしたらこの船を叢雲が一人で動かすことがまだ信じられないらしく、かなり

の人間を用意しての乗船である。

その数副長以下砲雷科、船務科、航海科、機関科、補給科、衛生科の120名。つまり、あぶくま型駆逐艦の運用人員をなんとか確保してきたという訳だ。

彼らの殆どは何もしなくていいことにびっくりしているが。

「間もなく浦賀水道に入ります」

そんな中、お仕事をしているのが船務科と航海科。

世界屈指の船舶過密地帯である浦賀水道だからこそ決まりごととは山ほどあるわけで、これを無視するわけにはいかなかったのである。

このあたりの人員を借りるかなと思っていたが、まさか船一隻まるごと運用する人間を用意してくるとは思わなかった。

叢雲曰く。

「最終的には、全部私一人でやってみせるわよ」

らしいが、その叢雲は艦をコントロールしつつ各科隊員の動きをしつかり覚えようと奮闘中である。

「艦長。」

『よっ』と言ってくたさる」

「よっ」

副長の耳打ちに俺は慌てて艦長らしく振る舞う。

後で聞いたのだが、ちょうどこの時期自衛艦同士の衝突事故があつて、その修理中なので人が陸に余つていたらしい。

で、腕が錆びないようにという事で俺の誘いに大挙して乗り込んだと。

彼らは学園都市製造の全自動無人艦の実験という説明をしているらしい。

色々あらはあるが、そのあたりはうまくごまかしてくれるだろう。誰かが。

「おうい。

船長。

この機関はえらく調子がいいじゃないか！

こんなのは儂が乗つた船ではとんと見なかつたぞ!!」

無線越しに機関長に任命された爺様が闊達な笑い声をあげる。

機関だけは旧式なので、海軍に在籍していた元自衛官を引つ張り出してきたらしい。

それに若い機関科員を足して万一に備えているとか。

「失礼しちゃうわ。

私の機関がじゃじゃ馬みたいじゃないの！」

叢雲の言い方に艦橋内で失笑が起こるが、副長とちらと目線を合わせた時に、互いの思惑が交差する。

多分、俺に資格無しと判断されたら、俺からこの叢雲を乗っ取るつもりだったんだろ  
うなあと。

これもある意味デメリットと言えよう。

「艦長。

今回の航海を確認します。

浦賀水道沖を出て、房総半島沖の訓練海域へ移動。

そこで装備武装の訓練を行い、横須賀へ帰還。

よろしいですね？」

「ああ。

気楽に動かせると思っていたが、先は大変そうだ」

元が旧海軍の駆逐艦なので、今の時代と合わない所も多い。

その為、出港前にできるだけ準備という名の小改造が行われた。

艦内伝達の通信機器等は海自が保管していたお古を急遽持つてきて備え付け、医療器  
具とかもやはり最新式の医薬品に替えられた。

調理器具も新調し、何よりも大型冷蔵庫を備え付けそこに大量の食料が運び込まれ  
た。

もちろん、おやつのアイスクリームつきである。

また、この時代ハンモックが当たり前だったのにとりあえず入れられるだけ兵員室にベッドをつけるあたり、自衛隊の隊員への福利厚生の高さを伺わせる。

なお、叢雲の乗員は219人。

今回乗り込んだ人員が120人である事を考えると、半分近くまで人が減らせているぐらい技術進歩が進んでいると言つていいだろう。

そんな中で何がありがたかつたかというと、神棚である。

これは事情を知っているらしい美野原一佐が持たせてくれたものだ。

おかげで、叢雲とステンの霊格が上がったとか。

何しろ、ステンノは種族『女神』であり、叢雲は種族『付喪神』である。

人の崇められる霊地をもちつたようなものなのだろう。

このあたりの費用は後々の借りを作りたくないのだからが払うと言つたのだが、副長に押し切られてしまった。

「もらえるものはもらつておいて損はないですよ。

その分こつちもお願ひしますから」

「それが怖いんだよ」

航海中に時間を見つけて、叢雲の士官室で各科の長を集めての親睦会の席のこと。

副長以下幹部と共に、俺と叢雲とステンノが作ってもらった食事を頂く。

ここまでほぼ自動で航海できているだけでなく、その叢雲がここに居て食事をしてい  
るのに、航海に問題が無いという時点で、ここに居る幹部自衛官たちも『この船やべえ』  
という認識は持ってくれたようだ。

「通信設備やレーダーがついていなくて最初はあせりましたよ」

船務長が話題を切り出して話が広がってゆく。

何しろ元が戦時の船だから、このあたりの技術進歩にはどうしてもついていけない。

民間船舶用レーダーを急遽用意したというが、製造元を覗いてみたら学園都市製だっ  
た。

「なつとらんな！」

儂が戦争に出ている頃はそんな船で戦ったもんだ」

機関長は己の青春が蘇ったようでも達としゃべる。

声をかけた時は盆栽いじりしかしていなかったというのだから驚きである。

「装備は更新していききたいですね。」

C I W S やハーブーンやアスロクも欲しい所ですよ」

砲雷長が素直に言うが、俺は苦笑してその提案を断る。

「個人運営の実験艦扱いだからな。」



「純粹な戦力化は勘弁してくれ」

「失礼ですが、市ヶ谷の方では真剣にこの船を欲しがっているみたいですよ」  
ぴくりと幹部自衛官たちに張り詰めた空気が流れる。

話を振ったのは副長の新島三佐だった。

あぶくま型の建造費用は250億円。

近代装備とかの改造費用がかかるだろうが、100億もかからないと見ている。

それでピカピカの無人運用可能なあぶくま型の護衛艦が手に入ると考えれば、その悪魔の誘惑をささやく人間も出てくるだろう。

「あら？」

私はやる夫から離れるつもりはないわよ」

叢雲が俺に抱きついて拒否する。

それを見せつけて、俺は彼らに言つてのける。

「これがこの船の難儀な所で、対象者、つまり艦長に依存するんだよ。

俺から奪つても、この船はその時点で自沈するだろうな。

お世話になる以上、そちらのお願いも無碍にはしないよ。

とりあえずは腹を割つて話そうじゃないか」

まだ互いに疑心暗鬼の中である。

話をして妥協点を見つけていけばいいという所で、叢雲がピクリと耳をそばだてる。

「艦長。」

近くに潜水艦が居るわ。

二隻」

その声にざわつく幹部自衛官たちをよそに、俺はゆつくりと食事をとっておちつく。

この時点で潜水艦で探りにこれる勢力は二カ国しか無い。

海上自衛隊と米海軍だ。

「ステンノ。」

「こそこそついてくる人たちにいたずらでできるかな？」

「やる夫を困らせるのも楽しいけど、そのやる夫を侮っている人たちが困るのはもっと楽しいわね。」

いいわ。

やってあげる♪」

この場の幹部自衛官たちは何をしたか分からなかったが、後日、そこから叢雲が完全に姿を消した事を追跡していた潜水艦から知らされることに事になる。

## チユートリアル準備編

勧誘の積極度	100	ほど積極的
時計塔	39	
聖堂教会	50	
関東魔法協会	83	
関西呪術協会	80	
十字教	75	
メシア教	37	
自衛隊	88	
米軍	36	

演習航海の後、腹を割った話し合いの結果、叢雲に60人ほど自衛隊員が常駐する事になった。

それと共に、生活が自衛隊風になってゆく。具体的に言うと、掃除の徹底。

自衛隊員がすれば俺達もする日本人的同調圧力に負けたとも言いが、ステンノもしたのにはびっくりした。

その理由を聞いてみたら、

「だってみんな掃除をしてくれなくてくれないんだもの。

だったら、はやく済ませたほうがいいでしょう?」

との事。

装備についても本格的な改造について話が出る。

対潜性能とステルス性能を見せた事で、攻撃力の強化の提案を受け入れることになった。

魚雷をおろしたスペースに74式アスロックSUM8連装発射機とハーブーンSSM4連装発射筒をそれぞれ1基載せる事になっている。

なお、ファランクスを載せる予定だったが、叢雲につけた25mm三連装機銃集中配備の性能がいいので遠慮する事にした。

射撃指揮システムとレーダーは近代戦の肝だけに工事時間と予算が跳ね上がるのだ。

なお、アスロックもハーブーンも基本ミサイルに誘導がついている。

この件については海上自衛隊側がこだわった。

何しろ探知距離が現代装備のレーダーが約200キロに対して、13号対空電探改の

探知距離は約150キロであり、その精度も落ちるからだ。

単艦運用の叢雲でなんとかするからというコンセプトに対して、その穴を最新機械と人間で埋めるようという海上自衛隊側の対立は、最後の最後で俺の方が折れることになった。

冬木の聖杯戦争に介入するまでに工事が終わっているならそれでよし、ある意味一心同体の分霊である叢雲と叢雲船体はどちらかがやられても復活できるという事を叢雲から聞いたからに他ならない。

その結果、かなり大規模な改修工事に入る事が決定している。

なお、予算的にはかなりの金額がかかるらしいが、あぶくま型護衛艦を新造するよりははるかに安いらしい。

次に食いついてきたのは関東魔術協会。

考えてみれば自分たちの庭先で、関西の人間が怪しげな船を持つてうろついているのだから警戒するのもある意味納得と言えよう。

そして、力を見せたので今度は取り込みにかかるといふ訳だ。

今の所、ヤタガラスというお上に仕えている理由と、海上自衛隊の妨害で接触の試みは失敗しているみたいだが。

もう一方の関西呪術協会も俺の出身経歴が関西の有名陰陽師である事を知って、関西に帰ってきてほしいという訳でアプローチをかけてきている。

こちらでも海上自衛隊の妨害で接触まで行っていないみたいだが。

一方で不気味なのが、メシア教と米軍。

メガテン世界だと核を撃っているからつるんでいる可能性が高く、その障害として排除という考えもできなくはないが、監視にとどめてこちらにちよつかいを出してきていない。

聖堂教会と時計塔はおそらく俺の魔術師としてのデータを持っているだけに、やはり監視に留まっている。

下手すりや封印指定な訳だが、ここまで堂々と国の庇護下に入ってしまうとそれも難しいという所か。

意外だったのが十字教で、こっちに基盤がないことも合って魔術協会の次にアプローチを仕掛けていたり。

「手紙？」

「俺宛に？」

ヤタガラスからの指令という形でとりあえず最初の仕事が出来てきた。

ある意味女神転生らしい仕事の内容である。

異界の調査だ。

女神転生世界で重要な舞台の一つである異界。

神隠しや怪奇現象の発生源とされ、そこには悪魔なり妖怪なりが隠れ住むと言われる場所なのだが、そんなものをこの国は祀って人に害を与えないようにと封じてきた。

それが日本の霊的守護の決定的弱体化とバブルとその崩壊による区画整理等でありこちらの封印されし異界の封印が緩みだしているという訳だ。

もちろん、悪魔と取引して利益を得たい人もいるので、この手の悪事は基本無くなる訳がない。

そんな異界の一つの封印がちゃんとされているかチェックし、問題があったら解決すべしという命令である。

ありがたいことにアームターミナルもあつたので、叢雲にせよ、ステンノにせよ管理はできるのだがこれにはデメリットもある。

あの駄女神が言ったとおり、世界観の違う敵相手に補正が働くので、しくじつてこの世界に核が落ちた時、逃げ出した時にどこまで弱体化がかかるかわからないのだ。

今ならば、二人共高レベルなので弱体化がかかってもなんとかなる。

「じゃあ、これに何をいれるの？」

興味津々なステンノの前で令呪がついた手にアームターミナルをはめる。

多分学園都市製ならスマホ型ターミナルぐらいあるんだろうなあなんて思いながら、ソフトをインストールする。

「弱い悪魔は今の所いらなから、それ以外の便利ソフトをいれるさ。」

『エネミー・ソナー』に、『ハニー・ビー』に『ムーン・アダルト』を入れておくか」「やる夫の武器はどうするの?」

叢雲の質問に俺は防弾チョッキをつけてサバイバルナイフと拳銃を手取る。

こういう時に自衛隊というのは強い。

そういえば、自衛隊内部にも対悪魔部隊を作っている作品があったような。

いつかそのあたりとも絡む事があるかもしれない。

「で、何処の異界を調査するの」

ステンの質問に俺は指を真下に指した。

ある意味向こうもこちらもうつつけの依頼と言えよう。

「はい」。

横須賀基地の異界だよ」



## ある意味メガテンシナリオ進行中

L V 7 4 のステンの気配遮断 A + に気づくか？

7 4 以上で看破

時計塔

1 6

聖堂教会

2 7

関東魔法協会

6 1

関西呪術協会

4 2

十字教

5 7

メシア教

5 9

自衛隊

7 9

米軍

3

異界探索に気づいたのは自衛隊だけだった。

もつとも、こつちが艦内で準備とかしていたからバレバレだったという事なんだろうが。

なにか出来ることがあるかと言ってきてくれたが、かえって危ないので丁重にお断り

した。

そのかわりに車を貸してもらったが。

「で、具体的に何処に行くわけ？」

俺が運転していると助手席から叢雲が質問するので、返事をする。

バレたのできちんと手続きをして許可証をもらってきたので、基地内の移動も気にしなくていいのがあるがたい。

「この世界では悪魔つてのは情報生命体なんだよ。

Fateの英霊もそれに近い所があるけどな。

人の噂が悪魔を生み出す。

基地なんてのはその最たるもので、『戦争で死んだ兵士の怨念が』とか『軍隊の秘密実験を見た民間人が連れ去られた』なんて噂が長く蓄積して悪魔を生み出す訳だ。

それを払拭するには、基地には秘密が多すぎる」

そういう施設の異界化を防ぐためにこの国はどうしたか？

なんの事はない。

異界を生み出してそれを封じたのだ。

変な所に異界ができるぐらいなら、そういうものが出来た所に神社を立てて祀ると同時に封じる。

小さな神社とかの信仰でそれらの異界は封じれるのでお手軽でもある。

この国の人間の知恵と言えよう。

まあ、バブルの区画整理とかでそのあたりもかなり緩くなっているみたいだが。

「ついでだ。」

さてと、エネミーソナーを起動してと。

叢雲が前衛、俺が真ん中、ステンノが後衛だ」

「了解」

「わかったわ」

基地内の小さな神社で、手入れも行き届いている。

金比羅神社で祀神は、大物主と。

という事は異界の主は大物主様で確定だろう。

劣化分霊だろうが。日本神話に出てくる神様で異界の主である。

敬意を払おうと珍味のおつまみと酒徳神のおちよこ、それに酒を用意する。

「あら、美味しそうね」

「飲むなら帰ってからな。」

出雲で作られた100%純米酒だ。

口に合えばいいんだが」

神社の中に隠されるようにあつた異界の入り口。

それはこの異界が正常に管理されている事の証拠である。

「よく来たな、人間。」

それは儂への貢物か？

ははは。心得ているな」

大物主は最初からごきげんだが、かれの逸話には女性にまつわる逸話も多い。

つまり、ステンノの男性特攻の対象範囲。

種族は鬼神で、レベルは38ベースの32%劣化分霊で、12。

ある意味納得。

「まあお前らも飲め。」

儂はこうして海から来る神を出迎える役目も持っている。

お主らみたいな外から来た神を迎えるのは仕事の一つよ」

神様だからこそというかコミュニケーションというか、飲みニケーションが試され

る。

明日は胃薬と二日酔いの薬は確定だろう。

ありがたい事に大物主は終始好意的だった。

敬意を払ったのと、こちらのレベルを察したのだろう。

問題は帰りにあった。

異界と現世の出口。

奇襲を受けたのだ。ピクシーに。

……百太郎をインストールしておこうと決意した瞬間である。

「ダイアー！」

ピクシーの体力が回復した。

「……」

「……」

「……」

あ。

涙目になった。

かわいい。

「やる夫。」

この、小さな潰している？」

奇襲を受けてプライドを潰れたと思っっているステンの声は凄く低い。

ピクシーのレベルは2である事を明記しておく。

「助けてください！」

「何でもしますから!!」

「ん、今、何でもするって言ったよね?」

「はっ!」

仲間になりますし、妖精メイドにもなります。

だから命ばかりは!」

そっか。

あるのか。

幻想郷……

「じゃあいいや。」

仲間になってもらおう」

「ありがとうございます。」

妖精ピクシーです。

今後ともヨロシクおねがいします!」

そう言ってピクシーは逃げるようにCOMPの中に入っていった。

そこで気づく。

「今思ってたんだが、悪魔合体で強い悪魔作って、冬木に行けば大体勝てるんじゃない?」

「私だけじゃ足りない?」

「私じゃ駄目なの?」

ぼつりと言った一言に、ジト目で俺を見て言い放つ二人。  
仲間の信頼が痛い。

翌日。

艦に戻った俺達だが、近隣の異界を回って悪魔の素材を集めたのは言うまでもない。  
3日後。

集まった悪魔はこんな感じ。

妖精 ピクシー Lv2

地霊 ノッカー Lv4

魔獣 カブソ Lv6

天使 エンジェル Lv14

妖精 ジャックフロスト Lv15

鬼女 フグルマ Lv12

ノッカー・カブソ・エンジェルは近場の異界探索で仲間に。

横須賀は米軍基地があるせいか十字教信者も多いので、こうして現れるのだろう。

なお、その姿を最初に見た叢雲とステンノの第一声をここに記しておこう。

「うわ。

痴女なのに天使なの？」

「やる夫、ああいうの好みなの？」

二人の服装的に色々言いたいこともあるが、ここでヤブを突く勇氣は俺にはない。

フグルマこと文車妖妃は、悪魔関連の資料集めで神田古本街をうろついていたら勝手についてきた。

なんでも本が読みたくて立ち読みし続けた結果、魔力が枯渇したという実らしい悪魔である。

で、通りかかった俺に助けを求めた。

そのけしからん胸に騙された訳では決して無い。だぶんきつとメイビー。

「……最低」

「へえ……」

いかん。

叢雲とステンノの俺を見る視線が、まるで豚を見るかのような目になっているから、この話はここでおしまい。

ジャックフロストだが、叢雲の艦内冷蔵庫にいつの間にか居着いていた。

ある意味、叢雲の艦内も異界みたいなものなのだろう。



これらの悪魔をCOMPに入れて、悪魔合体をするのだが、悪魔合体のプログラムはこのCOMPに入っていない。

「じゃあ、何処でするの？」

叢雲の質問に俺は地図で確認したある場所を指さした。

メガテン世界、デビルサマナーの舞台であるその場所を。

「平崎市。

「このホテル業魔殿さ」

こういう時のヤタガラスの公的身分というのは便利なもので、平崎市まで電車で向かいホテル業魔殿にチェックイン。

その後、オーナーのヴィクトルに話を通して、悪魔合体を始める。

「天使エンジェルと妖精ジャックフロストを足して妖鳥コカクチヨウを作り、それに地霊ノツカーを足して、妖精ジャックランタンを作る。

「これでいいかね？」

「ああ。

「やってくれ」

悪魔合体の最中にヴィクトルが俺に声をかける。

俺の後ろの二人を見ながら。

「解せないね。」

それだけ強い悪魔を持ちながら、どうしてこんな弱い悪魔を強くするのかな？」

「浪漫つてもんだ」

その浪漫その1であるピクシーはなんかおどおどしている。

なお浪漫その2の文車妖妃は資料収集等の情報処理を任せる予定である。

戦闘で使えなくても便利な悪魔というのは居るのだ。

そんなピクシーは自身の身に何が起こるか、まだ分かっていないらしい。

「ここでは悪魔も買えるんだったな」

「ああ。」

金さえ払えばだが」

という訳で、小切手をぼんと差し出す。

結構な0が並んでいるのを見せつけてからピクシーを指さす。

「あれに、精霊合体をして最強にしてやってくれ」

「え? え?? え??」

うろたえるピクシーに、呆れる叢雲とステンノ。

ピクシーの肩を叩いて二人は交互に言った。

「諦めなさい。

私達も同じなのよ」

「マスターって、最初に来た娘は徹底的に優遇しちやうのよね」

なお、何でかメギドラオンを覚えたハイピクシーになったが、これはこれでよしとする。

## 世のメガテニスト達を尊敬するしかない仲魔集めと悪魔合体回

現在俺達は平崎市に滞在しているが、実はこの街は俺達の拠点である横須賀から近い。

というか横浜市の隣である。

で、そのこのホテル業魔殿に宿泊している訳だが、ここにマダム銀子が居るんだよなあ。つまり、クズノハの連絡拠点がこの街にあるという事だ。

メガテン世界もパラレル設定であり、ペルソナを外すとその分岐は『女神転生』ルートと『デビルサマナー』ルートに分かれる。

最終的に人類社会が崩壊する『女神転生』ルートよりは人類社会が存続した『デビルサマナー』ルートの方が良いわけで、そのあたりの差異点を俺はメモに書き記してゆく。

『女神転生』ルート

メシアVSガイアの戦争から人類社会崩壊。

『デビルサマナールート』

基本はフアントムソサエティーの陰謀をクズノハ等の悪魔召喚師が妨害する。  
人類社会は存続する。

問題なのは、この世界が闇鍋多重クロスをやっている事で、このあたりも両方登場しているのだ。

ありがたい事に偉い人の名前はちゃんと出てくるからこの国はありがたい。

米国外使トルーマンは元気に米軍基地に親善訪問し、市ヶ谷駐屯地に駐屯している第32普通科連隊の連隊長が後藤一等陸佐となっている。

で、通信行政を管轄する郵政省事務次官が西次官で情報環境モデル都市の天海市を建設中、この平崎市有力市議会議員の山城議員は現在都市再開発計画を強力に推進中と。

……駄目じゃね？この国……

この時点でお腹いっぱいなのだが、これに他の物語世界が重なるのだから闇鍋感が凄いことに。

『Fate／Zero』への介入をする前にホーム世界であるメガテン世界をなんとかする必要がある訳だ。

これは同時に、『Fate／Zero』への介入時にクスノハ等のサポートを受けたいという下心もある。

「さて、問題はどうかやってクズノハの信頼を得ることが出来るかだが……」  
詰まる所そこである。

ヤタガラスの所属とは言え、俺の話を鵜呑みにするほどクズノハもお人好しではない。

聞いてもらうには、最低限ギブ・アンド・テイクの関係ぐらいにまで持ってゆく必要がある。

「なら簡単じゃない。」

この地の事件を解決していけば、向こうから接触してくるでしょう♪」

実に分かりやすい解決手段を叢雲が提唱し、俺は苦笑する。

その苦笑に叢雲がちよつと機嫌を悪くする。

「なにか問題があるの?」

「いや。」

そつちじゃなくて、それをする為には準備が居るなど。

この世界、呪殺や石化が洒落でなく怖いんだ」

「何それ?」

叢雲の質問に俺はステンノの方を見て一言。

「ステンノの全対象宝具と思ってくれば分かるだろう?」

「あら？」

そんなに怖いのなら、私マスターに守ってもらおうかしら？」

ステンノの不機嫌そうな声に、俺と叢雲が笑う。

なお、『デビルサマナー』のストーリーはあまり後味の良い終わり方ではない。せつかく女神のお墨付きがあるのだ。

好き勝手に、ハッピーエンドを目指してみるとしよう。

「何か用か？」

宿泊先であるホテル業魔殿の地下で、オーナーであるヴィクトルの前に叢雲の船体から持ってきたあるものを見せる。

「こつ、これこそ私の求めしドリー・カドモン、神の定めし法を破りしもの……」

「これは差し上げます。」

その代りお願いがあります」

「出来る限り考慮しよう。」

何が望みだ？」

「大した事ではないですよ。」

「ここに拠点を作りたいので、今の部屋を半永久的に借りたい。」

そして、パソコンとDDSNETを繋げてください。  
それだけです」

本腰を入れて『デビルサマナー』シナリオを攻略する。

こつちを片付けた結果『女神転生』シナリオ突入というパターンもありえるが、クスノハとの信頼構築は他の世界シナリオでも有効だろう。

ぶつちやけると、葛葉ライドウの安心感はない。

「それならば問題は無い。

手配しよう」

「お願いします。

俺達は少し出かけてきます」

「何処に行くんだ?」

聞いてきたヴィクトルに俺はあっさりと言う。

「ちよつと悪魔退治に」

俺達のパーティーはとにかく支援・回復要員が居ない。

叢雲もステンノも俺も押し切れる戦力ではあると思うが、王道のバフの重ねかけができる仲魔を作る必要があった。

そんな仲間を確保するのが目的である。



ゲーム的には地下下水道がそんな悪魔の湧く場所なのだが、叢雲とステンノの嫌そうな顔で全てを察する。

で、仕方なく笠置山に向かう。

いい感じで異界化しているから、物語が始まるのもそろそろなのかもしれない。

「がんばりましょう♪サマナー♪」

宝石などを買いで忠誠MAXとなったハイピクシーがやる気を出しているが、ある意味ちよろい悪魔である。

こっちはそれがありがたいのだが。

「氷川神社には顔を出さなくていいの?」

「顔を出しておくか。」

土地神様に挨拶しておくのは大事だからな」

という訳で、笠置山と氷川神社を巡って、こんな悪魔を仲間に来た。

夜魔・ザントマン

妖鬼・ヤマワロ

龍王・ヤトノカミ

アームターミナルの悪魔搭載の最大数は6体で、既に3体埋まっている。

文車妖妃は情報収集で使うし、ハイピクシーは完成させたので合体させるつもりはな

い。

で、ベースは妖精ジャックランタンとなる。

妖精 ジャックランタン + 夜魔 ザンドマン || 天使 プリンシパリ

テイ

龍王・ヤトノカミ + 妖精 ジャックフロスト || 神樹 ナルキツソス

妖鬼・ヤマワロ + 地霊 ノツカー || 鬼女 リヤナンシー

天使プリンシパリテイは聖騎士風だからまだ連れて歩けない訳では無い。

エンジェルに比べてだが。

「もうちよつときちんとした回復系が欲しいんだよなあ。

そうなると女神を探さないといけない訳だが……」

悪魔辞典を使って買えるのでまだ助かっているが、ベースとなる悪魔にまだあまり出会っていないのかネットクになっている。

そこでふと思いつく。

「なあ。ヴィクトル。

ちよつと聞きたいんだが……」

「あたしは女神アメノウズメ。

今後ともヨロシクネ♪マスター♪」

「……」

「……」

叢雲とステンの視線がとても痛い。

まあ、この街の風俗街のストリップ劇場に突撃をかければこうなる訳で。

案の定ナンバーワンの踊り子だったので契約時に劇場に支払う違約金が結構凄いとに。

お金持ちで良かったとつくづく思い知る。

「ねえ。」

サマナー。契約してよ♪

はやくはやく♪」

契約していないのについてきたおまげが夜魔リリム。

そりゃ風俗街は彼女にとってうってつけの場所で、そんな所をサマナーがふらふらと歩いていけば、ほいほいついてくる訳で。

叢雲とステンの視線が本当に痛い。

「私達だけじゃ足りないのかしら」

「本当に……」

ツンツンしているがしている事はしている訳で、そのデレは夜にならないと発揮され

ない訳で。

今回は仕方ないとは言え、男が完全に悪い事例である。

女神 アメノウズメ + 神樹 ナルキツソス + 鬼女 リヤナンシー

|| 地母神 ズエラロンズ

地母神 ズエラロンズ + 天使 プリンシパリテイ

|| 大天使 イスラフィール

大天使 イスラフィール + 夜魔 リリム + 地母神 ズエラロンズ

|| 女神 ブリジッド

「私の名前は女神ブリジッド。」

今度ともよろしく。サマナー」

ブリジッドとも言い、ケルトの女神である。

単体全回復のディアラハンを覚えさせるのにこの苦勞である。

メガテン奥義のバフかけぶん殴りまでとても手が回らない。

「で、どうやって敵を引つ張り出すの?」

まだ機嫌が悪い叢雲の質問に、俺はあつさりと答えた。

行政が悪魔に乗っ取られ、警察も動かない、その為ヤクザがやりたい放題。

だったたら、一番叩きやすい所を叩くのみだ。

「天堂組を潰すのさ」

## チートオリ主特権の悪の組織の潰し方

市の上層部が敵で、警察も乗っ取られており、ヤクザが好き勝手している。

ではどうするか？

転生チートオリ主の最もチートな所以は、原作知識を持っているから、問題解決の最短ルートをとれる所にある。

だからこそ、市議会議員・警察署長・組長をぶつ潰すのが正解なのだが、それをするところがちが犯罪者である。

泥をかぶってもらう人間が必要だった。

「ホテル業魔殿に聖堂教会のシスターさんが宿泊したそうよ」

叢雲の言葉に俺はニヤリと笑う。

一旦横須賀に帰った俺達は、その途中で匿名の手紙を冬木市の聖堂教会に送りつけた。

『平崎市に吸血鬼が居て、人々を襲っている』という内容と証拠込みで。

ステンの気配遮断A+はまじで重宝する。

組事務所での吸血活動などの写真と、平崎市の連続殺人事件の記事を送りつけたので

彼らが動かない訳にはいかなかったのだ。

聖堂教会は特に吸血鬼を目の敵にしている組織だったりする。

「宿帳の名前は知恵留美子ですって。

その翌日、天童組組長宅が大火事に見舞われたって。

何ででしょうねえ？」

ステンノの言葉に俺は納得する。

そりゃ型月世界の闇鍋だからそつちからも来るよなあ。

『月姫』のシエル先輩である。

で、さっそく天童組を粛清したと。

「で、よそ者が好き勝手暴れるのを現地のクズノハが黙って見ている訳もなく、双方いがみ合って、その仲裁を第三者に求める。

国の機関であるヤタガラスに。

悪党よね。そのあたり」

叢雲の呆れ声に俺は手を広げて潔白をアピールする。

こうして善意の第三者として堂々と出て行けるのだ。

「お役所仕事ってのはこんなもんさ」

改めて平崎市に到着し、ホテル業魔殿にチェックインすると今度はちゃんと現地のクズノハに挨拶に行く。

くずのは探偵事務所の主である、葛葉キヨウジにだ。

まだ殺人事件は起こっていないので、彼は葛葉キヨウジ本人である。

「開いてるぜ。」

ヤタガラスのサマナーさんよ」

ドアの前から声がして、事務所の中に入ると、葛葉キヨウジとそのパートナーであるレイ・レイホウが俺達を睨んでいる。

好感度判定 100ほど好意的 —10の修正つき

葛葉キヨウジ 17—10—7

レイ・レイホウ 4—10—6

「あら？」

あまり好意的とも思えないわね」

「まあ、こつちに義理なく好き勝手してくれたらそうなると思わないかい？」

ステンの肉に、葛葉キヨウジも皮肉で返す。

レイ・レイホウに至っては敵意を隠そうとしない。

「ヤタガラスのサマナーである 入即出やる夫と申します。」



今回は、第三者として……」

葛葉キョウジが机を叩く。

ある意味実に彼らしい。

多分、この有能な探偵は、こちらの仕掛けを全部見抜いているのだろう。

「御託は言ひ。」

さつさと情報を寄越せ。

後はお前らよそ者でなく、俺達でやる」

「……こういうまどろっこしい手を使う意味を理解していただけると助かるのですがね。

お話ししますが、天童組組長宅の火事、うちは隠蔽工作なんてしていませんよ」

「何だど?」

葛葉キョウジの目に探偵の火が灯る。

たとえばデビルサマナーをやっている、探偵なんて職業を名乗っている以上、謎なんでものをぶら下げればいやでも食いつくのが探偵という人種なのだ。

「まさか、警察?」

レイ・レイホウの疑問系に俺はテーブルの上に書類を投げる。

政府機関経由で申請した、銀行口座の金の流れである。

「悪魔と言えども、税務署をどこまかすにはそれ相応の努力が必要なんですよ。

平崎市の都市再開発は、天童組が莫大な資金を投じて地上げをかけているのに、市がそれを摂取した価格は適正価格になっている。

おもしろいですよね。

天童組は帳簿上では大赤字なんですよ。

じゃあ、その赤字は誰が補填したんでしょうね？」

金の流れは明確だ。

そしてそれ以上に面白いのが人の流れである。

「平崎警察署ですが、神奈川県警の人事移動の特異点になっているんですよね。

警察署長は癒着などを避けるために、ある程度のたらい回しをする慣例があります。

神奈川県警は天童組と関係があるらしい中込敦署長を交代させたがっていたが、今までそれは成功していません。

県警関係者が漏らしていましたよ。

『藤原市長が県警本部に来て「彼は優秀な人材だ。離れられては困る」と陳情して回った』と。

その意味をもう少し考えていただけたらこちらも助かるのですけどね」

二人の顔から敵意が消える。

二人が想像している以上にこれはでかいヤマなのだ。

まあ、市長の一存でどうこうものではないが、西郵政省次官あたりがお願いしたら通りそうなのが日本組織である。

「警察署長と市長がグル？」

「いや、市長は傀儡だ。」

彼を操っているのは市議会議員の山城誠一。

そいつが今回の敵という訳だ」

レイ・レイホウの眩きに葛葉キョウジが核心を突く。

ここまで来たら、後は大丈夫だろう。

「我々はお役所仕事ですからね。」

市長自らお願いに来られるようだと動けないんですよ。

二人、およびクズノハのプライドを傷つけました事をここにお詫びさせていただきます」

日本人固有スキル『謝罪』である。

ぐっと90度近くまでかがめるのがポイント。

「わかった。」

腹は立つが、謝る人間を殴る趣味はねえ。

謝罪は受け入れよう」

葛葉キョウジが謝罪を受け入れたのを確認して、俺は最後に一冊の本を二人に差し出した。

この問題のきっかけとなった、『日本古代文明論』。

文車妖妃を図書館に行かせて、確保しておいたのだ。

貸出カードの名前は、葛葉キョウジにしている。

後は二人にまかせて十分だろうと判断して、俺達はくずのは探偵事務所を後にした。

好感度判定 100ほど好意的 — 100の修正つき

知恵留美子 86—100∥76

俺達がホテル業魔殿に帰るとちよほど客人が待っていた。

同じホテルに泊まっている、聖堂教会の知恵留美子と名乗った彼女は、かなり好意的にこちらと接してきた。

「聖堂教会より派遣された知恵留美子と申します。

ヤタガラスの監視役さんにはこちらまで来ていただきお手数をおかけしています」

冬木市で聖杯戦争なんてものが始まる前に降って湧いたような吸血鬼騒動である。

裏工作に勤しんでいた、言峰璃正からすれば万全を期す為にも放置する訳にも行か

ず、最強の切り札を欧州から持ってきたという所だろうか。

そんな状況もあって、彼女はとても下手に出ていた。

「ヤタガラスの入即出やる夫と申します。

隠蔽工作までやってくださって、こちらとしても助かりましたよ」

「え？」

天童組の隠蔽工作はそちらがやったんじゃないんですか？」

「え？」

沈黙がしばらく続くが、からくりを知っている俺からすれば、笑ってはいけない沈黙である。

そして俺は情報を小出しに出してゆく。

「警察の発表でしたから聖堂教会が手を回したものだとしてつきり」

「いえ。こちらはまったくその手のコネが無かったので、現地の退魔組織にお願いしたとばかり」

「じゃあ、市の方から無事に片付いたという報告が来ていますが、これは？」

葛葉キョウジと知恵留美子が合同で敵と当たる訳がないと踏んだ上での情報誘導。

「この手のポイントは嘘は言わないことと、重要な事は言わないことだ。

「ほら。」

ヤタガラス名義で市に確認をとったら、『火事なので問題なし』と」

「では、現地の退魔組織の方がやったのでは？」

「さつき会ってきましたが、『俺達をのけ者にしやがって』とカンカンでしたよ。

ひたすら頭を下げていたんですから間違いがありません」

そして俺達は黙り込む。

これらのやり取りで、第三者の隠蔽工作が行われ、しかも警察や市内部に天童組の内部者が居るという情報が知恵留美子の中で組み立てられる訳だ。

で、ここでわざと引く。

「それでも、吸血鬼は退治されました。

現地の退魔組織も捜査をすと言っていますし、聖堂教会の方にこれ以上ご迷惑を……」

「いえ。」

私の仕事はまだ終わっていないみたいですね」

「わかりました。

我々は一度調査のため戻ります。

何かありましたらこちらに連絡ください」

と、名刺を渡して、その夜の最終電車で横須賀に戻ることにした。

「悪党」

「ひどい人」

叢雲とステンノ二人の感想に俺は沈黙で答えた。

その後の展開

1 葛葉キヨウジレイ・レイホウ

2 知恵留美子単独

3 合同

シド・デイビス 1

警察署長 3

市議会議員 3

結果

シド・デイビス 5 8 VS 葛葉キヨウジ レイ・レイホウ 3 6 + 2 2

警察署長 8 7 VS 葛葉キヨウジ レイ・レイホウ 知恵留美子 1 + 6 4 + 7

4

市議会議員 3 8 VS 葛葉キヨウジ レイ・レイホウ 知恵留美子 6 5 + 5 5

+ 4 9

結果だけ先に書こう。

『日本古代文明論』を巡る戦いで、シド・デイベイスにあわや敗北の所まで追い詰められた葛葉キヨウジとレイ・レイホウは、知恵留美子との合同捜査に切り替える。

実際、警察署長が変化した悪魔との戦いでは、葛葉キヨウジが一撃で沈められあわやという所まで追い込まれたが、なんとか撃破。

慢心を戒めた三人は市議会議員が変化した悪魔との戦いも危なげなく撃破したのはいいが、

シド・デイベイスは未だ姿を表していなかった。

そして署長と有力市議会議員の失踪に平崎市政は大混乱となってしまう、他所からの介入を招いてしまう。

進出度 100でノリノリ

時計塔 4 6

聖堂教会 4 5

関東魔法協会 2 3

関西呪術協会 3 4

十字教 5 1



メシア教

46

ガイア教

79

ノリノリで進出してきたのはガイア教である。

この地に封じられた神の力はたしかに力を求めるガイア教には魅力的であり、他勢力の牽制を尻目に一気に乗り込んできて勢力を確保してしまっていた。

そんなガイア教の新たな拠点はお寺でありその名前は命蓮寺。

その住職は聖白蓮。

イラン事をするところでもないしつべ返しが来るといふ教訓に俺は頭を抱えるしか無かった。

# クロスオーバーは出汁を作るがごとく味をかけ合わせるべし

平崎市の吸血鬼騒動は、その捜査を妨害していた行政・警察・ヤクザが壊滅したのはいいが、事件そのものの主犯であるシド・デビスを取り逃がす結果となっていた。

このままでは意味がないので、さらなるカオスを覚悟で、別勢力を呼び込むことを決断する。

何でか伝が生えていた関西呪術協会である。

「いらっしやいませ。やる夫様。

お客様がお待ちになっておりますが？」

ホテル業魔殿に着くと、いつの間にか居たメイドが俺達に挨拶をする。

「ヴィクトル……造魔のメアリを作れたんだなあ……」

「少し落ち着いたら、部屋に呼んでくれ。」

「それで客人の名前は何て言うんだ？」

「たしか、天ヶ崎様とおっしゃっていましたが」

予想通りだ。

この時期、関西呪術協会の名前持ちで動ける人間は少ない。接触を試みたら、絶対出てくると思っていた。

陰陽師の姿で入ってきた天ヶ崎千草はスーツ姿の俺を見て、軽く失望する。

「陰陽師の名のある家に生まれておきながら、あんたも西洋にかぶれはりましたか」  
彼女の第一声がこれである。

軽い失望を隠そうともしない。

「西洋というより機械にかぶれたと言った方が正しいな。

儀式、呪文、生贄。

それらを間違えること無く常に安定して召喚できる。

そういう所まで、この世界の科学は来てしまった。

これからは、東洋も西洋も無く、科学と魔法が対決するだろうよ」

「なんや。

あんた学園都市の方にかぶれはったんか。

まあ、関東にかぶれるよりはましやわ」

互いの立ち位置を確認しながら、話を進めてゆく。

まだ少女の天ヶ崎千草は将来有望ではあるが、ここではメッセンジャーでしかない。

それでも立ち位置の違いを我慢して、交渉に臨もうとする心意気は気に入った。

「関西呪術協会では、あんさんに関西に戻ってきて欲しいと思うとります」

「知っているかどうかしらんが、俺が使役する付喪神の本体は横須賀港にいる駆逐艦だ。

俺はそいつと別れるつもりは無いぞ」

「日本海の舞鶴ならどうどつしやる？」

あそこなら自衛隊の基地もありますえ」

「ヤタガラスの籍を持ったままでもいいと？」

「もちろんどす。

政府とのつながりは多いほうがよろしおすから」

舞鶴港は冬木市の隣りにある。

Fate／Zeroに介入するなら、関西呪術協会に筋を通しておく必要があるだろう。

「近く、訓練航海の名目で舞鶴港に寄港する。

その時に更に条件を詰めてゆきたいがどうだろうか？」

「ええでつしやる」

一応これで彼女の話はおしまいである。

それで帰ってくればいいが、彼女には両親を殺された復讐がある。

力を持つ俺を取り込みたいなら、次の言葉は簡単に予想がつく。

「あんさんはこの街の事件に関わってはりますの？」

「現地勢力と外部勢力の調整をしている。」

「事件を妨害していた組織を壊滅に追い込んだが、その主犯が未だ見つかっていないんだ」

「でしたら、うちがお手伝いしましょうか？」

天ヶ崎千草

ベースレベル

34

メガテン世界修正 ベースの94% || 31

サイコロブースト +27%

|| 39

問題な

く魔法が使えるので+修正

あ。

この娘かなり強い。達人レベルだ。

こそつとアナライズしたが、きつと復讐のために全てを捧げたのだらうなあ。

口には出さないが、じつと値踏みするような目で見て、白々しくため息をつく。

「借りを作るのは嫌なんです、ここまで来た貴女に敬意を払いましょう」

なお、俺が連れてきた叢雲とステンノを見てえらく驚いたのは言うまでもない。

知恵留美子

ベースレベル

100

原作修正

メガテン世界修正 ベースの81% Ⅱ

81

サイコロブースト +78%

Ⅱ 144

問題

なく魔法が使えるので+修正

「どうも。」

「聖堂教会によって派遣された知恵留美子と申します」

「関西呪術協会の天ヶ崎千草や。」

よろしゅうに」

くずのは探偵事務所にて顔合わせと対策会議。

改めてシエル先輩を見るとこの人洒落でなく強いな。

ガチでは勝てないから、何か手を考えないといけない。

そして、そんな彼女をもってしても勝てなかったアルクエイド・ブリュンスタッドの化物ぶりを思い知らされる。

なお、葛葉キョウジのレベルは60。

レイ・レイホウのレベルは39である。

そりや、シエル先輩天童組に単機特攻できるわな。

叢雲とガチでステンの男性特攻道具が効かない相性最悪の敵になりかねん。

「この事務所の主の葛葉キョウジだ」

「レイ・レイホウよ」

「ヤタガラスの入即出やる夫と申します。

さて、挨拶も終わった所で、現状を確認したいと思います」

俺は皆の前で現状を報告する。

要するに、市政と警察が混乱して治安が悪化。

自治組織が出来て、それがガイア教と結びついた。

それを取りまとめたのが聖白蓮という人物であるという事を告げると、葛葉キョウジが「あいつか」と小さく呟く。

「ご存知で？」

「疑似アストラル界でそれに出会って、山城議員討伐に協力してもらったかわりに封印を解いた。

悪いやつじゃなさそうだったからな」

だろうなあ。

ある意味正しいが、先を考えると頭が痛くなる。

そんな俺の心なんて知らずに、レイ・レイホウが情報を出す。

『日本古代文明論』にかかれていた結界の大部分が破壊されていたけど、聖白蓮さんが命蓮寺で結界を張り直してくれたおかげで、ギリギリ持っている感じ。

主犯のシド・デイベスを倒すには、この命蓮寺を落とさないが無理ね」  
それだけでもわかったのは収穫である。

「ならば、手は一つだ。

命蓮寺で待ち伏せる」

という訳で、命蓮寺での待ち伏せを許可してもらうために、交渉役として出向いたのだが……

「何者です!？」

という少女その1。

「何ですか！

名を名乗りなさい！

何で黙って見ているんです!!」



と言っている少女その2。

二人ともその胸は豊満であった。

「やる夫」

「マスター」

いかん。

叢雲とステンの視線が豚を見るような目になっているので、そろそろ要件を口に出す。

「ヤタガラスの入即出やる夫と申します。

こここの住職に取り次いでもらいたいのだが……失礼だがお名前を聞いてよろしいか？」

どうみてもレオタードですな衣装にクナイを構えていた少女二人は、誇らしげに自己紹介をする。

「私は対魔忍の水城不知火！」

「私は対魔忍の井河アサギです!!」

後藤一等陸佐の紹介にて、ここにて修行をつけてもらっている身!!」

「……」

そっかー。

悪魔が出てるし、エロもありな女神転生だから『対魔忍アサギ』と繋がっていても何も問題はないな。

こいつら、ガイア教っぽいし。

「こら。」

たとえば妖怪を連れていても、良い人と悪い人を見分けるように言ったじゃないですか。

ようこそいらつしやました。

歓迎いたします」

水城不知火

ベースレベル

9

メガテン世界修正 ベースの71%

||

6

サイコロブースト +99%

||

11

問題

なく魔法が使えるので+修正

井河アサギ

ベースレベル

10

メガテン世界修正 ベースの50%

||

5

サイコロブースト +28%  
 く魔法が使えるので+修正

|| 6

問題な

聖白蓮

ベースレベル

100

原作修正

メガテン世界修正 ベースの68%

||

68

サイコロブースト +86%

||

126

問

題なく魔法が使えるので+修正

この尼さん一人で大丈夫じゃないかなと思ったが、それをすると対魔忍コンビが死ぬのかと思い直し、シド・デビス討伐の為に待ち伏せの許可をお願いし、快く了承された。

ハメ殺しが確定しているので、尺椽ぎの方に苦勞した話

命蓮寺で待ち伏せという事だが、念のためにチームを二つに分けることにした。

ヒロインの一人である秦野久美子が狙われる可能性があったからで、彼女がここの封印の神様の子孫である事を伝えて、監視と保護を頼んだのである。

そっちの方は葛葉キョウジとレイ・レイホウとシエル先輩にお願いしている。

「ごめんください。」

宅配便ですけど、住所はこちらでよろしいですか？」

「？」

宅配便なんて頼んで……」

「はい。」

こちらで大丈夫です。

本堂に運んでください」

罨と思つて露骨に警戒している井河アサギを押しつけて、俺が出て行ってサインをす  
る。

もちろん主の聖白蓮の許可はもらっている。

「入即出さん。」

「一体これは何なのですか？」

水城不知火の言葉に俺達は降ろされた十数箱の中身を本堂で開ける。出できたのは大量の書類の束。

平崎警察署警部の百地英雄に協力してもらって、平崎市と天童組の財務関連のデータのコピーをもらってきたのである。

そんな箱の一つを開けて俺はニヤリと笑う。

「……………ふうん。」

平崎警察署の財務記録までつけてくれたのか。

あの警部さん分かっているじゃないか」

対魔忍コンビ二人が頭に『？』を浮かべたままなのに対して、俺はCOMPから文車妖妃を召喚する。

「この書類を調べて金の流れを追うぞ」

一応組織人である天ヶ崎千草の方が理解して、文車妖妃の指示の元で書類の整理をはじめていた。

叢雲も俺の秘書艦を長く努めていたので、この手の書類仕事はちゃんとできるようになってる。

一方で対魔忍コンビは何をすればいいかというより、何をやっているのかすら分かっていなので、叢雲につけてその指導を任せることに。

りっぱなお局ぶりに俺も……

「何考えているのかしら？司・令・官」

「何も」

雉も鳴かずに撃たれまい。

だまつて書類を見続けること数時間。

お目当てのものが見つかりだす。

「おうおう。」

出てくるわ出てくるわ。

用途不明金の山だらけじゃないか。

東京地検に引き渡したら涎が垂れるんだろうな。こいつ」

天童組の不正経理までは掴んでいたが、平崎市から見ると更に新たな企業が追加される。

その名前はアルゴン社。

このゲームの続編である『ソウルハッカーズ』に出てきており、ファントムソサエ

ティー側と協力関係にある。

で、ここからが問題なんだが、この平崎市を通じて金の流れが複雑怪奇に入り乱れている。

天童組の赤字状態の解消だが、平崎市ではなく天海市の方で金を得ていたのだ。

からくりはこう。

政府の『次期情報都市政策』において情報環境モデル都市に指定され、再開発された天海市は全面的に作り変えられたが、その開発を一手に引き受けていたのがこの天堂組という訳だ。

ヤクザは地上げと同時に土建業も営むことが多いので、その土建で金を稼いでいた。

国の事業だけにその予算は桁違いであり、そこから適度に着服してただけで裏金の出来上がり。

それで終わらないのがこの世界である。

「天童組を隠れ蓑に政界工作を派手になさっているみたい。」

その金を天童組に提供しているのがダミー会社を通じてですけど、その本体が多国籍複合企業体のノマド」

「なんですって!?!」

文車妖妃の報告にその世界出身の対魔忍コンビが慌てて駆け寄る。

ある意味納得の配役であるが、それは政府がかなり悪魔というか魔族に買収されている事を示している。

そりや、アメリカも核を撃つわけだ。

納得はしないが。

「何でこいつらを処分しないんですか！」

「そうです！」

我ら対魔忍の力を以てすれば……」

対魔忍コンビの憤慨に俺は水を差す。

淡々と、だけどその言葉は重たく容赦ないように。

「けど、ノマドから遠慮なく資金をもらっているの、後藤一佐とその対魔忍だぞ。

ほら」

「え!？」

対魔忍コンビ二人が完全に固まる横で、戦災孤児である天ヶ崎千草。

淡々と出る言葉にある種の諦めがある。

「ようある事どすな。

この国は先の戦で負けてから、麻帆良と学園都市という二つの租界みたいなもんを作



られて手足を縛られとりますからな。

表は米国の、裏はこいつらの植民地という事どっしやる。

それを打破するために悪魔の力も借りる。

人というのは、哀れで滑稽な生き物どすなあ」

自分自身に全部跳ね返っているのをわかった上で天ヶ崎千草は自虐の笑みを浮かべる。

二次創作でよく出ていた、麻帆良学園と学園都市へのスパイの元はこの世界ではこっちの方が。

とはいえ、関西も間者は放っているのだろうか。

笑うのが、麻帆良学園を中心とした彼らが正義を行使しているおかげで、この国は完全に悪魔に乗っ取られずに済んでいるという所だろうか。

あと、このデータはシエル先輩に提供しておこう。

これで彼女は、この国に長期滞在確定である。

なぜならば、ノマドの創始者のエドウィン・ブラックは不死者にして真祖の吸血鬼なのだから。

アへ顔ビデオレターがやってくる事もあるかもしれないが、そこはエロゲヒロインだから大丈夫だろう。

「……うちの顔に何か？」

「いや。」

なんでもない」

そういえば、麻帆良学園にも吸血鬼の真祖が居たなあ。

多分知っているから黙っていよう。

二次創作系だと、彼女の抹殺目的の侵入者も結構居た覚えが。

そんな事を考えていたら、ある企業と人物に目が行く。

「豪和インダストリーに西田啓か……」

多分、後藤一佐の主導するクーデターの精神的支柱はここだろう。

となると、TAことタクティカルアーマーは現在開発中と。

あつた。

後藤一佐の幕僚に広川三佐の名前発見。

それと北海道の陸自の帯広駐屯地にえらくセキュリティレベルの高い実験中隊が

作られていやがる。

これが多分デモニカスーツの流れになると見た。

あ。

他にも、甲斐冽輝や柘植行人の名前を発見。

おまけに彼らのセキュリティのえらく高い計画、多分クーデターなんだろうがそのコードネームが『皇帝のいない八月』と来たもんだ。

この計画にファントムソサエティーは大規模な支援を行っていた。

彼らの本命は間違いなくマニトウの方で、クーデターもこの平崎市も陽動という所か。

メシアが、核ぶつぱの千年王国を目指しているから、ガイアも過激にやっているだろうと思っただが、出るわ出るわやばいぶつが。

何よりもやばいのが、そのヤバさが作品世界で分断されているので、そのヤバさを俯瞰的に説明できるのが俺しかいないという所が特に。

「サマナー！」

シド・デビスがやってきた!!

今、聖白蓮さんが相手をしている!!!

ハイピクシーが慌てて部屋に入ってきたので、俺はステンノにこう言う。

「ステンノ。」

魅惑の美声Aと女神のきまぐれAをたのむ」

「はい、♪」

霊体化したステンノが気配遮断A+で門のまえにこそつと近づいて、スキル発動。

「うふふふ。」

楽しいわ♪

とっつてもね♪」

『女神のきまぐれA』は、味方全体の攻撃力を20%アップ+『神性』特性の味方全体の攻撃力を20%アップするスキルである。

さて問題だ。

伝説の僧侶で聖の名持ちである彼女に神聖特性が無いのだろうか？

そんな訳がない。

つまり、

聖白蓮 Lv126 × 20%UP × 20%UP || 181

「じゃあ、これならどうかしら？」

おまけに、ステンの奇襲に近い魅惑の美声Aが発動。

シド・デビスはステンの姿を見て思わず動きを止める。

それを見逃す聖白蓮ではなかった。

「南無三！」

「サマナー。」

思ったのですが、支援要員が居ないとおっしやられていましたが、あのお方が居れば、事足りるのでは……」

さらっと『女神の気まぐれA』で特盛パフがちゃんと乗った『女神』ブリジツドのツツコミに俺はただ肩をすくめるだけで答えた。

## 後始末と次の準備

平崎市の後始末の話を語ろうと思う。

藤原市長は生き残った。

今ここで彼が失脚すると天海市の方まで飛び火するからと、ファントムソサエティーとガイア教の方で手打ちが結ばれたらしい。

ガイア教はここに拠点を構築し、ファントムソサエティーはここから撤退する。

警察の方は神奈川県警から署長を派遣するが、現場を知る百地警部を出世させて副署長扱いにしたとか。

平崎市という市政については混乱はあったが、ともかくいままで通りという訳にもいかず、その穴はガイア教徒が埋めることになった。

とはいえ、あれで穏健派なガイア教徒である聖白蓮は、自助努力による救済を掲げ、自治会や見回り活動を通じて悪魔討伐と市政再生を目指すらしい。

そんな活動を支えるのが、現地勢力の葛葉キョウジとレイ・レイホウ。

それに修行中の対魔忍コンビの水城不知火と井河アサギである。

せめて頭対魔忍が治って欲しい所だが、無理だろうなあ。

一方で、シエル先輩は後始末の見回りが終わったら、関東周辺の吸血鬼討伐を狙うらしい。

となると、標的はデータをやったエドウィン・ブラックか、麻帆良学園のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルなのだろう。

俺達なのだが、拠点としてホテル業魔殿の部屋は残すことにしている。

悪魔関係のオフィスとして、留守はメアリスさんがやってくれるらしい。

「ほお。

これがあんさんの船霊ですか」

横須賀に戻った俺達に天ヶ崎千草はついてきた。

籍がある関西呪術協会の連絡員としてであり、船の乗員としては従軍神官としてである。

きちんと祀る事で叢雲やステンノをこの世界になじませる事ができるだろう。

「ああ。

まだ改造中みたいだけだな」

艦内に入ると、自衛隊員が敬礼して出迎えてくれる。

自分が艦長という自覚が湧いてくるが、中に誰か自衛隊員以外の味方を入れたかったのも事実である。

「おかえりなさい。艦長。」

船の改造終了にはもう少し時間がかかりそうです。

そちらの方は？」

「はじめまして。」

艦内神官としてこちらに厄介になる天ヶ崎千草と申します。

どうぞよろしゅうに」

副長代理の新島三佐と天ヶ崎千草が挨拶。

そのまま、改造の進捗状況を聞く。

「艦橋下の無線室を取り払って、電子機器室を設置しました。」

設置するレーダーはあぶくま型と同じものを用意しています」

そのまま図面を見せる新島三佐。

少し図面が変更になっていた。

「で、お願いがあるのですが、後部の5 inch 砲を撤去できないでしょうか？」

取り払えると、そこにヘリの着艦スペースが作れます」

「だそうだ。」

「叢雲。頼む」

「いいわよ。」



やってあげる」

元々叢雲の装備はナノマテリアルで固定化されているから、叢雲の意味で装備の取り付け取り外しが可能ではある。

とはいえ、今の改造みたいに後からつける装備についてはナノマテリアル化ができないから一々ドックに入らないといけない不便さもあるのだが。

これで後部の5 inch砲が撤去され、そこにヘリ用の着艦スペースを設置。

25mm三連装機銃集中配備は空いている魚雷発射管スペースに設置される事となった。

「それと、一つ困った事が」

「何だ？」

「見てもらったほうが分かると思うのですが、冷蔵庫に……」

あつ……

三人揃って館内に設置した大型冷蔵庫のドアを開けると、

「ヒーホー♪」

また湧いたジャックフロストが叢雲のとおきのおきのアイスを食べていた。

激怒した叢雲に恐れをなしたジャックフロストが、仲魔にしてくれと頼み込んだのは言うまでもない。

艦内神官がいるという俺の言葉を新島三佐が納得してくれたおまけもついてきた事をついでに書いておこう。

「めずらしい客が来たものだ。

とりあえず歓迎はするよ。

ようこそ。

『伽藍の堂』へ」

挨拶と共に俺に握手をするのは『伽藍の堂』の主である蒼崎橙子。

俺と叢雲とステンノの三人での訪問だが、結界がはってあつたらしく入り口前で主自身が待ち構えていた。

型月世界屈指の人形師なのだが、その視線はじつと叢雲に注がれていた。

「お前が付喪神を手に入れたとは聞いていたが、これは人間そのものじゃないのか？」  
「さしてな。」

そもそも何を人間とするか、その定義からこれからは揺らぐかもしれない。

その前に、突然の訪問の詫びをかねてこんなものを持ってきた」

俺が合図をすると、叢雲が紙袋から人形を取り出す。

ヒーローくん人形である。

「これはこれで中々愛嬌があるな。

まあ、いいだろう。

詳しい話の中にはいつてからしよう」

しばらく他愛のない話をした後で、俺は本題に入る。

「人形を作つて欲しい」

そしてステンノが袋から取り出したのはドリー・カドモン。

明らかに蒼崎橙子の目の色が変わる。

「何だこれは？」

「で、これから生まれたのがこれだ」

俺はそう言つて、ホテル業魔殿のメイドのメアリを見せる。

それを見た彼女はメガネを外して俺に問い詰める。

「待て。貴様。

こんなのは『私の世界』には無いはずだぞ。

貴様第二魔法でも手に入れたか？」

おお。

そこに気づくのか。実に素晴らしい。

頼みに来たかいがあつたというものだ。

「手に入れたというより、押し付けられたというべきかな。

これからどんなに貴方が知らない人形技術が世に出てくるだろう。

それらの技術を知りうる限り教えることを約束しよう」

おれはそこから冒頭転生シーンを話すと、彼女は大笑した。

「あははははははははは……」

転生に、ハルマゲドンに、千年王国だと!?

だが、分かるぞ。

聞けば聞くほど、その話が『当たり前前の知識』として私の記憶に刻まれてゆくのが。

つまりあれだ。

お前は神か悪魔の遊びの駒という訳だ!

そんなのに私を巻き込むという訳だ!!」

「(づ)明答。

そして世界にはそれぞれ無数の人形技術がある。

楽しいだろう?」

俺がニヤリと笑えば、彼女もニヤリと笑う。

魔術師の取引は等価交換だ。

「で、どんな人形を作れと?」

俺は彼女の前でアームターミナルを操作する。

悪魔召喚。

それに気づいたからこそ目を見開いた。

「待って待って待て！」

今、何をした!?

貴様、その機械で根源から情報を引き出したというのか!?

「なるほど。」

『貴方の世界』ではそういう解釈になるわけだ」

「鬼女。」

文車妖妃と申します。

何か御用でしょうか? サマナー」

「お前を人形の中に入れる」

COMPが狭くて、戦闘外補助悪魔である彼女の枠がきついのだ。

それを告げると文車妖妃は目をランランと輝かせて言い切る。

「まあ。」

じゃあずっと一日中神殿で本が読み続けられるという訳ですね♪」

「自重しろ。馬鹿。」

さて、人形師。

人形制作の値段はいかほどか？

制作期限は半年後。

お聞かせ願いたい」

蒼崎橙子はしばし考え込み、やがて結論を出す。

「一億。

それと、このメイドを作った奴に会わせろ」

「了解だ。

小切手でいいならこの場で支払おう」

俺自身の金もあるが、天童組の壊滅時に彼らの隠し口座のいくつかをちよろまかして  
いたのである。

ヒーホーくん人形はその時発見したものだったりする。

ありがとう。

ハイピクシーのスキル『宝探し』よ。

「半年後というのはあれか？

冬木の聖杯戦争に乗り込むのか？」

小切手を確認した蒼崎橙子に俺はわざとらしく肩をすくめた。

さもいやいやという感じで。

「聖堂教会とは別の監視役さ。」

お役所仕事という奴でね」

俺達が帰ってきた時、天ヶ崎千草は階段に塩をまいていた。

「今戻ったが、何やってんだ？」

「えろろすんまへんな。」

胸糞悪い客が来まして。

関東魔術協会のシスター・シャークテイと名乗らはったんで追い返した所ですわ」

このあたり原作というか二次創作と言うか分からないが、とりあえずそのあたりの関係改善も進めておかないといけないなど、俺は心に誓った。

あの時代にやばいやつが居るのならばこの時代にもやばいやつは居る

「関東魔術協会のシスター・シャークティと申します」

「ヤタガラスの入即出やる夫と申します。

私の留守中に、ご訪問いただいたとのことでお手数をおかけしました」

平崎市のホテル業魔殿の俺の部屋にてシスター・シャークティとの会談が行われた。向こうはわざわざこちらに出向いたのだから、会わない訳にはいかないという判断である。

後ろに控えている天ヶ崎千草が敵意むき出しでシスター・シャークティの方を見ているが、ここは無視することにする。

「この街での悪魔騒動を解決なさったとかで、麻帆良でも話題になっていますよ」

「そりゃ、自分の手を汚さんと己の庭先の掃除をしてもろたら礼ぐらい言いますわなあ」  
うん。

分かってはいたが、本当に関東と関西の対立がひどい。

シスター・シャークティは顔をひきつらせながら会話を進めようとする。



「我々関東魔術協会は、貴方を受け入れる用意があります」

「そない言わへんと、そちらの面子が立ちませんわな。」

シスター・シャークティイほどのもんが、関東の悪魔騒ぎを解決しそこねたなんて無能を晒すようなもんどすからな」

天ヶ崎千草のこの物言いは、ある意味計算されたものである。

彼女の仕事の中には、関東からの引き抜き阻止というのが入っているからだ。

あえて棘のある言い草をする天ヶ崎千草を入れたのはこのためである。

「お気を悪くなさったら謝りますが、私も放浪していたおかげでこのあたりの確執を知らないのです。」

何故関東と関西は仲が悪いのでしょうか？

関東から見た意見というのをお聞かせ願いたい」

立ち位置の明確化という事で、この交渉は最初から関東に喧嘩を売る形になっている。

それで失礼しますだったらこつちも楽なのだが、交渉に来たシスター・シャークティイは顔を崩そうとせず口を開く。

「魔法世界の大分烈戦争についてどれぐらいご存知で？」

「子供でしたので従軍はしていませんでしたよ。」

ただそういう戦争があったという事を知っている程度で」

「この戦争に関西呪術協会のもんがようさん出征してな。

うちの両親を含め多くが帰ってこなかったんや……」

天ヶ崎千草の涙声にシスター・シャークティが顔をそらす。

天ヶ崎千草にはこういう相手を糾弾する場が必要だった。

それすら出来なかつた故に、彼女は最後まで復讐に走ることになる。

これで復讐を止めるとも思えないが、それでもこれは必要な場所だと俺は思っている。

「我々には守らなければならぬものがありました。」

そして、それを守るために、関西の人たちに助けを求めたんです」

「嘘や!」

関西に戦力を出させて、あんさんらは麻帆良の中でぬくぬくと結果を見とつたやないか!!」

なんとなく見えてきた。

凄く嫌なものが。

俺はそれを確認するために、口を開いた。

「シスター・シャークティ。」

一つお聞きしたい。

麻帆良学園都市。

その行政は何処に属しているのですか？」

その質問の意味を理解できない彼女は、彼女の常識と共にその答えを導き出す。

「はい。」

本国元老院に」

その一言を聞いた瞬間、俺は額に手をあてて天を仰いだ。

概ねの流れが見えたからだ。

そりゃ、二次創作で大活躍する訳だ。関西呪術協会は。

「わかりました。」

色々ありがとうございます。

私は関西呪術協会に属していますが、今は護国機関ヤタガラスの一員です。

何か手助けを求めたい時は、そちら経由で連絡をいただくと助かります」

「いえ。」

こちら何か失礼があったかもしれませんが、それについては関東魔術協会を代表して謝らせていただきます。

申し訳ございませんでした」

互いに頭を下げる日本の光景だが、どうみてもシスター・シャークティは日本人ではない。  
念の為。

彼女を丁重に見送ったあと、俺は泣き止んだ天ヶ崎千草に大きく大きくため息をついた。

「すんまへん。」

「こないな形で話を乱すつもりは無かったんどす」

「いや。」

そつちの事はいいよ。

君も吐き出す場は必要だっただろうからね。

少し考えたいから下がってくれないかな？」

「……はい」

天ヶ崎千草が部屋を去り、ステンノが姿をあらわす。

また入れ違いでコーヒーと茶菓子を持ってきた叢雲が部屋に入ってくる。

「何かわかったの？」

「やる夫」

「ああ。」

考えうる限り最悪の状況だ。

この国はもはや、植民地に成り果てている」

国家は基本的に国家内国家を認めない。

ましてや、国家内において別国家の主権を主張するなんてことはありえない。

今の日本は、独立独歩で好き勝手する学園都市に、メガロメセンブリア元老院の意向を尊重する麻帆良学園、日米安保条約下で軍を置いている米国と主権侵害どころではない状況に陥っていた。

考えられる関西呪術協会の参戦理由は、戦時徴兵か傭兵、もしくはその両方か。

そんな状況下で彼らの楔から逃れようとして悪魔の力に頼ったのだから本末転倒もはなはだしい。

そりや、後藤一佐がクーデターを起こすわけだ。

賛同する気は毛頭ないが。

「あらあら。

じゃあどうする？

逃げちゃう？」

「逃げた所で待っているのが核ミサイルだ。

踏ん張るしか無いのさ」

ステンの誘惑を俺は笑顔で振り切る。

本気で逃げようと思えば逃げられるのだろうが。

そんな事を考えようとした時にドアを叩く音がした。

「失礼します。」

お客様がお見えになっていますが」

ホテル業魔殿のメイドであるメアリスさんの声で一旦思考を打ち切る。

来客の名前を聞いて、最初に思ったのは『たしかにこの時代なら居るよな』だった。

「お通してくれ」

しばらくしてドアがノックされて、美少年が俺の前に現れる。

「平崎市の怪異についてお話を聞きたい思ってます。まいりましたよ」

「こちらも、高名な貴方に来てもらえるとは思いませんでしたよ」

握手をする。

令呪を隠す手袋と刻印を隠す革手袋が触れ合い、俺は彼の名前を告げた。

「皇家13代目当主。」

「皇昴流さん」

# タルカジャ！タルカジャ！！

皇昴流との会話は差し障りない挨拶に終始し、とりあえず彼が出たという情報だけで終わった。

どちらにせよ、さらにやべーやつが出て来る前に、こちらの戦力強化を急がせる必要があった。

で、仲魔をどうやって強化するかを考える。

「という訳で、それを話し合いたい所なんだが」

「いや、真面目にお二方居ればいいじゃない。私」

ホテル業魔殿の俺の部屋。

一度悪魔を出しての会議で、女神ブリジッドのツッコミを俺は聞き流すことにする。

そんな中、叢雲がアイスを食べているジャックフロストを軽くこづきながら意見を述べた。

「このCOMPってやつの枠が少ないのが問題なのよね。」

「なんとかならないの？」

「できない訳ではないが、できる場所が多分学園都市なんだよなあ。」

あつそこ行きたくないんだよ」

「あらっ？」

どうして？」

俺の否定的意見にステンノが乗っかる。

俺は紅茶を飲みながら答えた。

「あつこのボス。

つまり統括理事長がアレイスター・クロウリー」

近代魔術の祖であり、科学側のトップである。

色々突っ込みたいたいところではあるのだが、多分このCOMPを改造してくれる人間は

あそこにしか居ない。

下手すると、ステイブンあたりもいるかも知れない。

「その人がどうして行きたくない理由になるの？」

マスター？」

「あつこには滞空回線（アンダーライン）つてのが満ちているんだが、それでこつちの行動がそのアレイスターに筒抜け」

それでちよつかいを出してこなければいいが、アレイスターの計画なんかに入れられ  
たら目も当てられない。



いずれ出てくるだろう上条当麻は、俺にとって相性最悪の敵の一人なのだから。「じゃあどうするの?」

叢雲の問いかけに俺は代替案を提示する。

つまる所、この世は金なのだ。

「アイテムを買い漁ってごまかすしか無いだろう」

ここの商店街にある金王屋という骨董品店がその手の護符を大量に扱っていた。

また、歯車堂本舗は金丹とかまであるすぐれたお店である。

そこで対魔法防御を整えるしか無いだろう。

「天ヶ崎さん。

そういえばお聞きしたいのだけど、身代わりの護符とか作れる?」

「当たり前やないですか。

うちら呪術扱うとるんや。

人を呪わば穴二つ。

穴に落ちんように真っ先に覚えさせられますよって」

「じゃあ、それを大量に用意しておいて。

多分あつという間に無くなってゆくから」

「……あんさん。」

「一体何に手え出さはおつもりで？」

「聖杯戦争」

「そんなやり取りにハイピクシーが割って入ると文車妖妃が突っ込む。

なんだかんだで交流が持っていていい感じである。

「じゃあじゃあじゃあ。

もつと仲間を増やすべきだと思いまーす♪」

「だから、その枠が無いのが問題って言ったじゃない」

ちよつとここで現在の仲魔を確認。

妖精 ハイピクシー 1v10

鬼女 文車妖妃 1v12

妖精 ジャックフロスト 1v15

女神 ブリジッド 1v47

あと枠が二つあるので、前衛の強化を考える。

いくらレベルが高くて、人間である以上悪魔や英霊に負けるからだ。

そんな前衛職でかつステンの『女神の気まぐれA』のバフが乗る悪魔となると……

「……女神か大天使か地母神か邪神か破壊神か。

まあそのあたりなんだろうが」

改めて口に出すと恐れ多い方々である。

机に行きD D S | N E Tにアクセスすると、オークションページを閲覧する。

この時代ではありえない液晶モニターはやはり学園都市製だった。

「うん。

やっぱり枠が足りない。

とはいえ学園都市には行きたくない。

だったら手は一つだな」

皆の方を振り向いて俺は言う。

あまりフアントムソサエティーの計画を潰すと、メシア教の暴走を止められなくなる

のだがやむをえない。

「天海市に行く。

あそこには凄腕のハッカーがいるから彼に会いに行こう」

なお、これとは別にデビルオークションで以下のものを購入し、合体させた。

鬼女 キキーモラ Lv9

妖獣 イナバシロウサギ Lv9

妖精 ジャックフロスト + 妖獣 イナバシロウサギ || 魔獣 カンフュール  
魔獣 カンフュール + 鬼女 キキーモラ || 夜魔 ザントマン

で、悪魔辞典を使つて記録した悪魔を呼び出して、前と同じパターンで大天使イスラフィールを召喚。

さらに天使エンジェルを呼び出して合体させる。

大天使 イスラフィール + 天使 エンジェル || 霊鳥 サンダーバード  
霊鳥サンダーバード + 地母神 ズエラロンズ || 幻魔・クー・フリーン

「あっ……」

そのヴィクトルの声は最後の合体時に俺の耳に聞こえた。

合体事故りやがったなと察すると、

「やる夫下がつて!」

叢雲が俺を引っ張り、

「サマナーは私が守ります!」

「わ、私もっ!!」

女神ブリジッドと妖精ハイピクシーがかわりに前に出て、「あらあら、何か出てくるのかしら？」

ステンは興味のない風を装いながら魔力弾を放つ準備をしていた時、魔法陣から出てきたのはカードだった。

それもとても良く馴染みのある。

ランサーの銀色のカード。

「よう。サーヴァント・ランサー、召喚に応じ参上した。

ま、気楽にやろうやマスター」

……種火つて何処で手に入れるんだろうな？

幻魔 クー・フリーン 1 v 3 9

F G Oスキル+メガテンススキル所持。

そんな彼は俺をまじまじと見て、ここのたまわった。

「どこかで会ったか？」

初見の気がしないんだが……

ま、今後ともよろしくな！」

あ。

これ、俺のアカウントのやつだ。

おまけ

「待つが良い。」

前払いしていたハイピクシーの強化素材ができたからやってゆくといい  
御霊合体で現在のハイピクシーの能力はLv50相当に強化された。

けどレベルは10である。

我ながらえぐいピクシーになったと思う。

掛け金を釣り上げすぎて降りることができなくなつた  
ギャンブラーとそれを見てにやつくディーラー

「マスター。

ちよつといいか？」

召喚後、クー・フリーリンが叢雲を見て、俺に声をかける。

叢雲は、彼の視線を見て首をかしげる。

「何よ？」

「いや、この女、獲物使えるだろ？」

「なんでもも持たせてねえんだ？」

あ。

「あつ……」

すっかり忘れていた。

彼女の初期絵はアンテナを武器代わりにしていた絵だったのだ。

「とはいえ、私、重火器の方が得意だし」

「もつたいねえなあ。

せつかく使えるのならば、その手数は多いほうがいいだろうに」

「マスター。」

思ってたんだけど……」

「言うなよ。」

俺も同じ事を思ってるんだ」

クー・フリーンが横須賀基地の叢雲を見てやっと納得したのは言うまでもない。

とはいえ、一理ある意見だったので、叢雲にタクヒのつえという槍を買ってやることにする。

そのまま銃器も購入する。

弾の制限があるが、銃器の強さは魅力的だからだ。

とはいえ携帯は当然違法である。

銃についてはひとまずおいといて付随効果のある特殊弾頭を購入する。

小細工に近い形だが、手詰まり感がうつつすらと漂ったまま俺達は一旦横須賀に帰ることになった。

「ハハ、いいかな？」

横須賀に帰る途中、転換クロスシートに座っている俺達の前に、堂々と尋ねてくる声



が一つ。

むつとする叢雲がそれを拒否する。

「見てわからないの？」

座っているじゃない」

「うん。」

知っているよ。

入即出やる夫くん」

俺はじつと相手の顔を見る。

帽子をかぶった彼女は女子大生か、それよりちよつと上か下か、まあそのあたりの年頃の女性のように見えた。

「あんた何者だ？」

「臥煙伊豆湖。」

何でも知っているおねーさんだよ」

こういうのまで出てくるのか。

駄女神よ。

あんた一体何をどれだけぶちこんだんだよ？

「君の状況についてはおおよそ知っている。」

そして、そのためにこれから天海市に行こうとしている事もね」

満員電車の車内で堂々と話す話ではないのだが、彼女はそのあたりをまったく気にしない。

まるで仕事の愚痴を言うかのごとく、臥煙伊豆湖は滔々と話す。

「で、おねーさんとしては、天海市に今行くのはおすすしめしない。

それを言いたくて、この満員電車に乗ってきたという訳だ」

「それはご苦労なことだ。

理由をお聞きしても？」

「君が学園都市を避けた理由と同じさ。

全てがコンピュータで管理され、ネットワークで接続された情報環境モデル都市である天海市。

その街に学園都市の技術が入っていないと何で言いきれるんだい？」

「っ!？」

完全に失念していた。

そりゃ、学園都市なんて科学の都があるのだから、そこからの技術移転という形で話が振れる訳で、フロントムソサイエーターがそういう理由を作り上げて天海市でマニトウ計画を進めたのは筋が通る。

「それ、おかしゆうあらしまへんか？」

科学が妖怪変化に力を貸すつちゆうんは、敵味方に分かれたもんが手を組むんと一緒に  
でっしやる？」

横から天ヶ崎千草が口を挟むが、臥煙伊豆湖はそれも見透かした目であつさりと反論  
する。

「簡単なことだよ。」

学園都市の統括理事長は、学園都市外の事に関知するつもりは無いのさ。

いや、いずれ来る主人公の為に、ある程度の混乱状況は歓迎すると言った方がいいの  
かな？

どっちにしろ、解決が約束されている物語だ。

下手に手を出して、かえって状況が悪化する方がまずいと思うよ」

さすが何でも知っている女。

この分だと、俺の素性もこの物語も全部理解して接触してきたのだろう。  
「なるほど。」

さりとて、このまま冬木に向かうのは少々怖い。

あそこの争いはまだ圧倒できる戦力ではないからな」

「知っているよ。」

ついでに言う、今、天海市に行くのは止めておけと言っているのであって、時が来れば君は天海市に行くべきだとも考えている」

車窓を眺めながら、臥煙伊豆湖は笑顔を見せる。

正直に言おう。

この笑顔が今までで一番怖いと思った。

「そうだね。」

おねーさんからのアドバイスだ。

あれと戦う組織があつたはずだ。

まずはそれを動かしなさい。

次に学園都市に行きなさい。

天海市で捕捉されるより、本拠の玄関を堂々と叩いた方がまだ救いがあるよ。

最後は、君が平崎市を救った手法を天海市でも使うべきだ」

「なるほど。」

その天海市を牛耳っているのは平崎市より大物なんだが、それはどうするんだ？」

「それは君が考え給え。」

君の選択肢はデメリットを考えなかつたらほぼ無限だ。

毒が厄介ならば、もつと厄介な毒を用意するべきだな」

駅に着き、臥煙伊豆湖はそこで降りる。

彼女はその笑顔で手を振ってドアが閉まる前にこんな事を言った。

「じゃあ、頑張りたまえ。

世界が滅ばないようにね」

## おいでませ学園都市

「失礼します。

身分証と滞在許可証を。

……海上自衛隊、横須賀基地警備隊所属、入即出やる夫二佐相当官。

滞在目的は、第3学区の武器見本市への参加。

護衛は副官の東雲叢雲三佐相当官と恵美ステンノ一尉相当官、あとは秘書の天ヶ崎千草海士長相当官の四人ですか。

結構です。

ようこそ学園都市に」

考えてみたら当然で、日本政府と学園都市の仲はあまり良くはない。

凄い科学力で結構なものを自給自足している学園都市だが、完全な自給自足体制ではない。

230万人も住んでいる住民の殆どは学生であり消費者だからだ。

その結果、脅威のバイオテクノロジーと完全機械化による食糧生産を行っているが、内地地故に必然的に魚介類等は必ず輸入する事になっている。

もちろん、それらの代金として優れた科学製品を日本に輸出する事で成り立っている訳だ。

また、そういう交易が発生する為に、日本政府の代表者が学園都市に滞在して、日本人の保護を行っていたりする。

実質的な大使館なのだが、学園都市はあくまで日本国内の一自治都市という事で、外務省の研修施設という体裁で大使館を設置している。

今回は自衛隊経由で学園都市への滞在を申請し、それに学園都市側が異議を唱えなかったからこそ認められた。

その際に叢雲とステンノの名字申請と、天ヶ崎千草への海士長待遇の付与も同時に行っている。

なお、名目の兵器見本市はちゃんと行われており、第三世界を中心に学園都市の高性能武器は世界の戦場で猛威を奮っているのだ。

実際買えるなら、ちよつと買ってみたいと思ったり。

「お待ちしておりました。

入即出二佐相当官。

車を用意しましたのでこちらへ」

軍服姿でゲートをくぐると、出口に一台の車が待ち構えていた。

堂々と身分を晒しての訪問は、裏を覗き見たりしない限りは安全が保証されるという訳だ。

どうやら、学園都市側がつけたガイド兼監視らしい。

「今回の案内をさせていただきます、先進状況救助隊のテレスティーナⅡ木原Ⅱライフラインと申します。

何かありましたら、気軽に申し付けください」

初っ端から原作キャラとエンカウント。

よりもよって木原一族である。

身分が高くなり過ぎるというのも考えものである。

「入即出二佐相当官は、今回は何をお探してこの街に来られたのでしょうか？」

「一応オフレコで頼むよ。」

実験艦に搭載する最新鋭イージスシステムのレーダーだ」

「たしか、海上自衛隊は、03中期防に基づいてイージス艦を建造していたと思いますが？」

今回の訪問目的は、あくまで叢雲に積むためのイージスシステムという名目になっている。

あつたらあつたに越したことは無いが、この街に侵入するための理由であつて実際に



買う予定はない。

多分価格は数十億はするし。

「本格配備はその先の話になるだろうね。

冷戦が終わったとは言え、東京と大阪にICBMが落ちたらこの国はおしまいだ。

イージス艦の整備は今後も続けてゆく予定ではある。

今回は、最新鋭の技術が何処まで進んでいるのかを見て、それを前提にした国防のプランの提出まで考えたいと思っている」

「つまり、次の中期防に向けての下調べと？」

「そんな所だ。

すぐに購入という客でないのは申し訳ないが、滞在中はよろしく頼むよ」

「お気になさらず。

今より優れた物を。

未来より優れた物を提示するのが、学園都市ですわ」

テレステイナーナⅡ木原Ⅱライフライインの連絡先を聞いて彼女と別れると、ホテルにチェックインして今日は自由時間となる。

部屋でくつろごうとして、ステンノが苦笑する。

「何だか色んな所から見られているみたいね。

人気者さん」

もちろん暗部の監視者だろう。

表向き手を出せないから、裏から監視をしなければならいのでご苦労な事である。

「で、やる夫。」

この後どうするの?」

「当てもなく探すよりも、目星をつけて探した方が何か見つかるだろうよ。」

あの臥煙伊豆湖のアドバイスで来たのだから、学園都市内部の魔法でも探ささ。

となれば……ここかな」

テーブルに地図を広げて、とある学区を指さす。

「多種各派の宗教施設が集中している第12学区だ」

彼女と出会えたのは、駄女神様のお導きだろう。

第12学区の宗教施設を適当にうろついていたら、端の方に古ぼけた社が一つ佇んでいた。

そこを掃除している女子学生の髪は、見事なまでの緑色だった。

「き、君」

「……はい。」

何でしょう?」

「すまないが、この社は何を祀っているのかな？」

既に社の回りの御柱で全てを察しているのだが。

お前、長野県出身じゃねーのかよと突っ込みたい所なのだがぐつと我慢して彼女の言葉を待つ。

「はい！」

この社は守矢神社と言って、かなこ様とすわこ様を祀っているんですよ!!

私、この社の風祝をやっています、東風谷早苗と申します!!!

諏訪の地の現人神は、神が理解できぬ周囲の人間に疎まれた上に、科学全盛の学園都市が原石としてこの学園都市に連れてこられていた。

彼女のレベルは0。

無能力者である。

東風谷早苗

ベース1v66

学園都市修正(デバフ) || Lv50

魔法絡みだと、今のステンノと同じレベルという現人神は、俺達を見て元気いっぱい笑った。

多分、今監視している学園都市の暗部は、何が行われているか分からないのだろう

なあ。

## 学園都市一日目から二日目朝

「結界をはってくれ」

「はいな」

俺は天ヶ崎千草に命じて結界を張らせる。

COMPを起動させると、その結界内に透明な八坂神奈子と洩矢諏訪子が姿を現す。  
「おや。」

あたしらの姿を見れる人間がこの街に居たのかい？

あたしの名前は八坂神奈子」

「私の名前は洩矢諏訪子。」

よろしくね。

人間」

ここまで姿が透けているという事は、ひたすらその力を東風谷早苗の為に使っていたのだろう。

この学園都市ですら、彼女は現人神のままだったのだ。

とある設定では、魔術師が超能力開発をしたら死ぬ設定があったから、それをさせな

いように努力したのだろう。

よくぞ持ったと言うか、もたせたと言うべきか。

駄女神の無駄な設定のすり合わせに涙が光る。

「とりあえず、こちらからマグネタイトを送ります。

それでお二方はお力を回復させてください」

アームターミナルを起動してマグネタイトをそれぞれ10000ほどぶちこむ。

本来の力を取り戻した二柱の姿はこんな感じで、更にステンの『女神のきまぐれA』をかけてやる。

八坂神奈子

ベースレベル 8 1

デバフ後レベル 6 1

女神の気まぐれAバフ 8 7

洩矢諏訪子

ベースレベル 5 7

デバフ後レベル 4 3

女神の気まぐれAバフ 6 1

強いな。

さすがこの国由来の土着信仰の神様だ。

このバフが持つ間に二柱に俺は告げる。

「超能力開発されたら、この娘死にますよ。

魔術と科学は相いれない事は既にわかっています」

「……やはりね。

嫌な感じがしたから散々邪魔してやったけど、正解だった訳だ」

「けどどうやって出るの？」

当てはあるの？

神奈子はそのあたり抜けている事が多いから……」

「とりあえず、学園都市から出た後の当てについては、平崎市のホテル業魔殿に宿泊すれ

ばいいでしょう。

私の名前を出せばオーナーは何も言ってきました。

また、何かあつたらその商店街にあるくずのは探偵事務所を頼りなさい」

東風谷早苗に俺の名刺と財布から10万円ほど抜いて押し付ける。

そのついでに彼女の髪を一本引つ張つて抜く。

「いたっ！

何をするんですか!!」

「このまま消えたら、俺達に疑いの目が行くからね。

身代わり人形を置くのさ。

天ヶ崎さん。頼む」

「はいな」

天ヶ崎千草が身代わり人形に東風谷早苗の髪を入れて術を発動させて身代わり人形を完成させる。

アレイスターあたりにはバレバレだろうが、統括理事会あたりならば十分騙せるだろう。

「それを君の家に置いておけば、数日はごまかせるだろう。

そこからは君が好きに決めると良い」

幻想郷にまで神隠しで跳んでいけたのだ。

学園都市の外に出るぐらいならばあの二柱の力を以てすれば簡単だろう。

俺の言葉に東風谷早苗は元氣いっぱいに笑った。

その笑顔に涙が光っているのを俺は見ない事にした。

「はいー」

ありがとうございます!!」



その日の夜。

ホテルの部屋でくつろいでいたら、監視していた暗部の動きが慌ただしい。

東風谷早苗の件がバレたにしては動きが早すぎる。

とりあえず、ステンノを偵察に行かせる事にした。

「トラック二台で、二・三十人つて所かしら。

えらくガラの悪い人たちで、指示している人は顔に入れ墨みたいなのがあったわよ。

あと、それを監視している人たちが数人ほど居たわよ」

木原数多の猟犬部隊か。

アレイスター直属の武装集団だから、東風谷早苗の報復……いや、こちらの力試しが

メインだろう。

俺があっさり殺されるようならそれまでと言う所か。

窓側のカーテンと壁一面に物理反射の禁凝符をずらりと張る。

COMPを起動して、クー・フリーン、ブリジッドを呼び出す。

「どうしたマスター。出番か？」

「お呼びでしょうか？ サマナー？」

「敵襲だ。」

襲われる前に、こっちから奇襲をかける。

クー・フリーン。

行けるか？」

「最高じゃねえか！」

マスター。

好きに暴れさせてもらうぜ!!」

クー・フリーンはそう言って霊体化して消える。

この奇襲は科学側が対処できるかどうかで戦略が変わってくる。

「ブリジッドは廊下に出て防衛。」

叢雲が援護射撃するので一歩も入れさせるな」

「分かりました」

「ステンは天ヶ崎さんの部屋に行つて、彼女の警護。」

「こっちに来てもらうよう言つてくれ」

「はいはい。」

マスターの言うとおりにしますわ」

「サマナー。」

「私は? 私は?」

勝手に出てきたハイピクシーに俺は少し考えて命じた。  
アレイスターへのサービスはこれぐらいでいいだろう。

「クー・フリーンの援護を頼む」

猟犬部隊戦力

36

クー・フリーン 1v39×0・76 〓

27

ハイピクシー 1v10×0・76 〓

7

「少しは楽しめそうじゃねえか！」

猟犬部隊が配置に付く前にクー・フリーンの奇襲が刺さる。

武装集団とは言え人間のクズを使った替えのきく部隊だからこそ、たった一人で彼らは壊乱する。

ただ一人。

木原数多を除いて。

「うろたえるんじゃねえ！」

奴は一人だ。

何のために銃を持ってやがる!!

「困んで撃ち殺せ！」

「で、でもそれをしたら味方に……」

「じゃあ、奴の槍で死ぬか、味方の弾で死ぬか、俺の銃で死ぬか好きなのを選びな！」

「撃て！」

「撃てえ!!」

「ちっ！」

「コイツラ、味方ごと始末する気かよ!!」

英霊だったらまだしも、今のクー・フリーンはメガテン側の悪魔として召喚されていた。た。

つまり、銃撃は効くのだ。

かわし続けるのも限界があり、いつの間にか銃弾による傷が増えてゆく。

そんな時に、この場にそぐわないかわいらしい声が響く。

「トラフリーリ！」

「おかえり。」

クー・フリーン。

「戦ってみてどうだった？」

「この体だと数で押し負けるな。」

回復サンキューな」

ブリジッドのディアアラハンでクー・フリーンを回復させた時にドアがノックされる。叢雲が警戒したままドアを開けると、ステンノと共に天ヶ崎千草が入ってきた。

「ご無事みたいですね」

「ああ。」

申し訳ないが、今日はこのまま交代で見張りだ」

外から警備員の集まってくる声が聞こえる。

中々の歓迎ぶりに俺は苦笑するしか無かった。

結局その日の襲撃はそれだけで終わった。

「おはようございます。」

ミズ、ライフライン。

寝ていた時、この近くで何か騒動みたいなのがあったらしいのですが、何だったんですか?」

「おはようございます。」

入即出二佐相当官。

大したことではありませんわ」

翌日の朝の挨拶。  
双方笑顔なのだが、  
目はまったく笑っていないかった。

## 学園都市二日目朝から三日目朝

学園都市二日目。

今日は名目上の滞在目的である兵器見本市を見学する。

実際に学園都市製造の兵器は優れているから、参考にはしておきたいらしい。

海自からは今回の滞在許可と引き換えに、レポートの提出を求められている。

「さてと、リーダーだが……おりひめI号を利用したシステムか」

そもそも、イージスシステムというのは、第二次大戦時の日本軍の神風特攻で痛い目を見た米軍が、冷戦期におけるソ連の対艦ミサイル飽和攻撃にどう対処するかから始まっている。

そのため、このシステムは、探知と迎撃に分かれている。

つまり、『どうやって敵を見つけるか?』と『見つけた敵をどの武器で対処するか?』を突き詰めた結果としてのできたものなのだ。

そんなイージスシステムだが、その広範囲探知機能と多様性のある迎撃手段により、ICBM迎撃の手段として注目されだす。

冷戦時の最前線だった日本にとって、この盾は欲しくてたまらないものであり、学園

都市は日本にこの技術を流出させる事で、米国の影響力の削減も狙ったのだろう。

「悪くないな。」

「このシステムは」

何しろメガテン世界では米国がICBMを撃ってくるのだ。

米国由来のイージスシステムが使い物にならなくなる可能性は考慮しておいた方がいい。

「発見から、迎撃選択にミサイル誘導まで人工衛星がやって、こっちはミサイルキャリアーとしてそのICBMが迎撃できる所まで移動するだけというのがいい。

この方式だと、今の護衛艦でも迎撃能力を大幅に向上できるのが更にいい」

これも人工衛星、というか言ってしまう。

『樹形図の設計者』の恩恵である。

これがある限り、科学を以てして学園都市を落とすのは難しいだろう。

「そう言っていただけだと、うれしいですわ」

ガイドでもあるテレスティーナⅡ木原Ⅱライフラインは営業スマイルを崩さない。

そんな彼女からこんな提案が出る。

「これは統括理事会からの提案なのですが、日本政府の好意に報いたいという事で、この最新式イージスシステムのモニターになってみないかと」



にっこり。

にっこり。

互いに目は笑っていない。

つまり、昨日の夜の襲撃に対する侘びというやつなのだろう。

それについてはひとまず保留して、他のシステムも見てみる。

見逃せないものを見つけてしまう。

「……天海市の衛星回線ネットワークに協力……？」

「はい。」

政府の天海市二上門にある天海モノリスのアンテナから衛星通信ネットワークを用いたコンピュータ回線を……」

テレスティーナの言葉をもはや俺は聞いていなかった。

ソウルハッカーズにおける根幹の仕掛けは、パソコンネットワークを用いた魂の収拾。

そして、その魂を偉大な存在に捧げる事で神格を上げる事に使われる訳で……

(やべえ。これ絶対能力進化計画に直接絡めるやつだ……)

頭を抱えたくなるのを俺はぐっと我慢する。

そんな俺をテレスティーナが怪訝そうに見つめる。

「何か問題でも?」

「失礼。」

そちらの提案は、歓迎すべきものです。

ただ、自衛隊では完全と言うものはないと叩きこまれていましたね。

このシステムだとミサイルの更新だけで済みますから、元々用意していたスペースに何か積めないかと考えていたのです」

『樹形図の設計者』はいずれ壊れるだろうしなんて言えず。

俺のごまかしはどうやらテレステイナにはバレなかつたらしい。

「でしたら、こちらのシステムなどはいかがでしょうか?」

「ここでもしか実用化されていない未来の兵器。

レールガンです」

なるほど。

その技術を機械で実用化できたからこそ、御坂美琴が出てきたのか。

この超兵器はとにかく電力を大量に消費する。

ジオ系悪魔に電力作ってもらって、撃てるかな?

とりあえずカタログをもらって検討するという事にした。

ステイブン探索判定 100で足取りが見つかる

74

学園都市監視度 100でしつかり監視

43

学園都市妨害度 100で攻撃まで含める妨害

17

この学園都市に来た本来の目的であるステイブンの探索だが、なんとか足取りを捕まえることに成功した。

学園都市内のネットワークにオカルト系のサイトがあり、スキルアウトのたまり場である第10学区に目撃情報が発見されたのだ。

天ヶ崎千草に身代わり人形を作らせてホテルの監視を騙し、ステンノの『気配遮断A+』を駆使して、第10学区にお出かけ。

適当に近づいてきたスキルアウト達を『魅惑の美声A』で魅了すれば、あとは第10学区内部のアンダーネットワーク端末まで一直線である。

「君は私が作った悪魔召喚プログラムを使ってるね。」

もし君が秩序にも混沌にも偏らず、中庸の道を往くのなら、私が僅かばかりだが協力してあげよう。

人間が持つ価値を、可能性を、私に証明してくれ」

この台詞を聞いた時の安堵感たるや。

アームターミナルのCOMP内部の悪魔枠を倍の1.2に拡張してもらい、学園都市だからと当たり前前に存在しているスマホに悪魔召喚プログラムが移せるようにも改造してもらった。

その日の夜。

学園都市側からの襲撃は無かった。

「おはようございます。」

短い間でしたが、ありがとうございます」

「こちらこそ、これからも良い関係が続けていきたいと思っておりますわ」

テレスティーナと互いに握手を交わし、俺達は無事に学園都市を出ることができた。

今回、イージスシステムとレールガンを入手した事で、海上自衛隊内部において俺の評価が高まったのは言うまでもない。

それともう一つ。

「おかえりなさいませ。」

やる夫様。

東風谷早苗と名乗るお方がお待ちになっていますよ」

ホテル業魔殿からの電話報告を聞いて、彼女の戸籍と身分の再確認と場合によっては偽造をしなければならぬなど俺は思いながら、とりあえず提出するレポートを書くことにした。

## 天海市攻略準備編 その1

天海市攻略、つまり『ソウルハッカーズ』をクリアするには、かなり面倒な手順で攻略しなければならぬ。

天海市そのものをフアントムソサイエティーが完全に掌握しているからだ。

そこで原作通りにまずはクズノハを動かす。

掴んだ事を持って、マダム銀子に会いに行つたのだ。

平崎市の矢来銀座にあるクラブ・クレティシヤス。

新月の夜にだけ会つてくれるので、レイ・レイホウにアポをとつた上での面会。

こんな美人なんだが……男なんだよなあ……

「あら？」

「ごほん」

二人の声に不穏なものを感じたので、俺は手早く挨拶を済ませる。

「ヤタガラスのサマナーである 入即出やる夫と申します」

「はじめまして。」

私が銀子です。

話はレイから聞いています」

このイケボがまた困る。

主に笑いのツボ的に。

笑わないように俺は資料を手渡して状況を説明する。

「この平崎市で暗躍していた組織、ファントムソサエティーの新たな陰謀を発見しました。」

平崎市より遙かに規模が大きく、政府事業な上に学園都市まで絡んで手が出せません」

メガテン世界に対魔忍世界が絡んでもう何処から手をつけていいか分からない政府の腐敗ぶり。

郵政省の西事務次官は悪魔であり、与党幹事長の矢崎宗一が黒幕になっている。

「そう言えば、こちらに滞在していたシスターさんはどうなりましたか？」

「ああ。」

彼女でしたら……」

知恵留美子

ベースレベル

メガテン世界修正	ベースの81%		81
対魔忍世界修正	補正後の183%		148
ノマドのダメージ	100ほど痛い		
52			

状況変化の介入度 100ほど積極的

時計塔 84

聖堂教会 26

関東魔法協会 95

関西呪術協会 25

十字教 62

メシア教 19

自衛隊 35

米軍 75

「派手に暴れまくっていますよ。」



むしろそれで壊滅させられないノマドの凄さに私は驚いていますかね」

よほど水があつたのか、彼女は東京キングダムと地下都市ヨミハラで暴れまわつていた。

下手な魔族より強い上に頭対魔忍でもないから、もはや無双ゲーの世界である。

これは嬉しいことなのだが、同時に今彼女を引き抜く事ができない事を意味していた。

この状況に乗つかる勢力が現れる。

時計塔と関東魔法協会と米軍だ。

関東魔法協会からすれば己の膝元にこんな魔都があるなんて許せる訳もなく、新たな神秘の山であるこれらの都市から魔術的な何かを得ようと時計塔の魔術師が大挙して押し寄せることに。

もちろん双方ともかなり食われたり孕まされたりしているのだろうか。

そんな二者の陰に隠れて米軍も部隊を派遣していた。

対魔族部隊の実験部隊という。

そんな各勢力の間で十字教が監視のための人員を派遣しており、控え目に言つて力オスである。

「そうなる動かせそうなのは一つです。

関東魔法協会」

「なるほど。」

「こちらに話を持ってきたという事は、相手も決めているという訳ね」

関東魔法協会に所属している人物に葛葉刀子という女性がいる。

魔法先生だが、京都鳴神流の剣士であり、名前のとおり葛葉一族の出身らしい。

「こうやって世界が重なると勝手に設定が生えるから困るが同時に助かりもする。」

「けど、こっち方面で派手に介入しているのに動いてくれるのかしら？」

「だからですよ。」

フアントムソサエティーとノマドが繋がっている証拠は握っています。

「あげくに政府の実験都市が魂を集める悪魔召喚のシステムなんて分かったら、黙って

「いられないでしょうか？」

「規模、人員共に関東魔法協会は大手です。」

「連携できるだけでも大きく違ってくるでしょう」

「マダム銀子が色っぽく書類を叩く。」

「けれどもその視線は俺を射抜いている。」

「政府の方の退魔組織はもつと出張ってきていいんじゃないのかしら？」

「クズノハのお目付け役である彼女になれば明かしても大丈夫だろう。」

俺はある意味狂人ともとられかねない一言をゆつくりと静かに告げた。

「自衛隊内部でクーデターの動きがあります。」

退魔組織や退魔部隊がそのクーデター勢力に加わっている兆候があります」

マダム銀子は優美に笑みを浮かべたまま俺を視線で射抜いたまま。

俺はあくまで冷静を装いながら、続きを口にした。

「関東のこれらの混乱でそのあたりの退魔組織を呼ばれて常駐させられると、そのまま決起時にクーデター軍の戦力になり、鎮圧が難しくなるでしょう。」

俺としては、これ以上状況が混乱してほしくないんですよ」

「貴方はクーデターが発生した時にその軍勢に加わるのかしら？」

「加わりません」

はつきりと告げる。

メシア教とガイア教の殴り合いに付き合うのはまっぴら御免というのもあるが、せつかくイーリス機能を得た叢雲を動かせるのだ。

核ミサイルを迎撃する事でこの世界の崩壊を防ぐことが大事で、今更政府転覆どうこうは気にしていられないというのが本音である。

「いいでしょう。」

それならば、私達と手を繋げるわ。

連絡はここを中心に、レイ・レイホウを連絡役に」

マダム銀子と握手をする。

その手を握ってわかった。

男の手。

戦うことをためらわない男の手だった。

「おかえりなさいませ。

いくつか報告が」

情報収集に出していた文車妖妃から聞きたくない報告が。

自衛隊の隊員情報を調べて以下的人物の確認が取れたのだ。

東部方面隊朝霞駐屯地司令

石馬雪緒陸将補

第1普通科連隊第1普通科中隊所属

甘粕正彦一尉

第1普通科連隊第5普通科中隊所属

加藤保憲二尉

……この国もう駄目かもしれん。

そんな事を言いそうになるのをぐつとこらえると文車妖妃は更に来客を告げた。  
「サマナーに来客が。」

命蓮寺で世話になるとかで、挨拶に来たそうで。

甲河臈と名乗っています」

そうか。

シエル先輩のせいかしらんが、彼女まだ悪落ちしていないのか。

## 天海市攻略準備編 その2

世界が重なるという事は、己の常識が揺らぐという事でもある。

俺は甲河朧を見て、それを思い知った。

「対魔忍の甲河朧と申します。

後輩二人がお世話になったそうで……あの、何か？」

「ああ。

失礼。

ヤタガラスのサマナーである 入即出やる夫と申します。

後輩の方々とくらべて挨拶が丁寧だなど思いました」

「まあ。

あの二人またやったのね。

後でお説教しておかないと」

誰だこいつ。

そんな事言える訳もなく俺は朧と握手をする。

とりあえず、状況を確認したい。

「こちらに隴さんがこられたのはどのような理由で？」

俺の確認に、隴がちらりと牝の顔を出す。

あー。

これ色仕掛けで俺を落としに来たな。

「はい。」

色仕掛けでやる夫さんを落とせればと思ひまして」

「ちよつと」

「へえ……」

こつちの内心を読んだ隴があつさりとぶつちやけ、叢雲とステンノの目が好戦的になる。

さすがエロゲ出身悪落ちくノ一。

色仕掛けにためらいがない。

「真面目な話として、ここ最近一気に急増している魔物がらみの事件で関係者が足りないのです。

そんな中、新星のように現れた、悪魔召喚師。

何処も狙わないわけ無いじゃないですか？」

おかしい。

対魔忍なのに会話がまったくエロくない。

試しに下ネタジョークをかましてみる。

「という事は、種付けおじさんとして人生を謳歌することも可能と?」

「もちろん。」

とはいえ、殿方にわかりやすく言うならば、お好きなAVやゲームよりも競馬と  
思っていた方が分かりやすいかと」

「俺はノーザンテーストという訳だ」

「どちらかといえば、サンデーサイレンスになると信じております」

浪漫と言えば浪漫なのだが、こうもう少し何というか、あけっぴろげだと萎える。

そんなことお構いなしに、甲河隴はぶっちゃけ続ける。

「あ。」

私だけでなく、こちらに来ている水城不知火と井河アサギもやっちゃっていいんで  
本当にこの国もう駄目かもしれぬ。

甲河隴

ベースレベル

23

メガテン世界修正 ベースの56%

||

12



サイコロブースト +60% Ⅱ 19  
問題なく魔法が使えるので  
+修正

さすがアサギのライバルになるだけあって強い。

何よりも悪落ち系だけあって頭が対魔忍でない（ここ強調）。

なお、彼女の指導で八津紫や井川サクラもこつちに来ていろいろらしい。

もちろん手出しOKだそうだ。

これで手を出せるならば喜んで出したい所ではあるのだが、これ明確な地雷である。

「どつちなんだろうな。」

ノマドが潰れると困るから、対魔忍側が俺に人身御供を差し出したか、俺を取り込んで魔族側に引き入れるつもりなのか」

ホテル業魔殿にて臚との会談後。

俺はコーヒーを飲みながら、考えを口にする。

それを聞いていたのは、叢雲とステンノだけでなく、ここに逃れてきた東風谷早苗と八坂神奈子と洩矢諏訪子の三柱だった。

「どつちもあるだろうね。」

「ここにいる間に色々見させてもらったが、ひどいもんじゃないか」

どうやら政府中枢は対魔忍世界で固まったらしく、総理は朝井考次郎、官房長官は野々村広男と名前が出てきている。

もちろん魔族と繋がっているのは言うまでもない。

これで国民が苦しんでいるならばまだしも、笑ってしまうことにこの国は未だ史上空前の繁栄を謳歌しているのだった。

理由は簡単。

学園都市から流れる超技術に、東京キングダムや地下都市ヨミハラという快樂の都を抱え欲望が金を生み、金が金を生んでいた。

そしてメガテン世界と繋がったことでマツカが流通するようになるとこの流れは更に加速する。

バブルはフロンティアがある限りは破綻しない。

日本はこの魔界という新たなフロンティアを得て、欲に溺れ、金に溺れ、新たなソドムとゴモラとして名をはせようとしていたのである。

これで庶民が貧乏になるなら怒りもするが、金持ちが更に金持ちになっただけで、治安の悪化は夜一人で出歩かないようにレベルなのがまた、この国の治安組織と退魔組織の優秀さを物語っている。

多分、日銀総裁以上に頭を抱えているのは、マツカ製造管理者の魔王ルキフグスなの

だろうなあ。

多分、今円安マツカ高が進行していて、マツカ製造が追いつかないとか。

「なるほど」

「どうしたの？」

やる夫？」

「いや、一つ納得いく事があってな」

ソウルハツカーズの魂収集システム、あれはマツカ製造の為の資源鉱山の役割を果たしている訳だ。

そりゃ、フアントムソサエティーが本計画にするわな。

「で、私達を学園都市から助け出して、どうするつもりなのかな？」

「天海市攻略の為に助力をお願いしたい」

洩矢諏訪子の質問に俺は即答する。

今回動かすのはクズノハと関東魔法協会だが、彼らだけでは戦力が心もとない。

囚われずに動ける遊撃戦力がどうしても欲しかったのだ。

「具体的には？」

東風谷早苗を危ない目に合わせたくない八坂神奈子が俺の目を見つめて問い詰める。

俺もこんな所で神様の機嫌は損ねたくないのであつさりと種を明かした。

「サポートして欲しいハツカー集団が居る。

『スプーキーズ』って言って……」

話し合いの後、洩矢諏訪子が俺の耳元でささやく。

考えてみれば、彼女の子孫が東風谷早苗という設定だったわけ。

「早苗を孕ませてもいいけど大事にするんだよ。

さもないと崇るから」

「あいつ？」

既に二人いるのにまだ欲しいのかしら？」

「へえ……」

色々とお話が必要みたいね」

あのカエル神。

二人に聞こえるように言いやがった。

ハーレムってのも楽しじゃない。

手出しOKでもその後ろにある地雷を見て、俺はハーレムのデメリットを学んだのだった。

## 天海市攻略準備編 その3

アニメやゲームの世界においては基本『レベルを上げて物理で殴ればいい』というルールが適用される。

だが、近代戦を経てハイテク戦に入るとそれが若干変わってくる。

第二次世界大戦では科学と数というものが猛威を振るった。

それは湾岸戦争を経て更に突き進み、今や兵隊というものは高技能熟練者でないとハイテク武器を扱えないまでになってしまっていた。

その先は機械による兵器管理である。

まあ、そこまで行くと『ターミネーター』の世界も……ありえるから困るんだよなあ。

あの駄女神様だと。

話がそれだが、要するに横須賀基地で話題になっていたのは、俺が持って帰ってきたイージスミサイルとレールガンのセットであり、これの運用だった。

「ミサイルについてはそちらの艦に載せることは構わない。

で、だ」

警備隊司令の咲川海将補が頭を抱えながら言葉を選ぶ。

学園都市が提供してくれたイージスミサイルはハーブーンSSM4連装発射筒の4基分だから計16発。

これは俺への襲撃の佯びだから遠慮なくもらうつもりである。

問題はレールガンだった。

大規模電力が必要で、その射程は200キロを超える化物兵器。

学園都市製だから『樹形図の設計者』とリンクができるイージスシステムの銚となりうるこれを持って帰ったことで、俺への評価はうなぎ登りと同時に、やっかいな問題を引き起こしていた。

誰がこれを使うかである。

「私の船には積みませんので、使用については警備隊司令に一任いたします」

いけしやーしやーと言いつつ俺に対して咲川司令の顔色は良くない。

理由は、この化物を巡って『俺にくれ!』と醜い奪い合いが自衛隊内で起こったからである。

「市ヶ谷が強硬に欲しがっていいね。

かと言ってはいそうですかと渡すわけにもいかないだろう?」

厄介なものを持って帰ってくれたものだよ。君は」

「こちらも押し付けられたようなものでして。

そちらのいいようにお使いになればよろしいのでは？」

「それができないから困っているんだよ」

咲坂司令クラスともなれば、自衛隊内の不穏な動きは大体察しているのだろう。

陸自のゴタゴタに海自が巻き込まれたくないというのがよく分かるが、欲しがっているのがクーデター勢力だとすれば、クーデター後の米軍の介入と核攻撃を警戒しているという証拠だった。

「こいつは使用時に大規模電力を必要とします。

使うとすれば、基地内部で砲台として運用するべきでは？」

「それしか無いだろうな。

下がってよろしい」

美野原一佐が折衷案を出し、咲坂司令が了承する。

部屋を出た後で美野原一佐がぼつりと口を開く。

「あんな事を言ってますが、貴方が来てから隊の予算が増えて喜んでるんです。

自衛隊は金食い虫ですからな」

要するに俺を取り込みたい海自側が優遇しているという事なのだろう。

それでも足りないのが人である。

「あの大砲の運用人員に警備要員。

頭が痛いですよ」

だったら俺の船の自衛隊員を降ろせばと言いたい所を俺は我慢する。

彼らにとつてはあまりに大きすぎる個人武力を持つている俺が暴走するのが不安なのだろう。

そんな人員を解決する手段があると言えず、俺は愛想笑いを浮かべるにとどめた。

「なんだ。

ホムンクルスが欲しいのか？」

電話での蒼崎橙子との情報交換で彼女は笑う。

魔術師だとホムンクルスという選択が取れる事があるからだ。

アインツベルンとかユグドミレニアと言った家門でないと作れない技術ではあるが。

「あった方がありがたいが、使い捨てのサイクルが短すぎる。

せめて数年は持つて欲しいところだよ」

実はそれが可能な学園都市のクローン技術というのを狙っても居たのだが、こつちは訪問時に断念した経緯がある。

あれも露骨に絶対能力進化計画に絡んでいるし。

俺は電話口で蒼崎橙子相手に愚痴る。



「実際にクローンやホムンクルスが戦場に投入されてみる。

自立する合法的な肉壁。」

都市戦ががらりと変わるぞ」

「発展途上国で行われている少年兵と何が違うんだ？」

分かっているくせに聞いてくるのだから蒼崎橙子は夕チが悪い。

俺もそれを理解しているの、自虐的に言い切る。

「こいつらの厄介な所は、教育によって最初から熟練兵の動きができる。」

短期間でプロが育成できるのは大きいぞ。

そして、この国は魔界なんてものと繋がりがつつあるから、兎に角裏の人間が足りない」

「神秘の秘匿もへったくれも無くなるな」

「それ以上の神秘がやってくるんだから、問題ないだろう？」

二人して乾いた笑いをあげた後、蒼崎橙子は確定的に告げた。

「冬木の聖杯戦争が始まるぞ」

「何!?!」

俺はそれ以上の言葉が出ない。

馬鹿な。早すぎる。

あの聖杯戦争は冬に行われたのでなかったのか？

今は、まだ初夏だぞ。

「むしろ何故予定通りに聖杯戦争が起こると錯覚していたのかな？

順調に世界が混じっているのだから、予定が狂ってゆくのは当たり前じゃないか。

時計塔からの情報で、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトとソラウ・ヌアザレ・ソフィアリの入国を確認したわよ」

これは聖杯戦争が開始されるだろう。

きっと衛宮切嗣とアイリスフィール・フォン・アインツベルンと久宇舞弥も入国しているに違いない。

「もしもし？」

「聞こえているか？」

「聞こえているよ。」

頼んでいた人形の制作だが、何処まで進んでいる？」

「事が事だから急いで仕立ててある。」

別料金を頂きたい所だがな」

俺は受話器に安堵のため息を吐き出す。

学園都市に行つてステイーブンによつてCOMPの拡張ができたのは大きかつたので急ぐ必要はないかもしれないが、造魔に等しい人形に補助職悪魔を入れて独立行動が取れるのは大きい。

「その分の請求書は改めて用意してくれ。

支払おう」

「安心しろ。」

こつちの分は金よりも別のもので払つて欲しい」

その時の蒼崎橙子の声は悪魔の囁きに聞こえた。

こうやつて物語はさらに複雑化してゆく。

「学園都市へ入るための許可が欲しい。

正規のやつだ」

隠れて学園都市に入るぐらいはどうぞでもなると思ったが、彼女が入る理由は一つしか無いと気づき、それだつたらたしかに隠れて探るよりも堂々と入つた方が色々やりやすい。

「クローン技術か」

「ご明察。」

日本政府正規の肩書があれば、ある程度は探らせてくれるだろうし、そこから奥は自己責任でするさ」

「ヤタガラスの協力者として申請を出しておく」

「ああ。」

近い内に人形は取りに来てくれ。

では。

良い聖杯戦争を」

そう言つて電話は途切れた。

この言葉はやる夫スレでは見たけど、こうして聞くとは思わなかつたな。

「やる夫。

ちよつといいかしら？」

戻つた俺に叢雲が呆れた声で話しかける。

何だと言おうとする前に、叢雲は手を引つ張つて冷蔵庫の前に。

あつ……

「またか」

「それだけじゃないのよ」

ドアを開けた。

「ヒーホー♪」

「あたいつたらさいきょううね！」

ドアを閉めた。

見なかつた事に……

「待ちなさいよ！」

あれなんとかしなさいよ!!

なんなの!?

何で必ずあれが居るわけ!?

しかも増えているし!!!

わたしのアイス食べられているんですけど!!!!

叢雲の激昂の結果、妖精ジャックフロストと妖精チルノが仲間になった。

あの冷蔵庫、完全に異界化しているな。

世の中はうまくいかない上にさらに厄介事がやってくる

冬木の聖杯戦争が始まりそうなので、天海市攻略を一時中断して先に冬木市に向かうことにする。

約二週間で終わる予定の戦争だから、一月、最悪でも二月見ておけば大丈夫だろう。多分。

「弾薬に燃料は満タンにして頂戴！

舞鶴港までの航海計画の提出を。

乗員の非常招集はできている？」

「ご安心を。

あと8時間で全部終わらせます。

さらば日常、ようこそ非日常の世界へという所ですかね」

出港準備に奔走する叢雲に副長代理の新島三佐が落ち着いて隊員に指示を出している。

このあたり俺の仕事はないので、艦橋を出て俺の仕事に向かう。

「入即出はん。

最低限のものは整えましたえ」

天ヶ崎千草が巫女姿で俺に付きそう。

叢雲のもう一つの体であるこの船体に対する魔術防衛は全部彼女に任せる予定なのだ。

具体的に言うと、金にあかして買いまくったマジックアイテムの発動を彼女に任せる事に。

また、残った悪魔達への指揮なども担当することになっている。

「じゃあ、そのあたりを含めてある程度レベルの低い悪魔を用意しておかないとな」  
COMPの中に12体入るので、数は置けるが指揮できる人間がいらない。

その手の指揮ができてある程度のレベルがある天ヶ崎千草の存在はかなり大きかった。

追加で悪魔を補充という所で、また妙なものを見た。

「あ。

入即出二佐相当官！」

陸上自衛隊服姿の対魔忍達である。

ピシッと敬礼してくれるけど、学徒動員に近い哀愁が漂って色々と痛い。

で、もはやコスプレにしか見えない臍が俺に書類を差し出す。

「これが市ヶ谷からの正規の命令書です。

特殊作戦第四中隊、第四小隊所属、甲河班以下七名。

乗艦許可をお願いします」

「……」

俺の知っている限り、特殊作戦群に第四中隊つてのは存在しないのだが、偽造なのか退魔組織なのか分からない上に書類は本物だった。

こつちの動きに便乗しようというのその姿勢は評価するが、頭対魔忍でないところも的確に動けるのか。

なお、甲河臈は三尉になっていた。

「入即出はん。」

使えるモンは使うべきどす」

天ヶ崎千草のツツコミに俺は軽口を叩く。

「その使えるのが関東の人間だったら？」

「盾にしますな」

おーけーわかった。

好き嫌いとはともかく、その姿勢は評価しよう。

「乗艦を許可する。」



誰か！

陸自からのお客さんだ。

船室を用意してやってくれ!!」

朧と対魔忍達が部屋に連れて行かれるのを見ながら、俺は天ヶ崎千草に後を頼む。

こうなるとやらないといけないことがあるからだ。

「( )は任せた。」

副長代理の指示に従ってくれ」

「はいな。」

で、入即出はんはどちらへ？」

「仲魔集めさ」

今の仲間はこんな感じである。

妖精 ハイピクシー 1 v 1 0

鬼女 文車妖妃 1 v 1 2

妖精 ジャックフロスト 1 v 1 5

女神 ブリジッド 1 v 4 7

幻魔 クー・フリーン 1 v 4 3

妖精 チルノ 1 v 9

で、ホテル業魔殿に行つて悪魔全書を使い、DDS—NETを起動して以下の悪魔を購入し合体する。

魔獣 オルトロス + 女神 ブリジッド || 神獣 ゲンブ  
 女神 ブリジッド + 鬼女 アチエリ + 天使 エンジエル || 魔神 ルー  
 グ

邪龍 バジリスク + 夜魔 ザントマン || 魔王バロール  
 魔神 ルーグ + 魔王バロール || 威霊 ブラックマリア  
 威霊 ブラックマリア + 造魔 || 英雄 ジャンヌ・ダルク

神獣ゲンブは、タル・ンダとラク・カジヤが使えるサポート要員。  
 英雄ジャンヌ・ダルクは完全にメガテン側の姿の回復要員だった。  
 持つてなかったからなあ……ルーラー……

護衛用に大天使イスラフィールを買つてひとまず平崎市を出る。

今度は人形を受け取りに、蒼崎橙子の所に行かねばならないからだ。

彼女は東京にも隠れ家みたいなのを保有しており、そこでの受け取りとなっていた

のだが……運が良かったと言うか悪かったというか……

横浜から東海道線に乗って湘南新宿ラインで歌舞伎町へ。

隠れるなら雑踏の中とはよく言ったもので、その大通りを……なんだあれ。

何でいるのだろうか。赤王ちやま。

水着モードである。

しかも『あかいいなずま』。

色々見えているし。

というか、歓楽街の連中ですら神々しくて近寄って行かないのですが。

俺も見なかったことに……

「待て。サマナー。」

この体に、この美に言うことがあるだろうが！」

捕まった。

しかも思った以上に力が強い。

これかなりレベルが高いぞ。

「もしもしポリスメン。」

露出痴女が一人」

「待たぬか馬鹿者！」

これだけ扇情的な格好で最初の一言がそれとは何事ぞ！

このローマを魅了した体でぬしをとろけさせてやろうか？」

あ。

これ赤王ちやまの皮をかぶった別の悪魔だ。

凄く嫌な予感がする。

「あら。

マスターには私達が居るから駄目よ」

「そうよ。

引っ込んでいなさい」

ステンノと叢雲の口撃に彼女は二人の胸を見て一言。

「慎ましいのと普通の胸が好みなのか？」

「殺っていい？」

逆鱗を踏み抜くそのスタイルと胸は嫌いではない。

完全戦闘態勢の二人を見て、赤王ちやまは呵々と笑う。

「怒るな二神よ。

それで、サマナーをとろけさせているのならば十分ではないか。

余ほどの悪魔となると中々契約できるサマナーがおらぬでな。

契約させてやってもいいぞ！」

ドヤ顔を決めたので、そのまま放置して目的地に。

この手のキャラは放置が一番嫌がるのだ。

「まてまてまて！」

こう見えても魔人だぞ！

凄いいんだぞ！！

偉いんだぞ!!!」

涙目で袖を掴む赤王ちゃま。

皮に悪魔の性格まで引つ張られたか、それともこういう性格だからこの皮になったのか。

「いいじゃない♪」

契約してあげれば♪」

ふいに耳元から囁かれて、俺達は慌ててその場を離れるが、そこには蛇を巻き付けた妖艶な痴女二号が。

……歌舞伎町だしなあ。

「失礼ですが、東京キングダムあたりに巣食っていると思っていました」

「そうなのよ。」

なんかえらく強いシスターが暴れててこつちに避難してきたって訳♪」

歌舞伎町の主になるのも時間の問題だろうな。

夜魔リリスだし。

「おいっ！」

余の事忘れていないか？

強いんだぞ！

役に立つんだぞ！！

契約してほしいんだぞ!!!」

あ。

涙目で懇願しました。

リリスからすればこんな所で赤王ちやまが居ると営業妨害もはなはだしいから俺に

押し付けたと。

ここまで悪質なキャッチセールスは見たこと無い。

ため息をついて赤王ちやまと契約をする事にした。

「うむっ！」

余の名前は淫婦バビロンだ。

これからもよろしくな!!」

「良かったわね。

だからこれ以上ここに居ないでね。

私の餌が減るから」

こんなのがほつき歩いているぐらい、この街の危機は深刻化していると。

出迎えた蒼崎橙子が大淫婦バピロンを見て大爆笑したのは言うまでもない。

用意した人形は問答無用で彼女に奪われ、追加で人形をもう一体発注する事になる。

この物語は監獄戦艦ではありません。念の為

「じゃあ、出港しよう」

「……出撃するわ!」

早朝。

まだ日も出きっていない。

俺の声に叢雲が返事をし、二回目の自衛隊員もはきはきと仕事をする。

今回の目的地は海上自衛隊舞鶴基地で、改造後の訓練航海の名目になっている。

浦賀水道を出て太平洋を北上し、津軽海峡に入って大湊基地にて一泊。

その後日本海に入り、舞鶴基地にというおおよそ5日の航海予定である。

そんな今回の搭乗メンバーはこんな感じ。

船長

入即出やる夫二佐相当官

副長

東雲叢雲三佐相当官

副長補佐



新島義則三佐

副官

恵美ステンノ一尉相当官

従軍神官

天ヶ崎千草海士長相当官

以下

砲雷科、船務科、航海科、機関科、補給科、衛生科の長及び隊員120名。

陸上自衛隊特殊作戦第四中隊第四小队所属甲河班

甲河隴三尉

水城不知火

井河アサギ

八津紫

井川サクラ

心願寺紅

槇島あやめ

## COMP内悪魔

妖精	ハイピクシー	1v10
鬼女	文車妖妃	1v12
妖精	ジャックフロスト	1v15
女神	ブリジッド	1v47
幻魔	クー・フリーン	1v43
妖精	チルノ	1v9
神獣	ゲンブ	1v43
大天使	イスラフィール	1v42
COMP外悪魔		
英雄	ジャンヌ・ダルク	1v54
魔神	大淫婦バビロン	1v69

他の自衛艦と違って圧倒的に多い女性率である。

それを見越した訳ではないが、色々と改造には気を使っていたりする。

武器スペースが空いた場所には居住スペースを用意したり、トイレや浴室に食堂を追加で設置したり。

なお、艦長特権でやったのが隣の部屋を潰してユニットバスを設置した事。

これでやった後に浴室にという事が無くなるのがあるがたい。

「それでは、今回の航海の本当の目的を説明する」

太平洋に出た所で士官室に副長補佐以下幹部自衛官と甲河隴と天ヶ崎千草を呼んで、時計塔と聖堂教会から提出された聖杯戦争の資料を皆に見せる。

神秘の秘匿から極力隠した描写を俺が遠慮なく改ざんして全部バラした形になっているが、この時点で神秘の秘匿も何もこっちは関係がない。

自衛官側の目の色が変わったのは言うまでもない。

「何ですかーこれは!!」

これを政府は許容していると言うのですか!!!」

テーブルに書類を叩きつけた船務長に俺は肩をすくめてぼやく。

「許容していると言うよりも、許容せざるを得ないと云った所かな。」

諸君も感じていると思うが、超常現象による犯罪や事件は増加の一途を辿っていて、その対処には俺や彼らみたいな退魔組織が対処に当たっていた。

それでも圧倒的に手が足りなくなっている。

もはや、彼らの手を借りなければ、この手の事件は防ぎきれないというのが実情だ」

資料を読み終えた新島副長補佐が胡散臭そうな目で俺を見る。

まあ、この戦力を以て聖杯戦争に参加すると勘ぐられても仕方がない訳で。

「それで、艦長はこの戦力を以て、聖杯戦争の監視を任務とするか？」

参加ではなくて？」

「ああ。」

先にばらしておくが、恵美ステンノ一尉相当官が実はこの聖杯戦争のサーヴァントの一騎だ。

とはいえ、こんな艦を得て、こんなサーヴァントまで得た上で聖杯に願うことなんて無いよ」

「余もいるしな」

呼ばれてもないのに堂々と座っている赤王ちゃまは必死の懇願によって、パーカーを羽織っている。

どうも秋葉原にでも寄ったらしいこの赤王ちゃまは、薄い本のHENTAIムダ知識を本当に無駄にインストールしていた。

ある意味日本化した正しい大淫婦バビロンである。

「あの、そちらの方を含めて女性が多いこともあるので、風紀に関して問題が発生しないように対策を」

補給長の意見の対象が己である事をまったく理解できない赤王ちゃまは堂々と己の

存在意義を言い切る。

「安心せい。」

余は皆に等しく股を開くから、遠慮なく使うが良い」

「え？」

やっていいんですか？」

乗つかるなよ。臙。

それを言おうとして、臙のさすが対魔忍という凄惨な設定が炸裂する。

「ご安心を。」

乗艦した全員色事は習得させており、皆開通済みです」

「堂々と言うなし。」

自衛隊の皆様が額に手を当てて途方に暮れているじゃないか」

「とは言っても、魔物に使われて孕まされるぐらいなら、人間のほうが楽なわけで」

そんな思考だから対魔忍は娼婦育成学校とか陰口を叩かれるんだろうに。」

言わないけど。」

「……」

天ヶ崎千草が赤くなっているが、生々し過ぎる話についていけなかったか。

俺がパンと手を叩いて話を戻す。

「とにかく、超常現象が相手である聖杯戦争だが、基本は監視業務であり、同時に民間人に被害が出ないことを第一目的とする。

また、この目的の為に、地元警察や舞鶴警護隊とも協力する事があると思うので、そのつもりで事にあたってもらいたい」

舞鶴基地に叢雲を置いて冬木に参加するか、冬木の港に停泊してそこから介入するか。

俺達だけならまだ身軽でいいのだが、120人もの自衛隊員という重りがあるので無理は厳禁である。

「基本的な活動は俺達でする。

甲河三尉。

君たちはどこまで協力してもらえるかな？」

「後藤一佐より、『入即出二佐相当官の指示に従え』と」

平崎市でできた縁を徹底的に利用するつもりだな。これは。

取り込んでしまいたいのが見え見えであるが、一般人より使えるのが彼女たち対魔忍である。

……頭対魔忍でない限り。

「あ」

「何か？」

「いや。」

その時が来たら頼りにさせてもらおう」

あそこには虫爺様の間桐臓硯が居たんだよな。

対魔忍なんか放つたら、格好の餌になる未来しか見えない。

「艦長。」

また潜水艦。

それと空にも何かいる」

叢雲が俺に告げて、その後スピーカーより報告が入る。

「上空に米軍の偵察機。」

『航海の無事を祈る』と通信が入っています」

同盟国から挨拶されて隠れるという訳にも行かない。

この船の性能を知りたくてこういう手を打ってくる当たりさすが超大国である。

「返事を返しておいてくれ。」

挨拶は任せる」

なお大湊までの航海の間、赤王ちやまや対魔忍に食べられた隊員がいたかどうかにつ

いては機密となった。



## 叢雲航海日誌

「やあつー！」

「遅い!!」

ヘリ甲板にてフー・クーリンと対魔忍の戦いが繰り広げられている。

もちろん訓練なのだが、暇を持って余していたクー・フリーンが出てきて胸を借りるところに。

七人がかりでやっと相手になるかなと言った所。

そんな中で彼とタメを張れる臍の強さが光る。

「どうした!どうした!!」

そんなもん、師匠なら百回は死んでいるぞ!!!」

その師匠、メガテンなら呼べるんだよなあ……。

今度呼んで、実際に話を聞いてみよう。

なお、対魔忍どもは、例の衣装なので見物の自衛隊員が前かがみになったのは言うまでもない。

「『冬木市で連続殺人事件……』ねえ……」

学園都市で手に入れたスマホでニュースをチェック。

アレイスターに履歴とかバレそうだが、この時代に衛星経由でネットにアクセスできるのだからありがたい事この上ない。

雨生龍之介の犯行なんだろうな。

発生時期がずれているのに、そのあたりをあわせてくれる女神様を罵倒しながら考える。

第四次聖杯戦争の参加者は以下の通りだ。

衛宮切嗣・セイバー

言峰綺礼・アサシン

間桐雁夜・バーサーカー

ケイネス・ランサー

雨生龍之介・キャスター

遠坂時臣・アーチャー

ウェイバー・ライダー

空いた枠に誰が入るのか未定だったが、最悪俺がここに入る可能性があった。どうやらそれは無いらしい。

便利な言葉である歴史の修正力というのを考えたいが、あの駄女神に限ってそんな便利な復元機能をつけているとは思えない。

多分何かやらかしているのだ。

悪い方に。

それだけは確信しながら、俺は地元警察に雨生龍之介の指名手配を依頼した。

「ん？」

あんさん、胸大きゆうならはりましたな？」

「はい。」

業魔殿で合体してから大きくなって……」

天ヶ崎千草とピクシーの会話を聞いていた叢雲の耳上の謎機械がピコピコと揺れる。

叢雲は改二になってエロ衣装とともに胸もおっきくなったのだが、現在対魔忍を筆頭に爆乳戦隊が形成されて焦っているのが見え見えである。

そんな彼女に俺はあつさりと言う。

「多分できるぞ。」

豊乳合体」

我ながらろくでもない名前だが、要するに御霊合体である。

叢雲だけでなく、ステンノも俺の方を見る。

まあ、あれだけよその女の乳をガン見していたら気にするか。

反省。

「あら？」

じゃあ、しないの？」

ステンノの声に俺はあつさりと言う。

そのデメリットを。

「してもいいが、それで多分メガテン世界の叢雲とステンノになっちゃうんだよな。

これから行く冬木でステンノが弱体化したり、今乗っている叢雲が弱くなって船が沈む事だってあるかもしれん。

下手に動かせないだよ」

なお、メガテンで合体したらステンノの本質に近い地母神の方になるだろうと思っ  
ている。

叢雲が、艦娘ではなく付喪神になったように。

「じゃあ、仕方ないわね♪」

「他の女に目が行かないぐらい、してあげるから覚悟しなさい♪」

デレ雲とデレンノは朝まで頑張って、俺は寝坊した。

副長補佐以下自衛隊員の目がとても痛かった。

大湊到着。

ここで一日休み、乗員に半舷上陸を許可する。

一方で、最後のチエツクをここでする事に。

聖杯戦争の開始に伴って、他の勢力も動き出したらしい。

聖杯戦争の積極具合 100ほど積極的

時計塔 自動参加

聖堂教会 自動参加

フアントムソサエティ 60

クズノハ 61

学園都市 45

関東魔法協会 100

関西魔法協会 31

十字教 74

メシア教 1

ガイア教

95

自衛隊

83

米軍

15

さすが正義の味方というか、規模がでかいだけあって、関東魔法協会は完全に介入して被害を阻止する腹を固めたらしい。

送り出すのはタカミチ・T・高畑。

最強カードの投入である。

次にノリノリなのがガイア教で『サイバース・コミュニケーション』という会社が冬木に進出していた。

これ中の連中皆ガイア教徒なのだろうなあ。

それに呼応する形で自衛隊も動いていた。

北海道にいた機密の塊である実験中隊が既に本州に移動し、大湊の俺たちの所にも連携の要請が来るぐらい。

どれぐらいの規模の人員が派遣されているのやら。

「思ったんだけど、これあんたの聖杯戦争のレポートを見れる連中よね」

あつ……

叢雲のツツコミに思わず納得してしまった俺。

自衛隊経由でガイア教に情報が流れ、天海市攻略で提携していた関東魔法協会にはこれを理由に一時中断をお願いしている。

クズノハとファントムソサエティーの動きが高いのもそれが理由だろう。

「思ったんだが、中途半端に関心が高い十字教はどんな立ち位置なんだろうな？」

一連の事件で十字教は、介入する意思はあるが実際には監視要員を送るに留めるという中途半端な対応を繰り返していた。

「本拠がローマだから、指示待ちで機会を逃しているとか？」

「だったら、同じローマが本拠な聖堂教会がこうして動ける理由がつかなくなるだろう？」

「待てよ？」

ステンノの意見に返事をしたあとで気づく。

そういうえば、天草式十字凄教という分派が居たな。

彼らには接触しておくか。

そんなこんなで、冬木市の隣にある舞鶴基地に翌日夜半に到着した。

## 第四次聖杯戦争介入 その1

舞鶴港到着の翌日。

早速、聖堂教会の言峰璃正からお電話がやってくる。

「聖杯戦争は聖堂教会及び時計塔の管轄。」

その上でそちらが出向いてきた理由をお教え頂きたい」

「これはご丁寧。」

こちらにも、魔術師同士が殺し合うだけならばまだ我慢はしましょう。

ですが、民間人を巻き込むのはいただけませんかあ」

知っている事のなんと強烈な事か。

飛んで火に入る夏の虫状態の言峰璃正に俺は容赦なく王手を突きつけた。

「マスターの殺人事件を何時まで放置するおつもりか？」

現場に残された召喚陣が明確な証拠ではないですか。

そちらがその気ならば、警察を介入させますよ」

「っ!？」

日本の警察は優秀だ。



雨生龍之介の指名手配要請を受けて彼の実家回りの捜査をしたら実家の蔵で彼の死体がミイラ化して発見され、メディアを賑わせていた。

そして、彼が冬木市内で行った殺人事件は儀式殺人で、明らかに召喚陣が書かれている。

この時点で、言峰璃正は俺に対して何も言う資格が無くなった。

「ですが、神秘の秘匿……」

「神秘の秘匿が人の命より大事とおっしゃるか！

なんなら、全部ばらして聖杯戦争を陳腐化させてぶち壊してもいいんですよ!!

こっちは!!!」

言峰璃正が時計塔の魔術師ならまだ言い逃れができただろうが、あくまで監督役の聖堂教会であった事が彼を詰みに追い込んだ。

初撃で致命傷な彼に、実にわざとらしく救いの手を差し出す。

「もちろん、我々はお役所仕事ですから、上からの命令には逆らえません。

そちらが我々の上と掛け合って、我々を止めるのならそれを尊重しましょう。

ですが、忘れないことですな。

神秘の秘匿にかまけて事件を続発させたら、それを名目に我々が介入する事を。

以上だ！」

がちゃん。

乱暴に電話を切る。

向こうはこれでこっちが激怒している事と、介入を止めるために東京の政府を動かそうとするだろう。

「またえらく芝居がかった怒り方でしたな」

この電話は会議室で参加者に聞かせるようにしていたから、俺の怒り方も芝居がかかるのもしょうがない。

とはいえ、民間人の犠牲を当たり前とするこの方法に怒りが無い訳ではなかった。

「これも駆け引きの一つですからね。」

その前に事件としてこちらが片付けてしまえるならば、向こうは手を出せません。

速川二佐」

陸上自衛隊実験中隊隊長。速川保二佐。

TA部隊を率いて舞鶴基地に到着していた。

もちろん彼は駒でしかなく、その意思是市ヶ谷の後藤一佐や朝霞の石馬雪緒陸将補の影が見える。

向こうからすれば、決起後の米軍介入は必然で、それを押し止めるためにも海自側のコネが欲しいのだろう。

だから、迷うこと無く切り札を持ってきた。

「とはいえ、民間人に被害が出ているのは事実です。

向こうが止められないなら、こちらが止めるまで」

タカミチ・T・高畑がメガネを掛けなおして決意を述べる。

雨生龍之介の殺人が次々と発覚している時点で、彼を捕らえることに一番に賛同してくれたお人好しでもある。

「そうなのよ。

魔術を人殺しに使うのは許せないってのよ」

天草式十字凄教の建宮斎字も賛同するが、妙に語尾が気になる。

まあどうでもいい事だが。

個々に介入して各個撃破なんてアホな事態をさける為の調停会議である。

地元魔術勢力の代表として天ヶ崎千草も参加させているが、関東への怒りより聖杯戦争の理不尽さの方に怒りが向いているらしい。

未来の彼女の京都修学旅行編でのやらかしを知っている俺とすれば、壮大なブーメランを投げているようにしか見えないが言うほど愚かでもない。

「状況は既に始まっています。

「こちらを」

俺は空自に頼んだ航空写真を皆に見せる。

聖杯戦争のマスターの一人である遠坂時臣の屋敷の写真で、庭の一部が既に壊れてい  
た。

まるで爆発でもあったかのように。

「何らかの交戦が発生したものと考えられます。

よって、夜間は彼らの時間です。

移動及び連絡は昼に行うように徹底してください。

魔術師以外の人間は、指示があるまで夜に決して出歩かないように」

「そうなるかと俺達は、ここで待機になるがいいのかい？」

速川二佐の発言に俺は頷いた。

自衛隊は、明確な国家権力の介入を意味するので見せるためにある。

彼らが冬木の地に立てば、聖杯戦争そのものが完全に狂う。

それこそが狙いだ。

「ええ。

それとお願いが。

爆発物処理班を待機させておいてください。

残りの皆様は、異存がなければ、叢雲にて冬木に送ります」

「ああ。了解した」

「こつちも異存がないなのよ」

さてと、準備は整った。

こちららも聖杯戦争に介入するでしょう。

「聖杯に招かれし英霊は、今ここに集うがいい！

なおも顔見せに応じぬような臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものと知れ!!!」

征服王の雄叫びに次々と出てくるサーヴァント達。

その声に英雄王が出て……

「その船から隠れ見ている雑種！

王の御前であるぞ!!

姿を現さぬか!!!」

あ。

英雄王が千里眼持ちだったのを忘れていた。

艦橋にておれはステンノに声をかける。

「気配遮断を解いてくれ。

総員、戦闘準備」

「総員戦闘準備！」

新島副長補佐の声が響き、自衛隊員に緊張感が走る。

隠れてだが、セイバーとランサーのあんな派手な戦闘を見ていたのだから当然である。

とはいえ向こうも突如姿を現した駆逐艦に、マスターの驚く姿が目には浮かぶ。

英霊たちの殺し合いから、一気に現代駆逐艦の登場である。

主砲を彼らの方に向けながら、俺はマイクをとってスピーカー越しに話をする。

「あいにく、こちらは聖杯戦争を監視する側で、王の邪魔にならぬよう隠れていた無礼を詫びる。」

護国機関ヤタガラスの入即出やる夫二佐相当官だ」

話しながらCOMPを操作して、甲板にクー・フリーンとジャンヌ・ダルクを立たせる。

あ。

大淫婦バビロンもあの格好で立っているが、気にしないことにしよう。

「おう！おおう!!!」

鉄の船に一騎当千の英霊たちよ!!

余に降らぬか？

待遇は要相談という事で」

征服王が乗ってくるのでそのまま話を合わせる。

英雄王が機嫌を損ねてこつちを攻撃したらたまらない。

「こちらとしてもその提案は魅力的なものだ。

我々が、姿を現した理由は唯一つ。

今回の聖杯戦争における召喚において、民間人が犠牲になっている。

そのサーヴァントの討伐とマスターの逮捕にある」

征服王が何か言おうとした所でバーサーカーが乱入し、英雄王と交戦。

さらに派手に壊れる倉庫街だが、令呪にて英雄王が撤退するとバーサーカーは今度は

騎士王にその対象を向けようとして……

「すまねえな。

父上に剣を向けるのは俺だ」

見たことある白と赤の鎧がバーサーカーの剣を防ぐ。

あ。

こいつ見たことあるのだが。

「待ってください！

モードレッドさん!!」

「待ち給え!

この体にはなれていないんだ!!」

慌てて駆け出てくる水着姿の盾持ち乙女とロリンチちゃん。

これも困ったことに見た事があるぞ。

「面白いことになってるじゃねえか……どれ、オレたちも行くか!」

「こつちです!」

あっ……」

「何なの、何なのコイツら!」

なんだってわたしばっかりこんな目に遭わなくちやいけないの!」

もうイヤ、来て、助けてよレフ!

いつだって貴方だけが助けてくれたじゃない!」

そして飛び出す盾持ち乙女とドルイドに泣きながら走る銀髪の女性と、忘れるわけがない赤髪の女性マスター。

駄女神め。

特異点だからってまとめて世界線を重ねやがった。



## 第四次聖杯戦争介入 その2

「マシユ？」

「はい！」

あかん。

二人かぶっているので俺は慌てて呼び方を変える。

「水着マシユ？」

「はい！」

先輩!!

先輩の声ですね!!!

スピーカー越しなものにはつきりと見えるワンコみたいな笑顔。

俺の知っているマシユならばこの質問に答えられるはずだ。

「最後の戦いで、どうしても勝てなかった俺は何をした？」

「はい！」

慌ててマタ・ハリさんを育てだしました！

ステンノさんが最後ぶん殴る熱い戦いと共にいつもネタにしました!!」

うん。

俺のマシユだ。

なら話は早い。

「マシユはモーさんの支援！」

ロリンチちゃんはこっちに來て、今迎えをやるから!!」

マイクを切り替えて艦内スピーカーに。

「高畑さん、建宮さんお願いします。

あの杖を持った少女を艦に連れてきてください」

「わかった」

「了解なのよ」

船から飛び出る二人だが水上を歩いているあたりさすが。

もつとも、サーヴァント相手に通用するかはやってみないと分からない所なのだが。

「叢雲。」

クレーンと倉庫上に機銃掃射！」

「艦長！」

新島副長補佐が発砲について意見を述べようとするので、俺は先に遮る。

「この状況ではもうテロで片付けるしか無いだろう？」

このあともっとひどくなるぞ。

この聖杯戦争は」

「追い詰めるわ！逃がしはしない!!」

自動化された25mm三連装機銃の機銃掃射がクレーンや倉庫上部を当てずっぽうに狙う。

これで、アサシンや衛宮切嗣、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが退却してくれるならば御の字である。

本命はモードレッド相手に暴れているバーサーカーなのだから。

「ジャンヌうううううううう!!!

我が聖処女よおおお!!!」

あまりの大音響にその方向を見たら、ふいに現れたキャスターのジル・ド・レエ。海に浮いたと思ったら、こっちに向けて海魔大生産である。

何だと思っただら己の失態を悟る。

こっちにジャンヌ・ダルク（メガテン版）が陣取っているの忘れていた。

「叢雲！

目標変更!!

あの海魔を近寄らせるな!」

「海の底に、消えろっ!」

「ステンノ!

『女神の気まぐれ』頼む!」

「あらあら。

「こういうのでいいのかしら?」

叢雲は25mm三連装機銃だけでなく5inch単装砲までぶっ放して海魔を沈めてゆく。

更に、クー・フリーンやブリジットや赤王ちやまが船に海魔が近寄らないようにと叩き潰してゆく。

まあ、ジャンヌ・ダルクに群がっているから、集中して潰せるのだが。

それでも数が多くて、しかも硬い。

「隔壁を封鎖して化物に備えろ!」

「何やってんだい。

見てらんないねえ。

「マスター」

「っ!？」

ふいに艦橋に聞こえた艶のある声に一同が振り向くと、それは時代錯誤な女海賊が。新島副長補佐が何か言うのを手で押さえて、俺は彼女を見て笑う。

彼女の顔が笑っているのは、海の上で船に乗って、この大戦闘だからに他ならない。「いい男になったじゃないか。」

「マスター」

「言ってなかったが、俺は元々司令なんだよ。」

船は任せる。

「船長」

「任された。」

船つてのはこう動かすもんなんだよ!!」

「ちょ、ちよつと!？」

うろたえた叢雲だが、それでもすぐに彼女の舵に馴染む。そりゃ、世界最高峰の船乗りの一人だから。

ドレイク船長は。

ジル・ド・レエ 1 v 7 0

海魔 1 v 6 7 × 1 9 体

叢雲 1 v 1 2 4 × 0 . 8 4 (型月世界デバフ) × 1 . 2 × 1 . 2 || 1 v 1 4 9

ステンノ 1 v 1 0 0 (型月世界) × 1 . 2 × 1 . 2 || 1 v 1 4 4

クー・フリーン 1 v 4 3 (型月世界デバフ無し) × 1 . 2 || 1 v 5 1

ブリジッド 1 v 4 7 × 0 . 8 4 (型月世界デバフ) × 1 . 2 × 1 . 2 || 1 v 5 6

ゲンブ 1 v 4 3 × 0 . 8 4 (型月世界デバフ) × 1 . 2 × 1 . 2 || 1 v 5 2

大淫婦バビロン 1 v 6 9 × 0 . 8 4 (型月世界デバフ) × 1 . 2 × 1 . 2 || 1 v 8

3

ジャンヌ・ダルク 1 v 5 4 × 0 . 8 4 (型月世界デバフ) × 1 . 2 × 1 . 2 || 1 v

6 5

天ヶ崎千草 1 v 3 4 × 0 . 8 4 × 1 . 2 || 1 v 3 4

ドレイク 1 v 9 0 × 1 . 2 || 1 v 1 0 8

勝敗は数で押す海魔と、近代兵器と悪魔で押す俺達の形となったが、最後にものを言ったのはこちらの女神の一言だった。

「スマイル・オブ・ザ・ステンノ♥」

ジャンヌ・ダルクがラク・カジャとスク・カジャをかけ続け、・クー・フリーンがタ

ル・カジャで攻撃力を上昇させ、ゲンブがタル・ンダをかけて敵攻撃力を低下させ、ブリジットがディアラハンで悪魔を回復させる。

天ヶ崎千草は護符を使いながら叢雲の艦内に海魔が入らないように結界を張り中を守る。

これらのバフとデバフを前提に叢雲がドレイク船長の華麗な舵の元で近代兵器の射撃で海魔どもを貫通すれば、大淫婦バピロンは邪神の蛮声とマハジオダインの全体攻撃で叩き潰してゆく。

本来ならば指揮に優れていたジル・ド・レエが指揮をとっていれば違った結果になったかも知れない。

だが、その彼がジャンヌ・ダルクに目がくらみ、ステンノの宝具で誘惑された結果、この優れた海魔達は駆逐艦という鋼の船に侵入する事ができず、ついに掃討され尽くす事となった。

「おのれおのれおのれえ………神よ。

まだジャンヌの魂を弄ぶのですか！

ジャンヌよ。

愛しき聖処女よ。

貴方に真の魂の開放を誓いますぞ………」

「違うのです！

ジル！待って！！」

ジャンヌの制止を聞かず、そう捨て台詞を吐いてキャスターは去ってゆく。

この間に港の方も、決着が着く。

というより、バーサーカーをモードレッドとマシユ二人とキャスター・クー・フリーンが止めた結果、バーサーカーが撤退し残りは観戦モードに移行したのだ。

そんな戦闘が終わって叢雲が接岸すると征服王が待ちかねたように近づいてゆく。

「すばらしいぞー！

これが戦よ！！

これが戦いぞ！！！！」

「黙れ！黙れ！！

勝手に近寄るなよおお！！！！」

涙目のマスターが引つ張り戻そうとしているけど戻せるわけもなく。

こっちはこっちで俺以外はこの大男征服王をどうすればいいのか考えあぐねているし。

なお、モーさんは父上相手にちら見をするけど、俺に手を振っている。

「二王に仕えない」って言っていたのは本当だったんだな。



ランサーはいつの間にか撤退しており、セイバーとアイリスフィールがこちらを睨みつけている。

あ。

オルガマリー所長が座り込んで呆然としてやがる。

「上陸準備。」

対魔忍には働いてもらうぞ」

「ええ。」

待ちかねましたとも。

それで何を？」

無線越しに隴が返事をする。

このために対魔忍を使わなかったのだ。

「この倉庫街の何処かにバーサーカーのマスターが死にかけている。

見つけたら捕獲しろ。」

やばくなったら応援を出す」

「了解しました」

「艦は新島副長補佐に任せます。」

事情説明は後で。

去るものは追わなくて結構です」

「分かりましたが、何をなさるので？」

これで終わる夜ではない。

というか、ここからが本番である。

衛宮切嗣という男は、正義の味方であろうとしたテロリストだ。

だからこそ、こんな無茶が出来る。

「速川二佐に連絡を。」

冬木ハイアットホテルの爆弾テロを未然に阻止します」

## 第四次聖杯戦争介入 その3

クーデターに必要なのは何か？

一つは最低限の兵力。

これは鎮圧されない戦力である事が望ましい。

そしてその最低限の戦力でないといけない理由。

速さである。

「こちら特殊作戦群甲河班。

倉庫街にて死にかけてた青年を発見。

回収する」

「了解した。

そいつ中に虫が居るから、注意するように。

点滴と共に睡眠薬を打って眠らせておけ。

彼の監視と拘束は、必ず悪魔と共に行うこと」

間桐雁夜が目覚めて艦内がバイオハザードなんて事態は避けたいので、回収した対魔

忍たちに注意を促してゆく。

今の俺は出迎えのパトカーの中で、冬木ハイアットホテルに大急ぎで向かっている所なのだ。

「既に警察の爆弾処理班が爆発物を発見。

広範囲に避難勧告を出して処理にあたっています。

まもなく自衛隊の爆弾処理班も到着する予定です」

「爆弾の構造は携帯電話を使ったもので、既に電話会社に連絡し周囲の基地局を止めて電波が入らないようにしています。

更に、二階以降の複数階にも爆発物が仕掛けられており……」

「警察発表にて、テロ組織に爆弾テロを公表。

湾岸地区の爆発は、テロ組織とそれを阻止しようとした海上自衛隊の交戦によるものと発表……」

ホテルの爆弾が本命として周辺に避難勧告……」

「上層階にはトラップが仕掛けられているとの報告有り。

陸自の爆弾処理班が到着するまで手を出すな……」

無線機からの報告で入る情報が、聖堂教会と時計塔では状況をコントロールできない事を如実に物語っていた。

上が腐つても影で隠密に行われる魔術儀式だからこそ許されたのであって、テロ

同然にビルを破壊するなんて許容できるほどのこの国の人間は甘くない。  
「先輩。」

お会いできて嬉しいです。

ステンノさんはお久しぶりですが、もう片方の方は？」

「特型駆逐艦、5番艦の叢雲よ。」

え、知らないって？

全く、ありえないわね。

南方作戦や、古鷹の救援、数々の作戦に参加した名艦の私を知らないって、あんた、もぐりでしょ！」

さすがに水着はまずいので、マシユには霊基再臨第三段階の姿になってもらっている。

もうひとりのマシユとの区別は腰布で、実はこっちの方がエロ：げふんげふん。運転している警官の視線がバックミラー越しにとっても厳しい。

視線を合わせないように外を……

うん。

霊体化して楽しそうについてきているモーさんが手を振っている。

こんだけ派手に暴れられるのだから実に楽しそうだ。

で、後ろのパトカーなりタクシーなりに乗り込んでいるが、カルデアの面々とロリンチちゃん。

彼らにとっては今頃情報収集に勤しんでいるだろう。

知って頭を抱えているかも知れないが。

なお、完全に放置されたセイバー陣営はそのまま立ち去った。

テロリストの共犯として捕まえてもいいのだが、あそこで更に一戦するのは嫌だったのと、露骨にセイバー陣営を潰すのを嫌がった征服王の不満そうな顔を見て見逃したというのが本音である。

その征服王はまだまだシナリオが続いているので霊体化してついてくるらしい。

おかげで、彼のマスターは手配したタクシーの中でまだ気を失っている。

かわいそうに。

「到着しました」

「ありがとう。」

今夜は大変な夜になるよ」

「でしようね」

海上自衛隊の制服姿で俺達はパトカーを降り、爆発物解除の手配をしている本部に入ると確保していた女性と面会する。

なお、マシユの盾はパトカーの後ろにくくりつけてきた。

「ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ女史ですね？」

「それを知って私を拘束する事。

覚悟はできているのでしょうか？」

堂々たる女帝ぶりだが、こつちはここで喧嘩をしたい訳ではない。

状況から衛宮切嗣やケイネス教授が隠れてここに来なければならぬのに対して、こちらはパトカーという緊急車両で堂々とやってこれた速さの勝利である。

「むしろこちらがお聞きしたい。

貴方はこの国の主権をどう考えているのかとね。

分かっていますか？

「貴方を殺すためだけにこのホテルを敵は標的にしたのですよ」

「そこまでにして頂きたい」

声は落ち着いたふりをしているが、吐く息と額の汗が隠しきれないケイネス教授。

事を荒立てないように必死に警備の警官や避難者たちを避けるように魔術を行使してきたのだろう。

婚約者が拘束されたので奪還をと考えているのだろうが、彼ならば気づいているはずだ。

隣のステンノとマシユがサーヴァントである上に、霊体化したモードレッドがうきうきしてこつちを見ている事に。

「こちらからも尋ねさせてもらう。」

聖杯戦争のマスターよ。

これは君たちの仕業か？」

「だったらこんな事をしませんよ。」

護国機関ヤタガラス所属。

入即出やる夫二佐相当官と申します。

今回の聖杯戦争において、監視を名目にこちらに来ております。

一応確認しますが、この爆弾、そちらが自ら仕掛けたのではないでしょうね？」

「何をバカなことを！」

互いに秘術を尽くしての決闘が聖杯戦争だろうに。

こんな神秘を侮辱するような事を誰が行うというか!!!」

激高するケイネスに俺は頭を下げる。

とはいえ、彼は状況が圧倒的に不利なのは理解している。

ここで俺を殺して逃亡するにはリスクが高いし、彼ご自慢の魔術工房はこのままではビルごと爆破の危機にある。



手出しができないからこそ、彼は怒ることで状況を改善しようとしていた。こちらの思惑のままに。

「失礼しました。」

こちらが求めるのは今夜だけの一時休戦です。

あの爆弾を解除しないと、貴方も安心して眠れないでしょう。

そのためにも、そちらの魔術工房を一旦解除して頂きたい」

「……承知した」

「こちらはお詫びの品です。」

今のあなた達には必要でしょうからね」

そう言って、俺はケイネスに菓子箱を手渡す。

中に入っているのはデイスチャーム。

魅了解除アイテムである。

ケイネスの目がじろりと俺を睨むがそれ以上は何も言わずに彼はその菓子箱を受け取った。

「せっかくだから、もう一つ詫びを入れましょう」

「ケイネス先生。」

……申し訳ありませんでした」

十数分後。

双方のサーヴァント立ち会いのもとで、ケイネスに頭を下げるウエイバー・ベルベツトの姿が。

目が覚めた彼に事情を聞き、当たり前的事である聖遺物の強奪に対する謝罪である。余興ではあるが、ケイネスのプライドを刺激するのに十分だし、征服王の侮辱で腹が立っていた後でマスターが頭を下げるのだから、気分が良くなる訳がない。

かといって許すわけでもないが。

「ウエイバーくん。

この聖杯戦争では未だ敵同士だ。

その発言を私は取り消すつもりはない」

ピクリと震えるウエイバーだが、だからこそケイネスはここで彼を殺さない。

彼のプライドが元弟子であるウエイバーの謝罪を受け入れざるを得ないからだ。

そして、既にセイバーモードレッドとアサシンステンノを抱えるイレギュラー陣営が、盤上で暴れまくっている。

話がわかる、または脅して指揮下における可能性があるウエイバーとの関係改善という打算が、彼に寛容を強制させる。

「とはいえ、君の行いは恥ずべきものだが、このようにビルを爆破しようとする外道ではない。

君にはそういう魔術師にはなつてほしくないと思つている。

無事に生き残り給え。

罰は与えるが、名誉回復の機会も与えよう」

ウェイバーの謝罪の後、当たり前前のようについてくるイスカandalが俺に声をかける。

「なあ。

あの謝罪必要だったのか？」

「征服王。

あんたは過去の人だが、あの二人は人間で未来がある。

元々は師匠と弟子の関係だ。

要するに、あんたのマスターはあの師匠に認められたかつたんだよ。

本人は分かつていないふりをしているがな」

「なるほどな。

余もあつたな。

アリストテレス先生に認められたくて」

当たり前前のように出てくる歴史上の偉人の名前に俺は苦笑し、彼の肩を俺は軽く叩く。

そんな自分が少し嬉しいのを自覚しながら。

「あの若造死なせるなよ」

「当たり前だ。」

余を誰だと思っている」

「やあ。マスター。」

この姿でははじめましてだな。

それでも、面影で分かったかな？」

そんなやり取りをしていたら、ホテルから出てきたロリンチちゃんに俺は笑いかけ  
る。

全てはこの企みのためでもあった。

「あのホテルにあった魔術工房は全部見させてもらったよ。」

複製は可能だ。

特に君が欲しがっていた魔力炉についてもね」

さすが万能の人。

俺の企みに気づいて征服王が笑い出す。

「貴様もやるではないか！」

ああいう事をする理由の真の狙いは、彼らの陣地偵察だったか!!」

「もちろん、口止め条件として彼女の見てきた工房の情報を提供するがいかかな？」

征服王は実にいい笑顔であつさりと俺の企みに乗った。

そして、ついに冬木ハイアットホテルは爆破されなかつた。

## 第四次聖杯戦争介入 その4

「さてと、移動中だが文句は言わないでくれよ。

護国機関ヤタガラス所属の入即出やる夫二佐相当官だ」

「先輩。

カルデアのマスターじゃなかったんですか!？」

元水着マシユがびっくりした声をあげ、それにオルガマリー所長がびっくりする。彼女からすればマシユが二人居る時点で大混乱なのだろう。

「ちよつと待って!」

あなた何でカルデアの事を知っているのよ!？」

なお、ここは陸自の用意したトラックの中。

参加者はカルデアの面々にまだついてきているライダー陣営である。征服王の図体のせいで、結構狭い。

「まあ、色々あつてな。

そのあたりを話すと長くなるんだが……」

「その長くなるのをこちらとしては知りたいんだけどね。」

やあ。私。ずいぶんと小さくなったものだね」

「これはこれで中々いい体だよ。」

何しろ君が作ったのだからね。私」

カルデアからの通信が開き、ダ・ヴィンチちゃんが姿を現す。

一を聞いて十を知る天才ダ・ヴィンチちゃんとロリンチちゃんの挨拶だが、互いに目は笑っていない。

「まあ、そのあたりはおいおい説明するとして、俺達はこのままキャスター討伐に向かう。」

元々、それが理由でこの冬木にやってきたんだよ」

そんな訳で用意していた雨生龍之介の情報を見せる。

彼の殺人経歴と現在十数人の子供が冬木市およびその周辺都市で行方不明である事を知ると皆の顔が一様に強ばる。

「で、そんな奴がなんの因果か知らないがキャスターを召喚し聖杯戦争で暴れている。」

こいつを討伐するために、俺達はやってきたという訳だ」

「何だ。」

聖杯戦争には参加せんのか？

それだけ優れたサーヴァントを連れていてというのに？」

「あいにく、これだけのものを得てなお聖杯に望む願いなんて無いよ」

叢雲とステンノを抱きしめて俺は言い放つ。

かつこいい事を言っているつもりだが、はたから見ればクスズでしかない。

「というか、征服王なんでついてきた？」

「ここからはこつちの都合だから来なくても良かったのに」

「たわけ。」

「ここまで戦を見せておいて絡めぬとはもつたいたいではないか。

それにこの外道を討伐するのは坊主に戦を教える良い機会だ」

ついでとばかりに当たり前のようについて来ている野良サーヴァント状態のモード

レッドにも確認をとる。

「野良だから改めてマスター探してもいいんだぞ」

「二王に仕えないって言ったろ。」

それに、お前相手だどこつちも楽しく戦えるからな」

知ってた。

モードレッドとドレイクは俺のサーヴァントだからこそこつちに出てきたのだろう。

だが、カルデアのバックアップ無くして、この二騎のサーヴァントと契約なんてすれ

ば、干からびかねない。



ロリンチちゃんに頼んだ、ケイネスの魔力炉はそのためにも必要だったのだ。そんなロリンチちゃんが爆弾発言をかます。

「で、マスター。」

君は何処まで知っているのかな？」

「知らないけど、君が出てくるといふ事は知っていたよ」

ここでネタバラシをしよう。

遅れてF G Oをやり始めた俺は、一部攻略を終えた所で満足し、1・5部をちびちびとクリアしていた所で止まっていた。

つまり、第二部の概要はなんとなく耳に入っていたけど、そこから先を知らない。

だから、1・5部の水着マシユが出てくるのは予想はしていたが、第二部のロリンチちゃんが出てきたのは完全に想定外だった。

あの魔力炉関連も実はここに居るカルデアの面子に何とかしてもらおう予定だったし。

「なるほど。」

つまり君は2018年の我々を知らないのだな？」

「ああ。我々が知っているのは2017年だ」

ぺたん。

その言葉に荷台に座り込んだのがオルガマリー所長だ。

目に涙を浮かべている。

「良かった……」

私達は間違っていないかったのね。

良かった……」

アイコンタクトで互いに確認する。

あの人に真実を言うのはやめておこうと。

成仏するならまだしも、恨まれて怨霊化でもしたら目も当てられない。

そのまま俺は視線をカルデアの面々に向ける。

「そっちもだ。

無理して戦う事もない。

このままここに残ってくれて構わない」

「結構です。

私達も戦います。

こんな非道を見過ごすことなんてできない！」

ああ。

藤丸立香はこんなやつだった。

こんなやつだからこそ、人類最後のマスターとして人類を救ったのだ。俺はCOMPを操作してクー・フリーンを召喚する。

「呼んだか？」

「サマナー」

「つて、俺じゃねえか!？」

「おう。」

「そっちはドルイドか？」

「同キャラ同士の挨拶もそこそこにさせて、俺はクー・フリーんに命じた。」

「せっかくのよしみだから、こいつらの護衛をしてやってくれ。」

「着いたぞ」

未遠川の水道地下に作られたキャスターの工房。

もちろん探知されているだろうが、この数が力攻めを可能にした。

「じゃあ、任せた。」

「サポートをつける。」

「マシユは俺の護衛。」

「多分、見ている連中がいるから、そいつらから俺を守ってくれ」

「おう！」

ぶっ潰してやるぜ！」

「はい！」

先輩!!」

「サマナーに感謝を。」

ジルを救うチャンスを私に与えてくれたことに」

モードレッドにジャンヌ・ダルクをくつつけて送り出す。

ジャンヌという最高の餌がある以上、消耗しているのにキャスターは出てこざるを得ない。

マシユが警戒している中、残っている連中に一言付け加えておく。

「中に入るのはいいがあまりおすすめしないぞ。」

猟奇殺人の現場になつてゐるからな」

それでも力強く藤丸立香は前に進む。

それを彼女のマシユが追いかけて、オルガマリーが慌てて続き、二人のクー・フリーンが警戒して中に入ってゆく。

そして、そんな彼女を見て覚悟を決めたウェイバーが入り、征服王がその後続いた。「さてと、使い魔で見ている諸君。

我々はキャスターの討伐を以て今回の介入を一時中断する事を宣言しよう。

また何かあるようだったら、舞鶴基地の自衛隊に連絡を入れ……っ!!」  
「先輩っ！」

甲高い音とともにマシユが盾を構えていたがそのまま俺に近寄る。

マシユが盾で一つ弾いたみたいだが、もうひとりの狙撃手から撃たれたらしい。

たしかにこんな狙撃チャンスを逃さないか。

それが、誘いの罠という事に気づかずに。

「大丈夫だよ」

ポケットからあるものを取り出す。

禁凝符の束が灰になって散った。

物理反射の札は衛宮切嗣対策で大量に持っていたのが役に立った。

さて、彼は手傷を受けているといいのだが。

「うっ……」

「おえ……」

キャスターとそのマスター討伐は消耗していた所を数で押し込まれて、見せ場もなく終わった。

十数人の子供を救い出し、犠牲者をキャスタークー・フリーンの炎で焼いて成仏させ

る間、藤丸立香とウェイバーの吐き気が止まることは無かった。

## 第四次聖杯戦争介入 その5

冬木市にて爆弾テロ未遂事件が発生した翌日。

やっと寝ようとしていた俺達を天ヶ崎千草が起こしに来る。

「倉庫街で倒れていた奴が目を覚ましましたえ」

仕方ないので、着替えて間桐雁夜の元に。

遅くまで起きていた理由は、間桐雁夜の体には蟲が巣食っていたので、まずはそれを取り出していたからだ。

メガテンちつくに状態を確認した結果、何が何だか分からない状況なので、一番簡単な解決方法を取ることにした。

「一旦彼を仮死状態にしてそれから蘇生。

その間に出てきた蟲を駆除して再度治療を施します」

ということまで空いている部屋に移して、ムドの効果のあるアイテム点穴針で間桐雁夜を仮死状態にする。

その途端出てくるわ出てくるわの蟲の数々。

なお、蟲は羽虫だけでなくエロゲ仕様の卑猥なやつまであって、某赤王ちやまの目が

ランランとしていたので駆除から追い出すことに。

そこから発生する魔力不足については、マグネタイトを間桐雁夜本人に渡すことで一時的にごまかすことにした。

「マグネタイトと呼ばれるものと魔力が同一であるか心配なのだろうか？」

だつたら簡単さ。

その供給源である間桐雁夜にマグネタイトを渡す事で彼を擬似魔力交換炉にしたて上げればいい」

こういう事を言えるロリンチちゃんマジ天才。

そして、ロリンチちゃんが逃げ出した虚数潜航艇シャドウ・ボーダーもちゃんと回収してきており、現在叢雲のヘリ甲板に積んである。

派手に叢雲が機銃掃射したけど、港のクレーン機能が生きていた事に感謝。

もちろん、オルガマリー所長が見てわめき出したのは言うまでもない。

現在彼女は自衛隊所属の医師によって精神安定のためのカウンセリング中である。

そんなロリンチちゃんは、現在徹夜で叢雲の機関室にこもって魔力炉の製造と設置をやっていたり。

これで令呪がF G O式に一日に一つ回復するし、電力を魔力に変換し魔力供給をサポートするからモードレッドやドレイクと正規契約できるって訳だ。



話がそれた。

「ハイハイはっ。」

まだ頭が混乱しているらしい間桐雁夜に俺は優しく声をかける。

なお、暴れないように拘束具をつけさせている。

「舞鶴基地の病院の一室だ。」

君は倉庫街で倒れていたんだ」

「……聖杯戦争は……行かないと……」

言うと思ったので、俺は用意していた台詞を言う。

対バーサーカー対策に、モードレッドが霊体化して控えていたり。

「その聖杯戦争だが、大変なことになっている」

病室のTVをつけてやると、国営放送のキャスターがずっと続く臨時ニュースを読み

上げていた。

「……冬木市を襲った大規模テロについての続報です。」

自衛隊舞鶴基地の広報官の発表によると、冬木ハイアットホテルの爆弾は完全に解

除。

港に潜伏していたテロ組織とたまたま停泊していた護衛艦が交戦・戦闘に入ったとの

事。

テログループは逃走し、現在冬木市内では陸上自衛隊第3師団第7普通科連隊の第1・第5普通科中隊が京都府警と共に警護を行っています……」

「なんだこれは？」

「あれだけ派手に暴れて、何だこれは無いだろう？」

ナース服のジャンヌ・ダルクがメ・ディアラマをかけながら状態異常回復の鎮心符を張る。

バーサーカーの狂化の影響下、精神が不安定になり、この札が面白いように消える消える。

なお、間桐雁夜の仮死をサマリカームで治したのが彼女である。

「見ての通り、街には警察と自衛隊がいっぱい。

聖杯戦争どころではないよ」

「聖杯戦争はどうなるんだ？」

「状況次第だろうが、続けられるだろうな。

君も知っているだろう？」

彼らの根源への執着心を」

「ならば……行かないとっ！」

やっとならば……拘束具に気づく間桐雁夜。

また一枚鎮心符が破れて灰になった。

「まあ、待ち給え。」

間桐雁夜くん。

取引をしようじゃないか」

「……何で俺の名前を知っているんだ？」

「むしろ、この制服姿で察してほしいんだけどね。」

海上自衛隊入即出やる夫二佐相当官だ。

護国組織ヤタガラスが本職なのだが、君にはこっちの方が理解しやすいだろう」

その上で、彼に分かりやすいように、彼の理解できる現実を提示してやった。

「国家は、聖杯戦争をテロと断定した。」

少なくとも、これ以上被害が出るようならば、国家が介入する。

あのTVの映像はそういう意味と捉えてもらいたい」

「……ははっ！」

ざまーみろ!! 遠坂時臣め!!

何が魔術だ!!! 聖杯戦争だ!!!」

涙を流してひとしきり笑う間桐雁夜。

その間にも鎮心符がどんどん灰になってゆく。

「おちついたかね？」

「ああ。」

頼みがある」

「間桐桜くんの事だろう。」

「こちらの取引の条件がそれだ」

「全部知っているって訳だ」

「国家を馬鹿にしてはいけない。」

「いい教訓だろう？」

俺は笑うが間桐雁夜は警戒する。

してくれないと困るのでやつと話が進められる。

「彼女を助けるためには法が邪魔をする。」

遠坂家から間桐家への養子は正規の手続きを経ていたからね。

「そのために、一芝居打つ必要があるんだ」

「何をすればいい？」

警戒したままの間桐雁夜に俺はあっさりとその手の内を明かす。

シンプルだからこそ、間桐臓硯の手が出せない一手を。

「簡単な事だ。」

『昼間』に『間桐家』でバーサーカーを暴れさせればいい。

その際に令呪を使い切つて、バーサーカーが消滅してくれるとなおいいな。

テロの犯人が分からなくなるからね」

「……あ……ああ!!」

感づいたらしい間桐雁夜が叫び声をあげる。

フリーのルポライターなんてやっていたから、表の感覚が残っていたのだろう。

国家を敵に回すという事が、どれだけ恐ろしい事かを。

「間桐家のテロ事件の捜査という形で自衛隊を派遣して、桜ちゃんを保護する。

感づいていると思うが、こちらでは体内にいる蟲の除去とかもできるからね。

その上でカウンセリングをして、彼女自身から家庭内暴力と虐待の証拠が出れば、雁夜くん。

君の願いは叶う」

「……ありがとうございます……ありがとうございます……さくら……」

静かに泣く彼と看護するジャンヌ・ダルクを置いて、俺は部屋を出る。

そして虚空に向けてつぶやいた。

「わざわざ使い魔を残して今の光景を見せてあげたんだ。

何か言いたい事があるのなら、その電話にどうぞ。

番号は……」

ずっとアサシンがつけていたのは知っていたので、この光景を見せてやった。かかってくる電話を取ると、予想していた声がきこえる。

「どういふつもりかね？」

「こいいうつもりですよ。」

良かった。

電話が使えないかと心配していましたよ。

遠坂時臣さん」

初っ端から嫌味をぶつけてやる。

この時点で彼は多分うっかりに気づいていない。

敗退したはずのアサシンの報告で使い魔を放って電話に出たら、アサシンとアーチャーであるはずの彼が繋がっているという事が。

まあ、知っているからいいのだが。

「君は聖杯戦争をなんだと考えているのかね！」

「私はどちらかといえば間桐雁夜さんよりの人間でしてね。」

それで察していただけで嬉しいですなあ」

相手の顔から優雅さが剥がれるのが分かる。

それでも優雅に取り繕おうとしているのが滑稽だった。

「貴様も魔道の尊さを理解できぬ者だったか」

「そんなものが無くても、こうやって科学は離れた俺達との会話を可能にしてくれる。所詮その程度のものなんですよ。

魔導なんてものは」

「……」

挑発は怒ったほうが負けである。

『どんな時でも余裕を持って優雅たれ』をモットーとしている彼からすれば、これが安い挑発であるのは分かっているだろう。

黙っている事で、彼が必死に考えを取り繕っているのが手に取るように分かる。

あの倉庫街の決戦で、謎のイレギュラーサーヴァント数騎を俺が抱え込んでいるのが分かっているはずだ。

その上で俺の討伐に英雄王を差し向けたら、セイバーやランサー陣営に横殴りをされる。

しかも、俺が自衛隊に表向き所属していることが、彼の自制心を働かせていた。

当然舞鶴基地への攻撃は完全なるテロ行為に当たる。

外面が良かったために、彼は衛宮切嗣みたいに成りきれない。

その彼も銃の反射で負傷しているはずだが、多分諦めないのだろうか。

「なるほど。」

そちらの家訓は存じあげております。

大変ですなあ。

怒るにも理由が要るとは」

「黙れ」

「言わせていただきますでしょう。」

魔術師。

国を舐めるな。

少なくとも、上はどうか知らないが、この国の現場は根源や聖杯なんてものの為に、ビ  
ルを爆破したり子供を生贄にする事を許容しない」

「……」

結局の所、遠坂時臣も言峰璃正と同じく電話をかけた時点で詰んでいた。

情報を制する者は戦場を制するが、知りすぎれば情報に溺れる。

俺にも言えることである。

注意しておかねば。

「しばらくは、テロ警戒の為に自衛隊が駐屯します。」



もちろん、そちらの庭の爆発についても警察がお話を聞くことになるでしょう。おとなしく屋敷で震えている事ですな。

一般 人 として。

では」

がちゃん。

その後間桐雁夜の病室から響き渡る笑い声。

今の会話、当然のように聞かせてあげていたのである。

これで彼が取引に快くのつてくれるだろう。

「ひとでなし」

横で聞いていた叢雲がぼつりと言い、

「あら、マスターのそういう所、私は好きよ」

同じく横で聞いていたステンノが俺に抱きついた。

そのまま叢雲を抱き寄せて、廊下向こうから覗いていたアサシンに言う。

「この後俺達は寝るだけだから面白いところなんて何も無いぞ。

それとも、このままついてきて人の情事も遠坂時臣に報告するかね？」

俺の皮肉にアサシンはそのまま消え失せた。

## Intermission その1

衛宮切嗣の体の回復には時間がかかりそうだった。

未遠川にて謎のマスターを狙撃した彼は銃が暴発し、両腕に大怪我を負ってしまったからである。

アインツベルンの屋敷内に撤退した彼と久宇舞弥は、アヴァロンにて治療を行わざるを得なかった。

そんな彼が目を開けた時、彼の目に入ったのは愛する妻の顔だった。

「ああ。

キリツグ。

良かった。

目が覚めたのね」

抱きつくアリスファイルを気にせず、彼は居るであろう久宇舞弥に声をかける。

「状況は？」

「考えうる限り最悪です。

京都府警及び福井県警の機動隊、自衛隊第3師団第7普通科連隊の第1・第5普通科

中隊が冬木市全域の警備に当たっています。

夜間外出禁止令が発令され、街は実質的な戒厳令下に置かれています」

まだ両腕が動かない衛宮切嗣の目に久宇舞弥は写真を見せてゆく。

明確な武力。

その象徴が威嚇である事を物々しく語っていた。

「戦車を持ち込まないかわりに、やっかいなものを持ち込んだものだ」

鋼の巨人。

TAことタクティカルアーマーの存在。

さすがに舞鶴基地からは出していないが、その存在を誇らしげに見せつけていた。

現代の戦場を知っているからこそ、衛宮切嗣は状況がまずいことを嫌でも理解する。

現代戦において、ゲリラ側が正規軍に正面切つて勝つ可能性は限りなく低い。

「未遠川の狙撃についても警察は調べだしています。

いずれ迎えられるのは時間の問題かと」

狙撃失敗後、負傷した衛宮切嗣を連れて撤退した為に、現場の掃除ができなかったの

が大失態だった。

特に銃の暴発で広範囲に飛び散った部品と、負傷した衛宮切嗣の血は決定的な証拠に

なるだろう。

「あの倉庫街に現れたサーヴァントについては？」

「それだったら私の方から報告しよう。」

あの時、バーサーカーを抑えていたサーヴァントは私の息子のモードレッドだ」

堂々と『父上』発言しているからセイバーが気づかない方がおかしい。

そして、セイバーの直感は更に隠していたサーヴァントの存在を感じ取っていた。

「それと、あの鉄の船の中にサーヴァントが更に一体か二体。

外に出ているやつとは別の居る可能性が」

「嘘!？」

この聖杯戦争はどうなっているというの？」

アイリスフィールの悲鳴も今の衛宮切嗣には遠く聞こえる。

三半規管もダメージを負ったらしい。

セイバーが衛宮切嗣の傷の見立てを告げる。

「おそらく回復するのに二日。」

戦闘が行えるまでには三日かかるでしょう」

「そんなに待てない。」

「今すぐにも動かないと」

「駄目よ！キリツグ!!」

起き上がろうとする衛宮切嗣をアイリスフィールが必死に止める。

彼の体が戦闘できる体でないことは彼が一番わかっている。

それ以上に正規軍が正規に法を行使して展開している状況で、三日が経過する事の意味を衛宮切嗣は嫌でも理解していた。

キャスターに己の陣地に籠もられる方がまだましな状況。

それなのに彼はアイリスフィールの魔術でまた眠らされる。

(駄目だ……奴に、奴らに三日の時間を与えるなんて……)

「安心してください。」

マスター。

マスターとアイリスフィールは私が守ります」

まったく安心できないセイバーの言葉を聞きながら、衛宮切嗣は意識を失った。

「はい。」

はい……ありがとうございます。

では」

冬木教会の言峰璃正は必死に状況改善のための手を打っていた。

聖堂教会及び時計塔の政治力はこの時点では深く根を張っているからだ。

それでも、発生したテロ未遂と港の戦闘が彼らの政治力行使を難しくしていた。

「そちらの言い分も分かる。」

だが、我々は魔術師同士が殺し合いをする事を黙認するとは言ったが、都市のど真ん中のホテルを爆破する事まで黙認した覚えは無いのだけどね」

連絡をとった政治家の嫌味はまったくもって正しい。

言峰璃正にとつて致命的だったのは、爆弾テロ未遂の為に自衛隊が展開した事でそれが既成事実化されてしまった事である。

現に展開したものを圧力で撤回するのは当然現場の自衛隊が泥を被ることを意味する。

自衛隊の一部に不穏な動きがあると噂されている現状で、そのような命令を出すのは政治家にも躊躇われたのだ。

彼らの保身と権益が時計塔と聖堂教会の買収という形で合意に達した結果はこのようになつていた。

「爆弾テロの犯人が逮捕された時点で自衛隊及び機動隊を撤退させる」

犯人を用意してそれを血祭りにあげる事で、自衛隊撤退の言質をもらったに過ぎなかつたのである。

アインツベルンの莫大な金銭供与による買収にもかかわらず、ここまでしかできな

かったというか、ここまで押し込まれていた戦況をなんとかひっくり返す算段がついたというべきか。

「父上」

息子である言峰綺礼の声に言峰璃正は振り向く。

笑顔を作つてその不安を払拭しようとしたが、状況は自衛隊のマスターに更に進められていた。

「アサシンからの報告です。」

近く確保したバーサーカーを昼間に間桐家へ特攻させて暴れさせるとの事。

その件で間桐家に捜査の手が入るでしょう」

言峰璃正は頭を抱えそうになるのをこらえるが、言峰綺礼は更に話を続ける。

「その際に令呪を全て消費する事をバーサーカーのマスターは承知しました。」

これで、キャスターに続いてバーサーカーが脱落する事になります」

後始末を考えなければ、二騎目が勝手に自滅するだけの事。

アーチャーの制御に難がある遠坂時臣を勝たせたい言峰璃正にとってはこの展開は悪くはないものである。

間桐家で起こるテロ第二幕を見なければ。

「時臣くんは？」

「自衛隊のマスターに電話で挑発されていましたが、おちついてバーサーカーの自滅を待つようです」

「そうか」

大丈夫だ。

まだ戦いは序盤戦。

地の利を得て時間をかけて準備した我々の勝利は揺るがない。

そう思っていたのだ。

言峰綺礼の次の発言を聞かなければ。

「自衛隊のマスターに保護されたサーヴァントを率いる者の中に、オルガマリー・アニムスフィアを名乗る者がおり、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトと接触を……」

聖杯戦争が全く違う盤上に変わる。

その時、駒達はただ踊ることしかできない。



## Intermission その2

あの日。

倉庫街の戦闘に、冬木ハイアットホテル爆破未遂に、未遠川でのキャスター討伐。

あまりに多くのことが有りすぎたので、やる夫陣営すらも黙認せざるを得なかった事。

カルデア同士の情報交換。

天才ダ・ヴィンチが二人居る事が、彼らの現状把握を可能にした。

「時間が違う」

モニターのダ・ヴィンチちゃんがあつさりと告げ、ここにいるロリンチちゃんがそれにとどめを刺す。

それがどれほどの意味を持つか分かっている上で。

「過去改変が発生してる」

「どういふことなのよ?」

カウンセリングを受けて少し気が楽になったオルガマリー・アニメスフィアが、怪訝な顔で尋ねる。

それに答えずに、彼女は瓜二つのマシユをじつと見る。

もちろん、元水着マシユこと霊基再臨第三段階のマシユの方をじつと見ていた。

「あの、何か？」

「もう一度確認させてくれ。」

君の先輩はカルデアを去ったと言ったのだね？」

「はい。」

終局特異点『冠位時間神殿ソロモン』攻略後、先輩は『後はAチームの仕事だ』と言ってカルデアを去って日本に帰ったのです。

所長代理となったダ・ヴィンチちゃんは私にも選択肢を与えてくれて、先輩と一緒に日本で住む事になったんです。

先輩の家は冬木市にあつて、妙な胸騒ぎがして慌てて盾を持って倉庫街に行ったら……こうやってみんなと会えた訳でして」

マシユが嘘を言うような人間ではないことを二人のダ・ヴィンチちゃんはよく理解している。

そして、己の性別が変わったぐらいで天才は播らがないなんて言いそうな天才であったダ・ヴィンチちゃんはたとえどの時間の自分だとしても自分が言いそうな事はちゃんと把握していた。

「亜種特異点が発生するのに君たちを手放した？

ありえないだろう!？」

ロリンチちゃんが断言すれば、ダ・ヴィンチちゃんがモニター上で頷く。

「カルデアの機密とか何やらを全部無視して君達を私が送り出した!？」

そんな馬鹿な!？」

二人とも掛け値なしの天才だからこそ、駄女神が改ざんした世界線レイヤーの齟齬に気づいたのだ。

2015年のダ・ヴィンチちゃんが居て、2018年のダ・ヴィンチちゃんが居るのに、2017年のダ・ヴィンチちゃんが居ない。

名探偵ならずとも見つけたら不思議に思う、致命的な瑕疵をこの二人が見逃す訳がなかった。

ミステリー事件説明の三要素というのがある。

フーダニット 誰が？

ハウダニット どうやって？

ワイダニット 何故？

の3つだが、そのうちの二つはこの天才は当たりをつけていた。

フーダニットとワイダニットは簡単だ。

この状況において得をする人間で、ロリンチちゃんはあつさりとそれを尋ねた。

「で、マシユ。」

やる夫くんとはもうしたのかい？」

「……」

赤くなるマシユの顔が全てを物語っていた。

間違いないく、このマシユとマスターのやる夫が鍵であるという事をこの場の人間は嫌でも理解する。

要するに、この状況はやる夫とマシユが出会う為に作られた。

だが、ハウダニツトだけが分からない。

さすがの天才二人も上位存在の女神の駒としてやる夫が選ばれ、そのハーレムボーナスとしてマシユを引っ張るためにこんな無茶を行ったなんて分かるわけがない。

「待て！」

ああ!!

こういう事か!!!

私の過去がまた改ざんされたぞ!!!

先に今があつて、その後で過去がでつち上げられる。

いみじくも因果が逆なこの世界の理由付けをロリンチちゃんはたつぷりと味わう。

今や彼女が探偵だった。

「おいおい。」

ドスケベ礼装全部持つていったか！

君たちは」

「……」

ロリンチちゃんの呆れ顔にマシユはもはや真つ赤を通り越して頭から湯気が出るか  
もとという状況になっているが、他の面子は首をかしげるばかり。

まあ、名前からして察しているだろうが。

「やっ」と理解した。

私は君たちを手放した世界線の私だったわけだ。

どうりであの船に一人で逃れた訳だ」

一人苦笑するロリンチちゃんに、黙って聞いていた藤丸立香が声をあげた。

「そろそろ、みんなに分かるような説明をお願いしていいかな？」

「ああ。」

そうだね。

その前に頼みがある。

ロマニをモニターに出してくれないかい？」

「……少し待ってくれ」

察したダ・ヴィンチちゃんの姿が消えて、ロマニ・アーキマンが姿を現す。

その顔を見たロリンチちゃんだけでなく、赤くなっていたマシユが涙目で彼を見た事で、藤丸立香は察してしまった。

彼女の旅の結末の一つを。

仲間の一人が帰らぬ事を。

それはモニターのロマニも同じだったのだろうが、彼はいつもの穏やかな笑みでこう言ったのである。

「ああ。」

僕達の長い旅はちゃんと終わったんだね」と。

愁嘆場が終わり状況を整理すると、出てくる爆弾発言に頭を抱える2016年カルデアア組の面々。

「レフが裏切り者!？」

嘘でしょ!!!」

現実逃避をして叫ぶオルガマリー所長に突っ込む人間は居ない。

だって、貴方死んでるんですよってその前にロリンチちゃんとマシユが言いましたよね。

聞いてなかったのか聞きたくなかったのか知らないが。

「亜種特異点に異聞帯だど!？」

そつちでは何が起こっているんだ!？」

同じく頭を抱えるダ・ヴィンチちゃんとドクターロマン。

特異点の先のさらなる厄介事の露見だが、ロリンチちゃんはさらなる爆弾を投げつける。

「この場所そのものが異聞帯になっている可能性がある」

モードレッドとドレイクとクー・フリーンはカルデアの霊基と一致したから分かったが、明らかにジャンヌ・ダルクはカルデアの霊基と違っていた。

ついでに言うと、クー・フリーンは霊基が一致はしたが、カルデアの知らない情報が混在している。

「まあ、マスターのやる夫に話を聞くしかないだろうね。

少なくとも、彼は今の私達を切る選択はしないよ」

「ああ。

彼のマシユがここに居るのに彼女を悲しませる男じゃなかったよ。

女泣かせなのは否定しないが」

そりや、彼と同じ制服を着たステンノともうひとり女性の女性を見て察せられる程度にはダ・ヴィンチちゃんは女人生を謳歌していた。

それでもマシユの先輩への思いを考えると、一発ぐらい殴つてもバチは当たらないと思つていたが。

「あの、いいかしら?」

そんな中、オルガマリーが声を出す。

「当人死んでいるのだが、未だその自覚は無いらしい。」

「会つてみたい人がいるの。」

時計塔鉦石科の君主で、敗退したロード・エルメロイに」

「どうしてだい?」

ダ・ヴィンチちゃんの質問にオルガマリーは少し考えて答えた。

「それが何を意味しているのか理解せず。」

「ホテルの前で何かやつていたのをちらつと見たんだけど、悪い人じゃなさそうだと思つたから。」

「それと、知りたいのよ。」

「名声もあつて、将来も開けていた彼がどうして聖杯戦争に出たのかを」



なお、徹夜になった翌日の朝、やる夫の部屋に突貫したマシユはステンノと叢雲との間で修羅場となったが、ドスケベ礼装が3つあったために結局三人共やる夫のベッドで寝ることになった。

その時の台詞をここに残しておこう。

「仕方ないわね。

マシユだし」

「仕方ないわね。

浜風だし」

## 聖杯戦争拡大 その1

「令呪を以て命じる！」

間桐臓硯を殺せ!!

重ねて令呪を以て命じる！

間桐の地下工房を滅ぼせ!!

最後の令呪を以て命じる！

全ての魔力を使い切つて桜ちゃんを助け出してくれ……」

病室での令呪使用にバーサーカーが吠えること無く消えた。

まるで最後の意思を尊重するかのよう。

「これでいいか？」

「ああ。」

取引については約束しよう。

それと君の体についてだが……」

医者の見立てだと生きているのが不思議なレベルにまで体が壊れていた。

それ以上に、魂がバーサーカーの精神汚染で消耗しきっていた。

生かそうと思えばなんとかできるが、それをする前に言峰綺礼が手を出さない訳がなかった。

「知っている。」

もう長くはないのだろうか？」

「多分、この襲撃を以て、君は冬木市のテロ事件の犯人にされるだろうな。」

こちらとしては逮捕という形にした上で、君を別人にする事を考えているがどうだろうか？」

遠坂・言峰陣営が主導権を奪回するためには、冬木市に展開した自衛隊を撤退させる必要があった。

その犯人を捕まえたら事件解決なので自衛隊は撤収する。

だったらその犯人を用意するのが手っ取り早い。

その犯人候補としては倉庫街で暴れ、保護された間桐雁夜に目をつけるのは分かっていた。

間桐家を潰す以上、彼を保護する人間がいなくなるのも大きい。

多分、雨生龍之介と合わせてテロ組織メンバーとしてでっち上げられるだろう。

衛宮切嗣を入れるかどうかで俺は迷ったが、この時点で彼を表向きに叩くのは無理だと判断していた。

理由は、彼ではなく彼のスポンサーであるアインツベルンの金だ。

聖堂教会と時計塔が買収と隠蔽を行う資金のほぼ全てがアインツベルンから出てい

る。  
聖杯戦争の敗退ならともかく、テロ組織メンバーとして逮捕して聖杯戦争を背後から参加させないような形にして、アインツベルンの機嫌を損ねたら、彼らの買収資金が途切れる可能性が高かった。

もつとも、そんな事は既に捜査している警察は知ったことではない。

衛宮切嗣の名前までたどりつくのは時間の問題であり、アインツベルンの屋敷に捜査令状を持つて踏み込むのは時間の問題だろう。

間桐雁夜の返答を待っている間、そんな事を考えていたが彼は俺の沈黙を気にすること無く答えを口にした。

「いや。

いい。

魔術だとあるかも知れないが、表では死人に口なしだ。

この大騒ぎは誰かが泥をかぶらないといけない」

間桐雁夜はただ静かに首を横に振った。

バーサーカーと繋がったので、彼の正体とその思いも知ったのだろう。

「あいつも罪を犯したのに裁いてもらえなかった。

俺も、罪を知っていながら逃げ出した。

結局、俺達は同じなんだよ。

頼む。

救いである裁きを俺達から取り上げないでくれ」

「桜ちゃんは どうする？」

「このままで施設に行くことになるぞ？」

「それをなんとかするのがお前なんだろう？」

「それも取引の範疇さ。」

「TVをつけてくれないか？」

「最後はあの屋敷が崩れる所を見ながら逝きたいんだ」

「俺はTVをつけて病室を出てゆく。」

「部屋の外には自衛隊服の叢雲とステンノと自衛隊服なのに盾持ちのマシユが待っていた。」

「地味に隊員の視線が痛いのが気にしたら負けである。」

「で、段取りは？」

「既に間桐家の屋敷の周囲に警官と自衛隊は配備済み。」

周囲の人間もこっそりと避難させたわ。

礼状も用意して、万一に備えて天ヶ崎千草、タカミチ・T・高畑、建宮齋字の三人が待機済み。

カルデアのマスターとマシユ達もついていつているみたいね。

桜ちゃんの安全と周囲の避難を優先させているけど、間桐臓硯はいいの？」

叢雲の言葉に俺はただ目を閉じて、後ろのドアの人物へ黙祷を捧げた。

数秒の沈黙の後、口を開く。

「放っておけ。」

彼が桜ちゃんの中に入っているなら詰みだし、工房が破壊された後ならキャスター

クー・フリーンで焼ける。

「こっちは宣言した通り、動かないでおこうじゃないか」

基地内に警報が鳴ったのはその時だった。

それが敵襲であるのを分かっていたから俺は慌てて叢雲に戻ろうとする前に、叢雲に

陣取っていたドレイクがパスで告げる。

（ミサイル！

こっちに向かっている！！

迎撃するよ!!!）

（わかった。）

好きにやってくれ）

轟音とともに学園都市製のイージスミサイルが飛び立ち、しばらくして派手な爆発音が轟く。

爆発地点は、舞鶴湾出口付近だった。

警報が鳴り続き、俺達が戻った時にドレイクを含めた艦橋の全員が敬礼をする。

「状況を」

「対岸の伊根町付近よりこちらに向けてミサイルによる攻撃。」

迎撃可能だったのが本艦しかない為に艦長の許可をえた上で、イージスミサイル一発を発射。

「迎撃に成功」

新島副長補佐が報告する。

次々と錨をあげて撃墜したミサイル付近に向かう海上自衛隊の艦を尻目に俺はため息をつく。

急場とはいえ、このミサイル発射は指揮系統云々で後々揉めることになるだろう。

「聖杯戦争をしている人たちの仕業かしら？」

「衛宮切嗣以外で対艦ミサイルを撃ってくる人間は居ないだろうよ。」

そして、衛宮切嗣が撃つたにしては杜撰すぎる」

叢雲を狙うために対艦ミサイルを撃つた。

分からないではないが、見ての通り自衛隊を完全に敵に回す。

それを理解できない彼ではないだろうに。

「いや。」

間桐雁夜を犯人に仕立て上げようとする話がこれで潰れたか」

間桐家襲撃後に発表すれば、間桐家襲撃が彼の確保にあったという情報工作を経て、

テロ事件の犯人として自衛隊撤退の手打ちに出来ただろう。

けど、冬木市ではない離れた伊根町からのミサイル発射はいやでも共犯者の存在を浮

かび上がらせる。

結局、そのミサイル一発が状況を更に混迷化させた。

間桐家襲撃はバーサーカーの消滅まで続き、それで工房が破壊された結果、キャスター・フリーリンの宝具『灼き尽くす炎の檻』にて蟲たちは間桐臓硯と共に消え失せる結果となった。

なお、この火でボヤ騒ぎとなったが消防が出て火を消してそれでおしまい。

すべての目は若狭湾で爆発したミサイルに注がれていた。

桜ちゃんは保護され、舞鶴基地の病院に入院し、蟲の摘出手術の後間桐雁夜が居た病



室で休んでいる。

間桐雁夜は桜ちゃんが来るまで持たず、今は霊安室に安置しているがその笑顔は穏やかなものだつた。

一方で発射されたミサイルは米国製ハーブーンミサイルで、伊根町に発射管が残っていた事から米軍の正規品である事が発覚。

外交問題にまで発展する。

警察の捜査の結果、数日前から何か作っていたのを地元住民や観光客が見ており、そこから得られた写真を見て絶句する。

「……ボブミヤじゃねーか……」

そこで何か引つかかった。

ステンノを見て、モードレッドを見て、ドレイクを見て、マシユを見て、俺は彼らの見ている前でメモを書き出す。

セイバー

モードレッド

野良 やる夫

アーチャー

ボブミヤ

?

ランサー

クー・フリーン

やる夫

キャスター

クー・フリーン

野良 藤丸立香

ロリンチちゃん 野良 やる夫

アサシン ステンノ やる夫

ライダー ドレイク 野良 やる夫

バーサーカー ?

シールダー マシユ 野良 やる夫

マシユ 藤丸立香

あつ。

これ聖杯大戦始まるわ。

そうなると、ルーラーが出てくる訳で……

ここだとなるよなあ。

天草四郎が。

# 聖杯戦争拡大 その2

聖杯戦争の積極具合 100ほど積極的

時計塔

自動参加

聖堂教会

自動参加

フアントムソサエティ

60 + 41

クスノハ

61 + 20

学園都市

45 + 12

関東魔法協会

100なので自動参加

関西魔法協会

31 + 31

十字教

74 + 42

メシア教

1 + 35

ガイア教

95 + 50

自衛隊

83 + 47

## 米軍

15+13

この若狭湾ミサイル発射テロによって日本の裏社会は激震を受けた。

というより秘匿されていた聖杯戦争の情報が何者かによってばら撒かれたのである。時計塔と聖堂教会は激怒してその首謀者を探そうとしたが時すでに遅し。

他組織の『お前ら何勝手にやってんじや!』という抗議と観察団の派遣がなし崩し的に行われる事になった。

激怒しているのは自衛隊も同じで、仮にも所属している護衛艦に対艦ミサイルをぶつ放されて怒らない方がおかしい。

命令系統から俺のミサイル発射は海自内部でも問題になり査問会と無罪放免を勝ち取るまで三日、貴重な三日を俺は失う羽目になった。

逆に米軍は証拠である対艦ミサイルの発射筒が見つつけられた事から動きを封じられ、米軍第7艦隊ではあのハーブーンミサイルの出処を必死に探す羽目に。

そんな訳で、あのミサイル事件から三日後、新たな駒が冬木市に姿を見せる。

「クルト・ゲードルと申します。

よろしくおねがいします」

タカミチ・T・高畑に連れられてやってきたのがまさかの大物である。

そうだよな。

あらゆる願いを叶えるという願望機なんて触れ込みを知ったら、嫌でも出てくるわな。彼ならば。

「ヤタガラスの入即出やる夫と申します。

失礼ですが、お一人でここに？」

「いえ。

ある程度連れてきています。

挨拶を」

クルト・ゲーデルが促すと、日本人にしか見えない女性が頭を下げる。

「明石夕子と申します。

今回の派遣団の副長に任じられております。

よろしくおねがいします」

「こちらとしては何よりも民間人への被害を出さないことを第一に動いて頂きたい。

既に状況は混沌としていますから」

個人的にやばいのは天海市のマニトウ計画なのだが、聖杯の分かりやすい機能に食らいついた彼らと手を組んだ以上は最低限の仕事はする。

俺はいくつかの書類をクルト・ゲーデルに渡し、彼はそれを明石夕子に手渡す。

「フアントムソサエティーのサマナーを確認しました。

キャロルJとマヨローネと呼ばれています。

目的は聖杯の奪取でしょう。

彼ら二人は、デビルサマナー。

悪魔使いです」

「拘束は？」

「普通の警察や自衛隊員が手を出しても、政府から圧力がかかって釈放されるでしょうし、身分も用意されているはずです。

監視カメラに映ったのを最後に足取りは消えております」

「ならば、彼らの拘束は我々がするのでしょうか。」

他に気をつけないといけない勢力は？」

成田の入国管理局からの情報を整合してチェックしたものが既に俺の手元にはある。

こういうお役所仕事がこの国は強い。

「十字教のローマ正教十三騎士団が入国した。

こっちは都内で足取りが消えたけど、近く冬木市に入るだろう。

聖堂教会に教えてやったら、奴らいい感じで激怒していたよ」

「なるほど」。

貴方も人が悪い」

他にも十字教のやばい連中のリストを俺はクルト・ゲーデルに渡す。

ローマ正教十三騎士団を率いるビットリオカセラに、司教兼宣教師のリドヴィアロレンツエッティ、そして雇われているのだろうフリーの魔術師であるオリアナトムソンとガチで攻めに来ている。

何も日本の地方都市で代理戦争をせんでもいいものと言ったらいけない。

眼の前のクルト・ゲーデルにもそのブーメランは刺さる。

「ガイア教も新しい人間を用意したらしい。

一番来てほしくない人間の名前を見たよ」

そのファイルには写真は無いが、書かれている事だけでクルト・ゲーデルの顔が歪む。多分俺も同じ顔をしているだろう。

「桜塚星史郎。

人を殺めるために陰陽術を使う伝説の暗殺者集団『桜塚護』の当代ですよ。

お気をつけを」

聖杯の奪取というよりも、奴の設定を考えたら多分その目的は俺の抹殺だろう。

俺の笑顔に何か感じたのか、クルト・ゲーデルが一步退いたのを俺は見なかったことにした。

艦に戻ろうとした俺の目に、俺の艦を見ている陸自の士官が映る。

その特徴的な姿に見当がついたので、おれは声をかける事にした。

「うちの艦に何か？」

「ああ。」

さつきまでヘリ甲板にて益荒男が剣を振っていたのが見えてな。

見とれていたのよ」

後で聞いたが、その時暇だったとかで、モードレッドとクー・フリーンが手合わせをしていたらしい。

対魔忍だけでなく自衛隊員すら見とれた剣技だったらしいから、彼も魅入っていたのだろう。

「むかしむかし。」

おとぎ話の果てにあつた剣技だよ。あれは」

「それは羨ましい。」

もちろん、この世界が素晴らしくはないとは言わないが、それでもあのような剣技が必要だった時代を見せられたら、武人として羨ましくありませんな」

悪い人間ではないのだ。



はた迷惑なだけで。

こっちの迷惑を知ってかしらすが、彼は俺にきちんと敬礼して挨拶をした。「第1普通科連隊第1普通科中隊、中隊長の甘粕正彦一尉と申します。

今回のテロ事件の増援として、こちらの警護をする事に相成りました。

よろしくおねがいます」

駄女神よ。

これ收拾つくんだらうな？

# 聖杯戦争拡大 その3

各勢力の行動

1 情報収集

2 情報収集

3 同盟交渉

4 同盟交渉

5 拠点作成

6 拠点作成

7 拠点作成

8 敵勢力攻撃

9 敵勢力攻撃

10 熱烈歓迎

聖杯戦争正規組

時計塔 (遠坂陣営 聖堂教会と同盟中 アーチャー) 8

聖堂教会 (言峰陣営 言峰綺礼はこっち アサシン) 1

セイバー陣営 6

ランサー陣営 3

ライダー陣営 6

聖杯戦争非正規組

フロントムソサエティ 9

関東魔法協会 1

十字教 3

ガイア教 2

自衛隊 7

カルデア 2

桜塚護 9

何かが割れる音がして俺は目を覚ます。

部屋に貼ってあった身代わり符が容赦なく灰になっていた。

その灰の中に落ちていた桜の花びら。

さすが桜塚護。

挨拶がてらの呪殺攻撃に感心するしかない。

これからは、身代わり符は倍以上貼らないと。

「柳洞寺周辺で小規模な地震が発生したらしい」

舞鶴基地での連絡会議。

居るのは、クルト・ゲーデルに、カルデアの面々に、甘粕正彦。

改めて見ると濃いな。この面子。

地震発生報告をくれたのは甘粕正彦である。

「一応地震という事にしておくが、最近の科学は便利なもので、地震の波形と爆発の波形は違う。」

これは爆発の波形だよ。

で、警戒中の空自に頼んで柳洞寺周辺を写してもらったが、それらしい爆発の後は無  
い。

つまり、柳洞寺の地下で何か、いや、はつきり言うか。

戦闘があつたという事だ」

「たしか、その柳洞寺には大聖杯というものが眠っているはずでは？」

こちらの情報を大体出しているので、ここの面子は柳洞寺に大聖杯がある事を知っている。

そのため、クルト・ゲーデルは関東魔法協会だけでなく、メガロメセンブリアの手駒まで使って聖杯を回収しようと提案していた。

まあ、中がニトログリセリンが一杯詰まった樽みたいなものだから、今動かすと大爆発するのが目に見えているので敵対勢力を掃討したらお好きにとは言っておいたが、はやくも誰かが動いた事に彼の声に焦りが見える。

「ええ。」

というわけで、状況を聞いてみましょうか？」

叢雲に電話を持ってこさせて、俺は電話をかける。

冬木教会の言峰神父に。

「はい。冬木教会です」

出たのは言峰綺礼の方だった。

こっちはアサシン見たから敗退設定なんて知ったことではないが、その芝居は尊重しよう。

「どうもヤタガラスの入即出やる夫と申します。

地震計で柳洞寺周辺で爆発があつたみたいですが、そちらは大丈夫ですか？」

「……問題ない」

見え見えの嘘をつく。

ならばもう少しついついて見るかと思つたら、電話が替わり傲慢かつ高貴な声が聞こえてくる。

「答えよ道化！」

あれは何だ？

あれがこの星の意思というのか!？」

聖杯を守る英雄王と交戦したのは桜塚屋史郎だったか。

最高の霊地だから術を使うのも最適ではあるが、そんな呪いを使って気づかない遠坂陣営ではない訳で、きつとまた令呪を消費して迎撃にあてたのだろうなあ。

千里眼持ちならば見えるだろう。

彼の未来とその先が。

「英雄王自ら剪定とはご苦労さまでございます。」

とはいえ、王も考えていた事ではないですか？」

「世辞は良い。」

王には王の責務というものがある。

民を選び、庇護した民を良い方に導くのは王の責務の一つよ。  
 だが、気に食わんのは、奴は我を雑種と同じに扱いおった!!  
 その罪万死に値する……!!」

英雄王VS桜塚星史郎

桜塚星史郎

ベースレベル

77

メガテン世界デバフ

ベースの76%しか出せない

58

型月世界デバフ

84%しか出せない

48

サイコロ補正

12%バフ

53

英雄王ギルガメッシュ

レベル

90

カリスマA+

21%バフ

108

1 桜塚勝利

2 桜塚勝利

3 桜塚勝利

- 4 英雄王勝利
  - 5 英雄王勝利
  - 6 英雄王勝利
  - 7 英雄王勝利
  - 8 英雄王勝利
  - 9 英雄王勝利
  - 10 熱烈歓迎
- 結果……7

「あれは私の宝具の雨を受けて花となって散ったが、あの手の者はあれでくたばるようなものでもあるまい！」

その後来た連中も追い払ってやったが、今我は気分が悪い。

「吐かねば私の宝具の雨を受けると思え!!」

「怒りを鎮め給え。英雄王。」

こちらの知る事は全てお教えしましょう」

電話口なので他の面子が聞いているのに、俺は桜塚星史郎の事を今朝の呪殺攻撃まで含めて全部話す。



もちろん他の面子の顔色は約一人を除いて真っ青だ。

某一尉よ。

『その手があつたか!?!』なんて顔をしないでくれ。頼むから。

「……なるほど。」

よくわかった」

恐ろしく冷徹な声に、俺は英雄王が激怒していることを察して背筋が寒くなった。

世界の命運を自分以外の所で決められるなんて、かの英雄王にとって許せるものでもないだろうからな。

「もしもし?」

電話の声が言峰綺礼に替わる。

ため息を一つ漏らして俺は口を開いた。

「聞いたとおり、これからはマスターの直接攻撃に呪殺というものが来るかも知れませんが。」

お気をつけを」

「わかった。伝えておこう」

あ。

これ遠坂時臣に伝える気は無いな。

電話を置いて、皆に改めて告げる。

「という訳で、各自呪殺対策をお忘れにならないように」

そんな対呪殺のプロである天ヶ崎千草は、対魔忍たちをパートに雇って身代わり符の大量生産に追われることになる。

「衛宮切嗣はアインツベルンの屋敷から逃げ出したらしい」

ついに警察が衛宮切嗣にたどり着いて、アインツベルンの屋敷に訪ねていったらしい。

アイリスフィールとセイバーは居たが、その前に衛宮切嗣と久宇舞弥は姿を消していた。

今も捜査員が森の側で張り付いているらしいが、まず出てこないだろうな。

こつちが、ミサイル発射で時間をとられた三日間が無ければ、拘束まで持っていけたのだが。

「手を組もうとしている連中がいるみたいね」

俺の言葉にステンノがなげやり気味に言う。

状況が混沌とし過ぎていて、籠もる事しかできなくなっていたのだ。

何しろ、ルーラーとバーサーカーがまだこの場に出ていない。

「ケイネスと十字教がねえ……」

冬木ハイアットホテルに十字教の陣営が泊まったことは宿泊データからも確認が取れた。

同盟なのか、盾がわりなのかは分からないが、ここを攻めたら両者迎撃をするのは間違いない。

「その結果じゃないでしょうけど、どうしてあなた達ここにいるのよ？」

「戦場が混沌としておるなら、分かる場所に向くのが一番だからな！」

此度の戦の核になっておるのはお主よ。

だから張り付かせてもらおうと思っただけ

さすが征服王。

戦場の勘所を見極める力は優れていやがる。

「……ここなら、ゲームの兵器が生で見れるって言って僕を引っ張ったのは誰だったわけ？」

「お主として、あの夫妻を戦火から遠ざけようと新たな場所を探しておっただろうが！」

夫婦喧嘩は他所でやってくれませんかね。お二方。

言うつもりはないが。

せっかくだから部屋を用意するついでに試しに聞いてみた。

「なあ。征服王。」

裏でこそそこそやっている奴が居て、そいつの場所が分からない。

考えられるとしたら何処に居ると思う?」

「簡単な話だろう。」

これだけ場が混沌としてれば、中で状況の把握はできまい。

我らと同じ選択をしているのだろうよ」

あつさりと言ってくれたからこそ、その意味に気づくのに時間がかかった。

「ああ。」

ありがとう。征服王」

「気にするな。」

あと、飯については期待して良いのだろうか?」

「馬鹿!」

何処まで凶々しいんだ!

お前は……」

二人が部屋から出た後、叢雲とステンノを呼び寄せて告げる。

地図を広げて俺は冬木市から外に丸をつくって。

「冬木市以外の霊地について調査するぞ。」

多分ルーラーとアーチャーとバーサーカーはそこに居る」

大聖杯には誰も居なかった。

多分、出てきたのはヘラクレスだろう。

ルーラーが率いる、アーチャーとバーサーカーをどう潰すのか？

まだ俺はその手を思いついていなかった。

ありがとうクリプター人類が忘れても俺は君たちの偉業を忘れない

「容態はどうかね？」

間桐桜ちゃん」

舞鶴基地の病院で横になっていた間桐桜に俺は声をかける。

この病室の前の住人は今や霊安室で静かに眠っている。

それを伝えることはまだ早いと思って、俺は最低限のことだけ告げた。

「君の中の蟲はとつたよ。」

後のことは、おいおい決めてゆくことにしよう。

今はとにかくゆっくり休みなさい」

彼女の顔には表情が無かった。

カウンセラーによると典型的な児童虐待の症状の一つだという。

証拠はそろっているので、彼女の虐待は認められるだろう。

そこから先は、あの遠坂家とも話さないといけない訳だが、さて、その当主が生き残ることはできるのだろうか？

……無理だろうなあ……

桜ちゃんの病室を出ると、ロリンチちゃんが待っていた。

「話があるんだ」

「丁度良かった。」

「こつちもだよ」

病院を出て舞鶴基地を歩く。

これから夏に入ろうという時期。

人の騒ぎなど気にせず、空はただ青い。

「とりあえずだ。」

隠れているのは頂けないと思うな。

ホームズくん」

「……おや。」

居ない事が当たり前と、君は思っていたのだがね」

実際俺は気づいていなかった。

だが、ふいに『ホームズが居ないとおかしい』という思考が俺の中に生えた。

なるほど。

こうやって、駄女神は舞台とシナリオをごまかし続けた訳だ。

俺の台詞のあと、ロリンチちゃんの後ろから名探偵ホームズが現れる。

俺はそんな彼にタバコを渡してやる。

「薬については勘弁してくれ。」

「この世界のこの国ではご法度だ」

「この姿になって、あれの副作用を感じなくていいと思っただが、世間は厳しいものだ」

「もう少し先の未来だと、電子タバコなるものが出てくるぞ」

「それはそれで素晴らしいというか、味気ないと言うか。」

あの煙と火のきらめきは、思考を整理する際に良いものだったからね」

世界は名探偵の事情より健康をとったのだ。

ホームズがタバコをふかしている間に、先にロリンチちゃんが口を開く。

「ホームズの事に気づいたということは、こっちの話も知った上でかな？」

「ああ。」

俺は、そっちの異聞帯には行かないよ」

「地球最後のマスターなのにな？」

「ああ。」

何百万と居た地球最後のマスターでしかないよ。俺は。



ホームズが出たという事は、感づいているだろうか？

この世界では人理漂白は起きないという事に」

俺の指摘にホームズは肩をすくめた。

つまるところ、俺の話と彼らの話は同じだった訳だ。

「もし、異聞帯に行く未来があるとすれば、あのカルデアの人たちだよ。

懐かしい、オルガマリー所長とロマニ……」

「止めてくれないか。

この体だけど、記憶は引き継いでいるんだ」

「……そうだったね。

失礼」

少しだけ黙った後、俺は意を決して口を開く。

「この世界ではやり直しがきくんのだ。

誰もが幸せになれる未来というのはおこがましいが、あの人理焼却をもう少しましな形で回避できる未来も選ぶ事ができる。

「ここは世界の闇鍋なんだよ」

「それを提示したのは誰だい？」

当たり前のようにホームズが問いかけるので、俺は答えてやる。

駄女神のブラック勤務と、その派遣社員と化した俺の滑稽な物語を。

二人は、俺の告白を黙って聞いた後、ホームズが口を開いた。

「なにかわからないものに滅ぼされるよりはましなのかな?」

「さあな。」

だが、そのましな未来なるものために俺は一応動いている。

そして、カルデアの未来は俺ではなく、藤丸立香が担うだろうよ。

大冒険と別れの果てにね。

情報交換はしたのだろう?」

俺の言葉にロリンチちゃんが頷く。

このあたり彼らも抜け目が無い。

「舞台を降りたければ降りればいい。」

君たちにはその権利があるし、手段もある」

カルデア組は放つて置けばレイシフトでカルデアに帰還する。

途中でレフ・ライノールに所長を殺されるかもしれん……あつ。忘れていた。

「そうだ。」

蒼崎橙子の工房の連絡先だ。

あの所長の魂の器にふさわしいものが作られているから、持ってゆくといい」

「何処まで見通しているのか恐ろしくなるね」

「たいした事じゃない。」

君たちが初見なのに対して、俺は二周目だったというだけさ。

一応億の金のかかっている特注品だ。

魔力炉制作のお礼だとおつりが来るかな？」

はったりもここまでくると清々しい。

文車妖妃を入れるために作ったのに、大淫婦バビロンに乗っ取られ、出費がかさんだと嘆いた事はきれいに忘れることにする。

本当にそれだけの事をこの二人はしてくれたのだ。

感謝こそすれ、害を成すつもりは毛頭なかった。

「もしかしたら、この世界も人類が漂白されるかもしれないの？」

「ああ。」

時間と空間というものは、きつちりと流れている訳ではない。

それは我々という観測者が観測していて、そう見えているという事が大きい。

この瞬間、時が止まり、世界が漂白されるかも知れない。

だが、それがどうした？」

駄女神は最初から言っている。

この物語は過程こそが大事だと。

「その物語で人々を引きつけ、惹きつけ、魅せつけ続けて、続きがばたつと出なくなつて、誰かが

『じゃあわかった！俺が続きを書いてやる!!』とまで言ったら俺と女神の勝利だ。  
そして、二人共感づいているだろう？

このシステムはものすごく古い手法だという事に」

「神話創生」

ロリンチちゃんがぼつりと告げる。

そう。

この物語は駄女神とアンコ神の神話の一ページでしかない。

そんな逸話としての終わりがあるだろうが、多くの神話の多くは終わりが曖昧になっている。

これはそういう物語である。

「こんな話は彼女には聞かせられないな。

気づいている連中は？」

ホームズの質問におれはあつきりと告げる。

これからもうこうして天才や賢者がこの世界の理を知って、発狂するか笑い転げてゆく

のだろう。

それもこの物語の醍醐味ということだ。

「何人か居る。」

蒼崎橙子は笑ってくれたよ。

で、どうする二人共？

ここからは君たちが決めるといい」

俺の振りに二人は同時に肩をすくめた。

「タイムパラドックスで消えるかも知れないが、消えたほうがいい存在と未来ってのはあると思うんだ。私は」

過去が疼くからこそ、ロリンちゃんには苦笑し。

「この世界は謎だらけじゃないか。」

それに手を出すなんて探偵にとって、死ぬと言ってくれるようなものだ」

ホームズは煙草を投げ捨てようとして、俺が差し出した携帯灰皿にその煙草を入れた。

環境は、格好つけすら悪にする。

「じゃあ、今後ともヨロシクという事で。」

工房は艦の中に作ってくれ。

ロリンチちゃんなら分かるだろうが、あの艦まるごとシャドウ・ボーダーみたいなものだよ」

俺の差し出した手をロリンチちゃんは握る。

目は既に研究者のそれである。

「それは凄いな。」

遠慮なく解析させてもらおうとしよう」

「じゃあ、私は一旦離れて冬木ではなく東京の方に行かせてもらおうとしよう。」

君の目的である、東京の危機は解きがいのある謎になりそうだ」

ロリンチちゃんの後に俺の手を握ったホームズは俺に告げる。

その視線は、俺ではなく東に、東京に向けられていた。

「だったら、横浜の隣の平崎市というところにあるホテル業魔殿というホテルを使うといい。」

俺の名前を出せば使わせてくれるはずだ」

「それで、君はどうするんだい？」

新たな情報が生えた結果、回収しないといけないものができた。

マシユと俺がこっちで暮らしたという設定ならば、ここにあれがないとおかしいのだ。

「今まで契約したサーヴァントたちの霊基グラフデータ」。

スーツケース型のあれを回収しておかないと。

ルーラーの天草四郎あたりに渡ったら、目も当てられないからな。あれは」

## 人類救済?そんなことより潰しあいだ!

今まで契約したサーヴァントたちの霊基グラフデータの回収だが、マシユといちゃいちゃしていた俺は結構真面目にあれの保管を考えていたらしい。

新都の銀行の貸金庫に保管しているという。

マシユと話すことで、それまでのマシユとの思い出が記憶に付け足されてゆく。

というか、預金が九桁ある事をいい事に、散々爛れた生活を送っていたらしい。

まあ、その記憶も体感も俺の中に湧いてきたから今は良しとしよう。

「で、マスター。

これからどうするんだ?」

魔力炉を増築した叢雲のおかげで契約したモードレッドとドレイクを交えて、叢雲艦

内での会議。

モードレッドは戦いたくてウズウズしているらしい。

こつちも、ここで待ちをしている余裕はない。

「ちよつと、新都の銀行に出かける事になる。

襲ってくるとしたらここだから、気を引き締めてくれ。



マシユと俺と叢雲とステンは車で新都に。

モードレッドは霊体化してついてくる。

OK?」

「そうこなくっちゃ!」

「あたしはまたお留守番かい?」

喜ぶモードレッドに対して、がっくりするドレイク。

ステンノと同じく海自の一尉相当官の制服を着させられている。

嫌うどころか海自内部のドレイク人気はすごいものがあるのは、海自も船乗りたちの末裔という事だろう。

「勉強会だの交流会だので基地から出られないだろうが。お前。

それにまたミサイルを撃たれたら困る」

「しかたないねえ」

嘆き節のドレイクだが、本性は叢雲を思いつきり走らせたいのだろう。

彼女はこの舞鶴基地に着いてから、他の艦を見て喜んでいたのでから。

分からないではない。

「さてと。」

基地で車を借りると……」

という所まで俺が言った所でクラクションが鳴られる。

車から黒スーツ姿の眼鏡の男が手をふる。

「入即出やる夫さんですか？」

「お会いしたかったですよ」

ジャパニーズビジネスマンらしい挨拶&名刺攻撃でいつの間にか俺の手には名刺が。

その名刺を読み上げる。

中々珍しい部署だったからだ。

「大蔵省特殊査察部第二課執行官の入江省三さん？」

「はい。」

貴方の置かれている状況と、それにまつわるお金の話で色々とお話が」

色々と思いついたるフシがあるが、今この状況で敵対する理由もない。

彼の伝説にはこんなものがあるのだから。

「彼の行動を妨げてはならない。」

君がトラブルを抱えているのならば特にだ。

彼の行動を理解しようとしてはならない。

俺は、貴方になにか恨まれるような事をしたのかね？」

「とりあえずそれは車の中で。」

何処に行くかは知りませんが、お送りしますよ」

ドアが開けられて、俺達はそれに乗り込むことにした。

さすがの政府の非公式活動用員と言えども、霊体化したモーさんに気づいていないといいのだけど。

……厚生省だったらやばいかも知れないが。

舞鶴基地から冬木市の新都まで車で一時間程度。

速くも遅くもないセダンを走らせながら、入江省三は話し出す。

「現在の政府の状況については？」

「まあ、ある程度は。」

その流れで俺はここに居るといふ認識なのですがね」

「その前提で話をしましょう。」

自衛隊内部において、不可思議な金の流れが発生しています。

国民の税金を使っているなら、問題なのは分かると思いますが、使っていないのに装備が増えているというのもまた問題なんですよ」

さすが日本最強の官庁である大蔵省。

言い方も中々イヤミが効いている。

「つまり、俺の扱いが大蔵で問題になってきたと?」

「金の流れってごまかしがきかないんですよ」

俺も同じことを言った覚えがあるから、因果応報である。

俺の苦々しい顔を知ってか知らずが、入江省三は言葉が続ける。

「で、こちらとしまして、その解決にご協力をと」

「何?」

税金でも払えっていうの?」

叢雲が喧嘩腰で威嚇するが、金云々は要するに脅迫の枕詞だ。

要するに、この非公式エージェントはそれに近い俺達に何かをさせたいのだろう。

「聖堂教会および時計塔から政府に流れる金の流れを止めて頂きたい」

この手の脅迫は、俺にもメリットがある提案をするのがポイントである。

聖堂教会および時計塔の金の流れを止める事の意味を、俺はやつと理解した。

「政府だけでなくて自衛隊側にも、時計塔と聖堂教会から金が流れていた。」

そう言うわけか?」

「ご想像におまかせします」

俺は額に手を当ててうめく。

事態の収集。

その最終局面にて自衛隊の果たす役割は大きい。

実際、原作の『F a t e / Z E R O』では自衛隊機墜落を強引に金でごまかした経歴があつたのを忘れていた。

「これは公安からの情報なのですが、内密にお願いしますよ。」

衛宮切嗣への逮捕請求が、途中で潰されたそうです」

話を聞くと、警察がほぼ黒と判定した衛宮切嗣の逮捕だが、その前に共犯者としてアリスフィールを任意同行からの逮捕で調べる所を魔術協会と聖堂教会が強引なんてものじゃない強硬さで撤回させたという。

地元の先生総動員の他に某国大使館からの外交官免責特権の付与、あげくに京都府警本部長直々の調査中止命令と捜査本部の解散命令とすさまじい圧力を受けたようだ。

あー。

これは警察側の失敗だわ。

普通の捜査ならば当たり前の共犯者逮捕だけど、セイバーが残っている状況で聖杯戦争御三家のアインツベルンに手を出そうとしたから、全力で守りに行かざるを得なくなつたと。

しかし、外交官特権ときたか。

こつちが表のルールに縛られるから、うまい絡め手を出してきたもんだ。

「ならば、国外退去命令が出るはずでは?」

「出るでしような。」

問題は、その国外退去命令は今すぐではない。

そして、アインツベルンはその退去命令前に事をなさねばならなくなつた。手負いのセイバー陣営が、なりふり構わず暴れることを意味する。

「止めろと言われても、聖堂教会と時計塔の金の流れをどう止めろと?」

「それは、そちらの選択を尊重しましょう。」

金の流れは止められるけど、それ以外の流れを我々は掴めない。

協力者が必要なんです」

「その見返りは?」

「まあ、色々。」

一応国家組織ですので」

冬木市新都に入り、目当ての金融機関の前で入江省三は車を停める。

ドアを開けて降りて、了承と言おうとした時に、爆風が俺の顔を叩く。

「先輩!」

「マシユは防御!」

モードレッドはまだ動くな!!

畜生！

何が起こつてやがる!？」

派手な銃撃と爆発音。

その視線の先には、派手に暴れるオリアナルトムソンと、回りを気にせず攻撃するキャロルJとマヨーネ、それを取り押さえようとするタカミチ・T・高畑の姿があつた。

## ですべらーど

「で、どつちにつくんですか？」

「女って言えないんだよな。」

泥棒じゃないし。

眼鏡はこっちの味方」

「わかりましたっ！」

どこから取り出したそのシグザウエルP220を眼鏡以外にブツパなす。

新都のビジネス街というのに、まあ見事なまでに人が居ない。

人払いの結界を張っているのだろう。オリアナ||トムソンが。

キャロルJは悪魔を出さずに銃で支援しており、マヨーネの出した魔獣カソニ体と龍

王ミズチ、怪異むらさきカガミと幽鬼ヴェータラがオリアナ||トムソンとタカミチ・T・

高畑に猛攻をしかけていた。

「マシユはデータの確保！」

モーさんはマシユのサポート!!

叢雲とステンは俺と共にここで死守！



あなたは どうする？」

入江省三は無言で車のトランクを開ける。

中を見ると、武器庫の中央にでんと置かれるミルコーMGLが。

「それ私に貸しなさい！」

あなたははやく仲魔を呼んで!!」

叢雲がミルコーMGLをぶつ放せば、キャロルJがこつちに銃弾を向けてくる。

俺は車に隠れて、女神ブリジッドと大天使イスラフィールとクー・フリーンを呼び出

すと、敵を連れてタカミチ・T・高畑がこつちに逃げ込んでくる。

「共闘しているように見えないな」

「完全に第三者ですよ。」

被害を抑えようとして、巻き込まれました。

貴方からもらった身代わり符が何枚か灰になりましたよ」

「っ!？」

気をつけろ！

やつら呪殺を使ってくるぞ!!」

叫びながら、俺は禁凝符の束をばらまくとその数枚が即座に灰となる。

やっぱりタイミングを狙っていがったか。

ボブミヤよ。

「だけじゃない！」

何よあいつ!!」

あ。

バーサーカーのヘラクレス発見。  
大乱闘確定じゃねーか。

オリアナ||トムソン

ベースレベル

メガテン世界修正 155%

型月世界デバフ 84%

サイコロ補正 163%

キャロルJ

ベースレベル

メガテン世界修正 なし

型月世界デバフ 84%

サイコロ補正 67%

35

54

45

73

20

16

10

マヨーネ			
ベースレベル			43
メガテン世界修正	なし		
型月世界デバフ	84%	36	
サイコロ補正	21%		7
マヨーネの召喚悪魔			
魔獣カソニ体と龍王ミズチ、怪異むらさきカガミと幽鬼ヴェータラ			
レベル37×2+43+49+57  223			
型月世界デバフ	84%	187	
サイコロ補正	83%	155	
入江省三			
ベースレベル			9
メガテン世界補正	145%		
型月世界デバフ	84%	10	13
サイコロ補正	26%	2	
タカミチ・T・高畑			
ベースレベル			192

メガテン世界補正	21%	40	
型月世界デバフ	84%	33	
サイコロ補正	177%	58	
ボブミヤ			
ベースレベル		80	
ヘラクレス		80	
ベースレベル			
入即出やる夫			
メガテン世界補正レベル		144	
型月世界修正	84%		12
サイコロ補正	147%		1
76			
ステキノ			
ベースレベル		100	
型月世界修正	なし		

女神の気まぐれ A

144

叢雲

メガテン世界補正レベル

124

型月世界デバフ 84%

104

女神の気まぐれ A

149

やる夫の召喚悪魔

女神ブリジッド、大天使イスラフィール、幻魔クー・フリーリン

47×0.84×1.2×1.2||56

42×0.84×1.2×1.2||52

43×0.84||36

マヨーネ・キャロルJ勢力合計

172

オリアナ||トムソン

73

ボブミヤ・ヘラクレス

160

やる夫達

673

「あんたっ！」

役人なんだから、もつとしつかり攻撃できないのっ!!」

「役人なんだから、武器でごまかしているんじゃないですか！

国家公務員を何だと思っているんですか!!」

防弾仕様のセダンを盾に入江省三が銃を撃ち、叢雲がグレネードランチャーをぶつ放す。

その反撃は、悪魔たちのファイアブレスに、アイスブレスで乗ってきたセダンがぶっ飛ぶ。

こっちの悪魔が相手の悪魔を排除する間、ヘラクレスとボブミヤを止めるのは俺とステンの役目であり、

「スマイル・オブ・ザ・ステンノ♥」

魅惑の美声Aと宝具女神の微笑で弱体化と足止めをかけ、入江省三の武器庫から拝借

した銃でボブミヤを牽制し続ける。

「オリアナが逃げる！」

「タカミチさん！」

「行って!!」

「わかった」

戦力値が圧倒的なのにどうしてここまで追い詰められているのか？

ある意味当たり前だが、数って偉大である。

そして、ボブミヤの壁となっているヘラクレスの邪魔なこと邪魔なこと。

ヘラクレスが壁になっているから、ボブミヤが仕留められず、俺や叢雲やステンノという最強戦力がそっちに拘束される。

出した仲魔はマヨーネの悪魔相手に優位に戦っているが排除に時間がかかり、その間にオリアナとトムソンが逃げようとするので、それを拘束しないとイケない。

見事なまでの戦力分散だった。

## 結果

- 1 オリアナ逃亡、キャロルJ、マヨーネ逃亡、ボブミヤ・ヘラクレス逃亡
- 2 オリアナ逃亡、キャロルJ、マヨーネ捕縛、ボブミヤ・ヘラクレス逃亡

- 3 オリアナ逃亡、キャロルJ、マヨーネ捕縛、ボブミヤ逃亡、ヘラクレレス消滅
- 4 オリアナ捕縛、キャロルJ、マヨーネ捕縛、ボブミヤ・ヘラクレレス消滅
- 5 オリアナ捕縛、キャロルJ、マヨーネ捕縛、ボブミヤ・ヘラクレレス消滅
- 6 オリアナ捕縛、キャロルJ、マヨーネ捕縛、ボブミヤ・ヘラクレレス消滅
- 7 オリアナ捕縛、キャロルJ、マヨーネ捕縛、ボブミヤ・ヘラクレレス消滅
- 8 オリアナ捕縛、キャロルJ、マヨーネ捕縛、ボブミヤ・ヘラクレレス消滅
- 9 オリアナ捕縛、キャロルJ、マヨーネ捕縛、ボブミヤ・ヘラクレレス消滅
- 10 熱烈歓迎

とはいえ、自力はこっちが勝っている。

距離を取りながらヘラクレレスとボブミヤに銃撃を浴びせつつ、キャロルJ、マヨーネの悪魔を排除した段階でそれは発生した。

「RPG!!」

入江省三の声でその方向を向くと、ランチャーを構えた衛宮切嗣の姿が。

慌てて手近なビルに入ったと同時に爆風が俺達を吹き飛ばした。

「先輩！」

死にかかった俺をマシユが抱えて起こし、俺と入江省三に戻った女神ブリジッドが、



ディアラハンをかけて回復させてゆく。

考えやがったな。衛宮切嗣。

銃が反射するならば、近くで爆発させて爆風で俺を殺そうつか。

意識があるならこうして全快まで持つていけるのだから、魔法つてのはありがたい。

同時に、聖杯戦争以上にマスター狙いが大事になってくるのだが。

「で、結果は？」

「駄目だ。」

オリアナ||トムソンもキャロルJとマヨーネにも逃げられた。

聞こえるかい？

人払いの結界が解除されたみたいで、警察から消防から自衛隊までこのあたりに殺到して、かえって見失った」

戻ったタカミチが申し訳なさそうに告げる。

俺はステンノに尋ねる。

ステンノは盾にはなれるが、鉾としては弱い。

「あの二騎のサーヴァントは落とせるわけ無いか」

「私じゃなくて、モードレッドに頼みなさいな。」

「そんな事」

「まったくだ」

「おーい！

こつちだ!!

こつちに人がいるぞ!!」

「負傷者だ！

誰か担架を持ってこい!!」

これだけ過剰戦力を用意してなお負ける。

今回の敗因は、周囲の状況を確認せずに介入したあげく、霊基データの確保の為にマシユとモードレッドを分散させた事だ。

勝てると思って分けた戦力を、衛宮切嗣が見逃すわけが無かったと。

入江省三と共に救急車に運ばれながら、俺はこの顛末を説明するために頭を抱えるしか無かった。

## 反省会

「よし。反省会だ」

冬木市新都聖堂病院。

傷などは魔法で回復させたが、かといってそれを警察や救急隊が信じてくれるわけもなく。

結局、救急病院に指定されている聖堂病院に押し込まれる事になった。

唯一の収穫は、マシユが霊基データを確保してこつちに持ってきた事ぐらいだが。

「戦力はあつたのに負けたのはどうしてか？

簡単な事だ。

バトルロイヤルで周囲に気を払っていなかった。

これに尽きる」

検査が終わつたら破れた制服を着替えて退院して良かったが、既に夕方。

下手に移動して再度襲撃を受けるのを避けて、叢雲を舞鶴基地から冬木港に持つてこさせることにした。

到着後にそちらに移動する手はずになっている。

「個々の戦力では勝っていたけど、手数ではこちらが負けていた。

特に、マヨーネの出した悪魔の排除に時間がとられたのが痛かった」

マヨーネの悪魔が5体。

こつちが3体で攻撃を防ぎ排除に成功したが、ここで悪魔を拘束されたのが痛かった。

そして、霊基データが破壊・もしくは奪取される事を恐れた俺は、マシユとモードレツドを確保に走らせたのが致命傷。

この時点で、俺の壁は叢雲とステンノでボブミヤとヘラクレスを防ぐことに。

そこでじつと潜んでいた衛宮切嗣にぶん殴られた。

「少しレベルの低い他の悪魔も出して叩くべきだった？」

叢雲の指摘に俺は顎に手を当てて否定的に言う。

可能性だが、こういう時には最悪のケースで想定していた方がいいだろう。

「キャロルJが悪魔を出していなかった。

あの場で全滅していた可能性が高いけど、場の悪魔のレベルが高かったから出さなかった可能性もある。

サマナーは悪魔が全滅すると戦力が一気に使い物にならなくなる。

あと一体ぐらいは出せたらどうよ」

COMPの未拡張だと入る悪魔は6体。

という事は、マヨーネすら最後の一体を出していなかった可能性がある。

「そして、戦力があつたのだから、戦場に突入する前に低レベル悪魔を散らして偵察をするべきだった。

つまる所、今回の反省点はそこさ」

タカミチ・T・高畑が戦場に巻き込まれていたからと、即座に介入してしまった点が反省する所だろう。

とはいえ、生き残つたし霊基データは確保している。

とりあえずはよしとしよう。

問題は、この霊基データの価値がバレたらとたんに戦争勃発という所だろうが。ノックがされてその後でタカミチが入ってくる。

「入即出さん。

来客だ。

聖堂教会の言峰神父が会いたがっている」

そうくるか。

ここは聖堂教会にゆかりの深い場所だ。

会って情報収集という所だろう。

ついでに嫌味の一つぐらい言われるかもしれないが、それは敗北という失敗のペナルティーとして受け止めよう。

「いっよ。」

入れてくれ」

なお、この病院には入江省三も入院している。

彼もタカミチも傷は悪魔の魔法で治している。

魔法バンザイ。

「おや。」

お元氣そうですな？」

「まあな。」

死ななければ、なんとかなるのが聖杯戦争のありがたい所だ。

で、下手を打った俺に何のようだい？」

冒頭からこちらの自虐のジョークを鼻で笑った言峰綺礼は要件を口にした。

「あなたが戦ったサーヴァントについての情報を監督役としてお聞きしたい」

「監督役……ねえ。」

まあ、話せる所は話しておこうか」

「ここで話す事と話さない事を考える。」

それで相手側が何を知って、何を知らないかが分かるからだ。

「とりあえず、襲ってきたのはアーチャーとバーサーカーの二体。なんとか食い止めたけど、このざまだ」

「バーサーカーとアーチャー。」

ふむふむ。

こちらが把握しているバーサーカーとアーチャーと違つたみたいだが、何か知っている？

それに、そちらのアサシンともう一人、エクストラクラスの彼女についても話して頂けるとありがたいのだが？」

当たり前追求だよな。

同時に、モードレッドについて触れていないのは、あえて触れないのかそれとも……

「このアサシンとこっちのシールドダーが俺のサーヴァントだ。」

二騎抱えている事については秘密という事にさせてもらおう」  
「なるほど。」

そちらのエクストラクラスはシールドダーと言うのか。

それで、このような状況になった事について何か知っているかね？」

これも当然の追求だろう。

それを俺は笑ってごまかす。

「そうさな。」

理由は推測できるが、それをそちらに話す根拠を提示してくれるとこちらとしても話しやすいな」

「監督役の指名では駄目かね？」

「駄目だね。」

聖杯は聖堂教会の監督役を否定した」

使い魔が控えているアサシンのハサン経由で聞いているだろう言峰璃正と遠坂時臣に言ってる。

こちらが敗者でも、情報戦では圧勝している事がこの状況を有利に持って行ける。

「大聖杯に仕組まれた隠しコードが発動している。」

今回の事態の理由はそれさ。

そっちの資料を漁ってみるといい。

残っていたらの話だな」

聖杯戦争において異常事態が発生している事は理解しただろう。

そこから、聖杯大戦のシステムに気づいてルーラーと話ができて再度聖堂教会が監視役に返り咲けるか？



向こうからすれば、大量にある言峰璃正の令呪が切り札となるだろう。

「この異常事態に共に協力するとういう選択は可能かな？」

このままバトルロイヤルが進行すると、真つ先に落とされるのが場所が分かっている令呪が一つしか残っていないだろう遠坂時臣だ。

同じく場所が分かっているケイネスや、解除されたとは言え警察や自衛隊に見張られているアインツベルンを攻めるよりも遠坂を攻めた方が楽なのだ。

そして、十字教と同盟を組んだ事がここで効いてくる。

拠点である冬木ハイアットホテルの防衛を彼らに任せることができるからだ。

「できなくはないが、条件があるな」

こちらからすれば状況の整理は絶対条件だ。

そのため、俺は当然の要求をする。

「サーヴァントを持っていない勢力について、何らかの話し合いの場を作って頂きたい。それが協力、および情報開示の条件だ」

## サーヴァントドラフト会議……の予定だった

現在聖杯戦争に介入している勢力でサーヴァントを持っていない勢力は以下の通り。

ファントムソサエティー

関東魔法協会

十字教

ガイア教

自衛隊

桜塚護

大蔵省

そんな状況でこの病院に聖堂教会の呼びかけに応じて来たのは以下の通り。

ファントムソサエティー 3

関東魔法協会 3

十字教 3

ガイア教 2

自衛隊 2

桜塚護 3

大蔵省 2

1 参加 2 不参加 3 不参加だけど情報入手

「誰も来やしねえ……」

聖堂教会の人気の無さにある意味清々しさを覚える。

タカミチ・T・高畑と入江省三はこの病院にいるのに不参加を言ってきたあたりその嫌われぶりは感心するしかない。

まあ、俺が流した情報を再度徹底させるだけのはずだから来なくていいという選択は間違ってもないわけだが。

「これは我らの不徳と致す所。

お手数をかけて申し訳ない」

まったく読ませない表情で言峰綺礼が謝罪する。

こうなると話さないのもバカバカしいので、迎えが来るまで最低限の情報開示を行っておこう。

「で、聖杯戦争の隠しコードは見つかったかな？」

「あいにく。」

本当にそんなのがあるのか我らは疑っているがね」

まだ調べだして数時間も経過していない。

それで出てきたらこっちがびっくりである。

心の中で少し安堵しながら、ソース元を偽装して俺は口を開く。

「間桐家の資料からの情報だ。」

バーサーカーが暴れたあとの現場検証で入手したという事にしておいてくれ。

聖杯戦争は、七人の魔術師と七騎のサーヴァントによる殺し合いだ。

では質問。

一人の魔術師が七騎のサーヴァントを使役できた場合、そのシステムはどうなるのかな？」

「それは不可能だ。」

そもそも、英霊を使役するそれ自体が莫大な魔力を使うからこそ、一人一騎……」

そこで言峰綺礼は口を閉ざす。

彼の情報だと二騎、実際はそれ以上のサーヴァントを抱えている俺の特異性に気づいたからだ。

「そう。」

気づいたみたいだが、一人一騎という訳ではなく抜け道や裏道がある。

これだと聖杯戦争はサーヴァントの殺し合いで事が済むのにそうならなかった」

こういう風に考えると、聖杯の意味が少し違って見えてくる。

願望機ではあるが、その願望は本来サーヴァントの為にあつたのだろう。

まさかマスター側の魔術師が独占を図って殺し合いをするなんて事を始めるとは思っていなかったあたり、始まりの御三家は魔術師の割にはお人好しでどこか抜けているというか。

話がそれた。

「で、いつか知らんが予備システムがつけられた。

同一勢力による七騎独占状況が発生した場合、更に七騎の召喚が行われてサーヴァントの殺し合いを行う。

ここからが面白いんだ。

聖杯の発動条件は相変わらず、6騎が聖杯にくべられた時で、一組の願いを叶える。つまり、残った8騎でその願いの奪い合いが発生する」

「思ったのだが、それだともう一組聖杯に願いが望める事にならないか？」

「そのとおりだ。

もうこうなると外部監督者では管理運営ができなくなるから、聖杯自らが管理サー

ヴァントを発生させて、聖杯自ら聖杯戦争を管理する。

そのサーヴァントがエクストラクラス。

ルーラーだ」

語れる事と語らない事を分けながら、俺は話を慎重に進める。

相変わらず言峰綺礼の表情は読めない。

「厄介なのが、聖堂教会がやっている外部監督と違って、ルーラーは聖杯戦争の終結において人類社会をあまり気にしない。

化物揃いの英霊達が闊歩してる異常を放置するぐらいならば、その英霊を討伐してさっさと終わらせる方に行動指針が行きやすいのは注意しておくことだ。

俺から言えるのはそれぐらいかな」

入ってきた叢雲が俺に報告する。

「迎えが来たわよ。

甘粕一尉が玄関で待っているわ」

仲間への攻撃には容赦がない自衛隊である。

衛宮切嗣による俺へのダイレクトアタックは二度目だから、道中を心配するという事なのだろう。

「じゃあ、そろそろ失礼させてもらおうよ。

良き聖杯戦争を」

俺の挨拶に言峰綺礼は何も返事をよこさなかった。

### 各勢力の行動

- 1 情報収集
- 2 情報収集
- 3 同盟交渉
- 4 同盟交渉
- 5 拠点作成
- 6 拠点作成
- 7 拠点作成
- 8 敵勢力攻撃
- 9 敵勢力攻撃
- 10 熱烈歓迎

### 聖杯戦争正規組

時計塔 (遠坂陣営 聖堂教会と同盟中 アーチャー) 3  
 聖堂教会 (言峰陣営 言峰綺礼はこっち アサシン) 10

グッド 1 バッド 2

結果 1

セイバー陣営 7

ランサー陣営 7

ライダー陣営 10

グッド 1 バッド 2

結果 2

聖杯戦争非正規組

フアントムソサエティー 6

関東魔法協会 5

十字教 9

ガイア教 2



- 自衛隊 7
- カルデア 2
- 桜塚護 8
- ルーラー 8
- 攻撃対象（自分が対象の場合1下にずらす）
- 1 時計塔 （遠坂陣営 聖堂教会と同盟中 アーチャー）
- 2 聖堂教会 （言峰陣営 言峰綺礼はこつち アサシン）
- 3 セイバー陣営
- 4 ランサー陣営
- 5 ライダー陣営
- 6 ファントムソサエティー
- 7 関東魔法協会
- 8 十字教
- 9 ガイア教
- 10 自衛隊
- 11 カルデア

12 桜塚護

13 ルーラー

十字教 6

桜塚護 4

ルーラー 1

「思ったよりお元気そうで」

「魔法つてのは便利で、死ななければ大体治してしまう。

とはいえ、焼けた服は元には戻らないがね。

また大仰な出迎えだな」

病院玄関前に居たのは82式指揮通信車で、後ろに73式中型トラックが二台。

対魔忍だけでなく普通科の分隊まで連れてきている。

「二度も襲撃を受けて警戒しない方がおかしい」

「それもそうだ」

「港まで送って、その後我々は冬木市内を第7普通科連隊と共に警備する予定です」

「なるほどね。

とりあえず港までよろしく頼みます」

そう言つて俺達が車に乗ろうとした時に、言峰綺礼が玄関に現れる。

見送りなんて殊勝なことをする輩ではないなと思つていたら、彼からこんな事が告げられた。

「お待ちを。」

よければ私も乗せて、遠坂邸に向かつて欲しい」

「……何かあつたので？」

「遠坂氏から緊急の要件だ。」

ルーラーとおぼしきサーヴァントに、アーチャーを強奪されたと」

## 優雅の代償

遠坂家に向かう際に、強奪の顛末を聞くとこんな感じになる。

ルーラーと名乗るサーヴァントが遠坂家に襲撃し英雄王が迎撃。

ここでルーラースキル神明裁決が炸裂し、『ルーラーの下につけ』という命令を令呪に受けてしまう。

英雄王は遠坂時臣に令呪を切つてこれに対抗するように命令するが、最後の令呪を切つて英雄王を自害させる事ができなくなる事を恐れてこれを拒否。

元々仲の悪かった事もあって、英雄王は完全に遠坂時臣を見限つてルーラーと共に去つてしまつたらしい。

「優雅たれ……か。」

それで負けたら元も子もないでしょうに……」

思わず出た俺のため息に言峰綺礼は何も言わない。

かわりに返事をしたのは甘粕正彦である。

「そうはいいませんが、人には譲れないものがあるでしょう」

「否定はしないけどな。」

魔術師つてのはその譲れないものが、『根源への到達』だったはずなんだよなあ」

遠坂家のもう一つの遺伝子レベルの宿命『うっかり』も絡んでいるのだろうが、遠坂時臣は魔術師としてかなり破綻している。

いや、この言い方はおかしいか。

人のふりをし過ぎている。

本気で獲りに行くのならば、間桐よろしく当主不死化というのも、アインツベルンよろしくホムンクルス量産というのも間違つてはいない。

けど、遠坂はそこまで人間を辞めていない。

その甘さが結局彼らを聖杯から遠ざけた。

「何かを手に入れる人間つて、天才でなければどこか突き抜けていないといけないんだよ」

「ほう。」

「貴方もそうだったのですか？」

「それを狂気というか努力というかは別として、その最後の一線みたいなものを越えなないとその天才の域に行けない」

「当代最高の陰陽師と名高い貴方のお言葉ならば、そうなのでしょうな」

「は？」

当代最高の陰陽師？

初耳なんだが？

「滅んだと思つた陰陽師の家を出たと思つたら、西洋魔術にも長け、式神召喚すらおこなつて、付喪神と女神を使役している時点で、こつちではそういう評価になつておりますよ。」

クズノハでは適当な女子をあてがつて、当代の葛葉ライドウという声もあるぐらい」

俺がなんて言おうか困っている中、やはり言峰綺礼は何も言わなかった。

遠坂家は破壊されておらず、遠坂時臣も無事だった。

つまり、英雄王にとっては破壊する価値すら無いものだったのだろう。

そんな屋敷の中で、敗者となった遠坂時臣は優雅な椅子に似合わぬ姿でうなだれていた。

「ああ。」

君か。

負けた私を笑いに来たのかね？」

ちらりと言峰綺礼の顔を伺うが、やはり奴の表情は読めない。

そんな彼は弟子らしく、師の遠坂時臣を氣遣う声をかける。

「ご無事で何よりです。」

まだ令呪は残っておりませぬ。

野良サーヴァントを見つけ、再契約するのならば、聖杯戦争に戻る事ができるではないですか？」

「それを俺の前で言うあたり、神父もなかなか人が悪いよな」

「はて？」

何のことですか？」

俺のツツコミと言峰綺礼のやり取りに気づいた遠坂時臣が俺の方を見てすがりつく。

その姿は優雅のかけらも無かった。

「頼む！」

君のサーヴァントを譲ってくれ!!

出せるものは何でも出す!!

言峰綺礼の口元が歪みそうになったのを俺は見逃さなかった。

愉悦をする為には、希望を与えよとききたか。

英雄王とのやり取りで自覚したのかしていないのかわからないが、その傾向は既にこうして出ていると。

「何で、正式参加者になるつもりもない俺に縋っているのかな？」

遠坂時臣さん」

この姿を間桐雁夜が見たら、さぞ溜飲を下げる事だろう。

『この顔が見たかったのだ』と。

俺は遠坂時臣を突き放す。

「それよりも、あなたの子供だった桜ちゃんの一件、児童相談所に通報しておきました。

何らかの説明を求められ……」

「それが今必要なことなのかね？」

間桐家と遠坂家の合意に基づいて行われた問題のない行為のはずだ。

そんな事は今話す事ではないだろうが！」

遠坂時臣の言動は魔術師としては正しい。

人の親としてはどうかと思うが。

詰まる所、彼の人格構成の根底は魔術師であり、その次が優雅であり、最後が人の親というだけで、追い詰められた彼は人の親と優雅という仮面を投げ捨てて魔術師として俺に縋っている。

滑稽で哀れで、その狂気にやっと彼が聖杯戦争の参加者たり得たと納得した俺が居た。



「こちらとしてはこれ以上何も話すことはない。  
失礼させてもらおう。」

言峰神父。

彼を落ち着かせて後日また話を」

「承知した」

ドアを開けて去ろうとする俺達に遠坂時臣の声が追いつがる。

その声を供養に俺は間桐雁夜の為に立ち止まって目を閉じるが、遠坂時臣にはその意味がわからないし、わかろうともしないのだろう。

「待ってくれ！」

私は何を間違えたのだ!?

準備をし、万全の体制を整えていたのに……

待ってくれ……待て……」

「師よ。」

とりあえず聖堂教会へ……」

その声もドアが閉まれば聞こえなくなる。

屋敷を出る間、ついてきていたステンノが楽しそうに笑う。

「私、ああなった人たちをたくさん見てきたわ。」

知ってる？

彼らつて最後は似たり寄つたりの道を辿つて破滅するのよ」  
くすくすくす。

考えてみれば、彼女も愉悦部員だったか。

「入即出」佐相当官。

よろしいか？

冬木ハイアットホテルで戦闘が発生した。

火災が起こつたらしく、ホテルの人間が避難している」

甘粕正彦の報告に俺はため息を深く深くついた。

叢雲の船に戻るのはまだ無理そうだ。

やばいやつにやばいものを渡すとやばい事態しか引き起  
こさない

爆弾テロ未遂が起こった冬木ハイアットホテルだが、客の殆どが当然のようにチエツクアウトをしてほとんどの客が居なくなる羽目に陥っていた。

そんな赤字必至のホテルを買ったのが十字教である。  
さすが世界宗教。 お金持ちである。

で、そのままこの冬木の地における拠点としてビットリオカゼラが率いるローマ正教十三騎士団とリドヴィアロレンツエツティ、雇われ魔術師のオリアナトムソンが住み着くことに。

この段階で、ここを拠点とし工房を構えていたケイネス・エルメロイ・アーチボルトと何らかの取引が結ばれたらしく、この共存は今の所破綻していない。

「で、状況はどうなっている？」

「近くで警護していた自衛隊員の報告では、何か書かれた紙の群れがホテルの中に入っ  
ていったのを見たらしい。」

その後、戦鬨らしいものが発生し、ホテルで火災がという報告が入っている」

甘粕正彦の報告に俺は考え込む。

式神だろう。

そして嫌なことを思い出す。

舞鶴や冬木は京都府に一応属している訳で。

京都からはそこそこ近い距離にある訳で。

「魔都京都から百鬼夜行呼び出し放題だよなあ」

「それは大変ですな。」

こちらは対策はできないので、入即出二佐相当官におまかせするしか無いというのが実情ですが」

嘘つけと俺は心の中で突っ込む。

御札なり護符なりと対魔アイテムはしっかり装備しているくせに。

そんな事をおくびにも出さずに俺は甘粕正彦に命じる。

「俺達が来るまで自衛隊員の突入は無しだ。」

冗談抜きで祟り殺されるぞ」

祟りの怖い所というか、式神を用いた祟りの要点は、その祟の正体が何なのか分からない所にある。

あげく、その術者は陰陽術を用いて暗殺をしかける桜塚護の当代と来たもんだ。

「そういえばやる……艦長は陰陽師らしいけど、何を極めたの？」

生えた設定だけにその奥を知らない叢雲が何気なしに訪ね、俺もそういえばと気になったので思い出すというか記憶に検索をかけるとろくでもない言葉が出てきて頭を抱える。

「あの駄女神め……」

陰陽師の概念には陰と陽というのがあるのだが、それを性に当てはめた術もあつたりする。

その流れと仏教や山岳宗教がマゼマゼされてできあがつたのが立川真言流。

密教系のそつちが叩き潰された結果、残った残党が陰陽師側に帰つたというのが陰陽師入即出家の流れらしい。

こまつた事に、あの時代からその手の術は需要があつた。

何しろお家大事の時代だから後継者ができるかできないかに直結したからだ。

陰陽師という貧乏公家の仮面をかぶってほそぼそと、その内実はかなり裕福に家を続けていた入即出家は、維新後の文明開化に合わせて時代の影に消える。

そんな中、家を畳んだと思われた俺が西洋魔術まで修めて帰国してきたのだから、そりゃそつち方面の人々は目の色を変えるわけだ。

なお、俺の西洋魔術もそつち方面に特化しているらしく、英国古代のケルトよりも古

い女神信仰あたりがベースになっている。

「……………え？……………ちよつと……………」

「あらあらまあまあ」

「先輩最低です」

耳打ちして話してやると叢雲は顔を赤め、ステンノは面白そうに、マシユは恥じらいながらも二次創作でできた言葉を面と向かって俺にいう。

そりやそうなるわな。

時計塔のコネ 1

1 ある

2 ない

イギリス清教とのコネ 1

1 ある

2 ない

魔法省とのコネ 1

1 ある

2 ない

ヘルシング機関とのコネ 2

1 ある

2 ない

あ。

がつつりと英国のコネが生えた。

というか、すばらしい蝙蝠ぶりである。

英国で便利屋として暮らして、母国に錦を飾って帰って見たらという所だろうか。

コネはないけど『第二次あしか作戦』発動したら呼ばれるな。これは。

「お取り込み中の所悪いのですが、話をもとに戻しても？」

「ああ。すまない。」

たしか十字教の連中、フアントムソサエティーと一戦していたが桜塚護と組んだ？

いや、それは無いな。

桜塚護は基本一人だ」

「そつちも戦闘が発生しています。」

結果は……」

1 フアントムソサエティー勝利

- 2 1＋オリアナ死亡
  - 3 1＋オリアナ捕縛
  - 4 1＋オリアナ逃亡
  - 5 十字教勝利
  - 6 5＋キャロルJ、マヨーネ捕縛
  - 7 5＋キャロルJ、マヨーネ死亡
  - 8 5＋キャロルJ捕縛、マヨーネ逃亡
  - 9 5＋キャロルJ逃亡、マヨーネ捕縛
  - 10 熱烈歓迎
- 結果 8

「……十字教側が勝つたらしく、キャロルJを捕縛したそうです。

交戦にあたって、オリアナIIトムソンは駆けつけた自衛隊に投降しています」

こつちが釈放せざるを得ない圧力を後でかけるつもりなのだろう。

おまけに切り捨てOKのフリー魔術師の使い方として実に正しい。

まさか穴熊を決め込んだ拠点に突っ込んでくる奴が居るとは思わなかったのだろうか。

車が止まり、ドアを開ける。



見た限り冬木ハイアットホテルは壊れているようには見えないが、濃厚な死の瘴気が俺の背筋を凍らせた。

「あの桜塚護何を呼びやがった!？」

「たまたらず俺は叫ぶ。」

十字教の主力騎士団とランサーを従えたケイネス・エルメロイ・アーチボルト相手に特攻できる相手なのは間違いが無い。

「ひっー!」

対魔忍の井川サクラの近くにはあった蜘蛛を俺は慌てて踏み潰す。

その蜘蛛は靴をのけると式神の札と数枚の桜の花びらに変わる。

「人払いの結界を張るから、対魔忍は手伝ってくれ。」

出てくる蜘蛛は一匹たりとも外に出すな。

自衛隊員は下がって、周辺の避難誘導を頼む」

叫びながら、俺は舌打ちをする。

出した正体が分かってしまった。

「艦長。」

「何だかわかったの?」

「ああ。」

考えられる限り最悪のものを出してきやがった。

土蜘蛛だよ」

古のまつろわぬ民たちの総称であり、その怨念が妖怪化したもの。

祟り華やかなりし頃、鬼と共によく使われた悪魔である。

「あら？」

何が最悪なのかしら？」

ステンの疑問に俺はホテルの方を見ながらぼやく。

桜塚星史郎の狙いが分かったからだ。

「聖杯戦争のサーヴァントは一応西洋魔術に基づいてサーヴァントを選んでいるんだが、あれを魔力の塊として別術式で呼び出すならば、この国の妖怪とて呼び出せるんだよ」

彼がどうして大聖杯の前で呪術をやろうとしたか、やっと理解する。

彼にとって汚染された聖杯の魔力なんてとっておきのごちそうにしか見えないだろう。

そして、己の術式で遠慮なく祟り神を呼び出した。

タイミングも彼にとって最高だった。

大聖杯を守っていたアーチャーはもはやいない。

「こうなるとただの土蜘蛛ではなく、地域補正つてのが加わる。何しろ大和朝廷に弓引いた方々の怨念だ。

名無しの土蜘蛛ではなく、ご当地の怨念たつぷりの土蜘蛛だ。さぞ使いやすいだろうな」

悪魔たつぷりのメガテン世界だからこそ、地域伝承や風俗はちゃんと頭に入れてきている。

この地にもよりにもよつてという土蜘蛛さんがいらつしやつたので多分その方だろう。

「陸耳御笠。

この地にて大和朝廷に抵抗し続けた土蜘蛛の大将だよ。多分」

## 羹に懲りて膾を吹く

- 1 桜塚護勝利
  - 2 1＋ランサー消滅
  - 3 1＋ケイネス・ソラウ死亡
  - 4 3＋十字教全滅
  - 5 ランサー勝利
  - 6 5＋陸耳御笠消滅
  - 7 5＋陸耳御笠逃亡、桜塚星史郎場所確認
  - 8 5＋桜塚星史郎場所確認
  - 9 5＋陸耳御笠逃亡
  - 10 熱烈歓迎
- 結果 4

俺は冬木ハイアットホテルに誰も踏み込ませなかつた。

前になし崩しに介入して衛宮切嗣に横っ面を引っ叩かれたのは今日の昼なのだから、

警戒し過ぎる事はない。

その声が周囲に轟いたのは遠巻きに囲んだのが終了した後の事だった。

「……までか……マスター、どうか……！」

この声はランサー敗北の声。

負けたか。

搜索隊を編成する為に、クー・フリーンとゲンブとイスラフィールをCOMPから出す。

こいつらならば、たとえやられてもCOMPに戻る事ができるからだ。

「生存者が居たら報告しろ。」

陸耳御笠が居たら、交戦せずに帰ってこい。

サーヴァント一騎と魔術礼装万全の十字教騎士団が負けた相手だ」

二手に分けて、クー・フリーンとゲンブは入り口から。

イスラフィールは羽を使って空からホテルの中を覗くことに。

結果はすぐにわかった。

ホテル室内全体にばら撒かれた桜の花びらの中、ホテル内部に居た全員が苦悶の表情

で事切れていたのだから。

これが桜塚護の当代である桜塚星史郎の力である。

こうなると後は俺達が出す必要が無く、警察に任せることになるだろう。

引き上げを命じようとした所、思いついた事があって、ハイピクシーを呼び出す。

彼女の宝探しで漁った結果、案の定あったのは使徒十字。

やばくなったら使うつもりだったのだろうが、その切り札を切る前にリドヴィアⅡ口  
レンツエツティ以下十字教全員はケイネス・エルメロイ・アーチボルトとソラウ・ヌア  
ザレ・ソフィアリの巻き添えを食う形で全員殺される結果となった。

別宗派である聖堂教会あたりは祝杯をあげているかもしれないな、なんて思いながら、使徒十字を回収して俺達は冬木港にやってきている叢雲に帰ることにした。

夜が明けた朝、この冬木ハイアットホテルの一件は報道管制が敷かれたおかげで表に出ることは無かった。

とはいえ、百人近い死体がホテルから運び出される訳だから気づかないわけもなく、市民は更に怯える結果になる。

「なんだ。」

そんな面白い事になっておったのか」

戻った舞鶴基地の食堂にて征服王が笑いなながら飯を食べている。

昨日だけで盤面は派手に動いた。

フアントムソサエティーが攻撃を受けて打撃を受け、現場で介入しようとした俺達が衛宮切嗣の横殴りをくらい、アーチャーがルーラーに強奪され、ランサーがマスターごと潰されたのだから聖杯戦争中盤の動きとしてある意味当然なのかも知れない。

「そういうえば、お前ら何か騒ぎを起こしたって聞いたが？」

俺が味噌汁を飲みながら話を振ると、征服王が申し訳なさそうに頭をかく。

いかつい体だが、その本心は子供のように純粹なのがこの征服王である。

「うむ。」

陸自が持ち込んだTAなるものを見てつつい興奮してしまつてな。

ぜひ譲ってもらおうと押し問答をしていたら坊主が令呪をもつて叱つてな。

反省はしている。今は」

その言い草にとりウエイバー・ベルベットの顔は暗い。

ランサー陣営全滅の報告を聞いて思う所があつたのだろう。

「ケイネス先生の遺体は？」

「臨時の遺体安置所を用意して司法解剖の後、英国に送られることになるだろう。」

報告は俺がしよう。

時計塔にもコネはあるから、君に迷惑はかけないよ」

コネの強度 100ほど強い

時計塔のコネ 8

イギリス清教とのコネ 43

魔法省とのコネ 39

外様の便利屋なので本当に下のコネしか無いが、ある意味だからこそこつちに帰つてこれたとも言う。

そんなのでも組織からすれば報告をあげる分には苦勞はしないだろう。

「すみません！」

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが死んだつて本当ですか？」

「そんな場所に乗り込んできて俺に問いかけてくるのはオルガマリー・アニムスファイア。  
ア。」

霊体なのに無茶をするなあなんて思っていたら、後ろに藤丸立香と向こうのマシユがやつて来るのが見えた。

「事実だ。」

遺体を確認したよ」

俺がそれだけと言うと、オルガマリー・アニムスファイアは呆然とした顔で床にへたり



込む。

向こうのマッシュが彼女を椅子に座らせようとしているのを見ていたら、藤丸立香が俺にその理由を告げた。

「オルガマリー所長。

使い魔でケイネスさんと手紙のやり取りをしていたみたいで。

悩んでいた所を励ましてくれたとかで心の支えになつていたんです」

カルデアが攻撃を受けて、レフが裏切つて、己の体が死んでいる中で、縋つた糸も切れたと。

それでもまだ彼女には救いがあるあたり、色々と思う所はあるのだが。

「こっちのロリンちゃんには話したが、人形師の蒼崎橙子の工房の連絡先だ。

彼女の魂も入れる器を作っているから、まずはそのあたりから解決すると良い」

カルデア組が動かない理由の一つに、オルガマリー所長の存在がある。

レフが裏切つた事実だけでなく、彼女が霊体であるという事も本格的な行動に踏み出すのに躊躇するのに十分な理由だった。

まずはそれを解消してやる必要がある。

「器そのものの作成にはもうしばらく時間がかかるだろうから、その間はここを離れて東京の方でゆっくりしてもいいかもしれない。

これから数日、ここは戦場になるだろうからね」  
ある意味正しい聖杯戦争が始まったとも言える。

だが、藤丸立香は首を横に振った。

「いえ。」

それならば、私達もここに居て悲劇を防がないと」

そういえばこんな奴だったな。

この最後のマスターは。

一応念を押す。

「相手はサーヴァントだけでなく百人近い魔術師クラスを全滅させる事のできるひとでなしだぞ?」

「それでも、人理焼却するろくでなしよりマシでしょう?」

「たしかにそうだ」

静かに闘志をみなぎらせる藤丸立香に刺激されたか、ウェイバー・ベルベットも立ち上がる。

「僕も何かできる事があつたら手伝わせてほしい!」

「よく言つた坊主!!」

「っ!叩くなライダー!!」

対魔忍の隴を呼んで、対魔忍を護衛にオルガマリー所長を蒼崎橙子の工房に送り届ける事を命じる。

征服王がその後で俺に尋ねてきた。

「で、お主はこの戦をどう立て直すのだ？」

「我々が失っているのは主導権だ。」

これを奪回しないと、好き勝手に暴れられる」

最大勢力を保持しているのに後手後手に回っているのはそれが理由である。

その主導権奪回の為にはやらねばならない事がいくつかあった。

「円蔵山にある大聖杯の確保。

ここを押さえないと、桜塚星史郎の呪殺攻勢を完全に防ぐのは無理だ。

で、式神の陸耳御笠を抑えるには、地元補正から陰陽師の力を借りるしか無い」

俺はそのまま藤丸立香を見る。

彼女がマシユとキヤスターク・フリーンしか居ないという事は、あと一騎レアサーヴァントが出るはずなのだ。

源頼光や坂田金時あたりが出たら、冬木については勝利確定なんだが、彼女の長い旅を考えたら、彼女が納得できるサーヴァントを引いてくれた方がいいので俺はあえて黙っている事にした。

「ならば、あれに匹敵する陰陽師を呼んでくるさ」

安倍晴明か芦屋道満か。

それが無理ならば鈴の木無山あたりを。

皇昴あたりを呼びたいが、彼の戦場は東京だからなあ。

桜塚星史郎も東京が主戦場だからとつとと帰ればいいのにと思ったが、口に出すことは控えた。

# 一手遅らせ一駒入手

「ああ。

それはこつちに入れておいてくれ。

それもだ。

貴重品だから大事に扱えよ」

ご丁寧に、桜塚星史郎はサーヴァントと人だけを殺していったので、魔力炉だの礼装だのがまるまる残っていた。

それらを保管するという名目でありがたく接収する。

特に二十四層の結界と三基の魔力炉は有効に活用させてもらおうことにする。

なお、悪霊と魍魎はしっかり殺され、トラップは綺麗に破壊されていた。

「えー？

異界化させちゃ駄目なのかい？」

魔力炉の設置にロリンちゃんがんばーたれる。

異界化については、自衛隊側からの反対が理由である。

「魔術とやらで広いスペースをつくってそこに物をおくのは分かります。

では、その魔術が切れた場合、そこに置いていたものはどうなるの？

炉というからには何かのエネルギー源なのでしよう？

そういう危ない事をせずにスペースの確保をお願いします」

新島副長補佐の反対にロリンチちゃんは、

「私がそんなヘマをすと思うの!？」

と激怒するが、新島副長補佐はにべもない。

この時期流行しようとしていたある本の一節を天才に言い放った。

「失敗する可能性のあるものは失敗するのです。

我々はその失敗を許容できません」

なお、海上自衛隊の前身たる大日本帝国海軍は、天才という綺羅星の連中を使って開戦初頭破竹の進撃を進めていたが、彼らを消耗し尽くした後に米国の物量に押しつぶされたという過去を持つ。

結局、後部主砲を取っ払ったので不要になった後部弾薬庫跡に魔力炉を一基設置することになった。

これは叢雲の機関から生まれる電力を魔力に変換するようにロリンチちゃんお手製の改造がなされているのがポイント。

魔力炉のもう一基は、ロリンチちゃんの居城であるシャドウ・ボーターに搭載され、最

後の一基と結界はカルデアにレイシフトで回収されることになった。

「うちが払うわよ。」

請求書を時計塔のお父様の所に送って頂戴！」

ありがたく横領する事になった魔力炉と礼装だが、エルメロイ家への支払いとしてオルガマリー所長がまた勝手にアニメスフィア家にツケるといふ荒業で合法化することに。

別世界線とは言え、アニメスフィア家を継承して何処にどれだけの財産があるか知っているのが彼女の強みであり、アニメスフィア家が騒いだ時には既にカルデアに帰っているという寸法。

たくましくなったと言うか、可哀想にと言うべきか。

そんな彼女が切った俺の人形代の数億円の小切手はしっかりと引き落とされたから、ロードと呼ばれる連中の財の凄さを思い知る。

まあ、その後で苦勞するのは俺なんだろうが。

徹夜後叢雲に戻った俺達は仮眠を取り、起きたのは午後三時。

今度は舞鶴基地に連れてこられたキャロルJとオリアナ、トムソンに面会に行く。

「護国組織のサマナーが何か用か？」

キャロルJは警戒の色を隠さない。

平崎市の一件に関わっているぐらゐは情報として入手しているのだろう。

下つ端なだけに切り捨てられたかなと思つて、探りを入れてみる。

「これもお役所仕事でな。

どうせお偉方あたりが手を回すんだらう？

おとなしくしているんだな」

「まあ、仕事はしたと思うがな。

相手がちゃんと逃げたかどうか心配だけどな。

この仕事が終わつたら、足でも洗うさ」

下つ端ゆえに切り捨てられて、それゆえにある意味生き残り成功するのがこのキャロルJだ。

どうやら捨て駒として送り込まれ、深いことは何も知らないらしい。

ならば、事が終わるまで三食昼寝監視つきのバカンスを楽しんでもらおう。

「あら？

この国の軍人さんかしら？

尋問でもするの？



それとも、体に聞いちゃう♥」

オリアナⅡトムソンはこんなエロエロキャラだが、同時に目的のためなら平気で体を使うという思考の持ち主でもある。

ついてきた叢雲とステンノとマシユの視線がきつくなつたのを感じて、俺はさつさと要件を切り出した。

「お前の雇い主である十字教の騎士団と司祭、全員殺されたぞ。

組んでいた魔術師ごと」

俺を誘っていたオリアナⅡトムソンの表情が消えた。

俺は椅子に座って、契約書を机に置く。

「で、雇い主が消えたお前をこちらは雇いたい。

何も人を殺せとか悪を成せなんて言うつもりはない。

そちらの仕事を引き続きして欲しいだけだ。

要するに、雇い主は変わるけど、君の仕事は変わらないという訳だ」  
一旦言葉を切るとオリアナⅡトムソンが机に胸を置いて挑発する。

「断つたら？」

「国外退去処分。

穏便だろう？」

盤上の駒が多すぎて状況把握が出来ずに、こちらが後手に回るのが一番まずい。

国外退去処分で盤上から出ていってくれるならば、何も言うことは無い。

「何をさせたい訳？」

「君が戦った相手であるフロントムソサエティー。」

その本拠はここではなくてね、天海市にあるんだ。

そこで好き勝手に暴れてもらいたい」

マヨーネが残っているフロントムソサエティーの排除が目的だ。

この痴女がマニトウ計画が進んでいる天海市で暴れたら、いやでもマヨーネは帰るし、増援が送られることも無いだろう。

その間にこっちは終わっているはずだ。多分。

- 1 提案を受ける
- 2 提案を受ける
- 3 提案を受ける
- 4 提案を受ける
- 5 提案を拒否する
- 6 熱烈歓迎

## 結果 3

「いいわ。」

あいつらとは因縁があるし、乗ってあげる」

「良かった。」

向こうには東風谷早苗という知り合いが居るから、彼女と合流するといい。

関東の拠点として横浜の隣にある平崎市のホテル業魔殿を使ってくれ。

俺の名前を出せば問題ないはずだ」

ドアの鍵を開けたまま俺は出ようとし、オリアナ・トムソンは後ろから声をかけた。

「あんた。」

結局何がしたいわけ？」

立ち止まって、彼女を見ずに俺は茶化した。

窓の外はもう黄昏れており、また夜がやってくる。

「強いて言うならば、悪党の敵ってやつをやっているだけさ」

## 藤丸立香のレア鯖

カルデア陣営はマシユの他に野良サーヴァントだったクー・フリーンしか無く、ゲム的に言う所のリセマラ鯖が居ない。

という事は、ガチャの時間である。

「いいのかい？」

霊基データを使わせてもらって？」

「構わないさ。」

元々これはそっちの技術だ。

データそのものはロリンちゃんやんがバックアップを取っているしね

彼女の旅はこれからなんだから」

「ありがとうございます」

モニターしていたダ・ヴィンチちゃんに霊基データのコピーを渡し、カルデア式の召喚システムに組み込む。

冬木式とカルデア式の英霊召喚の違いは、カルデア式は英霊のエネルギーを外部に任せていることで、英霊の長期存続を可能にしたという所にあるだろう。

その為、マスターだけでなく英霊の存在を維持し続ける為にカルデアのオペレーションルームは常に修羅場場っているのだが……まあそれは置いておこう。

もう少し補足すると、野良サーヴァントは基本そのエリアで発生した抑止力、今回の場合は冬木の聖杯戦争がめちやくちやになったのでそれを何とかするために抑止力が座から英霊を引っ張り出したという形になっているので、冬木の聖杯戦争が終結したら彼らは座に帰る事になる。

その流れでいうと元が野良サーヴァントだったモードレッドとドレイクも一旦帰る訳だ。

カルデア式の場合は使い魔、もつとぶつちやけると今俺達の居るメガテン世界の悪魔召喚に近く、術者の使役という形で契約が行われるのでそちらで再召喚すると経験や記憶を持って、契約を解除するまで存続する事になる。

そういう意味からも、カルデア式召喚の中核である霊基データと、その維持に必要な魔力炉は絶対に必要だったのだ。

「それでやる夫先輩。

具体的にどうするんですか？」

先輩。

中々いい響きであるが、藤丸立香から言われると色々と考えているものがある。

マシユとかぶるからと名前をつけて先輩と呼んでもらうようにした。

それはさておいて、彼女の質問に俺は少し困る。

召喚陣は叢雲のヘリポート。

カルデアの設備だったシャドウ・ボーダーがまだ乗っているのもそれを中継してカルデアとラインが繋げるといふのと、叢雲に搭載された魔力炉を補助として使えるというのが理由である。

その為、魔術の秘匿はガン無視で進められている。

「呪文とか儀式とか全部機械に任せているから、召喚陣の前で祈っていればいいんじゃない？」

適当に俺が答えたら、異を唱えたのがウエイバー・ベルベット。

ちゃんと儀式で征服王を召喚しただけにこの面子で一番説得力があったりする。

「待てよ！

召喚に際しての触媒は？

呪文すら言わないのか!？」

当たり前のように見物に来ていた征服王コンビだが、正当な魔術師を目指しているウエイバーはこのカルデア式召喚に疑念を呈す。

確かに一理あるなと思つて俺はふと考えた。

「触媒は、こつちの靈基データ。」

「呪文は正直言わない方が安定するんだよなあ」

「安定？」

「このあたりは女神転生の概念だ。」

「向こうも悪魔召喚という形がある。」

「呪文や儀式を正確に間違いない言い続けるのが人には難しく、その使い魔との契約は文字通り悪魔との契約だ。」

「だったら、それを機械に任せてしまった方が間違いないんだよ。」

「科学はそういう方向で魔術すら取り込んだ」

「……」

「そりゃ、メガテン世界だと Fate 世界は唾然とするだろう。」

「召喚するものは似たようなものであるが、明らかに安定性が違う。」

「魔術師というのは本質的に孤独なものだ。」

「しかも力の根源が神祕の秘蔵と絡んでいるから、必然的に一人でなんとかする形でしか大成しない。」

「現代科学文明は、情報化と機械化を前提にした組織化でこの人間という種を覇者に押し上げた。」

「聖杯戦争のクラススの概念はまさにそれだ。

英霊そのものをフルに使えないから、クラスというものに押し込める」

「いいですか？やる夫先輩。」

今、ウェイバーさんから召喚呪文のメモを見せてもらったのですが、私、祖が分からないのですけど？」

数合わせの素人魔術師としてカルデアに呼ばれた彼女だから、祖なんて呼べる一族はないわけで。

ここに来てカルデア陣営が確保している聖晶石は6つ。

ならば召喚は二回出来る計算になる。

「せっかくだから、最初は藤丸さんが呪文を読んでやってみようか。

祖はありがたい事に、俺たち共通のお方がいらっしやるし」

「誰です？先輩？」

俺のマシユが首をかしげて尋ねたので、俺はいたずらっぽくその御方の名前を告げた。

「我ら日本人の総氏神様たる天照大神様さ」

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我らが氏神天照大神様。」



降り立つ風には壁を。 四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「閉じよ（みたせ）。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

「—— Anfang (セット)」

「—— 告げる」

「—— 告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

召喚陣が光る。

おお。

虹色。

星5レア来たこれ。

「新選組一番隊長長。

沖田総司、推参。

あなたが私のマスターですか……え、羽織？

それが何処かにいってしまいました……」

藤丸立香は見事に日本鯖を引っ張ってきた。

桜セイバーである。

あ。

笑顔のくせに眺めていた連中の何人かに即座にガン飛ばしてやがる。

さすが新選組。

「もう一個あるけど、こっちは呪文を唱えずにやってみるか」

さて、なにが出て来るか……

「サーヴァント・アーチャー。」

「召喚に応じ参上した」

あ。

これ、地縁で出てきたな。間違いなく。

## 状況整理

夜が近づくに連れて、どう動くかの選択に迫られる。

ここで穴熊は悪手だ。

最大戦力ゆえに、標的になるのは目に見えているからだ。

無理しても攻めないといけない。

という訳で、状況を再整理する。

聖杯戦争正規残存鯖

セイバー

アーチャー

アサシン

ライダー

ランサーが脱落したので、残り四騎。

序盤戦から中盤戦に移ろうかという所だろう。

「征服王。」

「あんたならどこから叩く？」

「そうさな。」

「勝つだけならば、もうしばらく共倒れを狙いたいところだが、そうもいかんだろう。」

「叩くならばセイバーだろうよ」

「その理由は？」

「奴らが陣を構えているからだ。」

「このアインツベルンの森を落とす事で、セイバー陣営を引きずり出す。」

「こちらがここを戦場にする事で、戦場を選べるというのが大きいな」

「当たり前のように会議室に陣取る征服王に話を振り、征服王はがははと笑いながらこ

ちらの考えを読み切った。

「そう。」

「先攻だからこそできる主導権の確保である。」

「この基地に誰かが攻めてくるかどうかは正直半々という所だろう。」

「だが、こつちがわざわざ出向いたならば、横殴りをしかける連中はきつと現れる。」

「街から離れているというのも都合がいい」

「そこまで言って、征服王は俺にいたずらっぽく笑いかけた。」

「とっころでだ。」

攻める前の余興で酒宴を開きたいのだが、樽で酒を都合できぬか？」  
あ。

こいつ聖杯問答をするつもりだ。

聖杯戦争不正規残存鯖

セイバー モードレッド

アーチャー ポブミヤ

ランサー クー・フリーリン (悪魔化)

キャスター クー・フリーリン

ライダー ドレイク

アサシン ステンノ

バーサーカーヘラクレス

ルーラー 天草四郎？

シールダー マシユ

マシユ

やる夫

ルーラー

やる夫

藤丸立香

やる夫

やる夫

ルーラー

藤丸立香

やる夫

問題はこっちの不正規鯖だが、丸々残っているのが厄介である。

とはいえ、元が野良鯖が多いから、聖杯戦争が解決したならば帰ってゆく連中も多いわけ。

むしろ、中盤戦の山場は俺たちを含めた不正規鯖のつぶしあいこそ本題だと、判断したほうがいいだろう。

「やっぱり狙うとしたら俺だよな。」

俺を落とせば5騎叩き落とせる計算になるのだから」

悪魔化しているクー・フリーンやデミサーヴァントのマシユの扱いなど不確定要素もあるが、それでも三騎が聖杯に帰る計算になる。

ルーラーが聖杯に願うのならば、俺の攻略で上がりだ。

第三勢力の妨害がなければだ。

「ここで桜塚星史郎の存在がルーラーにとっても邪魔になってくるわけだ」

俺が呟く。

彼の式神である陸耳御笠は大聖杯の魔力を使って動いている。

ランサーが落ちたから、今は三騎分の魔力で動く大妖怪と言っていていいだろう。

聖杯から呼ばれたルーラーである天草四郎はそれを知る立場に居るから、俺を落とし桜塚星史郎が強大化する事を許容できない。

俺とルーラーに一時的共闘関係が発生する条件がここに成立している。

「問題は、あの陰陽師に対抗できる法力者が居ないことなんだよなあ」

「あなたが出ればいいじゃない♪」

俺のボヤキにステンノが突っ込むが、あんな対人類最終決戦兵器相手にサシで戦うつもりはない。

「やつが聖杯から出た正規ルーラーってのがポイントさ。」

聖杯の現状を奴は把握できる」

もし天草四郎ならば、別世界で聖杯戦争に勝ちながらもその願いが叶わなかった事を知っているだろう。

という事は、最後の一人になるまで手を止めるつもりはない。

ここも俺たちにとって大きなポイントになる。

「カルデアの人たちには何も指示を与えなくていいの?」

叢雲の言葉に俺はあっさりと言った。

ある意味藤丸立香を信じて。

「いっや。」

彼女は主人公だ。

レア鯖もついたら、それぐらいできないと先の戦いはきついだらう?」



聖杯戦争鯖未所持介入勢力

関東魔法協会

天草式十字凄教

ガイア教

自衛隊

桜塚護

大蔵省

フアントムソサエティーはオリアナ||トムソンを天海市に送ったので撤退するだろう。  
う。

今日明日はともかく数日後には居なくなるだろうから、ひとまず除外する。

桜塚護はともかく、関東魔法協会と自衛隊と大蔵省と天草式十字凄教は組織的にはともかく舞鶴基地で繋がっているのが大きい。

問題は、それで桜塚屋史郎相手に勝てるかという所なのだが……甘粕正彦が覚醒すれば勝てるが、藪をつついて蛇を出すようなものであまりしたくはない。

「彼らについては冬木の治安維持があるから大っぴらに動けないってのもあるんだよなあ。」

しばらくは後手でいいだろう。

やっぱり、陰陽師は要るな。

俺以外に」

1で見つからず、100で見つかる

鈴の木無山 9

矢部野彦磨 35

忍野メメ 63

役小角 93

宮本武蔵 65

的場静司 47

考えてみればメガテン世界だから役小角は居るな。協力を頼めるかはまた別だが。臥煙伊豆湖も居るなら、忍野メメもいるよなあ。

そして、世界転移者の宮本武蔵も捕まえられるかも知れない。

「よし。」

この三人に的をしばって搜索をかけてみるか」

搜索判定 上の数値より以下なら発見

忍野メメ 27

役小角 24

宮本武蔵 70

探せば見つかるもので、なんとか忍野メメと役小角を見つけることができた。

臥煙伊豆湖に言われたらしく、忍野メメについては舞鶴基地まで尋ねてきてくれたのである。

「やあ。

待ちかねたよ。軍人さん。

いや、同業者とは呼びたくないな。

ストレンジャーと呼びたいのだけかどうか？」

## アサシン掃討戦

「さてと、とりあえず僕を探したという事は、桜塚護にぶつけるつもりなのだろうが、あいに僕一人であの桜塚護をどうにかできると思ってもらっては困る」

自衛隊基地にもかかわらず、ゆるいアロハシャツ姿の彼は、さも気楽に己の無力を言つてのけた。

かといって、それで本当に無力ならば彼はこんな所に出てくる訳もなく、その目は達観しているようで諦めていない意思が宿っている。

「そつちの仕事については臥煙さんから話を聞いている。

で、穏便に事を進めたいというのは僕たちも一緒だ。

その上で、桜塚護をなんとかしようという話になるわけだ」

「そのなんとかできる手段がないから、貴方を探したんだがなあ。

忍野メメさん」

「臥煙さんの見立てによれば、なんとかなるのは貴方だけで、それもサイコロ片手の博打に等しいと来たものだ。

それを避けたいから、こうして僕なんかまで呼んだと。

ある意味正しいが、ある点を見逃している。  
僕ができるのはそれを教えることぐらいさ」

「ある点？」

何を見逃したと俺が考える中、忍野メメはあっさりとそれを告げた。

たしかにそれは盲点だった。

「彼、ガイア教の雇われだろう？」

なんでそつちの方から手を回さないのかい？」

そして、それは自衛隊とガイア教の繋がりが、つまり自衛隊のクーデター計画という政治的によばい話を意味している。

それを忍野メメは、いや臥煙伊豆湖は知った上で俺に話をふつたと見ていいだろう。

「その話をするのならば、忍野さんの立ち位置を一度確認しておきたい。

貴方はどの未来を選ぶおつもりか？」

俺の質問に忍野メメはニヤリと笑った。

当たり前のことを聞くなよと言いたげな表情で。

「どつちの未来が正しいなんて、判断する方法は本来は無い。

自分の正しさを証明するなんて、この世には存在しないんだ。

その上で、そんな事を僕に尋ねるのかい？」

「それもそうだ。

忘れてくれ」

俺は頭を下げて忍野メメに謝罪する。

その上で再度、彼に協力を求めた。

「冬木における被害を減らしたい。

協力してくれ」

「それで僕は具体的に何をすればいいのかい？」

「舞鶴基地の防衛と、冬木の霊的災害における救助。

あとは、ここの人間達にこの国の神様について語ってやってくれ」

片手を上げて俺は部屋を出る。

そして、一言。

「モーさん。

殺れ」

その一言で、俺を監視していたアサシンがモードレッドの一刀によって殺される。

方針は決まった。

「で、マスター。

全部殺っちゃっていいのか？」

「ああ。」

冬木市内に配置されているアサシンを全員殺してこい」

「そうこなくっちゃ！」

それだけ言つてモードレッドは消える。

こつちがアサシンを聖杯に落とせばそれは桜塚星史郎の戦力強化につながる。

放置してもセイバーがライダーが近く聖杯に落ちるからシャレにならない事になる。

天草四郎はそれを許容できないから俺への攻撃ではなく、桜塚星史郎への攻撃を決意せざるを得ない。

「やる夫先輩！」

俺の決意を察した藤丸立香が近づいてくる。

後ろに居た桜セイバーがさっきの一撃を見たらしく、人斬りの顔に戻っていた。

「君たちは好きに動くといい。」

俺たちは、今夜聖堂教会に乗り込んで、アサシンを落とす！」

「お供します。やる夫先輩」

ちよつとうれしいと思つてしまつた自分が居た。

それを察したのか、俺のマシユが盾を持ってアピールする。

「先輩の体は私が守ります！」

「っ!?!」

両方の脇腹に良い肘が入った。

叢雲とステンの作業である。

「あらあら。

モテる男はつらいわね」

「本当。」

真つ先に思い浮かべないといけない人を忘れているんだから」

笑顔で言い放った二人の一言に藤丸立香とマシユが一步退いた。

アサシン掃討戦

50%以上で成功

やる夫

やる夫の仲魔 18%

ステンノ 1%

叢雲 2%

モードレッド 10%

マシユ 6%



藤丸立香

沖田総司 6%

エミヤ 7%

クー・フリーン キャスター 6%

マシユ 3%

合計 59%

深夜にかけて冬木市全域で行われたアサシン掃討戦は数の暴力を持つアサシンと、それ以上の数の暴力を持つ俺たちとの戦いとなって、順当に俺たちが勝つ結果になった。

冬木港に接岸した叢雲を司令部に、各所にサーヴァントを展開し、偵察・監視任務についでいたアサシン達を掃討する。

モードレッドが暴れ、沖田総司がそれに刺激を受け、地の利を得ているエミヤが確実に仕留めてゆく中、逃げるアサシン相手にステンノは追う機動力がなく、叢雲は民間への被害が出ないように考慮した結果、不調な結果に終わる。

かくして、半分近くを叩き潰した結果、アサシン達は消えて本拠である聖堂教会に集結している事が確認される。

数を頼みにした彼らが一箇所に集まった時点で彼らの勝ちは無くなった。

最後の一人が、沖田総司の無明三段突きで消えた時、東の空が明るくなってきた所だった。

「これはどういう見かね!？」

アサシンの消滅を確認してから、聖堂教会を取り囲むと主である言峰璃正が声を荒げて出てくる。

その後ろに保護されている体裁をとっている、言峰綺礼と遠坂時臣の二人が居る。

「どうもこうも、最初に脱落したはずのアサシンのサーヴァントが残っていたから処理したままですが？」

おまけにずっと、自衛隊基地に入って偵察をしていた。

掃討されて当然でしょう?」

アサシンのマスターであった言峰綺礼が敗退したという設定は未だ生きていた。

そこを誰も突かなかったというのもあるが。

だが、圧倒的不利な状況でそこを突かれると聖堂教会の立場が完全になくなる。

中立の監督役の立場が崩れるからだ。

そこで遠坂時臣が一步前に入る。

貴族らしく優雅な物言いで俺たちを非難した。

「あのアサシンは私が再契約したものだ。

その契約は令呪によってなされており、正当なものだ。

それを掃討したのだから嚴重に抗議せざるを得ない」

その抗議であわよくばこちらのサーヴァントを一騎よこせと言ってくるのだろうか。

もしくは、カルデアの召喚システムの利用か。

けど、俺はその言葉を待っていた。

「なるほど。」

では、サーヴァントを自衛隊基地に侵入させた罪は、遠坂時臣さん。

貴方が背負うんですね？」

「えっ？」

こんな時のために散々アサシンを見逃していたのだ。

遠坂家の遺伝子に刻まれたうっかりは見事なまでに発動した。

遠坂時臣の手に手錠がかけられる。

聖杯知識だろうが、実に手早くそれをやったのは、元新選組の沖田総司だった。

「基地侵入およびスパイ行為で貴方を逮捕します。

連れてゆけ」

「待ってくれ！」

状況が理解できない言峰璃正の前に現れたのは、大蔵省の入江省三だった。

その笑顔に言峰璃正がたじろぐが遅かった。

「大蔵省特殊査察部第二課執行官の入江と申します。

あなた方が政府や先生がたにばらまかれたお金についてお話が……」

かくして、彼もまた拘束された。

残るは言峰綺礼のみだが、彼を捕まえる理由も必要性も無かった。

対衛宮切嗣の駒として働いてくれるならそれにこした事はないからだ。

それら一連の捕物でも、言峰綺礼は表情なく動こうとはしなかった。

帰る途中で連絡が入る。

大聖杯のある場所でルーラーと桜塚星史郎が戦ったらしい。

1 ルーラー勝利

2 同上 桜塚星史郎撤退

3 同上 桜塚星史郎死亡

4 同上 陸耳御笠消滅

5 同上 桜塚星史郎死亡 陸耳御笠消滅

6 桜塚星史郎勝利

7 同上 ルーラー撤退

8 同上 アーチャー消滅

9 同上 ルーラー消滅

10 熱烈歓迎

結果 10

グッド 1

バッド 2

結果 2

大地が揺れる。

その地震かと思える振動の理由を俺たちは大聖杯のあつた山から見ることができた。

「山が……吹き飛んだ……」

まずい！

下手したら、大聖杯の泥が冬木を飲み込みかねない。

ここで、この話はアクション伝奇ものから、パニック災害ものに変わることが余儀なくされることになった。

## 冬木市の一番長い夜 その1

冬木市にとって幸いだったのが、爆発が人気のない郊外で起こった事と、非常事態に対処できる自衛隊が冬木市に展開していた事、そして現場指揮を俺が執った事である。

「住民の避難を優先させろ！」

周辺には誰も近づけさせるな!!

起こっているのは火山の溶岩噴出と似たようなものだと考えろ!!!」

正しくは聖杯の泥なのだが、そこまで言う時間も惜しい。

まずは現地司令部を立ち上げる。

ありがたいことにそんなうたってつけの場所が近くにあったのでそこを使わせてもらう。

穂群原学園である。

いろいろと手続きが面倒だが、現場の判断で押し通す。

「門を開けろ！」

「了解！」

藤丸立香と沖田総司が校門の扉を押して開けて、車を学園の中に入れる。

無線を使って、自衛隊基地と連絡を取る。

向こうもこの爆発を感知しており、状況把握に奔走していた。

「入即出二佐相当官。」

何が起こっている？」

こちらの状況報告に問い返してくるのは舞鶴地方総監。

舞鶴基地の一番偉い人である。

さすが自衛隊。

即応体制が速い。

「こっちの業界の馬鹿が火薬庫のそばで火遊びした成れの果てです。

深山町全域に避難指示を出してください。

溢れ出ているものは溶岩並みに危険なものです！」

「わかった。

市長にはそのように連絡して、避難指示を出してもらうように要請する。

あと何か必要なことは？」

「ヘリを飛ばして、流れ出る溶岩みたいなものがどの方向に行くか常に監視をお願いします。」

これから我々は、その溶岩の元を止めに行くつもりです！」

「待ち給え！」

今、状況を一番把握している現場の最上位指揮官は君だ！

君がそれを行って失敗したら、誰が現場の指揮を執ると言うのだ？」

舞鶴地方総監の言い分にも理がある為に、俺も押し黙るしかない。

偉くなるデメリット、国に属するデメリットがここに来て俺の足を引っ張っていた。

「やる夫先輩！」

私が行きます!!」

その声に意識が飛ぶ。

凜とした声を発したのはカルデアの制服を着た藤丸立香から出ていた。

ああ。

彼女はこの危機にためらわずに突っ込んでいけるだろう。

「わかった。」

うちのモーさんとジャンヌ。あと痴女を連れて行け」

「はい！」

「わらわは痴女ではないぞ！」

大淫婦バビロンという立派な名前が……」

なんか痴女が抗議するが、モーさんに抱きかかえられて連れて行かれた。



あいつらならば、引き時はわかるだろう。

「カルデア。」

モニターしているか？」

(ああ)

虚空に浮かぶ半透明な人の姿というものも、あまりよろしくはない。

夜だからドクターロマンの姿が幽霊にしか見えない。

「おそらく特異点F。」

そのきつかけの可能性がいまのアレだ。

こっちは、大聖杯もろとも叩き潰すつもりだが、その準備に時間がかかる。

藤丸の嬢ちゃんを行かせたが、やばくなったらそっちが手綱を握って逃がせ」

(ああ)

けど、その大聖杯を叩き潰す算段はあるのかい？)

俺は大炎上を続けている円蔵山を眺めながら言い放った。

柳洞寺は無事だろうか？

そこも確認をとっておかないと。

「科学をなめんなファンタジー」

災害からの三十分は、その対処において決定的に貴重な時間だった。

その貴重な時間を俺は穂群原学園の現地司令部で徹底的に活用した。

爆発によって起こった、マグニチュード4相当の地震で冬木市や舞鶴市だけでなく周辺からも被害報告が上がっていた事もあって、最前線の俺達はなし崩し的に逐次投入された警察や消防に自衛隊を巻き込んで、救助に奔走する事になった。

「慌てないで並んでください！」

まだ体育館や教室には余裕があります!!」

「まだ溶岩はこつちに来ていません！」

おちついて避難をお願いします！」

「子供や病人を優先して運べ！」

新都の聖堂病院にへりで送り届ける!!」

悪魔たちも姿を隠してフルで活躍させた。

ハイピクシーが、宝探して迷子になった子供や独り身の老人たちを見つけ出して報告し、文車妖妃が情報を整理して、優先者リストを作成する。

俺がそれを元に救助隊員に指示を飛ばす。

ジャックフロストとチルノは火災現場近くの木々や可燃物を凍結させて、延焼を防がせている。

ブリジッドがディアラハンで軽症者を癒やしでゆき、大天使イスラフィールは外国人が多いこの街の外国人避難民に姿を見せて天使の啓示という形で避難を勧めていた。

人間だつて負けていない。

「取り残されたもんはおらんのよ」

「わかりました。」

では、次の搜索範囲を……」

建宮斎字達が広範囲に探索をかけて逃げ遅れた避難民を救助すると、明石夕子やタカミチ・T・高畑がそれを保護して救助隊員たちに渡してゆく。

クルト・ゲーデルは舞鶴基地において、俺を含めて裏の連中の救助活動の合法化に日本政府相手に腹黒交渉を行っているらしい。

もちろん、彼と彼の派閥の権益拡大も下心としてはあるのだろうか、

「皆、全力で救助活動をしてくれ！」

裏についてののもろもろの責任はこのクルト・ゲーデルが全部とる!!」

こう言い切れる人間に人はついてゆくものだ。

だからこそ、俺は全力を出し、その結果としての死傷者0という数字に安堵する。

「入即出二佐相当官。」

舞鶴基地より、陸自の実験中隊が到着しました。

作業終了は30分後との事」

情報整理と命令発令にはある程度の階級が必要になる。

陸自・海自・警察・消防に裏組織というごちゃまぜ混成部隊をまとめる為に俺は残ったが、俺の口は一つしかないわけで。

軍事知識があり俺の次に階級が高い叢雲が臨時副司令として俺以上に命令を飛ばし、この大騒動で当然やってくるマスコミ以下野次馬の連中を対男性特攻を持つステンノがあしらう。

天ヶ崎千草は叢雲艦内でひたすら身代わり札量産に精を出し続けているので、そうすると副官ポジに入ったのはこの甲河隴三尉である。

こんな時でも色気は忘れないあたりさすが対魔忍。

「だって、こんな後に人は燃えるじゃないですか♥」

俺の心を読んだか、あっさりと言い放つあたり度胸があるというかなんというか。

もちろんここでではないのはわかっているけど、こういうジョークで気が紛れるのも事実だから彼女なりの気遣いと受け取っておこう。

「叢雲に載せていた、シャドウ・ボーダーも到着した。

実験中隊と共に作業に入るが、あのちびっこいわく、向こうの準備より先に終わらせるそうぞぞ」

俺の護衛任務なのを良いことにお願ひしてシャドウ・ボーダーとロリンチちゃんを連れてきてもらった甘粕正彦一尉が報告する。

これで準備が整ったら、ちようど上空を高高度で飛び去った超音速飛行機がこの校庭めがけて何か投下したらしく、パラシュートがこちらの用意した投下ポイントめがけてゆつくりと落ちてゆく。

「で、この災害をどのように解決するのぞ?」

面白そうな、実際面白いのだろう。

災害にこそ、人の本性というのは嫌でも見える。

その命の煌きはこの三十分間にあちこちで光り輝いていた。

それを堪能し恍惚顔の甘粕一尉に俺はその答えを告げる。

学園都市の超科学にマジモンの超天才であるロリンチちゃん、そして若狭湾という地の理がこの発想を可能にした。

若狭湾は原発銀座としても名高い。

つまり、レールガン用の電力確保に困らない。

「電力を上げて、レールガンという物理でぶん殴るのさ」

## 冬木市の一番長い夜 その2

準備作業に没頭していると作業を終わらせたらしいロリンチちゃんが怒り顔でずんずんとこつちにやってくる。

さて、何かやらかしたかなと思っていたら、ぐいっと頭を引っ張られて睨みつけられる。

「マスターくん。

何アレ？」

「大聖杯を撃ち抜く弾丸」

「そうじゃない!!!」

激怒しているみたいだが、子供なのでその怒り方もかわいい。

こつちの思惑など知ったことではないロリンチちゃんは、怒り顔でその怒りの正体を告げる。

「オリハルコンじゃないか！あれは!!」

何でこんな所にあるのさ!!!」

そっかー。

そういう説もあつたな。あれは。

ロリンチちゃんに激怒し、忍野メメと天ヶ崎千草が絶句したオリハルコンの正式名称を俺はあつさりと言った。

「この国ではあれをヒヒイロカネと言うんだよ」

女神転生にはかの将門公の武具を作るイベントが有り、その素材として登場していた。

財力クリティカルしている俺の所にその素材が無いわけがなく、俺が言つて叢雲の素材金庫の中を探した結果三人が絶句したという訳だ。

そんな中、組み立て途中のレールガンを取クティカルアーマーが持てるように改造が続けられていた。

「若狭湾の原発の全電力を使ったレールガンで、天上の『樹形図の設計者』を使つて大聖杯を狙い、柔軟な照準修正ができるタクティカルアーマーで撃ち抜く。

どうやってそんな荒唐無稽な作戦を思いついたんだい？」

まだ慥然とするロリンチちゃんに俺は苦笑して言った。

カレンダーを思い出して、まだ原作は出ていなかったなと思ひながら作戦名を告げる。

「作戦名は『ヨイチ作戦』だ。

屋島の扇よろしく、見事撃ち抜いてくれよ」

さて、大聖杯を撃ち抜く算段は整いつつあったのだが、その大聖杯周辺の状況が分からない。

こればかりは、先行して出した藤丸立香の報告に任せるしか無い。

その彼女からの報告は想定していないものだった。

「こちら藤丸立香。

映像送ります！」

待つていた映像に絶句する。

溶岩よろしくたぎっている聖杯の泥の中心に、大聖杯らしきものが禍々しく鎮座している。

そして、そんな大聖杯を背後に敵を近づかせまいと佇む紳士が一人。

「あ。レフ教授。

まあ、ここなら出てくるわな」

「よく聞け。道化。

あの雑種の操るできそこないの怨霊を令呪を使われて我が宝具で潰したまでは良かったが、その後あれからこの泥が出てこの様よ。



あのルーラーは知らんが、こちらのバーサーカーと我とは別のアーチャーは飲まれた」

何で後輩と仲良くなっているんですかねえ。英雄王よ。

まあ、彼の行動を理解できるとは思えないし、敵対しないなら大歓迎である。

おかげで、状況が理解できた。

大聖杯に落ちたのが、キャスター・バーサーカー・ランサーで、ルーラーが抱えていたボブミヤとヘラクレスと英雄王で六体。

英雄王が宝具を撃たされて魔力切れの消滅を狙い、ボブミヤとヘラクレスをサクリフアイスした結果、聖杯の発動条件が揃ったのだ。

で、めでたく泥が噴出して今に至ると。

英雄王は受肉して吐き出された所を藤丸立香に拾われたという所か。

桜塚星史郎とルーラーの行方が分からないのが怖いが、おおよそ状況は分かった。

「藤丸立香。

今から命令する。

そこで陣取っているレフ教授を排除しろ。

排除したら全力でこっちに逃げろ。

大聖杯についてはこっちで何とかする」

「ほう。」

道化の分際で大きく出たな」

さらりと口を挟んでくる英雄王だが、そりや貴方ぐだ子お気に入りですからなあ。彼がついているのなら、ルーラーと桜塚星史郎については安心していいだろう。「王を楽しませるのが道化というもの。」

「どうか楽しみにしてください」

「私を排除すると言ったか。」

大きく出たな。クズが」

聞こえていたらしいレフ教授が声を投げかける。

先を知っているだけに、彼の中ボス感が哀れに聞こえる。

もつとも、警戒しなければならぬ敵である事は間違いないのだが。

「お久しぶりですね。」

レフ教授。

貴方共々、魔術王にお世話になった者です」

あえて俺はマイク越しに彼に声をかける。

精神攻撃は基本である。

レフ教授の嘲笑が消えた。

「貴様、何を知っている?」

「何でもは知らないですよ。」

「精々、あなた方の計画が、めでたく頓挫した事ぐらいしか」

特異点Fの冬木市大炎上を起こそうとするには、この世界のレフ教授はどうしてもこの世界に張り付いていないといけない。

F G Oは人類史という一つの時間軸から人理焼却を計画しているので、俺みたいな多元世界の放浪者の介入に致命的に弱いという欠点がある。

観測者である以上はその世界線に縛られるからだ。

「何を馬鹿な!」

「私が、あの偉大なお方が敗れるわけがない!!」

声が震えている。

このまま押し切っても勝てると思っていたが、その結果聖杯の泥が冬木市に流れ出る事だけは避けられないしかなかった。

「おおよその避難は完了しているとはいえ、ものがものだけに慎重に詰めていかざるを得ない。」

「フランス。ローマ。オケアノス」

レフ教授の罵声が止まった。



これを待っていた。

「バカだなあ。」

レフ君。

君は本当にバカだなあ」

まるで猫型と称するタヌキっぽいロボットがその持ち主の少年をバカにするように俺は優しくレフ教授の神経を逆撫でする。

そして、俺は召喚の呪文をマイク越し告げた。

「おーい。」

「ここに魔神柱がいるぞー」

「素材よこしやがれええええええええええええええええ!!」

カメラ越しにあの巨大な魔神柱がぶっ飛ばされるのが見える。

そのぶっ飛ばした奴は藤丸立香の姿をしていた。

「わ、私?」

「せ、先輩が二人?」

マシユと藤丸立香（CV 悠木碧）の前で藤丸立香（CV 金田朋子）が一心不乱に

魔神柱をぶん殴っている。

ビクビク痙攣しているのがまた惨たらしい。

これだけ闇鍋になっていて、聖杯の泥が溢れていて、一万二千年も頑張つて生きていける人類悪が居ない訳がないだろうに。

さすが人類悪。

『殺したいだけで死んでほしくはなかった』なんて迷言が生まれる訳だ。

「何だ!？」

消える……やめろ……やめてくれ……

たすけ……………て……………」

動かなくなった魔神柱の前に、聖杯の泥まみれリヨぐだ子はただ一言。

「ちっ!」

フラウロスだったか。

しけてやがる」

派遣した藤丸立香（CV 悠木碧）一行はドン引き。

一人英雄王が大爆笑していたという。

なお、彼女は学園都市製のアイドルがシャンシャンするゲームをあげた結果、無事にこつちについてきてくれた。

## 冬木市の一番長い夜 その3

「楽しそうなおことになっていないじゃないか」

アインツベルンの屋敷で聖杯問答をやっていたら、征服王がウェイバーをつれて俺の所にやってくる。

そういえば、聖杯が発動して泥が出たという事は、小聖杯のアイリスフィール・フォン・アインツベルンの方も出ていると思っただが、案の定聖杯の泥がそつちにも出たらしい。

「アインツベルンの館で、セイバーとアーチャーと楽しく飲んでいたら、アーチャーが中座してその後セイバーのマスターが倒れた。

それをセイバーが抱きかかえたら、いきなり泥が吹き出てセイバーが飲まれた。

やばそうだったから坊主を連れてこつちに来た訳だが、あれは何だ？」

そつちにも出たか。

聖杯の泥。

慌てて上空のへりに指示を飛ばす。

「上空のへりへ。」

溶岩の噴出が別の場所でも発生した。

場所は私有地だが、上空から確認できるか？」

「こちら上空のヘリ。」

確認しました。

屋敷が炎上しており、溶岩らしきものが流れ出ています」

「わかった。」

そこは今から第二噴出口と命名する。

別の者を偵察に向かわせるから、ヘリは第一噴出口の監視に戻ってくれ」

結界が壊れたらしく、災害が発見される。

アインツベルンの屋敷が山奥なのが助かった。

もつとも、セイバーがオルタ化しているだろうからヘリをさっさと逃したが。

とりあえず叢雲にそっちに備えるよう指示して征服王と向き合う。

「大聖杯から出た何かだよ。」

ある程度、憶測込みになるが構わないか？」

そう言つて俺は、起こった事を説明する。

ウエイバーの目が俺に疑心を向けているがとりあえずは口を挟まないみたいなので、大聖杯で起こった事を説明してやる。



「という事は、聖杯の勝者は決まったのか？」

余はまだこうしているのに？」

「残っているサーヴァントを全部潰せばもう一回ぐらい願いは叶うかもしれないが、もはやあの聖杯は猿の手と化している。

受肉した方がいいが、狂化されてマスターや己の記憶など忘れさせられる可能性も十二分にある。

あまりおすすめはしないけどな」

「待てよ！

じゃあ、あの聖杯は今、誰の願いを叶えようとしているんだよ!？」

ウェイバーのツツコミに、俺は嘲笑って用意していた答えを告げる。

当たらずとも遠からずの答えに俺自身納得したのは内緒だ。

「ルーラーの本当の願いである、『全人類の救済』を叶えようとしているんだらう？」

その願いに対する聖杯の回答は、『全人類の殺害』なんだろうが。

つまり、あの泥はそういうものなんだよ。

聖杯の出力が足りないからこんな形になっているみたいだがな」

「……あんだ。

こうなる事を知っていたな！」

俺を睨みながら叫んだウェイバーの一言にさすが名探偵と手を叩いて降参する。

そして、彼に俺の限界を告げた。

「可能性はあったから、対処していたままでだ。

だが、それを知っても魔術師は聖杯戦争を続行するだろうが」

こう言われてウェイバーも黙る。

アインツベルンは元より己の悲願のために冬木の被害なんて気にしていないだろうし、時計塔の連中だって本拠の欧州とは無関係だから、心を痛めはするがそれでおしまいだらう。

何よりも猿の手とはいえ聖杯が機能した事を知れば、遠慮なくそれを使おうとする輩が出るのが魔術師という連中の生き様である。

「せっかくだ。

一つ、それを証明してみせよう」

臨時に引かれた電話を手に取り、警察にかける。

しばらくして出た声は不機嫌の極みだった。

「少しの間とは言え留置場の中は快適でしたかな？」

遠坂時臣さん？」

俺の皮肉に遠坂時臣は何も答えないが、敵意と殺意は電話越しに感じることができ

る。

さて、スピーカー越しに聞いているウェイバー君に魔術師たる遠坂氏の優雅な選択を見せてやろう。

「本題に入りましょう。」

聖杯戦争が終結しましたが、その戦闘で大聖杯周辺で災害が発生しています」

「本当かね!？」

極限状況だからこそ、彼の選択は優雅さも無い魔術師としてのもの。

そこに罠があるなんて今の彼に気づけと言うのが無理だろう。

「現在、その災害に対処しているのですが、願望機である聖杯はアインツベルンの森にあつて、我々は手が回らない。」

我々は聖杯はいりません。

我々は市街地に近い大聖杯周辺の災害に対処するので、遠坂さん。

聖杯の回収をお願いして構いませんか？」

罠でもあり、慈悲でもある。

彼がここでこちらに来るのならば、伏せていた情報を開示するつもりだった。

こっちはただでさえ手が足りないのだから。

だが、遠坂時臣は正しく魔術師であつた。

「聖杯の願いはまだ使われていないのか？」

「さあ。」

私には分かりませんな。

無駄骨かもしれませんよ」

ウエイバーが遠坂時臣の声を聞いてスピーカーを汚物でも見るような目で見る。

これが魔術師で、彼もそんな魔術師であるというのをいやでもつきつけているからだ。

「この街を守るためです。」

聖杯の回収に協力しましょう」

自らの死刑執行書にサインをしたなんて知らず、遠坂時臣の声は楽しそうだった。使われていない可能性がある。

つまり、彼の家の悲願である根源への到達ができるかもしれないのだから。

「一緒に捕らえられた言峰璃正神父も釈放しましょう。」

パトカーも一台お貸ししまするので、どうか回収を急いで下さい。

何かありましたら、パトカーの無線で連絡を」

「わかった」

その言葉を聞いて俺は受話器を置いた。

俺の顔が嘲笑っている自覚がある。

その顔のまま、魔術師であるウエイバーにただ一言だけ告げた。  
「な。」

ああいう連中なんだよ。

お前も。俺も」

## 冬木市の一番長い夜 その4

時間は少し遡る。

忍野メメと俺はこんな会話をしていた。

「そもそも怪異って何だと思ukai?」

「また、いきなりの話だが、人にとつて理解出来ないモノつて線じゃないのか?」

「だったらこんな話を振らないさ。」

怪異つてのは、理解できないモノを『人が納得できるようにした』モノの総称なんだよ。

たとえば、寝ていたら枕が返っていた。

これは妖怪の仕業だと人間が『納得』する。

そうやって昔の人達は、ありとあらゆるわけのわからないモノを怪異として、または神様としてカテゴライズしていったという訳だ」

そこで忍野メメは火のついていないタバコを灰皿に捨てる。

その目は窓の外の特大の怪異になるだろう叢雲の船体に向けられていた。

「つまり、西洋魔術だろうが異世界魔術だろうが、ことこの国では怪異としてカテゴリー

されたが最後、大体対処できるよねという訳だ。

ありがたい事に、神様だけで八百万も居るからね。この国は大聖杯をぶっ飛ばすのはいい。

問題は、大聖杯から出た泥と大聖杯に残っている魔力だ。

これを日本の『怪異』として処理する。

やろうとしているのは桜塚星史郎が陸耳御笠を召喚した事と実は変わらないのは内緒だ。

「弾は？」

「注文通り二発。

なんであんな形なのかい？」

ロリンチちゃんやんがタクティカルアーマーを眺めながら疑問を口にした。

ロリンチちゃんによる魔術加工が無ければ、あの形にはできなかつたからこちらとしては大助かりである。

「怪異封じの基本は、『類似』と『対抗』なんだよ。

怪異の正体は何であれ、それによる現象は現実として発生している。

その発生した現象から、怪異の正体はこれだと決めつけて、怪異そのものを用意した物の怪なり神様なりに当てはめるのさ。

そうだったら、あとはもうこっちのもの。

八百万と無駄にある神様の方程式の中からそれに対抗する式を用意して、退治するなり封じてしまえばおしまいという訳だ」

俺は遠目で炎上する円蔵山を眺める。

この国にはその土地土地の逸話があり、神話があり、神様がある。

冬木市がこの場所にある事がこのインチキを可能にする。

「これは藤丸立香が撮影した大聖杯の映像写真。

飾りにどういう意味があるかしらんが、女性像をつけてくれたのはこちらとしては大助かりだ。

女性の神様として扱えるからな」

「女性神……あの形……あっ！」

聖杯からの知識から該当するものに気づいたロリンチちゃんが絶句する。

というわけで、ネタバラシタイムとしよう。

「この冬木市の隣には、宮津市というのがあってだな。

その観光名所に天の橋立ってのがあるんだな。

この観光名所、日本神話においてはかなり大事なところだな。

イザナギとイザナミの国生みは、天の浮橋に立って天の沼矛をまだ何も出来ていない



泥をかき混ぜてこの国を作り上げた訳だ。

一発目は天の沼矛を模しているんだ」

もちろん、それだけで術を終わらせるのは『もったいない』。

日本神話を舐めたらいけない。

類似と対抗で繰り返された対処式はほぼ無数にある。

「他にもある。

今度は仏教伝来後の話だ。

海に住む龍神様が暴れて困ると言うわけでこの二柱が文殊菩薩に頼み、この龍神を鎮めたとある。

二発目の弾が如意を模しているのもこの逸話が原因さ。

で、この龍神様に模された神様の一柱が瀬織津姫と言つてな」

ここでタクティカルアーマーの方の準備ができたらしい。

無線からパイロットの声が入る。

「司令部へ。

こちら豪和一尉。

タクティカルアーマー及び、レールガンの準備は終了した」

「了解した。

始めてくれ。

全員サングラスをつける。

目をやられるぞ」

サングラスをかけてそのままロリンチちゃんに向けて微笑む。

はたから見ると、幼女に媚びを売るようで通報案件である。

「あとは結果を見てくれ」

若狭湾には3つの原子力発電所がある。

関西電力美浜原発、大飯原発、高浜原発で、そこから作られる電力は数百万キロワツ

トにも及ぶ。

他の地域で停電しないようによその電力をかき集めたり他の発電所を動かしてこの瞬間だけ何とか電力を確保し、その電力を容赦なくこのレールガンにぶち込む。

狙いは大聖杯の女体像の下腹部。

卑猥な気もするがこの国の神話だから仕方ない。

大聖杯をイザナミに、こちらのタクティカルアーマーをイザナギに例えての国生み作業だ。

「発射カウントします。

10、9、8……」

実験中隊の村井沙生二尉の声が聞こえる。

なんかうちの痴女と声が似ているような気もしないではないが、空似だろう。

「3、2、1、0!!」

「発射」

豪和一尉の淡々とした声の後、ものすごい豪音と閃光が一直線に円蔵山中腹に突き刺さり、鈍い轟音がしばらくしてからこちらに届く。

さすが学園都市製のレールガン。

破壊力なら桁違いだ。

「二発目発射」

淡々とした声の後、また先程の閃光と轟音が轟く。

「こちら上空のへり。」

溶岩が！

あの炎上した溶岩が消えたぞ!!」

うまく行ったらしい。

呆然とするロリンちゃんにネタバラシの続きをするとしよう。

「国生みの神話だが、最初にできた子供はヒルコとして流された。

この神様は一説では卑弥呼の別称ではないかという説がある。

そして、卑弥呼が神格化した神様が、この国の三貴子の一柱。

もちろん、強引なこじつけだから、その強引さをきつちりと結びつける必要があつた。龍神様でもある瀬織津姫は、この神様と関係が深い。

ついでに言うと、龍神様のご利益には浄化つてもものがある。

一発目で、ヒルコとして生まれのお方は二発目によつて、自分がヒルコではなくあのお方だと認識、正確には誤認した訳だ。

これが日本式怪異の祭り方という奴だな」

俺の言葉をロリンチちゃんどころか誰も聞いていないのはある意味当然だろう。

今、俺たちはこの地に神が降りてくるのを目の当たりにしているのだから。

朝焼けと共に降りてきたそのお姿は幻想的で神秘的であり、光り輝く古代の巫女姿でその女神はこの地に降り立ち、俺に向かってこう言った。

「我が名はアマテラス。

我を呼んだのはお前か？

人の子よ」

あ。

これ高位分霊だ。

俺でも制御できん。

# 冬木市の一番長い夜 あとしまつ

時計塔および聖堂協会の隠蔽工作 100なら完璧

結果 94

かかった費用 68 百億円

翌日の朝。

この冬木市の聖杯戦争は裏の世界で核爆発なみの衝撃をもって迎え入れられた。

考えてみれば当たり前で、裏技チート込とは言え全く別系統の術式を駆使して、その国の最高神の一人を降臨させることに成功したのだから。

人類史における過去最大級の奇跡と言つていいだろう。

そして、その奇跡を隠蔽するために、聖杯戦争の実質的なスポンサーである時計塔と聖堂教会は全力で隠蔽に入った。

具体的に言うと、政府関係各所を札束でぶん殴った。

流れた金の額は五千億円を超えたという。

経済大国日本の政治中枢を動かすのならばそれぐらいの金は必要だったし、時計塔も

聖堂教会もそれだけの金を持っていた。

なお、この買収についてはメシア教も十字教も金を出したらしい。

その買収は現場指揮官である俺にまで及んだ。

「好きな金額を書いてほしいそうさ。

入即出海将補相当官」

言峰綺礼神父が白紙の小切手を差し出すが、さらりと階級が上がっている所を俺は突っ込む。

「俺は戦死した覚えはないのだがな。

何で二階級特進をしているのやら」

「それは貴方の隣のお方のせいだと思うがいかがかな？」

俺たちのやり取りに天津神アマテラスは食べていたコンビニのおにぎりの手を止めて目をパチクリ。

下界の食べ物に興味津々だったこの御方は既に五個目のおにぎりにチャレンジしている。

餌付けと言ってはいけない。

高位分霊という事は、低位分霊から情報をもらってこっちにやってきた上位種である。

つまり、犬のアマテラスも、狐のアマテラスも、メガテンのアマテラスの情報も持つてやって来た訳で。

「良かったじゃないですか♪」

我としてはそなたが偉くなるのはうれしい限りです♪」

大聖杯からアマテラスを強引に作り出したから、見事なまでに情報にバグが紛れ込んでいた。

キヤス狐でいけば良いものを聖杯に入っていたのはルーラーで、アマテラスの神性にあった事から、この顛末は始まっている。

なお、キヤス狐は中立・悪で女性、天草四郎は秩序・善で男性で女性化しなければならず、アマテラスは三貴子の長女な訳でおねーちゃんである。

そこから多分霊基と性別が近いジャンヌあたりで用意して体を作ったのだろう。

で、ジャンヌの体に、キヤス狐の情報とアマ公の情報が、元の神話と混ざってできあがった性格は、

『おちやめな天然腹ペコのほほんおねーちゃん下界バカンスモード』

で、威厳たつぷりの登場は良かったが、俺のサマナーレベルが足りないと分かると俺

の姉ポジションにちゃっかり収まっている。

縁もあるし敬意もあるが、どこかよそよそしい関係が今の俺と天津神アマテラスとの関係である。

「つまり義理姉ですね？」

……誰だこの女神様に無駄な日本のHENTAI知識をつけたのは……あ、この御方日本神話の頂点の一柱だし、近年ニートの祖と崇められていたから仕入先は無駄にあるのか。

どうしてこうなった。

これで神格は間違いなくあるのだから困る。

まあ、ハーレムライフ満喫中の俺的に、一夫多妻去勢拳を喰らわなくてほっとしたのだが。

というか、貴方が歩くと花が咲くわ草が萌えたりと大変なのですが。

そして、ちゃんと神様をしているあたり始末に負えない。

既に宮内庁とヤタガラスと神社本庁と関西呪術協会が蜂の巣を突いたような大騒ぎになり、このお方の対処に頭を悩めているとか。

さもありなん。

「俺は二佐相当官だったんだがなあ。



「一佐はどこに行つたのやら……」

「聞いた所では、書類上では段階を踏んで遡つて処理をした形になるとか。」

「この冬木に来た時から、海将補という事になるでしょうな」

「聞きたくなかつたそんな事実。」

「なお、大蔵省からやつてきた入江省三が言峰神父が来る前に嘲笑つて報告してくれ  
た。」

「彼らの本気を見せつけられましたよ。」

「ちよつとの買収ならまだどうとでも防げたのですが、数千億ならばもうお手上げで  
す。」

「まさか、マイナス金利国債の全額引受という特大の飴で大蔵省中枢まで買収してくる  
なんて……」

「そりやそうだ。」

「この国、政府中枢が対魔忍世界だから、買収とかにとても弱い。」

「そんな所を数千億の金でぶん殴られれば、誰も文句は言えないし言わない。」

「今回の冬木の一件は、あくまで『災害』として片付けられ、テロ事件については災害  
にかこつけて迷宮入りが確定。」

「また、アマテラス降臨という『功績』の為に、アインツベルン・間桐・遠坂の三家は」

時計塔と聖堂協会から徹底的に擁護の手が入る。

彼らにかかった容疑や事件性は全部闇に葬られ、俺を含めた現場が泣きを見る事になった。

その現場にまで金をばらまいて黙らせるあたり、彼ら世界宗教の本気が見える。

そして、泥をかぶる事になる自衛隊のクーターフラグがさらに進むことになる。

「現金より、こちらの条件は保護している間桐桜の身柄だ。」

少なくともこっちは彼女を魔術師として育てるつもりはない」

「間桐家の次期後継者は時計塔では既に注目されているそうぞ。」

その無理を通すだけの道理は用意していただけるのでしょうか？」

ため息をつくが今更の交渉である。

既にこちらには天津神アマテラスという巨大な勝ち確定の御方がいらつしやるので  
大体の要求は通る。

「間桐家のご隠居は死亡で、一族に彼女以外ろくな後継者が居ない。」

俺の下で学ばせた方が、第二の俺になる可能性を孕んでいるかもしれないぞ」

「児童虐待あたりで責められるのはこちらとしても面倒だ。」

そちらにお預けしましょう。」

間桐家の遺産や魔術はこれで分散することになるでしょうな」

「間桐の没落は確定で遠坂は立て直しに時間がかかり、アインツベルンの一人勝ちですか」

遠坂時臣と言峰璃正の結果

- 1 セイバーオルタに殺される 小聖杯はセイバーオルタが保持
  - 2 同上
  - 3 同上
  - 4 同上
  - 5 同上
  - 6 同上
  - 7 道中衛宮切嗣に狙われて殺害 小聖杯は衛宮切嗣が令呪を使って奪取
  - 8 同上
  - 9 セイバーオルタと契約 小聖杯を持って帰還
  - 10 熱烈歓迎
- 結果 7

アインツベルンの館にあるはずだった小聖杯の回収に向かった遠坂時臣と言峰璃正

だが、そもそもそのアインツベルンの屋敷に行く前に殺された。

途中の道で狙撃され、車ごと崖に突っ込んだらしい。

遠坂葵が生きているので遠坂家の維持はできるだろうが、魔術師としては後継者である遠坂凜の登場を待たねばならず、弟子でもあつた言峰綺礼と共に傾いた遠坂家を支えることに。

魔術刻印がどれだけ残っているのやらと思つたが、二人共綺麗に頭を撃ち抜かれていたから回収可能な状態だったという。

魔術師なんてやらずに傭兵として生きてゆけばいいのに。

そんな衛宮切嗣と久宇舞弥はすべての罪を買収でなかつた事にされ、国外脱出を果たしたらしい。

らしいというのは、時間にしてちようど今頃の飛行機で成田に向かい、そのままドイツ行きの飛行機に乗るからだ。

「アインツベルンからすれば、勝てはしなかつたが入即出海将補相当官が第三魔法を再現してみせたようなものです。」

そのデータが残っているであろう小聖杯は是が非でも回収したかつたのでしょうか？」

「その理論で行けば、俺は魔法使いですか？」

俺の冗談にまったく笑わない言峰神父。

つまり、俺の二階級特進は彼らからの封印指定を避けるためでもあると。

俺のため息をペットボトルお茶を美味しそうに飲んでいる天津神アマテラス様は、首をかき上げて理解できなかつた事をアピールした。

言峰神父との打ち合わせを終えると、英雄王と征服王が二人して待っていた。

二人共後ろのアマテラス相手に警戒バリバリである。

知名度補正ならこの国最強の一柱なだけあって、サーヴァントという拘束を受ける二人の王と神霊になってしまったアマテラスの差は歴然としているというか。

多分、英雄王はその千里眼で某ティアマト戦あたりを思い出しているを見た。

「お二方も協力に感謝します」

「なんの。」

終わった戦の落ち穂拾いのようなものよ！」

征服王が豪快に笑えば、

「雑念に落ちたセイバーに引導を渡してやったまでのこと」

と英雄王はにべもない。

残ったセイバーオルタの掃討を藤丸立香に頼み、その援軍を英雄王と征服王に頼んだのだ。

藤丸立香のサーヴァントである沖田総司とエミヤとマシユ、キャスタークー・フリーンならば勝てると思ったが、万一を考えての配慮である。

もちろん、俺から派遣したジャンヌと大淫婦バビロンはそのままつけている。

ある意味勝者になった征服王だが、俺のアメテラス降臨という尋常ではない事態で戦い足りずこの提案を受け、英雄王は藤丸立香の願いとアーチャーエミヤへの対抗心と彼自身の言ったセイバーオルタへ引導を渡すために参加し、危なくなくセイバーオルタは座に帰った。

その段階で小聖杯が衛宮切嗣に流れたのが判明したのである。

それでも聖杯戦争は終わり、受肉化した英雄王はともかく、魔力が切れれば征服王は座に帰る事になるだろう。

なお、戦い足りない彼は藤丸立香や俺を交えた模擬戦を提案してくれており、藤丸立香強化のためにもこの提案に乗ることになる。

「気になったのだが、あの大聖杯なるものは結局どうなったのだ？」

## 大聖杯の今後

### 1 日本政府管理下

### 2 同上

- 3 同上
  - 4 魔術協会管理下 英国回収
  - 5 同上
  - 6 同上
  - 7 アイントゥベルン管理下 ドイツ回収
  - 8 同上
  - 9 同上
  - 10 熱烈歓迎
- 結果 1

「後ろの御方のおかげで日本政府管理下に移ることになります。

時計塔や聖堂協会が莫大な金を持って政府を買収したのはこれが理由です」

「ふん。

己が腐っているのを見ぬふりをして、さらに強欲に金を集めるか」

「それでも、彼らは私の子孫たちです。

守り導くのが私の役目でしょう」

英雄王が吐き捨てるが、天津神アマテラスは微笑を浮かべて淡々と己の存在意義を言

い切る。

ほんわか幸せオーラまで出すから、英雄王も地味にやりにくそうに見えるのは気のせいだろうか？

「征服王はともかく、英雄王はこれからどうなさるおつもりで？」

「あの雑種がこの国の都に帰って何か企んでいるのは分かっている。

あれは我が手にて潰さねば気がすまぬ」

英雄王にとつて桜塚星史郎との出会いはある種の運命だったのだろう。

受肉した今、今度こそ完全に彼を滅ぼしに行くつもりなのだ。

ならばと俺は英雄王に一枚の紙を差し出す。

「何だこれは？」

「御身の維持に必要な魔力を作る魔力炉とそれを可動させる発電施設の設計図でございます。

全力で事に当たるのなら、ぜひこれを用意して頂きたく」

やる夫スレメガテンの定番でもあったが、英雄王はガイア教の大物として書かれることが多い。

自衛隊のクーデターフラグがたった今、国家を意のままに操る力を持つメシア教に対抗するためにも、魔力万全のギル様というのは絶対に必要だった。



なお、この設計図はカルデアの施設の流用であり、原発はまずいので火力発電に変わっている。

「そのような些事で我に恩を売るつもりか？道化」

「まさか。」

桜塚星史郎を潰してほしだけの事。

あれは放置しておく藤丸立香にまで手をかけます故」

英雄王の冷たい目が見るが、俺も絶対魔獣戦線バビロニア経験者。

彼の機嫌取りと王の心の先は見抜いている。

「道化の戯言を許す。」

その施設作ってみせよ」

「既に建設準備を始めております」

言峰綺礼にもらった小切手に書いた金額は1000億円。

本当に払われるかどうか知らんが、この王は必要な財に関してケチではない。

それを分かっているからこそ、先に計画を立てて王に裁可を仰ぐ形にしている。

カテドラルができるだろう埋立地に、数百万キロワットの発電所が建設され、その電力の殆どが魔力炉に変換されてこの英雄王のためだけに使われる。

メシア教にとってはたまったものではないだろう。

既に今回の一件で自衛隊のクーデターは回避と判断した俺は次善の策に切り替えたのだ。

クーデターには参加するつもりはないが、メシア教の排除と米軍からの核ミサイル撃墜に。

「よかろう。」

できたら我を呼べ。

褒美を取らせてやる」

そう言つて、英雄王は立ち去る。

彼のことだ。

必要な時にちゃんと現れて、ちゃんと活躍してくれるだろう。

「司令官。」

そちらの女神様に面会が来ているわよ」

話が終わった事を見計らつて、叢雲が入ってくる。

強引な二階級特進により俺のことを『司令官』と呼べるのがとても嬉しそうだ。

「通してくれ」

しばらくすると入ってきたのは二人の巫女。

両方とも気の強そうな美女である。

「天津神アマテラス様のお世話をするために参りました。  
鬼咒嵐と申します。」

どうぞよろしくおねがいします」

「同じく、天津神アマテラス様のお世話をするために参りました。  
皇北都と申します。」

どうぞよろしくおねがいします」

## 第四次聖杯戦争あとしまつ その1

結局の所第四次聖杯戦争は約一週間という速さで終わった。

原作と違ってプレイヤーとしての人間のゲーム思考が、早期の同盟や襲撃を発生させると書いていたのはどのやる夫スレだったか。

準備と後始末に莫大な時間がかかり、イベントは僅か一瞬の花火のよう。

そんな聖杯戦争の後始末の時間である。

「書類。

書類。

書類……」

「ハンコ。

ハンコ。

ハンコ……」

「報連相。

報連相。

ホウレンソウ……」

舞鶴基地に与えられた一室にて、膨大な後始末に追われる俺たち。

穩便に片付けたと言っても、関係各所に出す書類は山のように発生し、俺と叢雲とステンは末期戦よろしくその戦いに無駄な抵抗を続けることに。

でつちあげるにしても、現場最上位指揮官だった俺がストリーを作らないと齟齬が発生しかねないし、その齟齬でこの修羅場をきよとんと眺めているアマテラス様が露見したら目も当てられない。

「あー！」

それを持ってゆくのならば、我が……」

「私を持っていきますのでお座りください」

「はい……」

立ち上がった方がいいが、鬼咒風のインターセプトによって今日何度目かの天津神様のしょんぼりおすわりシーンを横目に、後始末という名前のでつちあげに奔走する俺。

「とりあえず、火山の噴火で片付けるとして、学者の調査とかはさせないように文部省に  
通達を」

「テロ事件については、間桐雁夜と雨生龍之介を犯人として公表して警察と話をつける  
ように」

「今回の出動にかかった経費のどこまかし？」

大蔵省の入江執行官に聞いてくれ!!」

「海将補相当官。

濟まないが少しよろしいか？」

こういう時に堂々として入ってくる甘粕正彦は度胸があると言うか、ある種納得すると言  
うか。

書類から視線を上げて彼を見るとちよいちよいと指を振って俺を外に連れ出す。

話すのは男子トイレ。

個室にも誰も居ないのを確認した甘粕正彦は、要件を切り出した。

「上からの情報です。

市ヶ谷が政府に激怒している」

知ってた。

ここまで現場に泥をぶっかけたのだから、むしろ怒らない方がおかしい。

となると、先の話も大体見当がつく。

「一つ現地部隊を宥める策がある。

基地祭の訓練と称して、荣誉礼を考えている。

もちろん、あの神様へだ」

この提案は既に舞鶴地方総監に伝えており、海自だけでなく展開していた陸自や空

自、救助活動に参加した警察や消防も参加したがっているとか。

あの降臨シーンを生で見たらそうなるだろうなあ。

ガス抜きにはちょうどいいイベントだろう。

「甘粕一尉。

貴官が何を言いたいか、何に誘いたいかは薄々知っているが、それに参加するつもりはないし止めておけと言っておこう」

「分かっていて、告発しないのは？」

「あの政府の事だ。

多分自壊する」

人の悪いところと言うか、人の宿痾というか、腐れば腐るほどその腐臭に気づかずに立ち枯れてゆくのだ。

それはもう自業自得だが、問題はその先だ。

「問題は米軍だ。

俺の所にまで漏れている話がこうして放置されているのは何でだと思おう？

米軍はこれを機会に介入を企んでいる。

そっちの方が目も当てられん」

国家に真の友人は居ない。

ましてやあの政府ならばそれこそ金がある間のみで、助けの手を差し出す国がどれだけあるのやら。

そっちの対処だけで精一杯なのだ。

「……惜しいな。」

共に理想を目指して進んでいけると思っただが」

「それでも、この聖杯戦争では友であり共に戦った。

それを俺は忘れるつもりはない」

甘粕正彦は俺の言葉に少しだけ視線を反らせて、嬉しそうに笑った。

「それは嬉しい事だな」

「だから、アマテラス様の寝所をどうするか聞いているのよー」

長いトイレから帰ってきたら、皇北都がエキサイトしていた。

その後ろでアマテラス様が意味もわからずオロオロしているのがかわいい。

「何だ騒がしいな?」

「ちよつと!」

いくら、アマテラス様をお呼びになったとは言え、その後を考えていないってどうい  
うつもりよ!?



寝所も決まっていなくて、最高級ホテルぐらい取っておきなさいよ！」  
あ。

キレイに忘れていた。

何しろ呼び出した事が目的であって、呼んだ後の事は考えていなかったからだ。  
オロオロしていた当人の手にあるのは観光ガイドブック。

見事なまでにバカンスモードである。

「寝所については伊勢に動座して頂きたく」

何を当たり前のことをという顔で鬼咒嵐が言い切る。

これはどうも宮内庁なり神社本庁なりヤタガラスなり関西呪術協会の既定路線みたいだ。

こちらとしてもそれに異存はないが、アマテラス様の持っている観光ガイドブックのタイトルを口に出す。

『初夏のグルメを独り占め！若狭湾の海の幸を堪能する旅行……』

「口に出して読まないでください！」

神様も一応こういう所は恥ずかしいらしい。

なお、そのガイドブック、たつぷり付箋がつけられているのだが、全部食べる気なのだろうか？

「若狭グジ……鯨……太刀魚……越前うに……夏牡蠣……スズキ……」  
ぐくくりと叢雲の喉が鳴った。

「但馬牛……舞鶴の肉じゃが……海軍カレー……」

ステンノも手を止めて神様が持っているガイドブックを見ている。

「地酒……丹波ワイン……山崎のウイスキー……」

皇北都がうんうんと満面の笑みで策にハマった俺たちを見ている。

けど、さすが伊勢の巫女は動じない。

「今日中にへりの手配をお願いします」

「貴方には人の心つてのが無いの!!!」

夕方、泣きながらへりに乗る皇北都と天津神アマテラス様、その二人をへりに押し込めようとする鬼咒嵐の姿が舞鶴基地にて確認された。

その日の晩ごはんは宮津市まで出かけて、但馬牛のステーキと山崎のウイスキーという実に豪華な夕食となり、当たり前のようについてきた征服王とウェイバー、モードレッドとドレイク船長の代金も俺持ちとなった。

## 第四次聖杯戦争あとしまつ その2

舞鶴基地グラウンド。

「がはは。

良い戦であった。

またどこかの場所でもみえる事を楽しみにしておるぞ！」

戦闘訓練と称するガチ死合に征服王は良い笑顔のまま座に帰っていった。

沖田さんとモーさんが獅子奮迅の活躍をするも数には勝てず、エミヤが『無限の剣製』で投射しても一騎当千の英霊たちは最低一撃はそれを弾き飛ばし、エミヤに殺到する。

一方でこっちの仲魔たちも参戦させたが、こっちも数に押された。

クー・フリーン二人は元々同じ英霊という事でコンビネーションも合ったが、レベルの低さに足を引つ張られ、大淫婦バビロンやジャンヌ・ダルク、ゲンブやイスラフィール、ブリジッドも数に押されて大苦戦。

死ぬかもしれないというのに参戦を決めたタカミチ・T・高畑が生き残れたのも彼が元英雄というのがあるのかもしれない。

というか、征服王の軍勢に軍師として見事な采配を見せたウェイバーの才能が光る。

それでも征服王が勝てなかったのは、唯一つ。

「勝ったから約束のマネーカードおくれ！」

万の英霊たちも人類悪には勝てなかったらしい。

この人類悪に渡したマネーカードは10万円ちよつとである。

その全てが多分学園都市謹製のアイドルソシャゲに消えるのだろう。

なお、横須賀帰港後、ホテル業魔殿にてバイトをしている所が発見された。

衣食住つきで、給料の全てをガチャにつき込んでいるらしい。

「そうだ。」

君の持つライダーとアサシンを貸してくれるなら、これからも定期的にマネーカード

を……」

「わかった!!」

速攻で押し付けられるリョライダーとリョアサシン。

星1だが、この世界に置いてこの二騎は絶大な影響力を持つ。

「私みたいな星1サーヴァント役に立たないと思いますよ」

実に美しい演技の笑顔を張り付かせたままりョライダーは謙遜するが、俺が臍からもらったスマホである動画を見せるとその笑顔にヒビが入る。

定期的に送られてくるらしい、名もなき対魔忍のアへ顔ビデオレターである。

「ストーリーのかけらも無いですね。これ」  
「で、君の出番という訳だ。」

これを制作している所に行つて、ぜひとも素晴らしいものを作つて欲しい。

アサシンは彼女の護衛としてついてくれると嬉しい」

横から見ていたリョアアシンが口を挟む。

スケスケネグリジェのみのニューフェイス痴女である。

「その場合、私がタチ役なりネコ役をしても？」

「お好きにどうぞ。」

場所は地下都市ヨミハラ。これはそこまで行く交通費だ。

必要ならば、服も用意しよう」

俺の顔もきつとりヨライダーと同じく笑顔になっている。

腐れきつている政府中枢の暗部を調べるのに、リョアアシンはどうつてつけないのはない。  
い。

それを俺は利用しない。

だが、それを見て自分が利用しようと考える輩は出るだろう。

それが狙いである。

「わかりました。」

こいつらに映像という物語のなんたるかを教えて差し上げましょう」

二騎がヨミハラに行つてから、アダルトビデオのストーリー性が急上昇し、その女優陣が世界的ポルノスターとしてもはやされるようになるのは後の話。

そんな世界的ポルノスターの大部分が元対魔忍であるというのは公然の秘密となっている。

「あー。

戦つた。戦つた。

マスター。また呼んでくれよな！絶対だぞ!!」

キラキラしながらモードレットも座に帰つてゆく。

元々野良サーヴァントとして出たから、ある意味帰還は当然であり、ドレイク船長が帰りに叢雲を操りたいので、先に帰る事を決めたそうだ。

同じ野良サーヴァントのドレイク船長も横須賀帰港後に帰ることになる。

どこかでまた召喚ガチャをして二人を呼ばねばならない。

「どうだった？」

英霊同士の大合戦という奴は？」

自衛隊の観戦武官達と共に隣りにいた 藤丸立香に尋ねる。

興奮しているのか両手が強く握られていた。

「凄いです」

「いずれ、あの大軍勢を打ち倒す英霊たちを君が従える事になるだろう。

というか、従えなければ君の、カルデアの目指す人理救済はできないよ」

俺は諭すように言う。

藤丸立香の成長に繋がればいいのだがと思つて、メモにとある住所を書く。

「君の成長に役立ちそうな人物の住所だ。

行つてみると良い」

「ありがとうございます」

役小角による金剛神界での修行だ。

精神と時の部屋みたいな所で遠慮なく時間を気にせずに鍛えると良い。

君にはそれだけの運命が待ち構えているのだから。

「あと、俺の権限で食料・医薬品・衣服等の物資を用意してある。

ダ・ヴィンチちゃんに空のコフィンを飛ばしてもらつて積み込むといい」

横に居た叢雲がジュラルミンケースを藤丸立香の前に置く。

同じく横に居たステンノもジュラルミンケースをその隣に置いた。

「この二つについては君が受け取るか受け取らないかを決めるといい。」

一つは宝玉。

体力を全快にするアイテムだ。

もう一つは、金丹。

死んだ人間を生き返らせる。

さすがに仮死状態ぐらいいしか効果は無いと思うけどね」

ピクリと藤丸立香の体が震えた。

その意味を理解したからだ。

「これがあれば、カルデアのスタッフを助けられるかもしれない。

君以外のマスターが人理を救うかもしれない」

そういえば、悪魔は本来優しいと言ったのは誰だったか？

その意味ならば、俺も立派な悪魔なのだろう。

「助けられるんだ。

そして戻れるんだ。

期待されていなかった、かつての自分に。

何も気にしなくていい自分に」

藤丸立香は、現場指揮に奔走している俺を見ている。

現場に出て真っ先に対処したかったのに、それを止められた俺を見ている。



偉くなること、英雄になる事のデメリットを見ている。

俺が知っているあの物語が奇跡である事を俺が一番知っている。

その奇跡をあてにするほど、俺は楽観的な人間ではなかった。

「君の旅路はまだ長い。」

その重荷を一人で持つことも無いだろう。

助けあつて行くといい」

「その旅路にやる夫先輩は助けてくれないのですか？」

その質問は分かっていたので、俺は少しだけ目を閉じる。

どっちのマシユかわからないけど、『先輩』という声が聞こえた。

「この世界は俺の物語だ。」

ここを見捨てることはできないよ。

けど、ここに居るから、辛くなつたらいつでも俺に愚痴を言いくるといい」

真つ直ぐな目でジュラルミンケースを藤丸立香は受け取る。

少しだけ顔をこわばらせて俺は笑った。

「何しろ俺は、君の旅路の完走者だからな」

「……はこ」

藤丸立香。

君の旅路の幸運をこの世界から祈らせてもらおうよ。

## 第四次聖杯戦争あしまつ その3

間桐雁夜との約束から預かった間桐桜だが、重大な問題が発覚した。彼女にとつて、育児環境がとてつもなく悪いという事だ。

「わたし、初めて無くなっちゃった……」

「え？」

そんなのすぐ再生できますよ。

処女膜ぐらい」

誰だこの対魔忍を桜ちゃんの看護につけた馬鹿は？

すつ飛んで行った先では、朧主演対魔忍A V上映会が盛り上がっていたので慌ててT Vを切る。

こっちの怒りが分からない朧はいけしゃーしゃーと言い切る。

「ですから、対魔忍になると気持ちよくなってお金も稼げて、若さも維持できるといい事  
ずくめ！

桜ちゃんも対魔忍に……あ、ちょっと引つ張らないで……」

なお、隴主演AVタイトルは既に951本ほどあり、対魔忍の主要収入源として活躍しているとか。

そこまでされると俺も桜ちゃんも唾然とするしかない。

で、素敵な対魔忍設定が遠慮なく炸裂する。

「魔界だと既にクローン技術が完成していますし、私、肉体間の魂の移動可能なので、クローン作ってAV出てアへって、クローン作って対魔忍やって任務失敗してアへってを繰り返してそこそこ強くなりました」

「ちなみに、残った肉体に魂はあるのか？」

「あるみたいですな。」

自立した行動を取る体もあって、そういう肉体を処分した事もありましたし。

けど、概ねその肉体の情報は私の魂に全部記憶されていますのでご安心を」

あー。

これ、『NARUTO』の多重影分身の術の応用のハーレムの術の究極系だ。

俺の所に遠慮なく色仕掛けしてくる理由がはつきりと分かった。

多分バックアップ体もあるな。これは。

「だから、桜ちゃんも対魔忍になれば、処女膜の一枚や二枚なんてどうって事ありません

し、世の男のロマンである『処女で床上手』という体でどんな男も……きやんつ！」  
それ以上の朧の戯言はげんこつで封じぎるを得なかった。

「わたし、よくわからないものに体を触られ続けて……」

「いいんじゃない？」

自分の産んだ子供相手に殺し合いをするよりは」

誰だあの艦娘を桜ちゃんの看護につけた馬鹿は。

すつ飛んで行った先では、叢雲がずんと落ち込んでいて、桜ちゃんが気を使うという  
本末転倒の光景が。

「そうよ。」

深海棲艦の数を考えると、明らかに数が合わないのよ。

その数をどうやって満たしたの？

やっぱり私達しか居ないわよね……ああ……」

見事にトラウマ入っている。

艦これウス異本設定の王道だが、艦娘と毎日倒される深海棲艦の数が合わないという  
問題がある。

魂の細分化というごまかしも無いわけではないが、薄い本界限では捕まったり沈められたらそのまま悪落ち調教のついでに孕まされて産まされてというのは王道パターンである。

なまじ艦娘と深海棲艦が対になる設定が公開されたから、かえってこの数の問題がクローズアップされて妙な説得力を持ってしまい、この闇鍋世界にスパイスよろしく入ってしまったという訳だ。

「安心しろ。叢雲。」

俺はここに居る。

最後に俺のそばに居るなら、何も問題はない」

「やる夫。」

離さないでね。

何でもするから。いつまでも一緒にいるから、絶対に離さないでね……!」

泣き顔の叢雲をあやししながら、なんかかつこいと思っっている桜ちゃんにネタバラシをする。

「実は、これは元ネタが合ってる……」

しばらくして、一心不乱に『北斗の拳』を読む桜ちゃんの姿があった。

桜ちゃんがユリアになれるかどうかは神のみぞ知る。

「わたしはお姉ちゃんが羨ましかった……」

「妹のものは姉のもの、姉のものは妹のものだと何度言えば分かるのでしょうか？」

誰だあの女神様を桜ちゃんの看護につけた馬鹿は。

すつ飛んでいくと、女神さまは優雅にジャイアニズムを語る。

「だって当然でしょう？」

愛しているのだから。

愛しているからこそ、かまってあげたいし、甘えたいのよ。」

何故か具合の悪そうな顔でこくこく頷く桜ちゃん。

あー。

後に彼女につくメデューサは、ステンノの妹だったか。

ある意味桜ちゃんにとっての天敵である。

「貴方は幸せよ。」

だって選択肢があるもの」

「幸せですか？」

「こんな目にあつたのに？」

少し恨みがこもった目で桜ちゃんはステンノを睨むけど、この女神様にそんな視線が

効くわけもなく。

「だって、何も知らずに選べるじゃない。

パンドラも良いことをしたわね。

神様だと分かって選ばないといけないのだから」

「……う。」

その意味が分からない桜ちゃんに俺が補足する。

その意味を知らないという事の幸せを。

「パンドラの箱は知っているかい？」

開けちゃいけない箱をパンドラが開けてしまつて、閉めたときには『希望』しか残つ

ていなかった。

だから人は、希望を信じて未来へ進んでいけるといけるという話だ」

なお、最悪の箱なのに何で希望が入っているのやら。

これ、『希望』じゃなくて『先がわかる呪い』じゃね？なんてのは昔から言われていた

話。

今の桜ちゃんに言うつもりはないが。

「桜ちゃん。

この女神様は末妹に自分が食べられるのを分かつて、それでも彼女と一緒にいる事を



望んだのだよ。

桜ちゃんは、未来を知っていてその選択ができるかい？」

「……」

黙る桜ちゃんにステンノは微笑む。

後に妹がつくかもしれない桜ちゃんは、既に彼女の的には妹みたいなものである。

最初から桜ちゃんを励まそうと、助けようとしていた事は間違いない。

その手段については色々と言いたいことがあるが。

「女神ステンノが断言してあげるわ。

たとえ、処女を失っても、虫に体を齧られても、貴方にはきつと素敵な人が隣につく

わ♪

こう見えても私、姉ですから、貴方の痛みや苦しみがぐらい、昔々に済ませてきて、な

おこんなに素敵な人に巡り合ったのよ♪」

そう言つて俺に抱きついて甘える。

これ、桜ちゃんを出しに甘えているだけ……そんな言葉はステンノの笑顔の前に言わ

ずに終る。

キジも鳴かねば撃たれまい。

「本当なんですか？」

半信半疑の桜ちゃんが俺に確認を取るが、困った事に嘘はいつていないのだ。

このステテンノ様は。

「彼女は地母神の系譜の古い女神様でね。

聖娼と呼ばれる神と交わる巫女の古い祖先でもあるんだよ。

この手の巫女はセックスからのトランスを予言などに使うから、処女である筈が無い。

むしろ処女であると思えないと言われた時代の女神様なんだよ」

その女神様が良い男に出会えると予言した。

いや呪いをかけたというべきか。

「桜ちゃん。

君はきつと運命の人に出会う。

その時、その人を捕まえて、幸せになるかどうかは君次第だ」

「……はい」

桜ちゃんの声は、少なくとも落ち込んで居なかった。

「痛い！痛い！！いたいって！！

ちゃんと気をきかせたつもりだったんだよおおお！！！」

元凶であるロリンチちゃんをげんこつグリグリ攻撃で説教。

涙目のロリンチちゃんだが、ヘリポートに置いてあったシャドウボーダーが邪魔になるからとこそつと艦尾を伸ばして据え付けるという無許可改造の罰も兼ねている。

水陸両用だから、再装着は難しいけど上陸などはずいぶん楽になるだろう。

「というか、モニターさせてもらったけど、みんな基本重たくないかい？設定？」

「TSFロリ化している超天才様に言われたくはないですな。

今日はもう桜ちゃんへは看護婦しか通さないように通達したから、こんな愉快なことはもうおしまいだ」

「へ？」

「じゃあアレは何なのさ？」

「任せてください！」

道に迷った子孫を慰めることも神様の務め……」

大慌ててすつ飛んでいって、鬼咒嵐と共にアマテラス様を伊勢神宮に強制送還したの  
は言うまでもない。

その後、タカミチ・T・高畑に相談して桜ちゃんは麻帆良学園に預けることにした。

## 第四次聖杯戦争あとしまつ その4

忘れていたワカメの将来

1 冬木残留

2 同上

3 同上

4 海外留学

5 海外留学

6 桜と共に麻帆良学園へ

結果 4

魔術師としての間桐家は終わっていたが残っていた人も居るわけで。

そんな中、間桐雁夜がテロの容疑者として逮捕されたと発表された後、名家としての間桐家も完全に終わりを告げた。

とはいえ地主として資産家であった間桐家だから食うには困らず、アフターフォローとして別戸籍の用意などで、彼らは沈んだ船から逃げるネズミよろしく冬木市を次々と後にした。

そんな中に、間桐慎二の名前を見つける。

魔術師の家に生まれながら魔術の才能を持たなかったが故に不幸になった彼は、冬木の地を離れた方が幸せになれるだろう。

間桐家の魔術資料については国が押収した後に売却という形を取るが、その間にヤタガラスや関東魔法協会などが徹底的に調べるといふ。

後は時間が、次の世代がここでの物語を進めてゆくだろう。

「こっちはです」

大聖杯が置かれている鍾乳洞周辺は噴火口として国の管理下に置かれ、冬木市を騒がせたテロ組織が溶岩を冬木市に流そうとしたというカバーストーリーを作ることによって辺を自衛隊と魔法組織が警戒する中、それは俺の目の前にあった。

国の囑託として雇われた明石夕子がこれの説明をする。

「発見されたのが今日の早朝。

警戒及び観測していますが、今の所動きはありません。

こちらの持つマジックアイテムや魔法で調査した結果、ゲートの可能性があるみたいですよ」

色々な裏技で高位分霊のアマテラス様を召喚したので、その歪みが出たのだろう。

何処かに繋がるゲートができたとしても分からないではない。

ただでさえ冬木市はパラレル世界設定があまりにも多すぎるから、世界線の絡みが解けていないのだろう。

「データで見ると、安定はしているみたいだね。」

多分私のシャドウ・ボーダーなら、行けると思うけど……」

ついてきてもらったロリンちゃんに興味深そうに眺める。

あれの性能も知っているから俺は突っ込まざるを得ない。

「成功確率は？」

「三割ちよつと」

首を振ってチャレンジ断念を体でアピールする。

ここでギャンブルをするほど戦力が足りていない訳ではない。

「封印でいいさ。」

大聖杯ともども異界化させて、神様を祀って封じてもらおう」

いざれ解ける結界だが、東京でのハルマゲドンまで持つてくれるなら問題は無い。

「はいーはい!!はい!!!」

おねーちゃんに任せてください!!!」

フリーダムアマテラス様は今日も元氣である。

日本の信仰と地脈の全てをほぼ全行使できるので、魔力切れを心配しなくていいというのが厄介……げふんげふん。素敵な所である。

このフリーダムぶりに叢雲は呆れて、同じ姉であるステンノはああいう姉もありなのかという顔をしているが見ないでおこう。

「しめ縄で結界作って、入り口に地藏様を置いて、祝詞をあげるだけの簡単な作業にアマテラス様のお手を借りることなんて恐れ多く」

「この異界に置く神様はおねーちゃんが用意してあげようと言っているのです！」

そして、その功を讃えておねーちゃんをディナーに招待する事を要求します!!」

さり気なく一人称が『おねーちゃん』になつているあたり、フリーダムぶりに磨きがかかって……待てよ。

この神様、俺をスサノオ扱っているんじゃないだろうな？

ありえる。

俺で扱いきれないバグ込みの高位分霊でサマナー契約ができなかつたアマテラス様は、『子孫守護』と『サマナー』の扱いに論理矛盾を起ささないように俺を疑似スサノオとして定義した。

情報生命体であるから、俺の魂のデータをスサノオにあげちまえて俺がスサノオ化という事ができるのがタチが悪い。





明石夕子や天ヶ崎千草も視線そらしているし。けど納得した。

道祖神の一柱である八衢比売神と八衢比古神は、そのまま天宇受売命と猿田彦と同一視されたという。

天宇受売命の体を借りて、道祖神としての八衢比売神を呼び出したのだろう。

天津神　八衢比売神　レベル97　高位分霊

「この地の封印をお願いします。」

決して、中のものを外に出してはいけませんよ」

「かしこまりました」

今は『外からの悪いものを防ぐ』面ばかりクローズアップされる道祖神だが、もう一つの側面として『中に封じた悪いものを出さない』という面がある。

今回はそつちの仕事がメインとなるだろう。

異界の核である神様も用意したので、あとは入り口にも小さな社を置いて奥に入らせないようにすれば完成である。

「じゃあ、異界維持の為に俺と契約……」

俺の口が止まったのは、恨めしそうに俺を見るアマテラス様のせいである。

その口からこんな言葉が出てきた。

「天宇受売命だけ弟くんと契約するのずるくない？」

アマテラス様のおねーちゃん度

100ほどエロゲ系おねーちゃん

結果 97

その日の夜の俺の寝室でのピロートーク。

「あれ、私達のベッドに潜り込んでくるのは近いわね」

「同感」

「え？そうなんですか？」

「そうなんですよ」

「「「っ!?!」」」

後日、平成日本のHENTAI文化を某天津神様に丁寧な教えた罪で、皇北都が鬼咒嵐と明石夕子や天ヶ崎千草に正座させられるという事件が発生したが、記録に残さない

ことにした。

## CPOでの雑談

叢雲のCPO（先任海曹室）。

別名『兵隊元帥』のたまり場で、生粋の海の男達が雑談を交わす。

「あれよあれよという間に、艦長様から司令官様にご出世なさったのだからこの国はもう駄目かもしれないな」

「今更だろうよ」

乾いた笑いが続くが、話はそれで終わらない。

彼らはこの船の持ち主が不適合であるならば、その持ち主から船を奪うことを内々に申し付けられていた連中でもあったのだ。

計画を立てたのは市ヶ谷の防衛庁だし、指揮は副長補佐以下の士官だろうが、実際に兵を動かすのは彼らである。

「正直、色々な船に乗ったがこの船ほど規律が緩んでいるのは見たことが無い。

司令のイロ達に乗る時点で大概だが、ガキまで乗り込んでくるなんてな」

チルノと大妖精化したハイピクシーとロリンチちゃんの事らしい。

妖精二人はその悪戯心で隊員にいたずらをしかけては彼らの説教対象となるが、兵士

を叱るのと違って見た目がお子様だからタチが悪い。

なお、叱られると泣く。これが心に来る。

彼らとて陸に上がれば家族がいるし、子供も居るのだ。

かくして、叱るから手懐ける方向に必然的に話が進み、子供の躰なんて妻に任せていた事がいかに大変であるかを今更ながら知ることになった。

横須賀に帰ったら妻と子供に何かサービスをしようと思つた者も何人か居る。

一方で、掛け値なしの天才であるロリンチちゃんは当たり前のように軍事機密に触り、そして理解してしまふあたりたちが悪かった。

叢雲に備え付けられたレーダーから舞鶴基地の隊舎で壊れたエアコンまでロリンチちゃんは触り、理解してしまふ、分解修理改修してしまふ。

『万能の人』の面目躍如だったが、だからといって喜んで良いモノではない。

部署が違う陸自のタクティカルアーマーについてはついに触ることができずに泣きべそをかいていたし、学園都市から供与されたりニアレールガンを改造してこの叢雲に載せようと企んでいたのが発覚したのはついさっきのことである。

『マスターくん』とロリンチちゃんが呼ぶ入即出やる夫海将補相当官のげんこつぐりぐり攻撃でその企みは潰えたが、そういう事を含めても、この船は他の護衛艦と比べて格段に風紀が乱れている。

何しろトップが女連れて毎日毎夜盛っているのだから、ある意味当然とも言えるだろう。

「知っているか？」

「そもそも、この船あの司令官の私物らしい」

「最初聞いて何を馬鹿なと思ったが、こういう事がまかり通るといふ事は本当なのかもしれない」

「知り合いの情報だと、これは学園都市で無人艦として作られたらしい」

「米海軍が考えているアーセナルシップ構想か。」

「さすが学園都市」

「事実、艦の運営は基本叢雲一人で何でもできるようになっており、それを人で代行した結果かえって効率が落ちるといふ所もあったのだ。」

「もっとも、ダメージ・コントロール要員も居ないので、損害を受けた後の継戦能力に不安がある事も分かってきている。」

「この叢雲のデータを入手即出海将補相当官は市ヶ谷に出し惜しみを全くしなかった。」

「この当たりも、彼からこの船を取り上げられない理由の一つになっていた。」

「とりあえず、横須賀に戻ったら皆入れ替えだろうか？」

「だろうな。」

俺たちも含めて、この船に長く乗り続けたら腑抜けてしまう。

ただでさえ人不足なんだから、市ヶ谷の命令を聞く限りは放置されるだろうよ」

元々この船に乗り込んだ自衛隊員達は、乗艦が衝突事故でドック入りしている連中である。

元々の船があるし、ここでの緩さを元の船で締め付けないといざという時に使い物にならない。

今や株価は40000円を超えて、平成元禄の真つ只中。

海上自衛隊は装備面では急拡大していたが、人員は定数割れを続けており、とにかく人が居なかった。

「そういえば、この船を狙ったミサイル。

あれどうなった？」

「どうやら米軍横須賀基地から流れたものだとは断定されて、在日米軍は今大混乱中だ。

第7艦隊全部署に装備確認命令が出て、使い物にならん」

聖杯戦争の事が話せない以上、冬木市とその周辺で起こった一連の出来事は、テロとして処理せざるを得なかった。

そのため、この叢雲を狙ったミサイルはテロ組織が米軍基地から流したものである。が嫌でもクローズアップされて、外交問題に発展したのである。

在日米国大使が首相官邸に来て陳謝し再発防止に務めると約束させられたが、米軍も聖杯戦争の事を掴んでいたので介入しそなうって歯ぎしりを隠そうとしない。

日米同盟に波風が立っていても、ソ連は崩壊し今の日本に注視する敵もない。

「そういうえば、一部の連中が不穏な動きをしているって話、あれ本当か？」  
「冗談だろうよ。」

まあ、あれだけ現場に泥ぶっかけてくれる政府に、バカヤローと罵声を浴びせられるのは自由主義国家である我が国の良い所だな」

「そんな不穏な連中だが、我らが司令官に粉かけているとか」  
「ああ。」

あの連中、明らかにそれ要員だもんな」

「けどまだ司令官は手を出してないらしいぞ。」

当人から聞いたから間違いない」

「てめえ、アレだけ色仕掛けに騙されるなって言っただろうか！」

「そう言うなよ。兄弟」

最後は馬鹿話で夜が更けてゆく。

彼らもしっかりと叢雲の風紀の緩みの毒に染まっていた。



## 冬木市災害対策訓練

第四次聖杯戦争から一週間後。

冬木市にて、警察・消防・自衛隊等が関わる災害対策訓練が行われた。

実際には、その名目で集まったこれらの組織へのアマテラス様の閱兵式であり、一日司令官となったアマテラス様の前で、それぞれの組織の士気高揚は凄いものになった。

士気高揚効果 100ほどノリノリ

結果 91

さすがアマテラス様であり、その神々しさに各組織・マスコミ・市民を魅了しての大盛況。

不満も費用もこの天津神様の笑顔が見れるならばとみなが言うぐらい。

だよなあ。

高位分霊だし。

そんな俺は貴賓席にて、海将補の制服姿で貴賓席にてその光景を眺めているぐらいしか仕事がない。

少なくともこのあたりの現場レベルで自衛隊が反乱を起こすことは多分無くなった

だろう。

「しかしまあ、とんでもないものを呼び出してくれましたな」

貴賓席近くの喫煙場にて神官服姿の忍野メメがタバコを啣えて俺にぼやく。

そのタバコには火がついていない。

彼がここに引つ張り出されたのもアマテラス様召喚に一役買ったからで、実に似合わない神官服を着ているのも鬼咒嵐の手から逃れられなかったからだとか。

「上手く行けばいいと思っていたが、上手く行き過ぎる事は考えていなかった」

「次からは考えることをおすすめますよ。

本命は東京だ。

あのお方以上のものが出ても俺は驚きませんよ」

「違うない。

悪魔だけでも頭がいたいのに、人同士でいざこざまであるのだから救いが無い」

「それでも、救われるんですよ。

救われるやつは一人で。勝手に」

彼がこんな格好をしてここに居るのも、俺と最後に話をしたからだろう。

世は怪異で満ちており、またいざれ道が交わることはあるだろうが、この冬木での出会いはこれにて終わりという事になるだろう。

「貴方は貴方だ。

それさえ忘れなければ、最後は落ち着く所に落ち着くでしょうな。

うちの先輩からの伝言です」

「貴重なアドバイス感謝するよ。

臥煙さんによく言っておいてくれ」

俺の声に忍野メメは返事をせずに後ろを向いて歩きだす。

片手を上げて消えた彼を見て、彼らしいなと苦笑していたら別の来客が来る。

「よろしいかな?」

「どうぞ」

同じく貴賓席に座っていたクルト・ゲーデルがタカミチ・T・高畑を連れてテントに入る。

タバコに火をつけながら彼は本題を切り出した。

「君を正式にスカウトしたい。

待遇は今の地位以上のものを約束しよう。

望むならば、メガロメセンブリア元老院に席を持つことも可能だろう」

「お断りします。

この国はそれ相応の待遇を一応くれましたからね。

それなりの恩返しはするつもりですよ」

「それ相応の待遇ねえ。」

鎖の間違いじゃないかな？」

「それを言ったら、そちらの提案も同じでしょう？」

「違う」

聞いていたタカミチが吹き出し、三人して笑う。

天海市の件があるので、関東魔法協会とかこれからも友好的な関係を維持しなければいけないのだ。

あくまで最初の勧誘は冗談という事にして、クルト・ゲートルは次の話に移る。

「冬木市には明石君とそのチームを残す事にする。」

関西呪術協会も人を派遣するが、時計塔および聖堂協会は完全に遮断する。

少なくとも敗者である彼らに流す情報は無しだ」

「それでもやつらの財力と政治力には注意を。」

俺が日の丸の旗に留まっている理由でもありませんから」

「……肝に銘じておこう」

大聖杯絡みの巻き返しは必ず発生するだろう。

これだけの大奇跡を顕現させたのだ。

時計塔も聖堂教会もついでに十字教もそれを座視なんてしないだろう。

メガロメセンブリアを以て、時計塔や聖堂教会や十字教を制す。

彼らがここでごちやごちやしてくれれば、東京でのメシア教とガイア教の争いに関与できないだろう。

東京という舞台からどんどん役者を降ろしていかないと、こちらが制御できない。

「そんなところに隠れていないで、よければおごりますよ。

言峰神父」

自販機でコーヒーを買って物陰に隠れている言峰神父に声をかける。

何で分かったかと言うと、霊体化してステンノがついているからである。

言峰綺礼神父は俺の声にあっさりと出てきたので、缶コーヒーを投げたらそれを片手で受け取った。

「感謝を」

「どういたしまして。

お父上の不幸にお悔やみ申し上げます」

色々あったとはいえ、死ねば水に流してお悔やみの言葉の一つぐらい口にだすのが日本人である。

俺も言峰綺礼も言葉の穏やかさと裏腹に目がまったく笑っていない。

「先程のクルト氏との話ですが、色々とこちらにも交渉の機会をと思ひまして」  
ちやつかりと聞いていたらしい。

おそらくクルト氏やタカミチもそれに気づいて流したのだろう。

「こちらは去る身です。

私に言うよりも向こうに言つてくださいよ」

「そうでしたな。

明日、出港でしたか。

今でもあの日々が本当にあつたのか疑つてしまうのです」

言峰綺礼チエツク

1で愉悦部員10で綺麗な綺礼

結果 4

「あの勝者は今頃英国行きの飛行機の中でしょうな」

聖杯戦争の生存者として時計塔へ報告をする役目を自ら申し出たウェイバー・ベルベットの事だ。

俺が聖杯戦争全体の隠蔽などで動けなかった代わりに、色々あった彼の後始末をしたのがこの言峰綺礼である。

愉悦部として目覚めているような目覚めていないような、そのあたり彼の顔からは読み取れなかった。

「こちらに残った被害者のケアなどをお願いします」

「わかりました」

とりあえずがんばれ。遠坂凜。

「さあー」

出航するよ!!」

こうして、俺たちは舞鶴基地を後にする。

海自服のドレイク船長というのも似合うもので、航海中にあつさりとう官を含めた海自乗員を掌握したのはさすがというかなんというか。

「悔しいけど、自分で動かすのより上手いのよ。」

「いやになっちゃう!」

とは叢雲の言葉。

いつの間にか覚えたらしい航海中の叢雲の訓練とかも、だらけ気味の乗員が見違える

ようにきびきびと動いている。

「司令官。」

ちよつといい？

妙な声がるのよ」

航海中に叢雲が俺に声をかける。

俺は、新島副長補佐の方を向くと彼にも話をしたらしく即座に返事が返る。

「通信室からはそんなものは聞こえないと報告が来ております」

「けど、たしかに呼んでいるのよ。」

『助けてくれ』って」

叢雲の言葉に俺は地図を持ってこさせる。

とにかく場所がわからないと話にならない。

「何処からだ？」

「多分、富山県と新潟県の県境あたり」

「今、あのあたり霧が濃くなっていますから、あまり近寄りたくは無いですな」

状況が動いたのはその後だった。

「こちら無線室。」

「この船に積んでいた古い無線機から助けを求める無線が！」



相手は伊庭義明三等陸尉と名乗っており、『演習に参加する予定の小隊が移動中に騎馬武者に襲われたから助けてくれ』と」

「騎馬武者あ!?!」

「マスターくん。」

ちよつといいかな？

あの霧の中、時空が狂っている可能性がある。

近寄らない事をオススメするよ」

ひよっこりと現れたロリンチちゃん説明ありがとう。

俺たちの存在が特異な物だから、この手の特異も起こるものだど覚悟を決める。

「こちら海上自衛隊護衛艦『叢雲』。

こちらに来ることは可能か？」

「ヘリがあるから誘導してくれるならば可能だ。

装備はほとんど置いてゆくことになるか……」

「構わない。

責任はこちらで取るから、ヘリにて離脱を。

誘導する」

またわからん事態にと頭を抱えそうになった時に正解を出してくれたのは、新島副長

補佐だった。

「侍に自衛官が襲われるって『戦国自衛隊』じゃないですし」

……それかよ。

霧の中から唐突に出たV-107に小松基地が大騒ぎをする事になる数分前の出来事である。

# みらいからの使者 その1

霧が晴れて何処からともなくやってきたV-107が小松基地に着陸した頃、俺たちは富山県と新潟県の県境、具体的に言うとお親不知・子不知の沖合に停泊していた。

空を飛べる悪魔、大天使イスラフィールと妖精ハイピクシーの二体で、小松基地からの連絡を受けて彼らが居た場所の偵察に出したのだ。

残り物チエツク

- 1 何もなかった
- 2 何もなかった
- 3 2トン半トラック一台に物資沢山
- 4 2トン半トラック一台に物資沢山
- 5 上の他に60式装甲車一両
- 6 上の他に60式装甲車一両
- 7 上の他に19号型哨戒艇一隻
- 8 上の他に19号型哨戒艇一隻
- 9 上の他に61式戦車一両

10 熱烈歓迎

結果 4

「サマナー。」

それらしいトラックを発見した。

中に彼らの物資らしい物が手付かずに残っている」

「よし。」

戻ってこい。

あとは現地の警察と近くの自衛隊に任せよう」

トラックが発見された事を報告したが、小松基地と市ヶ谷の防衛庁はそれどころではないだろう。

まさかのタイムトラベラーである。

悪魔とか魔法とか超能力とか科学もごちゃ混ぜになったこの世界において、時間旅行者として自衛隊員がやってきてしまった。

立派なヤタガラス案件だが、これに俺が絡むのは難しい。

元々舞鶴に行ったのは訓練航海という建前なので、横須賀に帰らねばならないのだ。

そして、天海市で進められているフアントムソサエティーの陰謀を阻止しなくてはならない。

「ロリンチちゃん。

やっぱりあれは聖杯戦争の副作用で片付けた方が楽だろうなあ」

「だと思っうね。」

原因不明だけど、近くで原因不明なわからないことが発生していたのだから、これが理由だと皆が最低限の納得する。

何より舞鶴にもとんぼ返りをしなくていい」

その方向で報告書の作成をロリンチちゃんにお願いする。

まさかその後でああなるとは思っていなかったのだ……

帰りの航海も基本同じで、大湊基地に翌日入港。

一日停泊してさあ出港という時に、その報告が飛び込んできた。

「正体不明の護衛艦が助けを求めているって!？」

大湊基地の司令部からの報告に、俺は新島副長補佐に確認を取ると彼は領いて地図で場所を示した。

「太平洋上、南鳥島の近くか。」

それで、その護衛艦は何を言ってきたらいるんだ?」

「はい。」

彼らはゆきなみ型護衛艦『みらい』と名乗っており、エクアドルの海外派遣に向かう途中に嵐に合い僚艦とはぐれ、帰国する途中まで衛星通信が使えなくなっていたとか。

現在の海上自衛隊にゆきなみ型護衛艦も『みらい』という艦も存在していません。

一応第43護衛隊の『いそゆき』と『はるゆき』が南鳥島に出動するみたいですが、先日の日タイムトラベル騒動があったばかりで市ヶ谷も横須賀も浮き足立っているんですわ」

俺は頭を抱える。

『みらい』が何処からやってきたかなんとなく分かったからだ。

大ききなり時間なりの差異はあるが、過去からやってきたもののカウンターとして未  
来から何かを引っ張ってきたと。

両方共自衛隊というのがポイントだろう。

いずれ起こる自衛隊のクーデター。

その海自側の混乱要因がおそらくこの『みらい』なのだ。

「それで、司令部はなんて言ってきたているんだ？」

「はい。」

これは要請だそうです、横須賀帰港時に第43護衛隊と合流して欲しいそうです「『みらい』が東京湾に近づいた時、ちょうど俺たちも帰り着く計算である。」

その時に何かあったならば、その阻止戦力にとりう事なのだろう。

とはいえ、命令でなく要請という所に防衛庁の葛藤が見える。

「合流そのものは異存はないと伝えてくれ。

ついでに副長補佐に言っておく。

諸君らがここで降りてくれると、数時間後には俺たちは横須賀から出港できるぞ」

「どんな魔法を使うんですか？」

さすがに冬木での奇妙奇天烈な出来事に慣れてきたのか新島副長補佐も動じない。

それを確認してから、俺は手品の種を明かす。

「この船は叢雲だけならば消せるんだよ」

「消せる？」

「まあ、あのアマテラス様と同じと思ってほしい」

そして一斉に視線を逸らす自衛隊の士官たち。

何処からともなく現れては、連れて帰られるアマテラス様はもはや様式美となつていた。

この航海でアマテラス様が現れないのは、訓練もするという事でアマテラス様に自重を願ったからである。

「神棚がおそらく、あの御方の目印になつとるんでしようなあ。

この間、何や勾玉みたいなん入れてはるの見てましたし」

天ヶ崎千草の一言にそれ八尺瓊勾玉じゃねと思ったが、それを確認する勇氣は俺も天ヶ崎千草にも無かった。

閑話休題。

「人間降ろして俺と叢雲だけ飛行機で横須賀に戻れば、その日のうちに出港できるぞ」

俺と叢雲とマシユとロリンちゃんとジャンヌ・ダルクと大淫婦バビロンの六人が飛行機メンバーとなる。

ステンノとドレイク船長は霊体化できるし、残りの悪魔はCOMPの中だ。

そして俺たちだけでも叢雲は動ける。

だが、それは俺たちにフリーハンドを与えることを意味する。

「司令官。

できれば我々もご一緒させていただけると嬉しいのですが」

新島副長補佐は、同じ船に乗る仲間として、俺に対する監視としての半々の声でそれを口にし、それからしばらくして陸奥湾から出た叢雲は太平洋を全速力で南下する事になる。



## みらいからの使者 その2

『みらい』の警戒ぶり 100でバリバリ警戒

結果 48

自衛隊の警戒ぶり 100でバリバリ警戒

結果 9

みらいにとっては運が良かったというのだろうか。

冬木の聖杯戦争後で魔術を始めたオカルトを自衛隊及び政府が許容しており、富山と新潟の県境で発生したタイムトラベル事件もあった事で『みらい』の遭難と救援もありえるよなという空気で現場に向かっていたというところだろう。

一方の『みらい』側だが、遭難して戻ったと思ったら自分たちの違う日本の上に微妙に時間がずれているので、警戒しているのは仕方ないだろう。

結果、不信感のある『みらい』に対して、あくまで身内の救援という姿勢を崩さないこちらの海自という形で事態が推移する。

俺たちが房総半島沖で第43護衛隊の『いそゆき』と『はるゆき』に合流したのはそんな状況だった。

「状況は？」

叢雲とステンノとマシユを伴って艦橋にやってきた俺は、新島副長補佐の報告を受ける。

他の護衛艦との連携なんて俺には無理だから、新島副長補佐に丸投げである。

なお、ドレイク船長は聖杯知識なのか新島副長補佐の手ほどきを受けたのか適応しているのが凄い。さすが伝説の船乗りである。

「現在位置は房総半島の南方200キロ沖を南東方向に単縦陣を組んで進んでいます。

先頭が『いそゆき』で次が『はるゆき』。この『叢雲』が一番最後ですな。

『みらい』は南鳥島の北西200キロを北西方向に単艦で進んでいます。

おそらく明日には会合できると思われます。

また、『みらい』の上空には硫黄島からP-3Cを飛ばして、上に張り付かせて何かあった時のために備えています」

「向こうからは何か言ってきたか？」

「状況の説明と、補給を求めています。

あと、負傷者が居るらしく、帰港後の検査および入院を求めています」

「？」

あの船、ヘリが降りられる場所はあるのか？

無くてもヘリのピックアップで南鳥島なり硫黄島に搬送して、飛行機で本土に送れば良いんじゃないか？」

「それが、なんだか特殊な患者らしく、大日本帝国海軍の軍人を名乗っているとかで。」

今、政府も自衛隊も摩訶不思議を受け入れざるを得ないという事で、そのあたりを入即出司令より説明していただけると助かるのですが」

あー。

つまり、1942年のミッドウエーからの帰りという訳だ。

それだったら元の時代に帰れば良いものを。

このオカルト絡みの色々を説明できる高官に俺はいつの間にかなってしまうたらしい。

「それについては了解したが、今の俺の立ち位置はどうなっているんだ？」

「第一護衛隊群の隊司令扱いだと思えますが、市ヶ谷の横槍で内局の参事官になるという話もあるとか」

「つまり、何も決まっていない訳だ」

「そうとも言いますな」

あの聖杯戦争のおかげで、よほど色々と揉めたらしい。

内局の参事官というのは、防衛庁の自衛官でない高級官僚達の牙城であり、正規自衛

官ではない俺からすれば、ある意味一番説得力がある場所ではある。

これで時計塔の事を隠した英国留学経歴あたりが色々邪魔になるのだが。

日本の官僚の学閥の主流は東大だからだ。

それで参事官というのは強烈に他の官僚を刺激する。

まあ、叢雲がいるから現場の方が都合がいいのだが。

「立ち位置についても了解した。

向こうも本土に着いてしまえば、いやでも納得するだろうな」

俺は考えるのをやめることにした。

組織的ごたごたに絡んで最大の目的である核ミサイル阻止ができないなんて事だけは避けたいのだが。

「そういえば、帰り道で見つけた戦国時代からの遭難者。

あれどうなったの？」

あの連中も帰せる可能性が無いわけではない。

多分、冬木の太聖杯近くで見つかったゲートが鍵なのだろう。

カルデアのコフィンで送れるならばそれが一番手っ取り早いのだが、あれは魔術師限定なんだよなあ。

俺がそんな事を考えている間、叢雲の疑問にも新島副長補佐はすらすらと応える。

「検査と事情聴取中ですな。」

この件もそうですが、色々あり過ぎで政府もてんでこ舞いなのではないかな。

米軍は若狭湾のテロ事件のミサイル流出で動けず、向こうの大企業が私兵を日本に送ったとかで、内調が大慌てだとか」

「どっだ？」

その私兵を送りつけた連中は？」

メシア教徒の尖兵かと思つた俺の思惑は大きくハズレたが、もっとやばい名前が出てきた。

「世界的製薬大企業のアンブレラ社ですよ。」

冬木のテロに対して医療支援を行うという名目で、アンブレラ社の日本法人の要請という名目で実際支援物資も送ってきたのですが、その輸送スタッフが明らかにカタギでなかったとか」

バイオハザードも混ぜたのかよ。あの駄女神。

わからない風を装って全部理解したステンノが微笑む。

「がんばれ♥」

これほど嬉しくないがんばりはなかった。

『みらい』との合流は何事も問題なく進み、『みらい』は叢雲の後ろについて横須賀を

目指すことになった。

## みらいからの使者 その3

何事もなく俺たちは『みらい』を連れて横須賀基地に帰港する。

それはドレイク船長との別れを意味していた。

「楽しかったねー。」

今度はこの船を使って派手な戦をしたいもんさね」

「その時は呼ぶよ。」

どうせその時はすぐにやってくるのだから」

「楽しみにしているよ。」

マスター。いや、司令官」

そう言つて笑つてドレイク船長は座に帰つていった。

戦闘に出ることは殆ど無かつたけど、海自の将兵の心をつちりと掴んだ稀代の船乗りはその短い時を全力で走つたに違いない。

その証拠に、叢雲に乗った士官や乗員から、

「ドレイク船長が来たら是非自分を呼んでくださいー！」

という声を次々と受けたのだから。

この叢雲の乗員も元々借り物なだけに、彼らの多くは元の船に帰る事になる。錨をおろしてもやいを護岸と繋いだら、航海は終わり一応の所属である横須賀地方隊に報告に行く。

叢雲の隣には、検疫検査も終わった『みらい』から一人患者が運ばれていた。草加拓海少佐。

大日本帝国海軍のエリート様である。

そんな彼を横目に制服姿の叢雲とステンノとマシユを連れて横須賀地方総監部の建物に入ると、つつつと寄つて来る巫女姿のアマテラス様。

おそらく皇北都のチヨイスだろう。

コスプレ臭が強くエロい。

「もお、おそいです」

「そう言わないでください。

色々あったのです」

この傍若無人な天津神様の行方を遮れる自衛隊員は居ない。

なお、結構待っていたらしく、周囲の草がえらく萌えていたのは見ないことにする。

「よく戻ってくれた。

入即出海将補相当官。



冬木市での報告は受けている」

警備隊司令の咲川海將補は何かを我慢しているような声でそう告げる。

幕僚の美野原一佐は明らかに笑いを噛み殺しているが見ないであげよう。

俺の後ろできよんとしているアマテラス様は気づいていないし。

「今回の災害に対して、政府は参加部隊と隊員に以下の表彰が行われる予定です」

少し長くなるので抜粋する。

舞鶴地方総監に第1級賞詞。

各級指揮官に第2級賞詞。

その他の派遣隊員総員に第3級から第5級までの賞詞。

派遣部隊隊員総員に大規模災害派遣の防衛記念章授与。

……等々。

政府は腐っているが、腐っているからこそ、この手の実利に繋がらないものは遠慮なくばら撒いていた。

政府にばら撒かれた数千億円もの金はどこに行くのやら……

話がそれた。

「それで、私は未だこの横須賀地方隊のままなのでしょうか？」

「追って市ヶ谷より指示が出ることになっています。」

最初からここに居なかったという事すらありえるから困る所です」

咲川司令は俺から視線を逸らす。

その上でため息とともにそれを吐き出した。

「永田町の方では、冷戦終結に伴う新たな危機に対処するという事で、防衛庁の省昇格の動きがあるそうです。

君はその流れの大きな駒になっているみたいですね」

湾岸戦争で中東に自衛隊を直接派遣できなかった日本はその後『金だけしか出さなかった』と国際社会からの非難を浴びて、ペルシャ湾への掃海艇派遣に繋がってゆく。

現在の自衛隊のクーデターの動きはこれとも絡んで、軍隊ではない自衛隊をきちんとした軍にすることで、自主防衛・対米追随外交の脱却を目指すというのが表向きの話。

実際は、省昇格に伴う大規模人事異動でクーデター派を飛ばす為なのだろう。

クーデターに参加する連中を減らすために、彼らの大義名分を受け入れた上で、過激派をこれを機会に排除するなんて力業を誰が考えたのやら。

「光栄と言うべきなのでしょうな」

「そう言ってくれると助かる。

こちらは、君たちの他にもあの『みらい』の相手をしないといけないのだからね」

俺の叢雲は完全な異物なのでまだ対処ができたのだろうが、叢雲の隣に停泊した『み

らい』はなまじ護衛艦であり、自衛官が操作している事もあって俺の時以上に壮絶に揉めていた。

何しろ10年先の兵器という事もあって、米軍も注目しているに違いない。

『『みらい』についてはどうなるのでしょうか？』

「過去に戻った事を説明し、その上で帰属してもらわないといけない。

彼らがここを過去の故郷と認識してくれると良いのだが」

そうならないだろうな。

大体事情を知っている俺はその言葉を言わずに愛想笑いを浮かべるに留めた。

なお、この超常現象の説明をするのが俺なのはすでに決まっていた。

「護衛艦『叢雲』艦長兼護国機関ヤタガラスの入即出やる夫海将補相当官と申します」

『『みらい』艦長。

梅津三郎一佐です。

色々とお聞きしたい事があるのですが、まずは負傷者の受け入れに感謝を」

叢雲とステンノとマシユを連れての『みらい』訪問。

この時点で、『こいつら自衛官じゃない』とわかる形での訪問である。

さつきもらった徽章を皆制服につけての訪問なので、案内する隊員は口には出さな

かったが。

アマテラス様？

さすがに置いてきた。

「まずは貴艦のおかれている状況について説明します」

『みらい』食堂で多くの幹部を前に説明をする。

さすがに自分たちの知っている日本ではない事に落胆をする顔が多く見られたが、1942年の大日本帝国よりましだという空気は俺にも感じられた。

「それで、自分たちは元の時代に帰れるのでしょうか？」

『みらい』副長角松二佐が俺に質問をする。

それに俺は帰る手段を探す努力をすると続けた後で、その問題点を告げる。

「問題は、帰れるとしても帰れるのは人のみで、船を送るというのは不可能に近いという事です。」

もちろん『みらい』がタイムトラベルをしたケースを当てにするとするのもありますが、あれだどどの時代に飛ぶか分かりません。

帰還手段が見つかったとしても、この『みらい』を置いてゆく可能性が高いことを覚悟しておいてください」

黙り込む一同に俺は、メッセンジャーとして最後の言葉を告げる。

後は彼らの選択に任せる事にしよう。

「このまま残る場合、階級及び役職をそのまま追認するという言質を頂いております。

また、その決断までの補給および休養ですが、できる限りの配慮をするという事です。

まずはこの地にてゆっくりと休養してください」

## 大天使ミカエルの陰謀

「ねえ。旦那。

いいネタがありますぜ」

ホテル業魔殿に宿泊した俺達の所にやってきたのがメイド姿のリヨぐだ子。

明らかに口調が歓楽街の客引きなのだが、乗ってやらないと何をされるか分からないので、彼女用に準備していた十枚ほどのマネーカードを手渡してやるとある部屋に通される。

そこで待つていたのはリヨアサシンだった。

「何だ君か。

代金はマスターに払ったが」

「……ちっ！」

舌打ちした当たり、後で揉めるのだろう。

それをされても困るので、叢雲を俺たちの部屋に行かせて、札束の入った封筒を手渡ししてやる。

「値切ると思いましたが、金払いは良いのですね」

「この手の取引の基本だろうか？」

変にケチるとろくな事がない。

で、売りつけるつもりの情報とは何だい？」

リヨアサシンはネグリジエだからこのままエロエロという流れもありえなくはないが、諜報員と化している彼女にそれをするのは鴨が葱を背負ってくるのと同義語である。

そんな訳で、抑えとしてマシユとステンノは外せない。

「まずは最初の挨拶代わりに。」

貴方つけられていますよ」

知っていた。

事、ここまで目立っていると、つけられない方がおかしい。

問題は、何処がつけているかだ。

「で、何処がつけていると？」

「防衛庁情報局。」

監視と護衛を兼ねているのでしょね。

それとカンパニーの連中」

ミサイル流出事件で在日米軍が大変なことになっているのに、CIAもご苦労さまで

ある。

ふと疑問に思ったことを俺は口に出す。

「内調はつけていないのだな？」

「政府が真つ黒ですからね。」

真つ先に無力化させられましたよ。

防衛庁情報局が動いているのも、組織防衛という所からでしょうね」

順調にフラグが進む自衛隊のクーデター計画。

俺はそれに対処する大きな餌なのだろうな。

実際に対魔忍や甘粕正彦は接触してきたし。

「分かった。」

そろそろ本題に入ろう。

売りたいネタとは何だ？」

リヨアサシンはテーブルの上にレポートを置く。

「ご丁寧に一枚目に『O&C』の文字が記されている。

「……うわあ」

読み進めて出た声がこれである。

『女神転生』的には正しいのだが、こうやって理路整然と背後関係を見せられるとこの



世界は実に終わっている。

『真・女神転生』は基本何をやっても最後は大洪水が発生し、神の千年王国に行き着く。問題はその過程なのだが、当然世界の秩序が崩壊していないとリセットである大洪水は発生しない訳で。

かくして、メシア教こと大天使ミカエルの暗躍は始まる。

日本は物語の舞台ではあるが基本的に脇役であり、メインは欧州であり米国である。で、都合の良い、本当に都合の良い配役が一人いた。

モンティナ・マックス。

分かる人には分かる、『少佐』とか『総統代行』とか呼ばれているあの人である。

「戦争の歓喜を無限に味わうために。」

次の戦争のために。

次の次の戦争のために」

なるほどな。

次の次の戦争とは悪魔相手のハルマゲドンだったという訳だ。

そして、メシア教こと大天使ミカエルの加護にカトリック欧州総局は喜んで彼に手を

貸したと。

これは言えんよなあ。

あの司祭、死ぬ間際でも大天使ミカエルの名前は出さなかったと考えると、なんかただの俗物が狂信的殉教者に見えるから不思議だ。

更に読み進めてゆくと、こいつがやっていた吸血鬼製造計画を叩き潰した後、それをベースとした製薬会社が欧州に誕生する。

それがアンブレラ社。

アンブレラ社は生物兵器製造を目的とした製薬会社で時は冷戦の真っ只中。

『死なない兵士』はワルシャワ条約機構軍の兵士の津波を押し留めるのに絶大な効果を発揮する事を期待され、世界的ガリバー企業に躍り出る。

闇鍋世界のくせに微妙に整合性があるのが妙に腹が立つ。

当然、少佐率いる『ミレニウム』とアンブレラ社が繋がるのは時間の問題だった。

『ミレニウム』は非人道実験でどんどんデータをアンブレラ社に提供し、アンブレラ社はそのデータを元にした製薬商品でどんどん金を『ミレニウム』に提供すると。

その背後で、東側の恐怖から西側首脳がこの動きを黙認していた事まで記されていた。

問題は、ベルリンの壁崩壊でソ連を始めとした東側諸国が崩壊した事だ。

『狡兎死して走狗烹らる』とはよく言ったもので、非人道実験は今でも続けている『ミレニアム』を西側首脳は邪魔に思い出していたと。

これでも99年の決起まで尻尾を掴ませなかったのだからすげえというか、それを背後関係までぶっこ抜いてきたリョアサシンがすげえというべきか。

かくして、東京ではクーデターの後核投下、米国ではバイオハザード、英国では第二次アシカ作戦と世界秩序の崩壊と既存宗教の失墜を起こし、大洪水の果てに神の千年王国へ人々を導くメシア教が一気に世界をとって筋書きに見事だと感心するしか無い。

問題は、対吸血鬼に特化している型月世界の聖堂教会や、魔術と科学で彼の陰謀を叩き潰せる武力を持っている『とある』世界の十字教やイギリス清教、もつと容赦ないちやぶ台返しが可能なねぎマ！世界と繋がっている事なんだが……

まあ、あの少佐にとつて戦争こそが大事で、プレイヤーの増加は喜ぶことであり悲しむことではないだろうな。

「で、そんな素敵な状況に我が国の果たす役割は……うわあ……」  
対魔忍世界と繋がるといふ事は、オークが出せるといふ訳で。

弾除け歩兵としての生産供給地が我が国というか、地下都市ヨミハラだった。

そして、対魔忍というオーク生産孕み袋も用意されている。

最も、それだけではないのがあの戦争狂の少佐らしい所だった。

国内防衛企業から、少なくない中古潜水艦部品が南米諸国政府に流れている。

南米諸国の持つ潜水艦なんて70年台あたりまで第二次大戦期のものを使っていた。それゆえに、枯れた技術となって西側情報機関が見逃していた盲点。

「たしかに、あの時は格好のチャンスなんだよなあ」

某吸血鬼が乗っ取られた英空母に特攻をかけた時、その空母を沈められるのならばかの吸血鬼の足止めとしては最高である。

流水である海に落ちて残機は減るけど動けないから、兵糧攻めになるだろうし。

で、『最後の大隊』にはヴェアヴォルフが居るんだよなあ。

南米に逃れた際のUボートも多分残っているだろうし。

群狼作戦はドイツUボートのお家芸である。

ヴェアヴォルフの艦長にオークの水兵でUボートを動かしての空母撃沈狙い。

「……………」

何で私を見るのよ?」

叢雲の声を気にせず、安堵のため息をつく。

つまり、起こるだろう英国での死闘において、自分たちの役割が確定したのだから。

## 猫の手の確保 その1

ミレニアム相手に対潜水艦戦をする場合、足りないものがある。  
艦船と人員だ。

メンタルモデル形式なので叢雲一人で十分ではあるのだが、ダメコンの事とミレニアムの裏切り者は自衛隊内にも居るだろうから、どうしても裏切らない人員が必要になる。

まずその当てに電話をかける事にした。

「君の専属になった覚えはないのだけどなあ」

「上が国だから金払いは良いだろうが。」

またお仕事だぞ。

今度はホムンクルスを作れる限り」

「私の作るものは手間暇かかっているのが分かってそういうのだろうか？」

軽口の応酬の後事情を説明しだすと電話向こうの蒼崎橙子は笑い出す。

「本当に救いがないな！」

人間が信用できないから、人形を用意するなんて本末転倒じゃないか!!」

「まったくだ。」

だが、吸血鬼やグール相手に艦内で反乱なんて起こされたらたまらん。

この際、短命のホムンクルスでも妥協するよ」

「そうだな。」

学園都市絡みでクローン技術を入手したし、洗脳装置による教育詰め込みもあるから短期間の戦力化は可能といえれば可能だ」

電話口の蒼崎橙子はそこで言葉を切って確認をとる。

「率直に言っつて、入即出やる夫よ。」

ホムンクルス兵士は必要なのか？

これは魔術の徒としての質問だ。

その船は彼女一人でコントロールできるのだろうか？

そつちから考えると、これにかけるコストがバカバカしく思えてならん。

科学側から見ても怪しい所だ。

戦闘単位としてどんなに優秀でも、同じ規格品で構成されたシステムには、どこかに致命的な欠陥を持つことになる」

さすが人形師。

クローンやホムンクルスの欠陥をよく理解している。

自然と俺の顔も笑みで歪む。

「政治だよ。政治。」

構造上の欠陥も政治的妥協によって許容範囲ならば許容される。

海上自衛隊はただでさえ定数割れを起こして俺の怪しい船に乗る連中すら確保がおぼつかない。

拳句の果てに、自衛隊のクーデターの動きは止まるどころか更に加速している。

裏切らない上に、最低限の戦闘力を持つ兵隊は今の海自に絶対に必要なんだ。

割に合わないのは分かっているさ」

「だったら、学園都市から買ったらどうだ？」

蒼崎橙子の切り返しに俺は即答する。

無駄に閻鍋世界になっているおかげで、そういう選択肢もある訳で。

「もちろんそのつもりだ。」

お前自身が言っただろうが。

戦闘単位としてどんなに優秀でも、同じ規格品として構成されたシステムには、どこかに致命的な欠陥があるって。

そっちのホームリンクルスをハイエンド、学園都市のクローンをローエンドのハイ&ローミックス。

よく戦闘機の導入なんかで使われている方法さ」

もう一つあったなと思ひ出して、俺はそれも口にした。

電話越しの会話で盗聴されている可能性もあるが、この際時間が足りない。

「麻帆良学園には行ったか？」

「いや。」

あいにくまだだがそれがどうした？」

「あそこに始祖吸血鬼の人形師が居る。」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

紹介状を書いてやるから、会いに行くと良い」

「……狙いは何だ？」

「アンドロイドさ」

これが90年後半だったら良かったのだが。

そうしたら、マルチヤセリオが出てきて、遠慮なく投入できるのだが。

「何のために、貴方にこの手の話を振っていると思っている？」

「貴方をこの手の特異点にする為に決まっているだろうに」

「あははははは………また魅力的な誘いで断れないじゃないか！

そうだ。



お前が連れてきたアニメスフィアの娘、まだこちらに居るぞ」  
あ。

すっかり忘れていた。

まだ居たのかと言おうとしたら、その理由を蒼崎橙子が先に話す。

「情報生命体である悪魔と違って、人間の魂つてのは繊細なんだよ。

先程の注文の答えにもなるが、彼女の器ができるまではこちらは注文を受け付けられ  
ん」

舌打ちをしそうになる所をぐっと堪える。

こちらが助けた命である以上、因果応報である。

「わかった。

彼女の器ができれば一度報告をくれ」

「ああ」

とりあえず学園都市からクローンを買うのは確定。

御坂美琴はできているかどうか微妙なので、確実に抑えられるところから抑えてゆく

と……

「対魔忍しかないよなあ……いやな事に」

「あらっ？」

「ついに彼女たちを抱く気になったの？」

ステンノのツツコミに俺は首を横に振る。

頭が対魔忍なだけで、彼女たちの身体能力は高いのだ。

頭が対魔忍なだけで。

大事なことだから二回繰り返して言ってみた。

「確定でクローンがあるのが多分臆とアサギと不知火と紅あたりかなあ……待てよ？」

俺は思いついた事を確認するためにリヨアサシンのレポートを再度読み直す。

対魔忍世界の多国籍複合企業体ノマドとの繋がりを確認するためだ。

ミレニウムと協力関係にあるのはわかったが、その創始者であるエドウィン・ブラツクとは敵対している事実が浮かび上がる。

これは、エドウィンが始祖吸血鬼だからで、ミレニウムにとっては格好のサンプルという訳だ。

ミレニウムはノマドと協力しながらエドウィン・ブラツクの排除と捕獲を狙い、エドウィン・ブラツクはミレニアムの狙いを知りながら自衛しつつ支援を受け続けた。

もちろん、これには米国本拠のアンブレラ社も絡んで素敵なことに。

「そんなクローンの研究生産施設は……ここだよなあ……」

学園都市。

アンブレラ社。学園都市研究所。

ノマド。学園都市廃棄研究所。

バイオハザードが発生してもどうにでもなりそうなその研究所の名前を見て、俺はため息をついた。

## 猫の手の確保 その2

知恵留美子の暴れっぷり

100で無双、1でアへ顔。

結果 86

地下都市ヨミハラ。

東京の地下300メートルに作られた、無法地帯は今昔。

吸血鬼殲滅に命をかけた一人のシスターのおかげで、その治安は急回復していた。

それは同時にノマドの勢力減少と、他勢力の介入に繋がる訳で。

『東京ジオフロント』と名前を変えたこの街は諸勢力の奪い合いが始まっていた。

なお、『東京キングダム』を買い取ったのは俺であり、現在かの地にて英雄王の為の火力発電所建設が始まっている。

状況変化の介入度 100ほど積極的

時計塔	8 4 + 4 0    1 2 4
聖堂教会	2 6 + 7 4    1 0 0
関東魔法協会	9 5 + 4 4    1 3 9
関西呪術協会	2 5 + 2 5    5 0
十字教	6 2 + 9 5    1 5 7
メシア教	1 9 + 7    2 6
自衛隊	3 5 + 2 6    6 1
米軍	7 5 + 5 9    1 3 4
アンプレラ社	1 1
ミレニアム	1 4

第四次聖杯戦争によって日本における有力な拠点であった冬木市での影響力を失った時計塔と聖堂教会はここに新しい拠点をと目論見、多くの人員と資源を送り込んだ。た。

それは、満を持して冬木に人員を送り込んで全滅した十字教も同じで、己の本拠地である麻帆良学園都市の近くに出島よろしく他勢力の拠点ができるのを嫌った関東魔法協会も介入。

更に、魔界や魔法というものの調査と実用化に興味を示した米軍がここを研究拠点に  
という動きを見せたことで治安は守られているが、激しい暗闘が水面下にて行われてい  
た。

そんな中、主導権を握ったのは十字教。

ローマ正教の最暗部の一人である後方のアックアが投入されたのが大きい。

そんな主導権争いの結果、東京ジオフロント連絡会なるものが組織され、十字教・関  
東魔法協会・米軍・時計塔・聖堂教会の五者で、この街を運営する事が決まっていた。

なお、その連絡会議長に選ばれたのは、時計塔から推薦された魔術師でダーニック・プ  
レストーン・ユグドミレニア。

『生きていたのかよー』とツツコミ半分、『ミレニアムがあるなら、そりゃ繋がって  
るよなあ』と納得半分の感想だったのを覚えている。

彼にとつては左遷なのか因縁の地でのリベンジなのかそれは当人にしかわからない  
だろう。

「失礼します。

通行証を拝見します」

自衛隊の服装で俺は防弾仕様のキャデラック越しに通行証を見せる。

マシユ・ステンノ・叢雲・アマテラス様も当然同乗しており、このキャデラックの運

転手は同じく自衛隊の服装の臚である。

また、俺の車前後の車も護衛の自衛隊員が乗り込んでいるはずである。

防衛庁情報局から来た彼らは、同時に俺の監視を兼ねているのは言うまでもない。

「今の検問の護衛の顔、同じだったわね。」

あれが司令官が言っていたクローンってやつ？」

叢雲の質問に俺は苦笑して頷いた。

初見で新たな知識が俺の頭にも刻まれる。

「ああ。」

国内大手製薬会社ヨロシサン製薬が裏で作りに出した、クローンヤクザって奴だな」

もちろん、アンブレラ社やノマドと業務提携済。

そんな所から、クローン兵を買うというのが今回の訪問の目的の一つである。

広大な地下都市ヨミハラをゆっくりとキャデラックが走る。

無法地帯であり快樂の街でもあったこの街だが、完全にその快樂を消し去ることはできず、秩序が入った結果、ロアナプラと化したというのが俺の感想だったりする。

ここに一般人は住めないだろうに。

なお、まだ未制圧だが最深部に魔界の門があり、そこから魔界に繋がっている事で、この国の狂った繁栄は支えられている。

中央の大きなビルの入口に着くと、ドアが開き交渉相手が出迎える。

「さあ、取り引き開始だ。」

きみの欲しいものを言ってくれ。

金さえあれば、なんだって揃えてみせるよ」

ヴィクトリア・ザハロフ。

対魔忍世界の武器商人で言葉通り金さえアレば何だって揃えてくれる人である。

彼女に臙経由でコンタクトをとったのだ。

俺も握手をして自己紹介をする。

「護国組織ヤタガラスの入即出やる夫だ。」

良いビジネスができるようよろしく頼む」

こういうビジネスでは第一印象がものを言う。

ヴィクトリア・ザハロフは、商品であるクローンヤクザや枕営業用の娼婦達を並べる

が、こつちもマシユに叢雲にステンノを連れてきている。

もつとも、ただ一人の御方に全部持っていかれるのだが。

「ちよつとこの場所暗いですね……えいっ！」

アマテラス様。

太陽の化身だからといって、ヨミハラ全体を己の日光で輝かせないでください。



できの悪い吸血鬼はそれで灰に……あれ？

もしかして、ミレニアムの天敵じゃないのか？

この御方。

そんな愉快な挨拶の後、ビジネスが本格的に始まる。

まずはこちらの手持ちのアイテムを彼女に売る事にする。

「という訳で、こいつの売却をお願いしたい。」

各勢力に到達しているから、いずれオークションが開かれるだろう。

保管と取引終了まで、手数料は売却価格の一割」

部屋に運び込んだのは、リドヴィアⅡロレンツエツティがこの国に持ってきて俺が回

収した『使徒十字』。

こいつを使うと、突き刺した土地をローマ正教の支配下に置くといつてもないし

ろもので、その効果範囲は47000平方キロメートル。

なお、九州の面積が36750平方キロメートル。

それぐらい広大な土地を支配下に置く上に効果が長く続くと来たのだから、買取され

たとは言えもちろん日本政府は大激怒。

その間でどのような交渉があつたか知りたくはないが、この地にて俺個人の私物扱い

での売却という形でこの問題を俺に丸投げしてきた。

頭を抱えた俺は、この諸勢力が入り混じっているこの地でのオークションを企み、その代理人として彼女を指名したのである。

「ちなみに、ローマ正教が暴力を持つて奪還に来た場合は？」  
「返してやれ。」

一部始終が他勢力に流れるようになっていいるから、その後のゴタゴタで彼らがぶん殴られるだけさ。

金で解決しようという穏便な手段すら取れないような相手が、この国の魑魅魍魎を相手にその勢力を維持できるとは思えんしな」

「それを誰かが使う事を考えないの？」

ヴィクトリア・ザハロフの質問に俺はただある方を指さした。

「どうです？」

これ、なかなか似合っていますか？」

「……悪くないわ」

「へえ。」

「こういうのが好きなんだ」

「カルデアの服とあまり変わらない気が……」

暇を持て余した女性陣による対魔忍コスプレ会場で一番浮かれている天津神様を指

さして俺はハツタリをかます。

なお、臆が本気で対応に困って目で俺に助けを求めているが、俺は見捨てることにした。

「あのお方がそれを許すと思うか？」

「……確かに」

「ごほんどわざとらしく咳き込んで、ヴィクトリア・ザハロフは話を続ける。

カタログを広げて今、入手可能なクローンのリストを並べる。

「海上自衛隊員の定数割れは深刻な状況に達している。

船は増えているのに、それを操る人間が追いついていない。

急場しのぎだが、末端の人員をクローンやドロイドに任せたいと思っている。

まずは試験的に、うちの艦を前提に、500人ばかり」

「結構な数だね。

試験的の割には数が多い。

まあ、金さえもらえるのなら、文句は言わないけどね」

俺の船である叢雲の現在の定員が大体120人。

三交代（出撃・休息・訓練）に欠員が出ることを見越してというのが建前、海将補相

当官で持てる護衛隊編成でもう一隻艦娘を確保しようというのが本音である。

そんな事はおくびに出さず、俺はカタログを手にとり、ヴィクトリア・ザハロフが説明を続けた。

「ヨロシサン製薬のクローンヤクザをベースにしたハイテツカータイプが、お客様の要求を満たして一番お安くなっています。

洗脳と教育でこれぐらいの価格で」

実際安い。

もちろん、裏があるのでそれを確認する。

「バックドアについてはどうなっている?」

つまり、ハッキングからの裏切りだ。

その手の入口の事をバックドアと呼ぶ。

「ヨロシサン側からのアクセスについては确实にしていますが、それを塞ぐのは当然そちらでやってもらう事になります。

また、それをした際のヨロシサン側からのサポートは一切受けられなくなるのでご注意を」

このあたりはロリンちゃんにさせることにしようと思意する。

次のカタログは露骨な肌色のオイランが目に入る。

そりゃ、ヨロシサン製薬があればこつちもあるのは当然か。

「……こっちは、オムラ・インダストリーのオイランロイドか」  
「便利ですよ。」

オイランロイド。

何しろ、生理もないし、妊娠しない。

長い航海において少数でも異性が居ることは艦内のモラルの向上に繋がります。

最近、オイランロイドの性能を落とさずに戦闘力を向上させたタイプも登場しました」

その話にコスプレショーから逃れてきた朧が参加する。

何しろ、クローンを買いに来て、そっち系の用途を満たすならば、対魔忍が一番というか私を使えよと目で訴えているが無視することにした。

「若干値は張りますが、戦闘力と性処理能力を考えるのならば、対魔忍のクローンが一番ですよ♪」

というか、私達を使えばクローンいりませんよ♪」  
こいつ、口に出しやがった。

この日のお買い物結果

ヨロシサン製菓

ハイデッカークローン

400体

オムラ・インダストリー  
ノマド  
オイランロイド戦闘強化タイプ  
娼婦兼戦闘用対魔忍  
80体  
20人

『使徒十字』売却価格942億円。

売却先

- 1 2 3 ローマ正教
- 4 イギリス清教
- 5 ロシア成教
- 6 聖堂教会
- 7 時計塔
- 8 メシア教
- 9 関東魔術教会
- 1 0 ノマド

結果 1

帰り道。

俺はマシユに顔を向けた。

「先輩。

どうしました？」

「マシユ、共に戦えるとしたらどうする？」

F G Oは途中で終わっているのが、マシユがオルテナウス化する事は知っている。現在のマシユは戦うのがきつい状況なのだ。

それにもかかわらず、マシユははつきりと告げた。

「もちろん、先輩と一緒に戦います」

彼女にとって、あの旅はかけがえのないものであり、それを駈けた俺と戦うのは当然のことと言わんばかりに決意の目を俺に見せる。

俺は手を組んで目を閉じて、マシユにその決意を告げる。

「君の助けが必要だ。

どうか、艦娘になって俺を助けてくれないだろうか？」

## 猫の手の確保 その3

「たしかここに……あつたあつた」

平崎市のホテル業魔殿に戻った俺たちは、マシユ艦娘化に向けたアイテムを持っていた素材から探し出す。

多分これだろうと思っていたから、あつたのは大助かりだった。

甲勲章 10個

つまりその気になれば、最大10隻まで艦娘にコンバートできるみたいだ。

連合艦隊を組むにはあと二隻足りないが、そこは造れという事なのだろう。

「じゃあ君はこっちの方に入り給え。」

その素材はこつちに」

ヴィクトルに言われて悪魔合体の装置の片方にマシユが入り、もう一方に甲勲章を置く。

俺は念のために最後の確認をとる。

「マシユ。」

「良いんだな？」



「もちろんです。先輩。

マシユ・キリエライト。

どんな姿になっても、先輩と共に戦います」

「……わかった。

ヴィクトル。

やってくれ」

ゲームでは何度も見た光景だが、自然に祈る俺が居た。

マシユの姿が甲勲章と共に消え、中央の魔法陣にマシユらしき姿が出てきたのに安堵する。

1 浜風

2 浜風

3 浜風

4 マシユ風

5 マシユ風

6 マシユ風

7 マシユ風

8 羽黒

9 祥鳳

10 熱烈歓迎

結果 5

レベル 72

「浜風であり、マシユ・キリエライトでもあります。

戦力向上しました。

これなら、やれます！」

あ。

浜風乙改になってる。

マシユの能力も使える当たり良い便利キャラになったと言わざるを得ない。

ちなみに装備は、10cm連装高角砲、13号対空電探改、25mm三連装機銃の3

つで星はついていない。

ミレニアム相手だから、対潜セットを用意しておかないとなあ。

「やる夫。

ちよつと良いかしら？」

叢雲が俺の脇腹を引っ張る。

何か妙に顔が赤い。

「私もそろそろ、あの合体をしてほしいなって」  
あの合体？

何かあったかと首を捻ったら、叢雲がキレた。

「あれよ！

あれ!!

……この世界に馴染むやつ」

「え？するの？」

俺の声に叢雲は理路整然と理由を言う。

その言葉に迷いはない。

「これから戦う敵は、強大なんでしょう？」

だったら、万全の姿で戦っておかないと」

そんな叢雲にステンノが突っ込む。

さすが女神様。

心の隙間に入り込むのが上手い。

「本音は？」

「だって！

どんどん胸の大きな子がやってくるじゃない!!」

知ってた。

とはいえ、メリットが無い訳ではない。

メガテン世界に叢雲を移せば、MAXレベルの175になるのだから。

「……どうしたんです？」

じつと私の方を見て？」

この傍若無人な天津神様を抑えることができるのは魅力である。

悪意がないぶんタチが悪いので、毎度毎度伊勢の裏巫女が叱りに来る回数も減るだろう。

「まあ、いいか。

叢雲の戦力強化も必要だし」

そんなこんなで数分後。

「悪くないわ。

私の魅力が増すのね」

そこには魅力というか胸の増した叢雲の姿が。

叢雲というか、ムラ雲というか、ムチ雲というか。

大好きだ。

もちろん彼女は願いがかなってキラキラ状態である。

ん？

「あれ？」

「お前そんな装備だったか？」

「……？」

あれじゃない。

横須賀でくつつけたのがそのまま残ったとか」

ちと気になることがあったので、そのまま叢雲にそれをぶつけてみた。

「ちよつと自己紹介をしてみろ」

「何よ。」

私はみねぐも型護衛艦の三番艦に決っているじゃない……っ!？」

女神転生には、御霊合体というのがある。

パラメータの強化を目的にしたもので、今回やったのはこれのはすだ。

問題なのはその御霊の元である精霊を使った精霊合体というやつで、これを使うとその悪魔のランクを上げたり下げたりできるのだ。

先に現代武器をくつつけたのでそれに合わせて艦を現代に合わせたのかもしれないが、深く考えてもわからないから、俺はそこで考えるのを止めた。

「さてと、マシユ風の為にもドレイク船長を再度召喚しないとな」

という事で、ここで働くりヨくだ子呼んで聖晶石を購入。

ドレイク船長が出るまでぶん回すことにした。

「セイバー、モードレッド推参だ。

久しぶりだな。マスター」

君、この世界大好きだろう？

とはいえ、こちらとしては大歓迎なので何も問題はないのだが。

ドレイク船長が来るまで何連かかった？

738連。

738×聖晶石3つ∥聖晶石∥22214個。

石の価格120円×22214個∥265680円。

「つくづくあんたとは縁があるねえ？

アタシはフランス・ドレイク。

まあ、仲良くやろうじゃないか！」

国家戦争規模だと、26万円もはした金である。

リヨくだ子が何か殺意を込めた目でこつちを見ているのだが、残った石を全部あげる

と言ったら途端に機嫌を直してくれた。  
ちよろい。

横須賀基地に帰ると、叢雲の姿がちやんと吹雪型からみねぐも型に変わっていた。艦内とかどうなっているのか気になったが、そのあたりは駄女神様がんばったらしく、人的被害もなく全員無事らしい。

最も、基地内では、突如叢雲の姿が変わったと大騒ぎになっているのだが。さて、今日のメインイベントだ。

「じゃあ、マシユ。

やってみろ」

「はい！

マシユ風こと、マシユ・キリエライト、行きます!!」

「真名、ナノマテリアル展開。

これは多くの道、多くの願いを受けた幻想の船。

呼応せよ、『駆逐艦浜風』!!」

どん!!と、大気が震え、何も無い護岸に陽炎型駆逐艦『浜風』が姿を現す。

その光景に周囲の人間が唾然とする中、マシユは嬉しそうに笑ってみせた。

「展開。想定内です。

何とかなりました。先輩」

基地での騒動の処分

1で査問会。100で見なかったことにした。

結果 79

これだけの大騒動だが、基地では『ああ。またこいつらか』で済まされたあたり、順調に常識がずれていつているらしい。

一応俺の上司だろう横須賀地方隊の警備隊司令の咲川海将補からお小言をもらって開放されたが、その理由は美野原一佐がこそつと教えてくれた。

「舞鶴の知り合いから聞いたのですが、もし、ドレイク船長がここに滞在するのなら、舞鶴と同じように研修会とかやってくれませんか？

お隣の米太平洋艦隊からも出席したいとお願いが」

ドレイク船長。

あんた世界の海軍軍人に愛されすぎだろう……



## 猫の手の確保 その4

戦力が強化されてもそれを運用できる体制にないと意味がない。

かくして、叢雲とマシユ風の戦力化の為のあれやこれやを急ピッチで行う事になった。

「という訳で、マシユ風は近代化改修を行うわよ」

「はー」

先輩風を吹かす叢雲に言われて、興味津々のマシユ。

叢雲がした事をこっちでもするだけだが、装備の更新は今後の戦いにも関わる。

艦内伝達の通信機器等は海自が保管していたお古を急遽持つてきて備え付け、医療器具とかもやはり最新式の医薬品に替えられた。

調理器具も新調し、何よりも大型冷蔵庫を備え付けそこに大量の食料が運び込まれ、兵員室にベッドをつけてゆく。

あと、叢雲と同じく神棚が設置された。

「いずれは、C I W Sやハーブーンやアスロックもつけたい所ですけどね」

視察に来た美野原一佐がつぶやくが、その時間があればいいのだが。

装備の更新だけでなく動かす人間が居ないと動けない。

いや、動かそうと思えば動かせるのだが、海上自衛隊という身分を持っているので、中にその隊員をいれるという政治的配慮が思いつきり足を引っ張っているだけである。

「とりあえずは対潜用のソナーと爆雷を何とかしないとな。

叢雲が対潜に特化しているから、浜風は対空に特化させるのもありかなと考えている」

ミレニアムのUボート相手だから対潜装備は必須。

さすがに人前でマッシュ風と呼ぶのは恥ずかしいものがあるので、ここでは浜風で通す。

そんなことより、問題の一つを美野原一佐と話す。

「で、事後承諾になったけど、あれについてはOKなのかい？」

基地内に並んだヨロシサン製薬とオムラ・インダストリーの巨大トラック。

そこから出てくるクローン人間事ハイテッカー達とオイランロイド達は海自隊員服を来て、自衛官の見守る中グラウンドを走って体力テストをしていた。

「良くはないでしょうが、定数不足は本当に深刻なんです。

この叢雲に貼り付けた60人すら用意するのに手一杯だったんですから」

海自内部でもこの手の計画が上がっては、機密の壁から断念した経緯がある。

とはいえ、最低限の知識を即席で用意できるのは、人手不足に悩む海自にとって喉から手が出るほど欲しかったのだ。

「こつちもレポートを出そう。」

何体かはそちらに引き渡してもいい」

「協力に感謝します。」

これは、咲川司令がぼやいていた事なのですが」

こういう噂話にかこつけて伝言を渡すのは、それだけやばい話である。

自衛隊のクーデターの噂がまことしやかに語られるようになって、こういう形で上の人間は情報交換を行っていた。

「総理がクーデターに備えて直属の神田旅団を首都圏に呼んだという噂があります」

「神田旅団？」

聞き慣れない言葉に俺が首をかしげると、美野原一佐が説明をしてくれる。

「この国の海兵隊ですよ。」

構想は昔からありましたが、近年西部方面隊内部に発足したそうぞうで。

総理直轄なので、こちらにも噂以上の話は知りませんがね。

司令官の神田一佐の名前をとって神田旅団」

「つまり、あまり派手に動いているとそいつらにクーデター側と判断されて肅清される

ぞという忠告な訳ですな？」

お互い笑顔なのは崩さないが、同時に目が笑っていない。

上に立つというのはこんな腹芸も大事になってくる。

「上は貴方が仕入れたヨロシサン製薬やオムラ・インダストリーと仲が良い。

神田旅団の兵員、アレじゃないかと私は見ているのですけどね」

「だとしたら喜ばしい事だろうな。

ついに人間は人殺しに人すら使わなくなったという訳だ」

こういう時にタバコが吸えたらと思った。

それで口が塞げるのに。

「では、中世海戦研究の研究会を開きたいと思えます。

講師はフランシス・ドレイク三佐相当官」

基地講堂内は満員御礼だった。

手の空いている士官連中は大体来ているし、それ以上に熱心だったのが米軍の奴らで、ビデオカメラまで持ち込んでいる。

ドレイク船長の公演は実体験と当時の思考や文化習慣もまじえての話に会場は大受け。

当人は嫌がるだろうが、公演だけで食っていけるだろう。

そんな事を思いながら、参加者名簿を確認。

あ、リエリ・ビショップ中佐とナオミ・エヴァンス少佐発見。

若狭湾ミサイル発射事件で、ミサイルが流出した責任からかなりの幹部の首が飛んだらしいからその後釜なのだろう。

そんな事を考えていたら、質問にこんな声が聞こえてきた。

「失礼ですが、フランシス・ドレイク提督は男であるという説がありますが？」

「たしかにそういう話もあるさ。」

けど、

そこでドレイク船長は己の胸を揺らして一言。

「これでも私が男に見えるかい？」

会場大爆笑の中、俺は慌てて発言者の名前を確認する。

米海軍少将。

ターニャ・デグレチャフ。

駄女神よ。

これは混ぜたら駄目なものじゃないのかな？

案の定、例の質問は俺を見つけるためのもので、接触して情報交換すると出てくるわ出てくるわの存在Xへの罵倒の嵐。

そんな彼女の今回の試練は悪魔ときたのだから罵倒も力が入る。

しかも、それを行うのが彼女の居る米国からの核攻撃で、その成れの果てが神の千年王国という俺の説明を聞いた後の彼女の笑みは、壮絶であり狂気に満ちていた。

なお、リエリ中佐とナオミ少佐は彼女の部下らしい。

「ところで、貴国とは同盟国だったと思うが？」

「国家に真の友人は居ないと思いますが、同盟国ですな」

「私が偉くなれば、クーデター後の核攻撃を防げるかもしれないぞ。

少なくとも、この国と我が国の経済的共存共栄を維持し、核で焼くなんて馬鹿なこと  
はしないと断言しよう」

やっぱり米軍はクーデターに介入の準備を進めていたか。

上が腐っているから、最悪第二の戦後も許容してでも核攻撃を防げるならばベストなの  
かもしれない。

少なくとも俺も彼女も神の千年王国を望んでいない以上、そこで妥協が成立する。

「で、何がお望みで？」

「貴官が使う艦娘のデータが欲しい」

「何だそんな事ですか」

そこで俺のいたずら心に火がつく。

彼女の魔力は前世で折り紙つきだ。

だったら艦娘ぐらいは呼べるだろう。

「多分貴方なら呼べますよ。

何なら呼んでみますか？

呼べなくても、中二病の黒歴史が増えるだけですし」

「ちよつと待て！

何だその中二病の黒歴史って!？」

「聖杯戦争召喚呪文」

このデグ様、どれぐらい転生したのだろう？

その一言で察して、存在Xに罵倒の呪文を吹き出したので、俺は見なかったことにした。

デグ様が呼んだ艦娘

1 サミュエル・B・ロバーツ

2 サミュエル・B・ロバーツ

3 サミュエル・B・ロバーツ

4 ジョーンストン

5 ジョーンストン

6 ジョーンストン

7 ガンビア・ベイ

8 サラトガ

9 アイオワ

10 イントレピッド

結果 10

「Hi!

Essex class 航空母艦、5番艦。

Intrepidよ!

貴方がAdmiralなのね?

素敵ね。さア、一緒に行きましょう?

いいかな?」



「……」

「……」

その顔が見たかった。

言わないけど。

なお、彼女は最終形態、つまりベトナム戦投入時のスカイママ仕様になっていた。

さすデグ。

## 猫の手の確保 その5

横須賀港に突如現れた空母だが、関係各所が大騒ぎしても米軍は『機密』の一言で沈黙を続けた。

なお、海自側には一部始終を伝えて上が頭を抱えているのだが、  
「自分みたいに付喪神を召喚できるなら、他国でもそれを召喚しようと思えるのは当然でしょう。」

それに相手は米海軍の少将。

どうして自分が断れると?」

の一言で上は沈黙する。

この手の接触防止は市ヶ谷側のミスであると言えば事実なので向こうもそれ以上怒れないのだ。

一方で、さすがデグ様とばかり在日米軍司令部経由で、

「今回の貴国の判断による軍事技術供与に感謝します」

と正規ルートで謝辞を伝えて借りを明確にしたので、それ以上のツツコミもできず、無罪放免となった。

米ミサイル流出誤射事件に次いで大きな借りをどう使うのか、この腐った政府はまだ思いついていないのが色々と救いが無いのだが。

「しかしでかいな」

艦娘なので全自動なのだが、もちろんそれをさせるつもりはデグ様にも無く、即座に人員をかき集めたあたり、さすがデグ様。

パイロットは岩国基地から連れてきただけでなく、ベトナム戦時の空母航空団編成だった事でA-4EやA-4Cに乗りたいという現役および退役軍人が押しかけているという。

なお、同じ理由で、

『Fighting I』にまた乗れるなら乗せてくれ!」

とやってくる連中が大挙して……こいつらはベトナム戦時の連中だからみんな偉くなって断るのが苦労するなんて笑い話も。

とにかく日本では護衛艦に乗せる人間がおらず、クローンやアンドロイドを使おうという所に追い込まれていたのにマンパワーを確保してみせるあたり世界の超大国の面目躍如というところだろうか。

そんな米軍横須賀基地にて米兵が空母イントレピットに調査搬入の作業を叢雲とステノノを連れて眺めていると、後ろから声がかかる。

その声の主にお呼ばれされたのが俺がここに居る理由である。

「これでも小さい方だ。」

今や原子力空母の時代で、そいつらは80000トンを超えるからな。

来てもらつて感謝する」

ターニャ・デグレチャフ少将の後ろに控える艦娘イントレピット、その左右にはリエリ・ビシヨップ中佐とナオミ・エヴァンス少佐が居る。

この四人が実質的にこの空母を動かしてゆくことになるのだろう。

「で、だ。」

来てもらつた理由だ」

リエリ・ビシヨップ中佐がえらく大きな軍用無線電話を俺に差し出す。

受け取ると、テレビで聞いたことのある声が聞こえてきた。

「米軍の空母の所在というのは、歴代大統領が常に頭に入れておかないといけない事項の一つだね。」

同盟国の技術供与のおかげで、新しい……というには少し古いが、彼女が舞台に立てたのならばお礼の一つぐらい言わないと非礼にあたるだろう?」

俺が睨みつけてもデグ様は知らん顔。

声は穏やかに、流暢なクイーンズ・イングリッシュで返事を返す。

「同盟国としてできる事をしたままでです。

大統領閣下」

おそらくワシントンとのコネ作りに俺を売ったな。

さすデグ。

やることにそつがない。

「冷戦終結と湾岸戦争の後、国際秩序は我が国が守らなければならない。

その時に頼れる同盟国が共にいると嬉しい。

ワシントンに來た時には、ぜひホワイトハウスに來てくれ。

歓迎しよう」

当たり前障りのない会話を終えて電話を返すと、デグ様がネタバラシをする。

彼女もとてもいい笑顔だ。

「当たり前前の事だが、この国でCIAが動いているのは知っているだろうか？

この国で進みつつある陰謀について、ホワイトハウスとペンタゴンは重大な懸念を持っている。

で、この間のミサイル流出誤射事件だ。

私の仕事は、その経路の解明と再発防止にあった。

だが、しゃれにならんぞ。これは」

突き出された英語のレポートには『トップ・シークレット』の赤判子がでかかどと押されている。

機密流出にならんのかと思つたが、デグ様が笑う。

「安心しろ。」

まだ提出していないものだ。

判子はお前に見せつけるために私が押したが、ペンタゴンでも押されるのは間違いないだろうよ」

同じ転生者のよしみというより、使えるなら大事にコキ使おうという意図も入っているのだろうな。

その結果、こちらも大統領とのコネなんてものができて、さすデグとなるから彼女はいつもの泥沼に落ちてゆくのだが、言わぬが花だろう。

そんなレポートを読み進めると、俺の顔も真顔になる。

「これは本当か？」

「嘘だつたら良かったんだがな」

それは湾岸戦争後の闇の暴露に近かった。

戦争そのものは米軍をはじめとした多国籍軍の勝利に終わったが、兵士達にはそんなことはどうでもよくPTSDによる薬物依存や生活崩壊でホームレスに落ちている実

態が浮かび上がる。

そして、そんな彼らを救済し生活再建をしていたのがメシア教だった。

ミサイル流出事件はそんなメシア教徒が引き起こした事が書かれていた。

ルーラーの天草四郎、歪んでいるかもしれないが間違いなく聖人で救世主だろうからなあ。

そして、この事件で彼らの存在が明るみに出た事実には俺は頭を抱えたくなる。

「内部調査だと、現在ホームレスになった退役軍人は50万は居ると言われている。

かれらの救済を一手に引き受けている事で、軍内部に急速に支持者が増えている。

そんな奴らの聖女がこいつだ」

デグ様は数日前のワシントン・ポストを差し出す。

その一面に『ソマリアの聖女』というタイトルで紙面を飾ったのは、国連のソマリア支援活動で米軍のプロパガンダとして華々しく活躍する一人のヘリパイロットの姿だった。

「メアリー・スー少佐。

多分、こいつがメシアの聖女の一人だ」

なるほどな。

彼女を知っていたからこそ、デグ様はなりふり構わず手駒を集めにきた訳だ。

存在Xの力で俺たちが向こうについたら洒落にならんだろうからな。

「一週間後、こいつの試験航海をするにあたって、臨時編成の任務群を作ることになる。もちろん、こちらでもエスコートはつけるが、その時に貴官の船である『叢雲』と『浜風』、それと『みらい』にも来てもらいたい。

ちゃんと正規ルートで要請するので外交上の問題は無いぞ」

「多分中にスパイが居ますよ」

どう考えても『監獄戦艦』コースだろうとやんわりと指摘したら、デグ様は獰猛な笑みを見せてあつさりと言いつつ放った。

「知っているよ。」

この航海はそいつらを狩り出す為だからな」

デグ様は顔芸芸人ではあるけど、戦場を渡り歩いた化物の一面もある。

そんな彼女の狩りの顔を見て、俺は言葉を出せず目の前のイントレピットを見てごまかすことにした。



# 洋上人狼 その1

## 湾岸戦争

100ほど史実よりめちやくちや

結果 82

ミレニアムの関与

100ほどバリバリ

結果 63

デグ様の頑張り

100ほどさすデグ

結果 86

この世界における湾岸戦争は多国籍軍の圧勝ではなく、中東の地獄の釜が開いた最悪の戦いだっただ。

これにミレニアムが関与していたらしく、イラクが撃ち込んだスカッドミサイルにイ

スラエルが反撃してしまい、中東戦争がリンクしてしまつたのだ。

地獄の釜が開いた大戦争において『湾岸の英雄』の一人として名をはせたデグ様は、当然のように政治工作にも長けている。

彼女は俺たちを演習航海に連れてゆくついでにこんな事をやってくれやがりました。

「我が合衆国において、入即出やる夫海将補相当官は、海軍少将として扱うのでそのつもりで」

正規ルートで堂々と云つてのけたこれは米国による俺の取り込みにはかならない。

市ヶ谷の抗議もどこ吹く風で彼女は出港準備を続けるが、市ヶ谷及び政府上層部が黙つたのは、例の聖杯戦争のもみ消しで多額の金で買収された事をちらつかせたとか。

さすデグ。

CIAにもパイプ持っているな。これは。

なお、俺の辞退で一応なかつたことになつたが、米海軍はこの通達を取り消すつもりはないらしい。

つまり、米海軍作戦行動において、俺は海軍少将として振る舞える。

「感謝はしていますが、もう少し穏便に何とかできなかつたものですかね？」

横須賀米軍司令部で臨時任務部隊編成で修羅場になつている俺が俺以上に修羅場になつているデグ様に嫌味を言う。

なお、俺は判子を押し機械と化しており、実務はレベルキヤップが解放された敏腕艦娘叢雲と事務エキスパートの文車妖妃によって回っている。

「腐りきっている上を相手に妥協や交渉をしても無駄だろう？」

やつらは、日米安保の意味を分かっているから、文句は言えどもそれ以上の事はしてこないさ」

「そういう連中ばかりだったら……」

と言おうとして俺の言葉が止まるのは、目の前の臨時上司が狩人の顔をしていたからだ。

つまり、米軍内部のスパイだけでなく、海自内部のやばい連中もこれを機会に俺に狩れと言っているらしい。

少将の地位はその前払いという訳だ。

暗にしゃべるなど言われた理由に、内部のスパイの存在がある。

米軍にも海自にもスパイが居る訳で、そのスパイがミレニアムと繋がっている可能性は捨てきれない。

どこに盗聴器や集音器がしかけられているのか分からないのだ。

「こちらの編成ができたわ。

確認して」

横で仕事をしていた叢雲が海自参加艦艇を確認する。

『叢雲』『浜風』『みらい』の三隻の他に、俺たちへの監視として『たかつき』と『たちかぜ』の第1護衛隊を送り出す事にした。

ここで問題になったのが指揮系統。

こっちは素人に毛が生えたようなものなのに、少将こと海将補待遇だから第一護衛隊司令の衣笠一佐より立場が上になってしまおうという食い違いが起きている。

そのくせ、デグ様は海自のまとめ役を俺に委任しているというこのややこしさ。

この航海が海軍の仕事ではなく、裏のある事がミエミエなのだが、俺は自分たちの船も含めた海自艦艇の指揮を迷うこと無く衣笠一佐に丸投げすることにした。

『みらい』の待遇も問題だった。

俺の所で抱えるのは論外。

かといって、衣笠一佐との信頼がまだできていない状況で指揮下に入れるのは軋轢が生じかねない。

俺の叢雲と浜風の為に急遽作られた第70護衛隊に続いて第71護衛隊も新設し、ある程度の自由裁量を与えることでごまかすことにした。

またこの航海に際し、取り込みを兼ねて一階級昇進をさせている。

このあたりの調整に奔走したのが、横須賀地方隊からの付き合いである美野原一佐。

臨時部隊の主席幕僚を押し付けられて、なんとかまとめ上げたその調整力に素直に驚くしかない。

かくして編成はこんな感じになった。

第50任務部隊参加艦艇

司令官 入即出やる夫海将補相当官

副官 恵美ステンノ三佐相当官

主席幕僚 美野原信弘一佐

第70護衛隊 司令官直属

『叢雲』 艦長 東雲叢雲二佐相当官

副長補佐 新島義則三佐

『浜風』 艦長 マシユ・キリエライト二佐相当官

副長補佐 フランシス・ドレイク三佐相当官

第71護衛隊 梅津三郎海将補

『みらい』 艦長 各松洋介一佐

第1護衛隊 衣笠秀明一佐

『たかつき』 艦長 宮津弘隆二佐

『たちかぜ』 艦長 阿久津徹男二佐

……揉めるよなあ。

これ、絶対に揉める。

生え抜きの方が階級が低く、外様引き抜き組の方が階級が高いのだから、生え抜き組が面白い訳がない。

クーデター前の海自内部の不満分子の排除が目的だから、ある意味正しいと言える。正しいのだが。

ため息をついて判子……こっちはサインか。

サインを書いて、デグ様に手渡す。

と、同時にデグ様から米軍参加艦艇の編成を見せられる。

### 第50臨時空母打撃群

司令官 ターニャ・デグレチャフ少将

参謀長 エーリツヒ・フォン・レルゲン大佐

副官 ヴィクトーリア・イヴァーノヴナ・セレブリヤコフ少佐

エセックス級航空母艦 『イントレピット』

艦長 F・D・イントレピット大佐相当官

副長 リエリ・ビシヨップ 中佐

参謀 ナオミ・エヴァンス 少佐

空母航空隊司令 マテウス・ヨハン・ヴァイス 中佐

タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦 『ヴェインセンス』

艦長 ユーリア・ブラッドストーン 大佐

スプルーアンス級駆逐艦 『イエルケル』

艦長 デイノ・デイラツソ 中佐

ロサンゼルス級原子力潜水艦 『セント・バージニア』

艦長 ジョン・アレキサンダー・ベイツ 大佐

ウイチタ級給油艦 『ウイチタ』

キラウエア級給兵艦 『キラウエア』

「裏がある演習にしては、力が入っていますな」  
「だからじゃないか。」

色々見られているのは承知の上だ。

表も、裏も。

だからこそ、手を抜けん」

デグ様はそう言って、西太平洋の海図を眺める。

この航海は10日から二週間を予定し、硫黄島近海にて訓練を行うというのが表向き  
の名目だ。

「そうだ。」

入即出少将が買った連中、足は用意させるので密かに硫黄島に上げておいてくれ。

メデイカルチェックで、全員の遺伝子データは現在収集中だ」

その冷酷な声にデグ様の意図を悟る。

魔法に洗脳なんでもアリのこの闇鍋世界だからこそ、死亡という欠員すらクローンで  
ごまかす腹積もりらしい。

それだけの闇がこの作戦の背後にある。

そうなれば、こちらにも保険をかけておくか。

「一人、そちらの人間で推薦したい人物が居ます」

デグ様が興味そうな目で俺を見る。

その推薦員の職業を聞いて啞然とする五秒前。

「ケイシー・ライバック上等兵曹。」

コックです」

「コックだと!?!」



「ええ。

戦艦『ミズーリ』のコックだそうで、なかなかの腕だとか」

それでこの人はピンとくるからここまで登ってこれるのだ。

同時に絡んでいないらしいというか、絡んでいたら俺のほうに困る。

「あの一件、ペンタゴンの上の方しか知らない話なのだがな」

「こちらにも伝手はあると言っておきましょう。」

『イントレピット』艦内で彼の料理を食べるのを楽しみに……思い出した。

そのあたりの設備の更新はしておいた方が良いでしょう」

「我が国を舐めてもらってはこまる。」

物量と兵站で世界の覇者になった国がそんな所見逃す訳無いだろうが」

書類を置いて互いに苦笑していた所に、デグ様の副官であるヴィクトーリヤ・イ

ヴァーノヴナ・セレブリヤコフ少佐が入ってくる。

「失礼します。」

外交案件でトラブルが発生しました。

英国がこの訓練航海に観戦武官を送り込みたいと申し出ており、外交筋だけでなくワ

シントンサイドからも圧力が」

「何処のどいつだ！

この忙しい時にお客様等……」

書類を見たデグ様が笑い出す。

それを俺に差し出してくれたので、俺も拝見し爆笑する。

デグ様は上は知らないのかもしれないが、俺は上も下も知っていた。

英海軍観戦武官

シエルビー・M・ペンウッド少将

副官 ジエームズ・ボンド中佐

理由が分からない叢雲とヴィーシャ少佐が俺達の爆笑を理解できずに首をかしげる事になった。

# 洋上人狼 その2

「……………出撃するわ！」

「駆逐艦、浜風、出ます！」

日米合同の第50任務部隊の出撃日。

俺たちの叢雲と浜風を先頭に次々と参加艦艇が出撃してゆく。

一週間の準備では大規模な改造はできずに、後部甲板の武装を取っ払ってヘリ甲板を用意したぐらいだろう。

叢雲とマシユ風の装備はこんな感じ。

叢雲

5 inch 単装砲	Mk. 30	2基	2門	☆10
25mm 三連装機銃	集中配備	☆10		
74式アスロック	8連装発射機	×	1基	
ボフォース	対潜ロケット	4連装発射機	×	1基
68式	3連装短魚雷発射管	×	2基	

OPS-11B 対空レーダー  
OPS-17 水上レーダー  
81式射撃指揮装置  
66式探信儀 OQS-3  
SQS-35 可変深度式ソナー  
NOLR-6

## 浜風

10cm連装高角砲  
13号対空電探改  
25mm三連装機銃  
四式水中聴音機  
3式爆雷投射機集中配備

☆10

みねぐも型になった叢雲は大部分の装備を近代化させたので、いくつかの装備をマシユ風に渡すことにした。

通信機や生活必需品などの更新でマシユ風は精一杯だが、後部甲板の装備は外してへ

り着艦スペースだけは用意させている。

万一艦内がバイオハザードとなったら、ヘリで英霊を送り込む予定だからだ。

硫黄島まで二日、訓練一週間、帰り二日に予備日三日の計二週間の演習航海である。

艦橋を見ると、ヨロシサン製薬のハイデッカータイプの隊員が艦橋に数人居る。

士官や下士官は前からの引き継ぎでかなり残せたのだが、隊員は浜風の方にも割かないといけないのでこのクローンを投入せざるを得なかったのだ。

体力は十分で言われたことはこなす、最低限の兵士の練度は満たしていた。

「こんなのを投入せざるを得ないとは、世も末ですな……」

美野原主席幕僚が嘆くが、短期間の戦力化は定数不足の海自にとって手放せないものになるだろう。

ましてや、悪魔とかの訳が分からない連中が表に出ようとしているこのご時世では。

「浦賀水道を出たら幹部連中を集めてくれ。

今回の航海の目的を説明する」

知らず知らずのうちにため息をつく。

内部の反乱分子のあぶり出しと粛清が目的なんてこの時点で言えるわけもないので、訓練航海で押し切るしかないだろう。

できれば、反乱分子が居ない事を祈るしかなかったが、多分無理だろうなとも思って

いる俺が居た。

「今回の航海の目的だが、訓練航海であると同時に、実験航海でもある。

ヨロシサン製薬とオムラ・インダストリーから送られたハイデッカーとオイランロイドのカタログスペックは以下の通りだから確認しておいてくれ」

幹部士官達が、資料を見てため息をつく。

美野原主席幕僚と同じく、こんなものを投入する事に対する怒りとも嘆きともつかない声が漏れる。

規程乗員220人の内、人間は60人で残りは皆クローンとオイランロイドと悪魔と英霊と対魔忍である。

後半に行くほどなかなかあなのは言うまでもない。

浜風の方もつとひどく、239人の内、人間は幹部連中の30人ちよつとしか用意できなかった。

いかに、海軍軍人が技術者であり、即席育成が難しいかを端的に示していると言える。

「質問があるのだが」

第71護衛隊司令の梅津海将補がモニターから声をだす。

学園都市の通信技術を駆使した結果、この時代なのにTV会議が可能になっている。

さすが学園都市。

「どうだい」

「こちらの艦に送られてきた船員についてだ。

どういう意図があるのかご説明頂きたいのだが？」

梅津海将補の言葉に、隣のモニターの第一護衛隊の衣笠一佐も頷く。

送り込んだのは、クローン対魔忍である。

もちろん慰安要員なんて言えるわけもないので、カバーストーリーが必要になる。

「端的に言えば、お目付けですな。」

そこからは、彼女に説明させましょう」

俺がまず衝撃を与えて、次が細かな言葉で攪乱しはぐらかす。

かくして、カメラは俺の隣の陸自制服姿の臙に向けられる。

「陸上自衛隊特殊作戦第四中隊の甲賀臙三尉と申します。」

今回の実験航海に便乗してこちらの実験も行えるようにと入即出海将補相当官に交渉させて頂きました。

また、こちらの実験も市ヶ谷の承認済みです」

こうしてみると陸自士官に見えなくもない。

その胸がどう見てもハニトラ要員であると主張しているのだが。

「我々特殊作戦群は、その作戦において敵地への隠密理の上陸等も行います。

今回は、その上陸の実地試験を目的としています。

米海軍にもお願いして各艦に戦闘班を分乗させ、それぞれを上陸させて、最終的には小隊規模の作戦行動を行う。

そういう訓練計画です」

20人のクローン対魔忍の指揮の元、80体のオイランロイドが上陸して工作活動を行う。

これが色気ムンムンの連中しかいないのだから、色々と無理があるのは承知の上だが、対魔忍の戦闘力はお飾りではないから本当に困る。

「……………この世界ではこういう作戦が当たり前なのですか？」

「……………少し前までは違っていたのですよ……………」

梅津海将補の唾然とした声に、衣笠一佐の諦めともつかない声が続く。

その少し前とは聖杯戦争の事なのと言うまでもない。

俺はわざとらしく咳をして話を元に戻すことにした。

「なお、お目付けというのも本当だ。

昨今、自衛隊に流れる不穏な噂の払拭も彼女たちは兼ねている。

くれぐれも行動には注意をしてもらいたい」



梅津海将補の顔が強ばるのが分かる。

彼らの世界では自衛隊のクーデターなんてありえないだろうからな。

叢雲艦内後部。

くつつけられたシャドウ・ボーダーのあたりはロリンチちゃん居城と化していた。

叢雲がみねぐも型になったのを良いことに、異界化をこつそりと進めるあたり確信犯だが、そんな異界化された一室に今回の助っ人の部屋があった。

「呼んでいただければ、こちらから参りましたのに」

シスター・シャークティは麻帆良学園より持ち込まれた大量の吸血鬼治療薬を背後につこりと微笑む。

天ヶ崎千草との関係はぎくしゃくしているが、とげとげしいものはだいぶ薄れている。

「あいにく、この船にも盗聴器や集音器がとりつけられているみたいだね。

腹を割った話し合いをするにはここが一番安全という訳だ」

「俗世というのは難儀なものだな。

身内にも監視されるとは」

シスター・シャークティの隣でたばこを吸っていた女性が苦笑し、俺が実にわざとら

しくつつこむ。

身内たる時計塔から封印指定を受けて、身を隠さざるをえなくなった女魔術師に。

「貴方がそれを言いますか？」

とはいえ、来てくださったことには感謝しますが」

「当たり前だ。

！  
超天才の英霊に会える上に、こんな素晴らしい技術を直に見て触れていじれるのだぞ

来ないわけがないだろうが!!」

オルガマリー・アニメスファイアの調整が一区切りついたというかつけた彼女は、出港ギリギリの乗船となった。

おかげでこちらはかなりの手が打てる。

「とはいえ助かった。

ロリンチちゃんだけでは手が足りなくてね」

実際、叢雲艦内のオイランロイドのバックドア削除すらまだ追いつかず、ハイデツカーの方は手すらつけていない状態。

悪魔たちだけでなくモードレッドが居なかつたら最悪艦内制圧もありえたから、蒼崎橙子の参加は本当に助かる。

「で、ナチの残党がこの艦隊を狙っているという話だが本当なのか？」

「狙っているというよりも、奴らが起こそうとする作戦に俺たちが邪魔だから排除するというのが正しいでしょうね。」

仕掛けるとしたら……」

そこで艦内放送が響く。

叢雲の切羽詰まった声が事態を明確に物語っていた。

「やる……司令官！」

大急ぎで艦橋に来て!!

緊急事態よ！」

ステンノと共に艦橋に来た時、艦隊は既に大混乱に陥っていた。

床に片膝をついた叢雲を抱きしめてあたりを見ると、無線が輻輳し発光信号や手旗信号まで使われている始末。

「何が起こった？」

『『ヴィンセンス』、『たかつき』、『たちかぜ』の海軍戦術情報システムが途絶。』

この船の海軍戦術情報システムも止まりましたが、艦長が全権を掌握して強引に動かしている状態です」

美野原主席幕僚の声に言葉を失う俺。

艦娘化の恩恵がこんな所にと苦悶の汗を浮かべる叢雲を労おうとしたら、続きの言葉に俺も言葉を失った。

「戦術情報システムは横須賀基地ともリンクしており、そつちも止まって大混乱になっています。

米海軍の方は厚木や横田まで止まったらしく、被害がどこまで行っているのか見当も付きません」

## 洋上人狼 その3

「報告を頼む」

八丈島沖合。

そこで起こった海軍戦術情報システムのシャットダウン。

リンクしている在日米軍横須賀・厚木・横田基地のシステムまで落ちるといいう大騒ぎにモニター向こうのデグ様の視線は凄みがある。

海軍戦術情報システムのダウンは航行するだけなら大きな問題はないが、戦闘には多大な支障が出る。

そのため、現在上空ではヘリどころかイントレピットからE-1Bを出して索敵に当たらせていた。

もちろん、各艦とも第一級戦闘配備なのは言うまでもない。

『『ヴァインセンス』の海軍戦術情報システムは使い物になりません。

データそのものが消えています。

横須賀に帰らないと復旧は無理です」

『ヴァインセンス』艦長ユーリア・ブラッドストーン大佐が悔しそうな声で告げる。

同じような顔で第1護衛隊の衣笠一佐も報告した。

「『たかつき』と『たちかぜ』も同じく海軍戦術情報システムが使い物になりません。

おそらくは、『ヴィンセンス』と同じ状況だと思えます。

我々の方も復旧は横須賀に帰ってからになるでしょう」

そして、次の報告が続く。

その声は屈辱に満ちていた。

「『セント・バージニア』の海軍戦術情報システムもやられていた。

我々は作戦行動が行えない為、横須賀に帰還したい」

作戦行動中の潜水艦が浮上するというのはトラブルを起こしたと言っているような

もので減点対象になる。

というか、出港したての任務部隊の1/3の船が戦闘時に使い物にならないという被

害は俺を含めた皆の顔色が悪くなるのにふさわしいものだった。

「最初に言っておく。

今回のトラブルの責任はこの私にある」

こういう事が言えるからさすデグが広がるんだよなあ。

気づいていないみたいだが。

「と、同時にトラブルの発生そのものは今回の訓練航海において起こりうる物と想定し

ている。

よつて、訓練航海そのものは行うが……何だ？」

モニター向こうのデグ様の顔が横を向く。

なんだかの報告を受け取ったらしい彼女は「十五分待て」と言つてモニターを消す。そのすきに、海自内部での確認をする。

「で、うちの方の損害は『たかつき』と『たちかぜ』だけかい？」

「横須賀基地は在日米軍と回線が繋がっていたため、被害が発生しています。

市ヶ谷のシステムにも潜り込まれたらしく、被害報告が上がっています。

また、在日米軍のネットワークによると真珠湾の太平洋艦隊司令部にも被害が出ています」

美野原主席幕僚の報告に顔をしかめざるを得ない。

こういう事をするという以上、必ず次がある。

それが俺たちなのか、デグ様なのか絞れないのがこの硬直を発生させていた。

「仕掛けるとしたらどういう手がある？」

「洋上艦艇は米軍の監視衛星から見られる以上、仕掛けは潜水艦でしょう。

既に、こちららも厚木と硫黄島からそれぞれP-3Cを出して哨戒をさせています。

それと、第4護衛隊群直轄艦『ひえい』と第43護衛隊の『いそゆき』と『はるゆき』

が出港準備に入ったそうです」

過剰なとも思ったが、この手のトラブルでの逐次投入は百害あって一利なしだ。

何も言わずに頷いておくことにした。

デグ様の顔がモニターに戻ると同時に、その隣に英海軍観戦武官のシエルビー・M・ペンウッド少将の顔が見える。

「諸君。

英海軍観戦武官のシエルビー・M・ペンウッド少将から貴重な情報がもたらされた。

よってここで公開したいと思う」

「我々の情報部は、近年の戦争の背後において暗躍している秘密組織を追いかけていました。

その組織はミレニアムと称し、西側世界の政財界に多大な影響を与えております。

そんな組織が、極東方面において暗躍しているとの情報を掴み、ここにやってきた次第であります。

これがミレニアムの工作であるならば、必ず次が来るだろうと考えて間違いがありません」

ペンウッド少将からもたらされた貴重な情報にモニター越しの皆がざわめく。

それならば、まず間違いなく潜水艦による攻撃。



狙うならば、俺の叢雲とマシユ風とあのイントレピットの三隻。

ここで俺は疑問が出て、モニター外でメモを書き美野原主席幕僚の意見を聞く。

『潜水艦で襲ってくるでしょう。』

だが、それを出撃から攻撃まで隠蔽できるのか?』

美野原主席幕僚は首を横に振る。

このタイムリンクで仕掛ける理由は何か?

「この組織はナチスの残党によつて構成されています。ただ、我が国だけでなくイスラエルのモサドも追っておりますが、南米に拠点を築いた事以上の事はまだ掴めておらず……」

ナチス残党の南米逃亡は結構有名な話で、敗戦寸前のドイツからUボートで逃れた……すごく嫌な予想が頭をよぎった。

駄女神が閻鍋で設定を足してゆくから、その思いつきが多分実現化してしまうこの世界の悪夢を心の中で罵倒しながら、デグ様たちが見ている中俺は美野原主席幕僚に漏らす。

「タンカーだ。」

多分シージャックされているタンカーがある。

マラッカ海峡あたりで取り替えられたら、こつちでは確認のしようがない盲点を突い

てきやがった！」

「おい！」

入即出少将！

皆に分かるように説明しろ！」

モニター越しのデク様に俺は苦笑しながらその説明をする。

「空のタンカー内部にドックを用意して、そこに潜水艦を隠すんです。

密閉空間だと空気が下から逃げないので、船底に穴が開けられるのがこのドックの優れた所です。タンカーの出入りが疑問に思われない東京湾南方の八丈島近海で仕掛けてきたのも理由が通ります」

海軍戦術情報システムを潰したのもこれが理由だ。

派手に仕掛けたのは、森のなかに木を隠すため。

つまり、最大の脅威である攻撃型原子力潜水艦を無力化するため。

だからこそ、俺はその荒唐無稽な結論を皆に告げた。

「つまり、敵は、Uボートで俺たちを沈めに来たんです」

## 洋上人狼 その4

「ありました！」

海保からの連絡で、交信に反応しないタンカーが一隻！

帝国原油輸送所属『ムーンライト・エンプレス』。

25万トンタンカーで、ペルシャ湾からの原油を積んで鹿島臨海工業地帯に向かうとの事。

マラッカ海峡で海賊に襲われたそうですが、半年の交渉の後身代金を払って開放されたと……」

その時点で入れ替わっていたんだらうよ。

状況が切羽詰まっていたのに政治が邪魔をする。

「海保からの呼びかけに応じない場合、臨検を経て……」

「その間に、攻撃を受けたらどうするんだ？」

攻撃を受けるまで待てと？」

梅津海将補が常識的段階を踏んだ対処を説明するが、デグ様はにべもない。

眼の前で己の命まで危険にさらされているのに法も何もあつたものじゃないだろう

にといい意見なのだろうが、梅津海将補の断言にさすがに毒を抜かれる。

「そうです！

我々は、何があつても先に手を出してはいけませんのです!!」

正しくもあり間違つてもいる。

それを頭ごなしに否定する気にはなれない。

そう仕向けたのは、デグ様の背後にある星条旗であり、それを追認したのは民主国家である日本国民の総意なのだから。

俺が横から口を挟んで場をかき混ぜる。

「真珠湾のお仕置きがキツすぎましたな。

若狭湾に次いでこれです。

半世紀かけて寝た子を起こしますよ」

「起こさないで、我々が死ぬのならば遠慮なく起こすさ。

入即出少将。

責任は私取るから、貴官は貴官の最善となる行動をとり給え」

さすデグ。

この人のことだから、失敗でも成功でもうまく立ち回れるのだろうか。

問題は、この瞬間俺が生き延びられるかどうかだ。

「その言葉、録画しましたからな」

「生きていたら、サインまでつけてやる。」

私は死にたくないから、対潜ヘリは出した！

現時点を持って、『ムーンライト・エンプレス』とそこに隠れる潜水艦を敵対勢力と認定し、これを排除する」

だが、敵の手の方が早かった。

「レーダーに飛翔体反応！

ミサイルです!!

目標は我が艦隊!!!」

「オールウェポンズフリーー！

全て叩き落とせ!!」

「ミサイルの画像出ました……

……これは、V—1です！

二次大戦でドイツが使っていたV—1ミサイルです!!!」

発射されたミサイル

47発

途中墜落したミサイル

5発

遠距離で撃墜したミサイル

13発

近距離で撃墜したミサイル

26発

残りミサイル

3発

V-1ミサイルの射程はおよそ250キロ。

現代戦においてはほぼ至近距離からのミサイル飽和攻撃に1/3の艦の海軍戦術情報システムが潰されたのにも関わらず、できうる限りの防戦に努めたのは特筆に値する。

特に、『みらい』の防戦は凄まじく、叩き落としたミサイルの大部分はこの艦の活躍無くしては語れない。

太平洋戦争の神風攻撃の恐怖から始まり、冷戦時ソ連のミサイル飽和攻撃を迎撃する為に開発されたイージスシステムはその機能を十全に発揮していた。

それでも、残ったミサイルは3発。

これの1発でも空母イントレピッドに当ててはまずいと覚悟を決めた俺はマシユ風に通信する。

「マシユ。」

頼む」

「はい。先輩」

スキル『アマルガムコードD』発動。

ミサイルのターゲットをマシユに。

これでマシユの方にV―Iミサイルが向かう。

そこで浜風の対空カッターイン発動。

「これが駆逐艦の本分です！」

それで何とか叩き落としたのが1発。

残り2発。

だから俺は、最後の切り札を切る。

「令呪を持って命ず。

モーさん。

宝具発動。

ミサイルを全部叩き落とせ！」

「待つてました！マスタ―！」

此れこそは、我が父を滅ぼし邪剣。

『我が麗しき父への叛逆』!!」

「ミサイル反応全て消失しました！」

現在社会において実用化されていないビーム兵器まで使つてミサイルを全て処理。現代戦のスピードの速さを思い知る。

「諸君。

気を抜くな。

おそらく、この騒動に乗じて潜水艦が出た。

タンカーへの攻撃および、潜水艦の排除に全力をあげよ！」

デグ様の通信によつて、引き締まる艦内。

その間疑問が湧く。

こちらの艦隊に手を出す場合、あのミサイルが本命？

違う。

実際艦隊には一隻も当たっていない。

では、隠れて潜伏している潜水艦が本命？

違う。

自衛隊の対潜スキルは世界有数レベルだし、米海軍も対潜に手を抜く連中ではない。

じゃあ、奴らの本命は何だ？

「陸じゃ大騒ぎになつているでしような。

東京湾の真南で起こつた海戦ですから。



頭が痛いです」

この状況そのものが奴らの狙いとしたら、現状は大成功と言ったところだろうか。また一つ、日米安保にヒビが入る結果となったのだから。

「こちら『イエルケル』。

ターゲットのタンカーに向けてミサイルを発射する。

5, 4, 3……緊急事態！

戦術コンピュータシステムダウン!!」

「待て！

ミサイルは発射されているぞ！

目標は『叢雲』!!」

そう来やがったか。

潜った潜水艦が活躍するには、邪魔なのが俺の二隻という訳だ。

潜った潜水艦は対潜ヘリの連中にまかせて、今はこのミサイルをなんとかしないと。

「ミサイルを叩き落とせ！

「邪魔よっ！

まさかの味方からミサイル誤射だが、一発だけなら艦娘である叢雲が対処できない訳がなかった。

最高レベルの叢雲の25m三連装機銃集中配備☆10の銃撃は正確にミサイルを撃ち抜き、爆風を艦に叩きつけ衝撃が艦を揺らす。

手近な物にしがみついた俺の耳に新島副長補佐が叫ぶ。

「損害報告！」

「各部異常なし。」

衝撃で何体かのハイデッカーが負傷。

救護班が救護に向かっています」

「こりゃ、コンピュータシステムは全部やられていると考えるべきだろうな」

俺のボヤキに、美野原主席幕僚が続く。

まだ目の前の光景が信じられない顔をしているが幕僚の仕事は忘れていない。

「まともな戦闘行動が取れるのは本艦と僚艦のみと思われれます」

ならば、動ける俺たちで仕留めるべきと俺が口を開こうとして止まる。

通信士が敵艦からの通信を報告してくれたからだ。

「敵艦から通信！」

今より本艦に攻撃を行った場合、東京にミサイルを発射する。

なお、これは通常弾頭にあらず。

繰り返す。

「これは通常弾頭にあらず」

## 洋上人狼 その5

『ここで、学園都市放送委員会所有の人工衛星から捉えた衝撃の瞬間を御覧ください。』

米軍艦が護衛艦に攻撃する決定的瞬間です』

『……この誤射事件について横田の在日米軍司令部は沈黙を続けており、外務省と防衛庁は「現在調査中」のコメントを……』

『ですから、若狭湾のミサイル誤射事件もそうですけど、戦後日米安保条約の矛盾点が今ここに出てきた訳ですよ。』

かつて我が国は米国に子供と揶揄されましたが、そろそろ大人として自主独立の……』

学園都市に拠点を置く学園都市放送委員会。

その衛星放送を眺めて俺は頭を抱える。

およそ状況は最低ではあるが、ある一点を隠している事で最悪ではないと言えるだろう。

「あのミレニアムの連中の狙いが冬木の大聖杯とはねえ……」

『24時間以内に冬木市の大聖杯を譲渡せよ。』

さもなければ、東京にミサイルを撃ち込む』  
これが敵の要求だった。

ある意味当然といえば当然なのかもしれない。

あまりに衝撃が強すぎた、聖杯戦争でのアマテラス様召喚。

それができるのならば、神々以外でも召喚できるのではと考えるのはある意味当然だろう。

たとえば、英霊というか反英霊での彼らのボスである総統を召喚するとか。

「既に横須賀基地に設置されたレールガンによる迎撃体制は完了しています。

学園都市は今回の事件を憂慮しており、迎撃においては上空の人工衛星『おりひめ1号』の提供を申し出ているとか。

また、入間基地の第一高射群が首都圏に展開を始めており、横田基地や厚木基地の米軍もパトリオット・ミサイルの展開を始めています。

落とせるかと言えば落とせるでしょう。

ですが……」

美野原主席幕僚の声は硬い。

敵の声明である『通常弾頭ではない』が問題なのだ。

「で、どうするのかしらっ？」

ステンの言葉に返事をせず、一旦艦と指揮を新島副長補佐と美野原主席幕僚に預けて俺と叢雲とステンの三人は艦後部のロリンチちゃんの工房へ。

事が事だけに、そろそろ片付けないといけない事を片付ける。

艦内のスパイの処理である。

「モーさん。」

捕らえろ」

「よっしゃー！」

霊体化からの不意打ちにスパイは対応した。

さすが現役工員。

とはいえ、人間対英霊では人間がかなう訳もなく、モーさんに取り押さえられる海自隊員のネームプレートを確認する。

「砲雷科第一分隊二等海士。如月行。

さて、元の所属は防衛庁情報局か、CIAか」

「……」

「まあ、いい。

ここからはオカルトな話だね。

お引取り願おう」

COMPを操作してクー・フリーンを召喚し、後部の異界化した部屋の一室に閉じ込めておく。

殺しはしないし、殺すのももつたない貴重な人材なので丁寧な扱おうと伝えて、ロリンちゃん工房へ。

ロリンちゃんと蒼崎橙子とシスター・シャークティと天ヶ崎千草とオカルト勢全員集合である。

「とりあえず、状況を説明しよう。」

東京にミサイルを撃ち込むと脅すミレニアムの連中の狙いは冬木市の聖杯だ。

政府は現在混乱中でこちらには何も言っていない」

「案外自分たちだけ逃げ出す準備をしていたりしてね」

叢雲の冗談にありそうだと苦笑する俺が居た。

対魔忍世界の政府だからきつちりと腐っているし、安心して逃げ込めるシエルターとして地下都市ヨミハラ、今は東京ジオフロントがある訳で。

政府の混乱は、現場の判断という先手がとれる事を意味する。

「大きな問題は2つ。」

一つは艦内の裏切り者の対処だが、ハイデッカーとオイランロイドのバックドアの排除は済んでいるか？」

バックドアの排除率

ハイデッカー 72%排除

オイランロイド 52%排除

対魔忍クローン 88%排除

残りの排除 4時間後

皆を代表してロリンチちゃんが報告する。

その幼い顔には疲労の色が残っていた。

「ハイデッカーのバックドアは七割。

オイランロイドは半分。

対魔忍クローンはほとんど排除している。

あと四時間って所かな」

「よし。

それに合わせて艦内を掌握する。

艦内主要区画のハイデッカーとオイランロイドは即座に入れ替える。

それは天ヶ崎さんがやってくれ。



艦内鎮圧用の対魔忍部隊の指揮はシスター・シャークティに預ける。

ロリンちちゃんと青崎さんはそのままバックドア排除の作業を続けてくれ」

俺の言葉に皆が頷くのを見て、その次を考える。

シージャックしているタンカーへの対処は実は簡単だったりする。

ステンノの能力で叢雲をステルス化してタンカーに接岸し、英霊と悪魔を先頭に制圧する。

それはいい。

問題はその制圧時に、海中のUボートが悪さをしないかと、ミサイルが都心に発射されないかの2つのみ。

「もう一つは米軍との連携だ。

という訳で頼む」

「はいな」

天ヶ崎千草が式神を使った連絡術を使い、数十キロ離れた空母イントレピットのデグ様に連絡をとる。

式からの反応を待つこと数分。

デグ様の声が式を通じて帰ってくる。

（待っていたよ。

入即出少将)

さすがデグ様。

この手の術の対応力が高い。

「確認ですが、掃除は？」

(最低限しているはずだ。)

彼女、イントレピットのお墨付きの部屋だからな。

こつちの状況を話そう。

ミサイル迎撃時にリエミ・ビシヨップ中佐とナオミ・エヴァンス少佐が襲われた。

コックと観戦武官の副官が防いでくれたけどな。

犯人の船員達には共通点があった)

どうやら保険はちゃんと機能したらしい。

彼女たちのアへ顔は見なくて良さそうだ。

(その船員達は、元ディノ・ディラツソ中佐の部下だった。)

それと、ダウンした海軍戦術情報システムには外部からの侵入は今の所発見されていない。  
ない。

内部犯、それも高いセキュリティコードを持つ、たとえば艦長クラスが仕掛けたならば簡単にダウンさせられるかもしれない)

犯人をそれとなく示唆したデグ様だが、それは厄介事の提示でもあった。俺はその厄介事を口に出す。

「つまり、『イエルケル』のミサイル誤射、あれは誤射ではない可能性があるか？」  
(艦内への物理的な工作の痕もあった。)

私がUボートへの攻撃ができなかった理由がそれだ。

あの時、入即出少将の浜風がミサイルを引き受けてくれなかったらと思うとゾツとする)

だから、潜水艦への攻撃ができなかったのか。

こちらにも誤算があったが、敵も誤算があったという訳だ。

(それと、敵が通告してきたミサイルの弾頭が分かった。

核ではないが、もっと厄介なものだ)

聞きたくないが、聞かない選択肢はない。

出てきた名前ほとんどでもないものだった。

(沖繩の辺野古基地で作成されていた『GUSOH』。

Iリットルで東京を死の都にできる毒ガスだ。

学園都市から流出した技術を沖繩で研究していたらしいが、その実験施設のあった辺野古基地が何者かに襲われ、多大な被害と共にその紛失が確認された)

化学兵器ときたか。

頭を抱えようとしたらデグ様の声がまだ続いていた。

(もう一つあつてな。

『テルミット・プラス』。

あまりに毒性が強い『GUSH』を焼却処分する為に用いる特殊焼却弾だ。

一瞬にして直径3キロの区域を6000度の熱で焼く、まあ放射能のない戦術核爆弾  
と思えばいいだろう。

(こいつも消えて無くなっていた)  
「なるほどな。」

あのタンカーは沖縄近海を通っていた。

Uボートでそれらを運んで、タンカーで回収という訳ですか」

厄介事はどんどん増えていた。

それでも時間は敵の味方である。

「時間が惜しいので、すばやく片付けましょう。」

こっちは、艦内の不審者を拘束しています。

入れたクローンとオイランロイドのバックドアの排除は、四時間後に終了します。

怪しげな手ですが、タンカーの排除は可能です。

問題は、Uボートとミサイルと『イエルクエル』です」

(現在、空母艦内の内通者の排除に時間がかかっている。

その手のプロらしい英国観戦武官の言葉を信じるならば、あと7時間は欲しいらしい。

その間、敵がおとなしくしてくれるかだな?)

「するでしょう。」

時間は敵の味方です。

時間が経てば経つほど、日米安保にヒビが入ります。

多分ミレニアムにとって、この作戦は陽動作戦でしかありません。

向こうからすれば、俺やあなたが相互に相打ちしてくれれば最高。

日米安保が無くなって、大西洋にこれなくなったら次善という所でしょうね。

さすがに貴方が空母の艦娘を持つなんて想定外もい所でしょうが」

目的は一致しているのに、所属国家が違うだけでここまで意思疎通に齟齬が出る。

それがたまらなくもどかしかった。

(では、八時間後にタンカーとUボートに対する作戦を開始する。

タンカーの方は任せた。

こっちはUボートを叩く)

『イエルケル』は?」

(放っておけ。)

姑息ではあるが姑息だからこそ、尻尾を出さない限り決定的に裏切らない。

ウイルスにやられたふりをしてのミサイル誤射がやつにとつてのギリギリの線だろう。

奴はまだ艦内の内通者が排除された事を知らない。

その前に敵を潰してしまえば、後はどうともなるよ)

細々とした作戦手続を確認し終わると、デグ様は実に嫌そうな声でそれを告げた。

(あと、うちの上を動かしたお人好しの馬鹿どもが多分こつちに着くだろう。

邪魔はさせないつもりだが、何か言ってきたらこつちに回せ)

「お人好しの馬鹿ども?」

とてもいい感じで閻鍋が極まっているのに、また入るらしい。

なんかここまで来ると、もう笑えてくる。

(ああ。

我が国の誇る巨大財閥の一つ。

アーカムが協力を申し出てきている。

私の方で断っておいたが、日本政府があのだと、そつちに押しかけるかもな。

犯人の奴らが冬木の大聖杯をご所望ならば、アーカムがああ聖杯を封印しあらゆる権力からあれを守ろうとするのは同然だろうか？)

## 洋上人狼 その6

8時間というのは結構待たされる時間である。

同時に、敵タンカー突入の準備は着々と整ってゆく。

交代で仮眠をとっていたら、叢雲からヘリの着艦許可の報告が来る。

「で、相手は？」

「二機あって、一機はイントレピット所属UH-2B。

タンカー制圧作戦の乗員を送ってくるって。

英海軍のジェームズ・ボンド中佐とケイシー・ライバック大尉が率いる4人。

ライバック大尉率いる4人は全員元Navy SEALs」

そりゃデグ様だから海軍特殊部隊とのコネぐらいあるだろう。

実は突入作戦に際して一悶着あったのだ。

誰が指揮を執るかというやつで、俺は出れないので臆をリーダーにして突入班を編成

する予定だった。

ここで政治が邪魔をする。

「海の事件なのに、何で陸自が出てくるんだ？」



ある意味当然の市ヶ谷からのツッコミである。

もちろんこの手の介入が大嫌いなデグ様が拒否をするが、じゃあそのためには米軍からも突入要員を用意しないといけない訳で。

これはコックであるケイシー・ライバックでいいだろうと俺たち二人共一致したまでは良かった。

上官とトラブルを起こして左遷された結果、彼の現階級が上等兵曹なのが問題だった。

パナマ侵攻の英雄で対テロ部隊の指揮官を下士官までに左遷させたあげく、戦艦ミズーリでの功績で戻さなかったのか戻せなかったのか知らないが、突入部隊の指揮官が上等兵曹なのはまずい。

何しろ陸自の突入班の臚は三尉、つまり少尉なのだから。

デグ様は野戦任官でとりあえずライバック上等兵曹を元の大尉にまで戻した方がいいが、今度は首相官邸がいろいろな事をする。

「突入作戦において、神田旅団の隊員を送るので突入班は彼らの指揮下に入るべし」俺とデグ様が頭を抱えたの言うまでもない。

神田旅団は腐れきった対魔忍世界の首相直轄部隊で、その武力の行使においては秘密警察的な動きを平然とする連中である。

自衛隊からの動きはまだ日米安保を盾に言い逃れはできるが、首相自らの要請にはさすがのデグ様もお断りがしにくい。

何しろ、若狭湾ミサイル流出誤射事件に次いで、今度は米艦から護衛艦にミサイルが撃たれたのだ。

既に外交問題に発展しており、デグ様の政治力では何とかできるレベルを超えていた。

この事件解決に際して、神田旅団の隊員がそのまま俺を拘束粛清というシナリオもないわけではない。

ここで、俺が日米安保協調路線でなく、自主独立路線の人間だった場合、度重なる在日米軍の失策に付け込んで色々できるのだ。

首相官邸の動きは、その色々々を首相に吹き込んだ誰かがいる事を確信させた。

ここで助け舟を出してくれたのがボンド中佐である。

「でしたら、私が突入部隊の指揮を執りましょう。

海軍の中佐が指揮を執るのですから、そちらの政府も文句は言わないでしょうし、言う場合は英国政府にです。

今の彼らが英国政府に物を言えるかどうか楽しみですな」

さすが稀代のスパイ。

聖杯戦争絡みでうちの国が買収された事をしつかり掴んでやがる。

この世界、時計塔なりイギリス清教なり魔法省なりHELLSINGなり魔法ゲートなり英国に色々集まっているから、かなり英国の地位が高い。

我が国の腐敗と米国の失態に喜ぶ英国という図も無いわけではないが、その英国は第二次アシカ作戦待ったなしだからなあ。言わないけど。

「もう一機は？」

「海自のS-61A。」

神田旅団の隊員を乗せているそうよ」

「先にUH-2Bを降ろす。」

その後でS-61Aだ」

UH-2Bから5人の人間が降りてヘリが飛び去ってゆく。

その中で中佐の階級章をつけた色男に俺は手を差し出し、相手も笑顔のまま握り返す。

「入即出やる夫海将補相当官です。」

護衛艦叢雲へようこそ」

「ジェームズ・ボンド中佐と申します。」

私も結構遊んできたのですが、少将も中々色男ですな」

諧謔と皮肉はイギリスのDNAなのだろう。

とはいえ稀代の色男にそう言われるのも悪くない。

「おかげさまで、良い女を捕まえられたのでこうして司令官の真似事をしていますよ。

少し休憩してください。

もう一機到着したら、ブリーフィングを行いましょう」

そのまま今度はケイシー・ライバック大尉に手を差し出す。

ライバック大尉は流暢な日本語の挨拶と共に俺の手を握ってくれた。

「ターニャ・デグレチャフ少将から聞いている。

あんたが、俺を呼び寄せたそうだな」

「ああ。

うまい料理が食べたくてな。

得意なのだろう？」

「ああ。

どうせ作戦開始まで時間がある。

食堂を貸していただけるならば、それ相応のものをお出ししますが？」

「それは楽しみだ。

食堂の利用許可を出すから、美味しいものを頼むよ」

冗談で言ったのだが、本当に作り出すとは思わなかった。

なお、うちの食材で作ったブイヤベースは本当に美味しくて、叢雲とステンノが完食する出来だった事をここに記しておこう。

それからしばらくして、S-61Aが着艦し十数名の隊員が乗艦する。

「入即出やる夫海将補相当官です。

護衛艦叢雲へようこそ」

「的場毅二佐です。

入即出海将補相当官。

あな……」

「じゃあ……これならどうかしら♥」

的場二佐がステンノに魅了されて言葉を失う。

何かアクションを起こそうとした隊員達も動きを止めざるを得ない。

「へりに揺られてお疲れでしょう。

ブリーフィングまで時間があります。

食堂にて少しお休みください」

かくして、的場二佐と隊員達を送り出して、後部甲板のへりポートに残ったのは一人だけ。

あきらかに自衛隊員でないその姿は少年兵のように見えるし、歴戦の兵士にも見え  
た。

「……あなた、一体何をした？」

「ちよつとした魔法さ。」

官邸が作戦の主導権を求めて俺を拘束する可能性は考えていたからな。

「予防させてもらった」

殺しはしないだろうが、拘束・監禁して指揮を官邸に一元化させる。

成功したら官邸の功績、失敗したら俺に押し付けて米軍と自衛隊を叩くという感じな  
のだろう。

首相官邸と自衛隊の間を察することができたらこの相互不信が何を意味するか言  
うまでもない。

自衛隊のクーデターフラグが順調に進んでいるという訳だ。

「あなたに貼り付けと言った山本さんの理由が今理解できたよ。」

御神苗優だ。

「あなた、何をやったんだ？」

アーカムの影響力の一端をさらりと見せてくれるスプリガンの派遣。

俺は苦笑して、真実を茶化して伝えることにした。

「強いて言うなら、女神様の尻拭いかな？」

## 洋上人狼 その7

作戦は簡単だ。

ステンノの『気配遮断A+』で叢雲ごと接近し、タンカーに接舷し制圧。

下の潜水艦の方は、デグ様のイントレピッドの対潜部隊に任せる。

なお、自衛隊の方からも対潜フル装備のP-3Cが二機常時飛んでおり、潜水艦を取り逃すことは無いだろう

「先に潜水艦を沈めてしまわないの？」

作戦前ブリーフィングで叢雲の質問に指揮官のボンド中佐が答える。

さすがにいつもの伊達男ではなく軍人の顔をしていた。

「日本政府からのオーダーは、『ミサイルを撃たせるな』です。

下の潜水艦を沈めたら、タンカーの連中は首都圏に向けてミサイルを発射するでしょう。

その撃墜自体は難しくはありませんが、彼らの言う通りにその弾頭が通常弾ではなかった場合、撃墜後が問題になります」

ここでデグ様情報を俺は開示する。



その通常弾頭ではない『GUSHO』と『テルミット・プラス』の説明を聞いて、頭を抱える突入班の面々。

「つまり、どつちが搭載されているかもわからないという訳だな？」

どういいう立ち位置でここに居るのかイマイチ分からないが、突入班に加わるつもりらしい御神苗優が俺に念を押す。

面倒だから臆に預けよう。

俺も頭を抱えたいのだが、この場の最上位指揮官として飄々と振る舞おうとした。

「俺なら、撃ち落とされる事を考えた上で、『GUSHO』の方を搭載するね。

落としても風向き次第では房総半島まで毒ガスが広がりかねないしな。

その理由から、タンカー撃沈も無しだ。

この海域が毒ガスでどれ位使い物にならなくなるかわからない以上、経済的ダメージの方が大きい」

事件の場所が八丈島の沖合という事はそのすぐ北が東京湾な訳で、多くの船舶が行き交っている訳だ。

今回の事件発覚から船舶も避難を始めていたが、海上物流の停止は都内に不安をもたらしすことになる。

それは絶対に避けなければならなかった。

「接敵するのもそれが理由だ。

ミサイルの発射口は既に衛星で判明しているから、発射口を叢雲で塞いで真つ先にミサイルを確保してもらいたい。

「ミサイルの工作与弾頭確保については、ボンド中佐とライバック大尉たちに任せる」  
「了解した」

さつきまでブイヤベースを作っていたライバック大尉がいい匂いをさせて返事をする。

彼らを睨んでいた連中に俺は声をかける。

「そして、艦内の制圧は的場二佐におまかせする。

甲河三尉とその配下をつけるので、存分に暴れてもらいたい」

「……………了解した」

初っ端の俺の拘束が失敗してからの的場二佐とその隊員達は表向きにはおとなしい。

なお、ロリンチちゃんの報告では、排除したバックドアを使って乗っ取りを企もうとした形跡があるので先手を打てたというのもあるのだろう。

なお、捕まえていた如月行も釈放させて臚の下につけている。

使える工作員は今は一人でも貴重なのだ。

「で、マスター。」

俺たちも暴れていいんだろう？」

呼ばれもしないのだが、ワクワク顔で俺に尋ねるモーさん。

その隣で同じく口に出さないがクー・フリーンが俺をじつと見ている。

「当たり前だ。」

お前らが今回の突入の華なんだからな。

米軍と自衛隊連中がミサイルの確保している間、敵を防ぐのはお前らの役目なんだからしつかりやってくれよ」

仲魔とサーヴァントは基本俺の命令しか受け付けない。

ある程度の妥協はできるが、それでロスが出ることを恐れ、ボンド中佐はこれらを指揮下に入れるのを諦め、代わりに陽動作戦として放置する事を選んだ。

かくして、突入班はこんな感じとなった。

タンカー突入班

ジェームズ・ボンド中佐

ケイシー・ライバック大尉 ミサイル無力化と弾頭の確保

Navy SEALs 4人

的場毅二佐 艦内制圧

神田旅団隊員 十数人

甲河隴三尉

対魔忍 十数人(クローンこみ)

オイランロイド 二十体

如月行海士

御神苗優

陽動班

モードレット

幻魔 クー・フリーン

魔神 大淫婦バビロン

予備・後方人員

大天使 イスラフィール

英雄 ジャンヌ・ダルク

女神 ブリジッド

ステンノの気配遮断 68

敵の対処能力 79

ミサイル確保工作 96

ミサイル発射準備 22

対潜攻撃 28

敵潜水艦魚雷発射準備 4

作戦は接舷するまでは上手く運んだ。

陽動班が甲板に上がり、突入班が側面を爆破して突入する。

だが、こちらの姿は見えていなかったのに、相手の迎撃はこちらを完全に想定していた。

「こちら突入班！」

豚の化物が武装してこっちを撃ってきやがる!!」

「こちら臆。

敵はオークと思われませう。

銃撃で死ぬ相手ですので、おちついて対処を」

「こっちも化物だ！」

緑色の化物がこっちを襲ってきやがる!!

銃は効くが弾の消費が激しい！」

「こちら、ボンド中佐。

ミサイルの発射阻止に成功。

『GUSOH』弾頭を確保した」

轟音が聞こえる。

作戦開始と共にP-3CとS-2の対潜飽和攻撃によって、Uボートは何もリアクションを起こすこと無く沈められた。

これであとはどうとでもなる。

そんな状況下で甲板では大決戦が発生していた。

小型ミサイルと銃弾が暴れ、モーさんが押されていた。

「サーヴァントだ！

サーヴァントが居るぞ!!」

モーさんの叫び声にジャックフロストにカメラを持たせて偵察させると、モーさんと大淫婦バビロンを寄せ付けずに射撃を浴びせるアラファイフが一人。

クー・フリーンが隙を狙うが、緑の化物ことアンブレラ社製のハンター数体に阻まれて近づけない。

「素晴らしい!!」

世界は破滅に満ちている！

あっはははははははははは！」

実に楽しそうなアラファイフの声を聞きながら、俺の頭には疑問が浮かんで警鐘を鳴らしてきた。

敵はこちらの接舷をほぼ読んでいた。

にもかかわらず、ミサイルは発射されなかつた。

それならば、敵の狙いは何だ？

## 洋上人狼 その8

「応援を出す！

イスラフィールとブリジッドは甲板に上がって援護を！」  
そのまま俺は隣りにいるステンノにも頼む。

対男性サーヴァントならば、こちらには切り札がある。

「という訳で、わが女神様。

そのお姿で魅了して頂きたく」

「私、働くの嫌いなよね。

けど、いいわ。

貴方の頼みなのですから」

自衛隊の服装に身を包んだステンノというのも凛々しい。  
新たな魅力にアラファイフもメモメモだろう。

「あつ？」

私には声をかけないのかしら？」

むっとする叢雲に俺は実にわざとらしく挑発する。



ツンデレな掛け合いも長い付き合いだからこそ楽しい。

「言わなくても、手伝ってくれるだろう？」

一番長い付き合いで、俺を知っているだろうからな」

「そうだけど、私だってちやほやされたいのよ……」

「はいはい。」

叢雲。

頼む。

君の助けが必要なんだ」

「分かっているわ！」

「ここからが、私の本番なのよ!!」

新宿のアーチャー レベル90 有利クラス補正不利クラス補正打ち消し レベル

90

アンブレラ社 ハンター レベル22 邪智のカリスマバフ×1.2 ×9体Ⅱ2

37

合計327

セイバー モードレット レベル90

不利クラス補正1/2×女神の気まぐれバフ×1. 2 || 5 4

魔神 大淫婦バビロン レベル6 9 女神の気まぐれバフ×1. 2×1. 2 || 9 9

幻魔 クー・フリーン レベル4 3

有利クラス補正二倍×女神の気まぐれバフ1. 2×1. 2 || 1 2 3

大天使 イスラフィール レベル4 2 女神の気まぐれバフ×1. 2×1. 2 || 6

0

女神 ブリジッド レベル4 7 女神の気まぐれバフ×1. 2×1. 2 || 6 7

アサシン ステンノ レベル1 0 0 女神の気まぐれバフ×1. 2×1. 2 || 1 4

4

付喪神 叢雲 レベル1 7 5 女神の気まぐれバフ×1. 2×1. 2 || 2 5 2

合計889

1 新宿のアーチャー勝利

2 同上

3 モードレッド勝利

4 同上

5 同上

6	同上
7	同上
8	同上
9	同上
10	熱烈歓迎
結果	9

勝負はこちららの増援が戦闘に参加する前に、新宿のアーチャーがモードレッドを落とせるかどうかにかかっていた。

その時間をこちら側はきっちり稼ぎきった。

「追い詰めるわ！逃がしはしない!!」

相手が見逃していたこちら側の盲点。

メンタルモデルの叢雲の攻撃力である。

バフがかかっていたとはいえハンターの知能では敵を追ってしまい、甲板から降りた所を叢雲の25ミリ機銃の集中砲火を食らって肉塊に変わると、大淫婦バビロンが『女帝のリビドー』で魅了を付与してハンターを甲板から叢雲の方に誘導してゆく。

潰しきれなかったハンターは叢雲の甲板上で女神ブリジッドが掃討してくれるので

問題がない。

こうして、アラファイフアーチャーとモーさんの一騎打ちとなる。

「汚えぞ！」

撃つてばかりいないで剣で勝負しろ！

「剣で!!」

「何を言っているのかね？」

悪人が正々堂々なんてそつちがおかしいだろう?」

その立ち回りはチェス・プロブレムのごとくモーさんが追い詰められてゆく。

『蜘蛛糸の果てA++』を使われた時、チェックメイトとなるはずだった。

「優雅に舞い、冷酷に絡め取る。」

私は蜘蛛であり、蝶であり、しがない教授であり、悪のボスなのさ」

あとは宝具を放つだけ。

その手を止めたのは、大天使イスラフィールの背に乗って微笑む魅惑の美声だった。

「あら……つい。ごめんなさいね♪」

アサシンの真価は殺すことではない。

その殺す隙を作ること。

そう言う意味で、この女神様は特化していた。

殺すのは、別の誰かに任せてしまえばいい。

その誰かも、既に準備が整っていた。

「その心臓貫い受ける！」

『刺し穿つ死棘の槍』!!」

クー・フリーリンの宝具が新宿のアーチャーの霊核を貫いた。

それでもアラファイフは悪党の笑みを崩さない。

「君たちの勝ちだ……誇るがいい！」

だが、あの少佐は手強いぞ……」

やっぱりあの少佐の仕掛けだったか。

そう思った瞬間、艦内から報告が入る。

「こちら隴。

オークに嬲られていた女性たちを保護した。

救援班を頼む」

「こちらボンド。」

敵の計画書入手した。

奴らの狙いは叢雲だ！

テルミットプラスをこのタンカーに仕掛けて叢雲を爆沈させるつもりだったらしい

!

「すぐに退避を!!」

真つ青になる俺たちを見ている訳ではないだろうが、新宿のアーチャーことジエームス・モリアーティは微笑つて消えてゆく。

「爆発オチなんて最低と思うだろう?」

だが、王道もたまには良いものだよ。

堪能してくれたまえ。マスター……」

「ボンド中佐!

爆弾の解除は可能か?」

「無理だ!

まだ爆弾が見つかっていないし、解除の時間もある。

この戦闘そのものが時間稼ぎなら、いつ爆発してもおかしくない!」

臍が見つけた女性たちというのも俺たちを足止めする罠か。

見事に蜘蛛の糸に絡まっているので苦笑するしか無い。

「いや。

爆弾の場所なら分かっている」

その声にどれだけ安心できるだろう。

あの教授が出てきたならば、ホームズが出てこない訳が無いのだ。

ロリンチちゃんを持つてきた通信機を握りしめて、俺はホームズに尋ねる。

「時間が無い。」

ホームズ。

爆弾の場所を教えてください」

「簡単な推理さ。ワトソンくん。」

あの教授が、何でタンカーの甲板で戦ったか考えてみたまえ。

教授の目的がこの船の爆破にあるのならば、わざわざ甲板なんかで戦う必要すら無かった。

それにマスターは忘れていた事が一つある。

彼の マスターは何処に居るのかな？」

その言葉に俺は気付かされる。

マスターとサーヴァントは基本一人と一騎で構成される訳で、マスター側に攻撃があつたらサーヴァントは令呪を使うだろうマスターの援護に走らざるを得ない。

それを考えたら、マスターは信頼できないならばサーヴァントを近くに置きたがる。

そうなる場所は一つに絞られる。

「艦橋だ！」

そこにマスターが居るし、起爆装置は艦橋にある!!」

爆弾の残り時間 70

解除時間70以下で成功 64

場所がわかれば、あとはどうにでもなった。

何しろライバック大尉やボンド中佐や御神苗優というプロフェッショナルが居るし、ロリンチちゃんやホームズという天才がバックアップに入っているのだから。

爆弾というか、時限装置は無事に解除された。

現在は、自衛隊や米軍や海上保安庁の船やヘリが頻繁にタンカーを囲んで現場検証をやっている。

「まさかタンカーそのものが爆弾の構造になっているとは気づかなかったなあ……」

俺は艦橋からタンカーを眺めてぼやく。

テルミット・プラスはテルミット焼夷薬に燃焼を倍化させる特殊溶液を加えた二液混合式爆薬で、それぞれをタンカーのタンクに分けて保存していた。

そのため、時限装置というより、タンク内の弁を開放してこの2つを混ぜるタイマーを艦橋から操作していたというわかりやすいものだったのも幸いだった。

で、マスターだが、艦橋にて死体で発見された。

現場を検証したボンド中佐の報告だと、ハンターに殺されていたらしい。



つまり、あのアラフィフは最初からマスターを守る気が無かったという事だ。そのマスターの名前も、救助された女性から判明する。

相良豹馬。

この名前を出した女性の名前は六導玲霞という。

なるほど。

この世界線ではこういう形で彼らはやってきた訳だ。

その夜。

叢雲の医務室で寝ていた女が一人起き上がって、ふらふらと艦内を歩く。

目指すは、艦内後部にあるロリンチちゃんの魔術工房。

「何処に行く?」

「迷ってしまいました」

立ちふさがる御神苗優に女は悪びれずに言うが、御神苗優は姿勢を崩さない。

そんなやり取りを俺はステノの気配遮断を使って隠れてみている。

「アーカムの記録では、アステカの遺跡を巡って1935年にナチスが動いた形跡がある。」

その時の指揮官がグルマンキン・フォン・シュテューベル大佐

轟音と共に彼女が隠し持っていた拳銃が御神苗優に当たるが、AMスーツにて弾かれる。

アーカムが俺の所に来た真の理由が分かった。

「狙いは、聖杯を用いた古代神ククルカンの召喚か？」

「あの坊やの下についている訳じゃないわ。」

協力はしているけど」

廊下にごどこからともなく白煙筒が置かれてあたりが煙に包まれる。

霊体化して控えていたモーさんがその煙の中に突っ込むが、彼女の姿は既になく、煙が消えた後に何処からか猫の鳴き声が聞こえたような気がした。

## 洋上人狼 あとしまつ

アポトーシス2の破壊力 75

パラダイムXのセキュリティ 46

学園都市セキュリティ 56

話題性 40

『パラダイムX 大規模障害発生。復旧時期分ならず』

『パラダイムX障害、提携先の学園都市にも波及。『おりひめ1号』使用不能に』

『西次官、引責辞任へ。パラダイムXの大規模障害の責任を……』

『アルゴン社経営危機。アーカムグループと業務提携へ。門倉社長は辞任……』

横須賀帰港後の政治面がタンカージャック事件だとすれば、社会面は天海市で行われていた『パラダイムX』の大規模障害だった。

まあ、アポトーシス2を提供したのは俺なのだが。

帰港後スパイ容疑で拘束された『イエルク』艦長デイノ・デイラツソ中佐は小悪党

らしく、使用した『アポトシス2』のコピーを隠し持っていたのである。

ネミツサという電霊が居て、ハッカー集団スプーキーズにこれが渡った時点でこの結果はある意味当然だったと言えよう。

アーカムが救済に動いたのはある意味当然で、タンカージャック事件の対処に追われる政府は、喜んで西次官と門倉社長の首を切り、後始末を押し付けたのである。

想定外だったのは学園都市で、パラダイムXは学園都市の『おりひめ1号』を使って世界中から魂を集める予定だった為に、ウイルスが『おりひめ1号』にまで侵入して学園都市側にもダメージが波及した事だろう。

守護神こと初春飾利が居ればまた別だったのかもしれないが、この時代だと彼女はまだ生まれて間もない時期なのでパソコンにすら触れないのがあるがたかった。

「で、一国の政策を非合法に変更させた理由を教えてくださいただけのではありませんか？」

もちろん、アポトシス2の使用はデグ様・ボンド中佐・御神苗優が見ている所で使用される訳なので、俺は最初から彼らを仲間に引きずり込むことにしたのである。

パラダイムXの真の目的である『魂の収集』とそれに関与する学園都市の『絶対能力進化計画』、それを後押ししている政府の一部始終を。

俺以外の面子が最初呆れ、次に真顔に成り、最後には罵倒すらしめたこの計画もオークや英霊や艦娘なんてのが跋扈するこの世界だからこそ最終的にはおちついてくれた。

「自衛隊内にクーデターの動きがあるとは聞いていたが、これではクーデター側につけるといいたくなるぞ」

「それを学園都市だけでなく諸勢力が見逃してくれるのでしたらな。」

私は、私の叢雲と浜風はクーデター側にはつきませんよ。

そんなことよりもやらねばならない事がありますから」

デグ様と俺の会話はあえてボンド中佐と御神苗優に聞かせる為にやっている。

というか、この二人をこちら側に引き込むために俺たちがあえてこの場を作ったと言った方が良いでしょう。

「タンカージャックの一件では、米艦船が護衛艦にミサイルを誤射している。

パラダイムXの障害はそれを覆い隠す意図もあった。

ワシントンでは今頃、肅清という名前の椅子取りゲームが行われているが、今の私達には関係がない」

デグ様の素晴らしくかつ抜けている所は、本人が安全な後方に行きたがるくせに、現場対応力が図抜けている所にある。

今回の一連の事件はワシントンではデグ様の責任を問う声が無かったと言えは嘘になる。

だが、内部スパイであるデイノ・デイラツソ中佐の拘束と艦娘イントレピッドの存在、

そして俺が立案したパラダイムX障害で事件そのものを隠す形で恩を売ったので、デグ様を切る事ができなくなっていた。

逆に言えば、イントレピッドある限り提督として前線に立つ事になるのだが、彼女はまだそれに気づいていない。

「アーカムとすれば、冬木の大聖杯を保護下におきたい所だ。

アレのヤバさは、聖杯そのものじゃない。

聖杯から出る英霊の方にある」

御神苗優の言葉に渋い顔をするボンド中佐。

だから、そろそろ彼に突きつけてみよう。

「どうしました？ボンド中佐。

大聖杯の回収と私の封印指定の任務が無理と顔に書いているようですよ」

さすがスパイ。

これぐらいで顔色を変えるような輩ではないか。

やつぱりアマテラス様召喚が決定打だろう。

ボンド中佐派遣の黒幕は時計塔だろうとうつつすらと当たりは最初からつけていた。

封印指定執行者を送りたい所だが、海上自衛隊海将補相当官という地位がこれを邪魔しているのだ。

あげくに、デグ様によって米海軍との共同作戦において海軍少将として扱われている。

強引に事を進めたら日米両軍から敵認定されるに等しい。

そのあたりから、表のボンド中佐を送って、情報収集とできれば俺の階級剥奪ぐらいまでは狙っていたのだろう。

「まあ、しばらくは私ごときをどうこうする暇なんて、そちらには無いでしょうからな。

先にその掃除をしておくことをお勧めしますよ」

「それとは？」

ボンド中佐はわざと尋ね、俺もそれを答える。

俺の視線の先にはタンカーに残ったV-1ロケットの写真が置かれていた。

「ナチスの残党は南米を中心に跳梁跋扈している。

今回の事件は結局の所、彼らが『GUSHO』を持ち出し行方不明となった。

そして、それを使うのは貴国を始めとした欧州の可能性が高い」

弾頭に搭載されていた『GUSHO』を米軍研究機関が調べた所、ダミーだった事が発覚した。

つまり、奴らは沖繩からタンカーに持ち出したように見せかけて、この事件を陽動作戦として『GUSHO』をどこかに持ち出してしまったという訳だ。

もちろん、この一件でもワシントンでは担当だったCIAを中心に肅清の嵐が吹き荒れるだろう。

事がオカルトという裏の方に話が行くと、オカルト大国である大英帝国は嫌でも叩かないといけない目標になる。

戦力的にも、第三帝国復活を狙う政治的な意味合いでも。

「こちらは取引材料として、艦娘を提供する用意があります。

今回の所は、これでお引取りを」

表の階級剥奪が日米の政治力によつて無理であった事を理解しているボンド中佐は、俺の提案に手を差し出して了承した。

握手をして俺はとりあえず危機を逃れた事に安堵したのだった。

出てきた英艦艇娘 2

1 アークロイヤル

2 ウオースパイト

3 ネルソン

4 ジャーヴィス

5 ジャーヴィス

6 ジャーヴィス



「我が名は、Queen Elizabeth class Battleship  
Warship!

Admiral……よろしく、頼むわね」

出てきた英艦娘に呆然とするペンウッド卿。

いや、ある意味ふさわしいなとなんとなく思った。

「何で俺には出てこなかったのだろうか？」

そんな事をつぶやくボンド中佐に俺は心の中で突っ込んだ。

多分これだろうなという理由を。

(そりゃあんた、その女癖で出てくる方がおかしくないかい?)

帰国後、『ペンウッド卿に愛人ができた』と円卓内で騒がれたが、その噂もウォー様の

高貴さと相まって自然鎮火したのもさもありなん。

なんでも、実体化ウォー様に女王陛下御自ら足を運んだとかなんとか。

## 大英帝国円卓会議 その1

この世界の大英帝国の円卓は以下のメンバーが出席する。

エリザード女王

リメエア第一女王

キヤーリサ第二女王

円卓会議議長 ヒュー・アイランズ卿

ロブ・ウォルシュ陸軍中将

海軍中将 シェルビー・M・ペンウッド卿

騎士団長

ローラースチュアートイギリス清教総大主教

フランシス・アーカート第一大蔵卿（保守党）

コーネリウス・オズワルド・ファツジ魔法大臣

ヘルシング機関 インテグラル・ファルブルケ・ウインゲーツ・ヘルシング卿

時計塔院長補佐 バルトメロイ・ローレライ魔導元帥

ホグワーツ魔法魔術学校校長 アルバス・ダンブルドア

オブザーバー参加

メガロメセンブリア元老院議員 ジャン||リユック・リカード 主席外交官

後にこの円卓を評した関係者曰く、

「つまり、大英帝国という看板以外はすべて違う連中の集まり」

と言い放つぐらいい利害も打算も違う連中が集まって国難に対処するというのがこの円卓会議である。

これでも第一次・第二次世界大戦等で一致して戦争を乗り切ったからこうして存在しているのだろうか。

そんな会議の最初は、オールドレディと女王陛下の謁見から始まった。

「我が名は、Queen Elizabeth | class battleship  
Warspite。」

女王陛下。

貴方に出会えたことを光栄に思います」

「大戦の武勲艦にこうして出会えた事に感謝を。」

後で色々とおの時の話を聞かせてくださいね」

謁見が終わると現実的な、つまり金の話に入る。

艦娘は一人で運営できるのが強みだが、それゆえのデメリットを塞ぐ為の金の話である。

ウォースパイトはペンウッド卿の後ろに控えて成り行きを見守る。

「しかし、戦艦か。」

その金を誰が用意するのかね？」

フランシス・アーカート第一大蔵卿が皮肉っぽく口火を切る。

この役職よりも世間では知られている役職に『英国首相』というのがある。

表の英国首相と裏の魔法大臣が並立しているからこそ、この国は嫌でも王室という仲裁機関を用意せねばならなかったわけ。

『君臨すれども統治せず』どころか、『君臨も統治もせねば国が回らぬ』というのがこの大英帝国の構造的宿痾と言えよう。

第一大蔵卿のこの言い方、『表からは金を出さんぞ』と言っているに等しい。

「表はユーゴで忙しいからでしょうからな。」

必要ならば、こちらから出してもいいですが」

ファッジ魔法大臣が費用について裏からの支出を口にする。

このあたりはもちろん、表と裏の首相が先に話し合ったからこそその流れだ。それにアイランズ卿とウォルシュ陸軍中將が嘯み付く。

「なるほど。」

費用はそちらが持つのですか。

では、彼女の近代化改修についてもそちらが出すのですね？

レーダー、通信、対艦・対空兵装の更新だけで、いくらかかるか分かってその発言を言っておられるのですかな？」

「人員はどうする？」

人を乗せた場合、最低千人ほどの人員が必要になる。

彼女について先に運用を行っている日本の海上自衛隊は定数割れが解決できずに、ついにクローンやドロイドを投入したと聞く。

ペンウツド卿一人乗せる訳にもいかんだろう？」

このあたりの認識の違いは表と裏の認識の違いでもあった。

魔法や魔術関係者は、艦娘を『使い魔』の亜種として見ていた訳で、それ以上の価値を認めていなかった。

一方で表側の軍人達は艦娘を『兵器』として認識していた。

湾岸・ユーゴと戦火が続く中、その可能性にやる夫以外に感づいたのは、彼らが生粋

の軍人である事が大きい。

「諸君。

このお嬢様の価値をちゃんと認識しておられるのかな？

このオールドレディは、現在の戦場における諸問題を解決できる魅力を秘めているのですぞー！」

「ほほう。

その可能性とやらについて、是非ご教授して頂きたい」

アイランズ卿の大見得にアーカート第一大蔵卿が皮肉を言い、それに返事をしたのはキャーリサ第二王女だった。

「移動要塞だし」

「さすがはプリンセス。

彼女の価値をよく理解しておられる」

艦娘姿だけでなく実体艦が出し入れ可能という事は、川や湖に彼女を簡単に浮かべることが可能だという事だ。

川や湖の拡張は必要かもしれないが、現代工兵の能力はそれを可能にする。

そして一度浮かべてしまえば、38.1cm42口径MkI連装砲 4基が猛威を振るう。

たとえ、敵が排除に来たとしても、

10・2cm45口径MkXVI連装高角砲 4基

2ポンド8連装ポンポン砲 4基

20mm連装機銃 2基

20mm単装機銃 27基

これらの武装が敵を歓迎することになる。

戦場の要地に即席で砲撃陣地と要塞を作れる意味を、まだ十代のお姫様は的確に理解していた。

「だからこそ、詰める兵士が必要という訳だ」

「そのあたりは、日本の入即出海将補相当官が気前よくレポートを提供してくれましたよ。」

艦娘は艦の全てのコントロールができる代わりに、タスク処理でオーバーフローを起す可能性があること。

そういう意味でも人間は必要だ」

「その人間を自前で用意できるのは、今や合衆国しか無いというのは悲しい所ですな」

アイランズ卿とウォルシユ陸軍中将がまとめるが、アーカート第一大蔵卿が皮肉しか言わない。

ここからは彼の舞台である。

「結構。」

このオールドレディに有効性がある事は認めましょう。

では、彼女を投入する戦場は何処にあるのですかな？

ユーゴはNATOで対処しており、現状は空爆が中心だ。

入即出海将補相当官が警告してくれたナチスの残党相手に彼女を投入するにも、まだその正確な場所すらわからない状況だ」

「乗船してもらう人員にも問題がある。」

ホムンクルスでは寿命が短すぎるし、ホムンクルスやゴレームではマスター側に魔術師が必要になる。

何よりもその手の技術に長けている時計塔が協力をしてくれるのか？」

ファッジ魔法大臣の物言いに棘があるのも、バルトメロイ・ローレイの傲岸不遜な態度もあるのだろう。

彼女は時計塔代表として、彼の質問にこう言い放った。

「この国が非常時にあり、女王陛下のご下命がございましたら」

予想された実質的なゼロ回答にファッジ魔法大臣はさも興味が無いように続きを口にした。



「日本のクローンやドロイドを買うのは一つの手だが、それを君たちは納得できるのかな？」

学園都市製のクローンやドロイドは高性能ではあるが、バックドアの存在も報告されているが？」

「少ないが、人材はこちらから提供しよう」

不意に聞こえた声に皆が注目すると、騎士団長だった。

さも当然といった感じで、彼は話を続けた。

「彼女が大英帝国にとって有用であるならば、それに何の問題がある？」

こう言われると、皆黙らざるを得ない。

そこに、アルバス・ダンブルドアが続ける。

「ならば、僕も推薦したい者がおる。

提督のお役に立てるだろう」

ちようどこの頃、リーマス・ジョン・ルーピンが職を失い、シリウス・ブラックは無実がわかったがそれを証明できずに逃亡をしていた。

この二人を限りなく表に近いここに置こうというダンブルドアの思惑は当のペンウッド中将には分からず、ただ感謝の顔を浮かべていた。

「でしたら、傭兵はいかがでしょう？」

必要なのは城塞に籠もる守備兵です。

裏の人員はお二方の協力でなんとかできたのなら、今度は表の人間の確保でしょう。

何よりも傭兵は、金が払われている限り裏切りませんし、使い捨てにできません」

インテグラ卿の発言にバルトメロイ・ローレイライが殺気を飛ばすが、インテグラ卿は表情を変えない。

だが、その耳にイヤホンがついている当たり、発言のネタ元は彼女の執事なのかもしれない。

「わかりました。

でしたら、この一件については、王室財産にて処理します」

第一王女、つまり次期英国女王予定者のリメエア王女の一声で、会議は決する。

これで、ウォースバイトとペンウッド卿が王室直轄の戦力になった事を意味するのだが、当の本人たちは、プリマスのデヴォンポート海軍基地の一室にてのんびりと茶を楽しむ姿を見かけることになる。

そして、第二次アシカ作戦時に彼と彼女が皆の予想に反して英雄的な活躍をする事になると知るものは少ない。

## 大英帝国円卓会議 その2

会議は踊る。

進むのだろうか、この円卓会議では踊るの表現の方がふさわしい。

今はボンド中佐による入即出やる夫の調査の報告が行われていた。

「彼が使役している艦娘は、旗艦にしている叢雲と浜風の二隻。

また、サーヴァントについては、円卓の騎士モードレッドとフランシス・ドレイク提督、それに女神ステノの存在を確認しています。

他にも、シャーロック・ホームズやレオナルド・ダ・ヴィンチが協力しており、彼の周囲に居る悪魔及び神様ですが、以下の通りになります」

リストが提示されるとしばらく円卓のメンバーは誰も喋らない。

また、聖杯戦争勝者であるウェイバー・ベルベットの報告書も机に置かれていた。

そんなメンバーの視線は、バルトメロイ・ローレライに向けられている。

針の筵のはずなのだが、彼女はその視線を気にしない。

「説明していただけるのでしょうか？」

神秘の秘匿を名目にほとんど黒塗りで提出されたウェイバーの報告書だが、ボンド中

佐はやる夫から彼の報告書を入力していたのである。

つまり、聖杯戦争のシステムとその歴史、やらかしの全てである。

フランシス・アーカート第一大蔵卿の嫌疑たつぷりな確認にバルトメロイ・ローレライは涼しそうな顔で言い切る。

「神秘は秘匿されるべきものです。

そういう意味からすれば、彼は時計塔の処罰対象になりかねないとしても返答すればご満足でしょうか？」

「そちらの論理ではそれでよしといたしますことよ。

ですが、この円卓の席で隠し事をすれば袋叩きに会うリスクを踏まえてなおその姿勢を貫くのであるならば、それは偉大というより愚行と言うべきこと」

ローラー・スチュワートは怪しげな口調で、入即出やる夫が日本国に提出していた聖杯戦争絡みの調査報告書を持って仰ぐ。

日本政府を買収した時、やる夫の聖杯戦争の報告書も可能な限り回収がされていた。

その後やる夫の処遇を決めるためにもポンド中佐を派遣したはずなのだが、そこで起こったのはナチス残党によるタンカージャック事件。

時計塔は艦娘とアマテラス召喚の時点で封印指定を望み、他勢力と激しく対立していた。

インテグラ卿が低い声でバルトメロイ・ローレイに詰問する。

「彼をその封印指定する為に経済大国日本を敵に回す事も？」

「神秘の秘匿のためです」

「それによる悪魔の暴走に対処できると？」

「時計塔及び、私のクロムの大隊ならば対処できるとお約束しましょう」

ニヤリと笑うインテグラ卿。

この席でもっとも孤立主義をとっていた時計塔はこういう時に集中砲火を浴びる。

それを秘密主義とそのヴェールで隠した力によつて防いでいた訳だが、それが通用しないのならばという良い見本だろう。

「ボンド中佐。

この報告書に上げていない事を話してくれないか？」

「まあ、横須賀であの人と親しくさせていたのですが、食事の席で色々面白い話を聞かせていただきましたよ。

酒の席だからと報告書に上げなくてくれと言われたのですが、スパイは辛いですな」

そんな事を言いながら、彼は小型レコーダーを取り出して再生する。

たしかに酒の席だろう、陽気な宴会の背景と共に、やる夫の声が聞こえてくる。

「……英霊には地域補正つてのもあって、英国ではアーサー王や円卓の騎士あたりが出

てくるとほぼ無双状態になるだろうな」

「なるほど。」

ちなみに入即出海将補相当官はアーサー王とか出せるので？」

「出せるけど、燃費悪いんだよ。」

あの御方。

大食いだし」

バルトメロイ・ローレイの顔にヒビが入る。

それを楽しそうに確認した上でインテグラ卿が確認を取る。

「では、もう一度お願いしたい。」

時計塔院長補佐、バルトメロイ・ローレイ魔導元帥。

時計塔と貴方の配下は、ドレイク提督率いる艦娘とアーサー王とその円卓騎士団を相手に事態を收拾できると？

サポートに名探偵ホームズと大天才ダ・ヴィンチがついているのをお忘れなく」

聖杯戦争のアーサー王のデータは時計塔も把握していた。

モードレッドのデータもボンド中佐が確保してくれた。

英霊には英霊をぶつけないときついという結論をこの場にて真っ先に知ったのは彼女なのだから。

そして、大聖杯は冬木市の地下で時計塔の手の届かない場所にて眠っている。  
「インテグラ卿。」

そのぐらいいにしておきたまえ。

幸いにも彼は我々にも友好的だ。

何しろペンウッド卿に艦娘を提供してくれたぐらいなのだからな」

円卓議長のヒュー・アイランズ卿がインテグラ卿をたしなめるが、ペンウッド卿の艦娘ウォースパイトを神秘秘匿を名目に真つ先に接収しようとしたのが時計塔である。

アイランズ卿以下が激怒してウォースパイトのお目見えの席をこの場で作った原因にもなっている。

彼が助け舟を出したのは、バルトメロイ・ローレイを助けるためではない。

とどめを刺す為だ。

「聖杯戦争と英霊の一件については、円卓会議の専任事項とする。

入即出やる夫海将補相当官との友好的関係を維持し彼から情報を適時入手する事を、ペンウッド卿に任せることにする。

また、この件の情報提供を時計塔に求め、魔法省から監査を送ることを要請する」

ここにバルトメロイ・ローレイの味方は誰も居なかつた。

居なくてもそれを覆せる力を魔導は持っていたはずなのに、この場の魑魅魍魎はそれ

をいともたやすく崩し去ってしまった。

少なくとも彼女は自分の持つ常識とこの場の結論の差異に気づいて黙るだけの我慢はあり、それを肯定と捉えた円卓の面々は更に追撃をかける。

「そういえば、そちらの現代魔術科にて講演を頼まれておったな。

監査を送るなら、ついでに儂がやっておこう」

「助かります」

ダンブルドアの善意にファッジ魔法大臣が乗っかる。

更にローラースチュワートも追隨するあたり、落ちた犬は容赦なく叩く。

「時計塔内の教会について、こちらでも人員を送りたいことよ。

神の声は平等なるものゆえ。

インテグラ卿。

現状、色々な事件が発生しており、ヘルシング機関は早急な規模の拡大を求められていると私は愚考するのだけわ。

必要悪の教会と共に事を当たりたいのだけどいかが？」

「騎士団も、英国内の変事に対処する力はある。

なにかあるのならば、遠慮なく助けを求めてくるといい」

この場での最大の敗北者がバルトメロイ・ローレイならば、その次の敗北者がイン



テグラ卿である。

彼女は若輩だから負けたのではなく、実戦力がアーカードと執事しかない為に負けたのだ。

だからこうして、大勢力からの誘いを断れない。

「ええ。

協定は魔法省の仲介の元、取り決めましょう」

魔法省の存在はここにある。

強すぎる個に、複数の行政機関の存在、王室だけでは到底手が足りない以上、表と同じく裏でも官僚が働き、書類が飛び交い、ルールが決められ、ゲームが整えられてゆく。

バルトメロイ・ローレイとインテグラ卿はそれを思い知りながらもそれを顔に出すことは我慢した。

## 大英帝国円卓会議 その3

会議はまだまだ踊っている。

さっきの勝者が今の敗者になるのがこの円卓会議。

次の議題では、新たな敗者が集中砲火を浴びていた。

「テロでごまかしたが、我が国は本当のテロ組織と戦っている事を忘れてもらっては困る。

水面下で進んでいた和平の流れが壊されて血を流すのは君たちなのだぞ」

フランシス・アーカート第一大蔵卿の淡々とした皮肉に何も言い返せない軍関係者の面々。

古代遺跡の発掘に纏わる実験で基地一つとSASの人員に多大な被害を出したばかりでなく、テロ組織の犯行で片付けた為に本物のテロ組織であるIRAが態度を硬化させていたのである。

時計塔補佐のバルトメロイ・ローレイが嘲笑を浮かべるが、口に出すことなくこの話の本題を聞くことにした。

「で、だ。

我々を助けたアーカム財閥についてだが、彼らをどうするべきか考えなければならぬ」

フランスス・アーカート第一大蔵卿は皆に問う。

アーカム財閥は超古代文明からのメッセージに従い、超古代文明の遺産を封印しあらゆる権力から守護することを目的としている。

問題は、超古代文明だからこの魔法や魔導世界では超一級の神秘であり、冷戦終結に伴う新たな世界秩序構築が進んでいる現在、各国は科学の進歩と同時に古代科学の復興を裏で進めていた。

その最たるものが日本にある学園都市だろう。

オブザーバーで呼ばれたメガロメセンブリア元老院議員であるジャン・リュック・リカード主席外交官がここで始めて口を開いた。

「我々は、アーカムのこの動きについて懸念を表明します」

『ネギま』魔法世界からすればある意味当然で、超古代文明の塊みたいな世界で星すら別れて生活しているのだ。

何よりもこの魔法世界は10年前に『大分裂戦争』という大戦を経験しており、その復興にはこちらの世界の支援は必要だった。

その彼らが出せる切り札を、アーカムの主張に従えば持ち出すことができなくなる可

能性が高い。

また、アーカムが米国に本拠を置く財閥であるという所にも、リカード主席外交官は懸念を持っていた。

国家対国家ならば、まだ条約なりで落とし所が探れる。

だが、アーカムの主張は米国の利益となりかねず、それはこの裏の世界すら米国が牛耳るという可能性を否定できなかったのである。

「かといって、かの財閥と事を構えるのは我が国としてもきつい。

そこで、こんな提案が来ている」

フアツジ魔法大臣が用意した書類を皆に見せる。

アーカムと敵対する巨大軍産複合体である『トライデント』の欧州企業であるキャンベルカンパニーからの提案である。

具体的な内容は、『急増する魔法絡みのトラブルに対しての自社実行部隊の提供』。

事実、『ハリポタ』世界では、ヴォルデモート卿の復活騒ぎが起こっており、闇の魔法使い達がざわついていた時期だった。

闇鍋世界の結果、急増するトラブルの処理に魔法省単体では追いつかなくなっており、かといって騎士団や時計塔やヘルシング機関ですらも駒が足りない。

「つまり、彼らにとつては新型兵器の実戦テストの場所が欲しい訳だ」

意図に気づいたアイランズ卿が吐き捨てるが、フランス・アーカート第一大蔵卿は淡々と事実を告げる。

それに返事ができないことを見越した上で。

「そのとおり。」

だが、彼らはその利益を得るために、こちらの治安維持活動を格安で請け負ってくれるそうだ。

先程のオールドレデイの傭兵もこれにすれば王室財産の儉約になるがいかがかな？」

「悪くない提案だし。」

とはいえ、全てを委ねるには不安だし」

キャリーサ王女が懸念を表明する。

つまるところ格安の傭兵な訳だ。

傭兵は金が払われている限りは裏切らない。

ただし、格安の傭兵はその時点で寝返りのリスクが発生するのも事実だ。

「ですから、意図的に分けたではありませんか。」

かのオールドレデイは王室直轄に。

ヘルシング機関には騎士団を始めとした人員の補充が決定したばかり。

それでも現状の治安維持が追いつかないからこそ、この提案がここで討議される事に

なつたのです」

フランシス・アーカート第一大蔵卿はにべもない。

これについては米国のアンブレラ社の生物兵器でもいいし、日本のドロイドなども候補が上がっていた。

それでもトライデントを選んだのは欧州企業であると同時に、多くの議員の懐に色々な心付けがなされていた事に触れる人間はこの場には居ない。

「この治安維持機関は魔法警察及び闇払い局の下部に起き、魔法世界の広範囲の治安維持活動に従事させたいと考えている。

また、複数の治安維持機関の上位機関として円卓会議を指定し、相互の連携を強化したい」

フアツジ魔法大臣の言葉に、フランシス・アーカート第一大蔵卿が続く。  
こういう時に政治家は強い。

「こちら軍だけでなく治安機関及び情報機関等の上位機関として円卓を指定したい。

つまり、名実ともにこの場の席がこの大英帝国の意思となる事を諸君は肝に銘じて欲しい」

それでもこの円卓会議を最高意思決定会議に指定するあたり、大英帝国は必死にこの世界を生き延びるために意思の統一を図ろうとしていた。

それが野心のためか、責任逃れのためか、はたまた何か別の意思があるのかもしれないが、政治家が政治家たる理由でその意思統一に成功した事は、大英帝国にとって良いことなのだろう。

代償もあつたが。

「入即出海将補相当官が警告してくれたナチス残党については？」

会議も終わりと皆が立ち上がる中、発言権があるペンウッド卿が確認するが、フランシス・アーカート第一大蔵卿はにべもない。

「南米は米国の裏庭だ。

ネオナチはイスラエルのモサドが執念深く追いかけている。

彼らの報告を待つてからでも遅くはないだろう？

ペンウッド卿。

いくら火事と叫んでも、水が無ければ火は消せないのだよ」  
つまり、彼らにとってそれはその程度の事ではなかった。

## ザ・ライト・スタッフ

プリマスのデヴオンポート海軍基地

そこに最近配属された戦艦は市民の話題の的になった。

「あの船、オールドレディのような気がするが？」

「多分そうなのでしょうな」

「ミサイルが飛び交う現代の戦場において戦艦？」

「あの船は、NATOが構想しているアーセナル・シップのテスト艦として建造された。

英海軍に一応属するが、英国王室の私有財産である」

「金の無駄遣いじゃね？」

「そう言われるのが分かっていたからこそ、あの船は英国王室の私有船なのだ」

「実際に動くの？」

「動く。」

ついでに砲も機能する。

近くこの船に乗り込む乗員がやってくる予定だ」



そんなやりとりがマスコミと軍広報官との間であったとかなかったとか。

基地の一番奥にでんと鎮座する全長195・3メートル、基準排水量32、468トンの巨体が名物になるのはある意味当然と言えよう。

そんな巨艦に参謀として乗り込むことになったマリア・クレメンティ中佐は、この艦の主である艦娘ウォースパイトと、提督であるペンウツド卿に挨拶をする。

彼女も裏の事情を知って裏で痛い目を見た人間ではあるが、高貴を絵で書いたようなウォースパイトと『この人を支えない』と思わせるペンウツド卿を見て、懐に入れた辞表提出を我慢しようと思う。

また、他のスタツフと話をするとこの船の特異性がいやでも浮き彫りになってくる。騎士団と共に派遣されたリーマス・ジョン・ルーピンとシリウス・ブラックは魔法側の人間で騎士団を中心とした魔法部隊の指揮官と副指揮官である。

傭兵部隊『ワイルド・ギース』隊長のピップ・ベルナドットも10代後半の若手であり、この艦には軍周りのエリートがペンウツド卿以外には誰も居なかった。

なお、魔法部隊と傭兵部隊を合わせても、乗員は百人ちよつとである。

「どうやって船を動かすのですか!？」

嘆くマリア中佐にきよとんとするウォースパイト。

その意味を理解していない。

「この装備なら全部私が動かせますけど？」

「そう彼女も言っているしね」

違うそうじゃない。

そう言いたいのを堪えて頭を抱える。

正しく自分が島流しにあつたことを的確に理解した。

辞表を受理されない以上、ここで飼い殺しという訳だろうが、それならばそれで放置すればいいのにこの人の良さそうな提督を見るに何とかしてあげたいと思ってしまうのである。

なお、そんな人間は英海軍内に結構多いらしく、転属希望を出しているがはねられているという事をこの時の彼女は知らない。

だが、頭脳は優秀なので解決策を見つけることはできた。

ペンウッド卿が日本で作ってきたコネであるターニャ・デグレチャフ米海軍少将に嘆願したのである。

唐突な電話に受話器向こうのデグレチャフ少将は少し考える。

デグレチャフ少将にとって、無駄は怨敵みたいなものである。

「一介の海軍少将に期待されても困るのだが」

「湾岸の英雄であり、NATOの拡大に尽力なされていた少将が一介の少将とはとても

言えませんか」

「私はただ単にコミュニストが大嫌いなだけだが。」

……なるほどな。

拡大するNATOの象徴として売り込む腹か。

それならばNATOの予備費から支出できるロジックもできるな」

NATOの拡大はソ連の崩壊と共にかえって進むようになった。

これは混乱するロシアから米国に旗を変えたいポーランド以下中欧諸国の流れであり、ECがEUに変わる過程でもあった。

そんなNATOの象徴としてウォースパイトは十二分に広告費用分のリターンを弾けると計算したデグレチャフ少将は確認を取る。

「で、具体的には何を望むんだ？」

「海軍軍人二百人の確保を。」

少将も艦娘の提督ならばおわかりかと思いますが、最低限のバックアップ人員がこの人数です。

我が国では緊縮財政により海軍では合理化を続けており、多くの退役者を出していません。

彼らを再度雇い入れる費用の負担をお願いしたい」

「上に掛け合うにはもう少し政治材料がほしいな。

日本の件で、ペンタゴンでは色々とあつてな」

頭のいい人間は最初から詰めまで用意して話をするから話が早い。

マリア中佐はその切り札をここで切る。

「ソマリア。」

苦勞しているみたいじゃないですか？」

「おかげで、次はソマリア沖だよ」

「戦場では砲兵は女神です。」

女神の加護、欲しくありませんか？」

兵員と共に艦娘が飛行機で移動できるのも艦娘の強みである。

それを理解しているデグレチャフ少将は、次の戦場を国連安保理の決議に基づいて多国籍軍を展開しているソマリアに求めた。

安全に艦娘を出すため、現在は英領ジブラルタル基地に居るからこそこうして電話をかける事ができたのだ。

「良いだろう。」

上に掛け合つて大統領に話してみよう。

あと、定員を定数に満たしたいなら、日本の入即出少将にも声をかけるといい。

あれは悪いようにはしないはずだ」  
マリア中佐は賭けに勝った。

10月の戦闘において、米国からの要請という形でソマリア沖に派遣されたウォースパイットの38・1cm42口径Mk I連装砲4基が火を吹いて支援し、『ワイルド・ギース』が米軍を窮地から救う事で艦娘ウォースパイットの有用性を国内外に見せつけることに成功する。

その後の定数充足化と近代化改修が無ければ、英雄的行動を讃えるに足る十全な動きができなかつただろうから。

だが、この功績をマリア中佐が誇ることは無く、彼女が辞表を出すことも無かつた。

## 第〇回カルデア連絡会議 その1

オルガマリー・アニメスフィアは蒼崎橙子によって体を得たとは言え、未だこの地にとどまっているのは、その蒼崎橙子に止められたからである。

「人の体というのは繊細だ。」

それを霊子化して転送するには危険が伴う。

もう少しだけ、留まっていたほうがいいんじゃないか？」

ある意味当然といえれば当然で、カルデアとの往來を確認するために現在は蒼崎橙子の協力の元で人形を送り込む実験を考えている。

その蒼崎橙子が海自の横須賀基地に行ったので、時間ができた彼女は蒼崎橙子の工房でおとなしくしている訳もなく、カルデアと連絡をとっていた。

「じゃあ、報告して頂戴」

「ああ。」

入即出やる夫氏の提供でこちらのスタッフの77%が回復した。

現在、必要な物資・食料・医薬品・魔術素材の確保に専念している。

回復したスタッフの手を借りて、施設の復旧も始めている所だ」

ロマニ・アーキマンの映像がデータと共に報告する。

約八割のスタッフの回復というのは、レイシフトを行う連中以外はほぼ回復させたという事だ。

その意図的な回復についてオルガマリーは質問する。

「レイシフトを行うチームを回復させていないのは？」

「純粹にダメージがひどくて時間がかかっているのが一つ。

もう一つは所長である君の判断を仰ぎたかったんだ」

ロマニの言葉にオルガマリーは顔をしかめる。

そこには、ロリンチちゃんから提供された入即出やる夫が歩いた、魔術王打倒の記録が記されている。

「こんな奇跡と偶然の結果を再現なんて無理じゃない!？」

と、オルガマリーは叫び、実際やる夫も無理だろうと思ったからこそ、スタッフ回復の支援を行い数で押す戦略をとらせたのである。

だが、その戦略を止めたのが隣に映ったダ・ヴィンチちゃんである。

「現在唯一のマスターである藤丸立香は、セイバー沖田総司、アーチャーエミヤ、キャスタークー・フリーンを得ただけでなく、入即出氏の勧めで金剛神界で修行した後、バーサーカー茨木童子とアサシン酒吞童子と契約した」

「戦力が強化できてよかったじゃない。

何が言いたいのか？」

「彼女の戦力強化に、疑念と嫉妬の声が上がっている。

予備マスターである事を理由に、彼女からサーヴァントを取り上げて、正規マスターにわたすべきだという意見すら出た」

入即出やる夫がグラウンドマスターになってしまった理由は尽きる所、『それしか選択肢がなかった』からだ。

人員が増えて選択肢があるのなら、当然利害ができて派閥ができる。

藤丸立香を中心に据えなくていいのだ。

「もちろん、この意見は却下した。

入即出氏の資料提供で判明したけど、マスターとサーヴァントとの間に強い絆が結ばれるとその分攻撃力とかは上がるんだ。

つまり、新規のマスターは自分でサーヴァントを用意しなければならない。

待っているのは嫉妬と怨嗟さ。

『何で俺の所はこれなのに、あいつにはあんなにサーヴァントが居るんだ』とね」

こう考えると、レフの仕掛けは二重三重に渡って構築されていたと言わざるを得ない。



そのまま進めても待つていたのは、格差と嫉妬と疑心暗鬼によるカルデア崩壊。

それを乗り越えて人理が修復できたのは、それが起こらない程度まで人員が減り、藤丸立香しかマスターが居なかつたという天の采配、いや、抑止力の干渉だろうか。

「少なくとも、次のオルレアンまでは藤丸立香の一人マスター体制をとらざるを得ない。

明確な格差と功績を以て彼女を保護しておかないと、他のマスターを働かせるのは無理だと判断している」

ロマニとダ・ヴィンチちゃんが言わなかつたことが一つある。

カルデア内復興に際して、多くのスタッフから『入即出やる夫を所長にしたらどうか？』という声が出たことを。

本人がやらないだろうと却下したが。

「わかりました。」

そちらの判断を尊重します」

オルガマリーはその件をそれで片付けた。

次の報告もとんでもないものだったからだ。

「マシユ・キリエライトのバイタルデータが急激に回復かつ向上しています。

本人に問いただした結果、金剛神界から帰った時に待つていたアマテラス様からもらった桃を食べたと」

ロマニもダ・ヴィンチちゃんも苦笑を隠さない。

良いことではあるのだが、それがどういう意味を持つか分かるオルガマリーは叫ばざるを得ない。

「神様からの桃お!？」

それとんでもないやつじゃない!？」

「彼女の体は元が元だからね。」

これも、入即出やる夫氏の支援だそうだ」

やる夫のマシユから話を聞いたアマテラス様が可哀想だと彼女に桃をあげたらしい。フリーダムだが善人でもあるアマテラス様らしいエピソードである。

あと、やる夫のマシユから話を聞いて自分の中に何が居るか分かったので、『今は遙か理想の城』が使えるマシユとして元気に種火と素材を集める日々を送っている。

ついでにいうと、桃を食べたマシユに釣られて近くの大江山から鬼がやってきてゲツトされたという経緯がある。

なお、入即出氏が等価交換として提供を求めたのがこの種火だったりするが、あまりにも向こうの提供が大きすぎるので何時返せばいいのかわからないとこの三人が頭を抱えたりするのだがそれは別の話。

「いいわ。」

これもいずれ返すものとして記憶しておきます。

で、最後の話は何？」

ここまで聞くと頭を抱えそうになるがオルガマリーはそれを己のプライドで耐えた。

それでも、ロマニの最後の報告にそのプライドを粉々に打ち砕かれる事になる。

「カルデアが、いや、僕たちの世界がこの世界から見えて特異点になっている可能性がある」

と。

## 第〇回カルデア連絡会議 その2

「私達が、私達の世界が特異点？」

「冗談でしょ!」

オルガマリーの言葉にロマニもダ・ヴィンチちゃんも返事を返さない。

その沈黙が、事実となつて三人を打ちのめすが、口を開いたのはダ・ヴィンチちゃんだった。

「入即出やる夫氏の存在がそれを証明しているんだ。」

この世界は、人理修復された世界だ。

にもかかわらず、私達が来た事で再度魔術王が動き出した。

これは、私達の世界の魔術王が、私達を起点にこの世界も焼却しようとしていると考えるべきだと思う」

「それを防ぐことはできないの?」

オルガマリーの質問にダ・ヴィンチちゃんはあつさりとその答えを言う。

簡単かつそれをするにはかなりの抵抗のある答えを。

「簡単な話だ。」

この世界とカルデアのレイシフトデータを破棄してしまえばいい。

現在、この世界とカルデアはレイシフトで繋がっているから、それを解除すれば2つの世界は自然と離れてこの世界は助かるだろう」

この会談の前にロリンちゃんやとホームズを交えた話し合いが行われており、世界決定の観測者が藤丸立香と入即出やる夫である事が確認できていた。

現在の状況は、入即出やる夫側の事情であり、藤丸立香側は巻き込まれた側なので、レイシフトデータの破棄によるこの世界との切り離しでおそらく、この世界の魔術王の手はそれ以上は伸びてこないだろう。

「けど、この世界が無いと今のカルデアは存続できないじゃない!?!」

現在修復途中のカルデアは、食料および物資をこの世界から調達している。

莫大な魔術素材、信じられない神秘の量、そしてスタッフの多くを回復させたマジックアイテムなどはこの世界無くしてはありえない。

それを破棄するという意味を考えて、オルガマリーの顔に汗が吹き出る。

この世界でなかったら、彼女は死んでいたという事実をつきつけられたからだ。

「そうだ。

その上で、向こうのダ・ヴィンチちゃんから提案があった。

『カルデアをこの世界に固定させないか?』だ」

つまり、観測者を入即出やる夫一人に固定させる。

そうすれば、観測者の視点は入即出やる夫一人に絞られて、おそらく記憶から何まで全部この世界に固定された瞬間から改変が始まり、この世界の一部となるだろうと。

ダ・ヴィンチちゃんは話を続ける。

その声に憂いがあるのは、ロリンチちゃんの提案が魅力的だからだ。

「その場合、人理修復はどうなるの?」

「この世界では人理修復は既に終わっている。

私達は終わった物語の主人公としてめでたしめでたしの後の生活を送れば良いという訳だ。

多分、記憶の改変の段階で、そのあたりも都合よく再設定してくれるのだろうか」

オルガマリーの声がダ・ヴィンチちゃんの声を止める。

それがこの提案をためらう最大の理由だった。

「わたしたちのせかいはい?」

ロマニとダ・ヴィンチちゃんは何も言わない。

それが答えを物語っていた。

「この件は、藤丸立香くんを除いて知っているのは我々だけだ。

そして、藤丸立香くんに打ち明けた結果、彼女はこう言ったよ」  
しばらくしてロマニは苦笑する。

モニターにその時の藤丸立香を映す。

「やる夫先輩は私達の旅路を応援してくれています。

私達の旅が成功する事をやる夫先輩の存在が示しています。

なぜ私達の旅を諦めるのですか？

ゴールはそこにあるのに、人理は修復されるのに。

私は、私の未来を、私の世界を諦めません！」

その旅路を続けるならば、いずれカルデアとこの世界は離れることになる。

それでも、藤丸立香は自らの世界を守るために旅立つという。

その時には、この世界を特異点として切り捨てる事を承知した上で。

「さっきの派閥云々の話はここに繋がるのね」

オルガマリーはため息をつく。

人は弱い。

困難な道があつて、後ろに退路があるのならば、多くの人はその退路を選んでしまふだろう。

それでも、現在唯一のマスターは己の世界を守ると決めたのだ。

「実際、どれぐらいまでこの世界に滞在できそうなの？」

「正直、わからないというのが結論だ。

現在のカルデアは第一特異点オルレアンに向けて準備を進めている。

いつ状況が変化するのかわからないので、所長も早い帰還をお願いしたいが、所長がそちらに居ると居ないのでは、支援体制が格段に違う」

カルデアへの物資供給はオルガマリー・アニムスファイア無しでは語れない。

アニムスファイアという魔術協会に通じる名前、現地にいる事での物資調達、彼女を起点としたコフィンの往還等彼女はカルデアの為に多大な尽力をしていた。

「最悪、私の切り捨ても視野に入っているという訳ね……」

画面向こうの二人が言わなかった事にオルガマリーは自ら口にした。

彼女の帰還とこの世界との分離が間に合わない事があるという事実をオルガマリーは表向きは受け入れた。

それは、彼女が人理継続保障機関フィニス・カルデアの所長だからにほかならない。「わかりました。」



万一のときには、所長権限をロマニ・アーキマンに委譲する事をここに明言します。貴方の、いや、藤丸立香の為にできる事は全て行つてください」

オルガマリーは、この世界で上に立つ人間というものを多く見てきた。

入即出やる夫みたいに現場に行けずに歯噛みした姿も、クルト・ゲードルみたいにしての責任を取ると明言してやる夫達を支援したことも。

レフが居なくなつた今、彼女はそんな上に立つ者としての振る舞いが求められていた。

会議が終わり、オルガマリーはそのままベッドに倒れ込む。

小さな眩きは誰にも聞こえることはなく。

「助けてよ……」

誰に助けを求めたのかを言わなかつた事で、彼女が成長しているなんて彼女自身分かるわけがなかつた。

## 査問会

「以上をもって、査問会を終了する」

その一言を敬礼して受け止めると市ヶ谷から来た査問委員たちが部屋を出てゆく。

それを見送って、俺は隣で弁護をしてくれたユーリア・ブラッドストーン大佐に握手する。

「助かりました。大佐」

「向こうも本気でないのは分かっていますよ」

儀礼的なものですよ。少将」

タンカージャック事件は世間を多いに賑わせて国会でも話題になっていたが、事が事だけに機密にしなければならぬことが多く、公に発表できる情報は限られていた。それでいて、米艦の誤射ミサイルを俺の叢雲が叩き落としたシーンはTVに何度も放映されたので、反米感情が高まりつつあった。

それを機密でごまかすためにも、査問会を開いて落とし前をつける筋書きに俺が自ら志願したのである。

順調に進む自衛隊クーデターに際して、自衛隊側に恩を売るといふ訳だ。

この査問会で問題になったのは以下の箇所だ。

1) タンカージャック鎮圧作戦において、米国および英国との指揮連携は適切だったか？

2) 鎮圧作戦時に政府からの指示に従わなかったがそれはどういう理由なのか？

3) あの時自衛隊側の指揮命令系統は適切だったのか？

これに対して俺とブラッドストーン大佐は以下のように論陣を張った。

1)

あの作戦の指揮官はターニャ・デグレチャフ少将であり、彼女の最終決定及び自衛隊への要請に従ったままである。

この件については、ターニャ・デグレチャフ少将の報告書を米軍より提出する。

2)

日本国排他的経済水域内で発生した今回の事件は、日本国の主導による事態の解決が望ましかったが、同時に日米安全保障条約の範疇に入ると米国は解釈している。

また、シージャックされたタンカーが第50任務部隊に攻撃を加えた時点で米国も当事者となった事を強調しておきたい。

とはいえ、日米間の連絡について問題があることは事実であり、これについては後日実務者協議を行う事を米国より提案したい。

3)

第50任務部隊は日米合同演習を行うために臨時編成された艦隊であり、それに参加した自衛隊艦艇はヤタガラス所属の入即出やる夫海将補相当官が指揮を執るといいういびつな構成だった。

また、梅津三郎海将補に指揮を執らせるには国内事情による問題があり、第1護衛隊司令の衣笠秀明一佐も階級の都合上指揮を執る訳にはいかなかった。

そして、海将を出した場合第50任務部隊のターニャ・デグレチャフ少将の権限を越えてしまうことになるため、任務部隊編成の最終指揮権がターニャ・デグレチャフ少将にある都合上、今回の措置は適切であったと主張する。

なお、米軍は任務部隊編成時にこの問題を考慮して入即出やる夫海将補相当官を少将として扱おうと通達しており、次席指揮官として命令の混乱がないように配慮している事を強調しておきたい。

このような主張が認められたことで、無罪放免と相成った。  
さすデグである。

本当に感謝するしか無い。

「ターニャ・デグレチャフ提督は今ソマリアですか？」

「ええ。」

現地民兵を英戦艦ウォースパイトと共に吹き飛ばしている最中かと」

「お礼が言いたかったのですが、常に戦線に立っていますな」

「それこそ最高の褒め言葉です」

ブラッドストーン大佐は褒め言葉と取っているけど、皮肉だから今のは。

当人の哀れさを一端脇において、雑談という名前の情報交換を行う。

「ちなみに、話せる程度でいいのですが、海軍戦術システム、何処まで復旧しました？」

「横須賀に戻ってバックアップを入れ直した所まで。」

「何処に穴があったかは現在捜査中です」

「こちらと同じようなものです。」

「現在全艦艇のチェックに大忙しですよ」

戦闘時におけるクラッキングという最悪の事態が発生した今回の事件で、日米のシス

テム担当が悲鳴をあげたの言うまでもない。

基地のコンピューターにすらダメージが出た今回の事件を契機に、慌てて全システム

のチェックをやっている最中だった。

なお、そんなチェックにうってつけのハッカー集団であるスプーキーズを俺が手放す

訳もなく、彼らを雇ってシステムのチェックに送り込んでいたりする。

という訳で、現在の横須賀基地で何かあった時に安心して即座に動けるのは『みらい』、『叢雲』、『浜風』の三隻だけという現状で、査問会で俺を切る事ができないという裏事情もあった。

「これは独り言ですが、デイノ・デイラツソ中佐の件、かなり闇が深くまだまだ広がりそうです」

デイノ・デイラツソ中佐は小悪党であるが、同時にその小悪党にこういう事を頼んだ誰かの所まで米国諜報機関はたどり着いていなかった。

何しろ、沖縄で秘密製造されていた『GUSOH』が奪われた件でCIAを始めとした米国諜報機関に粛清の嵐が吹き荒れている。

『GUSOH』が何処で使われるかわからない以上、未だ警戒は続けなければならなかったのだが、ミレニアムまで届いているのは俺とデグ様しか居ない。

そして、それを証明する証拠を見つけたのだが、それを頼みたい諜報機関が……と  
いう訳だ。

完全に後手後手に回っている。

「動きたい所だが、こんな状況では動けんよ」

「無理に動く必要はないと少将はおっしゃっていました。

『ナチなら米国か英国だろうし、まずは自国は自国民で守るべきだ。』

君は君の国を守りたまえ』とも」

そういう事をサラリと言えるからさすデグ信者が増えるのが分かっているのだろうか？あのお方。

会議室を出ると、場違いな少女が一人。

エルフ耳、麻呂眉、厚底ブーツの和服スカートというフェチズム極まる衣装で護衛を伴って待っていた。

（マスター。あれ、できるぞ）

霊体化してついでにきていたモーさんが警戒する。

なお、副官のステンノは実体化してついでにきているので、その少女に笑顔でガンを飛ばしていた。

なるほど。

ステンノ様と同系統のお方か。

「はじめまして。

ヨロシサン製薬の役員をやっております、古奈牙柳魅と申します。

この度は弊社商品を大量購入して頂き深く感謝申し上げます。

つきましては、自衛隊におけるハイデッカータイプ導入におけるお話を……」

いつの間にか、こういう接待を受ける側に立ってしまった自分に苦笑するしか無かつ

た。



## 接待風景

さいたま新都心。

新しくできた開発地区で、高層ビルが立ち並ぶ場所ではあるが、さすが闇鍋世界。アーコロジーが建っているとは思わなかった。

ヨロシサン製菓の出迎へのへりに揺られて上層階のへりポートに到着する。空気が綺麗なのにびっくりである。

「我が社は環境にも配慮しております」  
認識阻害の先にそびえる麻帆良学園都市の世界樹を眺めながら古奈牙柳魅は苦笑する。

メガコーポは真つ白ではないが、かと言って真つ黒でもない。

暗黒メガコーポと名を馳せていたこの両社だが、こつちに来たときにそれ相応に綺麗にはなったのだろう。

叩けば出る埃はメガコーポの必要経費である。

「ようこそいらっしやいました」

ずらりと並ぶ美女達が俺にお辞儀をする。

「こー言う所は名残として残っているのが中々面白い。

「なに笑っているのよ?」

自衛隊服の叢雲が突つ込み、同じく自衛隊服のマシユが白い目でこっちを見ている。

まあ、暗黒メガコーポの接待なんて受けたら、それはそれで色々問題なのだろうが、こつちもこの社とくつつかねばならない事情がある。

実際にハイデッカーは対悪魔戦における切り札の一つになりえるのだ。

そんなアークロジ最上階の和室で、オイラン達を待たせながら盃を交わす。

「では、お近づきを祝して」

「乾杯」

高級酒を口にして盃を置く。

ふらりとした所をステンノに支えられる。

「お酒弱いのに無理するから」

「これも仕事さ」

その際にステンノが気遣うふりをして警戒する。

彼女から何度か魅了がかけられた事を目で告げていた。

概念礼装『ムーニー・ジュエル』を装備していなかったら危なかった所だ。

こういう所も暗黒メガコーポらしくて苦笑するしかない。

「これは失礼を。」

何か別のものを用意させましょう」

古奈牙柳魅が軽く手を叩くと、オイラン達が下がり、障子が開けられるとそこに巨大モニターが現れる。

出て来たのは、魔界バブル真っ只中における日本の自衛隊の充足状況だった。

「湾岸戦争以降、戦争はハイテク兵器が戦場の中心になりました。」

それは、大量動員された兵士よりも専門職のエキスパートである兵士が必要になった事を意味しています。

そのエキスパートの兵士の育成には、多額の費用と時間がかかります。

弊社商品はそれを解決できると思っております」

「たしかに。」

とはいえ、それを一介の国家公務員に言うのは筋違いと思うのだけどね」

「それでもありません。」

入即出様が購入なされた弊社商品は、自衛隊における初の採用になります。

その有効性はいずれ正規採用に繋がると思っております、弊社といたしましては最大限の協力をおと思います、このような席を用意した次第で」

実際、海自の定数不足は深刻だった。

現在作成中のレポートでは、バブルの夢を未だ見ているこの国の海自隊員の充足率は八割を切ろうとしており、私物購入扱いだったハイテッカー達については予算をつけて正規隊員化もという市ヶ谷の思惑がレポート提出後に出てきたのは笑うしか無い。

なお、陸自や空自まで導入をするとなれば、その購入人員は余裕で万を超えるし、警察や消防にまで導入が始まれば桁が更に一つ上がる。

「貴社の商品だけが採用される訳ではない。

ライバルは多くいるからな。

オムラ・インダストリーにノマド、学園都市や麻帆良学園都市も研究を進めている。戦闘機導入と同じように、ハイ・ローミックスでの採用になると思っている」

「もちろん、利益の独占が理想ですが、蹴落とす相手は少なければ少ないほど楽なもの。今回、入即出様がヴィクトリア・ザハロフに支払った金額、全て弊社にて負担いたします」

そう言って、古奈牙柳魅は小切手を差し出す。

調達したハイテッカーの値段は一体1000万円。

その400体だから40億円だったりする。

なお、オムラのオイランロイドの価格は一体一億円で80億円。

対魔忍クローンは一体三億円で60億円で、合計180億円ものビッグビジネスだっ

たりする。

小切手の金額は200億円だった。

「また豪儀なことですな」

「軍事関連はこれぐらいのお金は常に動いていますから。

リベートとでも思ってください。

正直な所、これでもまだ可愛いものです」

ハイデッカー一体1000万円が自衛隊全部に採用されると、一万體は配備される計算になるので一千億円のビッグビジネスになるからだ。

おまけにハイデッカーの寿命は三年。

三年ごとに一千億円の売上があると考えるならば、200億円のリベートは先行投資と割り切る覚悟が古奈牙柳魅の笑みから見えた。

「受け取りたい所ですが、査問会から開放された身。

ここでそれを受け取れば、また査問会に呼ばれるので、それはおしまってください」  
古奈牙柳魅の眉がぴくりと動く。

オイランの接待だけでなく、現金受け取りも拒否すれば向こうの面目が潰れるのである程度のお礼は返す必要があった。

「あくまで私個人の私用という形で、ハイデッカーを追加購入しておきたい。

400体分。

なんなら、この場で契約書を書いても構わないがどうかかな？」

デグ様経由で、ウォースパイトの乗員の不足についての報告は届いていた。

あの人の良い提督を救国の英雄として殉死させるのは忍びなく、せめて彼の手元に最低限の戦力を送るぐらいはしてあげようという訳だ。

購入費用はNATO軍予備費、購入は俺で、送り先はデグ様の所。

デグ様の所で経歴ロンダリングをして、NATO軍兵士としてウォースパイトに乗船という手はずだ。

さすがにバックドアまで手が回らないが、ボンド中佐には話しているから後はMI6の技術部が外してくれるだろう。多分。

古奈牙柳魅は、ぼんぼんと優美に手を叩くとオイランたちが契約書一式を用意してくれる。

笑みを崩さず、雅な口調でこの会談を終わらせた。

「これからも弊社商品をご最良によりしくおねがいます」

## 横須賀基地食堂の一コマ

「私って、魅力ないんでしょっか？」

横須賀基地の食堂にてそんな事を言いだしたのは、東風谷早苗。

入即出やる夫によって助け出された現人神の学生である。

そんな発言に天ヶ崎千草が食べていた醤油ラーメンを喉につまらせるが、当の本人はまったく気づいていない。

「神奈子様も諏訪子様も『さっさと押し倒してしまえ！』って言うんですけど、なんとありませんか、周りの女性達のあれやそれが……」

ランチの鶏肉ステーキを箸でつつきながら、最後の方はごによごによなっているあたり東風谷早苗にも思うところはあるのだろう。

むせながらも天ヶ崎千草はあくまで大人としてアドバイスを送った。

「十分魅力は持つてはると思えますけど、大人にはしがらみがあるんです」

「たとえば、どんなしがらみなんですか？」

天ヶ崎千草はとある方向を指差す。

そのしがらみの最たるものが、カレーうどんの悲劇を今嘆いている所だった。

「あつ……あーあー……あー……あー……！」

「あれ落ちないんですよねえ……」

「いや、突っ込む所はそこやあらしまへんわ」

近代設備になった事で、叢雲での食事のレパトリーはかなり広がっていた。

おまけに異界化した倉庫に保存食を大量に買い込んだので、長期間の航海でも問題ないという状況になっている。

とはいえ、食事は基地の食堂でした方がレパトリーも多いので、多くの隊員と共にこつちに出向いて食事をする事に。

周囲の自衛隊員の視線ももう慣れた。

「当たり前のように居てはりますな。あのお方」

「神奈子様と諏訪子様は露骨に避けていますけど……」

「そりやそうどつしやろ」

因縁が日本神話レベルだけに、深いといふかなんというか。

そんなアマテラス様は妖精三人に絡まれる。

「アマテラスおねーちゃん！

一緒にアイス食べよ」

「ひーほー♪」



「だめだよ。

チルノちゃん。

「ごめんなさい」

「いいですよ。」

「一緒に食べましょうね」

「「わーい！」」

微笑ましい光景を眺めていた二人のうち天ヶ崎千草がぼつり。

「なんぼ食べても太らへんて羨ましくすな」

「私もあまり気にしていませんけど？」

「そないな事が言えるんは、十代の間だけどす」

今までで一番真剣な口調で天ヶ崎千草が言い放ち、東風谷早苗はその後の言葉を失う。

そんな空気を打ち払ったのは、隣の席に座った定食を持った女性のおかげである。

「隣失礼しますね。」

「どうも楽しそうなお話をしていたみたいなので」

「そう言つて臍は手を合わせてアジのフライに箸をつける。」

不思議なもので、人が食べるのを見ると食べたくなるのが世の常で、明日の昼食は定

食にしようと二人は心に決める。

「あ。そうそう。」

夜這いの話なんですよ！

私って、魅力ないのになつて……」

結構大きな声で夜這いなんて堂々という東風谷早苗。

当たり前だが、この食堂には男子自衛隊員の方が多い。

「そりゃ、魅力云々でいうと、相手が神様ですからね。」

そこを何とかアプローチをしてというのが我々の立場です」

やる夫の寝室のライバルは、基本全員神様である。

その時点で色々突っ込む所なのだが、そのやる夫の子供ならどれだけのものができるかという訳で、彼に抱かれて子供を孕みたいという女子は結構多い。

その後の世話は、所属する組織が見てくれる。

「あの人結構義理堅いんですよ。」

手を出した人たちってアマテラス様を除けば、全員長い付き合いの人達ばかりだとか」

「そうなんですか」

隴の言葉にへーという顔をする東風谷早苗。

叢雲・マシユ・ステンノの三人は死線をくぐった仲で、それぞれ微妙に付き合い方が違う。

叢雲の場合は自衛隊員に分かりやすい古参下士官と新米士官との関係で、それが公私に渡つて広がったケース。

だから、必要なら遠慮なく私の時間でも公の話を振るのが叢雲。

一方で、マシユは後輩としてやる夫の指示に付き従つた関係で、先輩後輩の関係がそのまま公私に使われている。

そのため、基本的な所ではやる夫の指示待ちになるのがマシユだった。

またステンノとの関係はマスターとサーヴァントではあるが、親しさと他人行儀な所は神様と崇拜者でなく、少しわがままな幼馴染とそれを受け入れる友人ポジと言つた所。

双方体を重ねる関係なのに、最後までどこか他人行儀な所があったりする。

そんな事を臚はアジのフライをつまみながら話す。

「よう見ではりますな」

「それがお仕事ですし。」

そういう所から、自分の立ち位置を作らないといけない訳です」

「で、あのお方は？」

「当人曰く、姉と弟だそうで」

「それ、スサノ……」

東風谷早苗の口を自らの口に指を当てて閉じさせる臚。

言霊はこの世界は命取りになりかねない。

「まあ、ぶつちやけると、愛がなくても私はいいのですけどね」

監視と勧誘が目的の臚はそのあたり割り切れていた。

一方の東風谷早苗は自分の心が分かっていない。

「私は何なのかなあ？」

助けてもらった恩はあるけど、じゃあ恋を飛ばして愛に行くのもどうかなって感じ  
で。

かといって今のままだとなあというのも分かっているし」

天ヶ崎千草は復讐のために動いてこの軀を差し出してもと思っていたのに、シスター  
シャークティをはじめクルト・ゲードルやタカミチ・T・高畑みたいな人間を知ってし  
まうと彼らを憎めない。

復讐を続けるのも力が居る。

そして、その力が揺らぐ程度には時は経っており、少女は大人になっていた。

「天ヶ崎さんはどう思います？」

「ん？」

天ヶ崎千草は残っていた漬物を口に入れることで、東風谷早苗の質問を拒否することにした。

臙はそれを見ていたがなにも言わず、こうして三人の昼食は終わった。

## 船頭多くして船山に登る その1

日本の公的退魔組織は闇鍋世界のおかげでこんなにある。

デビル・バスターズ (内閣調査局)

内務省公共安全庁 調査第三部 (内務省)

警視庁特別資料室 (警視庁)

防衛庁特殊二課 (防衛庁)

宮内庁陰陽課 (宮内庁)

科学技術庁超常現象研究所 (科学技術庁)

文化庁調査局独立7課 (文化庁)

国土庁総務部典礼課 (国土庁)

ジプス JPS 正式名称 気象庁・指定地磁気調査部 (気象庁)

陸上自衛隊538部隊 (陸上自衛隊)

護国機関ヤタガラス (宮内庁)

これに民間組織で協力的な所も入れてみるとこうなる。

神社庁特別調査部（神社本庁）

クスノハ（葛葉）

関東魔法協会（メガロセンブリアの紐付きだが関東に多大な影響がある）

関西呪術協会

退魔四家（浅神・巫浄・両儀・七夜）

対魔忍（ふうま一族）

これらの組織は縦割り行政のおかげで規模が小さかったり、権限が限られていたり、横の連携が殆ど無かったのだが、さすがにまずいだらうという事で組織再編の動きが始まっていた。

その原因は言うまでもなく俺とアマテラス様。

要するに海自にこれ以上俺の身柄を預けるつもりはないという意味で、当然海自は市ヶ谷共々大反発をしていたりする。

とはいえ、昨今の状況は繁栄の裏でテロだの悪魔だのが跋扈している訳で、状況の改善は待たなしの所まで来ていた。

というか、闇鍋結果でできていたのかよ。内務省……

これのおかげで、組織再編が一気に加速した。

大蔵省が官僚オブ官僚なんて言われるのは戦後の話であり、それまでの官僚の王道オブ王道は警察を抱えていた内務省である。

防衛庁の省再編に絡む動きと合わせて、大蔵省とのバトルの餌にされたという側面があつたりする訳で。

という訳で、このあたりの組織再編の話をしようと思う。

内務省があつたおかげで、組織再編に実に都合が良い器が一つ使えるようになった。神祇院である。

戦後には消えた内務省の外局だが、解体に際しその仕事は民間となつた神社庁に引き継がれていた。

そんな神道系の器だが、アマテラス様バカンス中の昨今、民間に置いておける訳もな

く。  
宮内庁陰陽課と神社庁と関西呪術協会とヤタガラスがここに集約された上で、宮内『省』外局として再建させられる事になった。

ここに連絡会議が設置されて、横のつながりを作ろうという訳だ  
組織的にはこんな感じになる。

宮内省―神祇院―特別調査連絡会議

―護国機関ヤタガラス―クズノハ



―特別調査部

―陰陽課―関西呪術協会

―退魔四家

―対魔忍

―デビル・バスターズ

内調下で弱体化させられきっていたデビル・バスターズは早急な戦力化を求められてこちらに移され、内務省から依頼を受けていた対魔忍もこちらに回された。

組織を眺めていやな想像が頭に湧く。

対魔忍は娼婦育成機関なんて陰口を叩かれているが、本当にそれが目的なのかもしれない。

何しろ、この手のエキスパートは伝統と血の継承がとにかく物を言う。

そして、それにふさわしい母体は常に不足する。

そう考えると、この腐れきった国の冷徹かつ合理的な政策の一端が見えてくるから、納得すると同時におぞましくもなる訳で。

彼女たちはその母体のみが必要な訳で、そこから生まれた子どもたちは再度育成されて……考えるのはやめよう。気分が悪くなる。

なお、型月世界の退魔四家がこつちにまとめられたのは、クスノハや対魔忍と同じ扱いをされたからである。

次に省庁再編で文部科学庁と国土交通省が誕生することになり、その巨大官庁下でも退魔組織がまとめられる事になった。

文部科学省―文化庁―調査局―超常現象研究所＋独立7課

―超常現象連絡会議―関東魔法協会＋他

麻帆良学園都市にせよ、学園都市にせよ、学園都市であるために管轄は文部科学省である。

そして宗教関連を管理しているのもここである。

結果、最も多くの退魔組織の人数を抱えているのが文部科学省である。

なお、天海市の情報環境モデル都市の失敗で対処に追われてアーカムの支援を受けているのもここだったりする。

国土交通省―気象庁・指定地磁気調査部＋総務部典礼課

こつちは、ジプスこと気象庁・指定地磁気調査部が総務部典礼課を吸収する形になった。

ジプスを実質的に支配している峰津院家の力が強かったというのもあるが、こつちもアーカムが龍脈絡みで接触していたりする。

退魔組織の再編である意味一番動かなかつたのがここである。

内務省—公共安全庁—調査第三部

—警視庁特別資料室

内務省があるという事は、国家公安委員会が無い訳で。

総務省ができずに内務省に吸収されるのか総務省と内務省に分かれるのかまではさすがにわからない。

とはいえ、この腐れきつた国をまがりなりにも繁栄に導いた治安維持を一手に握っていた事もあつて、むしろ油断できないと言つていいだろう。

むしろ、ここの特殊性は表を書いた方が分かりやすい。

内務省—公共安全庁—調査第三部

—警察庁—自治体警察—警視庁特別資料室

—首都警

首都警あるのかいと突つ込んだのを誰が責められようか。

自衛隊のクーデターがカウントダウンに入った現在、それを防ぐために警察軍の創設

は悪くはないが、同時に警察側が俺を逮捕するという可能性を否定できなくなる。

少なくとも、警察はクーデターを許容しない。

それがわかったただけでも良しとしよう。うん。

で、その自衛隊である。

防衛省―特殊二課―陸上自衛隊538部隊

一応上位機関の特殊二課と実務部隊538部隊という形に収まりはした。

とはいえ、ここにこんな動きがあつた事は載っていない。

海上自衛隊特殊任務群編成案

つまり、俺の所属先を作る動きだ。

それが没になった理由が、現在俺の前に座っていた。

「今回は、お誘いに応じて頂いてどうも」

「色々とお話を聞きたいとは思っていましたので。

内務省公安部の荒巻大輔さんに、警保局の室戸文明さん。

どういいうお話を聞かせてもらえるか楽しみですよ」

## 船頭多くして船山に登る その2

「知つての通り、海上自衛隊特殊任務群編成案を葬つたのは我々だ。

入即出やる夫宮内省技術総括審議官」

「まだできていない省の役職で呼ばれるのは妙な感じですか」

「慣れておきたまえ。」

少なくとも、この国の神道系退魔組織の最上位現場指揮官として我々は扱うつもりではいる」

俺の突っ込みなど室戸文明は気にする様子もない。

俺が何か言う前に荒巻大輔が補足説明を加える。

「室戸さんは、省庁再編後、宮内省の事務次官となる予定になっている。

今回の技術統括審議官のポストは室戸さんが強烈に推した結果という事を理解して欲しい」

技術統括審議官は技官の最高位のポストであり、局長級の扱いとなる。

今の自衛隊で同じポストを探すと舞鶴や大湊の地方総監となるから、感覚で行けば少将である海将補より一つ上という所だろうか。

本人のあずかり知らぬ所でまた出世したものである。

「ただの護国組織の構成員が宮内省の技術統括審議官ですか。

あちこちから妬まれそうですね」

「闇に隠れて生きているならばそれもまた良しだが、表に出た以上は表のルールに従ってもらおう。

君は君が使役している艦娘との関係から、必然的に海自との関係を深めており、それを海自も歓迎する事については別に問題はない。

とはいえ、君の本籍がヤタガラスであるならば、そちらを忘れないようにしてほしいという訳だよ」

国を影から守っていた故に、そもそも公務員という意識すら無い護国組織ヤタガラス。

その上に宮内庁というか日本神話の守護という名目からの退魔組織でしかないから、個人の力に依存して組織としての体を成していなかった。

結果、クズノハみたいな血統と伝統のある退魔一族に依存せざるを得ないという状況に陥っていた。

「宮内省を警察の植民地にできたという所ですか。

その段階で俺は自衛隊に傾きすぎている。

排除は問題外である以上、俺の引き戻しに走ったという所ですか？」

俺の皮肉に室戸文明も荒巻大輔も動じない。

そういう政治的寝技を駆使してこの国を守ってきた悪魔とは別の妖怪達が俺の目の前にいる二人なのだ。

「隠すつもりもないが、自衛隊内の一部組織に置いてクーデターの動きがある。

自衛隊内でもその粛清に手間取っており、決起が発生した時に君が同調されると困るというのもある」

「俺はクーデターには参加しませんよ」

「米軍の介入を警戒しているからか。

悪くない理由だがそれだけでは信用できないからこうして君を呼んだ。

君は米軍の何を警戒しているのかね？」

さすが警察官僚の頂点の一人。

寝技も事前情報も全部準備してこちらを詰めに来ている。

自然と苦笑していたらしく俺の唇が笑っていたのに気づいて戻す。

「米軍の核攻撃と言ったら信用しますか？」

「少し前だったら鼻で笑った所だが、ミサイルの誤射事件から日米安保が揺らいでいるのも事実だ。」

可能性は排除できないが、君はその米軍ともパイプを作っているはずだ。改めて聞こう。

米軍の核攻撃。

それはどのようなプロセスで発生すると思っっているのかね？」

荒巻大輔の質問に、原作とも絡みがあるなど気づいて俺は悪魔の話を振る。

「悪魔というのが情報生命体であるという理論が近年発見されて、その理論を元に悪魔召喚が飛躍的に容易になりました。

荒巻さんの担当の言葉で言うのなら、悪魔もまた自立し実体化するプログラムであるという所でしょうか」

荒巻大輔の顔色がはつきりと変わった。

俺の言葉の意味を理解したからに他ならない。

「まさか、あのミサイル誤射が悪魔の仕業というのか？」

「残念ながら、あれは真正正銘のウイルスですよ。」

ですが、学園都市の人工衛星まで使用不能にしたパラダイムXの障害は悪魔の仕業です」

あれを主導したのは俺なのだが、当然二人はそれを知っているだろう。

だが、その過程で大活躍をした電霊ネミッサのことなどまでは彼らは知らない。



「あのタンカージャック事件では、ウイルスのせいで横須賀基地から市ヶ谷、挙げ句にはハワイ真珠湾にまで被害が及びました。

そのウイルスが自立し進化し思考する。

現在の悪魔というのはそういうものなのです」

俺の言葉に二の句がつけない二人。

愛国心もあるし権勢欲も無いわけではないだろう。

とはいえ、この退魔組織というのがブラック確定の組織の体をなしていないと知っていたかどうかは怪しいところである。

今更遅いと言えば遅いのだろうが。

「わかった。

今から君の仕事は、そういう情報を整理しマニュアル化して、最低限神祇院だけでも戦力化させる事だ。

くり返し言うが、我々は自衛隊のクーデターを許容しない。

その上で君がこちらにつくのならば、それ相応の地位を約束しよう」

現状技官最上位の技術総括審議官なのにまだ上があると申すか。

顔に出ていたらしい俺に室戸文明は笑う。

「クーデターが起きない事が理想だが、起きても起きなくても上の椅子は大量に空く。

その時、君がこちらに居たならば、好きな所に座り給え」

「えらく俺を買っていますね？」

俺の苦笑に室戸文明は皮肉を含めてその理由を告げた。

分かりやすい理由を。

「この手の政治的駆け引きができてかつ実力がある上に、政治的色彩がまだ比較的ついていないのが君しか残っていないかったというだけだよ」

## 船頭多くして船山に登る その3

新設される宮内省にまとめられた退魔組織人員構成はこんな感じである。

ヤタガラス

30人 平均レベル18 全国の退魔組織との連絡役

クズノハ

16人 平均レベル60 基本2人で行動

陰陽課

4人 平均レベル4 東京守護任務がメインなので東京から動かず

関西呪術協会

110人 平均レベル30 畿内を始めとした西日本の寺社仏閣の警護

退魔四家

17人 平均レベル72 個々で動いている。遠野家はこの枠。

対魔忍

72人 平均レベル15 単独行動及び複数で任務に当たるが未帰還者多し

デビルバスターズ

40人 平均レベル5 4―5人のチームで活動

見事というかなんというか言葉にしにくい。

ヤタガラスは基本全国を飛び回る連絡員という扱いなので、この人員とレベルは納得ができる。

クズノハは少数精鋭主義で一族として事にあたってなおこの練度を維持できているのがすごい。

一方で陰陽課は関東魔法協会との兼ね合いで見事なまで弱体化させられていた。

ここは、関西に多くの霊地を抱えている関西呪術協会に協力を仰いで早急な戦力化を急ぐ必要がある。

退魔四家のレベルが異常な程に高いのは、クズノハと同じく尖った個人がレベルを押し上げている結果だろう。

遠野兄妹とか、両儀式とかあのあたりだ。

思った以上に人数がいるのが対魔忍だが、ここは設定が設定だから人数とレベルがある程度あるのは大助かりである。

無駄に送り込んで未帰還者アへ顔ビデオレターの届く率を抑えないといけない。

デビルバスターズは内閣調査局の弱体化にさらされて陰陽課と同じような感じに。このあたりの人員を動かせるのが俺の立場となる訳だ。

宮内省技術総括審議官。

実務組織となる予定の神祇院特別調査連絡会議の更に上の椅子だから困る。

ボスが復活する宮内大臣で、宮内省事務次官・宮内審議官に次ぐ内局局長扱い。

こういう扱いなのは、外局である神祇院のトップである総裁に変わって神祇院を動かす為の搦手なのと言うまでもない。

「やてと。」

どこから手をつけるかね」

皇居。皇宮警察本部地下に作られた準備室にて俺と叢雲とステンノは頭を抱える。

神祇院は皇居防衛の必要と隠密性から皇居地下にその施設の大部分を建設する秘密基地に近いかたちになる予定だ。

「まずは、何を守るべきかから始めた方がいいんじゃない？」

叢雲の指摘に、俺はCOMP絡みの資料を確認する。

意外と思うが、COMP流出にともなう悪魔の出現事件は、まだ許容範囲内に収まっていた。

それは時代が93年。

つまり日本のITブームを一気に加速させた。パソコンの爆発的普及前という事があげられる。

まだ、パソコンは持つ人が限られる物だったのだ。

もちろん、学園都市の最先端科学によってそのあたりの発展も進んではいるが、学園都市製の技術をデファクト・スタンダードにしたくない国家側の規制がこのバランスを作り出したと言えるだろう。

アルゴンソフトのパソコンが世界基準となり、その先駆けとして天海情報都市があった。

表向きの政策が潰れたので、まだ治安の悪化に対処できる時間が作れたのは運が良かったと言えるだろう。

「治安の維持。

そのためにも、警察側の組織とも提携しないと」

対魔忍を使っていた内務省公共安全庁調査第三部および、警視庁特別資料室と連携を取るための話し合いを申し込む。

ちなみに、警視庁特別資料室の人員は数人でレベルは3というやはり使えない状況だったので、室戸文明次官に頼んでここも強化させる事にする。

その調査第三部部长である山本信繁は電話向こうから苦惱な声を聞かせながら、対魔

忍使い捨ての窮状を語る。

「問題の本質は、悪魔が暴れることではないのです。

暴れたことによる恐怖の感染が一番やつかいなんです」

神様クラスの悪魔はひとまず放っておくとして、大体の雑魚悪魔は核の熱と衝撃に耐えられない。

これは人が悪魔に刺し違え覚悟である程度対抗できる事を示している。

とはいえ、そんな勝利を人も悪魔も基本望んでいない。

悪魔にとって、人は存在を固定できると同時に全滅すれば現界できなくなる基礎みたいなものだ。

だからこそ、悪魔と人は古より境界線を決めて、その中でつつましく共存していたのだ。

それが近年の経済発展で狂いだした。

悪魔は人に快樂を与え、人は悪魔に心を捧げ、繁栄と共に悪魔の顕在化は加速度的に進んだ。

それでも、まだ治安悪化に行き着いていないのは対魔忍を使い捨て、悪魔と人の欲望の生贄とする事で、満足させていたという側面に俺は頭を抱えざるを得ない。

「つまり、クローン対魔忍。

あれは政府の主導もしくは黙認によって、生み出されたものだと考えてよろしいのですね？」

山本信繁の沈黙が全てを物語っていた。

対魔忍の尊い犠牲によってこの国は魔界バブルに酔いしれ、未だ空前の繁栄を続けているのだから。

この国が何を差し出し、何を失ったのか、それを究極的には部外者である俺は問うことはできなかつた。

そして、その流れに俺も基本乗らざるを得ない。

「退魔組織における人材不足は致命的な所にまで来ています。

対魔忍クローン、オムラのオイランロイド、ヨロシサンのハイデッカーをベースに、各部署に人員を割り振ることになりそうです」

首都圏だけでなく霊脈のパワースポット地帯であるこの国の霊的防衛には、最低でも連隊規模の人員は欲しい。

それを確保できるのはその手段しか無かつた。

「自衛隊が大量導入をするという話に便乗する事になるでしょう。

それで今の治安が維持できることを信じていますよ」

おそらく、このハイデッカーを始めとした大量導入に紛れて、かなりの数がクーデ



ター側に渡るだろう。

それでも、そのクーデター後の治安維持には面制圧ができる戦力がどうしても必要だった。

警察にも、俺にも。

山本信繁との電話を切った後に、ステンノが言い放つ。

とても綺麗な笑みで。

「人間って不思議ね。

貴方も彼も、まったく信じていないのに」

その言葉に俺は何も返事をする事無く、ステンノに笑みを返すことで答えた。

## 船頭多くして船山に登る その4

退魔組織と治安維持組織の問題点を室戸次官（なお省庁再編で宮内省ができるのは来年1月1日からである）や荒巻公安課長側（彼は案の定内務省公安局の課長だった）から見ると、管轄と実戦力が内務省側から離れている点にある。

悪魔絡みの事件は必然的に宗教が絡み、それは来年できる文部科学省の管轄という訳だ。

宮内省昇格とその外局である神祇院は内務省がやっと悪魔絡みで実戦力を得たという見方もできなくはない。

そして、実戦力を得た事で表の法の執行ができる体制が用意できる事になる。

「基本、悪魔がらみの事件については、以下の編成で行う」

室戸次官の説明に神祇院特別調査連絡会議に参加した俺を含めた面々はその資料を確認する。

「事件そのものの一報は110番通報で警察に届く事が多く、最初の対処は警察が行う事になる。」

その後、悪魔絡みの事件であるという事が確認された後に、神祇院に権限が移管され

る」

とはいえ、発生時の警察への被害が馬鹿にならないので、警察側も治安維持の為にハイデッカーを投入する事でこれに対処する事になる。

大事件の一報で動ける人員と盾が増えたことで、被害を軽減する仕組みだ。

警官2人にハイデッカー2体がつく形で初動チームを編成する。

とはいえ、彼らの装備は対悪魔用ではなく、対事件用の軽装備なので注意。

「権限移管後に神祇院が出勤する事になる。

編成は、ハイデッカー16人に執行官4人を基本に管理官をつける。

管理官は基本警察から出向してもらい、警視以上の者をこれに当てる」

悪魔絡みの事件はその異様性からどのように法を当てはめるかで確実に揉める。

そのため、警視以上の警察官を管理官として事件解決と法の執行の整合性を取らせるために上に据えるという訳だ。

このあたりからも、この神祇院が警察の植民地であると正しく認識できた。

「つまり、現在集まっている面々は基本執行官として事件解決に当たり、管理官の助言のもと事件解決に当たると訳だ」

俺が横から口を挟むがイマイチ分かっていない現場組である会議の参加メンバー。

手を上げて質問を求めたのは上京してきた関西呪術協会会長の近衛詠春。

「関西呪術協会は地域に根ざし、現地警察と協力してこの手の事件を秘密裏に解決してきました。」

中央から管理官が出てくると、現地警察との軋轢が発生すると思うのですが、そのあたりについてお伺いしたい」

「もちろん、現在の案はまだ机上の空論で、省庁再編後に本格化するためのたたき台とも思っていたいただけると助かる。」

ただ、昨今の悪魔事件の発生はまだ許容範囲内とはいえ増加傾向に有り、いずれ現地だけで対処できる規模を越えることが予想される。

この案の狙いは、全国規模で頻発する悪魔事件において、増援を送る際のケースも想定しており、増援部隊と現地部隊の協力で事件解決をする事が望ましい」

互いに装飾しているが、要するに、

『地方の事に中央が出しゃばるんじゃねえ！』

『手が足りなくなるだろうが！』

増援送って責任は取るから、指揮権よこしやがれ!!』

という官僚的な殴り合いである。

困ったことに、その手の指揮権の奪い合いを警察は前例としてちゃんと学んでいた。

連合赤軍あさま山荘事件における機動隊派遣である。

「新組織の戦力化については疑問を挟みませんが、対魔忍のクローン導入だけでなく、オムラ・インダストリーのオイランロイドまで導入する意図を教えてくださいませんか？」

対魔忍代表として陸自の服を着た甲河隴の質問に俺が答える。

いつもの海自の制服でなくスーツを着ている事で、立場の違いアピールも忘れない。

なお、叢雲は海自制服のままだが、ステンはスーツ姿に変わっている。

「現在の人員で悪魔事件に対処できるのは100人ちよつと。

訓練と休息を考えたら、実数で動けるのは30人が良い所だろう。

4人でチームを組ませたら7チーム。

西日本は関西呪術協会が見てくれるが、この数だと東日本どころか首都圏でも手が足りない。

対悪魔に対してある程度の戦力が期待できる対魔忍のクローンは、この国の治安維持の切り札になるだろう。

同時に、そんな対魔忍の消耗は避けられないといけない。

オムラ・インダストリーのオイランロイドは、対魔忍を守る盾として導入する」

この導入については、実戦までさせた俺の意向がものを言った。

クローンは疲弊したノマドからの購入ゆえ、ヴィクトリア・ザハロフ相手に300億

円を支払い、割引込みで150人の対魔忍を確保して五車学園に送り込んで再教育をしているからこそ、こういったチーム編成までの話ができるのだ。

なお、オイランロイドは100体購入、ハイデッカーも1000体購入し既に納入が終わっている。

これらの費用を首都警設立の資金経由の裏金から出せるのも、この国が未だバブルに酔っているおかげだろう。

話はそれるが、首都警もハイデッカー2000体と装甲車両、機関銃装備でプロテクトギアをつけさせて戦力化を進めているのだから、この導入は技術のブレイクスルーとして記録されるだろう。

もちろん、自衛隊も万體規模で導入を決定したので、ヨロシサン製薬の株価はうなぎ登りで、いらんと断った200億の小切手が再度送られてくる始末。

「東京と京都を中心に近く人員の再編成を行う。」

現状の危機的状況だが、最低限の対処ができるように手は打っているので安心して欲しい。

希望などがあるのならば、私か入即出技術統括審議官に言い給え。

以上だ」

室戸次官の声と共に皆が立ち上がる。

俺が立ち上がろうとした時に、意図的に低い声でマダム銀子がこんな事を言った。「悪魔相手ならこちらも問題はありません。」

ですが、悪魔に魂を売った人間や、悪魔側についた人間を相手にした場合、どうしたらいいのでしょうか？」

何を当たり前の事をという感じで室戸次官は笑って出てゆく。

後ろ姿からこんな声を残して。

「我々の正義はこの国の法が保証している。」

それを信じられないならば、この国の神様でも信じてみるといい。

最近降臨したそうだから、聞けば答えてくれるかもしれんぞ」

と。

会議室を出た所で、一人の官僚が俺を待っていた。

次から次へと厄介事がやってくる気がしたが、これも偉くなった宿命だろう。

「超常現象研究所の小林と申します。」

冬木市で見つけられたゲートの開放についてお話が……」

## ターミナル開発 その1

女神転生には『ターミナルシステム』というものがある。

開発者の一人であるステイブン曰く、離れた場所をワープで繋ぐ転送装置の事なのだ、これが魔界につながってしまつて、というのが物語の背景にある。

その技術を応用して作られたのが『悪魔召喚プログラム』という訳だ。

そんな技術も闇鍋世界と時間経過によつて、ついにある種のタイムマシンにまで進化した。

FGOが使っているコフィンシステムがそれだ。

もちろん、このあたりがバレると色々とまずいので俺ですら口を噤んだ一件だが、この木林はそれによりにもよつて触れようとしているらしい。

「ご存じかと思いますが、悪魔と呼ばれる存在が情報生命体であるという理論によつて、悪魔召喚は飛躍的に進歩し、悪魔絡みの犯罪も多発しております。

ですが、我々はこの理論から次の疑問を感じざるを得ませんでした。

つまり、『人は情報生命体になれるのか?』という点です」

根が同じ技術だから、その疑問はある意味当然と言えよう。



そして、ワープ技術が実現化すれば、一気に世界の覇権を握ることも可能になるだろう。

この技術は本気でパンドラの箱なのだ。

「おっしゃることは分かります。」

それが冬木市のゲートとどう話が繋がるのですか?」

己がつけている眼鏡に手をかけながら木林は続きを話す。

この木林ノリノリである。

「はい。」

現在、この理論は悪魔召喚プログラムの実現まで進みましたが、次の段階である『人間の情報生命体化』の目処が立っていませんでした。

ですが、冬木で見つかり封印されたゲートは、現在世界唯一の時空移動が可能な次元の歪みであると私は考えています」

俺は黙り込む。

この人、IQ170の天才だったな。

その才能を超理論にばっか使っていったが、その超理論が跋扈するこの闇鍋世界だと水を得た魚のように生き活きしてやがる。

「このゲート理論が確立するならば、人類は新たな段階に歩みを進めます。」

私は、このチャンスを逃したくはないのです」

「ですから、その話に私がどう絡むのか、おっしゃって頂かないと」

仕方ないので、俺の方から話を振る。

木林はそれを待っていた。

「あのゲートの封印、その責任者は貴方じゃないですか？

だから、私は貴方の許可をもらいに来ているのです」

なにそれ初耳である。

あのゲート封印は、アマテラス様が呼び出した八衢比売神を俺と契約し……あ。

たしかに責任者俺になるわ。

「私としては、わざわざ開けて危険を招く必要はないと思っただけです」

「入即出さん。」

貴方をはじめとした上のお歴々が、何かに怯えるかのように早急に軍備を整えているのは理解しています」

汗が頬を垂れる。

この人は何処まで掴んでいるのだ？

それがわからないから、俺は黙らざるを得ない。

「人間相手だったら、ここらまで急ぐ必要はない。」

ハルマゲドンが迫っているのでしょうか？」  
言葉に詰まる。

「「な、なんだってー！」」と言えたらどれほど楽なことか。

彼のとんでもない理論はこつちの隠していたことを完璧に見抜いていた。

時は世紀末一歩手前。

ノストラダムスが華やかなりし時である。

「そのお話は誰かにしましたか？」

「鼻で笑われますよ。」

まだ、囁かれている自衛隊の不穏な動きの方が信憑性があるでしょうな。

ですが、そういう混乱が発生した後ではもうあのゲートは調べることはできないでしょう」

木林は力説する。

その言葉の力に飲まれなかったと言えれば嘘になる。

「今しかないのです！」

今ならば、まだなんとかあります。

ハルマゲドンが発生した時に、あのゲートを開けるのはそれぞれ不可能だ。

政府組織が機能して、各勢力からのフォローが期待できる今しかあのゲートを調査す

る時間は無いです!!」

「それがパンドラよろしく災厄を撒き散らすものだとしても?」

俺の確認に木林は嗤う。

それは自説を顧みられなかった皮肉からか、それが現実になろうとしている世界へか。

「現在、世界的大財閥のアーカムが日本の龍脈について調査しているのはご存知ですか?」

アーカムは貴方が関与した聖杯戦争に重大な関心をよせています。

ワープによる転送には莫大なエネルギーが必要で、そのエネルギー源として龍脈を考えているのではと私は考えているのです」

若狭湾の原発を利用したレールガン規模のエネルギーを常時維持できるのならば、あのゲートが安定化したのもある意味納得がいく。

天橋立というパワースポットのあるあの場所は、日本の霊脈のラインの一つが走っている。

そんな事を考えていたら木林が冗談を言う。

「それに、パンドラの箱ですら希望は残っていた。

未来がハルマゲドンならば、希望に縋つても人類存続を願うのは間違っているの

「しようか？」

彼を放置するという選択も無い訳ではない。

だが、それで待っているのは、彼の身の危険だろう。

ゲート転送システムは魔法側ではほぼ完成しているし、この世界にもステーブンプンが居るのは俺自身が接触している。

できることがわかつているものを止めることはできない。

「分かりました。」

私の管理下という条件でプロジェクトチームを発足させましょう。

ですが、これを行うともう戻れませんか？」

俺の脅しにも木林は通じなかった。

代わりに彼は俺に手を差し出す。

「戻れない？」

人は前に進むことしかできないんですよ。

そうやって未来を切り開いていったんです」

木林の手を握り、俺は苦笑する事で彼の言葉に応えた。

## ターミナル開発 その2

「君も中々の厄介事を持ってきたものだ」

室戸次官は、木林の持ってきたプロジェクトチーム案を見て苦笑する。

それがどれだけ厄介なのかを理解しているからの苦笑である。

俺も同じ顔をしていた。

魔法側のゲートシステム及び、ターミナルシステムの全資料をこの場で見せられた隣りにいる木林は今更顔が青くなっているが、知ったことではない。

「どうせ誰かが開ける。パンドラの箱です。」

我々が開けても問題はないでしょう?」

「開けて貧乏くじを引いた場合は?」

「誰が開けても世界情勢が変わります。」

それなら、開けたほうがいいでしょう?」

説得材料はあった。

ターミナルシステムの持つ特性は、そのまま管轄の違いをあらわしていた。

「このまま木林さんが開けたら、文部科学省が手柄を持っていきます。」

そして、ターミナルシステムは通信だから、絡むのは現郵政省の管轄。

通信行政は内務省が狙っていた場所ですよね？

ゲートシステムは英国に現物があり、その前段階のレイシフトは理論がほぼ完成しています。

この動きを現覇権国家の米国が座視するとお思いで？」

「英国や米国と組むという選択は？」

「ありでしょうが、ただ頭を下げるのは芸がないでしょう？」

このプロジェクトは米国及び英国との覇権争いに我が国が勝つ為のプロジェクトではなく、両国と手を組む為の材料として外交的に提供する事を目的としています。

それに手を組んだら外務省が出しやばってきますよ」

室戸次官はため息をつく。

デメリットが甚大過ぎて、手を引いても自分にダメージが出る。

だったら、こっちで手を出して主導権を握ってしまう方がまだメリットが発生する。

「好きにしまえ。

とはいえ、定期的な報告は届けるように」

そう言って、承認の判子を押したのだった。

「で、何時冬木に向かうのですか？」

室戸次官の部屋を出た後、額の汗をハンカチで拭きながら俺に尋ねる。

俺は承認の判子が押された書類をひらひらさせながら木林に言う。

「その前に、できる事はしておいておこう。」

怪しいプロジェクトだから、良い報告は早いうちに次官にあげておきたいからな」

という訳で横須賀港。

久しぶりに海自服を着た感じを堪能しながら俺は叢雲に告げた。

「じゃあ、やってくれ」

「わかったわ。」

「いくわよ！」

叢雲のメンタルモデルの解除と再展開。

中の乗員等は避難させている。

その上で再展開時に何が残り、何が消えているのかを確認するのがその良い報告の正体だ。

なお、試験用にハイデッカーとオイランロイドを乗せている

1 基本装備のみそれ以外は消失



2 基本装備に追加兵装も残る燃料・物資・弾薬はそのまま

3 →十人員も残るが、艦内時間は外と同じ

4 同上

5 同上

6 同上

7 基本装備と追加兵装が残り、燃料弾薬は初期満タン状態に回復。

8 →十人員も残る、艦内時間は同じ

9 →十人員も残る、艦内時間は停止

10 何か増えてる

結果 10 何か増えてる

「マスターくん。

ちよつといいかな？」

万一のことを考えて、艦内にセンサーを仕掛けていたダ・ヴィンチちゃんが呆れ声を  
だす。

叢雲と木林を連れてそのモニターを見てみると、何か反応が増えていた。

「場所は冷蔵庫なんだけどさ」

その一言で察する俺と叢雲。

仲良く額に手を当てて空を見上げる。

世間はもう夏だが、多分冷蔵庫の中はとても寒いのだろう。

という訳で、準備を整えて冷蔵庫のドアを開けた。

「くろまくー」

「あーレティだー！」

「ヒーホー♪」

あの冷蔵庫、最後にはキングフロストでも出してくるんじゃないだろうか？

「再展開後のチェックだけど、あの冷蔵庫以外は異常は見られないな。」

それと、解除時の時間をオイランロイドの体内時計で確認したけど、外の時間と同等に流れていた。

ハイデッカーのボディ・メンタルチェックもさせているけど、問題はなさそうだね」

叢雲の食堂にホワイトボードを持ち込んで、艦内チェックの報告をするダ・ヴィンチちゃん。

まじものの大天才に木林もたじたじどころか、負けていないのが木林の木林たる所だろうか。

「この資料にあったレイシフトは適正者のみができると書かれています。」

という事は、もし、叢雲さんがこの適性者だった場合、大規模の物資と人員を連れて探検に行ける事を意味します」

「あ。

それなら問題ない。

「叢雲じゃなくてマシユの方が適正者だ」

元がカルデアのデミ・サーヴァント。

レイシフトができない方がおかしい。

ロリンチちゃん懐かしそうに苦笑する。

「君たちがあの時、この装備で居てくれたらどれほど楽だったか」

俺でも思いつく、マトリョーシカ展開。

物資と人員満載の叢雲のメンタルモデルを解除して、物資と人員満載のマシユ風に乗  
り、マシユ風もメンタルモデルを解除してレイシフト。

逆に展開すればレイシフト先に、二隻の護衛艦とその乗員が展開されるという戦法は  
凶悪以外の何物でもない。

「けど、いいの？」

「この二人をここから動かさしちゃって」

ステテンノの言葉に頭を抱える俺。

タンカージャック事件から、海軍戦術システムの脆弱性が暴露されて、護衛艦の全艦艇のシステムの再チェックが進められている最中だった。

そのため、俺が雇った『スプーキーズ』は現在もここ横須賀でど修羅場である。

俺は、木林に次の課題を告げた。

「という訳で、この二隻を動かすために、替わりの戦力を確保するのが次の仕事だ」

## ターミナル開発 その3

現在の横須賀基地で安心して出撃できる戦力は、『みらい』『叢雲』『浜風』の三隻のみである。

先のタンカージャック事件での海軍戦術システムのクラッキングは、それほど深刻な影響を海上自衛隊に与えていた。

そんな状況下で、探索のために『叢雲』と『浜風』を引き抜くことはできないのは分かっている。

という訳で、手を打つことにした。

「第65護衛隊の『いそかぜ』と『うらかぜ』を使えるようにしましょう」

この二隻のうち、『いそかぜ』は、ミニ・イージス艦として改造が進められており、たちかぜ型護衛艦『うらかぜ』の方は逆に米国の規制で、戦術データ・リンクに対応していない古いシステムが存在していた。

「応急対策として、クローズドシステムにして外からのクラッキングを防ぎます。

『いそかぜ』には学園都市からもらったミサイルを搭載し、『うらかぜ』はその護衛として役割を分ければ当座はしのげますよ」

俺の説明に未だ俺の上司扱いになつてゐる咲川海将補が渋い顔を隠さない。

ある意味当然で、内務省主導のプロジェクトに可動戦力が奪われる事になるからだ。代替案は代替案としてありがたく利用させてもらうが、現状では俺を手放したくないのはとてもよくわかる。

「本当にそのプロジェクトに君が絡む必要があるのかね？」

「ないのですが、来年の省庁再編で元の組織である護国機関ヤタガラスが宮内省に吸収されます。」

その時、私の肩書が宮内省技術総括審議官に変わるから、その箔付けですね」  
政治がわからないと、将官にはなれない。

技術統括審議官の意味を咲川海将補が理解できない訳ではないだろう。

俺は咲川海将補の顔を見ながら、補足を加える。

「海自から離れるつもりはありませんよ。」

叢雲達も居ますしね。

とはいえ、元の所属から釘を刺されましたね。

お役所仕事の辛いところですよ」

「君がそこまで偉くなる事は、こちらでも想定はしていた。

けど、君を海将まで上げるのには市ヶ谷から激しい抵抗があつてね。」

君の上司はよほどのやり手らしいな」

「室戸文明。」

次期宮内省事務次官が今の私のポストですな」

「なるほど。あの人か。」

彼は内務省でも名が轟いたワルだよ」

そこで二人して笑う。

霞が関の話を横須賀でどうこうできるほど、この国の官僚組織はいい加減ではない。

だから話は、俺が離れた際の保証に移ってゆく。

「君が操る艦娘が、自衛官にも居ると話が楽なのだけどね」

「こればかりは適正ですからね。」

そういえば、自衛隊での適性検査はしていませんでしたな。

やってみますか？」

海上自衛隊艦娘適正者 9人

内幹部階級者 1人

召喚艦娘

1 戦艦

- 2 空母
  - 3 重巡洋艦
  - 4 軽巡洋艦
  - 5 駆逐艦
  - 6 護衛艦
  - 7 潜水艦
  - 8 その他
- 結果 1

という訳で、数日使って海上自衛隊の全員の適正検査を行うことに。

適正者は9人居て、そのうちの幹部階級者は一人しか居なかった。

なお、8人については呼び出す為にも幹部講習を受けさせることが決定するが、9人全員が艦娘を呼び出せるかどうかはまた別問題である。

「年寄りをこんな所に引つ張り出すんじゃないよ」

「ご足労をかけて申し訳ありません。海将補」

「そう呼ばれるのも、もう残り少ないのだけどね」

敬礼しながら俺は直感で悟る。



あ、この人は呼び出す。

それもろくでもないやつを。

俺はできるだけ平静さを保って、艦娘召喚の儀式を行った。

それは別世界であっても、必然であり当然の絆。

「大和型戦艦、一番艦、大和。

推して参ります！」

黙り込む俺たち三人。

ふと、提督となった海将補が声をだす。

「宇宙戦艦かな？」

「だったら嬉しいのですけどね。

藤堂進海将補。

咲川司令。

場所を開けておいてください。

およそ70000トンのデカブツですよ」

藤堂海将補と大和を連れてホテル業魔殿へ。

御魂合体を終えて横須賀にとんぼ返りすると、ぽっかりと大和用のスペースが開けら

れていた。

自衛隊員だけでなく、隣の米軍も成り行きを見守っていた。

「じゃあ、船体を展開してみてください」

「どうすればいいのかな？」

入即出海将補相当官？」

「大和にご命令していただければ」

「では頼んだ」

その瞬間、棧橋にもかかる波の中からおよそ70000トンの巨体が姿を現す。

俺たちが見慣れた大和では無く、湾岸戦争を戦った巨大イージス戦艦としての姿で。

あ、経理担当がぶっ倒れてる。

見なかったことにしておこう。俺の胃のためにも。

その巨体は当然のようにマスコミに嗅ぎつけられて大騒動になったのは言うまでもない。

なお、出したままだと資材が飛ぶので普段はしまっておいたら良いとアドバイスしたら、経理担当から涙を流して手を握られた事をここに記録しておく。

これで東京湾は安全だな。

……使った後の費用については見ないことにする。

おまけ

実はもうひとり適正者がいる。

タイムトラベラーと化した草加拓海少佐である。

召喚艦娘

1 戦艦

2 空母

3 重巡洋艦

4 軽巡洋艦

5 駆逐艦

6 護衛艦

7 潜水艦

8 その他

結果 5

1 吹雪

2 叢雲

3 漣

4 電

5 五月雨

結果 2

「特型駆逐艦、5番艦の叢雲よ。

あんたが司令官……なんで私がもう一人いるの!?

しかも、無駄にお肉がついて何かムチムチしてるし!!」

「酸素魚雷を食らわせるわよ!

ま、せいぜい頑張りなさい。私」

もはや、母娘にしか見えないと突っ込まないだけの自制心があつた事を神に感謝した。

俺も突っ込まなければ酸素魚雷を撃たれない。

「草加少佐。

貴方はこれからどうしますか?」

「帰れるものならば、帰ってこれから起こる悲劇を回避したい所です。

それが、たとえこの歴史を変えることになっても」

それはそれで構わない。

どうせ歴史が変わっても、観測者が俺である以上草加少佐が俺の居る舞台から降りる

だけの話だ。

「いいでしょう。」

帰る手段を現在探している所です。

ですから、その間だけでいいので、この国をその艦娘と共に守ってくださいませんか？」

「たとえ時間が違つても、この地は私達の故郷ですよ。」

故郷を守るのに理由が要りますか？」

あの時代の人達の価値観はこんな感じだったのだろうか。

とりあえず、これで俺の叢雲と浜風を引き抜く事ができるようになった。

なお、草加少佐の『叢雲』と区別をつける為に、俺の叢雲は『叢雲改二』と呼ばれるようになる。

## ターミナル開発 その4

海自の艦娘適性検査の間、先に冬木市に入った木林はできる事をという事で無人探査機での調査に取り掛かっていた。

プロジェクトがプロジェクトなので、関東魔法協会の葛葉刀子を護衛に雇った上に、関東魔法協会にも協力を要請している。

「この手のは秘密裏に進めれば進めるほどリスクが高くなる。

ある程度味方に取り込める勢力にはそれ相応の飴を与える方が話は進むさ」という俺の方針で、時計塔と聖堂教会の誘いは断ることに。

同じパターンで今回は別勢力とも手を組んだ。

「どうも。

今回は我々との話を選んでいただきありがとうございます」

「是々非々なのをお忘れなきように。

今回はアーカムより貴方がたを選択したのは、そういう背景という事ですので。

『トライデント』のラリー・マーカスン大佐」

巨大軍産複合体。トライデント。

その一角である高隅財閥はこの日本が本拠である。

木林は天才ではあるが、だからといって政治的根回しが上手い人間とはお世辞にも言えず、このプロジェクトは発足当初から各勢力に注目されていたのである。

で、俺が責任者に就いたことで、一気に介入の圧力が増した。

そんな中で、この国の中枢と繋がり、この国の発展に寄与し続けていた高隅財閥のネゴシエートに政府がかなう訳もなく。

あのイージス戦艦やまとの諸経費をトライデントが支払い、代わりにあの船の調査許可を与えた縁で、俺にまで話を通してきたやり手がこのラリー・マーカスン大佐である。日米両軍に影響力を発揮できる軍産複合体だからこそ、敵に回せない。

「まあ、今のアーカムにはあなた方の話を受ける余裕があるかどうかわかりませんがね」

いけしやーしやーと言い放つラリー大佐だが、そのアーカムは現在戦力を中東の地に重点的に送り込んでいた。

リバースバベルという悪魔との交信をする施設を巡る争いに巻き込まれたのである。

「それに、アーカムの場合、このプロジェクトの中止を申し込む可能性もありましたからね。」

ですが、我が国は我が国の国土で他勢力の非合法活動を許容しません。

その点は重々ご留意ください」

少し前に、アーカムの東京支社がテロ組織に襲撃される事件が起こり、それに前後して米軍基地で爆発事故が起こった。

そのテロ組織の正体も俺は知っている。

米軍特殊実験部隊『COSMOS』。

そして、その部隊のスポンサーも実はトライデントだったりするので釘を刺すのを忘れない。

「まあ、彼らの立場なら言いかねませんな。

忠告は耳にとどめておきますが、それでも我々と手を組んでプロジェクトを進める理由は？」

超古代文明の遺産を封印しあらゆる権力から守護することを目的としているアーカムから見れば、このターミナル開発は文字通りパンドラの箱だ。

かといって、敵対したくはないのでアーカム側にはトライデント側の情報をこそっと提供していたりする。

ミサイル誤射事件から始まった対米不信は、タンカージャック事件で高まるばかり。

そんな中、米軍特殊部隊がテロ同然の活動を行ったなんて話を公にできる訳がなかった。



メガコーポ同士の壮絶な争いに巻き込まれた形になるが、両方とも綺麗じゃない所まで知っているなんて言える訳もなく。

「あの人の熱意に押された。

そういう事しておいてください」

話をそらすために、俺は米軍横須賀基地のモニターから冬木の封印されたゲートを見る。

モニターの中の木林は八衢比売神と話をして、通信越しに俺の了解をもらってゲートの封印を解く。

そして、無人探査機をゲートの中に入れた。

無人探査機のモニターは、こちらのモニターにも繋がっていた。

「……これは、また独創的な世界ですな」

ラリー大佐がめずらしく間の抜けた声をあげる。

その場所は中央の平原を中心に5つの区画に分かれている。

お菓子の国、大海原、廃墟都市、雪原、そして水晶の城。

何よりもそれらの世界が画像では灰色になっており、まるで廃墟の遊園地とも言わんばかりのその景色を俺は知っていた。

FGOイリヤコラボ。魔法少女たちの国。

そのの意味を俺は嫌でも悟らざるを得ない。

多分古今東西の魔法少女はあの場所で召喚可能となるだろう。

「……失礼。」

私だ……」

ラリー大佐が離れて報告を受ける。

おそらく、リバースバベルの話が片付いたのだろう。

そうなると次はルーマニアのライカンスロープか。

あつこも、この闇鍋世界でどう変わっているのやら。

「失礼しました。」

調査の方はこのまま続けるのでしたら、費用は我々トライデントが提供しましょう」

「その分、このゲートの先にある世界の調査資料の提供とターミナルシステムの開発

データの提供ですよね？」

もちろん、忘れていませんとも」

横須賀米軍基地から帰る途中、ついてきていたステンノが何となく呟く。

「けど良かったわね。」

ゲートの向こうがあれで」

「たしかにな。

あれだったら、笑わないでいるのが難しいしな」

「あれって何よ?」

同じくついてきていた叢雲が尋ねたので、俺とステンはそのアレを声に出した。

「チエイテピラミッド姫路城」

「……?」

口に出して思い知るが、あれがある可能性もあるのか。

その時俺とステンはそれを指さして笑らないでいられるとは思えなかった。

## ターミナル開発 その5

「……出撃するわー！」

ターミナル開発で叢雲改二と浜風を冬木の方に送る為に、横須賀の戦力強化の為に来てもらった大和と叢雲。

叢雲の方は通信などの近代化改修に入ってもらい、大和の確認のために日帰りの訓練航海を行う。

参加艦は以下の通り。

第72護衛隊

司令官 藤堂進海将補

『大和』 艦長 大和撫子一佐相当官

副長補佐 東郷守一佐

第70護衛隊

司令官 入即出やる夫海将補相当官

副官 恵美ステノ三佐相当官

主席幕僚 美野原信弘一佐

『叢雲改二』 艦長 東雲叢雲二佐相当官

副長補佐 新島義則三佐

『浜風』 艦長 マシユ・キリエライト二佐相当官

副長補佐 フランシス・ドレイク三佐相当官

要するに艦娘のみのお出かけだが、横須賀を守る大和がどんなものかのテストという訳だ。

なお、半月ほどで旧システム積み替えが終わる『うらかぜ』の訓練は『みらい』が行う予定である。

「ちよつと！」

速いわよ!!」

「先輩、先に行きます」

浦賀水道を抜けて、試しとばかりに全力疾走をする大和の速力は32.5ノット。

たちかぜ型の叢雲は27ノットしか出ないので追いつけないのだ。

なお、浜風は35ノットで昔の吹雪型船体だと38ノットまで出せる。

かくして、浜風、大和、叢雲の隊列になってしまい、戦艦の先導は駆逐艦の仕事と張

り切っていた叢雲はまさかの最後尾でふてくされる。

「まったく、ボイラーだけ昔のにすればよかったかしら……」

装備更新で武器などは変更できたから、ボイラーもできなくはないだろう。

とはいえ、扱う海自隊員はこのボイラーの方が馴染むのでそのままにしていたのだ。

「まあ、古いやつにしてもいいんじゃないか？」

どうせ、ほとんどがハイデッカーの隊員になるからな」

大和の乗員は定員で1500人。

俺たちの船ですらハイデッカーやオイランロイドで運用している今の海自にそれだけの定員を確保できる訳もなく。

海軍戦術システム更新で動けない船から隊員をかき集めて今回の航海は運用されているが、その乗員の殆どはハイデッカーやオイランロイドになる予定である。

彼らは洗脳装置で教育されて出荷されるから、旧軍関係者からその機関技術を習得して、それを再度洗脳装置で再教育すればいい。

「二応無理をすれば300人程度で動かせますし、艦娘ですから、提督一人でも十分なのです」

という大和の意見はその主である藤堂進海将補に却下される。

「それはダメコン要員がいなくなる事を意味している。」

継戦能力を考えれば、定数の確保は絶対条件だ。

現状、関東はこの船と『みらい』で守らねばならないのだからね」

費用はデータ提供の取引で『トライデント』が持つてくれるのだからと遠慮なく人員を定数一杯まで用意させるあたり、この人もただの軍人ではないらしい。

この人のえげつない所は、費用をトライデントが持つからと、うちとおなじく対魔忍クローンも大量発注した所にある。

「中が迷宮みたいな大和の中で、すばやく動ける連中はダメコン時の切り札になる。

どうせトライデントが払う金だ。

派手に使おうじゃないか」

そうやって用意させた対魔忍クローンは100体でおよそ300億円なり。

F-15J三機分と言えば安く聞こえるから不思議である。

彼女たちも洗脳装置にて再教育を行って下士官として大和に配備される予定である。

「訓練海域に到達しました。

これより訓練を開始する。

仮想敵は、タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦相当の敵艦1隻、スプルーアンス級駆逐艦相当の敵駆逐艦1隻、ロサンゼルス級原子力潜水艦相当の敵潜水艦1隻だ。

敵艦隊は東京に向けてミサイルを撃つと考えられている。

敵ミサイルの阻止が我が艦隊の目標である」

タンカージャック事件は良くも悪くも自衛隊に衝撃を与えた事件となった。

対米不信の加速もそうだが、海軍戦術システムがクラッキングされて味方からミサイルが飛んできた事で、最悪のケースとして同士討ちまで訓練に入れなければいけなくなつたからである。

今回の訓練は、大和を使った敵ミサイルの東京発射の阻止。

敵艦隊の撃破は別の部隊がするという事で、俺たちの叢雲と浜風が抜けても大丈夫かというテストでもある。

「敵潜水艦を発見したわー!」

敵洋上艦はレーダーで確認済み。

向こうもこちらを発見している。

そんな中でまずは叢雲が敵の潜水艦を発見する。

「敵艦ミサイル発射!」

ミサイル数は100発以上!

こちらに向かつてきます!!」

「敵潜水艦の魚雷発射管開きました!」

魚雷発射!!」



「全兵装自由！」

一発たりとも当てるなよ!!」

もちろん、訓練だから本当に撃っているわけではない。

それに合わせた機動と発射訓練をおこなっているのだ。

その巨体と強力な武装で、大和は敵のミサイルと魚雷の迎撃にハマる。

いや。

ハマりすぎていた。

「戦術コンピューターにウイルス反応！」

「戦術コンピューターを落とせ！」

各艦手動で敵ミサイルと魚雷を迎撃せよ！」

藤堂海将補から訓練前に言われた、

「訓練だからこそ最悪の状況を体験させておきたい」

という最悪の状況で叢雲、浜風、大和は個々ではできうる限り奮闘していた。

そして、こちらに向かっていたミサイルと魚雷は全弾撃破するという奮闘は讃えられ

ていいだろう。

「敵潜水艦がミサイルを発射！」

トマホークです!!」

とはいえ、洋上から発射された12発のトマホークを撃破できるかどうかは別問題である。

結果から言えば、このトマホーク撃破に失敗する事になった。

「今回の訓練では貴重な戦訓を得られた」

その日の夜、横須賀基地に帰港後に忘れないようにという事で始められた反省会だが、藤堂海将補の挨拶から始まり、大和が悔し顔で意見を言う。

「状況が少しきつかったのではないでしょうか？」

最後のトマホーク迎撃が失敗したのは、海軍戦術システムがダウンした後は艦娘大和が全部をコントロールしたために、タスク処理のオーバーフローが発生した為だ。

ミサイルと魚雷の迎撃に注力した結果、次に出たトマホークの迎撃が追いつかなかった。

艦娘の構造的欠陥でもある。

「今回の想定は、先日発生した八丈島沖のタンカージャック事件で起こり得た状況ではない。」

現代の海戦はミサイルが主流だから、その制御を奪ってしまつて、全部発射というのはありえる状況なんだ。

最初から、目標として東京に向けて撃たれるだろうミサイルの阻止は明言していた。だから、そのリソースを残さなかった時点でこちらの負けだよ」

「入即出海将補相当官。」

貴方が指揮を採ったならば、あのケースをどう対処しましたか？」

藤堂海将補が俺に尋ね、俺は頭をかいて苦笑する。

こういう時、きちんと教育を受けていなかった弊害が出る。

「反省になります、が、叢雲改二は対潜装備は充実していた。」

ミサイルと魚雷の迎撃をしながら敵潜水艦への攻撃をしていれば、少なくともあのタイミンクでトマホークは撃たれなかったのではと」

それをあの時指示できなかった俺の反省でもある。

なお、訓練後に美野原首席幕僚に教えてもらった正解だったりする。

「艦娘に頼るのはいいですが、彼女たちも限界がある。」

我々人間は彼女たちの負担を軽減する為に乗っているはずです。

それをこれから議論してゆきましょう。

今回は現状の材料で考えうる最悪の状況ではありますが、これから先、その上に行く状況が発生する可能性が高いと思っています」

「その上に行く状況とは？」

大和艦長補佐である東郷一佐が怪訝そうな顔で尋ねたので、俺はそれを口にした。

そもそも、俺達が横須賀を離れる目的が、その状況が起こる可能性を示唆しているのだから。

「何処からともなく湧いてきた敵兵による艦内襲撃及び制圧ですよ」

## ターミナル開発 その6

そんなこんなで、おれ達が冬木市にやってきたのは、演習から半月後だった。

今回は叢雲とマシユの船体を解除して、新幹線と在来線を乗り継いでの冬木入りである。

日本の鉄道網は実に優秀である。

その日は隣の舞鶴基地にて宿泊し、翌日から調査に入る。

「お待ちしておりました」

木林と握手して、現状で判明している事の報告を受ける。

ゲートそのものは安定しており、今までの調査で何か出てくるというものは無かったという事。

時間もこの世界と向こうの世界で連動しており、ウラシマ効果みたいなのは今の所発生していないという事。

移動は問題なく行われ、機械、ハイデッカー、オイランロイド、木林自身も移動してみた事。

真ん中の平原から離れると謎の生命体の襲撃があり、そこから先の調査は中々進んで

いないという事。

その襲ってくる敵の中には人型の敵も居たという事。

「シヤドウサーヴァントだな」

撮影された人型の敵の写真を俺は断言する。

イベントも終わった灰色の世界でただ来訪者を待つばかりの彼らに少しばかり憐憫の情が湧くが、ひとまずおいておいて俺は木林にターミナル開発について尋ねる。

「ターミナルシステムは完成できそうかい？」

「渡された資料を見ているんですが、メガロセンブリアのゲートはオーパーツで維持が精一杯。」

システムの解析まで手が回らないし、変に弄つてゲートが使えなくなると大変なことになるので触らぬ神にといいやつになっていきますな。

また、魔法関係者達が住む世界はどうも我々の世界と空間軸が少しずれているという事がわかりつつあります」

「空間軸が少しずれている？」

俺の質問に木林は両手を合わせてそのまま手を離す。

「合わせ鏡の世界はご存知ですか？」

「あの果ての先に、別世界があるかもってあれかい？」

「ええ。

魔法世界というのは、そのあわせ鏡の一枚先か二枚先の世界と考えていただけるとほんの少しの差異しかないパラレルワールド。

それゆえに、世界の抑止力は修正のみでそれを許容する訳だ。

まあ、この世界が闇鍋というとても許容範囲が広い世界であると知っているのは俺だけなのだが。

「そちら側が異界として言われているものも多分そういうものであると私は考えています」  
なるほど。

ある程度の解析は進んでいるみたいだ。

「コフィンシステムについては？」

「難航しています」

小林はあっさりと認める。

まあ、簡単にできるのなら苦労はしない訳で。

「まず、霊子の存在と定義に難航しています。

量子力学で応用できるかをトライデントの研究者と話している所です」

霊子の存在を量子力学で説明しようとしているあたり、科学と魔法が交差しようとし

ているのだろう。

そこからスタートしているので、その歩みは遅いが同時に着実にという所か。

「じゃあ、ひとまずはこのゲート先をちよつと大きな異界として定義して管理しようか」

「ちよつとした市ぐらゐの大きさがありませんが、異界というのはこんなものなので？」

「それぞれ千差万別だよ。」

小さなのだと部屋ぐらゐから、大きなのだと星一つまである」

話しながら、俺達はそのゲートの所までやってくる。

周囲に色々な機械が取り付けられているが、ゲートに何か変化らしいものはない。

「お待ちしておりました。主様」

実に神々しくエロい八衢比売神が俺たちに頭を下げる。

主様？

振り向くと、めずらしく真面目モードのアマテラス様が。

「この先に、私に助けを求めている声が聞こえるのです」

こういう時のアマテラス様を止められるわけもなく、巫女装束の皇北都と鬼咒嵐と天ヶ崎千草の姿がその神々しさに拍車をかける。

「まあ、行ってみれば分かるさ」

そして、俺達はゲートを潜った。



その先の世界は色があった。

「何だと!？」

世界に……色がつ!？」

驚愕する木林をほおつて置いて水晶宮に進もうとするアマテラス様御一行。

さすがに歩くのは効率が悪いので、マシユ風こと浜風を穏やかな海に実体化させ、更に叢雲を実体化させると、そこから切り離されて草地に進んできたのはロリンちゃん  
が運転する虚数潜航艇シャドウ・ボーダー。

こういう時に探索用の車が使えるのは実にありがたい。

「マスターくん。」

何か飛んできているけど？」

「マシユ。」

モーさん。

クー・フリーンの兄貴。

迎撃準備」

俺の指示で三騎が外に出て迎撃をしようとしてクー・フリーンから声が届く。

「ちよつと待った。

マスター。

あれ、あんたの所のちびっこじゃないのかい？」

「確認する。」

俺が襲われるまで手を出すなよ」

ハツチを開けて外に出る。

その目に飛び込んできたのは、唇だった。

「~~~~~♥

はーっ♥魔力供給完了♥

ごちそうさまでした♥

マ・ス・ター♥」

「やる夫。

そのチビっ子。誰？」

目の据わった叢雲の台詞にかちんと来たらしい褐色の小悪魔は遠慮なく宣戦布告する。

「あら？」

分からないのかしら？

おばさん」

「酸素魚雷をブチ込むわよ!!」

「落ち着け。叢雲。」

俺がおっぱい星人というのは知っているだろうが！」

「あらあら。」

じゃあ、私との愛の日々は嘘だったというの？」

面白半分でステンノが乗ってしまい、見事に大炎上。

あのアマテラス様が仲裁するという珍しいシーンによってこの場が収まるまで、叢雲とクロエ・フォン・アインツベルンの罵り合いは続くことになった。

「絶対にマスターが来ると信じていたわ。」

お願い。

美遊を助けてあげて」

水晶宮に捕らわれていたのは美遊・エーデルフェルトだった。

いや、守られていたというべきか。

彼女は母親である朔月陽代子と共に水晶の中で静かに眠っている。

「……これは、生きていますか!?!」

木林が驚くがそりゃそうだろう。

もつとも俺はそれどころではなかったのだが。

アマテラス様召喚という形で冬木の時空を歪めた自覚はあるが、その結果原作で起

こつた巨大災害からこの母娘を逃すことに成功したという訳だ。

彼女は生まれながらにして完成された聖杯。

別の言い方をするならば、人の願いを無差別に叶える神の稚児。

その神であるアマテラス様が呼ばれたのも当然なのだろう。

「生きているし、助けるんですよ」

それは、この闇鍋の観測者である俺の義務だろう。

『FGO』のクロエ、『プリズマ・イリヤ』の美遊、『Fate／stay night』のイリヤ、世界軸が微妙に違うことになった彼女たちが笑えるかは、観測者である俺の手にかかっているからだ。

そこで気づく。

この世界に、アイリスフィールもいるかも知れないと。

## プリズマ・コース探索 その1

とりあえず、美遊・エーデルフェルトと朔月陽代子の入った水晶を回収して叢雲に帰還する。

アマテラス様が助けようとする以上放置はまずいし、あの場所でのこの水晶を調査するより工房がある叢雲まで戻ったほうが安全だという意見にアマテラス様も納得してくれたのだ。

その一方で他の場所の探索も進めている。

マシユヤステンノだけでなく、モードレッドやクー・フリーンやドレイク船長が居るので大概の敵は排除が可能だろうという見込みで探索班を編成する。

「私も参加するわよ。マスター♥」

ノリノリで手を挙げるクロエにムツとする叢雲。

中々見れない光景でちよつと楽しい。

探索班

モードレッド レベル90

クロエ レベル90

クー・フリーリン レベル43

ステンノ レベル100

叢雲 レベル175

マシユ レベル80

クー・フリーリンのレベルが低いが、足を引つ張ることはない信頼できるのがこの槍  
兄貴の凄い所で、やばくなっても撤退できる生存力が彼の売りだから情報は持つて帰っ  
てくれるだろう。

「で、何処を探索するんだ？」

マスター？」

戦いたくてノリノリのモーさんに一番確保して欲しい場所を俺は告げる。

「書架の国の大図書館だ」

書架の国の大図書館まで行く場合、目抜き通りを抜ける必要がある。

バンシーと魔術書が襲ってくるが、なんなく排除して大図書館へ。

「開かないわね？」

「下がってな。」

調べてみる」

クロエがドアに手をかけるがびくともしない。

クー・フリーンがルーンを刻んだ石を出してきて、探索のルーン魔術をかける。

そういうばこの人、魔術も使えるんだよなあ。

メガテン仕様だから、タル・カジャも使えるし。

カルデアにはどんな種火を輸出してもらわないと。

「誰です!？」

図書館からの声ではない。

マシユが俺の前でシールドを掲げて、叢雲が艦娘装備の12.7cm連装高角砲（後期型）を向けるが、俺がそれを止めさせる。

シールドで視界を塞がれる前に見えた姿に思い当たるものがあるからだ。

「待てっ!」

手を出すなよ!!

こっちは悪意がある訳じゃない。

ここの主ではない、貴方の主人であるパチュリー・ノーレッジと話がしたい。

取り次いでもらえないだろうか？

小悪魔さん」

大図書館がそこにあるのなら、本の虫の魔法使いも寄ってくるのだろう。主の名前を出した事で小悪魔は驚き警戒はしたが、攻撃はしてこなかった。

大図書館の最深部。

イベント時はボスとして、マハトマ♀エレナが居ただろう場所にはうす高く本が積み、一人の少女が魔法の灯りで本を読んでいる。

俺たちへの敵意を隠していない小悪魔たちは警戒しつつも本の整理を続けていた。本を読んでいた少女がこちらに視線を向けた。

「何か用かしら？」

「この大図書館のかつての主を知っていてね。」

挨拶に来たら君が居たという訳だ。

パチュリー・ノーレッジ。

本を整理しているという事は、この本を君の図書館に運ぶつもりかい？」

観測者である俺のミーム汚染のせい、パチュリーのスタイルはMMDモデルである。

つまり、おっぱちゅりー。

「ええ。」



消えてなくなる世界ですもの。  
もらつて悪い？」

「いや。

本も喜ぶだろうよ」

適当に腰を下ろす。

聞き捨てならない事を俺は確認する。

「やはりこの世界は消えるのかい？」

「むしろ、残っているのが奇跡ね。

終わつた世界だから色すら無かつたのに、今はこうして色がある。

貴方。

「この世界の何なの？」

「強いて言うなら、観測者という所かな。

君の友人は元気かい？」

「レミイのことまで知っているのね。

彼女に勧められたのよ。

「この事を」

この時期はまだ紅魔館は外の世界のはず。

てことはルーマニア……あっ……

俺が察したのを見てパチュリーが笑う。

「外の奴らも私達を巻き込まないでほしいわね。

レミイと話していたけど、何処かい逃げ場所は無いのかしら？」

この世界も候補に考えていたけど、世界を維持するエネルギーが明らかに足りないのよね」

話していると、小悪魔が俺たちに紅茶とケーキを振る舞う。

毒は入ってなさそうだと確認してそのもてなしを受けることにした。

「ルーマニア革命が1989年。

その混乱は今も続いている」

「なら、まだマシンなのだけだ。

今、近くを魔女に狼男に吸血鬼もどきが軍隊を連れてパーティー中なのよ。

フランの事を考えたら逃げたくなるのも分かるでしょう？」

多分それスプリガンのルーマニアの話だな。

あいつら、基本自分のことしか考えないしなあ。俺たちもだが。

「だったら、良い逃げ場を教えるよ。

それで少し取引をしてほしいんだ」

「条件次第ね」

ここで俺が彼女に幻想郷の事を教えて、紅魔館が幻想郷にという流れなのだろう。

さすがレミリア・スカーレット。

こっちは運命を繋いできたか。

「っ!？」

子イヌ~~~~~!!!

「っ!？」

図書館から俺の頭目掛けて降ってきた司書姿サーヴァントの尻尾をクー・フリーンがギリギリで掴む。

ジタバタしているのがまた様になる小悪魔風司書エリちゃんを見てパチュリーが口を開く。

「ここで行き倒れていたのを拾ったのよ。」

ハロウィン衣装を着てね」

ああ。

あのエリちゃんはキャスターだから魔法少女カテゴリーに入れられたのか。

それはともかくとして、お約束を俺は口にした。

「何度も出てきて恥ずかしくもないんですか？」

## プリズマ・コーズ探索 その2

図書館にてハロウィンエリちゃんとパチュリーと出会い、話はこの世界の理に移ってゆく。

当然というか、やっぱりというか、エリちゃんはエリちゃんだった。

「聖杯？」

あるけど、これでしょ？」

当たり前のように出してくれるエリちゃんマジエリちゃん。

もはやエリちゃんには聖杯ゲッターの概念がついているとしか思えない。

パチュリーも聖杯と呼ばれる魔力塊を見て啞然としていたし。

多分、この世界に色がついたのは、このエリちゃんの聖杯のせいだろう。

聖杯とマスターが揃ったことで、イベントとして色がついたという所だろうか。

「入即出海将補相当官。」

「この少女達は……？」

意外に常識人の木林がひいている。

小悪魔やエリちゃんの羽や尻尾のせいだろう。

コスプレですと言えたらどれほど楽か。

「気にしたら負けだよ。木林さん。」

自己紹介がまだだったね。

入即出やる夫。

「この世界に縁のあった者だよ」

「パチュリー・ノーレッジ。」

魔法使いよ。

で、あなた達はどんな用事でこの世界にやってきたのかしら？」

「ターミナルの開発さ」

俺と七曜の魔法使いの会話に横から口を挟む木林。

「このあたりの柔軟性がこの木林をここまで連れてきたとも言えるだろう。」

「人を情報生命体にして別の場所に送り込むねえ……」

「皮肉にもその実用化のメドがつきつつあってね。」

その研究としてここにやってきたという訳だ。

この図書館には過去現在未来に至る魔法少女たちの記録が眠っている。

そのあたりから役に立つデータを拾おうと思ってるね」

話していた俺の背中にゾクリと悪寒が走る。

それを感じたらしく、叢雲やステンノ達も警戒しパチュリーも視線は俺に向けたままだが、小悪魔達が戦闘態勢を取っていた。

何も知らない木林のみが呆然としていた。

「パチュリー様。」

「ご無事でしょうか？」

不意に現れたメイド長にこちら側が手を出そうとするのを俺が制止する。

彼女も俺は知っていたからだ。

「大丈夫よ。咲夜。」

一応、お客人として扱って頂戴な」

「入即出やる夫。」

この図書館の元の主の知己でね。

会いに来たという訳だ」

パチュリーの説明と俺の挨拶に、咲夜と呼ばれたメイドは優雅に一礼する。

メイド長のその仕草が完璧で瀟洒に見える。

「これは失礼いたしました。」

わたくし、パチュリー様がお住みになっておられる紅魔館にてメイド長をしております

す十六夜咲夜と申します。

失礼ですが、先程のおぞましい気配については何かご存知でしょうか？」

「あいにく分からないというのが本音だ。」

「この世界には厄ネタが多すぎる」

ちらりとエリちゃんが持っている聖杯を見る。

これも厄ネタだし、現在叢雲につけられたダ・ヴィンチちゃん工房に置かれている水晶の中にある美遊・エーデルフェルトは特大の地雷だろう。

いざとなったら、この世界からの撤退も視野に入れないといけないなど思っていたら、小悪魔が来客者の名前を告げた。

「お客様がお見えになりました。」

時空管理局執務官のクロノ・ハーヴェイと名乗っておりますがどうなさいますか？」

「ここで登場するか。時空管理局。」

俺は両手をあげる。

「今の図書館の主は貴方だ。」

貴方の選択におまかせしますよ。

パチュリーさん」

「そうね。」

千客万来だけど、話を聞いてみましょうか。」



咲夜。

皆様の分の茶菓子を用意してくれないかしら？」

「かしこまりました」

お菓子の国に行けばそのあたり大量にあると思ったが、それを伝えるほど俺は無粋ではなかった。

クロノ・ハーヴェイは『リリカルなのは』のキャラではあるが源流の『とらいあんぐるハート』の『リリカルおもちゃ箱』に登場する。

なのは世界が独立した際に消えたキャラクターと想っていたが、こういう形で再登場したのは、時空管理局の設定がある程度固まったというのが大きい。

巡航艦に艦長が乗り、武装隊の指揮官が執務官と考えるならば、彼の登場は必然と言えよう。

女神様、キャラ検索で必死に探したのだろうなあ。きつと。

巨大なテーブルが用意され、その中央にパチュリーが鎮座し、右側に俺と叢雲とステインが座る。

残りの面子は戦闘態勢を維持するために後ろに下がって本棚あたりにたむろすることに。

一方、クロノ・ハーヴェイは一人左側に座っている。

おそらく、巡航艦がこのやりとりをモニターしているのだろうなあ。

「時空管理局巡航艦『エステティア』。

執務官のクロノ・ハーヴェイと申します」

「パチュリー・ノーレッジ。

魔法使いよ」

「日本国海上自衛隊。

入即出やる夫海将補相当官だ。

君たちの世界で言う所の97管理外世界の国家軍人と言った方が分かりやすいかな」

「はい！

エリザベート……ん……！！！！」

「気にしないでください」

空気を読まないエリちゃんをマシユとクー・フリーンがドナドナしてゆく間場が和むが、すぐに緊迫した空気に戻る。

せっかく十六夜咲夜が用意した茶菓子に誰も手をつけていないのがそれを物語っていた。

「我々時空管理局は第一級ロストログアである闇の書を追っています。

現在広範囲の搜索を行っていますが、事件の発生した次元世界を方向を計算すると、この世界にたどり着いたのです」

その言葉に納得した俺が居た。

このときの闇の書は、魔導師の魔力の源であるリンカーコアを吸収し蒐集する事でページが埋められ、666ページ全てが完成すると『覚醒』して甚大な被害を撒き散らすやっかいなものである。

そして、この図書館には古今東西、現在・過去・未来の『魔法少女』達の記録が本として眠っている。

ついでに言うと、その記録の実体化あたりできちやう魔力塊をエリちゃんが持っている。

ここに闇の書が到来した時の悪夢を考えると、背筋が凍った理由はこれかと俺は一人納得したのだった。

## プリズマ・コース探索 その3

やばい相手と戦う事がわかったのはいいのだが、ヴォルケンリッター相手に被害を抑えるというのはかなり難しい。

おまけに今のマスターが八神はやてで無いから遠慮なく殺しに来るだろうし。

あの面子で一番やっかいなのは、なんと言っても湖の騎士シヤマルだ。

遠距離からのリンカーコアぶっこ抜きは、対策手段のないこつちでは回避不能の一撃となる。

あと、ステンノの魅了がザファイラ以外に効かないのが実に痛い。

この時点で俺は、最悪この特異点ごと闇の書を消し去る事を覚悟した。

目的は、ターミナル開発のデータであって、この特異点で手に入るいろいろなものは無いからだ。

あると凄く便利なのは言うまでもないが、追っかけて大火傷を追うぐらいなら、先に損切ラインを作って、負けない戦いにシフトする。

「パチユリーさん。

この図書館の本、全部持ってゆくのにどれぐらい時間がかかりますか？」

「そうね。」

咲夜が手伝つてくれるとして10日という所かしら?」

「こつちの人員を提供しましょう。」

梱包と搬出だけして、分類は後でゆっくりやつてもらおうという事で。

それだつたらどれだけ縮まりますか?」

俺が提出したハイデッカーとオイランロイド達の人数を見たパチュリーがため息をつく。

その後に気づいたらしい。

「それなら一週間以内に。」

けど、それだけの事をするのだから、それ相応の代償を支払えという所かしら?」

「代償なんてと言いたい所ですが、そのとおりですよ」

俺はその代償を口にする。

それこそがここに来た目的でもあった。

「二冊。」

魔法少女の本をいただきたいのですよ」

「わかったわ。」

後でその本を用意しておきます」

そこまで話して、俺はクロノ・ハーヴェイの方を見る。

まずは挨拶代わりに、手札を切ってみるか。

「で、クロノ執務官とおっしゃりましたか。」

闇の書は何ページ吸っているのですか？」

「っ!？」

向こうが伏せていた闇の書の情報をこつちが晒したのだからそりや驚くだろう。

とはいえ、ページ数はこつちにとつても絶対に知らねばならない情報。

あえて突くことにしたのだ。

『話し合いの途中失礼する。』

私は時空管理局巡航艦『エステティア』艦長のクライド・ハラウンと申します』

突如空中に浮かぶモニターから移る男性の姿に皆がざわつく。

俺は知っていたがパチュリーはちらと俺の方を確認したな。今。

十六夜咲夜は瀟洒を崩していないか。さすが。

「日本国海上自衛隊入即出やる夫海将補相当官と申します。

そちらでいう所の97管理外世界の一家の軍人ですよ。

闇の書についての情報入手については、こちらもそれ相応の伝があるという事で」

先に相手が問いたい事をそれとなく拒絶しておく。

同時に、相手が最も知りたいことについてはこちらから手を差し出すことも忘れな  
い。

「状況によつては、協力する事もやぶさかでないですよ。

ですので、そちらが把握している闇の書のページ数と、ここへの来襲時期を教えてください  
ただけるとありがたい」

事が第一級ロストロギアなだけに答えるにも上の、おそらくはギル・グレーム提督の  
許可が必要なのだろう。

少しの時間と何かを確認するような間の後、グライド・ハラオウンはそれを告げた。

「こちらが把握しているページ数は被害者のデータから計算して189ページ。

この世界に来襲するのは、5日後と判断している」

つまり、最低でも2日は耐えないといけない訳だ。

「この場所はいずれ消え去る場所だ。

最悪、閉じ込めておけるのならば、そちらのアルカンシエルでこの世界そのものを吹  
き飛ばしても構わないが。

ある程度ならば、支援もしましょう」

「[[:]]」

同時に驚くパチュリーと管理局側。

手札の暴露に管理局側は狼狽するが、それ以上に可愛らしい笑い声がいきなり聞こえてきた。

「あははははははははははははははは……

貴方最高よ!

よりもよつて、この世界を吹き飛ばすですつて!?

長く生きてきたけど、ここまでぶっ飛んだ鎖付きの番犬は始めて見たわよ」

ぞくりと空気が震える。

「可憐で尊厳で恐怖と快楽と退屈を織り交ぜた少女がいつの間にか十六夜咲夜の側に立っていた。

そりゃ、出てくるか。このお方は。

こういう存在を見ると、人類社会がどうして吸血鬼を排斥しようとしたのか理解できなくもない。

「つきたくてついた役職でもないのですが、給料分のお仕事はしないと怒られるのですよ。

宮仕えのつらい所ですな。

お嬢様」

俺は立ち上がって一礼する。



それを当然と受け止めるカリスマを彼女は有していた。

「紅魔館の主。

レミリア・スカーレットよ。

パチエだけでなく咲夜も出ていって楽しそうなお話をしているから、来てしまったじゃないの」

魅了されかねない妖気と、圧倒されかねないカリスマ。

木林あたりは立ったまま気を失っているが、クロノ・ハーヴェイは耐えた。

俺？

礼装と控えている叢雲とステンノとマシユが居なかったら木林と同じく失神していたな。

「入即出やる夫。

しがない国家の犬ですよ。お嬢様。

この世界をぶっ壊すほどの大戦闘ですが、お気に召したようで何より」

## プリズマ・コース探索 その4

「どういう事か説明してもらいたいのだが？」

この調査はトライデントと共同で行っているので、データはそちらにも送っている。で、トライデントの主力がルーマニアに行っているのでお目付けを残していったのだが、そのお目付けの名前がこのポーマン少佐である。

御神苗優の師匠と言った方が分かりやすいだろうか。

トライデントに移籍しており、その彼は叢雲の客人として俺と向き合っていた。

露骨に殺気を漂わせているから、隣の木林が震えている。

「あの世界での件ですね？」

説明するのは各かではないが、この話は最初から説明するとかなり長くなる。

それでもよろしいか？」

無言で頷くポーマン少佐を見て、俺はため息をつきながら説明を始める。

聖杯戦争の資料を渡して彼がそれを読んでいる間に、叢雲が俺と木林とポーマン少佐にコーヒートを差し出す。

あ。

木林が聖杯戦争の資料に食いついた。

「ここに居る木林さんが仮説を立ててくれた。パラレルワールドの概念。

その元になっているのが聖杯というワードです。

聖杯は願望機みたいに言われていますが、それだと説明がちよつと足りない。

あれは、アカシック・レコードへのアクセス装置と言った方が分かりやすいでしょう  
な」

声も出ないぐらい驚く木林に対して、ポーマン少佐は納得がいった顔をしている。

アーカムが冬木の聖杯の確保と封印を目指しているのは知っているからだろう。

「で、その聖杯がらみで見つかったこの世界。

中々ふざけているでしょう？

聖杯の元になった少女の内面世界と言った所でしようか」

もちろん嘘であるが、当たらずとも遠からず。

美遊は生まれながらの聖杯なのだから。

それを告げるつもりはないが。

「つまり、それがあの少女だと」

木林が確認を取るのを、俺は頷く。

ポーマン少佐は別視点から俺に切り込んでくる。

「あの褐色肌の少女との関係は？」

「少しプライベートで付き合いがあつてね。

魔術とか魔法とかの話になるので、説明が難しいんだ。

今回の話については脇道になるから省きたい。

ボーマン少佐。

今回の提携は、ターミナルの開発とゲート先の調査だったはずだ。

そつちの話をしませんか？」

「判断するのはこちらだと言いたいが、とりあえずは話を続けてください」

ボーマン少佐の促しに俺は間を取るためにコーヒーを一口。

木林もボーマン少佐も手をつけていない。

「コーヒー冷めますよ。」

さてと、ターミナル開発については随時進めてゆくとして、ゲート調査の方の話をし

ましようか。

木林さん。

報告をお願いしてもよろしいかな？」

「は。はい。」

この世界の広さと調査からいくつか分かった事がありました。

まず、この世界が今の所ゲート以外と繋がっていない点。

そして、無人調査や私が入った時は灰色だったのに、今はこうして世界に色がついている点。

今の発言から、この世界が聖杯戦争と絡んだ何かがある点。

こんな所でしようか」

木林はここでコーヒーを手にするが、震えているのでテーブルにこぼしてしまう。

ポーマン少佐はコーヒーに手をつけもしない。

「以上の点から、私はこの世界を風船という感じに見立てています。

我々の世界から、何かを取り入れて膨らんだ世界というイメージでしようか」

木林すげえ。

何も知らないはずなのに、当たらずとも遠からずでいい線突いてやがる。

『特異点』。

あえて省いた魔術とか魔法とかの業界用語でこの異界をそう呼んでいるよ」

ポーマン少佐が口を挟む。

若干語意が強く、木林がたじろぐ。

「なるほど」。

この世界は、その魔術や魔法を知らねば分からないという事は理解した。

では次に、紅魔館と時空管理局とやらについてご説明願いたい」

「少佐。」

その質問に答える前に、トライデントは何処まで他勢力の干渉をはねのけられますかな？」

「アーカムと対峙している我々と敵対できる勢力という事ですか？」

ボーマン少佐の質問に俺は無言で頷く。

少しの沈黙の後、俺は実にわざとらしく説明を始める。

「我々の目的であるターミナル開発。」

それを実用化した我々より技術が進んだ連中があの時空管理局ですよ」

「待ってください！」

そんな連中が今まで歴史に出てこなかったのはおかしい！」

木林の叫び声に俺は実に楽しそうな笑みを作る。

彼が程よい観客になってくれるから、こっちはうまく情報の取捨選択をしてボーマン少佐に話すことができるのだから。

「それは簡単だ。」

歴史に出る必要がない程度に、彼らにとってはこの世界は辺境だったという訳だ。

彼らの世界の本拠は地球ではなく、別の次元にある。

向こうからすると、地球もこのふざけた特異点と同じ辺境次元でしかないという訳だ。

神隠しのいくつかが、彼らの仕業ですよ」

ボーマン少佐が腕を組んで核心を尋ねる。

この質問を彼は聞きたがったに違いないのだから。

「で、彼らと戦って勝てるのですか？」

「勝つことは難しくない。

問題は、こっちは彼らの本拠を知らないのに、彼らは地球の次元座標を知っている。

つまり、向こうからすれば面倒だからと地球ごと破壊しても困らないという所かな」

アルカンシエルで地球破壊というのもありえるから困る。

まあ、次元震が怖くてそこまで踏み切る覚悟は無いだろうが、それは言わないでおこう。

「まあ、彼らとはこの後共闘という形でその実力を見ることになると思うので、じっくり観察する事をお勧めしますよ。

とりあえず、こっちの拠点は観測機器を残して退去する事をお勧めします」

「勝てるのですか？」

木林の不安そうな確認に、俺は肩をすくめるしかできなかつた。

最悪、このプリズマ・コース世界ごとアルカンシエルで吹き飛ばす事も視野に入れているなんて言いたくなかったのだ。



# 対ヴォルケンリッター対策仲魔作成

女神転生TRPG版ではレベルについてある程度の解釈がある。  
こんな感じだ。

愚者

何も知らないが故に、幸せな人達

異能者

知ってしまった人達

悪魔や魔法を知った人達とも言う

覚醒者

目覚めてしまった人達

悪魔や魔法が否応なく寄ってきて、その戦いに巻き込まれるとも言う  
達人

人を極めた人達

人である以上、その道はそこで止まってしまおう。

レベルで言うと10ぐらいで異能者になり、20あたりで覚醒者となり、30で達人となる。

で、ここからルートが3つに分かれる。

仙人になるニュートラルルートに、人の道を外れるカオスルート、神の使徒となる口ウルートである。

大体このルート選択でそれぞれ、導師・超越者・使徒と呼ばれるわけで、このあたりになるとレベルは40ぐらい。

人間を辞めてくるのが50で、そこから先は仙人であれ悪魔であれ神であれ否応なく戦いに巻き込まれてゆくわけだ。

で、ここからが本番で、タイトルに転生の文字が入っている通り、このゲームには転生者というものも存在する。

大体が神なり悪魔なり天使なりの転生体であり、それが目覚めるとその力を使えるというやつで、俺はその転生者に該当する。

「へえ。

じゃあ、あんたは何の転生体だというのよ？」

何となく聞いてきた叢雲に俺はあっさりとその神の名前を告げた。

アンコ女神の使徒というか一柱なのだから、多分この神様なのだろうと俺自身自覚し

ているその名前を。

『プレイヤー』さ」

ここはホテル業魔殿。

ヴォルケンリッター襲撃イベントを前に、仲魔を強化するかという訳で一度こつちに戻ってきたのである。

舞鶴―横須賀間は自衛隊のヘリを使用している。

こういう時に自衛隊を動かせるのは強い。

「で、それが今の話とどう繋がるのかしら？」

ステンノが楽しそうに尋ねる。

ドタバタしていたので、この場には初期メンバーしかおらず多分嬉しいのだろう。

絶対当人は口にしないだろうが。

「そつちの世界、つまりステンノ達の世界では基本人間は英霊に勝てない。

まあ、例外も居るだろうが、そのあたりの解釈はこつちの世界とも都合が良くてね。

概念的な整理が行われていると推測しているわけだ」

もちろん、そのあたりを考察したのは、大天才ロリンちゃんである。

女神転生世界において、仲間を含めたレベルのリミットは大体60―70ぐらいに限

界になっている。

複数の仲魔でタコ殴りにするのが女神転生で、基本型月世界のサーヴァントは60—90の英霊一体のみ制御だから、どちらが良いかというのは話が別である。

「だったら、全部そっちの仲間を集めたら？」

「当たり前のように言う叢雲に俺は手の令呪を見せてほやく。」

「駄女神うまくすり合わせたなあ。ほんと。」

「デメリットも大きいんだよ。」

絶対命令権である令呪はロリンチちゃんの協力で一日三回まで使えるが、裏返すとサーヴァントが裏切った際の強制命令が三回までしか使えないことを意味している。

「おまけに、現世に維持する為の魔力も馬鹿にならない。」

「俺が冬木の聖杯戦争で真っ先に魔力炉を欲したのはそれが理由だ」

モードレッドにドレイク船長と☆5サーヴァントの維持にかかる魔力は莫大だ。

それを支えていたのは、叢雲とマシユ風の動力に直結した魔力炉の存在である。

艦娘は実体化のコストがとつともなく安い、適正者が少ない。

多分そのあたりはこういう感じで駄女神が調整をしたのだろう。

ステンは、初期鯖という事で俺の魔力から供給している初期鯖特典である。

「メガテンの悪魔はCOMPのサポートもあつて、離反や命令に対しての制御が届いて

いるが、その条件はこちらのレベル以下という制限がある。

そして、サーヴァントよりは楽だとは言え、彼らも体の維持に魔力ならぬマグネタイトが必要になる。

このあたりは最悪買えばいいからこつちの方が維持も簡単なんだよ」

話しながら叢雲を眺める。

その維持に多額の金がかかるとはいえ、現在の燃料弾薬物資で十分というのがどれだけありがたいことか。

そんな事を思いながら本題に入る。

「悪魔の発生とそのカウンター。

つまりアラヤの抑止力である英霊は若干の齟齬はあるかもしれないが機能がしていると  
いう訳だ。

だから、メガテン世界のジャンヌ・ダルクに聖杯を与えて、型月世界のジャンヌになつてもらい、ヴォルケンリッターを防いでもらおうと考えているんだが……」

そこで俺が言いたいよどむのをステンは察して微笑む。

「いっばいいいらっしやるわよね。

聖女様」

「そうなんだよなあ……」

なお、聖女様はこんなに居る。

ジャンヌ・ダルク (ルーラー)

ジャンヌ・ダルク (水着 アーチャー)

ジャンヌ・オルタ (アヴェンジャー)

ジャンヌ・オルタ (水着同人作家 バーサーカー)

ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリィ (サンタ幼女 ランサー)

聖杯については自動聖杯探索概念サーヴァントと化したエリちゃんがやってきたので心配は無いが、そこから先についてはランダムである。

「あ!？」

叢雲が不意に声をあげる。

「どうしたと言う前に叢雲が『艦これ』側のジャンヌを告げた。  
「居るわ。」

仏海軍に、演習巡洋艦ジャンヌ・ダルクが。

「今、ヘリ空母になっているはず」

「……」

「……」

「……」

女神転生には、三身合体というものもあって、メガテンベースのジャンヌにFGOの聖杯と艦これの甲勲章を足せば多分艦娘英霊のできあがりとなる。

属性てんこ盛りである。

「やるか」

俺はアンコ駄女神の使徒よろしく考えるのを放棄してサイコロに任せることにした。

- 1 ジャンヌ・ダルク (ルーラー)
- 2 同上 ヘリ空母
- 3 ジャンヌ・ダルク (水着 アーチャー)
- 4 同上 ヘリ空母
- 5 ジャンヌ・オルタ (アヴェンジャー)
- 6 同上 ヘリ空母
- 7 ジャンヌ・オルタ (水着同人作家 バーサーカー)
- 8 同上 ヘリ空母
- 9 ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ (サンタ幼女 ランサー)

10 熱烈歓迎

結果 2

レベル 26

「サーヴァント——ルーラー兼ヘリ空母、ジャンヌ・ダルク。

お会いできて、本当によかった！」

メガテンスキルにFGOスキルてんこ盛りのヘリ空母艦娘爆誕。

整合性のためかレベルは26と低めだが、種火はカルデアから大量に輸入しているの  
で問題ないはずだ。

クー・フリーンのレベル上げもこの際だからやってしまおう。

現在の金種火の数 827個

ジャンヌ90までに種火 442個使用

クー・フリーン70までに種火 165個使用

残り種火220個。

カルデアとの交易というか支援は基本大量の物資をおくるかわりに、金種火を要求し  
ていた。



向こうは等価交換とほざいてかなりの数を送ってくれたみたいだが、特異点攻略が失敗したら本末転倒である。

最悪狩場だけ借りて、自力で狩ることも視野に入れたほうが良いのかもしれない。

「大将。」

ちよつといいか？」

COMPから呼び出して種火を食べさせていた時にクー・フリーンが声を上げる。

「どうした?」

「戦力強化ならば、大将の術で師匠を呼べないか?」

できる。

困ったことにソウルハッカーズでは、女神スカアハは簡単に買えるのだ。

そこに聖杯を入れて合体すれば、多分スカサハになるだろう。

実際将兵から悪魔から対魔忍に至るまで急激に戦力が膨張しており、練度の低下が問題になっていたのである。

こつち側の師匠として彼女はどうってつけない人は居ない。

「誰が来ると思う?」

「……それがあつたか……」

俺の一言に察して頭を抱えるクー・フリーン。

スカサハも一杯居るのだ。

スカサハ（おっぱいタイツ師匠 ランサー）

スカサハ（水着タイツ師匠 アサシン）

スカサハ||スカディ（異聞帯の神 キヤスター）

「誰が来ても世話係はお前な」

「こつちが振った話だ。」

なんとかするさ」

1 スカサハ（おっぱいタイツ師匠 ランサー）

2 同上

3 同上

4 同上

5 スカサハ（水着タイツ師匠 アサシン）

6 同上

7 同上

8 同上

9 スカサハ||スカディ（異聞帯の神 キヤスター）

10 熱烈歓迎

## 結果 10

「あつ」

ヴィクトルの漏らした声に俺以外の皆が反応した。

叢雲が俺を引つ張り、その前でジャンヌ・ダルクが旗を構える。

クー・フリーンが前に出ると後ろでステンノが魔力弾を撃つ構えを見せる。

そういえば、クー・フリーンの時もこんな感じだったなと俺はなんとなく思っていた。

ふと天井に気配を感じ上を見ると、真顔のアマテラス様が今まで見たこともない真剣な顔で事故先を警戒していた。

つまり、そういうお方を呼び出してしまったらしい。

合体事故の爆発と煙が収まると、一柱の女性が笑みを見せていた。

そこに居たのはスカサハでは無い。

彼女は黒い聖衣をつけていないし目を隠しても居ない。

その目隠しを外すと、たしかにスカサハの顔だった。

「大将気をつけろ！」

「この御方は師匠じゃ無いぞ!!」

「中々の歓迎ではないか。人の子よ。

争うつもりはない。

我が名はダヌ。

呼びかけに応じて参上した」

レベル 63

良かった。

まだ制御できる劣化分霊だったか。

「クー・フリーン。

任せた」

「大将！

そりゃ殺生な!？」

## 閑話 小ネ夕劇場

「入即出技術総括審議官。

君の新しい経歴だ。

覚えておきたまえ」

横須賀に寄ったついでに、都内に足を伸ばして室戸次官に現状報告。

時空管理局というゲテモノに頭を抱えているのだろうが、その対処をぶん投げて退出する寸前に俺の履歴書なるものを渡される。

経歴偽造なのだが、偽造がお役所なので本物であるのが素敵である。

どうせ駄女神のせいで経歴は後から生えてくるものだし。

入即出やる夫。

1964年東京都生まれ。

出生後家族の英国転勤に伴い英国で生活。

英国大学卒業後帰国。

86年国家公務員試験一種合格。

同年内務省入省。

87年神社本庁に出向。

88年警視庁警察学校卒業。

93年防衛庁海上自衛隊横須賀基地隊に出向。

同年内務省警保局図書課付。

94年新設予定の宮内省技術総括審議官に就任予定。

「色々がんばりましたね。これ」

「これでもやつかみが出るのがお役所という所だ。

帝大法学部卒業でもなければ、自衛隊に入隊させるよりましだろう？」

もちろん、実際の年齢と違うのだが、書類上は三十路前という年齢となる。

上に上げることは必然で、警察官になっている所とか、その偽造の為に受けても居な

い国家公務員試験一種を受けているというワケワカメな状況に俺は笑うしか無い。

まあ、これでも人手不足が蔓延している時空管理局に比べればマシな方だろう。

クロノ・ハラオウンは14歳で執務官、多分あれ警察で言えば警部以上の職だし、25歳で巡洋艦艦長になっているのだから。

閑話休題。

傍流キャリア警察官僚の出世物語という感じででつちあげる書類の見事さと言った

ら。

当然その年でも普通は技術統括審議官という局長級のポストに座れるわけがない。やっかみは凄いことになるだろう。

「帰る前に事務によりたまえ。」

紛失届を出した新規の免許証とパスポートと警察手帳を用意している」

こーいう事ができるのが国家というものの恐ろしさなんだよなあ……

内務省が入っている霞が関の中央合同庁舎第2号館を出る。

警備の警官が敬礼するが、『何こいつ』という顔で敬礼するのに苦笑するしか無い。

スーツ姿のステンノと叢雲はともかく、属性てんこ盛り合体でCOMPに入れない艦娘ジャンヌは外国の学生服姿である。

警官に敬礼する際に警察手帳を見せて、合同庁舎を出る。

今回報告書には書いたが、理解できないように書いたのがジャンヌとダヌの所である。

三隻目ともなると本気で海自が取りに来るので余計な軋轢を避けたというのが理由で、あくまで『英雄』ジャンヌ・ダルクとして表では動いてもらうことになる。

なお、元が同じな事でアマテラス様と顔が同じなのだが、あの人は巫女服で区別して

いる。

「はぁ……」

ため息をつく。

そして問題のダヌ様なのだが、室戸次官がスルーしてくれたのが本当にありがたい核爆弾である。

まあ、もつとやばい時空管理局があつたから俺に一任されたというのが真相に近いのだろうか。

神話体系の頂点におられるあのお方は劣化分霊とはいえ呼んでしまったという事は、その神話体系の神々に絶大な影響力を持つてしまうのだ。

具体的にはダグザとかダグザとかダグザとか。

『真IVFINAL』ルートに行ったら目も当てられんぞ。

駄女神のミッションが曖昧かつアバウト過ぎるからそのあたりのルート設定とかまったく聞いていないのだ。

なお、うちの妖精連中は大喜びなのは言うまでもない。

あのお方の為に異界用意しておくかなあ。

それだと、消える予定の『プリズマ・コーズ』とか便利で良いのだから。

存続の手段はいくつかあるのでそれを視野に入れる事を考えておく。



そんなこんなで冬木のゲートから『プリズマ・コース』に日帰り。

出しっぱなしの叢雲の艦内では厄介事が更に増えていた。

「楽しいわ♪楽しいわ♪楽しいわ♪」

「へえ……こういう料理が流行っているのかあ……」

「お友達が一杯増えちゃうわ♪」

三人の少女たちが食堂でお茶会を楽しんでいた。

なお、無駄に貼られていた禁凝符の束が灰になっており、天ヶ崎千草が疲れた目でお札を張り続けていた。

運だけはよかったらしい元凶である木林に俺は尋ねる。

「なんだこれ？」

「退去前に調査をと思いましたが、お菓子の国へ行ったら……」

「おーけい。わかった」

お菓子の国のボスだった、ナーサリー・ライム。

彼女が居るのはまあ、分からなくはなかった。

名前つながりで魔法少女がらみなのだらうなあ。

アリス・マーガトロイドの幼き姿であるロリスが楽しそうにお菓子を楽しむのもし

い。

黙って、最期の一人にデビルアナライズをかける。

『魔人 アリス レベル49』

そんな彼女が俺を見つけてとことことやってきて、決め台詞を吐いてくれた。  
とつてもいい笑顔で。

「ねえねえ。

お友達になつてほしいの。

だからね……死んでくれる？」

身につけていた禁凝符の束が灰になったのを自覚しながら、俺は首を横にふった。

「だめ」

「えー、けちー」

多分これ、三身合体すればアリス・マーガトロイドになるんだろうなあなんて考えつつ、明日も日帰りで横須賀だなどため息をついたのだった。

## 閑話 小ネタ劇場 その2

「道化。」

「暇だ」

アリス合体の為にホテル業魔殿にとんぼ返りすると、英雄王様が待ちかねていた。

暇だと言われても、この快樂てんこ盛りの世紀末で飽きるというこのお方も……待てよ。

「王よ。」

でしたら、この時代の人々が王を讃えた電子遊戯がありますがいかがでしょうか？」

「ほう。」

「我を讃えた遊戯か」

TVとファミコンと『ドルアーガの塔』をセットして王に渡す。

まっさらなノートと鉛筆も慈悲で置いておいてあげよう。

とてもいい笑顔で。

「聡明な王ならばおわかりと思いますが、先が見えたら楽しみが減るというもの。

これはそういう遊戯でございます」

「その笑み、何か企んでいると見たが、今はその企みに乗ってやろう」

かくして部屋から聞こえるファンファーレを後に、俺は住み込みガチャメイドと化したりヨぐだ子に一言。

「TVを部屋ごとぶっ壊したら遠慮なくぶん殴れ」

「おけ」

数日後、この部屋が最初にぶっ壊れたのは、FLOOR 25だったという。

あとリヨぐだ子やいつの間にか交流していたらしい命蓮寺の連中も一緒にやり始めたとかで、どんどんノートが埋まっていたらしい。

突破したのは、案の定ナズーリンの

「もしかしてここ、宝箱無いんじゃないかね？」

の一言だった。

もちろん、攻略中に他のソフトである『イシターの復活』にも手を出したの言うまでもない。

あと、『バベルの塔』はシリーズから外れていますから。

アリス合体

1-9 アリス・マーガトロイド

## 10 熱烈歓迎

結果 5

レベル 23

「アリス・マーガトロイドよ。

まったくもう。

こういう事は人間がやるものでしょう?」

ナーサリー・ライムの魔術書を手に持ち、おしやれな都会派魔法使いとなった彼女に  
俺は一言。

「死んでくれる?」

赤面して踞る都会派魔法使い。

見事に黒歴史認定されたらしい。

あ。

人形の中にザク発見。

「で、そこで泣いている怪しい二人は誰?」

歓喜の涙を流している紳士（おっさん）二人。

赤いスーツに黒いスーツだからだいたい想像がつくのだが、言わないでおこう。

完全にジャンヌを見つけたジル元帥状態である。

「アリスが…あの娘がこんなに大人になって……」

「ああ。」

我らの願いは果たされた」

そんな悪魔二人を放置して残った種火をアリス・マーガトロイドに全部あげる。  
「あ。」

種火足りないな」

ナーサリー・ライムが☆4だから最大レベルが80。

今の種火だと70までしか届かない。

「何だと!？」

これで完璧にできないだど!？」

「何をしている人間!」

すぐにそれを用意するのだ!!」

寄るな。

それと、人化の術が解けかけているから落ち着け。

魔王ベリアルと墮天使ネビロスよ。

「それだが、種火というものを集めないといけないのだが、人手が足りなくて」  
「馬鹿者!」

そんな事ならば、我が配下を貸してやる!!

だから、彼女を完全なる乙女に……」

「配下に任せておけるか!

こうなれば私自らが……」

「おじさん?」

あ。

背景に『ゴゴゴ……』って異音をつけてアリス・マーガトロイドが笑っている。

このあたりの記憶の引き継ぎはバツチりみたいだ。

「正座」

「はい」

都会派魔法使いの保護者二人への過保護への説教の後、こそつと保護者二人を呼び出す。

そして彼らに一言。

「この世界、メシアの連中が千年王国狙って大洪水起こそうとしているのですが」

「わかった。」

奴らは潰す」

「奴らは我らの宿命の敵！」

サマナーの言葉に乗ってやる」

そして大悪魔二体は俺に頭を下げた。

その姿は大悪魔ではなく、アリスの保護者として。

「だから、どうかアリスを幸せにしてやってくれないか？」

「無垢な少女が無垢な乙女に成れたのだ。

その幸せを守ってやりたいのだ」

その姿にただ俺は頷くことしかできなかつた。

という訳で、アリス・マーガトロイドを連れて再度プリズマ・コースへとんぼ返り。

時間がある内に、懸念事項を片付けておく。

場所は『大海原と竜の国』の城。

メディア・リリイが居たのだが、ワイバーンごときが近代軍艦である叢雲とマッシュ風の対空砲火に勝てる訳もなく、マリアナの七面鳥撃ちならぬプリズマコースのワイバーン撃ち状態に。

それでも突っ込んでくる輩は、ワイバーンスレイヤー経験者であるうちのステンの



出番である。

で、当の本人はついてきたアリス・マーガトロイドの人形劇に魅了されてあっさりとも味方についた事を記しておこう。

なお、決め手はザクだった。

この二人、趣味については親和性が高すぎると思ったが口にしなかった。話がそれた。

「お望みの本がここにあるが、出てきたらどうかかな？」

暁美ほむらくん

「……いつから気づいていたの？」

城のバルコニーで俺は大図書館から持ってきた二冊の本をテーブルに置く。

そのタイトルは、『暁美ほむら』と『鹿目まどか』。

魔法少女だったからこそ、残っていた彼女たちの記録である。

まどかを魔法少女にさせない事を存在意義にしまったほむらにとっては、絶対に存在を許してはおけない魔法書だった。

「それ狙いだったというのは否定しないよ。」

それで協力をという下心も無いと言ったら嘘になる」

そこで俺は暁美ほむらの方を向く。

悪魔ほむらと化した彼女の姿を確認してわざとらしく肩をすくめる。

「ただ、ちよつと前に、大人が被保護者のために頭を下げた良いシーンを見たのでね。

それを真似しようと思った訳だ。

持っついていきなさい」

「そう。

礼は言わないわよ……」

悪魔ほむらが二冊の本を手取る。

その時の俺の内心は、当の悪魔を目の前に悪魔よろしく『かかったな！あほが！』とほくそえんでいたのだが。

「ほむらちゃん……」

「……ま……ど……か？」

ここは魔法少女の世界。

そして俺はこの世界の観測者。

悪魔ほむらが存在する世界から悪魔ほむらを呼んで、女神まどかが存在する世界から女神まどかを呼ぶぐらいはどうとでもなる。

というか、本当はそれを狙っていたのだ。

色々あつてそれどころではなくなったのだが。

ダヌ様とかダヌ様とかダヌ様とかのせいで。

しがみついた女神まどかを悪魔ほむらは振りほどけない。

「じゃあ、ごゆっくり」

そこからは馬に蹴られるので後ろに手を振ってバルコニーから出てゆく。

それを見ていたメデア・リリイが俺の所に寄って来て尋ねた。

「あれ、誰なんです？」

「魔法少女達の女神と悪魔さ」

## 閑話 小ネタ劇場 その3

さて、現在絶賛頭を抱えているダヌ様なのだが、この御方がどれぐらいやばいかという一例を見せよう。

「ようこそいらつしやいました。

平賀Ⅱキートン・太一先生。

とりあえずおかけください」

とんぼ返りのついでにちよつとしたスカウトをやってみる。

考古学に詳しく、元SASの教官なんてやっている人材を放置する余裕は今のこの国に無い。

というか、認識したら間違いなく大英帝国が囲い込む。

たしか、英国王族にもコネあるし。この人。

「海上自衛隊の入即出やる夫海将補相当官ですか。

そんな人がどうしてこの場所なのですか？」

霞が関の中央合同庁舎2号館。

ご丁寧というかさすが霞が関というか、来年できる宮内省の施設もここにできるらし

く、このオフィスは俺のために与えられた建物という事である。

保険のオプをやっているだけあってこういう所では鋭い。

「あいにく、来年できる組織のオフィスだね。

そちらの名刺も一応渡しておきましょう」

宮内省技術総括審議官の名刺を見て露骨に警戒するキートン先生。

英国にも内務省があるから、類似想像すれば厄ネタしか浮かばないのだろう。

「さて、とりあえず本題に入りましょうか。

キートン先生。

我々は貴方を雇いたいと思っています」

「私をですか？」

「失礼ですが、ここ近年頻発している超常現象についてはどれぐらいご存知で？」

1で知らない100でズブズブ

結果 54

「こんな仕事をしているので、それ相応には」

「だったら話が早い。」

我々は近年頻発している超常現象に対処する組織を立ち上げる予定です。

そのオカルトサイドの由来や逸話を組織に説明できる人材を我々は求めています」

「それ相応の人材は居るでしょうに」

「そういう人材は大体他所が取っているのですよ。」

貴方は、貴方が思っているより、ずっと貴重な人材なのですよ」

という訳で切り札を切る。

こういう時に知っているということのなんと便利なことか。

『ドナウⅡヨーロッパ文明起源説』でしたっけ？

調査したいと思いませんか？」

すつと小切手を差し出す。

とりあえず、10億円。

それでこの人材を雇えるなら格段に安い。

「調査費用です。」

必要でしたら、文部科学省の研究員の身分も用意しましょう」

スーツ姿の叢雲がすつと紅茶を出す。

せつかくなのでハロツズから取り寄せたダーズリンである。

それでもキートン先生は首を縦に振らない。

「私にはそれだけの価値は無いと思えますよ。」

その上で、「雇うのでしたら隠し事は無しにしませんか？」

それもそうだ。

という事で、自爆したキートン先生に沼に沈んでもらおう。

「実は、この手の騒ぎにおいて我々はとある神様を呼び出してしまいましたね。」

その知識を関係各所に説明できる人間を欲していたのですよ」

キートン先生がティーカップを落とし、ダージリンの紅茶が絨毯に広がった。

やっぱりこの人は確保しないと。

「ま、まさか……」

「そこからはその神様に自己紹介してもらいましょう。」

入ってくれ」

ステンノが扉を開けると、ブラック・マリア姿の女神が微笑む。

神気というか母性と言うか、ステンノと共にマシマシである。

「我が名はダヌ。」

呼びかけに応じて参上した」

顔かぎるを得なかったキートン先生には、英国とのパイプ役にもなってもらおう予定で

ある。

ダヌ様がどれぐらいやばいかという例その二

「ここにダヌ様がいらつしやるって!？」

あのメイヴちゃんに連絡をするとすつ飛んでくるレベルである。

欧州の妖精神話のグランドマザー。

それがこのダヌ様である。

「おお。

コナハトの娘か。

久しいな。

会ったのはいつぶりだったかの？」

ニコニコ笑顔のダヌ様はすっかりおばあちゃんモードである。

なお、忘れていたが、うちにはダヌ様の孫にあたる女神ブリジットが居たりする。

彼女は最高神ダグザの娘だから彼女から見ればダヌ様はお祖母ちゃんである。

俺とクー・フリーンは喜んでお世話係をぶん投げたの言うまでもない。

話が厄介なのが、神話体系の整理統合によって、メイヴにもダヌ様の権能が移って



るという所だ。

このあたり、木林が実に上手く言つてのけた。

「つまり、コピー元とコピー先という訳です。

情報生命体をプログラムと仮定したなら、その権能の否定は根幹のソースコードだから存在否定に繋がりがかねない。

だから、ダヌ様の権能を受け継いだ多くの女神は、かの女神を隠して自らをそのダヌ様に同化させようとした。

キリスト教がやってきた時ですら、聖母マリア信仰を使って生き残った最古のソースコードです。

劣化分霊とはいえ、欧州の女神と聖母は間違ひなく逆らうのに勇気がいりますよ」

なお、うちに居た大妖精……じゃなかった妖精ハイピクシーやジャックフロストやチルノを相手に遊ぶ姿は孫相手に余生を楽しむお祖母ちゃんにしか見えない。

地母神だから母性マシマシですけど。エロエロですけど。

なお、クー・フリーンは話がややこしくなるからと、とつと逃げ出している。

「で、だ。

こちらのお嬢様がたはどんなご関係で？」

俺の質問にメイヴちゃんはあっさりと言。

「何か居たから連れてきたのよ。」

ダヌ様に会いたみたいだし、空を飛べるからここまでひとつ飛びだったわ」

いやまあ、魔法少女世界だからどうせどこかの魔法少女が紛れ込んできたのだろう。

そう思っていたのだ。

名前を聞くまでは。

「FFR—31MR スーパーシルフ “雪風”よ。」

よろしくね♪」

「FFR—41 メイヴ “雪風”。」

よろしく」

そっかー。

魔法少女だもんなあ。

どうでもいい声で、俺は確認を取る。

「ちなみに戦闘機形態になれる？」

「もちろん♪」

「できる」

なお、魔法少女カテゴリーだから、FFR—31シルフィードちゃんと、FA—1

フアーンちゃんとF A | 2      フアーン | I I ちゃんもついてきていた。

駄女神iiiiiiiiiiiiiiiiiiii

!!!!!!!

惑星フエアリイと繋がっても時空管理局と接触したから今更かと、俺は何かを悟って  
これ以後は考えないことにした。

## プリズマ・コース防衛戦 その1

色々頭を抱えることになったが、ヴォルケンリッターからこのプリズマ・コースを守る戦力は確保した。

あとは、それをどう配備するかである。

今回絶対に守らないといけないのは大図書館。

ここは紅魔館組に任せるとしよう。

問題は、他の発現したサーヴァントたちである。

パチユリー・ノーレッジの指揮の元、小悪魔たちに混じって紅美鈴が本をえつちらおつちらと運んでいるのを横目で見る。

本の避難率 36%

「あれ？」

小イヌ私と契約しないの？」

会議場として利用させてもらっている大図書館の一室。

「当たり前のように聖杯で十六夜咲夜の入れた紅茶を飲んでるエリちゃん俺に尋ねるが、俺はそれをやんわりと否定する。」

「この数は無理だよ」

「カルデアではしていたじゃない」

「カルデアの方で維持の魔力を任せていたからね。」

そのカルデアが使えないから、野良サーヴァント扱いでしか運営できないんだ」

現在のカルデアは人理修復の真つ最中である。

協力はしてくれるかもしれないが、それは向こうにこの膨大なサーヴァントを任せる事になり、要請や介入のきつかけとなることを意味する。

俺が必死に英霊を英霊外のものに変えているのはそれが理由だ。

「あ——」

エリザベートこんな所にいた——」

「フランドール！」

大事な話をしているのにじゃれつかないでよ——」

「やだ——」

フランも一緒に遊ぶの——!!」

妹様狂気度 16% 100%でルナティック

何アレと俺が言う前に、レミアア・スカーレットが苦笑して説明する。

「あのドラゴンメイドもどきが紅魔館で迷子になってあの娘の所に行っちゃったのよ。で、なぜか仲良くなってるね。」

私としては助かっているわ」

そりゃ、元ネタというかベースだからなあ。

エリちゃんと紅魔館勢の親和性は高い。

ここは紅魔館勢とエリちゃんにおまかせしよう。

大図書館防衛部隊 エリちゃん＋紅魔館勢

ハロウィンエリちゃん (野良サーヴァント)

レミアア・スカーレット

フランドール・スカーレット

パチュリー・ノーレッジ

十六夜咲夜

紅美鈴

## 小悪魔

「水晶宮は放棄するの?」

クロエの質問に俺はあっさり頷く。

朔月美遊を確保しているからあそこは放棄して、戦力を集める作戦である。

その朔月美遊は叢雲内のロリンちゃん工房で安静にさせている。

この戦いの後で解呪と治療をする事になるだろう。

「かわりに、この叢雲に戦力を集める」

艦娘である叢雲・マッシュ風・ジャンヌダルクの三隻は戦隊を組んで穏やかな海に停泊する事になる。

ここから、必要に応じて戦力を投入するつもりなのだ。

「その為に必要なのは、敵の情報なのだが、うつつけの彼女たちが手に入ったし、そのあたりは全部彼女たちに任せるさ」

戦闘妖精少女御一行様の事で、航空指揮もできるようになったへり空母艦娘ジャンヌ・ダルクが居るので、そっちにぶん投げることにしたのである。

彼女の人員まではさすがに時間がなかったのだが、種火でレベルを90まで上げてい  
るからどうとでもなると信じたい。

今回の襲撃でとにかく怖いのは湖の騎士シヤマルの空間転移によるダイレクトアタックである。

だからこそ、それだけについては警戒する必要があった。

「という訳で、海自以下人間の皆様には退艦して冬木に避難……」

俺の台詞を美野原主席幕僚は一蹴する。

「今更ですよ。司令。」

我々の仕事は、逃げた先に国民が居るんだ。

だったら、踏ん張らないといけないでしょう？

それに、司令だけで艦隊指揮ができると？」

いい笑顔で笑う美野原主席幕僚に木林も続く。

「……まで来たら一蓮托生ですよ。」

映画のクライマックスを見ずに映画館を出るようなものです」

「そりやそうだ。」

万一の時は遺族に頭を下げるから、しっかりと仕事に励んでくれ」

「そのためにも、司令は絶対生き残ってくださいよ」

イイハナシダナーで終わる予定だったのだが、涙目のメデア・リリイに捕まる。

「うちの城で女神様と悪魔がいちゃついで困るんですけどお!!!」



もちろん、聞かなかったことにした。

穏やかな海遊弋艦隊 入足出やる夫指揮 旗艦 叢雲

叢雲 みねぐも型護衛艦

副官 ステンノ

主席幕僚 美野原一佐

民間人研究者 木林

モードレット

COMP内悪魔

妖精 ハイピクシー 1v10

鬼女 文車妖妃 1v12

妖精 ジャックフロスト 1v15

女神 ブリジッド 1v47

妖精 チルノ 1v9

神獣 ゲンブ 1v43

大天使 イスラフィール 1v42

妖精 レテイ・ホワイトロツク 1 v 1 4

地母神 ダヌ 1 v 6 3

COMP外悪魔

魔神 大淫婦バビロン 1 v 6 9

ロリンチちゃん工房

ロリンチちゃん

朔月美遊 (封印中)

クロエ・フォン・アインツベルン (野良サーヴァント)

マシュ風 陽炎型駆逐艦

フランシス・ドレイク

ジャンヌ・ダルク ヘリ空母 艦娘時は鹿島衣装

FFR-31MR スーパーシルフちゃん

FFR-41 メイヴちゃん

FFR-31シルフィードちゃん

FA-1ファーンちゃん

FA-2 ファーンIIちゃん

溟海の城

女神まどか

悪魔ほむら

メデア・リリイ（野良サーヴァント）

「じゃあ、私はお菓子の国に戻るわ」

アリス・マーガトロイドはそう言ってお菓子の国の方に飛んでいこうとするのを引き留める。

当初計画では、お菓子の国も放棄予定だったからだ。

「ここに残ってくれた方がこちらとしても助かるのだけだね」

「あら。」

私はアリスよ。

お客様が来るのならば、お菓子を用意して歓迎の準備をするべきでしょう？」

そう言われると納得しかかる俺に、当たり前のように現れた赤おじさんと黒おじさん。

「安心しろ。人間。」

「我らがあの娘を守る」

「応とも。」

我らがあの娘に指一本手出しをさせるものか！」

頼もしいと言えば頼もしいが、心配と言えば心配なのがここである。

隣接エリアだから、何かあつたら援軍を差し出すことにしよう。

「私も自分の城に戻るわ」

アリス・マーガトロイドに続いて帰ろうとする女王メイヴちゃん。

戦闘妖精少女が居るので実にややこしい。

ある意味ケルトらしいと言えばそうなのだが、ここでメイヴちゃんが落とされると少しまずい。

ヴォルケンリッターを操る闇の書は元々は魔法の収集を目的としていた。

つまり、落とされれば落とされるほどヴォルケンリッターが強くなる訳で。

COMPを操作して、クー・フリーンを呼び出す。

「護衛についてやってくれ」

「大将。」

あれとの因縁しつてそれを命じるのか？」

「だからだよ。」

こういうひとときの夢幻の瞬間ぐらい夢を見せてやってもいいじゃないか。それに……」

俺はクー・フリーンを呼び寄せて耳元でささやく。

彼にとつて魅力的な一言を。

「スカアハ相手に手柄話の一つぐらい欲しいだろう?」

「呼び出そうとして、あのお方呼び出したのにまだ懲りないのですかい? 大将……」

呆れ顔のクー・フリーンに対して俺は真顔になる。

「真面目な話だが、ここまで大きくなると手が回らない。

育成人材としての君の師匠は本当に優秀なんだ」

彼女の修行についてゆけるハイデッカーやオイランロイドがどれだけ居るか分からないが、ついていった個体が出たら、その個体のデータを全てにコピーできるのがこの手の部隊の売りである。

今回お留守番のキートン先生ももちろん指導してもらおう事が確定だし、練習巡洋艦の側面もあるジャンヌ・ダルクも指導教官に加わってもらおうがそれでも足りない。

というか、そのジャンヌ・ダルクの人員が627人増える事になり、兵員輸送もできるから700人規模の部隊の編成も視野に入れなければならない。

つまり、1327人は確実に増えるのだ。

「メイヴの軍団も大概だが、あんたの軍団も大概だよな」

「知らなかったのか？」

「今や戦争はそういう時代になっているのだよ」

「出ていこうとしたクー・フリーンがふと振り返る。」

「そして思い出したかのように確認の質問をした。」

「大将。」

「俺たちがやってきたあのゲートの方は大丈夫なのかい？」

「八衢比売神が守っているから大丈夫だろう。」

「それで抑えきれなかったら、あのお方がやってくるさ」

「あー」

「おねーちゃんに任せなさい♪」

なんていいながら、ヴォルケンリッターを笑顔でぶん殴るアマテラス様が見える。

そうなる、後始末の方が大変なのだがそれを言おうとしたらクー・フリーンはもう居なかった。

お菓子の城

アリス・マーガトロイド 1v70 魔人兼魔法使い兼サーヴァント

魔王ベリアル

堕天使ネビロス

深雪の城

コナハト・メイヴ (野良サーヴァント)

幻魔 クー・フリーン 1v70

冬木市ゲート出口

八衢比売神 1v97

なお、ここで苦戦すると天津神アマテラス様自動参戦

「一応こっちの準備は整った」

「了解した。」

「戦闘になったらこっちからも支援を送ります」

虚空のモニターに映るのは時空管理局巡航艦『エステイア』艦長。クライド・ハラオウン。

この事件で生命を落とす予定の人物だが、だからといってはいそうですかと見捨てるわけにもいかず。

せめて退路ぐらいは用意してやろう。

「よければ、そちらの移動ゲートの座標をこの船に繋げませんか？」

応援はありがたいし、こちらとしてもそちらの船に興味がありますね。

現地司令部としてこの船を提供しましょう」

「そうですか。」

協力に感謝します」

まさか、闇の書が暴走した時に君たちの逃げ場所を用意したなんて言えるわけもなく。

俺は笑ってごまかすことにした。

時空管理局巡航艦『エステイア』

艦長 クライド・ハラオウン

執務官 クロノ・ハーヴェイ



ヴォルケンリッターの襲撃先

- 1 水晶宮
  - 2 中立地帯
  - 3 大図書館
  - 4 穏やかな海
  - 5 溟海の城
  - 6 お菓子の城
  - 7 深雪の城
  - 8 冬木市ゲート出口
  - 9 時空管理局巡航艦『エスティア』
  - 10 熱烈歓迎
- 結果 9

その通信が入ってきたのは、来襲予定時間のちよつと前ぐらいだった。「こちら時空管理局巡航艦『エスティア』！」  
助けてくれ!!

ヴォルケンリッターに襲われて……」

## 閑話 小ネタ劇場 その4

英国。ロンドン郊外。時計塔。

魔術師達の都であり学び舎であるその一室にて、最近ロード・エルメロイ二世と名乗る羽目になったウェイバー・ベルベットがレポートを淡々と読み進めていた。

聖杯戦争の勝者として『祭位』の地位にロード・エルメロイの名前、現代魔術科三級講師の地位が重たく感じるのは、それが得たものではなく与えられたものであるというのが大きい。

「邪魔をするぞ。兄上」

堂々とした名乗りで部屋に入ってきたのはライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。

後ろにトリムマウを連れてくるが、ロード・エルメロイ二世はちらりと見たのみで書類を読み進める。

「愛しい妹が来たのだから、もう少し歓迎をしてくれてもいいと思うのだけどね」

「歓迎というのは、客人に対してするもので、厄介事に対してするものではないだろう」  
「言うね。」

とはいえ、その厄介事を人任せとはいえ乗り切った我が兄君の才覚は評価しているの

だよ」

聖杯戦争終了後から始まったロード・エルメロイのお家争いは時計塔外の介入によってこの二者が勝者となったのである。

上位分家の骨肉の争いが他のロードの介入を招いて本決まりという所で起こったのが、日本の八丈島沖で発生したタンカーシージャック事件である。

これが時計塔のルールを吹き飛ばした。

円卓会議によって時計塔にやってきた英国王室・政府・英軍・騎士団・イギリス清教・魔法省・ヘルシング機関が介入してきたのだ。

神秘を盾にこっそりと魔導の世界の椅子取りゲームをしていた時代は終わり、そんな時に時計塔のロードの一つであるエルメロイ家のお家争いは、彼らにごちそうを差し出す行為にしかならなかった。

エルメロイ家の上位分家が軒並み潰され・降伏し・逃げ出す結果となったのは、彼らがエルメロイ家没落の直接的原因としてウェイバー・ベルベットにその責を負わせようとしたからである。

彼が入即出やる夫によって聖杯戦争の勝者に仕立てられたという事を忘れて。

国家組織の本気の介入に、法政科は後手に回らざるを得なかった。

ウェイバー・ベルベットに背負わせようとした借金ですら、ヘルシング機関のインテ

グラ卿は鼻で笑ったのである。

「何だ。」

「オールドレデイの建造費用にすら届かないじゃないですか」と。

ライネス・エルメロイ・アーチゾルテが勝ち残ったのも、彼女より上の一族が潰されたり・降伏したり・逃げたりしたからに他ならない。

何よりも致命的だったのが、彼らはエルメロイ家復興の一手としてウエイバー・ベルベットへの責任追及と他科と組んで入足出やる夫の封印指定を主張していた事があげられるだろう。

入即出やる夫にそれを見透かされて裏取引を持ちかけられた結果、英国は己の陰謀の後始末に奔走し、ライネス・エルメロイ・アーチゾルテが勝者の椅子に座れたのも、この二者を満足させる一手、ウエイバー・ベルベットにロード・エルメロイの名前を継がせて自分が成人になるまで当主代行につけるといいう手がハマったからに過ぎない。

なお、この英国の後始末をやる夫は知ってはいたが、手は全く出してはいない。

話がそれた。

「で、何を読んでいるのかね？」

「兄君」

そつけない態度で書類を読んでいたロード・エルメロイ二世の書類に興味が出たライネス・エルメロイ・アーチゾルテが尋ね、読み終わったロード・エルメロイ二世はその書類を彼女に渡す。

「我がが恩人、入即出やる夫氏がここに居た時に残したレポートだよ」  
やる夫の卒業した科

- 1 全体基礎科
- 2 個体基礎科
- 3 降霊科
- 4 鉱石科
- 5 動物科
- 6 伝承科
- 7 植物科
- 8 天体科
- 9 創造科
- 10 呪詛科
- 11 考古学科
- 12 現代魔術科

## 13 法政科

## 結果 3 降霊科

「降霊科に居たそうさだ。

成績は悪かったらしいが、隠していたのだろうな。

でなければ、あの時にあの女神を召喚できるものか。

そんな訳で、彼の在学中のレポートを読んでいたという訳だ」

「で、何か分かったのかな？」

そのレポートに目を通しながら、ライネス・エルメロイ・アーチゾルテが尋ねるとロド・エルメロイ二世は葉巻に火をつける。

「あの人がレポートに選んだのは、『古代神話における女神の類似性』だ。

我々人類が神という『道具』を生み出した時、それゆえに神は必然的に人にならざるを得なかった訳で、その最初の女神についての類似性の指摘がレポートの中身だ」

「つまり、イヴについての考察？」

「そう捉えるのが分かりやすいのだが、あの人はその役すら剥ぎ取った後に残る権能を指摘していた。

舞台上上がる女優に『イヴ』役を与えたら、観客は彼女をイヴと認識する。

だからこそ、女優そのものにスポットは当たらない。

その最初の演者についての考察だ。

その演者の演技が素晴らしかったから、他の女優たちがその演技を真似た。

このレポートはここでは完全に評価されなかったみたいだが」

極東の没落魔術師が貴族主義の降霊科でどれだけ真面目に評価されたのやら。

そんな事を紫煙をくべらせながら考えていたら、ライネス・エルメロイ・アーチゾル  
テが声をかける。

「で、我らが恩人だが、更に出世するそうだ。

来年、かの国では省庁が再編されて、我が国で言う所の王室直轄の局長に就くらしい。

大臣・次官・局長だから、大出世だな」

「そんな要人を、この時計塔の主流派は封印指定する為に拉致しようとしていた訳だ。

これで時計塔単体でのあの人への封印指定は完全に消えたな」

その当人が、この世界ですらない場所で、時空管理局と共にヴォルケンリッター相手に死闘を始める前の一コマである。



## プリズマ・コース防衛戦 その2

数を集めて敵勢力をタコ殴り、というのはその連携と指揮が円滑に運用できるからこその話であり、ヴォルケンリッター掃討を考えていた俺たちをふくめた三つの勢力は、指揮連携がとれていなかった。

### 日本国自衛隊

目的 ゲート技術の調査開発とプリズマ・コースの調査と保護

損切ライン 地球世界へのヴォルケンリッターの侵攻

### 紅魔館

目的 大図書館から本の移動 レミリアの興味

損切ライン パチュリー・ノーレッジ及びレミリア・スカーレットに身体的ダメージを受けた時

### 時空管理局

目的 闇の書の捕獲封印

損切ライン 派遣戦力の壊滅及び撤退

「こちら時空管理局巡航艦『エステイア』！」

助けてくれ!!

ヴォルケンリッターに襲われている!

至急応援を……!!」

この手の作戦に素人である俺は、お目付け役でもあった美野原主席幕僚に助けを求めることにした。

「主席幕僚。

意見があつたら聞きたい」

「そうですね。」

まずは司令官は動揺したらいけません。

こういう時の一挙手一投足を隊員は見ています」

控えていた叢雲が『へえ。やるじゃない』という顔で美野原主席幕僚を眺める。

当人は気づいているかどうか分からないが、彼のアドバイスは続く。

「分かっている情報から確定させてゆきましょう。」

時空管理局の船は巡航艦と言っていましたな。

こちらの言葉で巡洋艦相当の人員が乗っていると判断しておきましょう。

そうなったら、三百人は乗っていると見るべきでしょう。

彼らを受け入れる体制を用意するべきです。

この船では、それを全員受け入れるのはきついでしょうからな」  
たしかにそう言われるとそうだ。

船そのものの定員は100人切っていた覚えがあるが、闇の書事件では武装局員の中队を借りれたとか言っていた記憶があつたな。

向こうからすれば、あまりに次元世界に拡張しすぎて手が回らないのだろうが、闇の書クラスの事件ですら『中隊』しか派遣できない所に、時空管理局の人手不足が透けて見える。

それを万年定数に届いていない海自隊員が言う辺り皮肉にしかなくていいが。

ヘリ空母ジャンヌ・ダルクの方は人員を用意できていないので空ではあるが、負傷者の治療などのスタッフはこちらから出す必要があるだろう。

「わかった。

叢雲とマシユ風から人員を出して、ジャンヌ・ダルクでの負傷者の治療の用意を」

俺の言葉を聞いていた海自の士官が敬礼して準備に走る。

それを見ながら美野原主席幕僚はさらに言葉を続けた。

「敵がどんなものか分からない以上、敵の情報は必要になります。

救助と同時に敵の情報を集める偵察隊を編成するべきです」

「マスタ―。

だったら俺が行くぜ！

いいだろ？」

「余もだ！

こういう時の先陣は戦場の華よな!!」

霊体なのを良いことに、こういう時だけ実体化して志願するモードレッドとその痴女スタイルで堂々とやってきて志願する大淫婦バビロン。

何かあつたら令呪やCOMPで戻せるので俺は彼女たちの志願を認めた。

「ああ。

好きに突っ込んでくれ。

何かあつたら令呪やCOMPで戻す。

それで救助と偵察隊だが……」

「ちよつといいかい。マスターくん。

向こうの座標は教えてもらったが、向こうのサポートなしでは魔力保持者無しの派遣は難しいと思うな」

救助隊選定に工房でモニターしていただろうロリンチちゃんが通信で声をかける。

こういう時の技術レベルの低さに足を引っ張られる。

送るのはコフィンシステムの応用で、魔力持ちしか送れないと来たか。

「あら。」

自分が行けば楽なのにつて顔に出ているわよ」

ステンノが微笑み、俺は肩をすくめて返事をする。

偉い人間なんてものにはなるもんじゃないな。

俺の出陣が無理ならば、送るのは彼女たちだろう。

「戦闘妖精少女の皆様を呼んでくれ。

彼女たちに偵察と救助の任務を与える」

### 『エスティア』の状況

1 ヴォルケンリッター撃退

2 同上

3 接戦

4 同上

5 苦戦 死傷者多数

6 同上

7 苦戦 死傷者多数な上に艦内システムをヴォルケンリッターが掌握中

8 同上

9 総員退艦命令発令

10 総員退艦命令発令 艦内システムをヴォルケンリッターが掌握しアルカンシエルチャージ開始

結果 8

「(り)やひどいな」

美野原主席幕僚がスーパーシルフちゃんに持たせたロリンちゃん謹製の魔力カメラから見える画像には、燃え盛る炎とスパークする電気、そして交戦によって倒れた武装隊員の姿が映っていた。

「この人、まだ息があるー」

「……はやく逃げろ。」

闇の書はここを急襲した後、管理システムを掌握にかかっている。

この船の動力炉である魔力炉からエネルギーを得て、時空管理局のデータベースにアクセスして魔法を一気にかき集めている。

総員退艦は時間の問題……」

現在の闇の書の魔法収集ページ 444 ページ。

ヴォルケンリッターのレベルはこのページ数の1/4

「待て！何か来る!!」

鎧姿のモードレッドが剣を構えて叫ぶ。

さすがの大淫婦バビロンも顔だけは真顔でその方向を見る。

そして炎の中から出てきて野獣の雄叫びをあげる盾の守護獣のザファイラ。

こりや、獣というよりも野獣だな。

盾の守護獣ザファイラ　バーサクモード

レベル　111

「ここは抑えるから、救助と搜索を優先しろ」

「支援は？」

「いらねえよ」

「向こうはそう思っていないみたいだけどな！」

モードレッド　攻撃

レベル90

大淫婦バビロン　攻撃

レベル69

スーパーシルフちゃん　救助　負傷者一人を叢雲側に送る

レベル12

メイヴちゃん 偵察 この戦闘での対象にならない

レベル56

シルフィールドちゃん 支援 支援なのでレベル半分だけ参加のかわりに対象にならない

レベル56

ファーンちゃん 救助 負傷者一人を叢雲側に送る

レベル23

ファーンIIちゃん 救助 負傷者一人を叢雲側に送る

レベル32

負傷管理局員 7人

モードレット

大淫婦バビロン

シルフィールドちゃん 支援

90+69+28 || 187



盾の守護獣ザフィーラ バースクモード

レベル 111

優勢比

187 : 1111 || 6 : 4

結果

1 モードレッド勝利

2 同上 敵消滅

3 同上 敵捕縛

4 同上 敵負傷後撤退

5 同上 敵撤退

6 同上 敵撤退

7 ザフィーラ勝利 モードレッド消滅 (令呪使用で撤退)

8 同上 モードレッドが大淫婦バピロンのどちらかが負傷

9 同上 戦場撤退 救助できない負傷者は見捨てる

10 熱烈歓迎

## 結果 4

「大技は使うな！」

船が壊れるぞ!!」

モニター向こうのモードレッド達に俺が注意をうながすと、やりにくそうにモードレッドがザファイラの爪を剣で弾く。

だが、タンクとしての役割をモードレッドは十二分に果たした。

この手の小技は大淫婦バピロンの方が多く持っているからだ。

「女帝のリビドー！」

敵全体に大ダメージの上にCHARMの追加効果がある。

ザファイラの動きが止まる。

その隙をシルフィールドちゃんは見逃さなかった。

20ミリガトリング砲がザファイラの体を痛撃するが、ザファイラは貫かれない。

もはやステンノから続く状態異常からの勝利はこちらのお家芸と言えよう。

!!!」

ザファイラは轟く叫び声をあげて炎の中に消える。

とりあえずは、追い払ったという所か。

「マスター。どうする?」

モニターからのモードレッドの問いかけに俺は命令を下す。

「とりあえず周囲を警戒。」

追加人員を送るから、負傷者の救助を進めてくれ。

搜索にハイピクシーと、消火を考えて、チルノ・ジャックフロスト・レティ・ホワイ  
トロツクを送る。

負傷者はジャンヌ・ダルクに運べ!

ジャンヌとブリジッドとダヌ様に任せれば、大体の傷は治るはずだ!」

ここで人員の不足がもろに出る。

魔力を持っているという制約にひっかかる人間が多すぎる……待てよ!

「クローン対魔忍が居たな!」

奴らなら微力だけど魔力を持っているはずだ!!

あれで隊を編成して搜索と救助に当てる」

「はっ!」

その命令お待ちしていました!!」

その胸と顔に見覚えがあった。

とりあえず聞いてみる事にしよう。

「何でここに居るのかな？」

甲河隴：「二尉になっているな。」

出世おめでとう」

「ありがとうございます。」

下船命令出てなかったじゃないですか。

我々は司令官へのハニトラ要員でもありますから、当然残りますよ。

あと、市ヶ谷は内務省の司令官搔つ攫いを認めた訳ではありませんので。

上にあげないかわりに色で釣つところという下心もあるみたいですよ♪

もちろん、特殊作戦第四中隊、第四小隊所属、甲河班以下七名全員乗船しております」

この非常時に聞きたくなかった霞が関の勢力争い。

とはいえ、使える対魔忍が増えたのは喜ぶべき事なのだろう。

「地球の外で死ぬ可能性もあるぞ」

「それ、悪魔に永久に犯されて孕まされるより楽だと思うので問題ないです」

「わかった。」

「15分やるから対魔忍で小隊を編成しろ」

「はっ！」

敬礼して出てゆく甲河隴を眺めながら俺はため息をつく。

レベルが低くて使えないと思ったら、魔力持ちという事でコフィンシステムに対応できるこの特異性。

時空管理局が喜んで触手を伸ばしてくるなど思ったので、対魔忍クローン事業をノマドからヨロシサン製薬に移しておいたほうが良さそうだと密かに俺は思う。

「ますたあ♪」

私も、出ていいかな？」

色気づく褐色ロリことクロエ・フォン・アインツベルンがおねだりポーズで参戦をねだるが俺は首を横にふる。

「駄目。」

お子様は食堂でおやつでも食べてろ」

「べーっだ！」

じゃあ……」

魔法少女の変身はデフォである。

大人への変身も懐かしいといふかなんというか。

立派なアチャ子になったクロエはえへんとその豊満な胸を揺らしておねだりする。

「だめ？」

「……さっきの臈二尉についてゆけ。」

彼女かモードレッドの言うことをちゃんと聞くんだぞ」

「もちろん♥

今度いっぱいサービスしてあげるね。ますたあ♥」

るんるんで出てゆくあちや子を見て叢雲がぼつり。

その後ステンノが容赦なく決る。

「たしかにあれ、司令官の好みの胸だわ」

「おまけに少女にもなれる。」

そりゃ重宝するわよねえ」

最古参二人のつつこみに俺はモニターを見つめることで無視をする事にした。

ヴォルケンリッターの艦内システム掌握率

61%

時空管理局巡航艦『エスティア』乗員＋武装中隊人数。

乗員68人＋武装中隊で300人で設定。

現在の死傷者数

176人

『エスティア』艦船ダメージ

$\frac{1}{7}\%$

## プリズマ・コース防衛戦 その3

編成が終わった甲河隴二尉以下の小隊が時空管理局巡航艦『エステイア』に着いた時、甲板の負傷者は収容し終わり治癒魔法をかけてジャンヌ・ダルクの方に搬送していた。

「トレボー。」

聞こえますか？

こちら、ニンジャ01」

「こちらトレボー。」

問題なく聞こえる。

君たちの仕事は、負傷者の収容と調査だ。

負傷者から聞いた所によると、敵はレイバーロード四体でワードナの存在は未確認だ。

対処はナイト連中に任せて遭遇したら逃げるように」

「了解」

隴二尉との交信が終わり、俺はモニターを眺める。

コールサインはわかりやすいものを選んだが、たしかにかっこいいなこれ。



モードレッドとアチャ子クロエと大淫婦バピロンのコールサインが『ナイト』。戦闘妖精少女達のコールサインが『フェアリー』。

追加で送った仲魔たちのコールサインが『バード』である。

「船の形がどういふものか分からないから、内部探索はどこにできるのかしら……？」

チルノやジャックフロスト達が凍結魔法で消火を始めると、ザフィーラが逃げた通路がモニターに現れる。

他にも通路がいくつか発見されて負傷者からの情報で船の全体像が見えてくる。

「ここが甲板で転移ゲートが用意されている。」

下に行くとは機関区と倉庫があり、上に行くとは居住区がある。

艦橋は居住区の上で、サブコントロールルームは機関区の中にあり、普段は使われていないそうだ。

レイバーロードの一体は艦内システム掌握に動いているから、まずはサブコントロールルームを抑える事から始める。

ナイト01と03はサブコントロールルームの掌握。

残りは負傷者搜索が終わったら一旦トレポーターに戻れ」

「了解」

令呪による帰還ができるモードレッドとアチャ子をつつませて、残りは一旦下から

せる。

敵の艦内システムが掌握した時に残っていたら、人質になりかねないからだ。まずは、安全を確保する必要があった。

甲板及び周辺通路の死傷者数

93人。7人は救助。

うち死者。

49人

残り負傷者

37人

対魔忍小隊

27人

負傷者の収容に2ターン必要

戦闘妖精少女

5人

甲板警戒中

大淫婦バビロン

## 甲板警戒中

ヴォルケンリッターの通信傍受判定

ヴォルケンリッターの艦内システム掌握率

61%

それ以上で成功。

結果 11%

気づかない

ヴォルケンリッターの行動

1 艦橋攻撃

2 同上

3 居住区制圧

4 同上

5 甲板攻撃

6 同上

7 艦内システム掌握

8 同上

9 同上

10 熱烈歓迎

烈火の将 剣の騎士シグナム バーサクモード

レベル111

行動 2 艦橋攻撃

紅の鉄騎 鉄槌の騎士ヴィータ バーサクモード

レベル111

行動 2 艦橋攻撃

風の癒し手 湖の騎士シャマル バーサクモード

レベル111

行動 7 艦内システム掌握

蒼き狼 盾の守護獣ザフィーラ バーサクモード 負傷中

レベル111

行動 5 甲板攻撃

闇の書のマスター ???

10の熱烈歓迎以外なら姿を見せず

サイコロ 7 姿を見せず

「(こちらニンジャ01。」

あちこちに負傷者が居る。

向こうに送り返すだけで時間がかかる」

「(こちらトレボ。」

時間が無いから死体には構うな。

負傷者のみを運べ」

「了解」

この状況を見て美野原主席幕僚がつぶやく。

「多分、管理局は敵の来襲を知っていたのでしようね。

だから、出入り口に兵を集めて撃退しようとした」

「それに失敗してこの惨状か。

突発的にやってくるお客様への対処、考えておいてくれ」

モニターのスピーカーから大淫婦バピロンの声が響く。

実に楽しそうな声は敵の襲来を告げていた。

「サマナー。」

客だぞ。

あの犬がまたやってきおったわ！」

スーパースシルフちゃんが持っていたカメラに負傷したザファイラが姿を現す。

それに剣一つで立ち向かおうとする大淫婦バビロンはカッコいいのだが、その痴女スタイルでなければ。

戦力の分散が裏目に出たか。

「抑えきれるか？」

「誰にものを言っておる。」

ただサマナーは命じればいい。

この大淫婦バビロンに『敵を倒せ！』と!!」

うん。

カッコいい口上なのだが、ザファイラと向き合っているので、映っているのは彼女の尻である。

少し気が抜けたが、舐めていい相手ではない。

「フェアリー01を除いた全フェアリーはナイト02の援護を」

「ニンジャとバードは現時点を持って撤退せよ」

「ニンジャ了解」

## 「バード了解」

大淫婦バビロン 攻撃

レベル69

スーパースシルフちゃん 偵察

この戦闘での対象にならない

レベル12

メイヴちゃん 攻撃

レベル56

シルフィールドちゃん 攻撃

レベル56

ファーンちゃん 攻撃

レベル23

ファーンIIちゃん 攻撃

レベル32

対魔忍小隊 撤退中

他の仲間 撤退中

6  
9  
+5  
6  
+5  
6  
+2  
3  
+3  
2  
||  
2  
3  
6

盾の守護獣ザフィーラ バースクモード 負傷中

レベル 111

優勢比

236 : 111 || 7 : 3

結果

1 大淫婦バビロン勝利 敵消滅

2 同上 敵消滅

3 同上 敵捕縛

4 同上 敵負傷後撤退

5 同上 敵負傷後撤退

6 同上 敵負傷後撤退

7 同上 敵撤退

8 ザフィーラ勝利 大淫婦バビロン負傷



9 同上 大淫婦バビロンと戦闘妖精少女の何人か（サイコロで決める）負傷

10 熱烈歓迎

結果 4 大淫婦バビロン勝利 敵負傷後撤退

戦いは最初より楽だった。

広い甲板ではなく通路であり、戦闘妖精少女達の20ミリ機関砲が通路いっぱい弾幕を展開してザファイラを近づけさせなかったのである。

獣の轟吠をあげながらザファイラはついに甲板に近づけずに撤退する事になる。

「こっちはどうやらなんとかなりそうだ」

「あれ、捨て石みたいですね」

俺の偽りない感想など気にすることなく、美野原主席幕僚はつぶやく。

美野原主席幕僚の呟きが真実だとしたら、残り三騎はどこに行ったのか？

その答えの一つがモニターに映し出されていた。

あちや子にもたせていたカメラが機関区のドアを映していた。

「（カ）が機関部か。」

突っ込むぜ！」

二人はドアを開けて中に突っ込む。

サブコントロール室には周囲につけられたモニターの明かりと中央で魔法陣を操作する湖の騎士シヤマル。

モードレッド 攻撃

レベル90

クロエ・フォン・アインツベルン あちや子モード 攻撃

レベル90

90+90=180

風の癒し手 湖の騎士シヤマル バーサクモード

レベル111

優勢比

180:111=6:4

結果

1 モードレッド勝利 敵消滅

2 同上 敵消滅

3 同上 敵捕縛

4 同上 敵負傷後撤退

5 同上 敵負傷後撤退

6 シヤマル勝利 モードレッド消滅 (令呪により撤退可能)

7 同上 闇の書にモードレッドとクロエの両方が吸われる (負傷扱い)

8 同上 闇の書にモードレッドかクロエのどちらかが吸われる (負傷扱い)

9 同上 自爆装置を起動して撤退 (解除可能)

10 熱烈歓迎

結果 10 熱烈歓迎

結果 10 熱烈歓迎

1 クリティカル

2 ファンプル

結果 2

何が起こった?

1 二人共待ち伏せされて闇の書で吸われた上に逃げられる

(負傷扱いの上闇の書のページが二人のレベルの1/10分進む)

2 同上

3 同上

4 二人とも闇の書で吸われて消滅（令呪帰還可能）

5 同上

6 同上

7 艦内システム掌握されて帰還不能に

8 同上

9 闇の書のマスター

10 熱烈歓迎

結果 2

二人共待ち伏せされて闇の書で吸われた上に逃げられる

（負傷扱いの上闇の書のページが二人のレベルの1/10分進む）

クロエが持っていたカメラに映ったモニターには、甲板やその通路での戦闘が映し出されていった。

待てよ。

ということとは、奴らこっちの行動を知って……っ！

「罠だ!!!」

「遅い」

シヤマルの低く抑揚のない声と共に、画面が消える。

「モードレッド！」

クロエ！

応答しろ!!」

コールサインを忘れて叫ぶ俺にモードレッドの声 पास越しに聞こえてきたのはしばらくしてからだった。

多分2—3分も経っていないだろう。

（うっせーな。

二人とも無事だよ。

不覚をとつちまったがな）

俺は安堵の息を吐いて椅子に腰掛ける。

このやり取りは艦橋内では繋がっているステンノと叢雲にしか聞こえない。

（完全に待ち伏せされた。

わけのわからん魔法陣に捕らわれて、消耗して、今出た所だが、敵は逃げちまった。

何か前のモニターがピコピコ言っているがなんだこりや?）

艦橋防衛戦

1 艦橋防衛成功

- 2 同上
- 3 同上
- 4 陥落寸前 自沈装置作動 (解除可能)
- 5 同上
- 6 同上
- 7 同上
- 8 艦橋陥落 システム掌握開始
- 9 システム掌握完了 ゲート封鎖
- 10 アルカンシエルチャージ開始
- 結果 7 陥落寸前 自沈装置作動 (解除可能)

「こちらフェアリー01。」

艦内にアラートが鳴り響いている。

負傷者の言葉だと、自沈装置が作動したと言っている」

## プリズマ・コース防衛戦 その4

『エスティア』自沈までのカウントダウン

残り43分

自沈解除リミット24分

『エスティア』甲板の負傷者を救助して、総員脱出しろ」

俺は救助をここまでと割り切って打ち切り命令を出した時、異を唱える通信が響く。

モニター映し出されたのは海自服ではなく海賊服のドレイク船長だった。

「情けないねえ。マスター。」

船を捨てたと言っているのだから、もらっちゃまうチャンスじゃないか！」

隣のマシユもサーヴァント姿になっている。

この人、サーヴァント時は提督より海賊側の面が強く出ていたな。

「自沈まであと40分ぐらいしか無いが」

「40分ぐらいもあるのだろう！」

もらえる物はもらっておかなきゃ！

それに……」

ここで一度言葉を区切り、悪魔の誘惑を囁く。

彼女アルマダの海戦で副司令官だったが、こうやって上をその気にさせたのだなきっと。

「マスターの目的である、ターミナル技術だっけ？」

それを実用化している船が運が良ければ手に入るんだよ♪」

駄目だ。

この誘惑には勝てない。

さすが人類史に輝ける星の開拓者。

「戦力は？」

モードレットとクロエは消耗しているぞ」

「あたしとマシユが出るさね。」

自沈そのものを止めてしまえば遠慮なく戦えるってもんよ。

サブコントロールルームを押さえて、あの船をここに飛ばせば戦力はいくらでもあ  
るってもんさね」

その発想は無かった。

美野原主席幕僚も呆然としているぞ。

「大体お行儀よく戦うってのがあたしは気に入らないんだよ。」



相手の勝ち誇っている顔をぶん殴りたいなら、相手の優位を消してしまうこつたね」  
いつの間にか手を回していたらしいロリンちゃんの声がスピーカーに届く。

彼女の声からも肯定的な意見しか聞こえない。

「座標についてはこつちがなんとかする。」

ドレイク船長は船と認識されるものを駆る才能持ちだ。

仮にも現代組織の『巡航船』程度ならばどうつてことないよ。多分」

「さあ、賭けの時間だ！

マスター。

一口乗るか？」

こういう時の指揮官の仕事は決まっている。

責任を取って任せることだ。

「一口？

勝ち確が決まっているなら、オールインだろうが!!

マシユ含めて、向こうに出している戦力の指揮権くれてやるから、海賊らしく『エス

ティア』を奪ってこい！」

モードレッド・クロエ（消耗中）

サブコントロール防衛

対魔忍小隊（甲河隴を除く）

甲板で負傷者救助中

仲魔（バード）

消火活動及び救助活動

戦闘妖精少女・マシユ・大淫婦バビロン・神獣ゲンブ・大天使イスラフィール・甲河隴

周辺警戒中

ドレイク船長

サブコントロールへ移動

ヴォルケンリッターの行動

1 艦橋攻撃

2 同上

3 同上

4 同上

5 撤退

- 6 同上
- 7 同上
- 8 甲板攻撃
- 9 同上
- 10 熱烈歓迎
- 結果 8 甲板攻撃

ドレイク船長の艦内システム掌握にかかった時間  
10分

オールインである以上出し惜しみは無しにした。

COMPに居た神獣ゲンブ・大天使イスラフィールも送り出す。

これでこっちの防衛は叢雲とステンノと艦娘ジャンヌ・ダルクが担うことに。

マシユ風は船体は残しているけど指揮はできないから戦力に加えるのが怖いし。

そんなマシユ風には、

「代理でも船長が居ないとまずいでしょ」

という意見で美野原主席幕僚が船長代行として出向いている。

一方でギャンブラーのくせに現実主義者なドレイク船長はサブコントロールへは一人で行き、消耗したモードレッドとクロエを防衛に当てた。

しくじったらこの三騎を令呪で帰せるといふ計算だ。

その動きをヴォルケンリッターは読んでいた。

こっちの活動拠点である甲板を抑えに来たのだ。

かくして、ドレイク船長が艦を掌握するまでに決戦が発生することになった。

### 『エステイア』乗員の選択

- 1 総員退艦命令発令 艦長は残っている
- 2 同上
- 3 同上
- 4 同上
- 5 残存戦力を集めて救助活動
- 6 同上
- 7 同上
- 8 残存戦力を集めて背後から奇襲
- 9 同上

結果 10 熱烈歓迎  
3 総員退艦命令発令 艦長は残っている

## プリズマ・コース防衛戦 その5

「アーマード・マシユ、行きます！」

甲板前通路。

そこが決戦の場である。

守りきればこちらの勝ち、突破されたらこちらの負けという分かりやすい勝負は、こうして幕を開けた。

マシユ風 防衛

スキル 【バンカーボルトA】使用。レベル50%UP。

スキル 【アマルガムゴートD】使用。このターンの敵攻撃は全てマシユに。

スキル 【悲壮なる奮起の盾】使用。無敵付与とHP消耗。

レベル72?1. 5 || 108

大淫婦バビロン 攻撃

レベル69

スーパースシルフちゃん 偵察 この戦闘での対象にならない

レベル12

メイヴちゃん 攻撃

レベル56

シルフィールドちゃん 攻撃

レベル56

フアーンちゃん 攻撃

レベル23

フアーンIIちゃん 攻撃

レベル32

神獣ゲンブ 魔法

レベル43

魔法 【リク・カジヤ】発動。防御力20%増加。

大天使イスラフィール 攻撃

レベル42

甲河隴 攻撃

レベル23

対魔忍小隊および他の仲間 負傷者を救助して撤退中

このターンで撤退終了

1 0 8 + 6 9 + 5 6 + 5 6 + 2 3 + 3 2 + 4 3 + 4 2 + 2 3 || 3 9 6

ヴォルケンリッター 全員バーサクモード＋モードレットとクロエの魔力吸収分  
4 4 4 + 1 8 || 4 6 2

烈火の将 剣の騎士シグナム 攻撃

〔シユランゲバイセン・アングリフ〕使用 バリア破壊効果

紅の鉄騎 鉄槌の騎士ヴィータ 攻撃

〔シユワルベフリーゲン〕使用 射撃魔法 バリア貫通・着弾時炸裂

風の癒し手 湖の騎士シヤマル 攻撃

治癒魔法使用 ザファイラの負傷回復

蒼き狼 盾の守護獣ザファイラ 攻撃

優勢比

3 9 6 : 4 6 2 || 4 : 5



## 結果

- 1 マシユ勝利 敵消滅
- 2 同上 敵負傷後撤退
- 3 同上 敵撤退
- 4 同上 敵撤退
- 5 ヴオルケンリッター勝利 マシユ大消耗の上闇の書ページ吸収 追撃発生
- 6 同上 マシユ大消耗の上闇の書ページ吸収
- 7 同上 マシユ中消耗
- 8 同上 マシユ消耗
- 9 同上
- 10 熱烈歓迎

結果 3 マシユ勝利 敵撤退

「シュランゲバイセン・アングリフ！」

「シュワルベフリーゲン！」

盾を構えたマシユに、シールド破壊魔法を容赦なくかけてくるシグナムとヴィータ。彼女の守りは破れたが、それは彼女が役立たずになったとはいえなかった。

「前に出ますっ!」

「……っ!」

無敵が貫通された。

それがどうした。

シグナムのレヴアンティンを盾で押し返す。

「まだ、倒れません!!」

盾を構えて立ちふさがる。

敵弾が爆発した。

それがどうした。

彼女の短くて長い旅路では何度もあつた戦闘の一つにしかならない。

そして何よりも、彼女には俺を含めた仲間たちが居る。

「援護する」

「余を忘れてもらつては困るぞ!」

防衛専念のマシユを潰して一気に突つ込むことができなくなった結果、必然的に警戒が薄くなった大淫婦バピロンがシグナムに突つ込み、戦闘妖精少女たちの20ミリ砲が

ヴィータを襲うが、それを回復したらしいザフィーラが弾く。

マシユは後退し、その穴を神獣ゲンブと大天使イスラフィールが塞ぐ。

モニターからしか見れないが、マシユの勝利は薄氷の勝利だった。

敵のバリア破壊攻撃で無敵が抜かれた時は焦ったが、神獣ゲンブのラク・カジヤが救った。

重ねがけが無かったら、マシユは抜かれていただろう。

「こちらニンジャオー。」

バードと自分を除いたニンジャたちは、負傷者を連れて撤退終了した」

甲河隴二尉の報告で俺は安堵のため息を漏らす。

少なくとも、これで負けは無くなった。

「どうだ。みろ。」

俺のマシユは強いんだぞ」

安堵の強がりを漏らした俺にステンノが容赦ないツツコミを放つ。

「そうね。」

だから、あの娘にも種火あげて頂戴な」

そうしよう。

というか、人材も増えたから種火専属要員を確保しようと思に誓う。

叢雲がそつとハンカチを差し出し、俺は額の冷や汗を拭った。

「こちらドレイク！」

サブコントロールを掌握した!!」

その艦内放送が聞こえてきた時、ついにヴォルケンリッターは撤退を開始する。  
「敵を追うな。」

それよりも、負傷者の救助を優先しろ。

ロリンチちゃん。

向こうに行って、データ収集を頼む」

「任せて♪」

艦内の残り死傷者数

66人

うち死者

11人

ロリンチちゃんのデータ収集

自身の【道具作成（A）】

ドレイク船長の【幸運（EX）】と【黄金率（B）】の補正あり。

ミッドチルダ式魔法の理解率

95%理解

ミッドチルダ式デバイス

73%理解

ミッドチルダ式魔力炉

42%理解

転移システム

83%理解

次元空間航行艦船

86%理解

時空管理局機密情報

38%入手

さすが万能の人。

向こうに行ってミッドチルダ式魔法をほぼ完璧に理解するとは思わなかった。

欲しかった転移システム理論もほぼ入手できたし、奪ったというかクライド・ハラオウン艦長が残っている『エステリア』はおとなしく時空管理局にお返しする事にしよう。

どうせあの船、しばらくは動けないだろうし。

戦闘での損害は比較的軽微だったのだが、乗員と武装中隊300人の内、60人の死者と99人の負傷者を出してしまったのだ。

半数以上の死傷者を出して作戦続行は不能な上に、航行スタッフも疲弊している。

応援が来て交代は確定なのだが、ここで下がると逃げたヴォルケンリッターの行方がわからなくなる。

という訳で、エステシアはプリズマ・コース世界の静かの海に停泊して応援を待つことになる。

艦長と執務官の状態

- 1 無事
  - 2 無事
  - 3 無事
  - 4 負傷
  - 5 負傷
  - 6 死亡（艦長は生存）
- クロノ・ハーヴェイ執務官
- 5 負傷

クライド・ハラオウン船長

#### 4 負傷

なお、二人共負傷しており、回復魔法は最後でいいという事でエステシアの病室で横になっている。

100人近い人間に回復魔法をかけるだけのヒーラーはこちらは用意していなかった。やばい連中だけは大急ぎでかけたが、ダヌ様と女神ブリジットとジャンヌ・ダルクがヘロヘロになる事態に。

闇の書がらみの情報 38%以下で成功

#### 結果 2

「で、だ。

マスターくん。

向こうのデータから襲ってきた連中の情報を引っこ抜いてきたけど見るかい？」

真顔で報告書をよこすロリンちゃんらはこの結論はなんとなく分かっていたのかもしれない。

ここまでクレバーにヴォルケンリッターを動かしていた闇の書のマスターがモブで

はないと思っていたが、ここまでマッチポンプをカマしてくれるとは思っていなかった。

「闇の書事件は案の定管理局上層部が絡んでいやがったか……そりゃ、そうだよなあ……」

闇の書。

正式名称は『夜天の魔導書』。

本来は各地の偉大な魔導師の魔法を記録し、研究するための資料本のようなストレージなのだが、歴代の何人かの所有者が己の欲望のままプログラムを改変した結果、闇の書に変質した訳で、その所持者が案の定管理局関係者だったという訳だ。

ギル・グレアム提督が『なのはA's』でやらかしてほぼお咎め無しで終わり、リン・デイ・ハラオウン提督があの大出世を遂げた理由がやつと理解できた。

そして、現在の所持者は時空放浪者に無理やり融合させたもので、その名前は機密指定されておりわからなかった。

ドレイク船長のお宝判定 100ほど良いもの

結果 39

「今帰ってきたよ♪」



そこそこのお宝を手に入れたんだよ♪」

サブコントロールの隣が倉庫だったから、ドレイク船長は空いた時間に漁ったらしい。

見てみると多分武装局員の予備デバイスの一つなのだろうな。

ロリンチちゃんはミッドチルダ魔法をほぼ理解できているから、彼女にあげてみよう  
と心に決めたのだった。

## プリズマ・コース防衛戦 その6

現在穏やかな海に停泊しているのは、叢雲とジャンヌ・ダルクとマシユ風と時空管理局巡航艦『エステティア』の四隻のみ。

ジャンヌ・ダルクに受け入れた管理局員の負傷者達の治療にマシユ風の人員の大部分を移したのだ。

「で、負傷者の治療についてはどうだい？」

モニター向こうのジャンヌ・ダルクが淡々と報告する。

こういう時、レベルが上がった聖女様は強くて頼もしい。

「はい。」

とりあえず、負傷者の治療は終わっていますが、魔力の消耗が激しくそっちの回復には目処がついていません」

「向こうの魔力炉から魔力を彼らに注入というのも考えているが、その回復装置もフル稼働中だ。」

こっちはこっちで敵に備える必要があるから、魔力炉からの魔力注入はお勧めしないな」

隣のモニターからロリンチちゃんが口を挟む。

ロリンチちゃんは、叢雲内部の工房で理解した時空管理局の魔法技術をまとめたのだ。

つくづく来てもらって助かる人材である。

「管理局の人達は、リンカーコア、我々で言う霊基があるからこそ、世界にある魔力を直接吸収できる。

こちらの魔術刻印がその本人の魔力を前提に機能するのに対して、このリンカーコアは、外からの魔力吸収に優れている。

これだけでも、時計塔の貴族たちがぶっ倒れるだろうね」

型月世界の魔力炉はつまる所、コンバーターと呼ばれる変換器なのだ。

それが、霊力なのか電力なのか、また別の何かなのかはともかく、魔力に変えるから魔力炉という訳だ。

霊地と呼ばれる魔力の濃い所に行けば、魔術師はある程度の吸収はできるが、その効果はあまり高くはない。

その為、カルデアでは原発を稼働させて電力を魔力に変えるという荒業でサーヴァントの大量召喚と運用に成功する訳で、今は亡きケイネス先生の遺産からパチつてきた魔力炉もこのコンバーターであるから、叢雲やマシユ風の動力炉に繋げることでその性能

を發揮させているという訳だ。

裏返せば、魔法が熱文明の熱量というリミッターがつけられる事を意味する訳で、完全の状態の英雄王様を顕現させる為に、現在東京湾上に100万kwクラスの火力発電所の建設に勤しんでいる訳で。

発電所の電力は足りるが、この電力を十全に利用できるコンバーターがなくというかそんな発想がこの時代の魔法側にある訳もなく、この『エステシア』の魔力炉にロリンチちゃんが狂喜したのは言うまでもない。

「まったく羨ましいよ。」

彼らは、世界そのものを魔力に変えているんだから。

その効率是我々よりはるかにいいからあんなものを作り上げられる」

それを理解するロリンチちゃんまじロリンチちゃん。

ロリンチちゃんの言っている事はこういう事だ。

魔力という火を世界によって燃やしている。

正確には、世界という『情報』を『魔力』に変改して事象を好き勝手に改ざんする。

だからこそ、『虚数空間』なんてものができる訳で。

あれ？

次元震の原因ってこれじゃね？

「マスターくん。

我々が危険性を知りながら核を手放さないと同じだよ」

考えていた事がばれたらしいロリンちゃんか俺をたしなめる。

文明が違えども、進化の果てに滅ぶというのは、生命の宿命なのかもしれない。

俺は咳をわざとたてて話をもとに戻す。

「で、管理局の増援についてはどうなっている?」

管理局の増援

1隻が7日後

「クライド・ハラオウン艦長曰く、上司のギル・グレアム提督自ら駆けつけるそうですが、彼の乗る船一隻が限界らしく、それも一週間後」

知ってた。

管理局はあまりにもあちこちの世界に手を広げすぎた。

その為、管理外世界でのトラブルに対処できる戦力が枯渇していたのである。

だからこそ、ジュエルシードにせよ闇の書にせよ、アースラ一隻で対処することになった訳で。

この世界を守りたかったら、我々が踏ん張るしか無いのだろう。

ヴォルケンリッターの襲撃日

5日後

襲撃先

- 1 水晶宮
- 2 中立地帯
- 3 大図書館
- 4 穏やかな海
- 5 溟海の城
- 6 お菓子の城
- 7 深雪の城
- 8 冬木市ゲート出口
- 9 穏やかな海
- 10 熱烈歓迎

結果 10

1 クリテイカル

2 ファンブル

結果 1

1 アマテラス様

2 カルデア

3 オルレアン

4 チェイテピラミッド姫路城

5 月

6 熱烈歓迎

結果 5

「来ないな」

「来ないわね」

「来ないじゃない」

万全の準備で防衛体制を敷いて待つてはや5日。  
そろそろ緩んできた所にその連絡が入る。

急にモニターがついて、見慣れたというかあまり見たくない文字が。

『……now Hacking』

……OK!

BB Channel』

「BB——、チャンネル——！」

……をえええええ……」

何か吐いてるし！

というか、見せていいいいのかその顔。

初登場のインパクトは大事だけど、ゲロインはどうかと思うぞ。BBちゃん。

ヴォルケンリッターの攻撃 40

BBちゃんの防衛 56

「えっと、あまり尋ねたくないのだが、ヴォルケンリッターって連中、そっちに行ってる

？」

「ええ。

来てますとも！



あたり構わず食い散らかして、押さえるの大変だったんですからね!!  
センパイ!

責任をとってください♥」

そこに映る小悪魔系後輩のBBちゃん。

なんとか、ヴォルケンリッターの暴走は抑えたいらしい。

ヴォルケンリッターの連中、よりもよって月に行ったらしい。愚かな。

挙げ句に、ムーンセルに突っ込んでBBちゃんとバトつたと。

BBちゃんもウイルスみたいなものだが、仮にもムーンセルの上級管理AIが負ける訳もなく。

「で、これ何ですか?」

なんとか隔離したヴォルケンリッター……あれ?

一人しか居ないぞ。

「こいつだけ?」

「ええ。」

ムーンセル内部を全スキャンしましたが異物のウイルスはこれだけですよ♥」

という事は、ヴォルケンリッターは闇の書に吸収されて闇の書本体が発現して……よ

く抑えきったな。BBちゃん。

けど、ここまでお膳立てするかあ。

BBちゃんの中にいるかも知れないニヤル様に警戒しつつ、そのニヤル様の哀れな犠牲者というか、対ニヤル様最強兵器の一人である彼女、メアリ・クラリツサ・クリステイは、闇の書を抱えて静かにBBちゃんの電腦空間で眠りについていた。

「で、センパイ♥

どう責任を取ってくれるんですかあ♥」

ぶりつ子BBちゃんのおねだりというか脅迫に俺はモニターをポチポチ。

「どうしました？」

「マスター？」

「ゲッ！」

モニターのルーラーでもあるジャンヌ・ダルクにBBちゃんが実に嫌な声を出す。

ついでとばかりに、COMPをポチポチ。

「どうした？」

「サマナー？」

「何でこいつが居るのに、私は呼んでくれないんですかああああ!!!」

痴女セイバーじゃなかった大淫婦バビロンの姿を見て叫ぶBBちゃん。

たしかにこいつと相性悪そうだからなあ。

さすがにモニター越しでは、これの中身までは見れないか。とどめとばかりにダヌ様を召喚。

あ。完全に固まりやがった。

そりや、わかるよなあ。知っているよなあ。

欧州というかユーラシア地母神の祖という事は、チャタル・ヒュククの女神の同一体でもあるのだから。

「さてと。」

メインのご登場をば」

「あれですか？」

あいつですか？

私、また鉄拳聖裁されるんですかあ？」

泣き叫んで混乱するBBちゃんというレア画像を見ながら感想を心の中でぼつり。

やつぱり、あの聖女様にしつかり天敵意識ができていたか。

後で探しに行くでしょう。

## プリズマ・コース防衛戦 あとしまつ その1

人間何処から語ればいいかわからないものは色々ある訳だが、とりあえずあの特異点ことプリズマ・コースにて起こった後始末について話そうと思う。

闇の書の一件というかその過程で発覚した月のムーンセル・オートマトンの存在に各国政府は頭を抱えたのは言うまでもない。

その上、『俺達のいる世界』の月にはそんなものが無い事まで分かり、安堵したと同時に残念に思っているふしがありありと。

米国を始めとした大国が急に月面探索を名目に宇宙開発予算をつぎ込みだしたのは間違いなくこれが理由だろう。

「まあ、無いと分かっているけど、実際に見てみないと人間納得しないですからねえ」  
当たり前のように居るBBちゃんの言葉に俺は苦笑するしか無い。

マントをつけておパンツ丸出しなんだが、言わないのがマナー。

何で彼女がこつちにやってきたかというと、ムーンセルに突っ込んだ闇の書の処理過程で、別世界に送ったFGO世界線経由で俺の世界線を見つけたらしく、だったら知己であるBBちゃんにこの一件を押し付けたという事らしい。

要するに、闇の書というウイルス駆除にF G O B Bちゃんというウイルスを注入するという毒を以て毒を制すような顛末に聞いていた俺は苦笑するしか無い。

「とは言いながら、ムーンセルにアクセス権あたり残しているんじゃないのか?」

「センパイが私のことを高く評価してくれるのは嬉しいんですけど、アレはそこまで甘くないですよ」

B Bちゃんは否定するが、それを確認することができない以上彼女の言葉を信じる以外にないわけで。

なお、このムーンセルについて驚愕したのはもちろん時空管理局。

彼らはムーンセルがある世界に行けるので、ロストログア認定して回収しようとして見事に返り討ちにあつたとか。

ざまあと笑いたい所だが、事情を知っている俺に対して色々と圧力が。が。

それを防ぎつつ、火に油を注いでくれるB BちゃんマジB Bちゃん。

「で、闇の書は結局どうしたんだ?」

「あれ、結局分解『は』しましたよ。」

サンドボックスとして利用したサクラ迷宮内にて、かの闇の書はあわれB Bちゃんに分解されました。

めでたしめでたし」

だそうだ。

彼女の言葉を信じるならばだ。

「闇の書ってさ。」

無限転生機能がついていたんだがなあ。

バラした時点で転生していると思っただが」

ぽつりと俺が核心情報を言う。

B Bちゃんの笑顔は揺らがない。

「へー。」

そうなんですか。

それは知りませんでした。テヘペロ♥」

しらを切るB Bちゃんに俺は少しづつ手を詰めてゆく。

相手が相手だけに今回の探偵は細心の注意を払わざるを得ない。

「ところでさ、闇の書の使用者の少女。」

何処からやってきたんだろうな？」

「何処からですか？」

叢雲の艦内後部。

ロリンチちゃんの異界にて作られた談話室だからこそ、盗聴も妨害もない。

それは同時に、何かあったら助けを求めるのに手間がかかる事も意味する。  
「無限転生機能。」

多分、時空を越えて適正者を探す機能もついているんだろうなあ。

ハックを仕掛けるならば、さぞ好都合のタイミングだろうなあ」

「センパイ。」

私の話聞いています？

サクラ迷宮であの闇の書は解体されたって言いましたよね？」

「ああ。」

あれは君の城でもあるからね。

あつそこだったら、色々できるだろうなあと思ったただだよ。

たとえば、20世紀初頭の大英帝国ロンドン、科学でも魔術でもない、蒸気の国のお姫様のデータを受け取る程度の事はできるんじゃないかなと思ってね」

B Bちゃんの空気が変わる。

だと思った。

「センパイ。」

あの娘の事知っているんですかあ？

相変わらず、手が早いんだからあ♥」

「それでもないさ。」

彼女には熱狂的なファンが居てね。

彼が本人を連れて行くのを望まないだろうと思っただけさ」

某TRPGなら、ここでSANチェックだろうな。

ぼろりと服の裏に貼ってあつた状態異常回復の鎮心符が灰になり床に落ちた。

「闇の書の今回のマスターな。」

多分管理局内部の人間だったんだよなあ。

それも、かなりやばめの話で、記憶転写型クローンを作り出す研究のおそらくはプロトタイプだったのかなあと」

後始末の為にプリズマ・コースにて会談する事になった管理局のギル・グレアム提督に話を振ったら、ほぼ黒でしたよ。

そりゃ、プロジェクトFの初期素体がこんな事になったら、計画は捨てられるわな。

知っているのを良いことにカマをかけてみたら、向こうの動揺がえらいことに。

ムーンセルに絡まない事を条件に管理局側から大幅譲歩を引つ張り出せたので、多分間違いないと思っっている。

尤も、奴らでムーンセルをどうにかするリソースはもはや無いので、いずれ放置確定という所に落ち着くだろう。



「そのマスターと今回、ムーンセルからやってきた少女の顔が違うんだ。どうしてなんだろうなあ？」

おそらくは、マスターの少女をムーンセル内部で情報分解した上で、闇の書の無限転生機能の応用で彼女のデータをコピーしたのを記憶転写クローンである彼女に落とし込んだ。

ムーンセルという化物演算機と、送信元の無理を押し通す何かが必要でできない力技だろう。

という訳で。

ネタバラシタイムといこう。

「で、BBちゃん。

今日はつけていた髪飾りしていないんだね。

星5のやつ」

「……こういう時、こう言うべきなんでしょうね。

『センパイのような勘のいいマスターは嫌いです』でしたっけ？

いつから気づいていましたか？」

「最初から。

あの娘、知っているんだよ。

その物語も、誰のお気に入りかもね」

「なーんだあ。」

わざわざ騙そうとカマトトぶった私が馬鹿みたいじゃないですかあ♥」

B Bちゃんが笑う。

妖艶に、獯猛に。

B Bホテップとして。

ニヤル様侵食率 25%

「で、わざわざこの遊び場に来てきたのはどういう理由で？」

「決まっているじゃないですか♥」

こんな格好の遊び場を独り占めなんてずるくないですか？

私も遊びたい♥」

だと思った。

俺は立ち上がる。

彼女との話はこれでおしまい。

「好きにすると良い。」

手を出さないし、出すつもりもないよ」

「あら。」

絶対討伐すると密かに戦闘準備に入っていたのですが♥」  
テヘペロと笑うB Bちゃんだが、目がしつかりと赤である。  
そんな彼女に、同業者として俺はひと声かけた。

「仕える神が違うとは言え、振り回されるのは同じだからな」  
アッコ女神とニヤル様。

たぶんどつちもどつちだと思いながら、俺は部屋を出る。

なお、案の定B Bちゃんはいつの間にか姿を消していた。

医務室で寝ているメアリ・クラリツサ・クリステイを残して。

次に会う時は多分、日本にやってきた時だろうなあ。

あのアマテラス様、キヤス狐の情報も持っているし……

## 閑話 小ネタ劇場 その5

警察が自衛隊のクーデターを恐れて警察軍の創設に動いた時、問題になったのは装備だった。

そもそも、暴徒鎮圧の目的としては、優れた経験と実戦経験を持つ機動隊が存在しており、日本人のしかも自衛隊員を対象にするこの警察軍は実際に非常時だからという事で承認されたといういわくつきの鬼子である。

という訳で、人員から装備に至るまで自衛隊の手は借りられない。

そんな状況で、政治的寝技を駆使して帝都警としてその創設にこぎつけた室戸文明は間違ひなく悪党であると言わざるを得ない。

そこに、外様であり鬼札である入即出やる夫が絡んだ結果、実にろくでもない化学反応を発生させたのである。

新潟港。

絶賛混乱中のロシアからの貨物船から大量に降ろされるBTR—80。

それを眺めながら室戸文明が呟く。

「たしかに、早急な対自衛隊用武装組織は必要だと言ったが、東側から格安で持ってくる

という発想はなかったな……」

人間については、ハイテクカーとオイランロイドと対魔忍でなんとかしたが、武装と上級士官連中の確保が問題だった。

対テロ組織用の部隊が秘密裏に作られてはいたが、クーデター規模の自衛隊部隊に対処するには武装と装備が足りず、クーデター鎮圧後の処遇を考えたらキャリアをそつちにするのも躊躇われたからだ。

その点、経済が崩壊して絶賛混乱中の東側からは、武器から人員に至るまで格安で入手できるのだった。

使い捨てるには実に都合が良い。

「あんたが雇い主か？」

「ああ。」

契約は既に交わした通りだ。

期間は五年、もしくは我が国で起きるクーデターを鎮圧できるまで。

支払いはドルの現金で、新しく身分も用意する」

「金さえ払われるなら、こっちは問題がない。」

私だけでなく、遊撃隊全てを雇ってもらえて、仮想敵の一つだったヤポンスキを殺せるといふのだから乗らないわけがない」

そこで彼女は啞えていた葉巻を海に捨てる。

壮絶な火傷の痕が彼女の凄みを際立たせる。

「ただ、KGBと同じ匂いがするあんたがボスなのは気に入らないが」

「それは失礼。

とはいえ、我慢してくれたまえ。

それができるだけのドルは渡していると思うが？」

「たしかに。

ビジネスに私情を挟むつもりはないさ」

貨物船から降ろされてゆく自動車化狙撃大隊規模の装備を眺めながら、彼女は感慨深

い声を漏らす。

「ピカピカの新品じゃないか。

ある所にはあつたんだらうねえ。

アフガンじゃ、まったく見当たらなかったけど」

「ジャパンマネーでロシア極東軍のお偉方をぶん殴っただけさ。

君たちは汚れ仕事をやってもらう。

あれを使うのはまた別の連中さ」

入即出やる夫はロシア側の情報にも精通していた。

彼女みたいな能力があったのに政治的に追われた失脚者や金と友誼でこの国に転んだ連中とかに精通していたのだ。

「じゃあ、あのピカピカを使うのはどなた？」

「アンドレイ・バラノヴィッチ・コンドラチエンコ元大将さ」

地獄の釜が開いた湾岸戦争のイラク側顧問としてイラク軍の指揮に絡み、あのターニャ・デグレチャフ少将をして『あれが率いる部隊とは戦いたくない』と言わしめる損害を多国籍軍に与えた旧ソ連の英雄も、祖国の崩壊に巻き込まれて妹夫婦の勧めで日本に移住していた。

その絡みで、彼はこの国で彼の率いていたスペツナズを用いたPMCを運営していた。

BTR—80は民生品として武装を外されて輸出と書類には書かれているが、目の前のBTR—80には機関銃の長い銃身がしっかりと月明かりに照らし出されていた。

「汚れ仕事は慣れている。」

で、誰を殺れと？」

彼女の質問に室戸文明は一言。

社会主義的世界に長く居た彼女はそれをジョークとして捉えた。

「悪魔さ」

『日本におけるロボット兵器の開発は豪和インダストリーのタクティカルアーマー（以下T A）がスタートとなるが、商品としてヒットしたのは篠原重工が開発したびつける君である。

山岳作業用レイバーとして、バブル華やかなるリゾート開発やダム建設に活躍したこのレイバーと、軍事開発されたT Aの完成度に技術的跳躍があると関係者が噂したのは記憶に新しい。

豪和インダストリーはこのT A開発について秘密主義を貫いており、三流オカルト雑誌では超古代文明の技術を使用しているとまで噂されたがその真偽はついに闇の中……』

そんなスポーツ新聞を読み終えた宮内庁神霊班班長の那田蒼一郎は新聞を机の上に置く。

仕事はここ最近の悪魔絡みの事件の急増に溜まりに溜まっている。

来年、組織再編に伴って宮内庁は宮内省となるのだが、そんな中でこの神霊班は再編の動きから取り残されたというより乗らなかつたというべきだろうか。



「主任。」

お客様ですよ。

いつもの方」

「わかった。」

来客室の方に通してくれ」

那田主任は頭をかきながら応接室の方に出向く。

「ここ最近やってきている来客は、いつものように立って那田主任を待っていた。」

「あなたもしつこいすな。」

荒巻課長」

「何度でも来ますとも。」

今、悪魔が跋扈しつつある中、国内の組織の協力は絶対に必要なのです。

特に、あの御方が降臨してしまった今は」

宮内庁神霊班。

その実態は、皇室の御下命で動く神殺し四家を中心にした退魔組織。

この国を守護する神官でもある皇室の数少ない直接退魔組織である。

天津神アマテラス様を殺せるとしたら唯一ここだけだろうと言われるこの組織を、宮

内省は組織再編の中に入れることができていなかった。

「我々は御下命のみによって動く。

これまでも、これからもだ」

「だが、昨今の状況はその建前すら吹き飛ばす状況になっているのは、貴方もご存知のはずだ」

「ええ。

古い組織ですから、戦前にこの国がどう狂ったかなどは貴方よりもはるかに知っていますとも」

退魔組織といえども、太平洋戦争時に戦力として人と戦い、そして負けた。

その過程で日本の霊的守護は決定的に弱体化させられたが、その悲惨な状況を宮内庁心霊班は生き残った。

その反省は未だ守られている。

それが、荒巻課長と平行線をたどる理由でもあった。

「また来ます」

「ええ。

答えは変わりませんが」

それでも荒巻課長も退けなかった。

ここ数年がこの国どころか、この世界において重大な選択が迫られるだろうと確信し

ているがために。

それを教えてくれた入即出やる夫を掣肘できる組織であるが為に。

## プリズマ・コース防衛戦 あとしまつ その2

「ちよつと！」

結局敵来なかったじゃない!!」

羽をパタパタさせてプリプリ怒るレミア・スカーレット嬢がかりちゅまを發揮している。

かわいい。

もちろん口に出すことはないのだが。

「こちらからすれば、勝手に敵が自滅してくれたのでありがたい事この上ないのですけどね」

そんな事を言いながら、俺はご機嫌取りにとエスティア艦内戦闘の画像をお見せしている最中である。

十六夜咲夜やパチュリー・ノーレッジやフランドール・スカーレットも茶菓子片手に画面を眺めており、上映会はそこそこ成功と言えよう。

その画像の向こうで実際に人死にが出ていることについては、ひとまず他人事として処理しておこう。

「いいなあ。

私もこれしかかったなー」

「そうよ！

なんで私を呼んでくれなかったのよ!？」

羨ましそうに眺めているフランドール・スカーレットの隣で当たり前のように居るエリちゃん。

今回、お疲れ様会という事で、紅魔館に魔法少女とサーヴァントの皆様まで集めている。

つまり、ダヌ様やメイヴちゃんやメデア・リリイとかアリス・マーガトロイドや赤おじさんと黒おじさんコンビに、戦闘妖精少女に、女神まどかに引っ張られてきた悪魔ほむらやグレアム提督とその使い魔であるリーゼロッテとリーゼアリアもこの宴席に参加しているわけで。

B Bちゃん。

居るに決まっていますが何か？

要するに、やべー奴らにやべー奴らを紹介しようというのがこの会の趣旨である。

その為、会場となった溟海の城では各地の料理を取り揃えての大宴会となりつつあった。

お菓子の国からお菓子を用意し、ブリジッド様がケルト料理をごちそう……ダヌ様。その鮭はどうか返してあげてください。お願いします。

メディア・リリイがキルケー様直伝のキュケオーン（毒は当然入っていない）を振る舞い、大淫婦バビロン。その葡萄酒聖杯から取り出したから駄目。

エリちゃんはエリちゃんてハロウィン仕様なのを良いことに真つ赤なパンピンク料理を何処からか持つてくるし、もちろん誰も手をつけていない。

我が日本も負けておらず、叢雲に乗った隊員達が海自カレーをご馳走し、BBちゃんが元になった間桐桜のデータを使って家庭料理を披露しようとすれば、女神まどかが悪魔ほむらも料理を手伝いたいという事で、女性陣がマシユ風の艦内厨房を乗っ取って楽しく料理タイムの最中である。

傍目で見るとドレイク船長がグラム提督相手にチエスをやっていたり、木林がロリンちゃん相手に議論をふっかけたりとカオスの極みである。

そんな喧騒の輪に入らなかつた一人の女性に俺はホストとして声をかけた。

「どうなさいました？」

「どう入るべきか分からなかつたので。」

大人になると、騒ぐにも理由があるって嫌ですね」

朔月陽代子。

朔月美遊の母であり、司法書士持ちの才女である。

朔月美遊はクロエと共にマシユ風の厨房で料理を作りに行っているので、この場には居ない。

逃すものかと絶賛スカウト中である。

水晶の中から助けられた二人は現在の所は無事で、いずれは彼女たち二人が幸せに暮らせる世界に送ってあげようと考えている。

ゲート技術はほぼめどが立ち、加護までもらえて世界移動ができる神様二柱こと女神まどかと悪魔ほむらが居るのだ。

ただほんの少し、具体的に言うとな来年の宮内省立ち上げ直後に法律をしつかり解釈適用できる信頼ができる事務屋は喉から手が出るほど欲しいのだ。

霞が関の争いだけでなく俺の身の安全のためにも。

「貴方は何を私に望んでいるのですか？」

朔月家の特殊事象は知っているが、そんなものはこの闇鍋世界では実はそれほど価値はない。

何しろ聖杯なんてこの場だけで無駄に溢れ……ダヌ様お願いですから、そのオートミールが入っている大釜はちゃんと後でダグザ様に返してあげてくださいね。

その大釜聖杯の原型なんて言われているけど全力で見ないことにしますから。

メイヴちゃん、料理に自分が持つてきた蜂蜜をかけるんじゃねえ!!!  
ああ。レミリアお嬢様。

大淫婦バビロンの聖杯から葡萄酒を直飲みして……まあいいか。  
というか、エリちゃん負けじと拾った聖杯に葡萄酒を注がないで。まだ洗っていないだからそれ……

「見てのとおり、聖杯は無駄にあるんです。

けど、法律に精通している事務屋はととても少ない。

こんな混沌の世界でも、日本人が日常を送る為には、判子と稟議書が必要なんです」  
今の霞が関は、世界改変とそのすり合わせで幽鬼共が黙って首を横に振る（比喻表現）、霞が関官僚の修羅場と化していた。

そんな組織の一部門の局長になるという事は、部屋いっぱい書類に埋もれて忙殺される事が確定している訳で。

「あなた方が幸せに暮らせる世界に送ることをお約束します。

必要ならば、生活基盤も向こうでの生活の資金も用意しましょう。

ですから、最低でも一年、最長で七年ここに留まってほしいのです」

「一体何が起るといえるのですか？」

気づいてみたら皆の視線が集まっているのだが、俺は躊躇うこと無くそれをあつさり



と口にした。

「ハルマゲドンですよ」

「面白そうじゃない！」

言うと思つていましたよ。レミリア嬢。

クー・フリーンとメイヴちゃんが立ち上がる。

こいつら、しつかり酔つてやがる。

「水臭いぞ。大将。」

そういう戦いに俺を外すなんて事はしないよな？」

「あら？」

クーちゃんが行くなら私も行くに決まっているじゃない♪」

あ。

エリちゃんが寄つてきた。

フランも一緒ついてきている。

「子イヌ。私は当然連れて行つてくれるのよね？」

「えー？フランも一緒に遊びたい！」

朔月陽代子が微笑む。

あ。これはふっかけられるな。

「ちなみに、契約にはこのような状況の整理も入っているの？」

俺は苦笑してそれを飲まざるを得なかった。

入即出やる夫宮内省技術総括審議官秘書として、彼女はパチュリー・ノーリツジから教えてもらった小悪魔召喚呪文を駆使して、宮内省の事務方を掌握する事になるのだが、そんな未来が実現する少し前の話である。

## プリズマ・コース防衛戦 あとしまつ その3

宴も終わり、後始末の時間である。

それぞれ帰る所がある者達はそれぞれの場所に帰る事になるだろう。

「えー！

子イヌ契約しないの!？」

エリちゃんの第一声で始まるサーヴァント一同。

という訳でここ叢雲館内の工房休憩室に集まった面々をご紹介しよう。

キャスター

エリちゃん 聖杯拾得特性あり

ライダー

メイヴちゃん スーパーケルトビッチ

アーチャー

クロエ 聖杯授与鯖

キャスター

メディア・リリイ 神様二柱に居座られて困惑中

ライダー

ロリンチちゃん 叢雲の魔力炉にて維持

セイバー

モードレッド 叢雲とマシユ風の魔力炉で維持

ライダー

ドレイク船長 マシユ風の魔力炉で維持

アサシン

ステンノ やる夫の正規サーヴァント

ここに少しカテゴリーが違うようになった連中が入る。  
以下の通り。

朔月美遊 人間 生まれながらの聖杯

アリス・マーガトロイド 魔法使い兼キャスター兼魔人

クー・フーリン ランサー兼幻魔

B Bちゃん ムーンキャンサー兼ニヤル様

ジャンヌ・ダルク ルーラー兼英雄兼艦娘（へり空母）

マシユ・キリエライト シールダー兼艦娘（駆逐艦）  
叢雲 艦娘 当たり前のように俺のそばに居る

気づいてみたら増えに増えたものである。

なお、別行動だがシャーロック・ホームズも居るし。

そんな事を考えながら、俺は皆に説明する。

「とは言っても、カルデアみたいな大規模な施設が無いんだ。

この数の維持運営は無理だな」

実際に思い知ったのは、時空管理局巡航艦エステイア内での戦闘である。

万一の強制帰還を考えたら、三騎しか突入できないのだ。

さらに問題なのが宝具である。

魔力をバカ食いするために、令呪を切らないと持たない。

俺が必死にサーヴァントを別のものに変えているのはそれが理由である。

現代資本主義社会が続く限り、金があるならば魔力ですら変換できる代替品で運営する方が楽という訳だ。

これがポストアポカリプスや古代にタイムスリップなんてすると全部裏目に出たりするのだが。

「じゃあ、ここでお別れなの？」

「と、ならないのがこの異界の面白いところだな」

少し寂しそうな声で質問してきたクロエに俺は微笑みながら種明かしをする。

この特異点をどうやって維持するか？

それが可能な神様が二柱ほど爛れた生活を堪能していたからだ。

「女神まどか様がこの異界の管理を引き受けてくれた。

魔法少女たちの神である彼女の加護で、ここに居るのなら、現界は可能なはずだ」

往来のゲート固定もやってくれるのだから至れり尽くせりである。

彼女たちも分霊として来ているのでここで爛れた生活を、本体に送り続ける場所は必

要だったわけ。

抱え込んで増えすぎるサーヴァントを何処に置いておくかというのが、実は俺の隠れ

た事情だった訳で、その目的はほぼ完全に達成されたと言っていいだろう。

「じゃあ、ここをカルデアみたいにする訳？」

「そのつもりだ。

あと、ジャンヌの動力にも魔力炉を乗せるつもりだから、もう一騎は運用できるかな

と思っている」

その一言でサーヴァントの間で緊張が走る。

と言つても、実は答えが出ている話でもある。

エリちゃんについてはフランドール・スカーレットの精神安定のために紅魔館に来ないかみたいな事を言われたこともあつて、大図書館をそのままパチュリー・ノーレッジの管轄にする事で合意が結ばれたのだ。

なお、エリちゃんは魔力の塊である聖杯を自前で拾つてこれる特性持ちだから単独行動ができるのだが、当人はそれをあまりしたくはないみたいだ。

次にアリス・マーガトロイドだが、魔人にもなつたので赤おじさんと黒おじさんの庇護というか空回りが容易に予想できるので、ここに残りお菓子の国の管轄を引き受けることになつた。

メディア・リレイも神様二柱のいちやこらが鬱陶しいだけで、この世界が嫌いという訳でもなく、その神様二柱は水晶宮に移つてもらうことになつている。

で、朔月美遊は生まれながらの聖杯であり、クロエになつている。

おまけに、メイヴちゃんは雪華とハチミツの国を作つてしまつている。

「しつかたないわねー！」

わ・た・し・が！

残つてあげるわよ。

けど、早く何とかしなさいよね♪」

先を読んだメイヴちゃんが降り、クロエがジャンヌ・ダルクの魔力炉で運用される事が決定する。

いい男と悪魔を今度大量に用意しておくとしよう。

「あと、ダヌ様こつちに置いておくから。

ちよくちよく面倒を頼む」

このダヌ様をどうするかも問題の一つであり、劣化分霊に近いとは言え、その権能は強大だからなんとかする必要に迫られていた。

ここだったら、やってくる連中を考慮する必要がない。

女神ブリジッドもここに残す予定なので、ケルト系でお世話してくれるとありがたい。

「しっかし、ずいぶんあっさりときき下がったな。あいつ」

会議終了後、メイヴちゃんが居ないことを確認した上で、クー・フリーンが俺に漏らす。

俺の方もその確認をしっかりと確認してから本音を漏らした。

「まあ、理由は想像つくけどね。

ハルマゲドンを想定した時、己の手駒を増やしたいんだろうよ」



ケルトの戦士なのか、魔法少女軍団なのかは分からないが。

その思考は俺ととても良く似通っていた。

急増する危機対処をハイデッカーとオイランロイドとクローン対魔忍で乗り切ろうとしているように。

なお、試しに対魔忍世界のオークを送ってみたら、戦士兼夜用に良かったらしくオークが壊滅した事を記しておく。

その惨状は、女騎士がオークに前後されるウス異本的ノリで、さすがスーパーケルトビッチと感心するばかり。

今度ご立派様でも送りつけてやろう……

## プリズマ・コース防衛戦 あとしまつ その4

太平洋八丈島沖自衛隊訓練空域。

「太平洋上より接近中の所属不明機は五機、二個編隊。

コールサイン『シルフ』『シルフィールド』本土に接近中！

展開中の艦艇は迎撃体制を取れ!!」

「要撃機上がりました！

百里よりF-115二個編隊四機。

米空母『インディペンデンス』より、F-114一個編隊とF-118一個編隊四機！

あ、今、厚木よりF-116一個編隊二機が飛び立ちました」

日米演習艦隊『インディペンデンス』の命令の後、叢雲の報告を俺は艦橋で聞く。

連れて帰った戦闘妖精少女達に自衛隊は何度目かになる激震に揺れに揺れた。

こんな女の子が無敵戦闘機になるなんて。

というか、さらりとヘリ空母を指揮下に入れるんじゃねえとか色々である。

で、当然彼女たちの性能を知りたいという訳で、この訓練である。

航空自衛隊に海上自衛隊に在日米軍参加の大規模な訓練はこうして始まった。

それを俺は『叢雲』艦橋から眺める。

「しかしでかいですね。あれ」

「まったくだ」

美野原主席幕僚に俺は頷く。

米空母のデカさに負けない『やまと』を見ての感想である。

今回の訓練において米空母『インディペンデンス』、タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦『ヴェンセンス』、スプルーアンス級駆逐艦『イエルケル』が参加している。

このうちの『ヴェンセンス』は海軍戦術システムを入れ直して、『イエルケル』は艦長以下人員を入れ替えての参加である。

一方でこちら海自側、『叢雲』『浜風』『ジャンヌ・ダルク』の三隻に、『やまと』『みらい』『うらかぜ』の三隻が参加していた。

もちろん、ゲートがらみの技術を提供したトライデントの全面支援協力下で行っている、この訓練データも持っていかれるのだろう。

現代戦は、訓練ですらカネがかかる。

というわけで、『インディペンデンス』を中心に輪形陣を展開した日米訓練艦隊は、アグレッサー役として艦隊を突破して首都圏に向かうよう指示をだした戦闘妖精少女達の実体化機との模擬戦が始まることとなった。

F | 1 5

レベル 2 0 ? 4 || 8 0

F | 1 4

レベル 8 ? 2 || 1 6

F | 1 8

レベル 1 2 ? 2 || 2 4

F | 1 6

レベル 5 ? 2 || 1 0

合計 1 3 0

スーパーシルフちゃん

レベル 1 2

メイヴちゃん

レベル 5 6

シルフィードちゃん

レベル 5 6

ファーンちゃん

レベル23

フアーンIIちゃん

レベル32

合計179

勢力比 4:6

結果

1 日米航空隊勝利 戦闘妖精少女撃墜判定

2 同上 戦闘妖精少女撤退判定

3 同上

4 勢力拮抗

5 戦闘妖精少女勝利 日米航空隊撃墜判定 艦隊に接近

6 同上

7 同上 艦隊に接近

8 同上

9 勢力拮抗 メイヴとスーパーシルフの2機のみ艦隊に接近

10 熱烈歓迎

結果 1 日米航空隊勝利 戦闘妖精少女撃墜判定

## 日米航空隊撃墜機数8機

性能はフアーンちゃんたちで互角、シルフィールドちゃんたちでは上回っていた。

その上無人で操るから、人間の対Gを気にすることも無い。

突破されてからが勝負と思っていたのだ。

その報告を聞くまでは。

「交戦開始。」

……『シルフ』『シルフィールド』撃墜されました」

「へ？」

叢雲の報告を呆然と聞く俺が居た。

後で知ったが、空自の連中はトップエース連中を連れてきたらしい。

シルフィールドちゃんとフアーンちゃん・フアーンIIちゃんの編隊がこの編隊を迎撃し、スーパーシルフちゃんとメイヴちゃんが逃げるつもりだったが、それが裏目に出た。

性能的には互角であるフアーンちゃんとフアーンIIちゃんが数と連携で撃墜されると、シルフィールドちゃん一機で持ちこたえられずに数機道連れに撃墜される。

スーパーシルフちゃんとメイヴちゃんは迎撃に踏み切るも、三倍差の機数の連携に翻弄された上に、『シルフィールド』を叩き潰したF-15が戻ってきて詰みとなった。

結果しては、『数』が『質』を押しつぶした戦いとなったが、得られたデータはそれだけ考えさせられるものだったらしい。

今回の訓練のスポンサーである『トライデント』のラリー大佐の言葉を引用しよう。「こっちは、育成に手間のかかるパイロットを八人失う計算で、向こうは機体のみだ。」

このキルレートならば、数を揃えればこちらの航空戦力は最終的に消耗されますよ」原作の『戦闘妖精雪風』がまさにそのとおりの展開になったな。

この世界では最悪クローン兵でパイロットを賄う事も……何処の『クローン・ウォーズ』だよ。

「やっぱり、まだ人間は要るな」

とはいえ、極まった人間相手に無人機は分が悪いという事を証明した戦いでもある。彼女たちを航空戦力として運用するのならば、パイロットを乗せたほうがいいだろうと判断せざるを得ない。

何処からそのパイロットを連れてくるかで海自・空自・在日米軍あたり壮絶に揉めるのが目に見えて、俺はため息を隠すこと無く吐いたのだった。

なお、今回の訓練一番の見せ場およびツツコミ所はこの後だった。

「じゃあ、皆さん戻ってきてくださいーい」

「「「了解」」」」

ヘリ空母『ジャンヌ・ダルク』に突っ込んでゆく戦闘妖精少女機体フォーム。  
そのまま突っ込むかと思われたその時、機体フォームを解いて魔法少女として甲板に  
着地。

「それありなのか!？」

と日米両軍が突っ込んだのは言うまでもない。



## プリズマ・コース防衛戦 あとしまつ その5

「すごいですね。」

「こちらの鉄道は!？」

目が覚めたメアリ・クラリツサ・クリステイだが、とりあえず元の世界に戻せないの  
で麻帆良学園都市に送って生活させることにした。

闇の書？

B Bちゃん作成のそれっぽい残骸渡して、ムーンセル攻略に失敗した管理局相手にプ  
ロジェクトFの事でカマをかけたらあっさり妥協してくれましたが何か。

グレアム提督は俺のわかりやすい恫喝に気づいて止めとけって言ったのに、彼を蹴落  
とそうとした派閥の増援がムーンセルに手を出して見事な大火傷を負ったのだから笑  
うしか無い。

もちろんグレアム提督とは手を繋ぎ、地球がらみの管理局の介入を押さえることで一  
致したのは言うまでもない。

八神はやてがらみは、これで俺とグレアム提督の専任事項として押さえることが確定  
となった。

この闇鍋世界、闇の書ぐらいならばどうとでもできる。

そこまで話が続けるのならばという前提だが。

まあそんな訳で、無事に釈放と相成ったメリ・クラリツサ・クリステイだが、朔月美遊やクロエや東風谷早苗ともども学生として暮らすように手配する。

という訳で、現在東海道線の車中である。

「何で！」

私が!!

学校生活なんて送らないといけないのよ!!!」

怒っているクロエにとてもあつさりと言。

「じゃあ、美遊を一人にさせるのかい？」

「クツ……」

このあたり闇鍋世界の厄介さなのだが、クロエは『プリズマ・コース』世界のクロエで、朔月美遊は『プリズマ☆イリヤ』の前の時間軸の人間である。

そして、こちらのイリヤは現在アインツベルンの城に居る訳で。

クロエも親を用意しないといけないと思ひ、プリズマ・コース世界から聖杯端末こと配布鯖であるアイリスファイル・フォン・アインツベルンを召喚するかと考えていたり。

彼女、ファーストレデイの外皮に使われていたから、多分引つ張ってくるのは可能だ

ろう。

問題は、その時間が本当に無い事なのだが。

何しろまだこの後始末、つまりターミナル開発から始まったプリズマ・コース特異点探索の後始末が終わっていない。

それまでに片付けられることは大急ぎで片付けないといけないのだ。

「むー。

私、いらぬ子ですか？」

ふくれっ面の東風谷早苗は結構抵抗したのだが、結局はこうしてこの列車と一緒に乗っている。

彼女はこの世界そのものを見限っているし最終的には幻想郷に行くからと思っただが、俺と彼女及び親代わりの二柱を説得したのは何と朔月陽代子だった。

「それでも高校ぐらいは出してあげるべきです。

学問を学ぶのではなく、人を学ぶために。

学ぶこと、知る事は、人生において無駄ではありません。

そして親は、それを与えてあげることが義務だと私は思います」

こういう時親は強い。

ましてや、朔月の女たちはそれを得ることができにくかった家だから言葉に重みがあ

る。

実際、彼女たちを学ばせる場所として麻帆良学園を推したのも朔月陽代子である。

「正義の味方。

良いじゃないですか。

悪い所は親が教えてあげれば良いんです。

それさえ気をつけておけば、守ってくれるこの学園は良い学び舎ですよ」

自分たちが狙われる対象だったからこそその発言だろう。

おまけにこんな事まで言ってくれるから彼女も中々黒い。

「それに、この子達がいる事で麻帆良学園に介入ができるじゃないですか？

親として、保護者として、合法的に物が言えますよ」

そんな彼女もこの道中に当然居たりする。

朔月陽代子は麻帆良学園都市に家を借りて、そこから霞が関に通勤することにするそう  
うだ。

かくして、今回の訪問となる訳で。

車内の珍道中というかクロエと美遊のはしゃぎっぷりに東風谷早苗とメアリの談笑を耳にしながら、俺と叢雲とステンノと朔月陽代子の席は未だ後始末に追われていた。

仕事は電車に乗ったぐらいで止まってくれないのである。

「じゃあ、プリズマ・コース内で生産をする訳だ」

「ダ・ヴィンチちゃんはその言っていたわよ」

せつかくの特異点だからと、カルデアゲートみたいな種火や魔術素材の生産拠点にしようという訳で。

それぞれの管理者に出てくる魔物というか素材や種火の元みたいなものを狩らせて確保しようという訳だ。

この特異点についてはある意味新世界発見に近いものであるので、トライデント経由でデータを入手した欧米が国連管理にするべきだと騒いでいた。

もちろん日本はそれを黙殺したが、日米同盟のぐらつきと月の聖杯（この世界には無いのだが）に手を出さない事で今は黙ってもらおうという裏取引が成立していたりする。

このあたりを外務省や政府ではなく、内務省というか室戸文明次期宮内省事務次官が処理したあたり、この国の腐れ具合が透けて見える。

「で、ターミナル転送実験は学園都市の協力で学園都市とこちらの研究所で行う予定よ」  
続いての報告を叢雲が口にする。

情報漏えい云々を考えても、このあたりの言葉を大体の人間は理解できないあたりが救いがない。

それよりも仕事は一杯あるのだと俺は叢雲に確認を取る。

「木林の話だと、吉祥寺のエコービルの研究所と学園都市を結ぶだっけ？」

「元のラインが、冬木とあの世界でしょ？」

その枝線として学園都市まで繋いで、吉祥寺が終点という訳」

理論は凡そ把握したが、これを実用化する技術力が残念ながら日本には無く、最終的には学園都市と技術提携をする形で実用化に踏み切ることになる。

しかし、エコービルか。

『真・女神転生』の舞台の一つである。

「防衛については？」

ターミナルから、悪魔が溢れて一般人に被害がなんて目も当てられんぞ」

「それについては、冬木の八衢比売神様が見張ってくれるそうよ。」

ただ、冬木の守りから吉祥寺に行く場合は学園都市を経由する訳だけど、学園都市そのものが通りにくいとか何とか」

そりやそうだ。

学園都市そのものがアレイスター・クロウリーの魔術結界そのものなのだから。

某アマテラス様なんて、

「あれ、邪魔ですから壊していいですか？」

なんて言って、麻帆良学園都市と共に壊そうとしたのを必死で説得したし。

事実、関東の霊脈の大部分をこの2つの学園都市が吸っている形になっているので、アマテラス様の言い分も分からなくもないのだ。

なお、その壊す手段というのが実に神様らしいというか。

「木花之佐久夜毘売起こして、一撃……」

それ、富士山噴火させるって言ってますか？アマテラス様？

という訳で、

「大丈夫です。」

どうせあの二つの街は人間が壊しますから、アマテラス様のお手を汚す必要はありません」

という事で押し留めた苦い記憶が。

やっぱり、専属の神様を吉祥寺にも置いておこう。

なお、ここで悪さをするのが超人ドウマンこと芦屋道満である。

キャスター・リンボになっている可能性もあるので、最大級の警戒はしておいて損はない。

「で、ヨロシサン製薬の古奈牙専務から連絡があつたわよ。

ハイデッカーの生産が限界に近くて、次の納品まで時間がかかるって」

ある意味当然の報告に俺はため息をつく。

既に、自衛隊は数千規模の納品を行った上に、ウォースパイトの乗員と今度できる首都警の人員がここから賄われている。

大量生産ができるというクローンですら、この数ヶ月の納品状況で枯渇はある意味当然と言えるだろう。

「となると、オムラ・インダストリーのオイランロイドか」

「そつちも、いっぱいいっぱい。」

「ついでに対魔忍も限界だから」

「次については？」

「半年後。」

「特急料金を払うならば三ヶ月後」

「実に商売上手である。」

「へり空母ジャンヌ・ダルクの乗員確保に支障がてる。」

「ここは最悪の手を使わねばならないだろう。」

「次は東京。東京。」

「終点です。」

「新幹線・山手線・京浜東北線のお乗り換え……」

「ここで京浜東北線に乗り換えて埼玉県に行き、そこから麻帆良学園都市に向かう訳だ」



が……

「またせたな」

「ちよつと待って！」

人が多い！ホームが多い！！

わからないのよっ！！」

こういう機会を逃さないのが蒼崎橙子という訳で、お目当ては麻帆良学園都市に捕らわれの吸血鬼ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと、未来人こと超鈴音だろ  
う。

紹介状を書いたけど、オルガマリー・アニムスファイアの件や八丈島沖タンカーシー  
ジャック事件とかで行く機会が無かったからなあ。

というか、彼女の後ろにいるの、そのオルガマリー所長じゃね？

そんな濃い面子での麻帆良学園訪問となったのである。

## 麻帆良学園訪問 その1

東京駅で京浜東北線に乗り換えてしばらく。

気づいたのは、封印指定を食らって身の警戒を一番している蒼崎橙子だった。

「つけられているな」

一言。

問題は、つけられている事よりも何処がつけているかという事である。

「男性か？」

女性か？」

1 男性

2 女性

結果 1 男性

「男性だな」

だったら話は早い。

という訳で俺はステンノに声をかける。

「頼んだ」

「ええ。」

人使いが荒いけど、こういうのも悪くないわ」

という訳で、ステンノの魅了で一撃となった男からつけた連中の背後を探ると、こんな組織の名前が出てきた。

「関東機関かあ……」

『お・り・が・み』の政府系退魔組織で、バックが大蔵省。

第二次世界大戦において、決定的に弱体化した日本の政府系退魔組織なのだが、元は関東軍の研究組織を戦後大蔵省が手駒として再利用した組織である。

なんでかという、宗教法人の脱税対策。

そりゃ、神様と悪魔が跋扈しているこの世界の宗教法人から税金を取り立てようとするならば、その手の組織は必要になる訳で。

こういう時こそ、コネの出番である。

学園都市謹製の携帯をピポパとポタンを押して相手が出るのを確認してから俺は声を出す。

なお、つけていた関東機関の男は未だ電車の中で終点まで寝ている事になるだろう。

「もしもし?」

入江さん?

お久しぶりです。入即出ですが、今大丈夫ですか?」

名刺は破くものではない。

連絡をするものである。

さすがに話が話なので、一度駅に降りてホームの端での電話である。

このあたり、次がいくらでも来る都会だからこそできる技だろう。

「これは入即出次期宮内省技術総括審議官。

就任おめでとうございます。

宮内省にも私と同じ入江が配属されるかもしれませんが、その時はよろしくおねがい

します」

やっぱり来るのか。入江シリーズという名前の日本官僚組織の非公然活動要員。

上が何処か分からないあれは多分クローンじゃないかと俺は疑っているのだが。

「挨拶はこれぐらいで。

ちよつと確認したい事があるのですが、関東機関つてご存知ですか?

その構成員につけられていたのですか?」

「あそこですか。」

うちとは関係がないですが、面白い動きをしているとは聞いていますよ」  
面白い動きときたか。

口笛を吹きそうになるのをこらえてあくまで事務口調で尋ねる。

「面白い動きですか？」

「ええ。」

あそここの飛騨局長が何者かに殺されて、組織そのものは弱体化しているんですよ。

その結果、このご時世誰かさんが始めた退魔組織の統廃合の波に乗り遅れて焦つているとか。

大蔵省と内務省って仲悪いですから」

官僚組織的に見ると、俺は内務省側というか警察側の人間らしい。

この手の内と外の意識は日本組織あるあるである。

「それがどうして俺の監視に？」

「だって貴方、内務省が進める退魔組織統廃合の旗振り役じゃないですか。

恨まれもするでしょうし、情報を得ようとするのは当然では？」

納得。

こつちの納得など知らない入江省三は話を続ける。

「あと、関東機関は永田町の先生が目をつけたそうで。」

今や地方リゾート開発が華やかですから、土地神を鎮める戦力を確保しておきたいというのと、神様相手の力をそのまま敵対派閥に使いたいと言ったところでしょうか。

政府にかなり食い込んでいたノマドが力を失った事で、そのあたりの戦力を確保したいという訳で」

あのカレー好きの先輩は一人で本当に大暴れしたらしい。

たしかに東京キングダム跡地は俺が押さえて英雄王専用の発電所兼魔力炉の建設中、地下都市ヨミハラも今や東京ジオフロントに名前を変えている。

対魔忍クローン事業で立て直しては居るだろうが、対魔忍クローン生産が公的事業になりつつある昨今、ノマド自体が襲われるリスクをおさえるために、クローン事業を別会社に移すように通産省が圧力をかけている最中だったりする。

入江省三の話は続く。

「省庁再編は政府組織にこれでもかとおある退魔組織と、秘密部署の存在を暴露しましたからね。」

室戸次期宮内省事務次官の切り札と呼ばれている公安の荒巻課長が各所を回って、連絡会議への参加を求めているけど、宮内庁神霊班と共に参加を拒否しているのがこの関東機関ですね」

つーか、本家宮内庁内部でもよって連絡会議に出ないってそりやまずくね？

それを言おうとして、先に入江省三がその種明かしをした。

「宮内庁の方は命令系統が明確に違います。」

神靈班の表向きの上って侍従長ですよ」

あー。

つまり、上が皇室というかそつちのお方か。

これは手が出せない。

という訳で、もう片方の方を尋ねてみた。

「じゃあ、関東機関に手をつけたその大物政治家つてのは搦んでいるのでしょうか?」

「ええ。」

野党連立政権の大物、澤田武志議員ですよ」

長きに渡って政権の地位にあった与党はこの夏に腐敗とスキヤンダルと権力争いから勃発した解散総選挙で敗北を喫し、野党連立政権が誕生していた。

そのキングメーカーとして君臨したのが澤田議員であり、選挙戦の最中に発生したミサイル誤射事件は野党側への追い風となって政権交代の一因となる。

なお、彼は外交の自主独立路線を掲げ、『大東亜共栄圏』復活を自派議員や官僚にぶちあげている人物でもある。

電話を切ってそろそろ電車に乗るかと思つたら近づいてくる男が一人。

その男は眼鏡の奥の笑わない目でこんな事を言つてのけたのだつた。

「内調の羽柴茂光と申します。

麻帆良学園への護衛にいかがですか？

お安くしておきますよ」



## 麻帆良学園訪問 その2

偉くなるというのは身分ができるという訳で、身分ができるという事はしがらみが生まれるという訳だ。

ヤタガラスの一員設定だとそのあたり問題にならないのだが、一国の、しかも経済大国の一省庁の局長クラスともなると、そのしがらみも色々があると俺は羽柴茂光の話に感心するしかない。

「ここに来た表向きの理由として、次期宮内省技術総括審議官が懐に収めた千二百億円の行方というのがあるのですが、それも上から触るなどお達しがありましたね」

この千二百億円のうち、聖杯戦争の後始末で政府要人にばらまいた金の一部として言峰綺礼からもらったのが一千億円。

こっちは東京湾の発電所建設資金として綺麗に使い切っている。

残りの二百億円はハイデッカー製造に絡んで、ヨロシサン製薬から送られてきたやつで、返却したけど戻ってくるブーメランみたいなものに成り果てていた。

「返せと言われるならば返すが？」

英雄王の所在がわかって今、残っている二百億円を種銭にすれば一千億円程度は

すぐに集められるだろう。

英雄王もそういう意味合いで『できたら呼べ』と言っていた訳で。

「触るなど言われた金に触れて、次期宮内省技術総括審議官の背広に黒いシミをつけたくはないですよ。」

俺が聞きたいのは、貴方が建設を進めている東京湾の発電所建設に関わっているゼネコン各社についてなんです」

大体羽柴茂光が来た理由が読めてきた。

澤田武志議員とは接点がないと思っていたが、そんな所に絡みがあったか。

「建設費用の水増しで、その差額分が澤田議員の所に行っている？」

「ご推察の通りで。」

で、手繰るとアンタッチャブルな資金と来たもんだ。

触りはしないけど、話ぐらひは聞いてもバチは当たらないでしょう？」

とてもいい笑顔で羽柴茂光は笑う。

これ、ゼネコンを突けば連鎖的に俺まで巻き込まれるように、わざと澤田議員が仕組んだのだらうなあ。

とはいえ、澤田議員と羽柴茂光との関係は知っているので、止めようがないというか止まらないと言うか。

「話す前に確認したいが、こつち側の話はどこまで聞いている?」

羽柴茂光のオカルト知識100ほど詳しく知っている。

結果 47

「まあ、こんな部署に居る訳ですからそれなりには。

冬木の件も政府に提出した貴方の報告書は読ませていただきました」

「なるほど」。

それならば分かると思うが、一千億円の出処はあれに絡んだ宗教団体からだよ」

物騒な話を車内でよくできるものだと思ながら思うが、俺達の回りに叢雲やステンノや蒼崎橙子やオルガマリー・アニムスフィアやメアリ・クラリツサ・クリステイや東風谷早苗やクロエや朔月美遊や朔月陽代子が談笑しているわけで。

この車内いつから女性専用になったのやらというか、男二人の異物ぶりがすごい。

「その件で俺を捕まえると、内務省と宗教団体と海上自衛隊が敵に回ると?」

「米国と英国も支援してくれるだろうな」

しながらも悪い事ばかりではない。

現在の俺ならば、手を差し伸べてくれる組織が多くあるという事でもある。

もちろん、それ相応のお返しはしないといけない訳だが。

「ちなみに、自衛隊内で進んでいるある噂については聞いているかい？」  
「ええ。」

省庁再編と政権交代にともなって、決起の理由を失って絶賛迷走中だとか」

『民主主義は最悪の政治といえる。これまで試みられてきた、民主主義以外の全ての政治体制を除けばだが』とは英国宰相ウィンストン・チャーチルの言葉だが、それはしつかりとこの国でも機能していた。

政権交代の結果、利権の中で腐っていた連中が野党になった為に力を失って失脚し、不平不満はその権力者の没落というシヨールによって沈静化していたのである。

一方で、政権の座についたばかりの野党連立政権はその権力の毒にのたうち回っていた。

溺れる以前の問題で、官僚の組織的抵抗、業界の消極的不服従、自分がしていただけに攻め所をよく知っていた野党のスキャンダル攻撃に右往左往するばかり。

そんな状況で実権を握った澤田議員は只者ではなく、彼に乗っかって省庁再編を仕掛けた室戸文明次期宮内省事務次官も只者ではない。

(なるほどな。

室戸次官がなんで宮内省なのかやつと理由がついた。

あの人、やり過ぎて内務省から飛ばされたんだ……)

飛ばされたのか、飛ばされる前に自ら飛んだのか分からないが、俺の推測は当たらずとも遠からずという所だろう。

「君が澤田議員を追うのは止めやしないが、巻き込まれるのは少し困るな。

とはいえ、来てもらった分ぐらいの礼はしないとイケないか。

このままついてくるといい。

それ相応の知り合いを紹介しておこう」

「ありがとうございます。」

余計なお節介と思いますが、その千二百億円はすみやかに返却しておいた方がいいと思いますよ。

次期の文字が取れるまでぐらいには」

そんな話をしてしていると駅に着き、ドアが開くと麻帆良学園の女子高生が一人俺たちのドアから乗ってくる。

おかしいな。

人払いの境界は張ってもらったはずだが……

こつちが考えているとさらりと叢雲以下ほとんどの連中が戦闘体制に入っている。

そんな事を気にしない金髪メガネツインテールな女子高生は一言。

「そい。」

あたしの場所なんですけど。

おじさん」

結構いいダメージを心に受けたが、女子高生は気にせずにつこり。

羽柴茂光笑うんじやねえ。

「あたしの名前は高木嘉子。

まあ、行き先は同じみたいですし、よろしくね。おじさん♪」

高木嘉子。通称『かつこ』。

その正体は、魔人ヴィゼータである。

知ってか知らずか、羽柴茂光が一言。

「貴方もその年で女子高生は少し痛いというか」

「あ!?!」

## 麻帆良学園訪問 その3

『ネギま』二次創作あるあるなのだが、麻帆良学園の結界は侵入者探知機能がついており、それに引つかかった侵入者に警備陣が殺到するという流れになっている。

大体これでオリ主はそのまま警備員にとというのがよくある流れなのだが、今の俺は不審者でもなく今回の訪問は事前に通達していたりする。

麻帆良学園の警戒ぶり 100で凄い

結果 62

麻帆良中央駅にて電車を降りると、何度か組んだことのある葛葉刀子が待っていた。

それとなくそこそこの警備体制を敷いているあたり、歓迎半分警戒半分という所だろうか。

「すまないね。」

わざわざ案内役までやってもらって。

事務手続きとかを片付けたいのだけどいいかい？」

「はい。」

あと理事長がお会いしたいそうです」

このあたりの流れもよく見たなあ。

で、厄介事を押し付けられるのだ。

という訳で、用意された車の中で、手続きを済ませます。

クロエと美遊は初等部でサクラと同じクラスにしてもらい、メアリ・クラリツサ・クリステイと東風谷早苗は高等部で同じクラスにしてもらった。

その一方で、蒼崎橙子とオルガマリー・アムスフィアはエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルのもとに行き、朔月陽代子は家を借りる為に不動産屋めぐりをしているはずである。

「話したのですが、クロエや美遊やメアリさんや早苗さんたちと一緒に生活しようと車内でまとまりまして。

少し家賃の補助を期待していいでしょうか？」

「それだったら、アパートごと買うから、ついでにここで学んでいる桜ちゃんも一緒に生活させてくれないか？」

金はこつちで経費として出す」

「せめて俺の居ない所でそのあたりの話をしてくださいよ……」

羽柴茂光が苦笑する。

ヴィゼータ？



隠蔽判定。

62以上で成功。

結果 5

見事にバレて、警備員に追いかけられまくっている。

このあたりも麻帆良学園の警備を信用していいかと思う一因だったり。

という訳で理事長室にてぬらりひよん……じゃなかった、近衛近右衛門と対面する。

ステンノたちは控室においての一对一。

茶飲み話な挨拶で終われるほど二人共暇ではない。

「よく来られた。」

麻帆良学園はあなた方を歓迎いたしませんぞ」

「ありがとうございます。」

私的訪問という形をとっているので、あまり過度な歓待は避けていただけると助かり

ます」

挨拶と握手の後、さっそく本題に入る。

近衛近右衛門が最初の話題をチクリ。

「失礼だが、一緒だった生徒についてなのだが何かご存知じやろうか？」

「魔人。」

まあ、人の姿ですが、人とは違う向こう側の者たちですな。

接触してきたのは、我々が開発しているターミナル技術が狙いでしょう」  
あつさりと情報をバラす。

相手が相手だけに、藪をつついて蛇を出しかねない事を警告しておく。

麻帆良学園で大戦争なんて起こったら何のためにクロエや美遊や桜をここに逃したか分からなくなるからだ。

「まあ、こちらも保護者として協力できる所は協力しますよ。」

それ相応のお願いはするかもしれませんが」

「ほほう。」

それ相応の」

好々爺の笑みの割には目が笑っていない。

良くも悪くも、この麻帆良学園のトップである以上無能では絶対にならないのだ。

「現在、政権交代と省庁再編でこの国の流れが大きく変わろうとしています。」

組織として中立を守るのは構わないのですが、最低限旗は日の丸である事をお願いしたい所です」

麻帆良学園は関東魔法協会の本部であり、西洋魔術師たちの城であり、その為に英国というかその向こうのメガロセンブリア元老院との繋がりが強い。

アレイスターの牙城である学園都市はもうどうしようもないとして、ここについては介入できるし介入されるのだ。

どこそのコスプレ女子高生が追われている今のようにならぬか？」

「政権交代でそのあたりどうなるのですかな？」

「私は一介の国家公務員ですから大きな動きはわかりませんよ。」

ただ、悪魔絡みの事件の頻発に伴い、政府のその手の機関の整理統廃合はそちらも耳に入っているでしょうか？」

宗教がらみでも学校絡みでも麻帆良学園の管轄は文部科学省であり、ここは現在でも最大規模の退魔組織を抱えている。

その勢力の一角が、外国勢力の意思によって動くなんて事は避けなければならない。

「政治など関わりたくはないのじゃがなあ……」

「それを言えない椅子に座っているんですよ。」

「貴方も、私もね」

という訳で切り札を出す。

せつかくだから、壊せる原作はさつきと壊してしまおう。

「ここに捕らわれているエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの呪い。」

解除するあてがあります。

その上で、こちらのお願いを聞いていただけると助かるのですが？」  
会談終了後理事長室から戻ると一人の女生徒と教師が待ち構えていた。  
生徒は超鈴音であるが女教師の方はみたことある顔……まさか。

「はじめましてネ。」

私の名前は超鈴音。

ネギ・スプリングフィールドと……」

1 オルガマリー・アニメスファイア

2 間桐桜

3 朔月美遊

4 メアリ・クラリツサ・クリステイ

5 藤丸立香

6 原作キャラ

7 同上

8 同上

9 同上

10 熱烈歓迎

結果 5

「……藤丸立香との間に生まれた子の末裔ね♪

よろしくネ♪センパイ♥」

彼女は手の令呪を見せながら挨拶。

うわぁ。

何か凄いことになっちゃったぞお。

超鈴音のサーヴァント。

槍オルタ。

## 閑話 小ネタ劇場 その6

AM4:00。

寝ている裸の女たちを起こさないようにして起きてシャワーを浴びる。  
服を着て、装備を確認。

財布よし。

タオルよし。

カロリーメイトとポカリスエットよし。

学園都市のおかげで携帯ができていたのでバッテリーは忘れずに。  
それらをナップサックとポーチに入れて、いざ出……

「どこに行くの?」

感づいた叢雲が行く手を塞ぐ。

寝ていればいいのにと思いながらもローブ姿なので実に色っぽい。

「ああ。起こしちゃったか。すまん。

ちよつと聖地巡礼をしてこようと思つてな」

「あれ?」

あんた何か宗教入っていた？」

たしかに知らない人にこの用語だと宗教と思うよなあ。

ついて行く気満々なので、俺はあっさりとなタバラシをする事にした。

「コミケだよ」

コミケことコミックマーケットの歴史はそこそこ古い。

第一回が行われたのが75年だから、この時点で18年の歴史がある。

しかも、この時期の会場は晴海である。

有明しか知らない俺にとって、失われた聖地みたいなものである。

という訳で、何か買うという訳でもないが、その空気を堪能しようという事ででかけるつもりだったのだ。

さすがに、大勢で行くと迷惑になるというか騒動になるというか。

叢雲の準備があるので待っていると、マシユが気づき、ステンノがじゃあについていき、段々大事になっていくのが分かる。

「……」

睨むなよ。企画立案者の文車妖妃よ。

俺だって、色々あるんだからさあ。

というか、恨めしそうにコミケカタログを見るんじやねえ。

いつ買ったんだよ。それ。あと俺にも見せろ。

女性陣の準備を待って出陣。

始発出発の予定だったが、遅れに遅れて横須賀駅を出たのは6:00だった。

出発時メンバー

やる夫

叢雲

マシユ

ステンノ

文車妖妃

横須賀から東京まで大体一時間ちよつとかかるのだが、東京駅に近づけば近づくほどその手の人達が多くなる。

というか、今から行つて列に並ぶのは女性陣に不評なので、10時まで時間を潰すことにした。

という訳で、朝食を食べに秋葉原へ。

山手線ホームから、階段を上がって総武線下りホームの所にある蕎麦屋へ。

盆でも働く人間はおり、そんなサラリーマンたちに混じつて春菊蕎麦を食べる。

うん。うまい。



「おいしいじゃない！」

「なかなかのものね」

「これ美味しいです。先輩」

「たしかに、この味は寄るだけの価値があるわね」

明らかに浮いているのだが、ここで気にしたら負けである。

そんな俺の耳に客から謎のワードが。

「あいつら……まさか、立喰師か？」

居るのかよ。立喰師。

いや、居てもおかしくないのか。

というか、食券を先に買うシステムだろうが。ここ。

立ち食いそばなので手早く食事を済ませる。

時間は8:00を過ぎたあたり。

もう少しのんびりできるなという事で、有楽町駅近くのカフェで休憩することに。

なお、うろつくついでに地下鉄有楽町線の駅を覗いたら凄いことに。

ステノは霊体化してもらって、タクシーで会場に行くことを決める。

「見事に渋滞になっていない？」

「この時期は、こんなものですよ。」

お客さんたちもコミケで？」

叢雲のぼやきにタクシーの運転手も苦笑する。

朝から何度も往復して稼いだらしい。

「まあね」

会場到着が10:00ちよつと。

列の移動が見れたので感動する。

コミケは流行を映す鏡とはよく行ったもので、この時のジャンプ黄金時代を腐女子たちの出典から嫌でも感じてしまう。

そうか、これこの時期に出ていたのか。

ゲームはゲームでPC-9800が輝いているなあ。

叢雲赤くなるな。

ステンノにやつくな。

マシユ格闘ゲームの技を取りいれようと企むな。

あと、マシユが持っている格闘ゲーム解説本だが、そのゲームは18禁だ。

文車妖妃。腐るな。あと801本は隠れて買え。

コスプレ会場を見学。

セーラーームーン全盛期という事もあって、そつち……

「はい！」

時間までちゃんとポーズとりますから、押さないで！ちゃんと並んで!!」

「目線こつちでいいですか？」

ポーズはこう？

じゃあ合図お願いします♥」

「何で私がこんなこと……」

みなかった事にしよう。

鬼咒嵐が死んだ目で写真を撮られている事とか、皇北都がノリノリでポーズをとっていることとか、元姉なるものだったジャンヌがベースとなったアマテラス様が巫女服を着てコスプレ写真を撮っているなんてものは俺は見えていない。知らない。関与するつもりも……

「……！」

義弟くん!!

いい所に来てくれました!!!」

「はい！」

撮りまーす!!」

「「「月に代わってお仕置きよ♪」」」」

哀れ。

五人揃わなかったという事でできなかった、『セーラーームーン』のポーズを撮るために、女たちが徴兵されてセーラー戦士へとジョブチェンジする事に成り果てましたとさ。

人数が合わない？

余った人は、ナコルルと春麗やっていますから。

誰が誰なのかは最期の情けで言わないことにする。

え？

キャミイは居ないのかって？

「これでどうかな♥」

多分隠れて監視していた対魔忍の朧さんが限りなくアウトなラインで攻めているんだけど、というかいつもより布面積が多くてかえって評判落ちないかしらなんて思っていたりするのですけど。

これも見なかったことにしよう。

なお、この時の写真はプレミアが付く伝説となるのだが、それは別の話。

ついでにいうと、あのコミケ参加者の非番の自衛隊員と米軍人は結構多かったらしく、その写真が横須賀基地に蔓延して元凶の皇北都の代わりに皇昴流が関係各所に頭を下げて回った事もついでに記しておく。

## 麻帆良学園訪問 その4

麻帆良大学にある超鈴音の研究室。

俺と叢雲とステンノとマシユだけという条件でこの部屋に入っている。

魔術的な結界が幾重にも張られており、麻帆良学園側の警戒すら想定しているのだろう。

「やあ。マスターくん。

私からみるとこういう言い方になるけど勘弁してくれたまえ。

久しぶりだね」

超鈴音が持っていた記憶媒体から再生されたモニターの中のダ・ヴィンチちゃんは、いつものと変わらない笑みを浮かべていた。

「まずは君たちが知りたいことから先に言おう。

この世界線では、カルデアはこちらの世界に付くことを選択した。

多くの人間が生き残ってしまった為に、藤丸立香を皆が信じられなかった。

そういう結末の世界線だと思ってくれるとわかりやすい。

カルデアは解体され、英霊は座に帰り、行き場が無かった彼女を助けたのが麻帆良学

園であり、そこから先は言わなくてもいいだろうか？」

知っているだけに納得する未来予想図だった。

世界の命運なんてものより、人は自分のことを大事にする生き物だ。

彼女がグランドマスターに成る前だったからこそ、多くの生存者たちは彼女を引きずり落とした。

多分、自分たちが何をしたのかも分かっていないし、この世界線についた時点で記憶の改竄が発生しているから覚えても居ないだろう。

「私は藤丸立香が居たカルデアのダ・ヴィンチちゃんだ。

冬木の時もモニター越しとはいえ会っているからとはいえ、私的には本当に長い時間ぶりの再会だ。

そういう物言いと割り切ってくれたまえ。

麻帆良学園、いや君から聞いた『ネギま!』の世界に私が残ったのは、藤丸立香くんの事もあるけど、後になって知り合った超鈴音の存在が大きい。

そして、私達は情報を出し合って、一つの結論に行き着いた」

そこで一呼吸おいて、ダ・ヴィンチちゃんはその結論を言う。

「君が言っていた駄女神様。

その彼女がやらかした最大のガバがこれだよ」

空気が緩む。

俺自身『まあ駄女神だし』と悟りつつあるが、今度は何をやらかしたのやら。

「君自身は自衛隊のクーデターの発生。

もう少し言うと、米軍の核ミサイルの発射阻止に的を絞って行動していた。

そして、そのイベントをラストとして駄女神は君たちという駒を盤上から回収したの  
「さ」

あ。

そういう事か。

すとなんと納得する俺が居た。

おそらくはゲームクリアという形で物語を終わらせた訳で、俺たちについてはハッ  
ピーエンドという形で終わらせているはずだ。

問題は、ゲームクリア後も物語というか歴史は続くというわけで、その時間軸に収ま  
らなかった超鈴音という存在が、未来からこれを伝えに来るとするのは何という皮肉だ  
ろうか。

「勘違いしないでくれ。マスターくん。

君に全ての責任を押し付けるほど私も恥知らずではないよ。

けど、私達は話し合っこの女神のガバにつけ込むことにした。



マスターくん。

気づいているかい？

超鈴音くんはね、タイムパドックスを覚悟の上で、この世界にやってきている。

つまり、そういう事が君たちのハッピーエンドの後に発生したという事さ」

一度視線を超鈴音に向ける。

彼女はただ黙って首を振った。

「残念ながら、大洪水が発生してミレニアムが出現した」

衝撃を受けなかったと言えば嘘になる。

とはいえ、なまじ色々なものを混ぜすぎたので、そのどれかがやらかせば大洪水が発

生するレベルになるだろうと納得する俺が居た。

「知つての通り、『ネギま！』世界は火星も舞台にしている。

生き残った人類でミレニアムに抵抗する人達は火星に行き、そこで地球奪還を目指し

ている。

まあ、そんな所さ。

で、マスターくん。

君、火星を舞台にした物語知っていたよね？」

いやな汗が出る。

うん。

知っているさ。

二次創作散々読んだし。

「『遺跡』」。

聡明な君ならこれで分かるだろう？」

「やりやがったあああああああああ!!!」

ニヤリと笑うダ・ヴィンチちゃんに絶叫する俺。

からくりを知っている超鈴音以外は呆然とするばかり。

「そうなんだよ。」

『遺跡』だったんだよ。

駄女神様が用意したはいいが、そこに行く手段がないとして設定だけ入れちゃった結果、『ネギま!』世界が火星だという事を忘れていたという訳さ。

我々がこうやってなんとか生きているのも、木星のプラントのおかげでもある」

『ネギま!』二次創作は基本学園祭あたりで力尽きるかオリ設定に移行する。

そこから先の魔法世界編が終わる頃には、『ネギま!』二次創作のブームが終わっていた。

材料選定者である俺は、魔法世界が火星であるとは知っていたが、そこまで行くつも

りもないし、ダ・ヴィンチちゃんの指摘どおり核発射だけを防げばいいやと放置したのである。

で、そんなブーム時に同じく二次創作が盛り上がって、読みふけていた作品の名前は『機動戦艦ナデシコ』。

さすがに時代が違々と弾いていたつもりだったが、『遺跡』関連は遺跡だからこそそこに存在しているという訳で。

完全に盲点だった。

「マスターくん。

君の驚く顔が目には浮かぶけど、トドメを言わせてくれ。

超鈴音くんはね。

カシオペアの技術と遺跡の技術を理解して時空跳躍機を完成させた、A級ジャンパー。

いや、この超天才ダ・ヴィンチちゃんが認定したただ一人のS級ジャンパーなんだよ」

# 麻帆良学園訪問 その5

大洪水は何処がやらかした？

100でやらかし

メガテン

88

型月

21

ネギま

74

CLAMP

57

HELLSING

17

バイオハザード

34

とある

68

なのは

18

その他

90

「何処がやらかしたのかと考えると、やはりメガテン系と答えざるを得ない。

君は、特にメシアとガイアの対立を政治的立場から放置せざるを得なかった。

クーデターの阻止がそのまま世紀末救世主思想と絡んで、メシア教の勢力拡大に繋がった事を軽視せざるを得なかった。

そして、学園都市と麻帆良学園都市という2つの治外法権がこの時最悪の方向に動いたのが、決定打となった」

モニターのダ・ヴィンチちゃんは過去を淡々と語る。

その麻帆良学園都市にいるのにこんな話を聞かせてくれる超鈴音の顔をちらりと見るが、表情は変わっていない。

「この二都市はメシア候補を抱えていた。

上条当麻とネギ・スプリングフィールドの二人だ。

メシア教はこの二者の救世主を取り込もうとし、それが無理と分かったら抹殺に動いた。

クーデターを阻止した上に、ガイア最後の希望となった天の龍と地の龍の対立も不発に終わった事で、政府内にメシア教支持者が急増したのも痛かった。

政府対二都市の対立は結局武力衝突にまで突き進んでしまった。

日本国内の内戦は在日米軍を巻き込み、世界大戦に発展し……」

ん？

ダ・ヴィンチちゃんの声が聞こえない。

「……」

「パラドックスを避ける為にガードがかかったみたいネ。

まだ今の貴方が知らない何かが重大なフアクターとして未来に繋がるのだけど、ここでそれを言うと、今の私の情報が改ざんされるという訳ネ」

これだから未来人は。

こっちは知らないこととかまだ起きていない事が大洪水の理由になったという事だけでもよしとしよう。

「マスターくん。

こういう言い方は卑怯かもしれないが、君も会った忍野メメが昔私を訪ねてきてね。何で君が冬木で彼の助けを借りようとしたのか納得した覚えがあるよ。

そんな彼の言い方をまねしようかと思う。

世界を救ってくれというのは私の勝手なお願いで、聞く耳を持つ必要なんて全然ない。

でも、マスターくん。

目の前の女の子は救ったほうがいい」

おもわず笑みがこぼれる。

ああ。忍野メメよ。

そういう抜け目のない所が俺は大好きだ。

モニターからダ・ヴィンチちゃんが消えて、超鈴音が微笑む。

「という訳で、（っ）感想をどうぞ」

「あの駄女神は次会った時にぶん殴る」

とりあえず半分本気の冗談を言った上で、俺は超鈴音に向き合う。

この情報だと大洪水の発生というのを除けば、俺個人についてはかなり良いシナリオだと判断しているからだ。

「ガードされた情報が何か分からないから、対策の仕様が無いんだよなあ」

「むしろしない方がいいと思うネ。

タイムパラドックスによる情報改ざんから貴方は外れているから、また適度にこの画像を見に来るといいネ。

その都度言うことが違うだろうし、下手したら私自身が存在していない可能性もあるが、私がここに居ないという事は基本的に良い未来であるという事はわかって欲しいのネ」

彼女はその為にここに居る。

その覚悟は尊重したい所だが、こちらは何もなしで手を差し伸べる事はできない訳で。

原作の彼女の狙いである魔法の認知はこの世界ではそう難しい事ではない。

「で、超くんは俺に何を求めているのかな？」

「私達のより良い未来のために。」

私はそれを提供できる」

超鈴音の言わんとする事は分かる。

そして、彼女は自らの手札を広げる。

「まずは、こちらに来てから召喚したランサーことアルトリア・オルタ。

この麻帆良学園に教師として働きつつ私の保護者になつてもらっているネ。



必要ならば、彼女を提供する用意が有る」

藤丸立香の血を引いているなら、この当たりも納得というものだろう。そこでふと気になった事を尋ねる。

「で、君の知る歴史では何処でカルデアは諦めたのかい？」

- 1 オルレアン
- 2 ローマ
- 3 オケアノス
- 4 ロンドン
- 5 北米大陸
- 6 キヤメロット
- 7 バビロニア
- 8 イベント特異点
- 9 ソロモン前
- 10 熱烈歓迎

結果 7 バビロニア

「バビロニアと聞いたネ」

頑張ったんだろう。

そして退路があった事が彼女の敗因となった。

おそらくは、この世界とカルデアが切り離されるギリギリまで粘ったのだろう。粘って、戦って、最後の最後で彼女たちは退いた。

それを俺は責める事はできない。

「そちらがガイノイドを欲しがっているのは知っているネ。

こちらはそれを優先的に提供する事ができる」

その言葉と共にそのガイノイドの試供品が入ってくる。

マシユが思わず口を押さえる。

耳のアンテナと緑色の長髪を除けばマシユと同じ姿が入ってきたのだから。

「カルデアの技術デミ・サーヴァントに、私が本来持っていたガイノイド技術と、火星のIFS技術なんかを混ぜた量産型デザインベビーのマシユ・茶々丸ネ♪」

「はじめまして。

マシユ・茶々丸と申します。

量産タイプですので、気軽に使い捨てていただけると助かります」

マシユ・茶々丸の生産数。

月産82体。

在庫1月分。

## 生産時レベル18

「もつとも、完成したのはつい最近で、彼女たちは初期ロットだったりするネ。」

エヴァちゃんの水水晶球の中に工房があるから、そちらを案内するネ」

そして、超鈴音は最後の切り札を切った。

彼女の手にはチューリッププリスタル。

やはり持っていたのか。

「私を連れて行くことで、貴方の知っている好きな世界・時代を行き来する事ができるネ。」

さっきのガードの話にも繋がるけど、多分、貴方がこれから行く時空が大洪水の引き金の一つになったと思うヨ。

それを忘れないならば、この世界を良くするために、私は貴方に力を貸すネ♪」

## 麻帆良学園訪問 その6

来たことなど一度もないのだが、その場所を懐かしいと思うのはなかなかおもしろいものがある。

『ネギま』の始祖吸血鬼ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの家というのは、中の水晶球を含めて二次創作を読みまくった俺にとってそんな場所だった。

「お待ちしておりました。入即出様」

頭を下げたのは絡繰茶々丸。

その隣に、鎌を持ったマシユ・茶々丸が一体こちらを挑発的な目で睨んでいる。

多分チャチャゼロだな。こいつ。

「貴様か。」

ジジイの紹介で私の呪いを解きたいという酔狂者は」

生幼女吸血鬼である。

どれだけ多くの二次創作がエヴァ救済ルートを通った事か。

ああ。全てが懐かしい。

「おい！」

聞いておるのか！貴様!!」

「……すいません。」

入即出やる夫と申します。

こちらでも色々事情があります」

とりあえず手を差し出すと、エヴァはその手を握ってくれた。

小さな手だが、握力は吸血鬼だけあって強い。

「聞かせろ。」

「どうやってジジイの取り巻きを説得した？」

「奴らは呪いが解けると私が復讐に出ると怯えていたからな」

「それは秘密と言いたい所ですが、彼らの排除はこちらのオーダーでもありましたし」

手を離れたエヴァが首をかしげる。

エヴァも、『ネギま』世界の常識に捕らわれているというのが分かる。

「というかこんな闇鍋世界でどれが常識かを問うのもナンセンスだが。」

「(イ)ちらう」

「日本政府」

「まだ首をかしげるエヴァンジェリン。」

「麻帆良学園都市に住むと、どうしても上をメガロメセンブリア元老院と考えている連

中の多いこと多いこと。

しかも、学園長をトップとして学園上層部が魔法関係者で固められているから、日本政府の介入をどうとも思っていないふしが露骨に出ている。

「今までこちらを放置していた連中が今更口を出すと?」

「放置していたのではなく、放置せざるを得なかった、なのです。

お間違えなく」

麻帆良学園都市に学園都市に在日米軍という三点セットがこの戦後日本を苦しめている。

もちろん、それ相応の恩恵も受けているのだが、この矛盾の精算を迫られているのも事実であった。

「戦争はするものではないですよ。

特に負ける戦争は」

「それには同意するな。

そちらは半世紀ほど平和だったが、向こうは大分裂戦争が数年前のことだ」

戦争からの復興には時間も金もかかる。

そして、その復興を地球側が支援しているというのは政府資料から裏付けがとれていた。

弱っている所につけ込むというのは言い方が悪いが、対学園都市絡みでも麻帆良学園都市を日本政府の影響下におく事は既定路線と言つていいだろう。

「来年できる文部科学省から査察官がやってくる事になります。

色々痛くない腹を探られると思うので、彼らも貴方のことまで手が回らないでしょうな。

とはいえ、魔法世界の懸賞金についてはこちらも関与できないので、この街を出たら狙われるというのはお忘れなきように」

なお、その査察官の名前は入江省三つて言うんだらうな。きつと。

そこまで話して、ふと気になった事を尋ねる。

「そういえば、私の前に貴方を訪ねた客来ませんでした?」

「ああ。今も水晶球の中だ。

お互いかなり話して、色々刺激を受けていた所だな。

もうしばらくは居るつもりらしい」

エヴァの言葉についてきたマッシュ・茶々丸を眺める。

後で超鈴音も交えて人形談義に花が咲くのだろう。

今度、アリス・マーガトロイドも連れて来てやろうと心のメモに記録しておく。

「とりあえず、能書きはここまでだ。

それで、どうやって私の呪いを解除するつもりだ？」

「いくつか案がありますが、かんたんなのとド派手なのどっちがいいですか？」  
俺の確認にエヴァはあっさりと言。

家の外に出る。

さらりと魔法関係者の監視がある事を確認。

「決まっているだろう。」

「ド派手なのだ」

「わかりました。」

「令呪を持って命じる！」

「来い！」

「メディア・リリイ!!!」

瞬間、地面が光り、神代の魔術師がこの地に召喚される。

プリズマ・コースズでボス役をやっていたメディア・リリイである。

今回の事で、一時的に契約してこうして召喚したのだ。

「サーヴァント、キャスター。メディアです。」

あの、よろしくお願ひします！」

呆然とするエヴァ。



そりやそうだろう。

たとえ世界が違うとは言え、魔術を操る者で歴史を遡るならば、必ず名前が出てくる魔女の一人なのだから。

その全盛期スタイルの召喚なんてどれだけの神秘なのかは言うまでもない。

「宝具開放。」

彼女の呪いを解いてやれ」

「はい。」

頑張りましょう」

スキル『高速神言 A』lv10使用。

なお、概念礼装『魔性菩薩』を念の為に持たせている。

これでNPは100%オーバーチャージに『魔性菩薩』の効果で300%となる。

あとは、この麻帆良学園都市という敵地で、ナギ・スプリングフィールドの呪いを解除できるかという勝負となる。

ナギ・スプリングフィールドの呪いのレベル

141

麻帆良学園都市の結界の効果

キャラクターレベル能力の52%のバフorderバフ効果

1 バフ

2 デバフ

3 影響なし

結果 3

メディア・リリイのレベル＋魔性菩薩のOC

80?300%||240

「どうか誰も傷つけぬ、傷つけられぬ世界でありますように……

『修補すべき全ての疵』

解き方が分かっている以上、問題はそれをどうやって用意するかだった。

原作では、ネギの血だけでなく、麻帆良学園都市の停電による結界の解除という外的要因も重なったの解除だったが、ここでは見せつける為にも宝具で一気に押し込む事に。

後でメディア・リリイに聞いたが、呪いはかなりやばかったらしい。

どれだけの馬鹿力で無茶苦茶な魔法をかけたのやら……

「どうです？」

呪いは解けましたか？」

「ああ。」

こんなに苦しんでいたのに解けるとあっさりとするものだな」  
みるみるエヴァの中から殺気が膨れ上がる。

このあたりもお約束だなあといいながら、俺は学園長からの預かりものを手渡す。

「何だそれ……あつー！」

黒い筒に入っていたのは中等部の卒業証書。

それを見て震えるエヴァに文部省と交渉して作成した書類をエヴァに手渡す。

「転入届……だと？」

「貴方は転校していた事になっています。」

これがあれば、高等部に進学できますよ」

エヴァの登校地獄の呪いは88年に始まっている。

その時中等部一年ならば、今の93年だとギリギリ最初の学年の連中がこの学園内に残っている計算になる。

三年間の友人生活と二年間の無視という苦しみを思い出してエヴァは姿相応の少女の声で呟く。

「……あいつら、私を覚えていてくれると思うのか？」

「貴方の行い次第でしような。」

友人ならば、笑ってくれますよ」

ただ静かに嗚咽の声をあげるエヴァを置いて俺たちはここを去ることにする。後は、茶々丸やチャチャゼロの仕事だろう。

家を出てしばらくすると、数人の女子高生たちがこっちにやってくる。

「あの、すいません！」

このあたりに、外国人の女学生の家ってありませんでしたか？」

「ああ。」

私は学園長に頼まれて、転入届を彼女に手渡して……」

「ほらっ！」

やっぱりエヴァちゃん帰ってきていたんじゃない!!

ありがとうございます！」

そんな事を言いながら走り去ってゆく女子高生たち。

そんな後ろ姿を眺めた後、俺たちはここを立ち去った。

## 麻帆良学園訪問 その7

帰りの電車の中。

この車内にいるのは、俺、叢雲、ステンノ、マシユ、羽柴茂光、ヴィゼータのみ。

朔月親子とクロエと東風谷早苗とメアリ・クラリツサ・クリステイは麻帆良学園都市のホテル暮らしから学校生活を始め、近くアパートを買ってそこに引っ越す予定だ。

基本荷物を持たない彼女たちだからこそその生活とも言えるだろう。

あと、蒼崎橙子とオルガマリー・アニムスファイアもしくはばらくはエヴァの水晶球の中で人形談義に花を咲かせるつもりらしい。

呼んだメディア・リリイも少し残ってこの話に加わるとか。

あの中にマシユ・茶々丸シリーズの生産工房があるので、そっちの立ち上げも行うつもりなのだろう。

「で、羽柴さんは何か収穫はありましたか？」

「そちらが引き合わせてくれた葛葉刀子さんの他に、タカミチ・T・高畑先生あたりともお知り合いになりましたよ」

さらりと麻帆良学園都市最強戦力の一角とコネを作っているのだからこの人物は基

本有能である。

そして俺は疲労困憊のコスプレ女子高生に話を振る。

「そつちは……よく逃げ切れたな」

「はあはあはあ……魔人なめんなってーの！」

最後かなりやばかったけど」

ヴィゼータの言う最後とは、呪いの解けたエヴァの追撃の事で、クラスメイトとの再会に喜んでいたエヴァに降って湧いたこの要請にエヴァは大激怒。

全盛期のエヴァからの追撃を逃れきったのだから、ヴィゼータも只者ではない。

知っていたが。

「はいはいはい！」

という訳で、提案！

ゼピルムとコネ持ちませんか？

お安くしておきますよ♪」

まあ、鬼ごっこをしに来たわけではないだろうから、この勧誘はある意味当然だなと思つた。

超鈴音とともに見たダ・ヴィンチちゃんの声を思い出す。

『……クーデターの阻止がそのまま世紀末救世主思想と絡んで、メシア教の勢力拡大に

繋がった事を軽視せざるを得なかった。

そして、学園都市と麻帆良学園都市という2つの治外法権がこの時最悪の方向に動いたのが、決定打となった』

「対神殿協会か？」

「もつと大きく、対メシア教と言っても構いませんよ。

神殿協会は、メシア教の分派みたいなものです」

とはいえ、その武力はメシア教内でも随一だ。

十二の聖騎士団と対魔特化の異端審問会を抱えているからだ。

ついでにいうと、元アメリカ海軍から払い下げられたエセツクス級航空母艦を改装した、強襲空挺艦『エンジェル・ストレージ』を運用する軍事力と経済力は無視できるものではない。

「そちらのおじさんも私と仲良くしておくと色々お得ですよ。

メシア教が何処にどれだけの金を政府に流しているか、こつちは探り出していますからね」

「つまり、澤田議員回りの金にそれがある？」

目の奥が光った羽柴茂光を見て、ヴィゼータが挑発的に笑う。

彼女の口から聞こえたカラクリは、俺達の想像を越えていた。

「金というより、武力の方ね。」

この国の自衛隊がクーデターを起こそうとしていたのはもはや周知の事実で、連立政権は不満を収めた自衛隊に未だ不信の目を持っているわ。

彼の取ろうとしている策は、闇と現野党が繋がっていた勢力の掃討で、それをメシア教徒に任せようとしている」

アマテラス様の属性は、天津神だからLIGHT — LAWで、メシア教に近いものが有る。

とはいえ、この国の守護者という事は秩序の擁護者としてメシアとガイアの争いには中立的行動に終始せざるを得ず、それで大洪水を止められなかったと俺は読んでいる。

少しずつ、この時間軸の未来が見えてきた。

野党の政権奪還を阻止するため、野党側の闇資金を潰そうと澤田議員はメシア教と手を組んだ。

多分だが、その時俺は既に消えていたのだろう。

かくして、この国の中枢にメシア教が広がる素地ができた。

「条件は？」

「私を麻帆良学園都市の生徒としてあの学校に居られるようにしてほしい」

ヴィゼータは女子高生として名護屋河鈴蘭の友人として学校生活を送っていた事が



ある。

その時の名前は高木嘉子という。

そのの意味する所を俺は察する。

要するに、今は未だ孤児院か親戚たらい回しの生活を送っているだろう名護屋河鈴蘭を麻帆良学園都市に迎え入れる工作の一貫なのだ。

「学園都市じゃなくて？」

「あつこは駄目。」

うちらでも手を出したくないわ

「だろうな。」

俺も同じ意見だ」

あの都市そのものがアレイスター・クロウリーの魔術工房みたいなものである。

あの都市を攻略するのならば、それこそアマテラス様が漏らした木花之佐久夜毘売を使った富士山大噴火で東京壊滅を覚悟の上での勝負となる。

「いいだろう。」

書類は用意してやるから、学園長以下の説得はそっちでしろ」

「ありがとう。」

この関係が長く続くことを祈っているわ」

そんな事を言つてヴィゼータは止まった駅に降り、ドアが閉まると彼女は見えなくなつた。

「いいんですか？

信じて？」

「信じる訳ではないが、麻帆良学園上層部の首の入れ替えは確定事項でね。

それに利用させてもらうさ。

向こうもこっちを利用するだろうからね。

そうだ。

そつちの伝手を使って一人の少女を探してもらいたい。

名字は『吾川』か『深山』か『木野』か、名前は鈴蘭だ」

孤児の上親戚のたらい回しの時期だから名字が確定できない。

とはいえ、元刑事でとびきり優秀な羽柴茂光ならば、見つけられるだろう。

「わかりました。

暇な時に探しておきますよ。

ではここで」

羽柴茂光とも別れて品川到着。

ここから京急に乗つて横須賀に帰るかという時にそのアナウンスが聞こえてきた。

『運転は再開いたしました。』

なお、これより先、列車の遅れ、行き先、待ち合わせ等変更がある場合がございます。ご了承ください。お急ぎのところ大変ご迷惑をおかけしております。

電車は運転を再開しております。

なお、遅れが出る見込みですので、ご了承ください……』

あ。

逝つとけダイヤ発動してる。

結局その日の内に横須賀に帰れず、その日はホテルに泊まることになった。

シングルと三人部屋でなくツインルームの四人使用を注文した叢雲はいい感じに俺の趣味に毒されていると思った。

## 閑話 小ネタ劇場 その7

やる夫たちが帰っても静かに泣いていたエヴァ。

そんな彼女が我に返るのは、ビリッ!といういやな音だった。

「な、なんじゃこりゃ—————!!!」

吸血鬼の『呪い』の強さ 141

『修補すべき全ての疵』 240

『修補すべき全ての疵』とは、あらゆる呪い、魔術による損傷を零に戻す治療宝具である。

おまけに、時間操作ではなく本来あるべき姿を算定することにより自動修復し“死”以外のあらゆる理不尽を打破できるが、死者だけは取り戻せないという神代魔女の極まった魔法である。

所詮600歳のおこちやまであるエヴァの吸血鬼の呪い程度、一緒に解いてしまうのも問題なかった。

さて問題だ。

人間に戻ったエヴァの自動修復だが、彼女の手元には高等部への転入届があり、それに合わせて成長しない体を成長させてしまう。

当然、幼女性型の体に合わせた服に発育抜群のムチムチ体型が耐えきれぬ訳がなく。そんな彼女の絶叫を聞きつけたエヴァのクラスメイト達が彼女に会いにやってきていたのがこの悲劇を喜劇に変える。

「な、何事!」

「すっごい悲鳴……あつ……」

庭先で全裸で泣く金髪美女に、それを眺めるメイド二人。

何をどう言い繕っても事案だろうという状況で、絡繰茶々丸は頑張つてフォローを入れる。

「エヴァ様は皆様に会うのも楽しみにしていたのですが、無理して昔の制服を着た結果……」

「ちよつと待て!」

それだと、私があいつらに会うのをすごく楽しみにしていたみたいじゃないか!!」

泣きながら手で体を隠して叫ぶエヴァの言葉にはまったく説得力がなかった。

クラスメイト達はその豊満な肢体に幾ばくかの嫉妬を隠して、最初に言おうとした言

葉をやつと口に出したのである。

「おかえりなさい」

「……ああ。ただいま」

「ふはははは……麻帆良学園都市の警備体制もちよろいつすねー」

逃げ回るヴィゼータだが、彼女の能力に隔離世への転移というのがある。

この世界とは少し違う鏡の世界みたいなものをイメージしてもらおうとわかりやすいのだが、その世界へ瞬間的に出たり入ったりする事で、ヴィゼータは麻帆良学園の追跡者達をかわしていたという訳だ。

「リック・ラク ラ・ラック ライラック！」

死んでくれるなよ!!

魔法の射手!連弾!!氷の17矢!!!

隔離世から出た所を露骨に狙われて、ヴィゼータはその氷の矢を払わざるを得なくなる。

見ると、激怒している金髪美女が一人。

ウィゼータは間合いをとりながら思う。

(あんなやつ居たっけ?)

「今の私は怒っているんだ！」

感動の再会をあんな形でやらかしたうえに、じじいの仕事の手伝いだと!?

運が悪かったと思って、八つ当たりの的になってくれ!!!」

「にゃーにゃーにゃー!!!」

なんかすぐく物騒な事言ってるううううう!!!」

これで逃げ切ったヴィゼータは褒められていいと思う。

エヴァの方も、せっかくの目を血で汚したくないという気持ちもあったのかもしれない。

それは当人しかわからないし、翌日から高等部三年のクラスにクラスメイトと共に楽しそうに通う彼女にそれを聞く事はないだろうから、この一件はこうして闇に葬られた。

紫式部はサーヴァントである。

問題なのは彼女がFGOという物語に姿を表すのは二部からという事。

だが、出ちゃったものはない。

「あーっ？」

「ここはどちらでしょう？」

当たり前のように彼女が現界したのは神田古本街。

彼女にとっての楽園であった。

それは、必然的な出会いを招く。

「あ」

「あ」

やる夫が麻帆良学園に行ったのでお休みになった文車妖妃は当たり前のように本を買い漁っていた。

そんな彼女がこの紫式部を見分けられないと思うのか？

いや。それはありえない。

というか、十二単ではないとはいえ、そのお姿は明らかに世紀末日本から浮いている。

何かを言うタイミングは、必然的第三者のエントリーによって決定的に失われた。

「本！本！！ほんっつっつっつっつっつ！！」

ああっ！私は生きていて良かったー！！！！」

彼女の名前は読子リードマン。

高校を卒業したばかりの大英図書館の新米エージエントである。

そんな三人がこの街にビルを購入して本の城で耽溺するのは確定的に明らか。



横須賀に帰ったやる夫が文車妖妃の報告に頭を抱えたのは言うまでもない。

なお、その年の冬コミにこの三人サークルとして参戦。

『雲隠』を同人誌として出したのだが……

「読みたい！」

読ませろ!!

サーヴァントにでもなんでもなつて世界の一つや二つ救つてやるから、その雲隠を読ませろおおおおおおおお……」

と、座に突貫してアラヤの抑止力に無茶を言う菅原孝標女が居たとか居なかったとか

……

一方その頃

「……コードネームはヒロインX。」

「昨今、社会的な問題となつているセイバー増加に対応するために召喚されたサーヴァントです。よろしくお願いします」

「え？」

「沖田さん対象に入っているの？」

「訓練していた藤丸立香の所に宇宙船で突貫して、沖田さんと問答無用のバトルを繰り

広げて仲間になった謎のヒロインXについてなにか知っているかとカルデアのダ・ヴィンチちゃんから連絡が入ったが、やる夫は何も知らないことにした。

## 更に続く猫の手の確保 その1

ターミナル研究を行っているエコービルに守りの悪魔を置く。

それをあのアマテラス様が放置してくれる訳もなく。

当たり前のようにやってきての召喚である。

「……痛み畏み白す」

もう何が出てても驚かないぞー。

そう思っていた時期がありました。

「天津神八意思兼神。

月読尊様の命を受けて、この地に降り立ちました」

八意思兼神 高位分霊 レベル130

メガテンだと脳みそだから結構グロいのだが、この闇鍋世界に丁度いい素体があったのでそこからコピーしたのでらう。

八意永琳。

これどっちがオリジナルとか考えるとすごく不毛な論争になるので、考えないことにした。

「このビルを守りなさい。」

そして、決して悪しき者を外に出さず、中に入れてもいけませんよ」

「承知いたしました」

この吉祥寺のエコービルだが、研究施設としてリフォーム工事の真っ最中である。

ここから悪魔が出ないようにこの八意思兼神の他に、警備部隊を置いておかないといけないなど思っていた時、ふと気になる言葉に気づいて確認をとる。

「八意思兼神。」

出てきた時、『月読尊様の命を受けて』と言ったが、どうしてだ?」

「そうです。」

私、月読尊を呼んだつもりなのですが?」

おいまて。アマテラス様。

あんた何を呼ぼうとしていた!?

真っ青になる俺のことなど気にしない八意思兼神はそのあたりの事情を語ってくれた。

「月読尊様曰く、『姉上様の企みを考えたら私のほうが適任だ』という事で」

ぎつとアマテラス様を睨む。

アマテラス様は駄女神みたいに俺の視線をそらした。

「アマテラス様。

何を企んでいたのか教えていただけませんか？」

「え？」

おねーちゃんは何も知らないよ。

ほんと。

おねーちゃんが弟くんの手を煩わせるなんてしないでしょ♪

信じて♪」

「麻帆良学園都市と学園都市を潰す際の要の地だから守護しろという事でしたが」

「いっちゃんだめええええ!!」

そーいう事を企んでいたか。

この神様は。

いや、日本を守護する神様に麻帆良と学園都市は靈的に邪魔なのは間違いがないのだ。

実は井の頭公園は靈地だったりする。

昔からここは湧水が湧き、弁天様が祀られている地でもあるのだ。

で、八意思兼神はアマテラス様の企みをペラペラと表情を変えること無く喋る喋る。

「富士山の木花之佐久夜毘売と浅間山の石長比売を起こして靈脈を枯渇させよう」と

「わーわーわー!!!」

「そういう事企んでいたんだ……」

涙目で叫んでごまかそうとするアマテラス様。かわいい。

とはいえ、俺と同じく白目で見つめる叢雲が一言。

「神様って考えることが壮大で、何処か抜けているわよねー」

「あら？」

そういうのが神様ってものでしょう?」

それに女神であるステンノが神様としての弁明をするが、その視線は俺や叢雲と同じく白目である。

「つまり、富士山だけでなく浅間山まで噴火させてこの二都市を叩き潰そうと。

関東壊滅ってレベルじゃないな」

「大丈夫です!」

そこはこのおねーちゃんばうわーでなんとか押さええますから!」

えへんと胸を張るのはいいが、多分都心部は無事としても、神奈川・埼玉・群馬県壊滅するって言わない?

「……てへっ♪」

多分考えてなかったな。この天津神様は。

「えてして大神と呼ばれるお方は皆そのようなものです。

お力が強すぎるから、個々の事例を斟酌しない。

よくよくそれを頭に入れた上で、どうか姉上様をお願いしますと月読尊様はおっしゃっております」

もしかしてだが、月読尊様はこの姉とあの弟に模されて絶賛ド修羅場中の俺相手を避けるために現界しなかったのではと思ったり思わなかったり。

「いやー……」

もつと弟くんと遊ぶのおおおお……」

という訳で、アマテラス様は呼び出された鬼咒嵐によって伊勢に強制送還されたのである。

お約束だなあ……

そろそろCOMPが一杯になってきたので悪魔合体で整理をする事に決める。

対象はジャック・フロスト、レティ・ホワイトロック、そしてチルノの三体である。

「チルノちゃん、大丈夫かな？」

「大丈夫！」

私はサイキョーなんだから！」

すっかり大妖精化したハイピクシーの心配を尻目に、ガッツポーズをとるチルノ。彼女の自信はどこから来るのだろうか？

一方で、ターミナル開発実験の過程で生まれたレティ・ホワイトロックだが、たいして活躍する事無く消えることになるのだが、当人はあっけらかんとしていた。

「いいわよ。」

また冬になったら会えるわよ。

その時私が必要だったら声をかけて頂戴」

「ひほ？」

あ、ジャック・フロスト君の見せ場は無し。

どうせまた叢雲の冷蔵庫に湧いているだろうから。

1 日焼けチルノ

2 同上

3 同上

4 大人チルノ

5 同上

6 同上

7 雪女チルノ



8 同上

9 チルノ補正チルノ

10 熱烈歓迎

結果 9 チルノ補正チルノ

レベル 32 成長限界99

「あたい。最強」

なんかかっこよくなつてチルノが帰ってきたのだが。

というか何で弩を持っている？

明らかにサーヴァントすら落とすようなお姿なのですが。

「か、かっこいい……」

大ちゃんはいつもおりなので放置しておこう。

なお、案の定叢雲に帰ると、ジャック・フロストが湧いていた。

それつら、契約するまでもなく、チルノの言うことを聞いているのだが。

これがカリスマ……

## 更に続く猫の手の確保 その2

横須賀基地のグラウンド。

平賀Ⅱキートン・太一氏の指導の元、隊員に混じってハイデツカーやオイランロイドも走り込みをしているのが日常となりつつある今日このごろだが、上の方ではその彼らの確保について頭を抱えていた。

なお、指導に際して元階級の曹長を用意したのだが、固辞されたので曹長待遇という事でお茶を濁すことに。

「今や何処もかしこも彼ら彼女らの確保に必死になっているよ。」

こちらの購入価格の倍の値段を出すから売れという話すらきだした」  
俺の上司扱いである咲川司令はそう言つて苦笑する。

それを言い出したのは、現在組んでいる巨大軍産複合体のトライデント。

自衛隊が導入したという事を受けて、各国が導入に踏み切ったからだ。

なお、トライデントにそんなオファーを出してきたのは、国民が信用できない独裁国や国家相手に喧嘩できる麻薬組織とかだったりする。

「パンドラの箱ですからな。」

数が確保できるのは強いですよ。

おそらく、我が国の新たな産業として発展するでしょう」

資源などで国家経済を回しているレンティア国家などでは、国民を不良債権として切り捨て——つまり虐殺——の方向に動いてゆくだろう。

もちろん、虐殺を受け入れる訳がないので、彼らも蜂起し内戦へという道がとて容易に見える。

そして、そういう治安悪化の背後にメシアやらガイアやらトライデントやらアーカムやらミレニアムやらの影がちらつく訳だ。

他にもまだその手の組織がありそうだから困る。

「アーカムも本格的にクローンやアンドロイドの導入を決めたという。

優れたプロだけでは結局組織は回らない。

安心して使い捨てができる兵の登場は、次の戦争をがらりと変えてゆくのだろうか」

アーカムも動いたという事は上層部にヘンリー・ガーナムあたりが台頭する頃か。

そんな事を考えていた俺の前にいる咲川司令の口調が改まる。

つまり、ここからが本題という訳だ。

「市ヶ谷は君の立ち位置について疑念を深めている。

君の居場所を用意できなかつた失態を棚に上げてだ」

「こちらに籍を残すのは向こうとの話で合意できていますよ。」

今の所、貴方の下が一番動きやすいという事で」

このあたりの会話の先に、横須賀港に停泊している俺の指揮下の船、叢雲改二・マシユ風・ジャンヌ・ダルクの三隻の存在がある。

問題は、三隻目のジャンヌ・ダルクだった。

悪魔であり英霊であり艦娘であるという欲張り三点セットの上に、彼女の所で戦闘妖精たちが指揮運用されているのである。

上にあげたくない市ヶ谷は俺からこれを取り上げたい所だが、既に俺の居場所が宮内省技術総括審議官という最上位の場所を用意した宮内省にかつさらわれるという大失態をやらかしている。

なお、わずか数ヶ月の間に立て続けて起こった騒動のせいで書類の改ざんがいつかず、この三隻が所属する第70護衛隊は、『みらい』の第71護衛隊や『大和』『叢雲』の第72護衛隊と共に警備隊のある横須賀地方隊の所属だったり。

冬木の件から俺達の身柄を舞鶴が欲しがっているし、『大和』は呉が里帰りを企んでいるとか。

一方、佐世保は就役したばかりのこんごう型護衛艦一番艦『こんごう』のイーグス運用の為に『みらい』の人員を欲しがっていた。

だが、それ以上に市ヶ谷が喜んだのは、これらの船の人員補充の名目で大量導入されたハイデッカー・オイランロイド・対魔忍による人員だった。

バブル継続中で充足率が八割を切ろうとしていた海上自衛隊にとって、かれらの投入によりシフトが緩和されて、通常隊員が楽ができるという恩恵がこのなし崩しの混乱を黙認した一番の理由だろう。

「君の指揮権は結局誰が握ることになるのですか？」

そして、市ヶ谷の防衛省（来年昇格）と宮内省（来年昇格）が壮絶に揉めたのがここだった。

元組織だったヤタガラスと海上自衛隊との間でかわされた取り決めはこんなのだ。

『海上自衛隊からの命令については、協力できる限りにおいて協力すべし』

だが、そのヤタガラスも組織再編で宮内省の下部組織である神祇院に移り、俺自身は日本の国家退魔組織の現場側トップの椅子に座る予定である。

するつもりはないが、市ヶ谷の命令を拒否できなくもない。

市ヶ谷はその可能性を恐れている訳だ。

「オカルト絡みなら上の室戸次官が、普通の軍艦相手なら統幕の命令に従いますよ」

防衛省昇格に伴い設置される統合幕僚監部の今の仕事は、鎮静化した自衛隊内部のクーデター勢力のページであり、陸海空自衛隊の指揮権の一元化だった。

その一元化に壮絶に邪魔なのが俺というのは皮肉というかなんとというか。

俺の言葉を聞いて咲川司令はまったく安心していない目でこう言ったのである。

「そのような事が無いことを祈りますよ」

それには同意できるのだが多分無理だろうなと思った俺は黙って彼の部屋から退出したのだった。

現在の第70護衛隊は大規模な隊員不足にある。

言うまでもなく、その理由はジャンヌ・ダルクだ。

なお、現在の第70護衛隊の隊員構成はこんな感じである。

やる夫、叢雲、ステンノ、マシユ、ジャンヌ・ダルク

海上自衛隊員

100人

ハイデツカー

400人

オイランロイド

80人

対魔忍+クローン対魔忍

7人+20人

マシユ・茶々丸

50人

その他乗員

天ヶ崎千草

ロリンチちゃん

モードレット

ドレイク

クー・フリーン

悪魔

妖精 ハイピクシー 1v10

妖精 ジャックフロスト 1v15

妖精 チルノ 1v32

神獣 ゲンブ 1v43

大天使 イスラフィール 1v42

COMP外悪魔

鬼女 文車妖妃 1v12

魔神 大淫婦バビロン 1v69

戦闘妖精少女

FFR|31MR スーパーシルフ “雪風” ちゃん

FFR|41 メイヴ “雪風” ちゃん

FFR|31シルフィードちゃん

FA|1ファーンちゃん

FA|2 ファーンIIちゃん

叢雲 みねぐも型護衛艦

乗員220人

浜風 陽炎型駆逐艦

乗員239人

ジャンヌ・ダルク ヘリ空母

乗員

士官31人+下士官182人+兵414人||627人

兵員輸送能力700人



ジャンヌ・ダルクの分の乗員がまったく足りない。

とりあえず、麻帆良学園の超鈴音の所からマシユ・茶々丸を50体ほど連れてきたが、現状ではジャンヌ・ダルクは艦娘として動かざるを得ない。

あと、人員確保できそうな所と言うと学園都市なのだろうが……

そんな事を叢雲の自室で考えていたら、緊急警報が鳴り響く。

「何が起った!」

倒れかかる叢雲を抱き起こしてモニターを見ると、そこには『YAMA』の文字が。やばいことが起こっているのは分かるが、それでも思ってしまったのだ。

(『BABEL』じゃないのか……)と。

## 更に続く猫の手の確保 その3

『YAMA』のシステムトラブル

100ほどやばい

麻帆良学園都市

89

学園都市

25

天海市 +アーカム提携デメリット20

80+20=100

「このシステムトラブルですが、全国および世界のコンピューターがダウンしています。やられていないのは、学園都市だけみたいですね」

さすがに、こちらの電霊とウイルスで『樹形図の設計者』を壊された後だと対策はしているみたいだ。

そういえば、あれ修理できたのだろうか？

ウイルスによるソフト破壊だから、『おりひめ1号』は未だ宇宙に浮いているし。

樹形図の設計者復旧状況 100で修理完了。0では修理不能。

結果11

『スプリーキーズ』の調べた限りだと、まだ被害状況の確認に追われていて修理は計画すら上がっていないみたい。

前の通信障害は『おりひめ1号』を踏み台に使われたから、今回防げたのはそのせいなのかもしれないわね」

叢雲が気分悪そうに報告する。

吹雪型駆逐艦時よりみねぐも型護衛艦になった事でシステム化が進み、障害の影響がかなりきているらしい。

今回は戦術システムだけでなく全システムである。

東京湾に出て警戒をしているのは、草加艦長の操る『叢雲』だけというのはなかなか皮肉が効いてやがる。

「とりあえず車を出してくれ。

せつかくだから恩を売りに行くさ」

「何処に行くの?」

ステンの言葉に、俺は行き先を告げた。

「アーカム東京支部」

「ようこそいらつしやいました。

入即出さん」

「アポ無しの訪問ご容赦を。

それだけのものは用意したつもりですので、少しお時間をいただきたい」

大事になっているというのに、急な訪問でも支部長の山本は笑顔で俺を出迎える。とはいえ、こっちは知っているという有利を活かして取引をもちかける事にする。

ステンノにサインを送り『気配遮断A+』を使用。

アーカムの監視カメラ経由で見ているかも知れないYAMAから俺たちを隠す。ついてきた叢雲とマシユがスーツケースを置き、その中身を見せる。

「これは何ですか?」

「これは宝玉。

体力を全快にするこちらの世界のアイテムです。

もう一つは、金丹。

死んだ人間を生き返らせる。

さすがに仮死状態ぐらいしか効果は無いと思いたすがね。

あちこちでトライデントと死闘を繰り返しているそちらにとって、喉から手が出るほど欲しいのものでしょうか？

それを、格安でお譲りしたいなと思ひまして。

要るでしょうか？

今、ニューヨークで？」

山本支部長の顔が強ばる。

とはいえ、表情は崩れておらず、目はじっとこちらを見る。

さすが元スプリガン。

「という訳で、これらを格安で。

一千億円でお譲りしたい」

「いつ…!?!」

さすがの金額に山本所長も声が詰まる。

それだけの金額なのだ。

「まあなにも今すぐくれという訳ではないのでご安心を。

融資という形にしていたきたく」

叢雲が用意していた建設中の火力発電所の書類を見せる。

その実態は英雄王向けの魔力炉のだが、そこまで話す必要はないだろう。

「この発電所。

建設資金が表に出せない金で工面されていまして。

こいつを綺麗にしたいのですよ」

嘘をつくには本当を混ぜるべし。

その本当の為に、羽柴茂光に用意してもらった澤田議員がらみの汚職のレポートも見せる。

「私は来年発足する宮内省の技術総括審議官という椅子に座ることになっています。

けど、この事実が明るみに出た時、表に出せない金で建設した責任を問われて、椅子に座る事を辞退する羽目になりかねない。

それを避けるために、身ぎれいにしておきたいのですよ」

せっかく羽柴茂光から警告を受けたのだ。

これを機会に金を確保して返却しておこう。

「こちらが事業計画書。

悪くない投資案件だと思いますよ」

この火力発電所は英雄王の生命線であり、来たるべき桜塚星史郎との決戦における神殿でないといけない。

少なくともあの王様はそれがわかるだろうから、あれができれば賢王として、プレジ

デントとして振る舞わざるを得ないことを理解しているはずだ。

ありがたい事に浄化されたことで色々なものの費用を払う羽目に陥っている、地下都市ヨミハラこと東京ジオフロントという需要もあるので、長期的には損はない案件である。

その長期がこの世界にあるかどうかまでは俺は言うつもりはないが。

「うーむ……」

考える山本に俺はあつさりど、毒をたらす。

これに食いつく確信があつた。

少なくとも、俺はこの国の裏の代表者の一人としてトライデントと組んでいたのを知っている上でアーカムにも利を差し出す意味を、これから出てくるヘンリー・ガナームは理解できない訳がない。

「なんなら、この会話の一部始終を補足として融資担当に回しても構いませんよ。

多分それでもこれは通ります。

あと、そのスーツケースは置いてゆきますからご自由に」

数日後。

アーカム銀行から満額一千億円の融資の回答がやってきたのは言うまでもない。

そして、山本支部長からあのスーツケースの中身のおかげでA級エージェントが助

かったと感謝の言葉をもたらす事になる。

「おもったのだけど、『使徒十字』をローマ正教が買い戻したお金があったじゃない。

あれで返済できなかったの？」

叢雲の指摘にマシユがその資金の残存金額を言う。

「あれはたしか942億円で売却して、180億円を使用してハイデッカー・オイランロイド・クローン対魔忍を購入しています。

更に追加で40億円ハイデッカーを購入して英国に送っています。

他にも色々使って、残りは720億円です。

たしかに、こういう形で資金確保をしなくても良かった気がしますが？」

俺が白々とぼける。

正直、裏金は便利なのだ。

こちらの金は、スキャンダルにつながる事の確認済みである。

俺の首が飛ぶ前に、ローマ正教が大バッシングを受けるからだ。

「さあ。

すっかり忘れていたな」

そんな白々しい俺の言葉をステノが楽しそうに見ていたが何も言わなかった。



ヘンリー・ガーナムと繋がっている勢力

1 メシア

2 同上

3 英国王室

4 同上

5 英国政府

6 同上

7 イギリス清教

8 魔法省

9 時計塔

10 熱烈歓迎

結果 5 英国政府

## 更に続く猫の手の確保 その4

ヘリ空母ジャンヌ・ダルク。

名前の通りヘリ空母である。

という訳で、備品としてヘリコプターがついてきた。

アグスタウエストランド リンクス3機とSA 316 3機である。

乗る人間も居ないし横須賀基地に上げたのだが、潜水艦絶対殺すマンと化している海上自衛隊がこのスペースを見逃すわけがなく。

かなり強引にヘリを乗せることになった。

「ここ、戦闘妖精少女の嬢ちゃんたちとヘリが運用できるでしょう？」

きちんとしたそつちのプロをあの船に乗せた方が後々楽ですよ。

どうせ、この船から降りるつもりはないみたいですし」

美野原首席幕僚がそのあたりを解説する。

後部甲板にヘリ搭載スペースとか用意しているので、ヘリ運用ができるのはこちらと  
しては悪くはないのだ。

そこで、ふと似たような状況になった船を思い出す。

「うちでこれなら、『やまと』はどうなっているんだ？」

「あつちの修羅場があつたからこそ、こつちも強引に乗せてきているんですよ」

聞くと、艦娘護衛艦やまとは備品でハリアーが搭載されていたのだ。

しかも日本独自改造のやつで、ハリアーII Jと呼ばれるものらしい。

はやくも海自はこれを運用しようとパイロットの育成に入つたらしいが、同時にハリ

アーIIの購入に走り、航空隊の設置に動いているらしい。

この世界の海自の空母構想は、ゲテモノである艦娘護衛艦『やまと』とうちのジャン

ヌ・ダルクによって広げられようとしていた。

おまけに、この手の拡張に強行に反対していた左派勢力が今は連立政権に入っている

ので、障害は恐ろしく少ないとか。

彼らにとって自衛隊は信用はしていないが、懐柔はしておきたいという心理がよく見

える。

「目指すは空母か」

「一足飛びにはいかないでしょうが、このご時世何が起こるかわかりませんからな」

日米関係の悪化もあつて、ある程度の戦力強化はむしろ必要という空気が政権内に流

れているのも大きい。

実際にすぐにはできるとは思えないが、その端緒についたという事は10年後ぐらいに

は持てるのかもしれない。

そうなると、どうやってその人員を確保するかにかかっているのだが、そっちについては未だ見通しがたっていないかった。

とりあえず、うちの船にはSH-60J 6機が積み込まれる事になり、パイロットとその整備員達が乗り込むことになる。

戦闘妖精少女たちも彼らの下で働くことになるのだが、空自から出向してきたパイロットが数人。

こいつら、機体状態の戦闘妖精たちに乗る為にやってきたとか。

色々騒動があったりするのだが、それはまた別の話としてひとまずおいておこう。

「わっかんないなあ。

今のマスターくんは考えうる限り最強に近い戦力を持っている。

にも関わらず、どうして数を求めるのさ?」

ロリンちゃんとの質問は尤もだ。

英霊に悪魔に艦娘にその他色々。

最強戦力に近いものを保持しているが、俺は所属しているらしい海自と一応本籍があ

る内務省の意向に合わせて、数の拡大に突っ走っていた。

ロリンチちゃんはその真意を問いたいのだろう。

「まあ、デミ・サーヴァント実験に反対した先代ダ・ヴィンチちゃんならそういうだろうな。」

ちなみに俺は、あの実験ができるとしたら、喜んでゴーサインを出すという事で話を進めていこう」

ロリンチちゃんの眉間が厳しくなる。

まずはお互いの立ち位置の確認。

その上で、大規模投入というパンドラの箱を開いたクローン・アンドロイドへの是非を話す。

「軍隊において、最も練度が高い状態って何時だと思う?」

「そりゃ、征服王の将兵とか考えたら、歴戦のというから戦い抜いた連中のことだろう?」

これはよくある勘違いなのだ。

それを俺は訂正してゆく。

「実は開戦前こそ一番練度が高いんだよ。」

その後、消耗で補充が追いつかず、未訓練の新兵を導入してゆくから、練度はどんど

ん低下してゆく」

「戦闘経験のありなしについてはどうなんだい？」

「当然差が出る。」

とはいえ、その差は数で押し切れるものだ」

話しながら、横須賀基地に並ぶ日米の両艦艇を眺める。

ほんの半世紀ほど前、この並んだ両海軍が太平洋で血みどろの殴り合いをしていたという事実を俺はデータでしか認識できない。

「ほんの半世紀ほど前の話だ。」

ものすごく高い練度と実戦経験を持った海軍が、数にすり潰されてゆくのをこの国は知っているんだよ」

ミッドウエー海戦の敗北、ソロモンでの消耗戦、大本営発表が本当だとしても潰しきれなかった米海軍驚異の生産能力。

その桁違いの物量の前に、すり潰されてゆき、ついにその戦力回復ができずに敗北の道を転がり落ちていった。

「ロリンチちゃん。忘れたらいけない。」

俺はたしかにグランドマスターかもしれないが、俺の世界においてかの魔術王は数百万ものグランドマスター達に殴り殺されたんだ」

「それがマスターくんが危惧する悪魔にも通用すると思うのかい？」  
「するとも。」

むしろそれこそが、俺たち最大の武器だ」

俺は断言する。

悪魔相手の戦いでも、アラヤの抑止力は有効に機能すると確信している。

だからこそ数は正義であり、その数を減らす大洪水なんて許せるわけがなかった。

「さて、本題に入ろう。」

デバイスについて分かったかい？」

管理局との接触で、ミッドチルダ式魔法をほぼ習得したロリンチちゃんだが、ついでに確保していたデバイスの解析をお願いしたのである。

これをクローン対魔忍やマシユ・茶々丸に持たせることで戦力を底上げするのが目的である。

この話はその枕なのだ。

「解析はできたが、量産については少し厳しいね。」

この星には無い未知の鉱物資源がいくつか使われている。

そのの入手まであの管理局は認めないだろうね」

ロリンチちゃんの説明に、少しがっかりする俺。

となると、選択肢は一つだ。

「つまりデバイスの代替品をこちらで用意すればいい訳だな。

一つあてのある世界がある」

デバイスとよく似たものを使って魔法を使っていた世界。

何よりも地球文明というのがすばらしい。

時間軸が違うから諦めていたのだが、超鈴音のボソソジャンプシステムを組み込んだカシオペアが使えることで一気に選択肢に入る。

「一応聞くけど、何処さ?」

「この国だよ。」

ただし、西暦2090年代だけどね」

行く世界は『魔法科高校の劣等生』。

狙うはCAD技術である。



## 更に続く猫の手の確保 その5

COMP 枠が空いたので、仲間確保に動く。

天海市の『王国屋』にて女神スカアハをげつと。

今回は聖杯を入れての英霊化はしない。

「しないのか？大将？」

平崎市の下水道の更に下の地下迷宮にて、俺達は悪魔集めに勤しんでいる。

命蓮寺が管理して外に出さないようにしているので使わせてもらっている形になるが、いずれここは対魔忍や新米サマナーの訓練コースとして利用しようと考えている。

その際に、命蓮寺を取り込めればいいのだが。

久しぶりの実戦とばかりにはりきっていたクー・フリーンが確認するが、俺は彼を黙らせる一言を言う。

「またダメ様あたりが来たらどうするんだよ？」

「すまない。」

俺が悪かった。

もう一つ聞きたいのだが……」

クー・フリーンは、宙にブカブカ浮いて正座しているスカアハ様を見て一言。

「何で立たないんだ？」

「知らん。」

聞いてみたらどうだ？」

そんなやり取りの後、クー・フリーンがぼんと手を叩く。

「そう言えば、メイヴのやつが悪魔合体をしてくれだそうだ」

「悪魔合体を？」

「またどうして？」

「サーヴァントってマスター側が使えるようにカスタマイズしているだろう？」

汎用性が低くなるのを嫌っているんだよ。あいつ」

わからないではない。

メガテンの悪魔は情報生命体としての側面が強いから、色々抜け道や裏道で強化がで  
きるのだ。

レベルだけならサーヴァントの方が上げやすいので、そのあたりを含めて悪魔化とい  
うのは便利なのを言うまでもない。

「ただ、あいつの場合、それ以外の目的があるんだよなあ……」

「何よ？」

私の方を見て？」

「どうしたのかい？」

クー・フリーンが叢雲とついてきたロリンチちゃんの方を見て察する。

御霊合体がムチ雲と化した叢雲と、黄金率（体）を持つロリンチちゃん。

「やっぱり黄金率（体）EX？」

「当たり前だ。大将。」

で、文化的に胸は大きな方が喜ばれる時代でな。

ダヌ様がやってきたろ？」

権能の継承を考えると豊穰神との一体化の為にもという、まっとうな目的もあるから

あいつは厄介なんだよなあ」

そこまで言うとは、メイヴちゃんの考えていることが見えてくる。

「つまり、ダヌ様と合体させると？」

「神話体系の頂点だ。」

あいつが目指さない訳ないだろう？」

どっちかというば、目の前のクー・フリーンに世界一いい女でありたいという気持ち  
が最初で、そこから色々くつつけたのではないかとも思うが、それは言わぬが花だろう。

「で、大将。」

お目当ての仲魔は確保できたのか？」

ここに来たのは、経験値稼ぎと回復系の仲魔の確保のためである。

人員の急増と共に、この手の回復系人員の確保は必須となっていた。

現在の回復要員は、属性盛り盛りのジャンヌ・ダルクに、ダヌ様につけた女神ブリジット、今回購入した女神スカアハぐらいなものである。

「これが帯に短したすきに長しでなあ。

一旦切り上げようかと考えていたのだが……」

「はい！」

そんな弟くんにおねーちゃんが推薦したい人が居ます!!」

よし帰れ。

なんて言えないのが宮仕えの辛いところである。

このアマテラス様、来年できる宮内省における最高存在になるのだから。

「アマテラス様。

一応聞きますが、どちらのお方で？」

「菊理媛です！」

エヘンと胸を反らせて、ペカーと地下迷宮全体を明るくするアマテラス様。

いやたしかにメガテン世界にいるけど、キクリヒメ様。

問題は、このアマテラス様経由で呼ぶと色々とレベルが……  
「だから、弟くん。」

白山に行きましよう♪」  
なるほど。

魔神に騙されて日本どころか世界まで騙されて連れて行かれるスズムシの気持ちでこんな感じなんだろうなあ。

切り上げて、横須賀基地から石川県小松基地に移動して一泊。

当たり前だが、既に雪山と化している白山に素人が登っても遭難するだけなので、白山比咩神社の方に移動して、アマテラス様の召喚が行われる。

天津神 菊理姫 レベル85 高位分霊

「菊理姫。」

この地を守る一柱です。

人の子よ。

私を呼ぶ……アマテラス様っ!？」

「よく来ましたね。」

菊理姫。

さあ。私達の為に加賀国の山海の珍味を用意するのです!」

彼女メガテンだと地母神なんだけどなー。

というか、完全にアマテラスおねーちゃんか、バカンスモードに移ってやがる。

なお、加賀国こと石川県はお酒も美味しい。

かくして、翌日、アマテラス様は呼び出された鬼咒嵐によつて伊勢に強制送還されたのである。

お約束だなあ……

## 更に続く猫の手の確保 その6

「わざわざ別の時間の日本にまで出向く必要はあるのかね？」

「未来に発明されたものを過去に持つてくる。」

その技術がそうやってこっちに来ていいるならば、必要ではあると私は考えますがね」  
未来渡航について室戸次官と話す。

この人は敵に回してはいけけないので、基本全部バラしてしまう。

だからこそその冒頭の会話だ。

「対悪魔用の戦力の整備は進んでいます、この技術、デバイスシステムを用いれるならば一般人すら対悪魔戦力に組み込むことができます」

簡単な防御魔法、簡単な回復魔法、『エネミー・ソナー』等のCOMPソフト使用ができるのがこのデバイスシステムの肝である。

もともとこれらは、魔力やマナが無いと使えず、『リリカルなのは』世界だとリンカーコアという体内魔力形成機関が必要なくらいである。

これを、ロリンチちゃんと超鈴音という二人の超天才が解決の手段を見つけてしま

「うちの所、電力から魔力変換できるけど」

とロリンチちゃんと言えば、

「じゃあ、このデバイスに無詠唱魔法を全部覚えさせてしまえばいいネ」

超鈴音が言い出した訳で、そのためのCADなのだ。

最終的にはCOMPとデバイスを融合させてCADの中に組み込めたらというかなり野心的な企画である。

もちろん、この企画にトライデントは食いついた。

ゲート技術に次いで次世代の戦争のデファクトスタンダードを握れるかも知れないからだ。

今回の時間跳躍による技術確保実験は、トライデントが握っている政財界のコネを保持して根回しが進められているので、室戸次官とて首を横に振れない構図になっている。

「気になるのだが、タイムパラドックスについてはどうなるのだ？」

室戸次官の懐刀である荒巻課長が一番の問題点を指摘する。

時間の移動による事象の改変は何が起こるか分からない怖さが有るからだ。

それも既に俺以外の人間が理論を構築していた。

「放置していて問題ないでしょう。」



この漫画にもある通り、時間という大河の流れは雄大で流れを変えきれるとは思えない。

まあ、パラドックスによつて国の興亡ぐらいは発生するでしょうが、それですら些事です」

こう前置きして、核心部を告げる。

俺たちの間で議論して、ここだけはどうにもならないと投げ捨てた場所を。

「何よりも、時間改変が起ったことを観測者以外は認識できません」

超鈴音の計画はこの時点で破綻していた。

彼女は自分の世界に絶望して世界の改変を望んだが、その改変を認識できるのは彼女一人だけ。

その事実を超鈴音は認識した上で、魔法をバラすという賭けに出た。

その是非についてはここではおいておこう。

「トライデントが推進している計画だ。

こちらにも反対するつもりはないが、メリット・デメリットをきちんと私に話してくれる理由は？」

「そりゃ、来年にはそこそそ座り心地の良い椅子を頂けるのですから、それぐらいの礼儀は必要でしょう？」

同じ対応している市ヶ谷はそれすら用意せずに疑心暗鬼に陥っているみたいですが「俺の苦笑に、室戸次官は笑みを浮かべてこの計画にゴーサインを出す。

「君を搔つ攫つて本当に良かったと思っっているよ」

今回の時間移動については、マシユがベースとなっっているマシユ風を実験艦として使う。

その中に入れ子構造として、叢雲改二、ジャンヌ・ダルク、大和、叢雲の五隻が艦娘姿で乗り込んで、向こうについたら現界するという形にしている。

トライデントのおかげで、これら大和とジャンヌ・ダルク以外の三隻の近代化改修はすごい勢いで進んでいた。

ジャンヌ・ダルクにヘリ運用を任せることにしたので、マシユ風と叢雲は、あぶくま型護衛艦と同装備を搭載する事に。

大和がイージス艦なので、データリンクを大和中心に行うようにしている。

もちろん、今回の計画にはそれぞれの艦長である草加二佐と藤堂海将（めでたく昇進した）も巻き込んでいる。

責任者は俺だが、この艦隊の指揮官は藤堂海将が執ることになっている。

「しかし、乗ってくるとは思いませんでしたよ」

「市ヶ谷は猛反対していたのだがね。

貴重な艦娘をまとめて失うのを恐れたのかもしれないが」

マシユ風の艦内で俺と藤堂海将が話す。

退役が遅れるとぼやいた後での会話である。

「彼女の希望なんだよ。

たとえ別の時間であれ、沖繩が攻められているから救援に行くと言えば彼女が乗ってこない訳無いだろうが」

それは半世紀ほど昔の思い出。

沖繩に向けて救援のために出撃した大和と浜風はついに沖繩には届かなかった。

その思いは艦娘としての彼女たちの中にしっかりと残っている。

そのためだろうか。

今回の航海、マシユもかなりやる気である。

「段取りとしては、沖ノ鳥島の西方200海里水域から離れた所で時間移動します。

その後、艦隊を展開して沖繩に接近。

そこからはまあ流れですね」

「まったくいい加減な計画だが、君の所のジャンヌ・ダルクに大量の医療品を積んだ時点でなんとなく察しはついているよ。」

こういう形で経験を積むというのはこの国にとって良いことか悪いことかは私には分かん。

だが、艦隊の指揮については一任してくれるのだな？」

「ええ。お好きにどうぞ。」

こちらも、それが起こるのは望んでいませんから」

そんな事を言いながら、沖繩でそれが起こるのを確信している俺が居た。

乗り込んでもらった超鈴音によってチューリップクリスタルが開き、マシユ風の船体を包む。

そこから始まった時間跳躍についてはどういえばいいのか俺にも言葉が浮かばない。

けど、時間は次の日付を指していた。

2092年8月11日 AM1:00

大亜細亜連合の攻撃はこの日の早朝に行われる。

# 沖繩沖海戦 その1

「一つ言っておかないといけない事があるネ」

時間跳躍実験の前。

超鈴音はそう言って、俺に懸念点を伝える。

「行って帰ってくる以上、どうしてもこの世界との繋がりができてしまう。

それに合わせて、行く世界も改ざんされる事を覚えてほしいのネ」

簡単に言えば、『魔法科高校の劣等生』世界にこれから行くとしても、それは正規の『魔法科高校の劣等生』世界ではない。

散々やらかして闇鍋と化したこの1993年から派生した『魔法科高校の劣等生』世界という訳だ。

つまり、悪魔もいれば英霊も居る状況でいろいろあつて『魔法科高校の劣等生』世界になつたという訳で。

「率直に言って、あなたたちが何をどれだけやらかしたのか、こつちでは判断がつかないネ。

求めているものはあるのだろうか、その過程であなたが考えている世界にかなりの

修正が入っているという事を肝に銘じてほしいのネ」

「なんだそんな事か」

事も無げに俺は言う。

つまり、今までと同じように、駄女神様の奮闘に期待するしかないという訳だ。

駄女神様の奮闘 100ほど頑張った

結果 99

世界改変の影響 100ほどでかい

結果 95

「こういうの……得意ではないですけど」

世界移転後、ステンのスキル『気配遮断A+』発動。

他の艦娘を実体化させる前にまずその姿を隠す。

「やっつと。」

世界情勢はどうなっているのかな？」

ロリンチちゃんと超鈴音という二人の天才のおかげで、衛星から情報入手。

ポストアポカリプスで無い限り近未来は衛星が地球を周り、情報が常時動いている訳で。

同時にこちらの情報もバレる危険もあるが、ステンノのスキルでマシユ風を擬似イージス化させられるのが強みである。

「それじゃあ、飛ばすよー！」

マシユ風船長のフランシス・ドレイクもごきげんである。

最大戦速の35ノットで沖繩にぶっ飛ばす。

「学園都市や麻帆良学園都市は第三次大戦でなくなっているのか」

その間に情報収集。

このさすおに世界は、俺が居た閻鍋メガテン世界のありえる未来の形として時間が繋がっている。

ある意味、超鈴音が望んだ未来と言えなくもない。

「ニュースサイトを漁ったけど、うつすらと開戦の理由が見えてきたネ」

「未来だろうと魔法があろうと、人の営みは変わらないって事だね」

超鈴音とロリンチちゃんが、ニュースサイトのプリントを俺たちに手渡す。

ありきたりで、だからこそ切実な理由の正体をロリンチちゃんは語る。

「大陸にできた大亜細亜連合は、未だ華北地域の寒冷化と砂漠化に対応できていなかった

た。

そこから難民爆弾が周辺諸国にばらまかれ、第三次世界大戦にというのがこの世界の歴史だ。

問題は大陸の中華国家である大亜細亜連合の、この時間の日本に対する感情だね」

ロリンチちゃんがモニターを操作して世界地図を極東地域にクロースアップさせる。ちゃんとデータをこの時間世界に合わせているのが芸が細かい。

「華北にあつた大漢と呼ばれる国家が崩壊し、大亜細亜連合ができたのはいい。

問題は、彼らがこの時間の主戦力である魔法戦力において劣っていた事だ。

結果として彼らのドクトリンは魔法というより科学に重きを置いて、その人海戦力で押しつぶすという形になる。

彼らは焦つただろうね。

そんな彼らの目と鼻の先に、魔法大国である日本がある訳だ」

ロリンチちゃんの説明の後を超鈴音が続ける。

戦争とは外交の一形態とはよく言ったものである。

「ここ数年、大亜細亜連合は日本に対して経済協定および、魔法技術の供与および開発を目的とした技術協定を呼びかけているが、日本はこれを無視している。

このままでは後進国となる彼らの意図は2つあるネ。



一つは、限定的戦争によって大亜細亜連合が日本になんらかの要求を通す事ネ。

沖繩の占拠後、返還を理由に魔法技術協定あたりを結べたらという事ネ」

そこで超鈴音は一度言葉を区切る。

「もう一つはもう少し野心的なものネ。

魔法の優位性が完全に証明される前に、対魔法という形で彼らは成果が欲しいのネ。

それは、彼らが後進国から大国に戻るチャンスでもある」

簡単に言えば、科学対魔法の対決で科学の勝利を大亜細亜連合は欲している。

科学というのは、究極的には数だ。

これに対して魔法というのは究極的には質だ。

この世界は、質が数を凌駕したという世界なのだ。

俺は、ある意味納得していた。

あの闇鍋メガテン世界を人間社会の存続という形で残すのならば、人修羅みたいな連中が出てこないと思魔相手に人間社会を残せない。

そうなると、大亜細亜連合の戦略が見えてくる。

それをロリンちゃんや印刷されたニュースとして晒してみせた。

「で、こんなものがあるのだけど、どう思う？」

マスターくん」

『大亜細亜連合海軍本部は、8月7日から東シナ海海上で大規模訓練を行うと発表した。参加艦艇は、空母二隻、巡洋艦三隻、駆逐艦六隻で、陸軍および空軍や戦略打撃軍も参加する大規模なものになる』

開戦前の移動に訓練と称するのは常套手段である。

そこで、黙っていた藤堂海将がぼつりと呟く。

「囧だな。こいつは」

たしかに、原作だと内部の裏切りで上陸とかあつたしなあと思っていたら、藤堂海将はとんでもないものを開戦の冒頭にあげたのである。

夜明け前。

沖繩沖200キロ地点で艦娘を現界化させて輪形陣を作る。

① 大和

② 叢雲改二

③ ジャンヌ・ダルク

④ 浜風乙改

⑤ 叢雲

→ 沖繩

①

②

③

④

⑤

そして、ついに戦闘が始まる。

内部の裏切りや、潜水艦の攻撃より前に、ハッキングしていた衛星はそれを捉えていたからである。

中華大陸から一斉に発射される、通常弾道の中距離弾道ミサイルの群れを。

「発射数は58！」

その全てが沖繩方面に向かっていきます!!」

## 沖繩沖海戦 その2

奇襲の上、内部に裏切り者がいる状況では、日本国防軍の初動に致命的な遅れが出る。ミサイル防衛が本格的に研究されだしたのは前世紀末あたりである。

イージス改修された大和はその初期研究装備を積んでいたが、最後にものを言うのは艦娘大和の処理能力である。

そして、この弾道ミサイル迎撃は、隠れていた第三勢力としての俺たちの姿を晒すことになる。

海上自衛隊、藤堂海将は日本という国が生んだ自衛隊という忌み子。

それを体現するような人物だった。

「弾道ミサイルへの迎撃開始！」

オープン回線でこちらの所属を告げた上で、人道的見地によりミサイル阻止のため迎撃すると宣言しろ！

偵察機を出せ！

敵は、こつちも狙ってくるぞ!!」

「今、メイヴちゃんを上げた！」

宗像二佐に乗ってもらっている」

この艦隊の防空指揮を担当しているのは、藤堂守海将補相当官。

湾岸戦争のイラク側で東側顧問飛行隊を指揮していた藤堂進海将の兄である。

東側崩壊から日本に部隊ともども亡命してきたのだが、宙に浮いていた彼らを遠慮なくこき使うことにしたので。

なお、空自からやってきているトップエースパイロットの二人は藤堂拓馬と藤堂輝男の二人だったりする。

こんないい加減な作戦だから信頼できる身内を呼んだというべきか、厄介事だから身内に押し付けたというべきか、多分両方なのだろうな。

ついでにいうと、航空管制官として結婚退職した藤堂美咲も乗り込んでしまい、夫婦の危機だとかなんとか。

白煙をあげて大和から大量のミサイルが飛び立ち、弾道ミサイルの迎撃に向かう。まずは、これを落とせるかどうかにかかっていた。

弾道ミサイル発射数 58

ミサイル撃墜数 21

残り 37

「撃墜数21！」

残り、37発、沖縄に着弾します!!」

モニターから弾道ミサイルの光点が消える。

速さと重さはそれだけで破壊力となる。

奇襲の初撃としては重すぎる打撃を日本国防軍は受けることになった。

「那覇基地！」

嘉手納基地！

恩納基地および市街地にミサイルが着弾！

混乱しています!!」

「所属不明の航空機が多数沖縄に接近しています！」

沖縄からのスクランブル遅れています!!」

「沖縄の無線傍受しました。

内通者の妨害工作で、混乱しているみたいですね。

ミサイル直撃の被害状況もまだ把握できていないみたいです」

これらの無線を俺は叢雲改二から聞いている。

こういう時は素人は口を出さず、プロに任せるのが一番だと分かっている。

だからこそ、見ているだけというのがもどかしい。

「気になる?」

同じく見ているだけのステンノが俺に囁く。

叢雲の方は、新島副長と共に警戒に全神経を尖らせている。

「気にならないと言ったら嘘になるが、口を出すとろくなことになるのも分かっているさ」

ポケットに手をつ突っ込んで手の震えを隠す。

ステンノはそんな俺を見透かしたのか、一枚のレポートを俺に見せる。

「世紀末に発生した魔法がらみのあれこれで、非魔法師による対魔法師戦術を構築した人が記録に残っていたわ。」

それは、第三次大戦を通じて、多くの魔法師の死体生産に貢献した。

誰だと思う？」

そのレポートの写真に写っているのは俺の顔だった。

ステンノは楽しそうに笑う。

「貴方よ。」

入即出やる夫。

貴方の対魔法戦術に、魔法後進国だった大亜細亜連合は目をつけた。

つまり、敵は、貴方の後継者たちよ♪」

時間が繋がるという意味を俺は十二分に堪能させられていた。

原作には無かった弾道ミサイルの大量直撃。

それは俺によって引き起こされたと言っているのに等しいのだから。

「大丈夫。」

私達は何があっても、貴方の味方よ♥」

こういう弱った時のステンの嘔きは効く。

けど、その誘惑は俺はふりきった。

今は、戦場。

迷いも躊躇いも死に繋がりがねない。

「生き残ったらその先を聞くことにしよう。」

叢雲が睨んでる」

「あらあら」

ムスツとする叢雲がまた視線を戦場に戻し、新島副長がやれやれと肩をすくめる。

現代戦はあまりにも速く動く。

大亜細亜連合空母からの出撃機 16機

日本国防空軍の邀撃機 10機

日本国防軍の反応 1で友好的 100で敵対的



## 結果 23

「日本国防軍より、義勇軍扱いとしてデータが送られてきました！」

転送します!!」

日本からすれば考えたくなかった限定戦争の姿がそこには映し出されていた。

対馬方面でも航空戦が発生しており、佐渡には所属不明勢力が上陸して交戦していた。

そして、メイヴちゃんからの情報が大和経由で日本国防軍にも送られてゆく。

「ミサイルを撃ち落とした事で好意的になったという所なのかな？」

俺のぼやきに美野原主席幕僚が反応する。

彼の視線はモニターから離れない。

「というより、沖縄の基地のネットワークが寸断されて組織的な抵抗ができていないみたいですね。

ほら。

追加で、うちのスーパーシルフちゃんも出したでしょ？

あれは基地とこの艦隊を繋いで、この艦隊から本土に状況を送るためなんですよな。

おそらく内部の裏切り者、かなり多くいるでしょう。

鹿屋からも飛行機が上がっているあたり、本土は多分沖繩の状況を完全に把握していないみたいですね」

「衛星ネットワークは？」

「真つ先に潰されましたよ。」

おそらく、敵が居ない事と司令部機能が生きている事から、国防軍が乗り込んできて我々を接收しかねませんな」

モニターでは、日本国防空軍と大亜細亜連合艦載機の空戦が行われていた。

奇襲を食らった日本側はともかく、大亜細亜連合軍の航空機が思ったより少ない。

「主席幕僚。」

今、行われている航空戦はどうみる？」

「二次攻撃隊の準備でしような。」

目標は、陸上支援かこの艦隊か、または両方か。

どっちにしろ、今上がっている連中が無事に基地に帰れるならいいですが、被害状況を考えると再度の出撃は難しいでしょう。

制空権は完全に向こうに移るでしょう。

今頃は、大陸からも増援の輸送機が飛び立っているかもしれませんね」

国防軍司令部からの情報だと、沖縄近海には大亜細亞連合の潜水艦が潜んでいるらしい。

潰すとなると、多分こつちの出番となる。

状況は明らかに悪い。

「司令官。

藤堂海将から」

叢雲の声に俺は受話器を受け取る。

その声から、美野原首席幕僚が懸念していた事が伝えられる。

「向こうの司令部からの要請だ。

沖縄防衛の為の円滑な指揮を図りたいので、こちらに国防軍の士官を乗せたいという

申し出を受けた。

「どうしたらいい？」

「受けましょう。

このまま終わると思えません。

ただし、艦隊の指揮権は絶対に手放さないように」

もつとも、どうやってこの艦隊に来るのか。

そこまでこつちは責任を持つつもりは無かった。

## 沖縄沖海戦 その3

弾道ミサイル第二波 77発

国防軍迎撃数 84発 (オーバーキル)

基地損害状況 100ほど被害が大きい

那覇基地 73

嘉手納基地 15

恩納基地 96

航空戦

大亜細亜連合軍 16機

撃墜数 5機

日本軍 10機

撃墜数 1機

データが入りだすと、日本国防軍側も体制を立て直してくる。

弾道ミサイルの迎撃に100%成功したり、航空戦で機数が不利なのに大亜細亜連合

軍に制空権を取らせないあたり、決して彼らが無能な訳ではない。

こうなった理由は、嘉手納基地のダメージが軽微だった事があげられる。

嘉手納基地を中心に日本国防軍は指揮系統を再編させ、反撃に出ようとしていた。

「日本国防空軍所属の航空機がこちらに二機やつてきます！」

我々の上空を援護してくれるそうです!!」

「という名目で、こちらの正体を探りに来たんでしょうなあ。

敵でないとはいえ、第三勢力が近海に居るのだから、少ない手駒を向けても確認に走

りますよ」

スピーカーからの声に、美野原首席幕僚が即座に説明を俺にする。

敵でもないが味方でもない。

戦争を体験している日本国防軍はそのあたり冷徹だった。

空戦を終えた航空機が二機、こちらに接近する。

「見えました！」

カメラに捉えます!!」

上空を二期編隊で飛び去る航空機がカメラに捉えられる。

向こうから送られてきたデータに、その名前はあった。

「『F-3 震電II』」

魔法が主戦力になる前の最後の遺物ねえ……」

未来なだけあって、色々な技術が進んでいるという事を実感する。

弾道ミサイル第二波の迎撃もそうだが、完全に迎撃できる技術なり魔法なりを日本国防軍はもっていた。

それが内部の裏切りで機能しなかったからこそ、大打撃となった。

「向こうも驚いているでしょう。」

下手したら一世紀前の船が現役でこつちに来ているのだから」

美野原首席幕僚がぼやく。

俺たちの設定は、『演習航海で沖縄に出向いた所、なんかへんなものに巻き込まれてここに居た』というもの。

向こうも艦船データは持っているだろうから、その古さがかえって信憑性を高めてくれるだろう。

「藤堂海将に連絡。」

向こうがヘリで来るなら、船内の医薬品を提供すると伝えてくれ。

重傷者の治療に必要な『ジャンヌ・ダルク』を貸すともな」

「いいのですか？」

美野原首席幕僚が確認する。

この確認はジャンヌ・ダルクを見せるといふ事より、魔法系治療を晒すといふことの方への確認だ。

「良くはないが、沖縄で助けを求めているのは時間が違うとは言え日本人だ。

それが理由じゃ駄目かな？」

ジャンヌ・ダルクは、大隊規模の輸送が可能になっている。

つまり、病院船として使うならば千人ぐらいまでは収容が可能なのだ。

俺の返事に美野原首席幕僚は笑った。

「まさか。

貴方の意見に心から賛同しますよ」

日本国防陸軍

1 大隊規模

2 同上

3 同上

4 連隊規模

5 同上

6 同上

7 旅団規模

8 同上

9 同上

10 熱烈歓迎

結果 6 連隊規模 3000人ぐらい

沖縄上陸部隊

1 大隊規模

2 同上

3 同上

4 連隊規模

5 同上

6 同上

7 旅団規模

8 同上

9 同上

10 熱烈歓迎



## 結果 8 旅団規模 数千人数ぐらい

「現在上陸している敵軍は旅団規模で、那覇市内で交戦中だそうです。

向こうからすれば、嘉手納基地を落とさないと安心して増援が送れないでしょうからね。」

それに対して日本国防陸軍の規模は連隊規模。

向こうも迷うでしょうね」

「旅団規模ってどうやって運んだんだよ。

その人員」

美野原首席幕僚に俺は疑問をぶつけたが、返事をしたのはデータがダイレクトで伝える叢雲だった。

「人員は現地大学の留学生。

武器の貯蔵庫まであつたみたいよ。

ついでに、那覇港に停泊していたクルーズ船から兵士が出てきた報告があるわ。

そして、これ」

那覇市内の監視カメラの映像だろう。

出来損ないのロボットが銃を撃ち続けていた。

「貨物船から大量に出てきたそうよ。」

魔法か科学かしらないけど、大暴れしているわね」

この一撃にかなりの準備をかけていた事が分かる。

ということとは、このままでは終われない。

「敵空母より攻撃機上がりました！」

大陸からも大型機が多数接近しています!!

日本国防軍も迎撃機を上げました！」

大亜細亜連合軍空母発艦機数

48機

大陸からの大亜細亜連合軍大型機数

94機

日本国防空軍迎撃機

7機

「大陸からの爆撃機か空挺部隊を積んだ輸送機でしょうからひとまず置いておきましよう。」

問題は、空母から上がった奴です。

日本国防軍の運用機数を把握しているのでしょうかね。

ここで制空権を取られるとかなりまずいです」

モニターを見ていた美野原首席幕僚の額に汗が浮かぶ。

狙いはおそらく、嘉手納基地。

「日本国防軍からもらったデータに潜水艦の報告があったわ。

多分、こつちを探しに来るわ」

叢雲の一言に俺は考え込む。

制空権を取られた状態で対潜水艦戦なんてしたくはない。

「ヘリが一機大和に向かっていきます！」

日本国防軍のヘリです!!」

さすおにクロスオーバー判定 100ほどさすおに

結果 44

「こちら、日本国防陸軍真田繁留中尉と申します。

着艦を許可願いたい」

現在の防戦状況 100ほど日本有利

対馬方面

31

佐渡方面 一条補正+20

68+20=88

## 沖繩沖海戦 その4

へりは最初大和の方に着艦させようとしたのだが、政治が入るのを藤堂海将が嫌がり、俺の叢雲の方におろすことにした。

叢雲艦橋で互いに敬礼して挨拶をする。

「日本国防陸軍真田繁留中尉と申します」

「日本国海上自衛隊入即出やる夫海将補相当官と申します。

色々互いに聞きたいことはあるでしょうが、とりあえずは戦闘の方に集中しましょう」

モニターでは、既に航空戦が始まっていた。

地上戦も随時データが入ってきている。

大亜細亜連合軍空母発艦機数

48機

撃墜数

9機

残機

39機

大陸からの大亜細亜連合軍大型機数

94機

爆撃機

28機

輸送機 100人乗り

66機 6600人規模の増援

日本国防空軍迎撃機

7機

撃墜数

43機 (オーバーキル)

残機

0

制空権喪失

日本国防陸軍

連隊規模 3000人ぐらい + お兄様補正 13

64 + 13 || 77

沖繩上陸部隊

旅団規模 数千ぐらい + 爆撃機支援 22

205 + 22 || 227

嘉手納基地攻防戦

77対227 || 1:3

結果

1 国防軍勝利 上陸部隊潰走

2 国防軍勝利 嘉手納基地および那覇市内にて交戦中

3 国防軍勝利 嘉手納基地にて籠城中

4 上陸軍勝利 橋頭堡確保

5 上陸軍勝利 橋頭堡確保 那覇市内にて交戦中

- 6 上陸軍勝利 橋頭堡確保 那霸市内制圧
- 7 上陸軍勝利 橋頭堡確保 那霸市内制圧 嘉手納基地攻撃中
- 8 上陸軍勝利 嘉手納基地降伏
- 9 上陸軍勝利 嘉手納基地降伏 増援部隊到着
- 10 熱烈歓迎
- 5 上陸軍勝利 橋頭堡確保 那霸市内にて交戦中

状況は良くなかった。

空挺魔法師部隊の奮闘はあれども、制空権を失い那霸市内にて防戦するのに手一杯。

大陸からやってきた増援部隊はもうすぐ到着するので、焦点は嘉手納基地を守るかどうかにかかっている。

沖縄への日本国防軍の増援

- 1 航空戦力 準備中
- 2 航空戦力 移動中
- 3 → 艦隊 準備中
- 4 → 艦隊 出港



- 5 → 空挺部隊 準備中
- 6 → 空挺部隊 移動中
- 7 → 魔法師義勇兵部隊 準備中
- 8 → 魔法師義勇兵部隊 移動中
- 9 → 十師族 出陣
- 10 熱烈歓迎
- 10 熱烈歓迎
- 1 クリティカル
- 2 ファンプル
- 2 ファンプル

「増援はどうなっているんですか!?!」

真田中尉が持ち込んだ通信機に叫ぶ。

俺たちがいるという事を前提の会話なので、相手である風間玄信大尉の声も硬い。

「沖繩だけでなく、対馬と佐渡にも敵対勢力が上陸してきている。」

佐渡は撃退に成功したみたいだが、対馬沖の航空戦が思わしくくない。

戦時動員も始まったばかりで、早急に送れる戦力が無い。

もはや、沖繩周辺に残る我が軍の戦力は嘉手納基地と君の居る義勇艦隊のみなのだ」  
風間大尉の声を聞くと、状況は圧倒的に悪い。

そして、組織的抵抗はできているが、指揮系統の混乱が見られる。

上位の基地司令とかが会話相手に無いからだ。

だからこそ、宙に浮く。

ある意味、自由に動けるとも言う。

俺は真田中尉と通信機向こうの風間大尉に向けて口を開く。

「できる事、できない事を整理しましょう。」

嘉手納基地は守りきれますか？」

さすおに判定 100ほどさすおに

結果 88

「多分大丈夫だ。」

嘉手納基地周辺については安全が確保されている。

問題は那覇市内で、民間人を巻き込んだ市街戦になって我々は手こずっている。

敵の工兵が那覇空港を復旧させたら、大陸からの増援部隊がそこになだれ込んでしま

う。

そうになったら、我々はさらなる苦戦を強いられるだろう」

「那覇空港への艦砲射撃はできない訳ではないです。」

問題は、沖縄近海に敵潜水艦がうろついている事と、敵空母の艦載機が残っている事です。

近づくためには、敵潜水艦を排除しないとイケないし、その時に敵の航空機が邪魔してくるのは見えています。

制空権奪還のために、本土から航空隊を派遣してもらおうようにかけてください。

潜水艦の排除後、制空権が取れているならば、こちらはそちらの支援が可能になります」

こうして、俺たちも本格的に戦闘に参加してゆく。

まだ今日という日は終わらない。

## 沖縄沖海戦 インターミッション

真田繁留中尉にとって、その船は過去の遺物でしかなかった。

みねぐも型護衛艦『むらくも』。

その後部甲板にへりは着艦し、責任者と対面する。

責任者の名前を知っているのは、つけられた隠しマイクの声を聞いていた司波深夜だけであった。

「入即出やる夫。」

すごい名前が出てきたわね」

「どなたですか？」

お母様？」

状況はよろしくないが、嘉手納基地周辺の安全は確保されている。

その基地司令部シエルトにて、十師族としての特権で入っている司波深雪は尋ね、司波深夜は淡々とそれを語る。

「1990年代の英雄。」

そう呼ぶのがふさわしいのでしょうかね。

その名前を、十師族は消したけど」

「消した？」

娘の疑問形に、母は淡々と語る。

究極な質である魔法を駆使する魔法師たちにとって量にこだわり続けたその名前は、到底許容できるものではなかったからである。

「一時期、魔界と呼ばれる異世界とこの世界は繋がったらしいわ。

今は途切れただけど、それを途切れさせたのが彼よ」

「どうやって途切れさせたのですか？」

「魔界に核兵器を派手に撃ち込んだの」

冷戦終結時、地球を何百回と焼ける量を持っていた人類は、人類生存を名目にその核兵器の集中使用によって魔界に居る悪魔たちを駆逐したのである。

これで終わるならば、彼はまだ英雄として記録されただろう。

彼がその業績を消されたのは、その先にこそあった。

「彼はね。」

その時に既に魔法師の登場を予言し、対魔法師戦術の構築と流布を全世界にばらまいたのよ。

大亜細亜連合の攻撃の大元は、彼の戦略と戦術に行き当たるといふ訳」

基地司令を始めとした司令部スタッフが居るのに、司波深夜は淡々と語る。

マイクからは、真田中尉と入即出やる夫とのやり取りが聞こえてくる。

「どうしても、支援砲撃は無理ですか？」

「言った通りまずは敵潜水艦の排除、次に制空権の奪還無しには沖縄に近づくのは難しい。」

対馬や佐渡の件も知っているのでそちらの苦境は理解しているが、艦隊を預かる者の一人として、むざむざ死地に艦隊を送り込むのは許容できない」

平行線を辿っているが、これについては向こうの言い分のほうが正しい。

向こうは潜水艦と敵空母の艦載機を相手にしなければならぬのだ。

「……っ！」

九島少将！

基地司令の声と共に、モニターに国防軍少将の制服を来た九島烈が姿を見せる。

彼は退役し、今は師族会議議長という要職に就いていたのだが、制服を着ているという事は現役復帰したのだろう。

「状況は把握している。」

東京の第一師団を動かす準備に手間取っている。

持ちこたえられそうか？」

「嘉手納は長期戦に耐えられるでしょうが、敵の増援が沖繩に向かっています。

橋頭堡を築かれると、嘉手納以南で戦火が長期化しかねません」

「表向きは援軍は送れないが、魔法協会の有志を集めて義勇部隊を編成している」

「おおっ！」

九島烈の言葉も基地司令の感嘆の声も半分以上は芝居に過ぎない。

結局の所、沖繩にその部隊を送る為の制空権が取れていないからだ。

海軍は佐世保と呉の部隊が対馬防衛にかかりきりになり、舞鶴と大湊の部隊は佐渡の

戦闘が終わったとは言え、日本海の警備に張り付かねばならない。

横須賀の部隊が出撃して沖繩に到着するのは早くても明後日だ。

今日と明日は手持ちの駒のみで沖繩を死守しなければならぬのである。

「司令。

すまないが、向こうの艦隊の入即出提督と話をさせていただけませんか？」

「日本国防陸軍九島烈少将と申します。

そちらの援護と協力に感謝を」

「海上自衛隊入即出やる夫海将補相当官と申します。

この艦隊を預かるものとして、同じ日本人として当然のことをしたままです」

中継している那覇基地のモニターを誰もが無言で黙ってみている。

写り込んでいる女性士官が恐ろしく美しいと司波深雪は場違いな事を思った。

「率直に申します。」

明後日まで、援軍は送れません。

そちらの戦力と嘉手納基地の部隊で、敵軍を挟撃したい」

「お断りします。」

明後日に援軍が来るのなら、それまで戦力保持に努めるべきです。

敵の増援は近づいているし、こちらにも敵潜水艦と機動部隊の2つを相手にするのはきついです」

嘉手納基地が生き残っているならば、本土から航空隊を送るだけで敵空母から制空権を奪い返せるのだ。

対馬の戦況を見なければの話だが。

そのために、鹿屋の増援航空隊は足止めされていた。

「長期化は避けられませんが？」

「短期間で事態を解決する瞬間はとうの昔に過ぎています。」

そちらが対馬を重視するのは理解できます。

ならば、対馬が落ち着くまで、沖縄の戦力保持に努めるしかないでしょう」



九島烈という大物を出しても入即出やる夫は動じない。

大物が出たからこそはつたりであるという事を見抜いて、早期解決を放棄させて確実な解決を九島烈に強要する。

艦隊を突つ込ませて、敵を一撃のもとに叩くプランに乗る見込みはなかった。

そして、入即出やる夫を動かせる権限も手札も今の九島烈にはない。

「そちらの望みはできうる限り配慮しましょう」

「協力はしますが、そちらに借りを作るようなものは求めませんよ。」

むしろ、そちらのゴタゴタをなんとかして欲しい所ですな」

「返す言葉もないですな」

佐渡では戦闘が終わったが、後始末で手一杯。

大事な魔法関連技術を開示するつもりは最初からない以上、互いの友好と信頼で妥協線を引くしかできないのである。

「大丈夫よ。深雪。」

達也が居るもの」

司波深雪は母親のつぶやきを聞き漏らさなかつた。

それは事実であり間違つても居た。

司波達也の『質』が戦場で無双するが、入即出やる夫の『量』が戦争を主導する。

それは未だ魔法師というものに立ちほだかる呪いのようなものだった。

# 沖繩沖海戦 その5

日本国防陸軍

連隊規模 3000人ぐらい + お兄様補正 46

98 + 46 || 144

沖繩上陸部隊

師団規模 一万人ぐらい + 爆撃機支援 28

175 + 28 || 203

那覇市市街戦

144 対 203 || 1 : 2

結果

1 国防軍勝利 上陸部隊降伏

2 国防軍勝利 上陸部隊潰走

- |    |       |                 |
|----|-------|-----------------|
| 3  | 国防軍勝利 | 那覇市内の主要拠点確保     |
| 4  | 国防軍勝利 | 那覇市内交戦中         |
| 5  | 上陸軍勝利 | 那覇市内交戦中         |
| 6  | 上陸軍勝利 | 那覇市内制圧          |
| 7  | 上陸軍勝利 | 那覇市内制圧 嘉手納基地攻撃中 |
| 8  | 上陸軍勝利 | 那覇市内制圧 嘉手納基地包囲中 |
| 9  | 上陸軍勝利 | 嘉手納基地降伏         |
| 10 | 熱烈歓迎  |                 |
| 8  | 上陸軍勝利 | 那覇市内制圧 嘉手納基地包囲中 |
|    | 対馬情勢  | 100ほど国防軍有利      |
|    | 結果    | 61              |

日本国防軍は未だ士気及び戦意を維持しており、大黒竜也特務大尉も奮闘を続けているが、それらを以てしても戦況を変えることはできなかった。

制空権を失った上に、士気に左右されず動けるロボット兵が前に出てくると彼の活躍すら押し流されるのだ。

橋頭堡を確保された上に増援部隊が到着して、師団規模に膨れ上がった上陸軍は元気いっぱいの新手をどんどん繰り出してゆき、反対に増援が来れず、要請した艦砲射撃もこちらが断つたことで基地に撤退する事となったのである。

「ある意味当然の結果だな」

真田中尉からの報告を聞いて俺はそんな感想を言う。

そして、上陸軍が嘉手納基地を包囲したことでこちらは猶予が得られた事に安堵のため息をもらす。

「包囲して攻めてこないという事は、降伏を迫っている訳だ。

向こうからすれば大勢は決したと考える状況ですからな。

半日程度の時間は稼げるでしょう」

「同時に、敵は嘉手納基地の希望になっっている我々の艦隊を叩きに来るでしょうね」

美野原主席幕僚が俺の安堵につっこむ。

明日の、この沖繩の運命は俺達の艦隊にかかっていると云っていいからだ。

時間を見る。

18時。

既に空は茜色から黒に変わろうとしていた。

「敵空母は夜間攻撃してくるかな？」

「しないでしよう。」

技術が進んだとしても、夜間攻撃は危険がつきまっています。勝っているならなおさらです。

先に潜水艦で攻撃。

それが駄目なら、翌日昼に仕掛けてきますよ」

情勢はやつと好転しだしていた。

本土からの増援を躊躇させていた対馬方面の航空戦に、やつとめどが立ったからだ。

このため、鹿屋に集まっていた部隊の一部が奄美大島まで進出しており、航空戦が行える環境が整いつつあった。

同時にそれは、敵部隊が那覇空港を使って航空戦を行うことを意味する訳で。

「この夜の対潜戦が勝敗に大きく影響してくるでしょうな」

美野原主席幕僚の声の方向には夜間にも関わらずヘリ空母ジャンヌ・ダルクから飛び立ったSH-60Jが対潜警戒をしていた。

はるか彼方の空では戦闘妖精少女の皆様が夜間にも関わらず警戒を続けている。

ギリギリまで出さなかったのがここで効く。

今ならば、敵潜水艦と勝負ができるのだ。

敵潜水艦 隻数 1

潜水艦隠蔽力 48

海自潜水艦探知能力 3

FFR | 3 1 M R スーパーシルフちゃん

レベル 1 2

FFR | 4 1 メイヴちゃん

レベル 5 6

(3 + 1 2 + 5 6) × 世界補正 1 3 % || 8 0

敵潜水艦 回避力 1 4

海自対潜能力 8 8 × 世界補正 1 3 % || 9 9

1 潜水艦降伏

2 同上

3 同上

4 潜水艦撃沈

5 同上

6 同上

7 同上

8 潜水艦回避

9 潜水艦からの魚雷攻撃

10 熱烈歓迎

結果 6 潜水艦撃沈

上空警戒

FFR—31シルフィードちゃん

レベル56

FA—1ファーンちゃん

レベル23

FA—2 ファーンIIちゃん

レベル32

(56+23+32)×世界補正13%||125

敵機迎撃機数 6

レベル10



6 × 10 || 60

1 2 5 対 6 0 || 2 : 1

結果

1 自衛隊勝利 敵機撃墜

2 同上

3 同上

4 同上

5 同上

6 同上

7 上陸軍勝利 味方機撃墜

8 同上 艦隊発見される

9 同上 敵攻撃機出撃

10 熱烈歓迎

3 自衛隊勝利 敵機撃墜

自衛隊はギリギリまで交戦規定を守った。

技術力の差で見つからなかった敵潜水艦を超技術の塊であるメイヴちゃんたちが見つけると、ソノブイを投下して発見を通告した上で降伏を迫ったのだ。

そして従わなかった潜水艦を警告の後撃沈したのである。

それは、敵に潜水艦の緊急事態を教えることになる。

那覇空港から上がった敵迎撃機も警告の後空戦に入り、全機撃墜している。

真田中尉が不思議そうに俺に尋ねる。

「なんでこちらの位置をバラすような事までして、敵に警告を与えたのですか？」

問答無用で攻撃すればいいのに？」

「言わんとする事はわかりますが、我々は海上自衛隊です。」

少なくとも先制攻撃を良しとしない形で作られた軍隊ですから、帰った時に色々言われるのは避けたい所ですね」

「帰る？」

帰るあてがあるというのですか？」

おっと、失言だったか。

曖昧な笑顔でごまかしていると、海戦の指揮を採っている藤堂海将から連絡が入る。

「どごうしました？」

「このまま敵の制空権内に留まっているのはあまりよくない。

今のうちに北上して奄美大島の方に向かいたいのだが？」

「いいですよ。」

「こちらは、戦闘には口を挟まないのだから」

その連絡の後、正式に各艦に奄美大島の方に向かう事が通達される。

それに合わせて、国防軍と連絡をしていた真田中尉からこんな提案が入る。

「お願いなのですが、そちらのジャンヌ・ダルクは、大隊規模の兵員輸送が可能だと聞いております。」

奄美大島に向かうのであれば、増援として着いていた部隊を運んでいただきたいのですがいかがでしょうか？」

俺は少し考える。

その提案は悪意があるなら、ジャンヌを乗っ取れる人員になりかねないからだ。

軽く頭をふって、その疑問を追い出す。

「いいでしょう。」

その提案を受け入れます」

どっちにしろ、奄美大島に進出した国防空軍の航空隊が無ければ、沖縄に突っ込めないのだ。

途中で考えるのを放棄して流れに任せる事を察した叢雲が俺の脇腹をつついたが俺は気づかないふりをした。

奄美大島国防軍沖繩増援部隊

1 大隊規模

2 同上

3 同上

4 連隊規模

5 同上

6 同上

7 旅団規模

8 同上

9 同上

10 魔法師志願兵部隊

結果 7

約7時間の航海で奄美大島に入ると、そこには旅団規模の増援が待機していた。

少なくとも、第三次大戦を経験したこの国はそれぐらいの即応能力はあったらしい。  
「国防空軍の戦闘機です」

まだ夜明け前なので、あたりは薄暗い。

朝から大変な事になるなとうっすらと思った。

## 沖繩沖海戦 その6

こういう世界であり、こういう仕事である以上人を殺す覚悟はしたし、できているつもりだ。

とはいえ、自分が死ぬのはともかく、俺の選択で他の人が死ぬことについてはまだ迷いがある。

ついてきたのは俺の監視もしていただろう自衛隊員たちで、まだ自分の国を守って死ぬという動機づけができているだけ救いが無いわけではないが。

「気にすることではないですよ」

そばに立っていた新島副長が俺を見かねて言葉をかける。

「勘付かれていたらしい。」

「どういう未来であれ、世界であれ、ここは日本で、助けを求めているのは日本人です。だったら、守るのが我々の仕事です」

「そうか。」

「そう言ってもらえると助かる。」

「ところで、何で私のことを察したんだ？」

新島副長は笑って警戒し続ける叢雲を指差す。

こっちは見ていないが頭の上の謎物体がこっちを向いていた。  
なるほど。

あいつにはごまかしは無理か。

「奄美大島が見えてきました。」

名瀬港に入港するようにとの指示です」

明日の海空戦で、この沖繩の戦闘が決まる。

それは俺たちも、この世界の人間もそう思っているのだろう。

集結していた日本国防海軍部隊

護衛艦 6 隻

高速艇 4 隻

揚陸船 3 隻

潜水艦 2 隻

名瀬港の外で集まっていた国防海軍の艦艇は呉から出撃した艦隊で、結構な数が揃っていた。

沖繩救援に向かいたがったが、対馬の状況が危なかつたので出撃待機をしていたのだという。

海自の士官たちも未来の艦艇を見たり写真を撮ったりしている。

真田中尉が俺に解説してくれた。

「この時代の海軍艦艇はレーザガン装備が中心で、無人化を推し進めています。

高速艇の乗員は10人、護衛艦の乗員は50人を切っているですよ」

言えない。

こちらの船は基本一人で動かせるという事を。

それを海自側が嫌って、余裕のない隊員をつけるだけでなくクローンやドロイドを乗せているという事を。

「今、大和の藤堂海将ともお話しさせてもらっているのですが、自衛隊の皆様にはこちらの指揮下に入って頂けると助かります」

「そのあたりは指示に従いますよ。」

ただ、こっちはこっちの統一指揮は譲れない所なのですけどね。真田中尉「我々もそこまで求めるほど恩知らずではないですよ」

この戦いは彼らの世界の戦争であり、俺達はよそ者でしかない。

それを踏まえた上で、艦隊編成はこんな感じになった。



日本国防軍・自衛隊合同艦隊

呉第四艦隊

護衛艦 6 隻

高速艇 4 隻

揚陸艦 3 隻

潜水艦 2 隻

自衛隊実験部隊

大和、ジャンヌ・ダルク、叢雲改二、浜風、叢雲

戦力はあるが、空母が遊弋している中沖繩に突っ込むわけにも行かず、その排除のめどがたった時に俺たちがやってきたという訳だ。

特に、ジャンヌ・ダルクに兵員輸送機能がついている事に国防軍は喜び、この艦隊で沖繩に送れる国防陸軍部隊は連隊規模まで膨れ上がっていた。

先鋒は国防海軍第四艦隊で、護衛艦 6 隻と高速艇 4 隻が揚陸艦 3 隻を守る様に輪形陣で出撃してゆく。

その後ろを俺たちの艦隊が同じく輪形陣でついてゆく形になっている。

朝焼けの空には、上空警戒をしてくれている国防空軍の戦闘機が見えていた。

潜水艦2隻は既に出撃しており、その任務はわからない。

「なかなか壮観なものですな」

「ええ。」

かつてこの国は沖縄を救おうとして失敗している。

その二の舞だけはしたくない所ですよ。

九島少将」

何をしに来たかうつすらと察しはついたが、本土から単身でやってきた九島少将が俺の船に乗り込んでいた。

連絡役だった真田中尉が緊張しているのも、少し前まで彼が世界最強の魔法師として恐れられていたからだろう。

「ええ。」

そんな二の舞は私の名にかけて起こしませんとも。

それを踏まえた上でお聞きしたいのですが、入即出海将補相当官。

貴方が、私の知る貴方だとして、どうして対魔法師戦術を世界中にばらまいたのかお聞かせくださいませんか？」

海戦というのは、待つ時間が長い。

そのくせ、始まるのと終わるのが一瞬というスピード感がある。

こんな雑談をする時間ができるぐらいには。

「そうですね。」

対抗戦術があるという事で、魔術師に対しての偏見を減らそうとしたのでしよう。

魔法は個人が持つ力を軽く越えている。

律せずに暴走した時の被害がでかいから、その対策を周知するのは当然のことでしょう？」

そんな事をぼやきながら、俺は目の前の九島少将ではなく沖繩で戦っている司波達也に向けて言葉を漏らす。

「それでもなお、対策を越えてくる個が出てくるから嫌なんですよ」

それに九島少将が何を言おうとしたのかはついにわからない。

オペレーターとして乗り込んでいたマシユ・茶々丸の声が艦橋に響く。

「レーダーに未確認飛行物体多数接近！

国防空軍機と交戦状態に入りました！」

大亜細亞連合軍空母発艦機

43機

大亜細亞連合軍沖繩方面爆撃機

3機

日本国防空軍護衛機

48機

撃墜数

大亜細亞連合軍空母発艦機

16機

大亜細亞連合軍沖繩方面爆撃機

1機

日本国防空軍護衛機

25機

残機

大亜細亞連合軍空母発艦機

43 | 16 || 27機

大亜細亞連合軍沖繩方面爆撃機

3 | 1 || 2 機

日本国防空軍護衛機

4 8 | 2 5 || 2 3 機

艦隊接近機数

大亜細亞連合軍空母発艦機 + 沖繩方面爆撃機

2 1 機

搭載対艦ミサイル 一機あたり 3 発

対艦ミサイル発射数

2 1 × 3 || 6 3 発

大和のミサイル迎撃

5 6 発撃墜

残り 7 発

第四艦隊ミサイル迎撃能力

護衛艦一隻あたり迎撃能力 4 発 × 6 隻 || 2 4

高速艇一隻あたり迎撃能力 3 発 × 4 隻 || 1 2

艦隊ミサイル迎撃

7 発

全弾撃墜

航空戦は予想に反して、国防空軍の苦戦という展開で幕を開けた。

大亜細亜連合機動部隊はこの攻撃が山場と理解して稼働機数のほぼ全力出撃を選択。奄美空港に進出していた日本国防空軍と互角以上の戦いをやってみせたのである。

ただ、惜しむべきは、戦闘中の沖繩方面からの支援がほとんどなかった事だろうか。それでも彼らは必殺の対艦ミサイルを我々の方に向けて大量に発射した。

国防海軍第四艦隊の処理能力を超えるミサイル量を覆したのは、一人の艦娘の因縁と執念だった。

「私達の沖繩への道を阻むなあああ!!」

艦娘大和が吠える。

海戦の山場と理解していた藤堂海将は残っていた対空ミサイルを全部発射する。

未来技術の対艦ミサイルのジャミング性能に対し艦娘の自動コントロールという実

に日本艦らしい荒業でその大半を叩き潰すと、残ったミサイルはこの時代の技術で作られている第四艦隊の迎撃能力で対処可能だった。

「ミサイル全弾撃墜！」

味方艦に被害はありません!!」

艦橋内に流れる安堵のため息だが、即座に緊急通信が大和より発信される。

受話器を取ると、藤堂海将が深刻な声で要件を告げた。

「大和が倒れた。」

今、医務室に寝かせているが命に別状はないみたいだ」

「……それは多分ミサイル処理にタスクが追いつかずにオーバードローを起こしてぶっ倒れたんでしょう。」

艦内機能が全停止したと思いますが、配置要員で動かせるでしょうか?」

「ああ。」

東郷艦長がうまくやっているが、さっきみたいな神業は期待しないでくれ」

受話器において俺も安堵の息を漏らす。

艦娘による艦の運営の構造的欠点がこれだ。

神業的性能を出せるかも知れないが、それが艦娘に依存するので何かあったら即座に行動不能になる。

それを予見して、人員のみで動かせるようにとあの手この手で人をかき集めた藤堂海将の先見の明に感心するしかない。

「これで空母は下がらざるを得ない。

大陸からの航空支援は可能だが、今沖縄に向かってこの艦隊を止めるのはきつ  
い。

だったら、敵はどう出てくるかな？」

九島少将の声に勝ちの空気が見える。

戦況から、こちらの増援が送れるならば沖縄は守りきれるとい判断なのだろう。

沖縄の戦況 100で国防軍優勢

結果 72

「嘉手納基地より入電です！

国防陸軍嘉手納基地駐屯部隊は早朝に敵包囲部隊に対して奇襲を敢行せり。

敵軍は潰走中だそうです!!」

沖縄の戦況もやっとな転してきた。

数に任せて面を押せば良かったのに、嘉手納基地包囲という点に戦力を集めた結果、



司波達也という個に戦局をひっくり返されたのだ。

飛び抜けた個というのはこれがあるから怖い。

俺が上陸軍司令官だったら、包囲せずに大陸から弾道ミサイルで嘉手納基地を耕していたな。

あの手の輩は別局面から圧殺するしか手はないのだから。

「橋頭堡は確保しているし、大陸からの航空支援もできなくはない。

航空戦でこちらは少なくとも消耗をしたのは向こうもわかっている。

ならば、やることは一つでしょう？」

俺の言葉を九島少将は理解できないのか、したくないのか。

なお、原作ではやつらはちゃんとしていた。

最初無謀と思っていたが、こうやって全体を見てゆくとそれが無謀ではあるが勝ちのない賭けではなかった事が見えてくる。

「空母の護衛艦隊を分離して揚陸中のこちらを叩きに来るに決まっているでしょう？」

## 沖縄沖海戦 その7

沖縄での揚陸終了時間

6時間

敵艦隊接近予定時間

6時間

上陸拠点は戦線の後方の安全地帯と距離から本部港に決められた。

沖縄―鹿児島フェリーが停泊できる港湾施設があるのが決め手となったからである。

問題なのは、こちらの揚陸終了時間と敵艦隊接近時間がほぼ同時刻という事。

砲雷撃戦は避けられそうにない状況だった。

「で、敵艦隊の数は？」

巡洋艦1隻

駆逐艦4隻

「航空偵察だと、巡洋艦1隻と駆逐艦4隻が単縦陣を組んで接近中。」

残りの船は空母と共に退避中ね」

叢雲が国防軍からの情報を読み上げる。

空母が居なくなつたとしても、敵は那覇空港に航空機を前進させている。

奄美大島のこちらの空軍がその敵部隊を相手に制空権を取れるかどうかはやつてみないとわからなかつた。

「マスター。」

藤堂海将から」

ステンノから受話器を受け取ると、藤堂海将は要件を告げてきた。

声に緊張があるのは、まだこの勝負の行方がわからないからにほかならない。

「敵艦隊に向けてハラスメント攻撃をしかけようと思う。」

そつちの大和に搭載していたハリアーII J7機と戦闘妖精少女たちに協力をお願いしたい」

ハラスメント攻撃。

要するに嫌がらせである。

空母のカバーがなくなつたので、この世界では技術的に古いハリアーII Jをやつと出すことができるという訳だ。

「大丈夫ですか？」

戦闘妖精少女の方はまだ技術的に勝っているが、この世界でのハリアーIIJは骨董品である。

藤堂海将はそれも考えていたらしく、説明を続ける。

「搭載できるハーブーンミサイルの射程が大体120キロ。

その距離から撃って逃げるだけ。

向こうの防空性能がどれぐらいかわからないのですが、相手の対空ミサイルを落とすためにも、戦闘妖精少女の協力が欲しいのです」

ここに来ての航空戦力は敵にとっても嫌だろう。

足止めできたら御の字で、ダメージが入ったら儲け物。

安全に配慮してさっさと逃げるといふプランに俺も文句はつけられない。

「わかりました。

そちらにおまかせします」

戦闘妖精少女

FFR—31MR スーパーシルフ “雪風” ちゃん

FFR—41 メイヴ “雪風” ちゃん

FFR—31シルフィードちゃん

FA-1ファーンちゃん

FA-2 ファーンIIちゃん

ハリアーII J 7機 × ハーブーンミサイル 3発  
 〓 21発

### 敵艦隊防戦

ミサイル撃墜数 15発

航空隊向け対空ミサイル発射 21発

戦闘妖精少女のミサイル迎撃 23発  
 オーバーキル

敵艦隊へのミサイルの行方

1 巡洋艦

2-5 駆逐艦

6 はずれ

2、2、1、3、3、3

### 敵艦隊の決断

1 撤退

2 同上

3 同上

4 同上

5 同上

6 同上

7 同上

8 損傷艦を置いて追撃

9 同上

10 熱烈歓迎

「こちらスーパースィルフ雪風。」

先頭の巡洋艦とその後続の駆逐艦二隻にミサイル命中。

うち、駆逐艦一隻は大破炎上中。

進路を変えて撤退しつつあり」

スーパースィルフ雪風ちゃんの報告に、艦橋に喜びの声漏れる。

うちみたいにきつちり防戦に徹すればよかったのに、防御と空襲部隊への攻撃を両方  
 行ったのが仇となった。

敵が発射した対空ミサイルをこちらの戦闘妖精少女が全機撃墜した隙を突かれて、こ

こちらの放った対艦ミサイルが殺到したのだ。

現代戦闘はとにかく分単位、秒単位の決断が勝敗を分ける。

この世界的に古いミサイルとはいえ当たれば爆発する訳で、火力の増大から防御より回避や迎撃に重点が置かれていた敵軍の巡洋艦や駆逐艦は見事戦闘行動不能に追い込まれ、撤退するところになったという訳だ。

「寂しいものだな」

ぼつりと漏らした俺の言葉に九島少将が反応する。

「なにかおっしゃいましたか？」

「お気になさらず。」

艦隊戦と意気込んでいたのですが、飛行機の威力は昔も今も変わらないなど

またも大和の主砲は敵艦に向けて放たれなかったのである。

航空機の恐ろしさとその防戦は戦艦を正しく過去の存在にした。

それを俺は痛感していた。

「たとえ使いみちが違えども役に立つのならば、それは喜ぶべきでしょう。」

大和の防空能力が無ければ、炎上し撤退していたのは我が艦隊なのですぞ」

正しいゆえに俺はただ頷いた。

大和にはまだ仕事が残っている。

沖繩に上陸した敵部隊への対地攻撃という仕事だ。

ここからの戦闘はたいした見どころがないので、淡々と語るとしよう。

本部港に増援の連隊を上陸させると、艦隊を二つに割って第四艦隊は残りを連れてくるために奄美大島にとんぼ返り。

我々は対地攻撃のために那覇港に向けて進路を取る。

その際、高速艇4隻を護衛にと残してくれたのは、純粹な好意と我々だけ目立つのは後々まずいという政治的配慮なのかそこはわからないし知る必要もない。

大和の主砲が吠える。

その轟音が敵軍に刺さると、敵の崩壊は更に加速した。

その日の夜には、奄美大島に帰った第四艦隊と横須賀から出撃してきた第一艦隊が沖繩に到着。

残った二個連隊に魔法師の義勇兵部隊も到着して掃討戦の段階に入る。

敵上陸部隊は混乱したまま各所で孤立し、撃破されるか降伏していった。

最終的に沖繩から大亜細亜連合上陸軍の駆逐と戦闘最終宣言が日本国防軍から出されたのはそれから一週間後の事である。

それまでの戦闘で沖繩への被害は甚大で、被害者は19万人に及んだことをここに記



しておこう。

那覇市内に轟音が轟く。

大亜細亜連合軍は算を乱して潰走するが彼らに逃げられる場所は何処もなかった。

制空権は既に日本の方に移り、制海権も日本が握ったからのこの大規模質量砲撃である。

いかな魔法師といえども、高高度から落ちてくる46センチ砲の質量と衝撃を防げない。

司波達也はそんな敵兵たちを虐殺してゆく。

ふと彼は海岸線上に目を向けた。

彼の精霊の目は、洋上に浮かぶ女性たちを捉えていた。

その中央の女性が嬉しそうに泣いていたのは見間違いなのだろうか？

「どうした？特尉」

「……何でもありません」

司波達也は戦場に目を戻して、もう彼女たちを見ようとはしなかった。

## 沖繩沖海戦 あとしまつ

日本政府の感謝 100で感激

結果 2

引き止め工作 100で強烈引き止め

結果 41

日本魔法協会の評価 100で評価

結果 58

引き止め工作 100で強烈引き止め

結果 67

さすおに感知チェック 100でさすおに

結果 77

沖繩沖海戦から一週間後。

つい先程、戦闘終結宣言が日本国防軍から出たばかりだが、俺達は破壊された那覇港に錨を下ろして負傷者の救助を行っていた。

回復系魔法の使える連中フル稼働であり、ジャンヌ・ダルクや超鈴音やロリンチちゃんまで使い切るほどの忙しさであった。

那覇市全域が戦場だった事もあり、医療機関の麻痺が負傷者の状態を悪化させていたのである。

そんな中、天才クラスの医学も持っているダヴィンチちゃんと回復魔法と設備があるというので、救助までしていたのだ。

第三勢力なのを幸いに赤十字の旗を派手に掲げての医療活動である。

「どうしてもこちらに残っていただけませんか……」

「帰れないなら考えますが、帰るあてがありませんからね。

帰れなくなったら、その時お願いしますよ」

九島少将の粘りに、俺は苦笑して断る。

既に何度目の引き止め工作か数えるのも面倒になった。

「第一、国の方は我々を放り出す事で問題ないじゃないですか」

「彼らは、あなた方がどれほどのものなのか分かっていないのです。

残って頂けるのならば、私が、あなた方の居場所を作りますとも！」

沖繩沖海戦における我々の介入はある意味当然なのだが、日本政府からはよく思われ  
ていなかった。

日の丸を掲げても君が代を歌っても、この時代の日本政府の統制下に入っていない武装集団なのだから常識的と言ってもいいだろう。

だから、彼らは支援活動終了後何も求めずに我々が去る事に両手をあげて賛成してくれたのである。

一方で、九島烈少将の乗船を許したためにこの船の色々なものがバレた結果、彼と彼が率いる日本魔法協会は引き止め工作を展開していた。

つまり、この世界の日本政府も日本魔法協会も、俺達のことを魔法師と認識している訳だ。

「その気持ちだけは頂いておきましょう」

九島少将にとって交渉材料が無いのが、引き止めに押しがない理由になっている。何か求めたならば、話が違っていただろうに。

CAD技術とか。

それは、大亜細亜連合軍の放置武器からでも十分だった。

ロリンチちゃんと超鈴音のCAD理解

ロリンチちゃん

55%

超鈴音

34%

「で、どんな感じだ？」

「マスターくんか。」

なんとなく理解はした。

作れるかと言うと、ちと難しいかもね」

叢雲のロリンチちゃん工房にて、放置されたCADを元にリバースエンジニアリングをした結果、ある程度のことがかかった。

CADの中核部品は感応石というもので、人工的に作られた神経細胞を結晶化して作られる。

こいつの精製について分からないのと、感応石の精度及び強度が問題になっていた。

「時空管理局が使っていたデバイスだが、その核の部分が未知の鉱石を使用していたと言ったろ。」

その代用としてこの感応石は悪くはないが、オススメはしたくないというのが感想だ。

向こうの技術では、体内にあるリンカーコアというのが大事なのだが、多分感応石の元になっている神経細胞がそのリンカーコアなんだろうと推測している」

ロリンチちゃんの説明に超鈴音が続く。

「今回、那覇市内での戦闘データを取らせてもらったけど、飛び抜けた個が圧倒する戦闘は発生しなかったのヨ。

もちろん、そのクラスの魔法師というのはいるけど、やる夫さんが望む底辺の底上げを考えるなら、こいついらなくネという結論に至ったのネ」

たとえば、日本側の国防陸軍は専属魔法師部隊を編成したが、那覇市内の戦闘で敗北した原因は大亜細亜連合軍の諸兵科連合の面制圧だった。

それは、沖繩沖海戦後の掃討戦でも問題になっており、送り込んだ増援で那覇市内を掃討するのには数が足りず、大和の主砲で街ごと吹き飛ばした物理的・心理的衝撃が決め手となったのである。

「ゲームに例えると、魔法師部隊ってのは、魔法使いだけでパーティーを組んだもので、破壊力は一流だけど継戦能力に欠けるネ。

戦士が盾役で守り、僧侶が回復させて戦うほうが長く戦えるし、バランスが大事ヨ。

そして、そういう部隊で相手ができない連中が来たら、やる夫さんの出番ネ」

そして、その方向では手札はほぼ完成されている。

作れる時間があるかどうかは別にしてだが。

もつとぶつちやけると、今回一連のイベントはボソソジャンプの成功が大事であつ

て、デバイスうんぬんは副産物であつたりするのだ。

まあ、デバイスがらみの技術は欲しいと言えば欲しいが、無理して取りに行くものでもない。

そこまで考えた俺は、結論を告げる。

「よし。」

引き上げるか」

「どうした少年。

古い船が珍しいか？」

敬礼する少年兵に俺は億劫に敬礼し返す。

後ろに海自制服の叢雲とステンノを侍らせての登場だが、相手が相手だから正体は見抜かれたのかもしれないなあ。

「国防陸軍、大黒竜也特尉と申します」

「海上自衛隊入即出やる夫海将補相当官だ。

君と同じ特務の少将と言った方がわかりやすいかな？」

四人して岸壁の大和を見上げる。

その巨体は今では沖繩の希望の象徴のように扱われ、見に来る民間人も多い。

大黒特尉は、そんな大和に民間人が近づかないように警備をしていた兵の一人だった。

「でかい船だろう？」

こいつはついに沖繩に届いたんだ。

嬉しくて泣いているのかもしれない」

「……ええ。

洋上でこの船を見た時、泣いているような気がしました。

それでなんとなく気になって」

向こうは精霊の目の事なんかは知らないだろうという事で話しているが、こっちは全部知っているのだからね。話すのも大変である。

「折角だ。

何か治したいものはあるかね？」

我々も明日には出港するが、この船を見て泣いていると言ってくれた礼だ。

古い魔法で治してやろう」

「古式魔法ですか？」

「そうとも言うが、もっとふさわしい言い方があつてな。



『神代の奇跡』と私なら言うけどね」

信じる信じないは別問題だが、せっかく来たのだから彼の呪いを解いてあげようというおせっかいである。

麻帆良学園にてエヴァンジェリンの吸血鬼の呪いすら解いたメディア・リリーの『修補すべき全ての疵』で治せないものは多分無い。

「……遠慮しておきます」

長い沈黙の後、大黒特尉から出た答えは拒絶だった。

言葉を選びながら、いや、探しながら、彼はその理由を告げる。

「俺は、この力があつた事を今は感謝しているんです。

この力があつたからこそ、妹を助けられた」

「そうか」

なんとなく分かつていたが、それを納得している自分が居た。

ポケットから煙草を差し出す。

「なんです？！」

「煙草だよ。」

私は吸わないがね。

持っているとは色々便利なんだ。

吸い方は大人にでも聞き給え。

じゃあな。少年。

君の行く道に幸がありますように」

さすおにチエツク 77以下で成功

結果 7

「待つてくださいい！」

大黒特尉が、いや、司波達也が叫ぶ。

そんな感情が何処から残っていたのか知らないが、彼は振り返った俺に頼む。

「俺じゃなくて……助けて欲しい人が居るんです。

その人を治せますか？」

と。

その日の夜。

司波達也は妹の司波深雪と桜井穂波、司波深夜を連れてきた。

治してほしいのは、桜井穂波らしい。

「戦闘の後、体調を崩して急激に悪化して……」

聞けば、嘉手納基地のミサイル攻撃の迎撃をしていたらしい。それが彼女の寿命を縮めたようだ。

既に医者匙を投げ、司波深夜も彼女を見捨てていたが、俺たちを見たいという事についてきたのだろう。

彼女を連れ出す為なのか、他に真田中尉と風間大尉の姿も居る。

あと、当たり前前に居る九島少将もだが。

「結構です。

このまま死なせてください」

桜井穂波は許否する。

寿命が尽きようとしている自覚はあるのだろう。

「今まで生き方を選ぶ自由なんて一つもなかった私が、自分の死に場所を、自分で選ぶことができた。

こんなチャンスを逃す気はないわ。

私は、人に作られた道具としてじゃなく、人間として死ぬことができるの」

その言葉を司波兄妹は黙って聞いていた。

死というものを初めて身近に考えているのだろう。

「だから、このまま死なせて？」

誰も言わない。

言う資格もない。

その資格を持ったただ一人の人物は、人として抵抗する。

「でも、俺は、貴方が死ぬのが嫌なんです」

司波達也。

妹である司波深雪以外への感情を切り捨てられた男。

彼が桜井穂波への執着は何なのか純粹に興味を持った。

「なあ。少年。

君の助けたいという感情の理由は何だい？

妹が悲しむからかい？

戦友としての友愛からかい？

それとも他のなにか別のものなのかい？」

司波達也の回答

1 妹が悲しむから

2 同上

3 同上

4 同上

5 同上

6 戦友としての情

7 同情

8 同情

9 母のガーディアンだったから

10 どないしよ

結果 10

「……俺にもわかりません。」

ただ、那覇沖で見たあの人は泣いていたんです。

その涙が、忘れられないんです」

答えにもならない言葉を司波達也は口にする。

ああ。そうか。

あの大和を見たのか。

届かなかった大和を、世界が違うとは言え沖繩を救えた事を喜ぶ大和を見たのか。

ならば、助けないといけないだろう。

その大和を連れてきた責任者として。

「少年。」

その感情を忘れるなよ。

九島少将。

手札を一つ晒します。

お代は、その彼女の保護という事で

覚えておくといい。少年。

その涙を意味を。

その涙はね、『奇跡』というのだと。

「令呪を持って命じる。

来い！メディア・リリイ！

重ねて令呪を持って命じる！！

宝具開帳！

彼女の傷を癒せ！！」

「はい！

どうか誰も傷つけぬ、傷つけられぬ世界でありますように……

『修補すべき全ての疵』」

あ。

全体宝具だから、司波達也と司波深夜の傷も治ったが知らんふりをしておくか。

こうして、俺たちは元の世界に帰還した。  
ウラシマチエツク。

- 1 さすおに世界ジャンプから一週間後 向こうの時間経過とこちらの時間が同じ
- 2 同上
- 3 同上
- 4 同上
- 5 さすおに世界ジャンプから時間が経過していない
- 6 同上
- 7 同上
- 8 さすおに世界ジャンプから一月後 向こうの時間経過にプラス時間が加えられる
- 9 同上

10 熱烈歓迎  
結果

- 1 さすおに世界ジャンプから一週間後 向こうの時間経過とこちらの時間が同じ

「戻ってきたみたいだな」

「ネットワーク繋がっています。」

時間経過は向こうの時間と同じみたいです。

海自の司令部から連絡が。

周辺艦艇確認しました！」

「沖縄の米軍が支援に動いてくれるそうです！」

ターニャ・デグレチャフ少将から連絡が……」

帰ってきたんだなと感じる。

叢雲がこつちを見て笑った。

「なんだかんだで縁を持ったのね。この世界と」

ステンノも俺を見て笑った。

叢雲と同じような顔で。

「おかえりなさい」

だから俺は、素直にこの言葉を口にした。

「ただいま」



## 戦果報告会

東京はすっかり冬であり、既にクリスマスセールが始まっていた。

そんな中、宮内省予定地の地下施設会議室において、俺たちは戦果報告会というものを開いていた。

「……という訳で、未来における魔法戦闘は、諸兵科連合を覆す事ができないという結論に至ったことを報告いたします」

あつまった面子だけでも、

室戸事務次官

デグ様

ラリー大佐

山本アーカム日本支部長

ペンウツド中将

テレスティーナ・木原・ライフライン

入江省三

ギルガメシユ（プレゼジデントモード）

クルト・ゲーデル

タカミチ・T・高畑

オルガマリー・アニムスファイア

古奈牙柳魅

羽柴茂光

ヴィゼータ

那田蒼一郎

やばいところには一通り声をかけていたのだが、大体参加してくれるあたり興味津々だったの言うまでもないだろう。

この他にもやべー輩が居たりするのだが、それはおいおい紹介するでしょう。

なお、爆発しなかったのはここが皇居地下である上に、アマテラス様が見ているからである。

暇だからと来られた賢王も、世界線交差で色々楽しいことになっているので、顔合わせの時点でご満悦である。

「入即出統括審議官が見てこられた戦訓のデータを解析すると、魔法優先主義の兆候が見られるようなのですが、それでも諸兵科連合の方が優位と？」

一番学者をやっているテレスティーナ・木原・ライフラインが質問するが、学園都市は魔法を超能力に置き換えているだけでやっている事は同じだから、そのあたりについては興味があるのだろう。

「短期決戦ならいざしらず、現代社会の戦争は総力戦であり、戦力が互角の場合ほぼ確実に長期消耗戦の段階に移行します。

その段階で、魔法戦力の数が確保できずに消耗する可能性が高いのです。

さらに付け加えるならば、戦略面において大量殺戮兵器を使用された場合、その局面打開で魔法は報復以上の効果を持つとは思えません」

「道化。

それは我を殺せぬならば、その源を潰すという事か？」

「はい。

人間はそういう意味で柔軟性が強すぎます。

貴方が無敵ならば、その無敵の源を潰そうとするし、それ以前に貴方を敵に回さないように考えますよ。

思想や政治的拘束がなければですが」

結論。

後先考えないならば、全面核戦争最強である。

そして、それを回避した結果、さすおに世界の第三次世界大戦は泥沼の消耗戦に成り果てた。

「今、出現しようとしている悪魔について抑えられると？」

今まで居なかつた場所から声がして、皆が振り向くとそこにはメガテンの閣下と呼ばれるお方が。

この世界の閣下のお姿

1 2 3 男性

4 5 6 女性

7 8 9 子供

1 0 話をしよう

結果 1 0

レベル 1 4 2

「大丈夫です。

この星を数百回焼ける核の力は馬鹿ではないですよ。

悪魔でもあれに耐えられるのは少数ですし、悪魔が人間の感情に依存する情報生命体である以上、彼らは餌としてこちらを残さないといけないのを我々は知っています。

悪魔が跋扈しようが、核戦争が起きようが、人類は残りますよ。

その過程で国家がどうなるかについては保証しかねますが」  
ところで閣下。

そんなお姿で大丈夫なんですか？

属性が大天使になっていますが？

「大丈夫だ。問題ない」

その後ろで宰相閣下が泣いているのですが。

多分眩しすぎて。

相変わらず不憫なので今度、ヨロシサン製薬の胃薬でも送ってあげよう。

「これらの戦訓からこの国の退魔組織を再編し、宮内省直属の退魔組織を立ち上げる事になります。

人員及び装備は……」

人員と装備 1で厳しい100で満額回答

結果 100

あ。

俺たちが居ない間に、あれだけ抵抗していた関東機関と宮内庁神霊班が組織内に取り込まれてやがる。

あげくに文部科学省監督下の宗教部隊も、連絡会議を通して指揮権を握っていないやがる。

後で聞いたが、俺たちが居ない間に某おねーちゃんの取り扱いでご下命がおりたとか。

たしかにこの国においてアマテラス様に逆らえるお方はそうはいないし、基本このおねーちゃんは日本人の味方である。

で、日本の宗教はアマテラス様のお姿を見た結果頭を垂れたという訳らしい。

関東機関については、内務省と大蔵省のバトルの結果、内務省の勝利となって完全に宮内省に移動する事になった。

政権交代で旧来の保守派政治家が力を失い、彼らと繋がっていた大蔵省も力を失い、治安維持にありとあらゆる裏組織をまとめないときつい内務省と組織防衛に危機感を持つがお荷物になっていた関東機関を差し出すことで手打ちとなった訳だ。

「また、自衛隊の退魔部隊と交流を持ち、協力して事態に対処する協定を……」  
「それについては異存はない」

石馬雪緒陸将補がさも当然という感じで頷く。

クーデター勢力の首魁の一人である彼女は、防衛省への組織改編で朝霞駐屯地司令から新設される猟科教導連隊司令に移動している。

獵科教導連隊の人員と装備 1で厳しい100で満額回答

結果 56

この部隊、元々クーデター勢力のやばい連中を飛ばす為に作られており、その駐屯地はなんとプリズマ・ゴーズ内。

あの異界廃棄物処理場じゃないんだが……。

「日米安保条約の情報提供の範囲内として、以下の発言を聞いておいてほしい。

先のテロリストのシージャック事件のテロリスト組織の捜査だが……」

ミレニアムの情報入手 1でほぼ無し100で一気に抜く

結果 27

ミレニアムの準備 1でまだ100で第二次あしか作戦

結果 85

「米・英・モサドの諜報組織が全力を出しても、その規模と時期の確定にまだ至っていない。」

それでも奴らは何かをすると思われる。

警戒をしてほしい」

各国の警戒意識 1でほぼ無し 100で警戒

結果 11

デグ様も苦勞しているらしい。

それを言わない程度には俺も憤みがあつた。

そのテロは奇襲が成功する形で始まる事になる。



【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その1

ルナ2。

ジオン公国との開戦間近というのにその船の評判はとても良くない。

マゼラン級戦艦『ムラクモ』。

ごく普通の戦艦なのだが、その評判の原因は艦長以下のクルーにある。

評判

9―30（叢雲・ステンノ・マシユ愛人設定のマイナス）――21

「おい。ニューソクデ准将だ」

「あの愛人三人連れて艦長になったってあれかよ……」

「詳しくは知らんが、政府高官のコネとか。」

見ろよ愛人もまた美人揃いで」

「わざわざ三人相手にするために、艦長室改造したらしいぞ」

「うわぁ……」

実に散々な言われ方であるが、そういう時は堂々としている方がマシである。

「ひどい言われようね」

実に楽しそうに囁くステンノを無視する。

彼女は参謀で階級は少佐。

「何を言われようとも、先輩の事は私達が一番理解しています！」

胸を弾ませて笑顔になるマシユは副長で階級は中佐。

で、実際にこの船を操る叢雲が艦長で大佐という訳だ。

そんな三人を連れて、ルナ2の戦艦ドックに入る。

「マゼラン級の最初期タイプか。」

機関の故障や通信関連にトラブルが続いて、近く解体する予定だったといういわくつ

きの船。

船籍はムラクモにしておいたから、名実ともにこれは俺の船なんだが……」

何しろ強引なコネでこういう事をしたので実に評判が良くない。

船の運用はこの四人でもなんとかできるが、この手の船は人間の手があればあるほど

継戦能力があがる方向にある。

「とりあえず、乗員を確保しておくか」

「あてはあるの？」

叢雲の質問に俺は笑う。

開戦間際だからこそ、そういう裏技が使える。

「軍の犯罪者たちに、ジオン公国から逃げてきた志願兵でなんとかするさ」

「乗っ取られませんか？」

マシユの確認に俺は啞う。

評判が最低なのを良いことに、女神に後付で呼んだ連中を使うことにした。

「ニューソクデ准将に敬礼！」

びしつと敬礼する強化人間という名前の牝モルモットたち。

そういう触れ込みで違法売春で捕まえた連中を搔つ攫ったのだが本物もいるかも知れない。

まあ、連邦の制服を着崩して無駄に色気のある連中である。

それを統括するのは、向こうでは対魔忍という娼婦であるオボロ大尉である。

「つまり、以前言っていた『監獄戦艦』を一年戦争でするの？」

ステンノの楽しそうな囁きに、俺は肩をすくめて答えた。

乗員 354人

軍犯罪者 26人

ジオン公国からの志願兵 304人

強化人間もどき（娼婦） 24人

士気 MAX100 17

練度 MAX100 38

うん。

これは前に出たら死ぬな。

という訳で、対策を取る。

「とりあえずオボロ大尉とその配下は股をひらいて、乗員全員と寝ろ」

艦内反乱対策である。

ジオン公国からの志願兵が戦場に出ることが大事であり、彼らが戦場で死んでくれるなら万々歳というのが連邦軍上層部の意思だろう。

それに巻き込まれて死にたくはないので、とりあえず下半身を抑えて反乱を回避する。

どうせ、艦の運営は叢雲とマシユがコンピューターを駆使してするので、邪魔するなというスタンスである。

「主砲はどうせ撃つても当たらん。」

それよりも機銃を増やす。

弾幕を展開することで、敵を近づけないようにする事が生存の道だ」

増設された連装機銃19—40（評判） 110

「うちにまわす機銃はないって」

「……まあそうなるか」

そんな事をしながら、宇宙世紀0079。

ついに一年戦争の幕が上がる。

一週間戦争で多くのサイドが壊滅し、ブリテイッシュ作戦の幕が上がる。

その阻止に俺の船であるムラクモもついに出陣する事になったのだ。

ルナ2から多くの艦船が出撃する。

地球に落下するコロニーを阻止するための全力出撃だ。

だが、俺はその連邦軍決死の努力が実らない事を最初から知っていた。

艦の位置

1 最前線

2 前線右翼

3 前線左翼

4 前線中央

5 本陣

6 後方

結果 6 後方

「畜生！あのジオンの新兵器を止めろ！

コロニーへの攻撃を邪魔しやがる!!」

「セイバーフィツシユは何をしている！

あれを防がせろ!!」

「トリアーエズ共々軒並み叩き落されたに決まっているだろう！」

「コロニーが阻止線を超える……火力をもっと集中させろ!!」

「駄目だ……落ちる……」

さすがに、コイツラ使えんという認識を連邦艦隊はちゃんと持っていたようで、後方で  
の参陣となった。

要するに、後方に配置したコロンプス級輸送船たちの護衛である。

ガンダムは何度も見て二次創作も楽しんだが、ヤラレ役の最たるものである艦船から

ブリテイッシュ作戦を眺めるのは恐怖でしかない。

通信は聞こえる範囲で連邦軍の悲鳴しか聞こえず、コロニーが阻止線を越えた事で連邦軍の心が完全に折れた。

前線では、MSザクによって連邦自慢の艦艇や航空機が溶けていったが、コロニーが割れた事によって軌道がそれた事も見えていた。

戦闘は終盤にかかろうとしていた。

連邦残存戦力

31%

ジオン残存戦力

81%

ジオンの行動

1 追撃

2 同上

3 同上

4 同上

5 同上

6 同上

7 同上

8 撤退

9 同上

10 熱烈歓迎

結果

8 撤退

「艦隊司令部から撤退命令よ。」

既に組織的な撤退は不能で、各艦各自の判断により撤退するようにとの事です」

ステンノが艦隊司令部からの通信を読み上げる。

この艦橋に居るのは俺、叢雲、ステンノ、マシユの四人しか居ない。

艦のコントロール叢雲が、火器管制はマシユ風こと浜風が対応し、ステンノは通信周りを受け持つことに。

俺？

座って責任をとるといふ仕事をしている最中である。

という訳で、その責任をとる事にしよう。



「艦はまだ転進させるなよ。」

信号弾を撃ち続ける。

味方はできる限り拾うんだ」

「了解。司令官」

「先輩。敵についてはどうしますか？」

叢雲の隣で火器コンソールを操作しているマシユ風に俺は肩をすくめて答えた。

もちろん怖いしやせ我慢だが、それが司令官の責任である。

「敵を落とすのではなく威嚇を目的としてくれ。」

もうジオンの方もここで戦う理由もないさ。

無理して俺たちの船を落とさないと思いたいね」

俺はそのままマイクを持ってスイッチをオンにした。

艦内だけでなく艦外の全通信回線に聞こえるように。

さあ。司令官の仕事だ。

「私は戦艦『ムラクモ』に座乗しているニューソクデ准将だ。」

現在連邦軍はコロニー落下阻止失敗という敗北に伴い、戦力を各自の判断でルナ2に撤退させている最中である。

現状、この最前線に上位司令部が存在しないので、階級に伴い私が臨時の指揮をとる」

いったんマイクを切って一息つく。

作品は違うが、気分は『銀英伝』アスターテ会戦のヤン准将のごとし。

「我々はこの戦いでは負けたが、まだ戦争に負けた訳ではない！

国力はこっちの方が上である！

ここで貴重な人材が残れば、次戦・次次戦で必ず勝てる！！

だから諸君！

なんとしても生き残れ！！

この『ムラクモ』殿を務める」

脱出してゆく連邦艦艇を尻目に、最後まで主砲をジオン艦隊に向けるムラクモ。

逃げる船に殿を務める事を告げて、退路上に仁王立ちするマゼランに対して、ジオンのMSは近づくことはせずに撤退に入る。

艦内反乱判定

17+24||41以上で反乱発生

結果38

「准将。

オボロ大尉です。

艦内士気は乱れに乱れていますが、反乱を起こす輩は今の所見当たりません」

「はいくろう。」

そのまま連中を骨抜きにしてしまえ」

万一に備えて、指揮をとっている艦橋には俺たち四人しか入っていない上にドアを封鎖していた。

それも、向こうの撤退に救われて化けの皮が剥がれずに済んだという所だろう。

「あらあら残念。」

襲ってこなかったわね」

本当に残念そうにステンノが言う。

彼女は艦橋から目視で敵を見ていた。

その気になれば、魅了から宝具による即死でMSを止めようとしたのだろう。

「何で奴ら襲ってこなかったのかしら？」

撤退しつつあるジオン軍を確認しつつ回頭を始めた叢雲の安堵のため息と共に  
質問に、俺は地球にできた巨大クレーターを眺めながら答える。

たしかに、こんな惨状だと神様連中は大量の転生者を送り込むわなと心のなかでぼやきながら。

「宇宙空間は物理と計算が全てを決める世界だ。

あのまま襲っていれば、ジオンに帰るだけの燃料と酸素が多分足りなくなっただろうよ」

連邦の巨艦巨砲主義も理由がないわけがないのだ。

何しろ宇宙空間というのは、あまりにも人間に厳しすぎる。

「先輩。

救難信号の信号弾が上がっています！」

マシユが信号弾を確認して報告する。

思った以上に見捨てられた連中が多かった。

「逃げ遅れた残存艦艇に集まれと信号を送り続ける。

救助活動を行いながらジオンの撤退を確認した後、我々も撤退する」

残存救助艦艇

マゼラン級3隻

サラミス級15隻

セイバーフィッシュ戦闘機22機

トリアーエズ戦闘機29機

「ランチはできる限り出せ！」

こつちには収納余力はまだ十二分にある！」

「セイバーフィッシュとトリアーエズは放棄して乗員だけ救助しろ！」

パイロットの方が大事だ!!」

「損傷艦で機関が無事な奴はルナ2近辺に着くように軌道計算して送り出せ。

危ない船は放棄して構わんが、使えそうなものは全部拾って帰るぞ」

先程までと違って、艦橋には二十数人近い人員がてきぱきと働いていた。

彼らは大破した艦から避難した将兵であり、臨時指揮という形で指揮下に入れて仕事を手伝ってもらったのである。

それぐらい、敗走というのは混乱していた。

「臨時指令。

助けられる連中は大体助けられました。

そろそろ我々も撤退を」

ガデイ・キンゼー中佐。

Zの登場人物だが、ここで出会えるとは思わなかった。

マゼラン級戦艦とサラミス級巡洋艦は無傷なのはなく、どれも中破以上の損害判定を受けていた。

そのため、無傷な俺の船に乗って指揮をとという段階でこの船の惨状を目にしたわけだ。

もちろん、全権を与えて任せる事にした。

「わかった。

すまないが我々も休ませてもらおう。

何かあつたら連絡を」

俺と叢雲とマシユとステンノが艦橋を出る。

ろくでもない噂が蔓延しているはずなのだが、ガディ中佐を含めた艦橋の全員が俺たちに対して敬礼して見送ったのである。

「貴様ら！

さっさと服を着ないか!!

ここは戦場だぞ!

軍法会議も覚悟しておくんだな!!」

艦長室に戻る途中に怒声が聞こえる。

見ると、乗り込んできた憲兵がバカ騒ぎをお開きにしようとしていた。

「何をしているのかね？」

「これは准将閣下！」

「貴様らも敬礼せんか!!」

ナカツハ・ナカト大尉。

彼も0083の登場人物だかこういう所で出会うとはと人の縁に少し思いを抱く。

「ああ。構わない。」

負け戦で生き残ったんだ。

馬鹿騒ぎも大目に見たまえ」

慌てて服を着ようとする将兵と違って元職の娼婦たちは堂々と肌を隠すだけ。

それがおかしくて俺は苦笑する。

「しかし……」

「とはいえだ。大尉。」

私もこれから彼女たちとお楽しみな訳でね。

私も軍法会議にかけるかね？

では。失礼。

あまり大尉を困らせないように」

絶句するナカツハ・ナカト大尉と歓声を上げる将兵たちを尻目に俺たちは艦長室に入

る。

そこからルナ2到着まで出る事はなかった。

こうして、俺の船は最初の戦いを乗り切った。

そして、最大の死亡フラグであるルウム戦役が幕が上がる。

連邦首脳部の俺たちへの評価

— 21 — 10 (オボロ大尉の分) + 70 + 18 (艦艇救助分) || 57



【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その1  
一般将兵 s i d e

「おい。ニューソクデ准将だ」

「あの愛人三人連れて艦長になったってあれかよ……」

「詳しくは知らんが、政府高官のコネとか。」

見ろよ愛人もまた美人揃いで」

「わざわざ三人相手にするために、艦長室改造したらしいぞ」

「うわぁ……」

開戦前のルナ2は地球連邦軍の最大の宇宙軍事拠点であるが、各サイドに駐留艦隊が居る時点では辺境基地という印象があったのは事実である。

そのために、連邦軍本部があるジャブローに居る連中から見て『島流し』扱いされるのもある意味当然とも言えるだろう。

そんなルナ2に愛人を連れてやってきたのがニューソクデ准将。

連邦政府に強力なコネがあり、戦艦に乗りたいたいからとコネ人事でやってきたという変わり者である。

「マゼラン級の最初期タイプか。」

機関の故障や通信関連にトラブルが続いて、近く解体する予定だったといういわくつきの船。

船籍はムラクモにしておいたから、名実ともにこれは俺の船なんだが……」

そんな人間に渡す戦艦なんてある訳もなく。

ジオン公国との風雲急を告げる戦況で解体は止められたが誰も乗りたいなんて言わない船を渡された准将は、愛人を連れ実に来たからこそ、格好のネタに見て笑った。

もちろん、話題のさしてない軍事基地だからこそ、格好のネタになった。

こんな会話があちこちでされる事になる。

「おい。知っているか？」

あのムラクモって名づけられた船の乗員、懲罰兵とジオンからの志願兵らしいぞ」

「引き取り手のない連中をニューソクデ准将が全部引き取ったらしい」

「あの船には乗りたくないな」

「ははははは……」

「大変だ！」

TVつけてみる!!

ジオンが連邦に対して宣戦布告した!!」

彼らがニューソクで准将の評価を変える前の話である。

そして、一週間戦争という惨劇が幕を開けた。

「整列！」

准将閣下に敬礼!!」

巨大な宇宙戦艦ともなると、その乗員は本来ならば10000人を超える。

にも関わらず、この船の前で敬礼している人数は354人しか居なかった。

内訳は、軍犯罪者が26人、ジオンからの志願兵304人、強化人間という設定で准

将が強引に連れ込んだ娼婦が24人である。

敬礼はともかく、およそ軍艦というよりも海賊船という雰囲気だったとドックで物資

搬入を行っていた兵はあの時のことを語った。

「あれで戦争に行くのかと唾然としましたよ。」

そりゃ、コロニーが地球に落ちるかもという瀬戸際だったからあんな船でも駆り出さないといけなかったのは分かりますが、恩赦につられた犯罪者は不敵な笑みを隠さない

し、ジオンから寝返った連中は敵意すら俺たちに見せていませんからね。

あれは戻ってこないなとみんな話していましたよ。

ただあの准将、定員通りの物資をあつめた船に乗せるようにジャブローの命令書を見せてつけて強要したんですよ。

定員の1/3しか乗らないのに妙だなど思っていましたけど、あれがああなるとは思っていませんでしたね」

当時、乗り込んだ軍犯罪者に話を聞くことができた。

戦後恩赦を出された彼は、今は軍を抜けて第二の人生をサイド7で送っていた。

「俺は元憲兵で、当時物資の横流しを見逃して捕まって牢にぶち込まれていたんだが、あの准将が出してくれて最初に俺たちに言った事って何だったと思います？」

『何もなくていい。船が出て着くまで部屋でおとなしくしてろ。それで罪を帳消しにしてやる』ときたもんだ。

何か裏があると即座にピンとききましたよ。

で、乗って見たらほとんどがジオンの志願兵で、ジオンの破竹の勢いに艦を奪って寝返ろうとか堂々と言う始末。

え？その話に乗らなかつたのかつて？

俺の実家、サイド2だったんですよ。乗れるわけじゃないですか。

まあ、准将の方もそれを察して俺たちを釈放してくれたんだから文句は言えませんがね」

ジオンからの志願兵にも話を聞くことができた。

彼も軍を抜け、グラナダにて第二の人生を歩んでいる。

「実際、開戦初頭のジオンの破竹の進撃で寝返って戦艦を手土産にというのは話されていきましたよ。

それを実行しなかったのは、出港後すぐの准将公認の乱痴気騒ぎのせいでしょうな。

一週間戦争で避難した娼婦たちを雇って乗せたと聞いた時はこの女好きがと思ったのですが、彼女たちを好きに使っていいとなるとそんな企み吹っ飛んでしまいましたよ。

何しろ、連邦に亡命してあの惨劇だ。

正直、准将が連れ出してくれなかったら、俺たちがルナ2内でリンチにあっていたかもしれません。

あと、犯罪者連中が艦橋周りの通路を監視していたから、大挙して行く事ができないのも大きかったですね。

悪さをしないように女をあてがって、それでもやるかもしれない連中の為に悪党に見張らせる。

マフィアの手口ですよ。あれは」

娼婦の一人に話を聞くことができた。

彼女も軍を退役して、地球で第二の人生を歩んでいる。

「軍と女つてのは切つても切り離せないのだけど、あの將軍さんは頭ぶつ飛んでいたわね。

一人一人に札束握らせて私たちを買った上に、乗員全員と寝ろときたんだから。

強化人間……だっけ？

なんか軍の機密云々で、私らに軍籍と准尉の階級をくれてね。

私ら連邦軍の制服の着方すらわからなかったし、あの航海ではあの後制服を着たのは撤退前だったから……撤退後？

ああ。コロニー落としの阻止失敗で撤退する際に大破で動けなくなった船の乗員が大量に乗り込んできてね。

まっとうな士官様にそりや怒られてパーティーはおしまいになったという訳。けど、結局あの將軍私らを戦争終了まで雇い続けたのよね。

おかげでそこその箔と結構なお金をもって第二の人生をという訳」

ブリテイッシュ作戦。

連邦軍本部ジャブローにコロニーを落とすというこの作戦は、連邦軍必死の反撃によつて阻止されたがコロニーが地球に落ちることは止められなかった。

そして、作戦終了後からこの船の評価が一変する。

「コロニーの阻止限界線を越えた瞬間から戦闘そのものが終息に移っていました。

ジオン軍は帰るための燃料と酸素を考えないといけなかつたし、連邦軍はコロニー阻止ができずに心が折れていた。

あの船。『ムラクモ』が活躍したのはあの後からですよ。

あの船、後方に居たというのもありますが、作戦終了後に算を乱して逃げ出した連邦艦隊と違つて最後まで残つて、指揮を掌握し続けたんです。

俺はあの時、パイロットとしてトリアーエズに乗っていたんですが、母艦のコロンブスは既に逃げ出して帰るあてもなくて途方に暮れていたんですよ。

にもかかわらず、あの船堂々と信号弾を打つて存在を知らせてくれたのだからありがたかつたですね。

機体はその時に捨てることになりましたが、こうして生きて帰る事ができた。

まあ、帰る際に乗せてもらった『ムラクモ』の風紀にちよつと驚いたのは内緒ですがね」

「私が乗艦していた船はサラミス級巡洋艦だったのですが、艦橋がザクのバズーカにやられて吹き飛んでしまつて、戻れるかどうか怪しかったです。

困つたのが、艦橋が吹き飛んだ事で艦内酸素が一気になくなつて、ルナ2まで戻れそうもないという事でしたね。

そんな時、残つてくれた『ムラクモ』が定数を満たしていないというのがどれほどありがたかつた事か。

ええ。ランチを使って生き残つた乗員は全員『ムラクモ』に避難させたんです。

その上でサラミスはルナ2周辺に着くように計算して自動操縦させたのですから、あの准将ただものじゃないですよ。

まあ、『ムラクモ』艦内の惨状を知らずに移ってきた士官連中に艦を預けて愛人共々部屋に引つ込んだのはオフレコでお願いしますよ。

今や、あの人は英雄なのですから」

「俺はジオン軍パイロットとしてザクに乗つてあの作戦に参加していました。



あの惨劇については勘弁してください。

まだ、色々あつて語りたくないの……

ああ。あの船ですか？

覚えていますよ。

すべてが終わつた、いや、手遅れになつたと言うべきですか。

逃げ出す連邦艦隊とは別に、今だ艦首をこちらに向けてビームを撃つていたんですから。

あの戦い、連邦艦艇はほとんどがコロニーに向けてその砲火を向けていました。

けれどもあの船だけは、全てが手遅れになつた後からは我々に向けてビームを撃つていたんですよ。

狙おうと思えば、狙えるだけの燃料と酸素は残つていたのですが、あの船は手を出さず、たらずい船だとなぜか思いましたね。

あの時残つていた他のパイロットも同じことを言つたのを覚えています。

そうそう。これも話しておきましょう。

あの船を見た時、なぜか女を思い浮かべたんですよ。

顔はよく覚えていないのですが、なんだかその笑顔を見ると死ぬ。そんな感じがして

……これも他のパイロットでも同じことを言つていたんですよ……」

こうして、英雄ニユースクデ准将は作られた。

——あるジャーナリストの記述より——

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その2

ルウム戦役までおよそ一週間しかない。

これで生き残れてるとは到底思わないので、俺は迷うことなく奥の手を差し出した。  
「ムラクモ。お返しします」

今の評価 57 以下で成功

結果50

「よく司令部が応じてくれたわね」

叢雲が呆れ声でぼやく。

返却に伴い艦籍も戻したので、もうあの船はムラクモでなく、別の船である。

なお、帰還時に換気しきれないイカ臭さですごく有名になったが、そこは我慢してもらうとしよう。

「で、次の任務は何になるのでしょうか？」

マシユの質問に俺は命令書をひらひらさせる。

今の連邦には、将官を遊ばせておける余裕はない。

「帰還時に一緒に帰ってきた連中の指揮権をもらった。修理して来たるべきジオンとの決戦に備えるのだと」

マゼラン

中破3隻

サラミス

中破2隻 大破13隻

帰ってきた連中の船をチエックすると、この有様である。

マゼランはサラミスより船体が大きく、対空火器が多く積まれていた事から中破で持ちこたえていた。

一方サラミスは、ザクのバズーカに耐えられなかったらしく、その殆どが大破判定となった。

中には、艦橋がぶっ飛んだが機関が生きていて宇宙服を着てここに帰ってきた船も。という訳で、ルナ2のドックを一つ借りて船を修理してゆく。

ルウム戦役が始まるのが15日。

それに出撃するからルナ2を出るのは遅くて14日。

編成なりなんなりで完成していないといけないのは13日である。

「大破の修理は諦めて、部品取りに使う。」

「まずはサラミスを修理する」

サラミス1

ダメージ50%—修理16—大破部品13隻⇨ダメージ21%

サラミス2

ダメージ50%—修理30—大破部品13隻⇨ダメージ7%

かかった日程3日

「修理予定の船を並べろ！」

部品取りの大破艦は宙に浮かせるんだ！

アンカーで固定だけはしっかりしておけよ!!」

「まずは機関のチェックだ！」

システム周りはその後で！

使えるボールは全部持って来い!!」

「物資搬入は同時並行して行うぞ！」

いつジオンの奴らが攻めて来るか分からないんだからな!!  
「急げ!」

他の艦の修理を圧迫するのでルナ2のクレーターを使つての大修理作業。

ここで大活躍したのがボールというかスペースポッドである。

もちろん砲なんてついていない。

これが急増兵器として戦場に投入されると知っているだけに、感慨もまた……

連邦の工廠能力の凄さを思い知る。

大量生産されたブロック工法というのもあるだろうが、二隻のサラミスが無事に生き

返る。

次は残っているマゼランであるが、スパツと三隻復旧は諦める。

「二隻を部品取りにして、二隻復旧を目指す。

それに合わせて、機銃とかも増設しておいてくれ」

マゼラン 1

ダメージ 50%—修理 9—大破部品 1 3 隻—マゼラン部品取り 2 5 〓ダメージ 3%

マゼラン 2

ダメージ 50%—修理 3 1—大破部品 1 3 隻—マゼラン部品取り 2 5 〓ダメージ 0

十機銃火力増設（19）

かかった日数2日

マゼラン一隻を部品取りに使った事で、この二隻の復旧に成功する。

損傷ブロックをまるごと取り替えることに成功したのだ。

その結果、マゼラン2の方は完全修理だけでなくサラミスやマゼランの機銃増設の改造工事まで行えた。

こいつが第二の『ムラクモ』になる予定である。

乗員の士気と練度

士気

評価57+6+前の乗艦連中17||80

練度

評価57+13+前の乗艦連中38||108

強化人間（娼婦）増加

24人+16人||40人

「ニューソクデ提督に敬礼！」

まだ艦が修理中なのでドッグ内の空きスペースを使って行われた戦隊結成式典。打って変わって明らかに士気と練度が高い。

種を明かせば簡単で、一緒に撤退した連中の部品取りした将兵を引き取ったのである。

連邦正規兵が各艦に配置されたことで、やっと船として反乱の心配をしなくてよくなったのは、何と素敵なことだろうか。

あ。ルナ2に逃れた避難民の中に娼婦が居たので引き取っておいた。旗艦のムラクモに集中させて連絡艇で使わせる予定である。

その場所だけ明らかに雰囲気が違うのがまた……

#### 配属艦隊

1 レビル艦隊

2 レビル艦隊

3 レビル艦隊

4 ティアンム艦隊

5 ティアンム艦隊



## 6 ルナ2 駐留

## 1 レビル艦隊

まあ、戦艦2隻、巡洋艦2隻の戦隊を編成したら、そりゃレビル本隊に組み込まれるわな。

この特大死亡フラグをどう回避するべきか……

「あら？」

何か手はあるのかしら？」

ステンの声に俺はため息をつく。

あまりしたくはないのだが、こうなったら仕方ない。

「一番損傷の激しいサラミスがあつたら？」

あれを無人操縦にして囷にする」

ミノフスキー粒子はレーザー等が使えなくなる謎粒子なのだが、その結果有視界戦鬪に追い込まれてMSに艦船が負ける結果になる。

逆に言えば、MSパイロットたちも彼らの目を頼りにする必要がある訳だ。

そういう所で、彼らの意図しない時に彼らが攻撃していなかったサラミスが派手に爆発したらどうなる？

「あとは、叢雲の操艦能力とマシユ風の対空カットインが頼りさ」

有視界戦闘というか夜戦をお家芸とする大日本帝国海軍の駆逐艦娘。

おそらく、対MS戦に最も特化している彼女たちの対空カットインでどれだけザクが落とせるかが勝負の鍵である。

「あらあら？」

私は役立たず？」

「まさか。」

君は最高の女神だよ。

有視界戦闘だから、いやでもMSパイロットは君を目に入れる。

その時に彼らを魅了してやれ」

「……あんまり、働きたくはないんだけど♪」

そんな事を言いながら嬉しそうなステンノであった。

艦の位置

1 最前線

2 前線右翼

3 前線左翼

4 前線中央

5 本陣

6 後方

結果 5 本陣

配置されたのはレベル艦隊本陣である。

おそらく、艦船修理等で優遇されたのだろうが、こちらからすれば特大の死亡フラグが立ち続ける訳で。

今思ったが、これは『ORIGIN』なのか『IGLOO』なのかどちらなのだろう？

1 ORIGIN

2 IGLOO

1 ORIGIN

旗艦アナンケを見た結果、どうやらORIGINらしい。  
となれば、いくつか手がある。

「僚艦のマゼランとサラミスに伝令。

責任は私が取る、以下の想定に備えて……」

0079 1月27日 ルウム

「第5戦艦戦隊にダメージです！」

シヤアの突貫。

それがルウムの幕開けとなる。

ならば、こちらも開幕の鐘を鳴らそう。

「主砲発射用意！」

目標前方!!

対艦ミサイルも全弾発射しろ!!」

「し、しかし、まだ旗艦が発砲……」

「責任は私が取る！」

主砲！撃てえ!!」

俺の声に叢雲が反応する。

まわりのスタッフはついていけないが、現在死亡フラグ真っ只中なのを知っているのは俺たちだけしかない以上、独断専行しても生き残る。

……どうせ、ここの敗戦でうやむやになるだろうし。

「私の前を遮る愚か者め。沈めっ！」

有視界戦闘で敵艦が向こうから突っ込んでくる。

つまり、撃てば当たるし、その練度を叢雲は持っている。

闇に隠れていた先頭のムサイ一隻が見事に貫かれて爆散。爆沈する。

「機関最大戦速！」

敵艦隊に突っ込め!!

本戦隊はそのまま離脱する!!

ここで踏ん張っても、次のMSに艦艇が粉碎される。

負けフラグでいくら頑張っても負けである。

だから、前方に退路を開いてさっさと逃げるに限る。

ここで、正面火力が有利な連邦艦艇の強さが発揮される。

叢雲のムサイ撃沈数9隻。

僚艦マゼランのムサイ撃沈数1隻。

ドズル中将の生死

1 生存

2 死亡

結果2 死亡

「敵艦隊散開してゆきます！」

「敵旗艦ワルキューレの撃沈を確認!!」

敵艦隊混乱中!!」

「他の連邦艦の射撃始まりました!!!」

そりゃ、指揮官先頭で突っ込んでくるんだから先頭から十隻も沈めれば艦隊は混乱するわな。

旗艦の撃沈でジオン艦隊が混乱する中、そのまま速度を上げてレビル艦隊からも離脱する。

旗艦撃沈で一気に勝負を決めようとした連邦艦隊にMS隊が襲いかかっているのが見えた。

連邦艦隊

62 + ドズル戦死 100 || 162

ジオン艦隊

73 + 276 | ドズル戦死 100 || 249

戦力比

4 : 5

結果

- 1 ジオン勝利 レビル艦隊壊滅 レビル将軍捕虜
  - 2 同上
  - 3 同上
  - 4 ジオン勝利 レビル艦隊半壊
  - 5 ジオン勝利 レビル艦隊撤退
  - 6 連邦勝利 ジオン艦隊撤退
  - 7 同上
  - 9 連邦勝利 ジオン艦隊壊滅 MS隊壊滅
  - 10 熱烈歓迎
- 結果 3 ジオン勝利 レビル艦隊壊滅 レビル将軍捕虜

「おお……溶けてる溶けてる……」

「れ、連邦艦隊が……」

俺のぼやきにブリッジクルーの誰かのつぶやきが大きく響いた。

あのタイミングが唯一の脱出チャンスだった。

勝てるかとジオン艦隊殲滅に動いた連邦艦隊は、その後逆襲に怒り狂ったジオンMS隊の猛攻を受けることになったのである。

赤い彗星や黒い三連星をはじめとするエースパイロットたちの猛攻を凌ぐ力は、レビル艦隊にはなく、最後は艦隊とMSの挟撃によってレビル艦隊は壊滅してゆく。

「こつちにもMS隊が向かってきます！」

数は10機!!」

赤い彗星 1居る2居ない

結果 2居ない

黒い三連星 1居る2居ない

結果 2居ない

唯一脱出しかかっている戦隊の上、ドズル中將を討ち取った武勲艦である。

出せる最大戦力で潰しに来たのだろう。

赤い彗星や黒い三連星はレビル艦隊壊滅で弾も燃料も使い切ったのか来てはいない。

それもこちらの想定の上だった。

「お相手しましょう。来なさい！」

マシユ風乙改

対空カッターイン固定ボーナス5 + マゼラン対空砲火3 + サラミス対空砲火2 + サラ



ミス対空砲火1||10 全機撃退

何もMSを撃墜する必要はない。

濃厚な弾幕を張って、相手を近づかせなければこっちは勝利なのだ。

既に全力で遁走に入っているのでジオン艦隊はこちらに追いつけず、MS隊は勝っているからここで無理して戦功より命を失うのが惜しい。

そして、それにつけこむマシユ風の対空カットイン。

ニュータイプかこいつと言わんばかりに艦艇の対空砲火でMSに当ててくる。

こうして、おれたちはルウムから生き残った。

連邦首脳部の俺たちへの評価

57-100 (命令無視) + 200 (ドズル旗艦撃沈) + 33 || 190

「ニューソクデ君。

君には色々言いたいことがあるが、お互いあの戦場から生き残った事を神に感謝しよう」

レビル将軍が脱走してルナ2に帰ってきた時、ワッケイン少将と共に出迎えたのだが、レビル将軍の視線の冷たいことと言ったら。

とはいえ、ドブル中將を討ち取って指揮下の戦隊を無事にルナ2に帰還させたので、政治的英雄として連邦は俺を取り扱った。

少將に昇進し、命令無視と離脱の件は読みどおり有耶無耶にされたのである。

「で、どこまで読んでいたんです？」

ムラクモの艦長室。

俺の上で裸のオボロ大尉が尋ねる。

彼女もルウムの報奨として昇進が決まっているので、もうすぐ少佐である。

「まさか。」

生き残るのに必死だっただけさ」

「本当かしら？」

俺の隣で何も着ていないステンノが意地悪そうな笑みを浮かべる。

同じく裸の叢雲がマシユと一緒にさも当然のような声で言い切る。

「こいつ、絶対いきあたりばったりよ。」

あの敵艦隊の間を突貫するの、肝が冷えたんだから！」

「けど、先輩は叢雲さんを信じていたから命じたんですよ」

「…そんなの当たり前じゃない！」

壁のモニターではレビル将軍が『ジオンに兵なし』の演説を行っている。

これで戦場は、地上に、重力戦線に移動するだろう。

つまり、しばらくはここで彼女たち相手に爛れた日々を過ごせるといふ訳だ。

そんな事を考えながら、俺は彼女たちを貪り、南極条約の締結を耳にする事になる。

## 【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その2 一般将兵 side

英雄は負け戦の時にこそ作られる。

その言葉の通りならば、最後まで残って敗残兵を救助し続けたニューソクデ准将はたしかに英雄だった。

「あの人が帰ってきた時、司令部では壊滅した艦隊の再編に頭を抱えていました。

宇宙空間の戦闘は、艦の撃沈⇨乗員の死亡みtainなもので、この一週間戦争でどれだけの将兵の命が失われたか考えるだけで吐きそうになりましたよ。

それを中大破とはいえ、マゼラン3隻とサラミス15隻を、もつと言えばそこに乗っていた乗員を連れ帰ってくれた事がどれだけの功績なのかは司令部の誰もが嫌でも理解してましたよ。

とはいえ、准将が帰還して船を司令部に返した時、艦内のイカ臭さだけは文句を言いたくなりましたがね」

「ルウムにジオン軍が襲つてくるというのは分かっていたので、艦隊の再編は無事な艦を中心にまとめたおし、そこから修理が終わった船に人員を再配置するという流れです。

ニューソクデ提督の優れていた所は、連邦艦艇のブロック工法を理解してニコイチ修理でとにかくマゼラン2隻とサラミス2隻を前線に投入する事に成功した所でしょうね。

何しろ、彼の手元にはブリティッシュ作戦撤退時に救助した将兵たちがまだ残っていたのも大きい。

負傷者や転属を含めても臨時編成扱いだったニューソクデ戦隊ですが、司令部は取り上げるのをためらった。

当人は乗艦を返上して戦力も提供して、コネ人事の義理は果たしたつもりなのですが、助けられた将兵からすれば助けてくれた准将から戦力を取り上げるように見えるので、相当突上げがあつたらしいですよ。

おまけに英雄に祭り上げたものだから、彼の留守番は許されない空気になっていた。レビル將軍の本隊に配備したのは、そういう背景があつたのですが……」

「ニューソクデ提督は一週間戦争とブリティッシュ作戦から、MSの優位とルウムでの敗北を予期していた節があります。

彼の旗艦であるムラクモは対MS用に大量に機銃が増備され、損傷が残ったサラミス一隻は無人艦として運用するという徹底ぶりでした。

何しろ彼の手元にはそのサラミスに乗せてくれとブリティッシュ作戦時に助けられた将兵が大挙して押し寄せたのに、ついにそれを断ったのですから。

後に形式的に開かれた査問会で、あの無人艦は『敗走時に爆破させて追ってくるMSの邪魔をする』と答えており、査問委員たちを絶句させています。

後に大将になったレビル將軍との確執は仕方ないとはいえ、その見識をもっと司令部に伝えてくれたら……多分鼻で笑われたのでしょね」

ニューソクデ提督の功績における唯一の傷であり、英雄ニューソクデ提督誕生の切欠であるルウム会戦。

その行動においては過去になった今でも賛否が分かれるものとなっている。

彼が味方を見捨てて逃亡したのは事実であるが、その過程で正面から奇襲をしようとしたジオン艦隊に痛撃を与え、敵将ドズル・ザビ中將を討ち取ったのも事実である。

そして、レビル艦隊が壊滅した中でただ一戦隊だけ無傷で生還したのも事実なのだ。

「あの時、私はムラクモの砲術スタッフとしてムラクモに乗っていましたが、射撃等は自動化されて艦長の直接照準だったんです。

なんでそんな事と思ったのですが、あのルウムを体験した身としてオカルトな話になります。多分知っていたんじゃないかなと思ってしまいますよ。

あの船、ムラクモはニコイチ整備で復旧したマゼラン級戦艦なんです。艦橋の指揮コンソールに全システムが集中するように改造が施されていたんです。

とにかく、ムラクモ艦長とマシユ副長の艦運営能力がとびぬけていましたね。

あの二人、肉眼で見て敵艦やMSに当てたんですよ。

試しに聞いたのですが『10000メートルぐらいなら見える』とか。

戦後のある時期、あの二人にニュータイプ疑惑が出たらしいですが、どうなんでしょうね？」

「第5戦艦戦隊にダメージです！」

「主砲発射用意！」

目標前方!!

対艦ミサイルも全弾発射しろ!!」

「し、しかし、まだ旗艦が発砲……」

「責任は私が取る！」

主砲！撃てえ!!」

「私の前を遮る愚か者め。沈めっ！」

「機関最大戦速！」

敵艦隊に突っ込め!!

本戦隊はそのまま離脱する!!」

後に開かれた査問会に提出された艦橋映像である。

ニューソクデ提督、次いで査問会に出たムラクモ艦長の「見えていたのに何で撃たないんです？」の一言に、同じ映像を見て誰一人近づいていたジオン艦を発見できなかった査問委員はあの時の様子を語ってくれた。

「形式だけの査問会ですよ。

ルウムでレビル艦隊が壊滅した中でどうしても英雄を作らないといけなかった。

そんな中で、敵将を討ち取って指揮戦隊を無傷で生還させた彼を軍法会議にかけることは最初から無理だと分かっていたからですね。



ドズル・ザビを討った事を誇るならば、どうしても討った将であるニューソクデ提督を持ち上げないといけなかった。

今だから明かしますが、ニューソクデ提督側からは左遷を条件に手打ちをと持ち掛けられていたのですが、ジャブローも連邦政府も英雄が必要だった。

まさかレビル将軍がジオンから脱出してあんな演説をするなんてわからないじゃないですか。

対ジオン戦の総司令官となったレビル将軍と彼を見捨てたニューソクデ提督の確執はあそこから始まったと思っっていますが、ついに彼はその確執を表に出さずに戦争を終わらせることに成功しました。

軍官僚としては色々と言いたいことはありますが、個人としては尊敬しますよ。最も、身近に居てほしくはないとも思いますけどね」

「ルウムにおけるニューソクデ提督の功績は見映えのするドズル・ザビ座乗のワルキューレ撃沈をあげる人が多いのですが、本当に凄いのは、あの戦いで対MS防衛戦術を構築し完成させた所にあるんです。

その後の戦いで連邦艦艇の対MSによる撃沈数が目に見えて低下したのがその証拠でしょう。

弾幕の構築と速力を利用した離脱はその後の対MS戦術で大きな効果をあげたので  
す。

どういう事かというと、艦船とMSでは稼働時間が違う。そして、移動だけでなく方向転換にも推力が必要になるという事は、敵を近づけないだけでなく、敵に無駄な移動をさせる事で逃げられる距離を稼げるといふ事を意味します。

このルウム会戦でニューソクデ戦隊の対MS戦闘を指揮したマシユ副長は、MSに直接当たってののではなく、当たるといふような射線を見せることで敵MSに回避を強要したと答えています。

実際、敵はニューソクデ戦隊追撃の為に10機ものMSを向けていますが、敵が回避すればそれだけ推力を失い、こちらに追いつけなくなつて追撃をあきらめていきました。

このMSの推進剤に目をつけた対MS戦闘はこちらのMSができるまで連邦艦隊の戦術として有効に機能しました。

彼の戦争序盤の功績はこっちの方が大きいと思つてますよ」

「ルウム会戦後のルナ2基地の空気の悪さといつたら最悪なんてもんじゃないですよ。」

席次ではティアンム中将が最上位で、基地司令のワツケイン少将の下にニューソクデ提督が来るのですから。

英雄が欲しかったジャブローが査問会の最中に彼を少将に昇進させたのがその証拠です。

ティアンム艦隊からすれば、『何で逃げた』と罵倒したかった所でしようが、ブリティッシュ作戦で彼に助けられた将兵がルナ2に残っていた事と、査問会の過程で提出されたニューソクデ戦隊が撮影したMS戦の映像からその声が消えるのは早かったですね。

ただ、わだかまりが消える訳もないから基地内では何とも言えない空気が漂っていますよ。

あと、あの提督の女好きから風紀が乱れて憲兵からは蛇蝎のごとく嫌われていましたね。

特に違法娼婦を見つけてしよつ引いたらニューソクデ戦隊のオボロ少佐が迎えに来るとというのがザラで、しかもそいつらがとびきりの上玉ばかり、オボロ少佐もニューソクデ提督の愛人という噂だったのですが、大体ルナ2の風俗絡みのトラブルはあの人の所に行くんですよ。

上玉の娼婦を抱いて、提督と兄弟になったなんて下世話な笑い話を酒場でしたのが懐

かしいですよ。

たしか小隊規模で全員を准尉待遇で戦時任官したとかで、ニューソクデ提督が歩くと前後左右をムラクモ大佐、マシユ中佐、ステンノ少佐、オボロ少佐が囲んでそいつらが色気をだしてついていくんですよ。

あれは男としてうらやましいと……女房にはこの会話言わないでくださいよ。

あの行列の中に居たんですよ。うちの女房。

戦争が終わった後に告白したらOKもらえて、足を洗って今は五人の子供の母親やっていますよ」

英雄となったニューソクデ提督だが、ジオンの重力戦線形成に伴ってしばらく表に出なくなる。

とはいえ、それは彼の飛躍の前の少しの休息でしかなかった。

——あるジャーナリストの記述より——

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その3

ジオンの地球侵攻 175+300

連邦の抵抗 42

結果 433

300を史実基準として+133

1 マドラス

2 トリントン

結果 2 トリントン

「トリントン基地が落ちたそうよ」

叢雲の報告に俺は肩をすくめただけで返事をした。

ルウムでドズル・ザビを討った事で、ジオンの指揮系統がキシリア・ザビの元に一本化されたのだ。

その為、ドズルのソロモンと宇宙軍の戦力すらつき込んでジオンは地球の過半を制圧

することとなった。

だが、それでもジオンにとって地球は広がったのだ。

連邦MS開発計画 100でプロトタイプガンダム

結果 38%

「で、我らのMS開発計画は……と……」

その開発計画をルナ2の工廠に見に来たのだ。

その対MS兵器が現在生産に入っていた。

「ボール……ねえ

役に立つの？これ？」

「盾にはなるさ」

ステンノのジト目に俺は肩をすくめたのみ。

棺桶と言われようが、これも一年戦争では対MS戦で活躍した兵器の一つである事は

間違いない。

コイツラが居ること宇宙作業の効率上がるし、的が増えるので結果的に艦船が助

かるのだ。

もつとも、この棺桶に戦争英雄としてある程度の改造はしてやったのだが。

「頭のキャノン砲の他に、ついているアームの一つにシールドを持たせ、もう一つには敵MSザクと同じマシンガンを持たせています」

マシユの声を聞きながら、その新たなるボールを眺める。  
やっぱり棺桶である。

言えないが。

「こいつで艦隊を守って……は厳しいだろうなあ。

じゃあ、何とかするか」

「何とかって何をなさるのですか？」

オボロの質問に俺は人の悪い笑みを浮かべる。

邪道ならば、いくらでも道はあるのだと。

「MSにはMS。

ザクにはザクさ」

裏工作

評価100消費+33 || 133

ザクI 配備機数 6機

数日後。

中立国サイド6の輸送船が建設中のサイド7に入港。

その荷物をルナ2から受け取ったものがこれである。

ものもものだけにルナ2司令のワツケイン少将にも報告はしていたが、ここまでうまくいったので彼の顔も啞然としている。

「ニューソクデ少将。

何で敵のMSがこんな所にこれだけあるのか、聞かせてもらえるかね？」

「簡単な話ですよ。

こいつはもともと月の中立都市フォン・ブラウンにジオンから友好の品として送られたやつです。

それが使用中に壊れてジャンクとしてサイド6にという流れです」

知っている色々便利なコネがあるものである。

ビスト財団とか。箱とか。

「しかし、ジオンの諜報部はそれを見逃すほど愚かではないだろうか？」

「ええ。

これはジオンの謀略も入っているんです。

もうザクIの技術を渡しても問題はないと」



想像以上に進撃したジオンはその占領地から資源を奪い、地球上ではザクⅡJからグフへの換装が始まろうとしていた。

このままではドムとリックドムが出てくるので、その場合ジムが押し負けかねない。

この戦争はジオンの技術優位を連邦が物量で押し返せるかどうかにかかっている。

ここで、連邦が即効性の毒に負けてこいつら——多分ゼニーになるのだろう——の量を決定すると連邦は敗北しかねない。

これはそういう毒である。

✓作戦進捗度 100でガンダム

44%

ガンキャノン・ガンタンクのルナ2配備

1 あり

2 なし

結果2 なし

ガンダムができるまでまだ時間がかかる。

そろそろ嫌がらせを本格化させる事にしよう。

「戦力は揃いました。」

そろそろ兵站線が悲鳴をあげているジオンに、いやがらせをしてやりましょう」

兵站線攻撃 100過激

結果 12 + マゼラン二隻 20 + サラミス二隻 10 + ボール6機 + ザクI 6機 〓 54

トレジャー 54以下で成功

結果 1 クリテイカル

兵站線攻撃は良い感じに成功した。

敵にダメージを与えつつ、対処を本格化させない程度の攻撃で俺の評価と生存がちやんと確保されているのがとても良い。

そして、ザクIを使ったことで味方と勘違いしたジオンのパプワ級輸送船の拿捕に成功。

地球投下前の物資を捕虜ごと得るといいう大戦果を上げたのも大きい。

パプワ搭載物資

1 物資

2 物資

3 ザクII

4 ザクⅡ

5 ザクⅡ

6 ザクⅡ J

7 ザクⅡ J

8 ザクⅡ J

9 グフ

10 熱烈歓迎

結果 3 ザクⅡ

この大戦果に、ジャブローのお偉方にもっこりである。

何しろ無傷のザクを輸送船ごと入手できたのだから。

そのままパプワに積まれていたHLVでこのザクⅡをジャブローに下ろし、停滞していたMS開発が進捗する事になる。

MS開発進捗 5? 3 || 1 5

MS開発計画

3 8% + 1 5 || 5 3%

V作戦

4 4% + 1 5 || 5 9%

評価

190 | 裏工作100 | 愛人風評被害40 + 54 + 15 + 3 || 122

今の所の俺の評価は、評価はするが色々と叱られる所もあるのでという所。

まあ、休日は基本艦長室にこもって女達と爛れた日々を送っていたらそうなるか。

最近、食事を持ってくる従兵相手に受け取るオボロが服を着ていないのが常態化しているし。

監獄戦艦は今日も健在である。

連邦の反撃

942

ジオンの防戦

18?3 || 54

そんな日々を送っていたら、ついに連邦の反撃が始まる。

MS開発計画は半ばだが、兵站線へのハラスメント攻撃で気を良くした連邦首脳部が

失地回復を考えて、溜め込んでいた通常戦力での反撃に着手したのだ。

想像以上の占領地を抱えた上に俺たちの兵站線へのハラスメント攻撃に気を取られ、もう勝ったと思っていたジオン軍はこの反撃に奇襲に近いダメージを受けて、大敗北を喫してしまう。

トリントン基地・ハワイ基地・北京基地を失った上に、大西洋と太平洋およびインド洋の制海権を喪失。

そして、ヨーロッパではその日を迎える。

「敵機が7に空が3だ！」

「奴ら、ドーバーを越えてこっちに渡って来るぞ!!」

「援軍は…味方のザクは何処に居るんだ!?!」

第二次ノルマンディー上陸作戦。

オデッサキャンペーンの最初の攻撃はこうして航空戦力によってザクが粉碎される事になった。

ザクは飛べない上に、重力で爆弾は下に落ちる。

それを理解した連邦軍首脳部の地の利の勝利である。

こうして、連邦の大軍勢がオデッサに向かう頃……

「うちの戦隊を使ってお迎えねえ……何なの?あの船?」

叢雲のぼやきに俺は艦橋モニターに映るその船の名前を少し嬉しそうに告げた。原作が始まる。

「ペガサス級強襲揚陸艦。ホワイトベース。

なんか機密を抱えてサイド7に行くそうだ。

こいつの護衛のために、うちも船が増えたしな」

増援艦隊

サラミス級2隻

コロンプス級2隻

奪ったパプワ級輸送船の代わりと、ホワイトベースへの護衛である。

うちの戦隊が、ボールとザクIとはいえMSの運用を始めたので、V作戦にリンクさせる方向になったのだろう。

こうして、原作が始まる。

ニューソクデ艦隊

第一戦隊

マゼラン級 『ムラクモ』

サラミス級 『シフォン』

サラミス級 『マドレーヌ』

サラミス級 『マフィン』

## 第二戦隊

マゼラン級 『ヤクモ』

サラミス級 『スフレ』

コロンプス級 『アルストロメリア』 ザクI? 3 ボール? 12 セイバーフィッ

シュ? 12

コロンプス級 『アザレア』 ザクI? 3 ボール? 12 セイバーフィッシュ? 12

独立戦隊 (ジャブロー直轄)

ペガサス級 『ホワイトベース』

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その3  
一般将兵side

一年戦争において連邦の勝利というかジオンの敗北を決定づけたのはどの戦いだったのか？

多くの専門家は地球侵攻作戦をあげるが、ジオン軍とてルナ2を残す危険は理解していた。

それでも、ジオン軍は地球侵攻作戦に踏み切らざるを得なかったのである。

「レビル艦隊がほぼ壊滅したと言っても、ティアンム艦隊がルナ2に残っていたのが厄介でした。

当時のジオン情報部は、ルナ2に駐留している艦隊数をおよそ40―60隻と見積もっていました。

これは、再度ルウムの決戦を敵拠点であるルナ2で行わないといけない事を意味します。



当時のジオン軍はルナ2攻略と地球侵攻の二つの作戦案がありましたが、ジオン軍中枢は南極での講和会議において地球侵攻作戦を行う事をすでに決定してたのです。

ドズル・ザビ宇宙攻撃軍司令官が戦死した事で、かれの軍勢と派閥は、ギレン総帥とキシリア突撃機動軍司令官に分割され、地球侵攻作戦の指揮がキシリア突撃機動軍司令官に一元化されたことで戦力が拡大したというのも大きかったと思います。

事実、ジオン軍の地球侵攻作戦はその初動は完全に成功しました。

ユーラシアの殆どに、北米、オーストラリアとその支配領域を広げたのですから。

その時にルナ2は何もしなかった。

いや、完全にジオン軍の兵站線が広がり切るのを待っていたんです。

ニューソクデ少将は「

彼がこの時に指揮下に置いていたのは戦艦二隻と巡洋艦二隻の四隻しかなかった。

だが、彼の元にはブリテイッシュ作戦で救助した艦艇やパイロットがそのまま残っていた。

それらの破損艦艇を修理して戦力化してルナ2の防衛に組み込んだ事と、ジオン軍のMSであるザクをどこからともなく入手した事は彼のその後の功績の伏線となる。

「ニューソクデ提督？」

そりゃ、モゲロと言いたくなりますよ。

あの綺麗どころを侍らせて、腐敗した連邦高官の最たるものと陰口は常に叩かれていますね。

けど、それ以上にあの人の功績を否定できないんですよ。

ティアンム提督に次いでルナ2防衛のナンバー2になるのですが、艦船の修理をはじめとした裏方は全てあの人が処理していたはずですよ。

あげくに、月経由で旧型のザクを入手するコネはどこから持ってきたのか……

もちろん、裏方だけで終わらないからあの人はあそこまで出世したんでしょうが。

あの旧型ザクを利用してジオンの補給船狩りをしてジオン軍をきりきり舞いさせたのはルナ2どころかジャブローでも喝采をあげた人が多かったとか。

レビル提督が対ジオン軍の総司令官になったのですが、ニューソクデ提督が外れなかったのは、これらの功績をレビル提督が無視できなかったのでしょうね」

この時期の地球連邦軍で反攻作戦を指揮したのは、ジャブローのゴツプ大将である。

レビル將軍がV作戦をはじめとしたMS開発計画を主導した結果、通常戦力でのハラメント攻撃がこの反攻作戦の主目的だったという。

だが、この反攻作戦は信じられない大戦果をあげる事になった。

「ニューソクデ提督は衛星軌道上でのハラメント攻撃に特化しながら、ジオン軍の兵站線の把握を常にジャブローに送り続けていました。」

彼らが息切れするその瞬間を現場でデータを送っていたニューソクデ提督と兵站のプロだったゴツプ大將は完全に分かっていたんですよ。

おまけに、その反攻作戦というのが高高度からの絨毯爆撃ときた。

いくらMSが強力な兵器とはいえ、空を飛ばない以上高高度からの絨毯爆撃にMSはなすすべがなかったんです。

最初は小出しに、戦果がはつきりと出ると大々的に。

調子に乗って戦線を広げ切っていたジオン軍はこれに対処する戦力は残っていませんでした」

ジオン軍は初戦の勢いはどこへと言わんばかりに敗走を重ねる。

地上という重力にとらわれた千差万別の戦場にジオン軍のMSは対応する時間が与えられずに次々と撃破され、戦争は完全にジオン軍の主導権が失われる結果となったのである。

「もし、ルウムでドズル閣下が戦死なさっていないなかったならば、地球侵攻はあそこまで深く行う事はなかったのではないか？

ドズル閣下は、宇宙攻撃軍を率いて宇宙要塞ソロモンにてルナ2の動向を常に監視していました。

ジオンの攻撃目標が地球ではなくルナ2だったら……

あの時ジオン軍のMS乗りだった私はそれをふと思う事があります。

もつとも、その場合はあのニューソクデ提督と戦う事になるのですけどね。

あの人の艦隊は、『怖い』のではなく『うざい』んですよ。

人死によりも作戦目標——我々の補給物資投下を邪魔する——がしつかりしているから、戦っていると酸素や燃料、降下ポイントの逸脱とかで気づいたら負けている。

そんなのが何度もありましたよ。

この戦いを本当に恐れていたのはマ・クベ中将だったとか。

事実、あの人はオデッサの戦いで降伏していますからね」

戦争はジオンの優勢から連邦の反撃へと移りつつあった。

オデッサの戦い。

連邦MSの登場と共に、こうしてジオンの敗北は始まった。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その4

なんでサイド7でガンダム開発かというと、ルナチタニウム合金の確保が答えだったらしい。

名前から察する通り、こいつは月で作られるので、フォン・ブラウンからサイド6経由でしか確保できない。

それならば、ルナ2でも良いんじゃないかと思つたが、あそこは今連邦艦隊再建の真っ只中にあり、秘密兵器開発のスペースもリソースもない状況である。

ORIGINだと、サイド7開発そのものがV作戦の為にあつたとか何とか。という訳で、サイド7にて開発という事になったのだが、もちろんここだけで進めている訳もなく、プロトタイプガンダムあたりはジャブローでも開発が進んでいるのだから。

そのあたり、物量の連邦らしくちゃんとサブラインがあるのが素敵ではある。

物語的には盛り上がらないだろうが。

「で、俺達はそんなサイド7 駐留艦隊として行く訳だ」

艦橋で俺は一人ぼやくが誰も聞いては居ない。

ORIGIN設定になった事で一つ厄介なのがルウム戦役で、ルウムコロニーで発生した避難民である。

一週間戦争みたいにガスで皆殺しという訳でなく、中に突入しての制圧なんてしているからそれ相応に反ジオンの住民が生き残ってしまった。

それを飼う余裕はジオンにはなく、かといって虐殺するには中立のサイド6やフォーン・ブラウンが良い顔をする訳がない。

結局、南極条約の付帯条項としてルウムの避難民をサイド7に送ることが決定された。

ルナチタニウム合金あたりは、そのバーター取引という側面もある。

ルウム避難民 5百万人

中の治安 0で最悪100で安定

92 | 難民補正201172

サイド7 『グリーン・ノア』建設状況65%

建設途上のコロニーに五百万人もの人間が逃げ込んだのだ。

じゃあ、中はひどいことと思つたが、そこはゴツプ提督抜かりはない。

政治的プロパガンダとして支援をして、内部にある程度の秩序を構築することに成功

する。

それ以上にでかかったのが、彼らはジオンを憎んでおり、ここを追われると宇宙にどこも居場所がなくなるという事が分かっていたという事だろう。

悪名高い空気が無い上に、連邦勢力圏という事もあってフォン・ブラウンやサイド6企業の支社が進出し建設は一気に進む。

その分V作戦の進捗が遅れたという本末転倒の状況も発生しているのだが、ゴツプ提督に言わせるならば、どっちでもいいのだろう。

ジオン側としても叩きたいのだろうが、今や重力戦線の兵站到悲鳴を上げている状況で、部隊を抽出する余裕もなく。

ドズル・ザビの戦死で前線基地にまで部隊戦力が削減されたソロモンにもその戦力は残っておらず、今回の俺達の艦隊の侵出に対してもついに邪魔をしてこなかった。

それぐらい、地球での敗北からの回復に追われているのだろう。  
「ニューソクテ提督。よろしいですか？」

グリーン・ノアに着くまでに訓練をしておきたいのですが？」

モニターに映るのは、パイロットスーツを着たライラ・ミラ・ライラ中尉。

一年戦争参加経歴は知っていたので、名前を見つけてスカウトしたのである。

ザクIで苦勞をかけるが、その分死なないように……

「提督！」

訓練させるなら、俺たちも出させる!!」

ヤザン・ゲール大尉。

最強のオールドタイプと呼び声高い彼だが、何処で俺たちのことを知ったか知らないが彼自ら売り込みに来たので買うことにしたのだ。

ヤザン大尉がMS隊の隊長。ライラ中尉が副隊長という体制である。

「好きにしろ。」

だが、即応体制は整えておけよ。

あと、ザクが壊れても、部品が無いのだから、大切に使いよ」

「了解！」

「了解しました」

モニターが消えると同時に、コロンブスからMSが出てゆく。

ふたりとも乗り込んで許可をもらいに来たのだから、出たくてしかたがないのだろう。

「わからないではないですな。

我々はあのザクに押し続け続けてきたのですから。

乗ることでMSがどんなものなのか理解し、それに対抗する事もできるでしょう」



テム・レイ技術大尉。

今回のガンダム開発の責任者である。

うちにザクIがあるという訳で、ホワイトベースではなく俺の居るムラクモに乗り込んで、彼らをアグレッサー部隊として使いたいという交渉に来たのだ。

こつちとしても異存はない。

「条件がある。

アグレッサーに使うのはいいが、こつちにもMSを回してほしい。

あれでは、敵の使っているザク相手では苦しいからな」

「わかりました。

上と相談してみましよう」

ヤザンが乗るガンダムならば、シャアザク相手でも勝てるだろう。

多分。

ガンダム完成までの戦果

兵站線攻撃 100ほど過激

結果79+マゼラン一隻10+サラミス二隻10+ボール12機+ザクI3機+セ

イバーフィツシュ12機||126

グリーン・ノアに防衛部隊をおいてローテーションで兵站線を襲う。  
今回はMSの訓練も兼ねているので、派手に襲い続けて大戦果をあげることになった。

やりすぎたとも思わなくはないが、どうせもうすぐしたらシヤアがザクに乗ってやってくるのである。

だったら、それまでに戦果を上げて増援というかV作戦で作られているガンダムを手した方がマシである。

結果としては大成功である。

この戦果を惜しげもなく使うことで、更に増援を確保する事にする。

渡されたMS

1 ガンダム

2 同上

3 ガンキヤノン

4 同上

5 同上

6 ガンタンク

7 同上

8 同上

9 同上

10 熱烈歓迎

結果 2 ガンダム

「すげえ……これが最新MSか」

「RX-78ガンダム。」

ジオンのザクに勝つために作られた機体だよ。これは」

ヤザンが感激し、それを気にしないテム・レイが延々と説明を続ける。

さてと。

手は尽くした。

来るなら、来てみる。シヤア。

ジオン襲撃部隊

1 シヤア

2 同上

3 ランバ・ラル

4 同上

5 サイクロプス隊

6 同上

結果 6 サイクロプス隊

コロニー内騒乱状況 72 以上で成功

結果 32

「コロニー内駐留部隊より、ジオンの特殊工作部隊を発見し、交戦しているとの報告が入りました」

あれ？

シヤアにしては潜入が杜撰だな。

とりあえず対策しておこう。

「MS隊に出動準備を。」

敵にガンダム関連の資料を渡すなよ。

俺たちは出撃して、敵の母艦を叩く」

母艦を叩いてしまえば、MSと言えども燃料と酸素が枯渇する。

このあたりの関係は、飛行機と空母の関係は変わりがない。

ジオンの隠蔽 16

連邦の索敵 55

ジオンの士気 2

降伏判定 2以上で成功

結果 42

「敵艦発見しました！」

チベ級一隻！」

「待って！」

発光通信!!

ワレコウフクスル……降伏!？」

あ。

シャアじゃなくて、サイクロプス隊だったのか。

連邦攻勢 81

ジオン防御 46

シャアの現在地

1 北米

2 同上

3 オデッサ

4 同上

5 NT隊

6 同上

結果 6 NT隊

降伏したフォン・ヘルシング大佐から情報を集めた結果、連邦のオデッサ作戦の準備攻勢段階でジオンは総崩れになっているらしい。

航空戦力を甘く見たつけである。

で、今回の作戦『ルビコン作戦』だが、破壊工作でコロニー内を騒乱状況にした上で核攻撃でコロニーもろとも破壊という剛毅な作戦で、完全な南極条約違反である。

ヘルシング大佐はそれに乗り気で無かった事から、我々が出てきた事を良いことに降伏したと。

それに伴って、コロニー内で暴れていたサイクロプス隊も降伏している。

こつちからすれば、チベ級が無傷で入手できた上に積み込まれていたザクII Fが八機も手に入ったので大喜びなの言うまでもない。

迷うことなく全機うちの部隊に入れることにした。

一方で、気にしていたシヤアだがキシリア・ザビ直属のNT部隊に転属している。

かくして、こちらには彼らサイクロプス隊がやってきたと。

こりや、この戦争ガンダムが大地に立つ前に終わるかもしれんな……

## 評価

122 | 裏工作（ヤザンとライラ引き抜きとガンダムとザクⅡF編入費用）300 |  
愛人風評被害40 + 兵站線破壊作戦126 + ルビコン作戦撃退200 + V作戦防衛2  
00 + 9 || 317

「また船がふえるみたいよ。ニューソクデ『中将』」

ベッドの上で裸の叢雲がいたずらっぽく囁く。

これだけ功績を上げるとそうなるわな。

やってきたのは、マゼラン2隻、サラミス9隻、コロンプス6隻である。

合計でマゼラン4隻、サラミス13隻、コロンプス8隻である。

オデッサへの進撃と、俺のジオン兵站線破壊が効いて、ジャブローからそれだけ打ち上げられたのだ。

このままで行くと、第三艦隊としてソロモン攻めの後、ア・バオア・クー戦となる。

つまり、三割確率のコロニーレーザー判定が入るわけで……

「あらあら？」

まるで死ぬのが怖いみたいね」

裸のステンノが楽しそうに囁く。

そりゃ怖いに決まっている。

「大丈夫です。

先輩は私が守りますから」

でかい胸をたゆんたゆんさせてマシユ風が言い切る。

宝具とスキルでムラクモは生き残れるかもしれないが、その後のア・バオア・クー戦がなあ。

そんな事を考えていたら、シャワーを浴びてきたオボロが俺にメツセージカードを手渡す。

「お誘いが来ていますよ。

連邦の各派閥から」

えらくはなりたくないものである。

その後のZとかを考えると特に。



【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その4  
一般将兵 s i d e

サイド7 駐留艦隊司令官。

ニューソクデ提督の次の職場であり、実質的なサイド7総督としての赴任を強力に推したのはゴップ大将だったというのは有名な話である。

その理由として、南極条約で問題となったサイド5の難民の収容という大仕事を任せられるのが彼しかいなかったというのがある。

「ニューソクデ提督の本質はロジステイクスにあり、五百万人もの難民を受け取り管理する現場指揮官が宇宙に殆ど居なかったのです。

ルナ2で後方がらみの仕事をほぼ掌握していたあの人にとって、うってつけの仕事だったのは間違いありません。

と、同時に確執があったレビル將軍が行っていたオデッサ作戦に彼を絡めなくなかったという裏事情も否定できませんけどね。

後にV作戦と呼ばれる連邦のMS開発はあのサイド7で行われていたのですから。

ニューソクデ提督にそこを任せるにあたってレビル將軍は相当の葛藤があつたみたいですが、ゴツプ大将の説得に最後は折れたみたいですね」

ここでニューソクデ提督はその才能を十全に発揮させる。

連邦政府高官のコネを利用してフォン・ブラウンやサイド6の企業を誘致、悪名高い空気を撤廃して経済的基盤を整え、難民を受け入れると同時にその秩序維持に成功したのである。

この五百万人の難民がサイド7で市民化する事の意味を連邦政府側が十二分に評価していた。

「あの人のえぐい所は、五百万人の難民から兵士を抽出した所にあります。

ジオン憎しで志願した難民が兵士という職を得たことで、中の治安が良くなつていったのは見事と言わざるを得ません。

彼らの戦力化は主に後方勤務において利用されました。

ルナ2への資材生産と搬送、ルナ2駐留將兵の休養娯楽拠点への配備、重要度の低い拠点の警備を代行する事で連邦軍正規兵を抽出などこの時期の連邦宇宙軍の再編においてニューソクデ提督の関与が無かつた物はありませんでしたよ」

その一方でジオン軍への兵站線妨害攻撃も忘れていない。

特に鹵獲したらしいザクIを利用した海賊まがいの鹵獲までやってみせ、『地上のレビル將軍、宇宙のニューソクデ提督』の評価を確定させる。

「当時のニューソクデ艦隊はペガサス級という新造艦艇が1隻加わったとはいえ、マゼラン級2隻、サラミス級4隻、コロンプス級2隻の9隻しか存在していませんでした。ルナ2の艦隊が艦隊保全に走っていた時に、この9隻は縦横無尽に暴れまくったのです。」

特に、その襲撃の全てにニューソクデ提督は出撃していたんです。

『艦はムラクモ大佐とマシユ中佐でコントロールできるからお前ら艦を降りて休め』なんていうんですよ。あの人。

幸い、ブリティッシュ作戦で彼に命を助けられて彼の艦隊に志願を希望した将兵が多かったのも、そんな醜態は未然に防いだのですが、見事なまでの指揮官先頭に将兵が奮わない訳がないですか」

「あの人のごい所は、襲撃の指揮は完全にムラクモ大佐とマシユ中佐に任せていた所で、出撃中何をしていたかという点、ステンノ中佐と一緒にサイド7統治の書類の処理をしていたんですよ。」

艦橋の指揮官の椅子に承認印とサイン用の万年筆が置かれていたのはあの人ぐらいですよ。

そういう事をやっていたから、あの三人相手にご乱交をやっても生暖かい目で見るとかはないじゃないですか」

ジオン軍側から見てもニューソクデ艦隊は目の敵だったのだが、その撃退に動く戦力はすでに残っていないかった。

ジオン軍は地球という広大な戦場に完全に引きずり込まれており、オデッサ作戦という連邦の大反攻に対処するだけで精いっぱいだったのである。

「ニューソクデ艦隊。

そりゃ、当時のジオン兵站部隊においてあの名前は聞きたくないものでしたよ。

何がイヤかって、あの艦隊妨害に特化していて、まっとうに戦わないんですよ。

ミノフスキー粒子をもっともしない陰湿な戦い方はあの艦隊の十八番でしたね。

ミノフスキー粒子は戦場に散布することで、あらゆるレーザー兵器や通信機器を妨害する性質があるのですが、事前誘導のミサイル攻撃を遠距離から容赦なく仕掛けて来るんですよ。

地球への降下ポイントに。

ジオン軍占領地にHLVを落とす場合、北米かオデッサかキリマンジャロの三つのポイントがあります。

で、そこに落とす場合の時間と降下ポイントは計算ができるんですよ。

その計算に基づいて、超長距離からミサイルを容赦なくばらまく、ある種の機雷ですね。これは。

我々はニューソクデ艦隊の姿を見ずに、奴らが放ったミサイルの処理にMSを出して何度対処した事か。

それで追い付かずに降下を諦めた事も多々ありました。

オデッサ作戦が始まるともうニューソクデ艦隊への攻撃すらままならない状態で、ソロモンの部隊を動かしたらという意見が統帥部から何度も上がったのですが、それ合わせてルナ2の艦隊が出て決戦になった場合、艦隊戦力の枯渇からソロモンが落ちる可能性を考慮して見送られました。

妥協の産物としての突撃機動軍によるサイド7核攻撃なのですが、結果として攻撃部隊は降伏して失敗。

オデッサの戦いがある結果になったので、キシリア閣下の失脚に繋がったわけです」オデッサ作戦が順調に進む中で、連邦軍はジャブローから艦隊の打ち上げに成功する。

その艦艇の多くがニューソクデ艦隊に配備された上に中将に昇進したのはこのような実績があったからに他ならない。

結果、サイド7駐留艦隊はマゼラン4隻、サラミス13隻、コロンブス8隻、更に鹵

獲したチベ1隻と。パプワ級1隻という陣容になり、ジオンのソロモンを睨み続ける事になる。

その状況でオデツサではジオンの敗北が近づいていた。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その5】

0079 10月。

史実より早いオデッサ作戦

連邦軍の攻撃 117

ジオン軍の防御 164

「さてと、順調に行けばそろそろオデッサから逃げ出すH.L.V.が出てくる頃なんだが……」

「それを艦隊全力で潰そうとするなんて悪い人♪」

「作戦と言ってくれ」

ムラクモ艦橋でステンノとそんなやり取りをしていた俺の前にマシユが報告を告げる。

そのモニターの先では、ホワイトベースが大気圏に入ろうとしていた。

「ホワイトベース。」

ジャブローへの降下軌道に入りました。

敵の妨害はありません」

「けど良かったの？」

あの子帰しちゃって？」

叢雲の質問に俺は少し考える。

サイクロプス隊の襲撃時に機密を見たとかでアムロ・レイ他が捕まったのである。

それを穩便におさめてなかったことにしたのである。

それでも原作の修正能力だろうか、機密を見た事でホワイトベースメンバーはジャブローに行き、いずれは戦場に出るのだろう。

結局、俺のしたことといえれば自己満足に近いものである。

「16の初陣は早いよ。」

そういう時代があった事は知っているが、今は宇宙世紀だ。

彼らを戦場に出して負けるほど連邦は物量に苦しんでいないさ」

そこまで口にして俺は宇宙から地上を見る。

MSと戦力をオデッサ周辺にかき集めたジオンは決戦を望み、連邦はそれを受けて立つ。

集まったMSに地上戦力が駆逐され、それを連邦の航空機が高高度の絨毯爆撃で破壊



する。

そんな地獄が地上で繰り広げられていた。

1 1 7 : 1 6 4 || 4 : 6

レビル將軍の生死と勝敗

1 生存 連邦勝利 ジオン降伏

2 同上

3 同上 連邦勝利 ジオン敗走

4 同上

5 死亡 ジオン勝利 連邦敗走

6 死亡

7 死亡 ジオン勝利 連邦壊滅

8 死亡

9 死亡

1 0 熱烈歓迎

結果 1

オデッサ作戦は、ジオンの核攻撃の脅しをもろともせず、連邦が押し込んでジオンの降伏という形で幕を閉じた。

司令官マ・クベはエルラン将軍に降伏したが、これはいままでの戦いでジオン地上軍戦力がほぼ枯渇していたからに他ならない。

残存戦力で抵抗の意志のある連中は既にキリマンジャロの方に逃れているという。

信じられないぐらい、組織だった降伏。

その意味することは一つだ。

「ジオン内部でキシリア・ザビが失脚したな」

ドズルが死んでその戦力すら使って重力戦線に投入したのに結果は大敗。

結果、彼女の切り札たるNT部隊の出陣前に失脚という事になった訳だ。

サイド7にやってきたサイクロプス隊を使ったルビコン計画といい、常軌を逸していたからあれがトドメになったか。

マ・クベが内通していたエルラン中将に降伏して戦功を上げるあたり、ジオン敗北後の動きを見据えているのだろう。

これで、地上の戦いはほぼ一段落し、主戦場は宇宙に移ることになる。

北米？

潰せるだろうが、ジオン敗戦後が見えてきた今、無理してガルマ・ザビがうまく治め

ている北米を落とす必要はない。

なお、待ち構えていたのに宇宙に上がるHLVはついに見つからなかった。

「当たり前だろう。」

我々の兵站線を散々叩いてくれたニューソクデ提督が上に居るのに、上がる馬鹿が何処に居るのかね？」

とは、捕虜となったマ・クベ中將のお言葉。

なるほど。

俺たちが居たおかげで、逃げられずに降伏を選んだのか。

ジオン軍が投入した戦力はおよそ100万。

そのほとんどが宇宙に帰ることはなかった。

「艦隊上がります！」

数はマゼランー！サラミス4!!」

「周囲の警戒を続けなさい！」

ミノフスキー粒子の濃度には注意するように！」

あれから、急速に連邦艦隊は再建されつつある。

俺のニューソクデ艦隊とティアンム艦隊が居たのだが、グリーン・ワイアット中將が

率いる艦隊とレビル將軍直率の本隊の四個艦隊三百隻体制にまで膨らもうとしていた。

その威容をジオンに見せつけるために、近く観艦式が行われる予定である。

「問題はジオン内部がほぼギレン・ザビによって統一された事なんだよなあ」

叢雲やマシユの指揮ぶりを眺めながら俺はぼやく。

彼の取る作戦は簡単だ。

コロニーレーザーが手元にあるので、これでこちらを焼くつもりなのだ。

面白いのは、ソロモン及びグラナダの戦力の統一指揮が実現した事で、ジオンの艦隊

戦力については一時的な改善が図られている所。

艦艇数だけを見ると、ドロス級二隻にグワジン級十隻程度にチベ・ムサイの巡洋艦が

六十隻程度と想定されている。

歴戦のMSパイロットを地上で多く失ったが、ジオンはザンジバル級で彼らエースパ

イロットを帰還させているという。

ザンジバルの数が少ないので、うまくいつているかどうかこっちで把握できないのが

少し辛い。

## 連邦の攻撃目標

### 1 ソロモン

- 2 同上
  - 3 同上
  - 4 ルウム
  - 5 同上
  - 6 同上
  - 7 グラナダ
  - 8 同上
  - 9 同上
  - 10 熱烈歓迎
- 結果 4 ルウム

「で、観艦式の後、私達は何処に向かうのかしら？」

ステンのささやき声に俺は苦笑して地図を眺めた。  
レビル将軍にとつて因縁の場所。

彼は宇宙での最初の戦場をそこに選んだ。

「ルウムだよ。」

『リメンバールウム』。

もつとも……」

そこで俺は言葉を区切る。

今のルウムにジオンは戦略的価値を置いていないと俺は見ていた。

「ジオンの連中が、出て来るかどうかは別問題だろうけどな」

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その6】

当たり前の事実だが、MSは戦車であり戦闘機であるという触れ込みがガンダムの世界である。

それは裏を返せば、歩兵ではないという事で。

ア・バオア・クー戦であったが、内部戦闘は白兵戦で歩兵が必要になるという事である。

「ミケーレ・コレマツタ中佐及び第44機械化混成連隊着任いたします。

お羨ましいことですな。

我々が地上を這いずり回っている時に、提督殿は愛人を侍らせて宇宙から高みの見物をなされていたのですから」

「……持つべきものはコネと戦功だよ。

君も、ザビ家の一人でも討ってみたまえ。

私と同じ生活ができる」

「努力しましょう。提督」

嫌味をきかせて敬礼するコレマツタ中佐と44混成連隊の一同。

このあたり、素でやってるし、やらせでもある。

オデツサ戦の後に再編成された44機械化連隊を欲したのは、ソロモン及びア・バオア・クー戦において決定的に不足するだろう歩兵戦力が欲しかったからだ。

その為、コレマツタ中佐の出世と部隊編成に介入して、MS隊を渡す代わりに定数を全て歩兵連隊にして揃えさせたのである。

冒頭の嫌味の応酬もその一つだ。

見ている歩兵（半分以上が新兵）全員にコレマツタ中佐の権威を見せつけ、俺の寛大さを晒すことで彼らの士気向上を期待するという。

だから、ブリーフィングループではこんな会話になる。

「オデツサでの戦訓ですが、MS戦が終わっても最後の占領は歩兵がやらざるを得ません。」

我々はその為に編成されたと認識していますが、そのまえにMS戦に勝たねば出番すらありません。

そこは認識しておられるのですな？」

「おそらくは、こんな流れになるだろうよ。」

MS隊が敵MSを排除した後、要塞に取り付く。



MS隊の支援のもと、艦艇が取り付いて火力支援と白兵戦。

上はそのあとで歩兵を輸送船から降ろしてと考えるのだろうか、我々が欲しいのは艦隊取り付き後の白兵戦の駒だ」

要塞に取り付いたサラミスやマゼランは火炮で支援しながら陸戦隊を編成して中を制圧する流れになる。

ミノフスキー粒子とMSの機動性に対空兵器の増大と目視の射撃員で連邦艦艇は対応したが、うちの艦隊は弾幕を計算して貼ることで機械化そのままに、その人員を陸戦隊に当てるという選択を取ることにしたので。

コレマツタ中佐の歩兵連隊はその陸戦隊員である。

「なるほど。」

我々に海兵隊になれとおっしゃる」

「ルナ2を使って、無重力下の戦闘に慣れておけ。

期間は二週間。

子どもを使わせてやるから、練度はともかく土気だけは落とさせるな」

訓練時間と考えるならば破格に少ないが、させないよりはましだ。

ソモロン戦及びア・バオア・クー戦が前倒しで発生しかねないのだから。

「ニューソクデ提督。」

よろしいですか？

軍内部において、この艦隊の風紀の緩みに懸念している声があるのですがご存知か？」

発言してきたのは、ジョン・コーウエン准将。

ジャブローから打ち上げられた増援艦隊で編成した第三戦隊指揮官で、艦隊副司令官兼お目付け役である。

「知っているよ。」

だが、うちの艦隊はジオンから志願者や懲罰兵を使ってコロニー落としを耐えきった猛者たちでね。

そうでもしないと士気が持たなかったのさ」

こう言えば言い返せない戦功が彼らを黙らせる。

戦争中だからこそこれは見逃されるぐらいはこっちは分かっているが、それ以上に勝ちつつある戦争になったからこそ、連邦という巨大組織お得意の足の引っ張り合いが始まろうとしていた。

「諸君。」

仕事に戻ろう。

我々の次の目標はリメンバールウムとなった訳だが、我が艦隊は……」

1 出撃

2 出撃

3 待機

4 待機

5 陽動

6 熱烈歓迎

結果 2

「出撃する事になった。

コレマツタ中佐。

初仕事はこれだから、万一のコロニー戦も想定しておけ。

サイド7を使って、模擬戦を行っても構わん」

「で、敵はやってくるのかしら？」

俺の隣に控えていた叢雲がつぶやき、オボロが情報局からの情報を確認する。

ジオン軍

1 出撃

2 出撃

3 待機

4 待機

5 陽動

6 熱烈歓迎

結果 3

「フォン・ブラウン及びサイド6の情報からだど、グラナダ及びサイド3からの艦隊出撃の情報は無いみたいですよ。」

ジオンはア・バオア・クーを決戦地と考え、戦力をア・バオア・クーに集中させている様子ですよ」

完全にソロモンを捨て石にするつもりな上に、コロニーレーザーで連邦艦隊を焼き払う気満々である。

それならばそれという事で、楽をさせてもらおうとしよう。

レビル艦隊

1 出撃

2 出撃

3 待機

4 待機

5 陽動

6 熱烈歓迎  
結果 4

ティアンム艦隊

1 出撃

2 出撃

3 待機

4 待機

5 陽動

6 熱烈歓迎

結果 6

1 クリテイカル

2 ファンブル

結果 2

ワイアット艦隊

1 出撃

2 出撃

3 待機

4 待機

5 陽動

6 熱烈歓迎

結果 1

ルウムの子連邦への忠誠度52

ルウムの降伏判定52以下で成功 31

レビル艦隊がルナ2にて待機し、俺のニューソクデ艦隊・ティアンム艦隊・ワイアツト艦隊が出撃する予定だったが、ティアンム艦隊にトラブルが発生して出撃が不可能になった。

ジオンの特殊工作部隊の作業らしいが、詳しくは分からない。

俺とワイアツト艦隊は妨害もなくルウムに到着し、ジオンに見捨てられた形となったルウムは降伏を選んだ。

こうして、史実より少し早く大兵力を動員した連邦は本格的に宇宙でもジオンに対し

攻勢に出る事になる。

その目標は……

1 ソロモン

2 ソロモン

3 ソロモン

4 グラナダ

5 グラナダ

6 グラナダ

7 ア・バオア・クー

8 ア・バオア・クー

9 ア・バオア・クー

10 サイド3

結果 5 グラナダ

月面都市グラナダ。

あの街を支配していたキシリア・ザビが失脚したので、その戦力と士気は低下していると降伏したマ・クベ中将情報が決め手となった。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その7】

星一号作戦。

宇宙要塞ア・バオア・クー攻略戦として知られるはずだったこの作戦は、思ったより順調な連邦の戦力回復に伴ってジオン公国制圧のグランドキャンペーンとして定義されることになった。

その為、その最前線であるサイド5ルウムには俺の艦隊とワイアット艦隊だけでなく、ティアナム艦隊とレビル提督自身が率いる艦隊までやって来ていた。

次の目標は月面都市グラナダ。

そこを落とせば、ジオン本土であるサイド3は目と鼻の先である。

「ア・バオア・クーに集まっているジオン軍については？」

会議室中央のレビル將軍は俺に質問をするが、俺はわざとらしく肩をすくめた。

今までの功績もあって、俺の発言力はかなり高い。

「何も敵が待ち構えている要塞を攻める必要はないでしょう。」

グラナダを攻めたら、次はジオン本土が狙われると分かるから、嫌でもジオン軍は後



詰めの艦隊を出してくる。

それを叩いてしまえば、彼らの移動戦力は枯渇します」

MSは戦争を変えた。

そうだろう。

だが、それを操るのはパイロットであり、腹も減るなら疲れもするし睡眠欲や性欲もある地球産の生き物である。

艦船建造能力で地球連邦が凌駕している以上、移動面と兵站において連邦は常に優位にあり、それは何処を攻めるかを選べるという事につながっている。

「だが、もう少し待てば我々の方のMSも本格投入できるが？」

ティアンム提督が慎重論を出す。

このあたりは本当に反対と言うわけではなく、反対側への面子立ての側面が大きい。何しろ、この作戦に、つまり復讐に燃えているのが総大将であるレベル提督なのだから。

「それも有りだとは思いますがよ。」

とはいえ、それまでにとれる所はとってしまってもいいと思いますが？」

月面都市グラナダを落とせば、中立を宣言した月面都市フォン・ブラウンが動揺するし、同じく中立を宣言したサイド6がますます連邦よりになる。

喉元にナイフをつきつけられた状態でジオンが講和に手を出してくれたら万々歳なのだが、デギン公王はともかく、ギレン総帥は乗らないだろうな。

そんな事は裏事情を知っている俺の感想でしかないわけ。

「グラナダ、つまり月面に戦線が移動する事で、地球周辺の連絡線が更に安定します。そこまで行けばしめたものですよ。

国力差は敵総帥であるギレン・ザビの言葉を借りるなら30対1。

ジオンのMSを1機落としたら、こちらを30機は撃墜しないと釣り合わない。

泥仕合もそう遠くないうちにジオンの敗北で終わるでしょうな」

そしてそれをギレン・ザビはよく理解している。

だからこそ、コロニー落としやコロニーレーザーという戦略兵器で覆そうとしたのだ。

レビル將軍は断を下す。

「諸君。

進もうではないか」

こうして、星一号作戦が発令された。

ヤル才艦隊に追加配備された艦船・MS

マゼラン 4 + 1 || 5 隻

サラミス 1 3 隻 + 5 || 1 8 隻

コロンプス 8 隻 + 2 || 1 0 隻

配備MS

1 RGM | 7 9 「E」 先行量産型ジム 宇宙戦仕様

2 RGM | 7 9 ジム

3 RGM | 7 9 ジム

4 RGM | 7 9 L ジム・ライトアーマー

5 RGM | 7 9 L ジム・ライトアーマー

6 RGM | 7 9 L ジム・ライトアーマー

結果 2 RGM | 7 9 ジム

MS 編成

コロンプス一隻

ジム? 6 ボール? 1 2

合計

ジム × 6 0 ボール × 1 2 0

隊長ヤザン・ゲール少佐 ガンダム

副長ライラ・ミラ・ライラ大尉 RGM-79S ジム指揮官機

艦隊としてはそこそこの戦力ではある。

とはいえ、50隻を超えるレビル提督率いる本隊やティアンム艦隊に比べると少ないのは事実だ。

このあたり、派閥を持たない俺に対してこれ以上の功績は渡したくはないという連邦軍首脳部の本音が透けて見える。

その分好き勝手させてもらおうとしよう。

ニューソクデ艦隊への命令

1 ジオン艦隊への迎撃

2 同上

3 同上

4 グラナダ攻撃

5 同上

6 待機

結果 4 グラナダ攻撃

レビル本隊

1 ジオン艦隊への迎撃

2 同上

3 同上

4 グラナダ攻撃

5 同上

6 待機

結果 5 グラナダ攻撃

ティアンム艦隊

1 ジオン艦隊への迎撃

2 同上

3 同上

4 グラナダ攻撃

5 同上

6 待機

結果 1 ジオン艦隊への迎撃

ワイアット艦隊

1 ジオン艦隊への迎撃

2 同上

3 同上

4 グラナダ攻撃

5 同上

6 待機

結果 6 待機

ジオン軍の反応

1 静観

2 静観

3 静観

4 出撃

5 出撃

## 6 コロニーレーザー

## 結果 3 静観

「その割には、俺を使い潰そうという意図がありありと見えるんだよなあ……」

「だって、一連の宇宙の戦いのポイントゲッターじゃない。司令官」

俺のボヤキに叢雲が突っ込む。

与えられた命令はレビル將軍の本隊の露払い。

俺の後ろにレビル本隊が大名行列よろしく堂々と行進しているはずだ。

ミノフスキー粒子が濃くてわからないが。

「月面降下用意。」

フォン・ブラウンの近くに降りて、グラナダを目指せ」

「どうしてそういうコースをとるのでしょうか？」

高度を維持してグラナダに出たほうが燃料もかかりませんが？」

「そしたら、移動がサイド3から丸見えになる。」

コロニーレーザーにどうぞ撃つてくださいというようなものだ」

ここからは、ジオンのマップ兵器ごとコロニーレーザーに気をつけなければならぬ。

連邦軍首脳部も警戒はしているが、その恐ろしさをいまいち実感できていく訳ではない。

知らないうちに光に包まれて命を終えるなんてまっぴらである。  
「失礼します。提督。」

スパイによるグラナダの情報です」

そんなやり取りをしていたらオポロが報告を持ってきた。

キシリア・ザビの失脚で、内部ががたがたになっていると踏んだが……

グラナダの戦意

9

連邦軍に対する抵抗 9以下で成功

19

「えらく低いしやる気がないな」

「艦隊および戦力のほとんどをア・バオア・クーに集めた上に、キシリア派はキシリア・ザビが失脚した事で冷遇されているから、やる気が出るわけ無いですよ。」

おまけに、グラナダは元々ジオンの都市ではなく、この戦争で占領された場所です。おかげで、捨て石にされたのがわかって、兵も住民も理由があるなら降伏しますよ」



「理由ねえ……」

という所で思い出す。

うちには無傷で手に入れたチベ級重巡洋艦とザクがあるじゃないか。

ついでに、マ・クベ中將は捕虜だし、彼を捕まえたエルラン将軍がスパイだった事も知っている。

「じゃあ、その理由を作ってみるか」

偽装工作

89

ジオン軍の看破能力 89以上で成功

24

戦果

84

某銀英伝の第七次イゼルローン要塞戦よろしく俺の艦隊から逃れたという芝居をしたチベは無事にグラナダに逃げ込み、エルラン将軍からお借りしたマ・クベ中將の説得によつてほぼ無血開城と相成った。

これらの工作をやってくれたのは、もちろん助命を餌に降伏したサイクロプス隊。

そりや、元々ジオン軍だから偽装も何も本物だわな。  
かくして、グラナダはジオンから開放された。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その8】

現在、連邦艦隊は月面都市グラナダを中心に展開している。

俺からすればコロニーレーザーでどうぞ撃つてくださいと言っているようなものなのだが、まだその兆候は見えない。

俺の艦隊は周辺都市であるアンマン港に。

レビル提督の本隊がグラナダに入り、ワイアット艦隊が月面上空で警戒している。

サイド5に待機していたワイアット艦隊もこちらに向かっていているという報告が入り、その報告がついにやってきた。

「デギン公王が講和の為にこっちにやってくるらしい」

キシリアの幽閉場所

1 サイド3

2 サイド3

3 サイド3 デギン公王と共に

4 サイド3 デギン公王と共に

5 ア・バオア・クー

6 ア・バオア・クー

3 サイド3 デギン公王と共に

なお、その際に幽閉されたキシリア・ザビも伴い実務交渉を行うとか。  
なるほど。

ギレン・ザビがコロニーレーザーを撃たなかったのはこれか。

「偽装工作をしておく。」

艦隊集結に遅れるように手配し、船を偽装する」

「偽装ですか？」

俺の発言にマシユが確認をとる。

アンマン港は現在俺の艦隊の出港準備に追われていた。

俺の旗艦であるムラクモもその出港待ちなので、舵を持つ叢雲の顔は緊張している。

「艦の識別信号をつけた、隕石を打ち上げるのさ。」

この辺りはミノフスキー粒子が濃い。

サイド3から狙うには精度が悪いから、広範囲で潰そうとするんだろうな」

「あらあら。」

自分だけ助かるつもりなの？」

隣にいたステンノが意地悪そうに微笑むと、俺は肩をすくめた。

総司令官でない以上、助けられる権限は限られるのだ。

「警報は送ったし偽装工作も許可をもらった。

それでも、政治が優先されることがあるのが軍隊つてもなんだよ」

コロニーレーザー照準

1 グレートデギン

2 グレートデギン

3 連邦艦隊集結地点

4 連邦艦隊集結地点

5 月面都市グラナダ

6 熱烈歓迎

2 グレートデギン

偽装工作

1276 【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシュを連れて一年戦り切るようです その8】

1	テイ アンム 提督	1	6	5	4	3	2	1	レ ビ ル 提 督	4 %	連 邦 艦 隊 損 害	3 3	看 破	4 3
無 事		無 事	死 亡	負 傷	負 傷	無 事	無 事	無 事						

2	無事
3	無事
4	負傷
5	負傷
6	死亡
5	負傷

ほとんど損害なしに終わったコロニーレーザーの砲撃は、グレートデギンとその護衛としてつけた連邦艦数隻を消滅させるだけに終わった。

偽装工作の成功もあるのだろうが、ギレン・ザビからすればデギン公王の裏で和平工作を取り仕切り後ろで暗躍されるキシリアの排除を優先したという所か。

これで、少なくともジオン軍の指揮はギレン・ザビの元に統一されることが確定した。また、ティアンム提督がこの砲撃で負傷し指揮が執れないので、ティアンム艦隊を分割して半分がレビル提督に、もう半分が俺の指揮下となった。

ニューソクデ艦隊

マゼラン5 + 8 || 13隻

サラミス18隻+10||28隻

コロンプス10隻+3||13隻

ペガサス級強襲上陸艦

1隻

ティアンム艦隊の半分を吸収した事で一気に艦隊らしくなったのはいいが、MS搭載のコロンプスや最新鋭艦のペガサス級をほとんど持っていくあたりなんというか、まあいいか。

来たのはグレイファントムだから、サイド6に行っていたやつがこっちに来た設定なのだろう。

目標はサイド3。ジオン本国。

そして、艦隊は二つの目標がある。

一つはジオン本国守備隊。

もう一つは後ろから撃つだろうア・バオア・クーから出撃してくるギレン・ザビの艦隊である。

ニューソクデ艦隊の任務

1 サイド3攻略



## 2 ギレン艦隊

## 1 サイド3攻略

「宜しいのでしょうか？」

ミノフスキー粒子のせいで近づいての艦隊通信の中、レビル提督の顔に苦悩が見えた。

サイド3攻略を遂げると、俺の功績はレビル提督を追い抜くと暗に言っているのに、その決定を変えようとしな。

「ジャブローからの注文だよ。

君のグラナダ無血開城が効いたらしいな。

デギン公王がコロニーレーザーで消えた結果、ジオンとの和平ラインが途絶した。

このライン修復の為に、君がサイド3を落とすのだ」  
なるほど。

サイド3を占拠しても戦争が終わるとは限らない。

特に、ア・バオア・クーのギレン・ザビの戦力から政治的正当性をはぎ取らないとま  
ずいという訳だ。

「了解しました。

その任務、拝命します」

敬礼して通信を切る。

なお、レビル艦隊とワイアット艦隊でギレン艦隊を抑える予定らしい。

この艦隊だけで150隻を超えるから、70隻程度だろうギレン艦隊は圧倒できるはずだ。

MSの性能がどれぐらいのものかにもかかわるが。

「提督。」

よろしいでしょうか？」

艦隊がサイド3に向かう途中でオボロが俺のそばに寄って囁く。

それは、今となつてはかなり重要な情報だった。

「……コロニーレーザーの二射目があるだろ!？」

「はい。」

ジオン軍マ・クベ中將からの情報ですから、信憑性は確かだと。

コロニーレーザーはエネルギーチャージに時間がかかりますが、近距離ならばもう一撃ぐらいは撃てるだろうと」

知らずに突っ込んで大被害を受けるところだった。

ギレン・ザビのコロニーレーザー一撃目の理由はこれか。

「マ・クベ中將に連絡を取ってくれ。」

配備されているだろう敵艦隊を寝返らせたい。  
名前は……」

サイド3 配備戦力

グワジン 2隻

チベ 5隻

ザンジバル 3隻

ムサイ 5隻

パプア 6隻

その他 10隻

MS 119機

説得工作 82

忠誠心 6

「シーマ艦隊が離脱していきます！」

「シーマ艦隊！聞こえているのか！！応答しろ！！」

「おい！シーマ艦隊の穴は誰が埋めるんだ!？」

シーマ・ガラハウ中佐。

キシリア・ザビのジオン公国軍突撃機動軍所属で、汚れ仕事を散々やってきた連中。使い捨てるならばここだろうと一番危ない所に配備されていたのだが、それを知って恩赦を餌に寝返らせたのである。

彼女たちもここで捨てられるとわかっていたらしく、マ・クベ中将経由で手を差し伸べるとあっさりと寝返ってくれた。

シーマ艦隊離脱戦力

サンジバル 3 隻

ムサイ 1 隻

パプア 4 隻

その他 8 隻

MS 8 機

ジオン残存戦力

グワジン 2 隻

チベ 5隻

ムサイ 1隻

パプア 2隻

その他 2隻

MS 111機

ニューソクデ艦隊

マゼラン 13隻

サラミス 28隻

コロンプス 13隻

ペガサス級強襲上陸艦

1隻

MS編成

コロンプス一隻

ジム? 6 ボール? 12

グレイファントム

RG M | 79 SP ジム・スナイパー I I X 4

RX―77D 量産型ガンキャノン×2

合計

ジム×78 ボール×156

RGM―79SP ジム・スナイパーII×4

RX―77D 量産型ガンキャノン×2

隊長ヤザン・ゲール少佐 ガンダム

副長ライラ・ミラ・ライラ大尉 RGM―79S ジム指揮官機

サイド3攻略戦が始まった。

まずはMS戦である。

ジオンのMSはザクとリックドムが中心で、まだゲルググは出ていないらしい。これをこちらのMS隊が防戦できるかどうかにかかっていた。

「大将！」

「いつてくらあ」

「まだ中将だ。」

ヤザン少佐。蹴散らしてこい！」

「ライラ大尉出ます！」

「ライラ大尉は艦隊の防衛をお願いします」

俺の乗るムラクモに括り付けていたワイヤーが外れて、ヤザン少佐のガンダムとライラ大尉のジム指揮官タイプが出撃する。

ヤザン少佐は俺に挨拶して駆けてゆき、ライラ大尉はマシユの指揮の元、数機のジムでムラクモも防衛についていた。

「敵艦隊発砲！」

「こっちも主砲発射!!」

撃ち負けるな!!」

敵艦のビームがこちらに当たり、数隻がダメージを受けるが、こっちも負けていない。俺はマイクを取り、クレイファントムに乗ってもらっているジョン・コーウエン准将

に連絡を取る。

「コロニーレーザーを押しえろ。」

近距離だと二射目が撃てる可能性があるそうだ。

グレイファントムとその護衛艦、あと二個戦隊8隻を連れていけ。

コレマツタ中佐の陸戦隊に占拠させるんだ」

「了解しました」

MS戦

ジオン軍損害

112機 オーバーキル

連邦軍損害

110機

艦隊戦

ジオン軍損害

12隻 全滅

連邦軍損害

4隻

ジオン軍は頑張った。

けど、頑張っただけではどうにもできない事がある。

MSはザクやリックドムで、パイロットは学徒動員。

そのくせ、数で負けているのが致命傷だった。

ボールの遠距離砲撃に押され、ザクより高性能のジムに次々と潰されてゆく。

それでもキルレートを見れば、ほぼ一機道連れにした事がわかる。



だからこそ、数で優っていた連邦が勝利した。

そして、切り札だったMS隊が壊滅した後の艦隊戦は悲惨なものになった。

いくら高火力のグワジンが二隻あっても、総数12隻で40隻近いマゼランとサラミスの火力に勝てる訳もなく。

サラミス四隻の撃沈と引き換えに艦隊も全滅したのである。

コロニーレーザー制圧

51

コロニーレーザー発射 51以下で成功

13

「提督！」

コロニーレーザーが!!」

間に合わなかったか。

仕方ないので最後の手段を使おう。

「じゃあ……これならどうかしら」

『女神の気まぐれA』バフ発動。

付喪神叢雲はバフを受ける。

「シールドエフェクト、発揮します」

『悲壮なる奮起の盾』発動。

マシユの無敵とコロニーレーザーの火力どちらが勝つかの勝負である。

「令呪をもって命ず！」

宝具発動!!」

「はい！」

真名、凍結展開。これは多くの道、多くの願いを受けた幻想の城。——呼応せよ！

『いまは脆き夢想の城』!!」

「来るわ!!」

叢雲の声と共に光が満ちた。

コロニーレーザー威力

72

叢雲防御力(女神の気まぐれ) + マシユ無敵(女神の気まぐれバフ)

47 × 1. 2 × 1. 2 + 40 × 1. 2 × 1. 2 || 67 + 57 || 124

目を開ける。

見慣れたマゼランの艦橋で叢雲もマシユもステンノも居る。

「損害報告！」

「機関は無事です！」

損害報告なし!!」

マシユの声に皆安堵のため息を漏らす。

ムラクモは無事だったが、他の船は……

連邦軍損害

27隻

マゼラン

10隻

サラミス

14隻

コロンブス

3隻

ヤザン少佐

1 生存

2 生存

2 6 5 4 3  
生存 死亡 死亡 生存 生存

ライラ大尉

1 2 3 4 5 6  
生存 生存 死亡 死亡 死亡 死亡

「手ひどくやられたな」  
艦隊中心部を射抜かれました。

この船が残っているのが奇跡ですよ」  
俺のボヤキにオボロが苦笑する。

直径6キロ近いレーザードから避けられないとためらうことなくスキルを使ったが、マシユのスキルにターゲット集中がついたのがこの惨劇となった。

とはいえ、俺も死にたくはないので使わざるを得なかったのだが。

ヤザン少佐は離れていたので無事。

ライラ大尉は艦橋にMSが隠れたので無事となった。

さすがにライラ大尉のジムは大破判定だが。

「残存艦艇はマゼラン3、サラミス14、コロンブス10にグレイファントム。

今、コロニーレーザーの管制室を制圧したと報告が来たわよ」

叢雲の報告に俺は椅子にもたれかかる。

とりあえず、こっちの戦いは終わった。

後はレビル艦隊とギレン艦隊の決戦の行方を見守ればいいか。

ギレン艦隊

21

レビル艦隊

「レビル艦隊からレーザー通信！」

『ワレ、クセン、シエンモトム』だそうです!!」

おい。

何をやっている。何を。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです その9】

ギレン艦隊の善戦理由

- 1 MS配備量の差
  - 2 MS配備量の差
  - 3 ギレン総帥の指揮
  - 4 ギレン総帥の指揮
  - 5 シヤア率いるNT部隊の活躍
  - 6 連邦内部の足の引つ張り合い
  - 5 シヤア率いるNT部隊の活躍
- 連邦MS撃墜数60機

詳細がわかってくると、大体理由がわかってくる。

その結果出てきたのが、シヤア率いるNT部隊の活躍だった。

キシリア失脚後も部隊は存続していたらしく、ギレンはそれを前衛に出したという訳

だ。

原作のキシリアは彼らを使い捨てた形になったが、ギレンはそれを使いこなしているらしい。

このNT隊に落とされたMSは60機に及び、それが序盤戦の足を引つ張っていた。レビル艦隊保有MS数は詳しくはわからないが、コロンプス三十隻以上にペガサス級数隻があつたはずだ。

俺の艦隊のコロンブス編成と同じならば、コロンプス一隻にジム?6とボール?12が搭載されているから、ジム×180機にボール360機はあるはずなんだが、その初戦で一割以上が消えたのだから、苦戦報告をよこしたくもなるか。

なお、ドロス級が二隻にMSは百機は積めるし、一番MS搭載が少ないムサイでも三機搭載できるのがジオン軍艦艇の強みだ。

それを考えると、ジオン軍のMS数は300機から400機というあたりか。

問題なのがこのMSが最低でもザクな訳で、ジムなら勝てるがボールだと負けるといふ戦力判定がここで戦況を考えるときついと判断せざるを得ない。

「うちのMS隊の状況はどうなっている?」

「はい。」

MS110機が撃墜されましたが、内訳はボールが81機、ジムが29機です」



俺の確認にマシユが報告する。

うちのMSの残存がジム49機にボール75機+グレイファントムの戦力となる。

艦隊戦力と合わせて、サイド3宙域を制圧するには十分だ。

中に入って占領する場合、また話は別になるだろうが。

「サイド3の状況は？」

「ダルシア・ハバロ首相が中をまとめており、交渉の使者を出したいそうです」

オボロの報告に俺は己の顎を触ってモニターを眺める。

ここで問題になるのが、ギレン艦隊が勝ってしまったケースだ。

レビル艦隊に消耗は強いられるだろうが、シヤアとかが残ってるだろうからそれで当

たった場合勝てるかどうか分からない。

「畜生。」

ガンダム持ってんだから、シヤア落とせよ」

俺の小声のぼやきにステンノが意地悪を言う。

「あらっ？」

情けをかけてジャブローにおろしたのは、誰でしたっけ？」

つまり、アムロはその素質はあるけど、まだ磨かれていない状況という訳で。

そんな中でシヤア率いるMS隊をなんとかしろというのも無理ゲーというのは俺で

もわかるからだ。

「寝返った連中どうします?」

「現状を話して選択は任せるさ。」

このまま、俺たちにつくなら助命嘆願だけでなく、偽名を用意してサイド6あたりで暮らせるように手配してやるさ。

逆に、ここに残るならダルシア首相の密命で動いていた事にするさ。

ついてくれた礼として正直に話して、彼ら自身に運命を決めさせてやるさ」

シーマ艦隊の反応 1でジオンより100で連邦より

89

「シーマ・ガラハウ中佐です。」

この命、ニューソクデ中将にお預けします。

ですから、どうか部下たちに寛大な処置を……」

シーマ中佐が単身でこのムラクモにやってきて助命嘆願をするあたり、シーマ艦隊がどういう処遇をされていたかがいやでもわかる。

こりや、戦後を考えると偽名を用意してサイド6に暮らせるようにした方がよさそう  
だ。

「わかった。

貴官らの命、この俺が預かる。

とりあえず、現状ジオン艦が一緒だと誤射されかねないから、艦隊はそのままサイド6に行つて武装解除しろ。

ジオンのダルシア首相と、グラナダにいるマ・クベ中將の紹介状を渡すから、俺が戦死したとしても生き残りはできるだろうよ」

「でしたら、どうか私をお側に置かせてください。

何でも致しますから」

シーマ中佐の嘆願に色気と覚悟が見える。

俺が生き残る方が彼らの戦後が楽になるのは分かるが、枕営業までしなくてもという俺の言葉をステンノが真顔で遮る。

「気づいていないの？」

英雄様」

そのささやきに背筋が凍る。

俺は一連の戦いで功績を立てすぎた。

派閥がない俺はもうこれ以上は軍にいられないだろう。

連邦政府高官とのコネ設定もあるし、戦後ほぼ間違はなく政治家に転身させられる。

ステンノの声は名声を得た英雄の末路を知っていた忠告だったのだ。

そして、その声に耳を傾けずに滅んでいった英雄たちのなんと多かつた事か。

「あー。そうか。」

ここで俺がシーマ中佐の色気に惑わされた方が後々楽なのか」

公私混同と戦功をチャラにして穩便に退職する手として、遠慮なくいただくことにしよう。

そのまま、グレイファントムに乗っているジョン・コーウエン准将に連絡を取る。

「グレイファントムを旗艦に臨時艦隊を組む。

マゼラン一隻、サラミス8隻、コロンプス5隻を渡すから、レビル艦隊の応援に行つ

てくれ」

「かまいませんが、提督はどうなさるので？」

そのまま見せつけるようにシーマ中佐を抱きしめて口づけをする。

シーマ中佐は驚いたが拒まなかった。

「少し休む。

あとは任せた」

## シーマの色仕掛け 37

二時間後。

アへ顔で気絶しているシーマ中佐を個室に置いて艦橋に戻る俺たち。

「そりゃ、三人相手に毎日しているのに一人で挑んだらあなるわよね」

ツヤツヤキラキラの叢雲が呆れるが、俺は何も言わない。

同じくツヤツヤキラキラで魔力供給十分のマシユがフオローする。

「それでも途中まで頑張っていましたよね」

「だから、崩れてからがかわいかったのだけど」

ツヤツヤでニコニコで魔力供給たっぷりのステンノがほほ笑む。

シーマ中佐をダシに三人が楽しんだなんて言っではいけない。俺も四人相手に楽しかったし。

で、艦橋に戻ると、お留守番指名されて不機嫌の極みのオボロが報告する。

「お早いお帰りで」

「後でお前もかわいがってやるから。」

報告を頼む」

ギレン艦隊

6  
8

レビル艦隊+増援

7  
6 + 3 5 || 1 1 1

6  
8 : 1 1 1 || 3 : 6

1  
ギレン艦隊勝利  
レビル艦隊敗走  
レビル提督戦死

2  
ギレン艦隊勝利  
レビル艦隊敗走

3  
ギレン艦隊勝利

4  
戦力拮抗

5  
レビル艦隊勝利

6  
レビル艦隊勝利  
ギレン艦隊敗走

7  
レビル艦隊勝利  
ギレン艦隊敗走

8  
レビル艦隊勝利  
ギレン艦隊敗走  
ギレン総帥戦死

9  
レビル艦隊勝利  
ギレン艦隊敗走  
ギレン総帥戦死  
ジオン軍降伏

1  
0 熱烈歓迎

結果 4 戦力拮抗

「……まだやっています」

「まじかよ」

移動に時間がかかるとはいえ、数で勝っているのにジオン軍は連邦艦隊相手に互角の殴り合いを続けていた。

これで、増援を送り込んでいなかったらと思うとぞつとする。  
ギレン・ザビの指揮能力は本物であると納得せざるを得ない。

「……………」

戦場が移動してないか？」

「ええ。」

初戦から戦場が移動していますね。

MS戦の出撃間隔もあるので、連邦軍が数で押ししてるせいで、ジオン軍が後退……………」

オボロの言葉を遮って俺は叫ぶ。

ジオン軍の後退の先にあるのは宇宙要塞ア・バオア・クー。

「ジオンの奴ら、巧妙に連邦艦隊をア・バオア・クーに引きずり込んでるぞ!!」

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようす その10

「ちよつと『戦後』の話をしたいと思つてね。

ニューソクデ『大将』

秘密回線とはいえサイド3にまでこの通信を飛ばしてくるあたり、戦争は終わったのだなと感じざるを得ない。

俺はそんなことを思いながら、モニターに映るジャブローのもぐらことゴツプ大将閣下に口を開く。

「私はまだ中将ですがね?」

「どうせ、あと数日かどうかの話だ。

何よりも、レビル君の功績を守った事も大きい。

レビル君も恨みがあるからといってわざわざ直率しなくてもいいと思うのだけどね」  
あー。

レビル將軍は第二次世界大戦でのアイゼンハワー將軍ポジカ。

となれば、俺はパットン將軍かブラッドレー將軍の役回りか。



先が見えた俺はぼやく。

「この戦争が終わったら、退役するつもりだったのですが……」  
「するならせめて三年は待ち給え。」

レビル君を政治家に転身させて、連邦軍を政府の枷にはめなおすまではね」

当たり前だが、地球連邦軍は地球連邦政府の下部組織だ。

軍があまりにも肥大化した結果、ティターンズやエウーゴみたいな軍閥が出来上がって内戦までやらかしてしまう。

寄生虫を自認しているゴツプ大将は、地球連邦軍が人類社会を食いつぶしかねない事を懸念しているのだろう。

たしかに、戦後レビル將軍が生きていたら、確実に政治家に転身させられただろうし、あの混乱は無かつただろうに。

「という訳で、次の任務先だが、サイド7、サイド5、グラナダ。  
好きなのを選び給え。」

名前は何か別なものになるだろうが、実質的な総督として赴任してもらおう」

序盤はともかく中盤以降は連邦優勢で推し進めた結果、かなり宇宙に連邦の支配領域  
ができあがっていた。

戦後の社会不安の改善は経済再生にあり、その経済再生は悪化した治安の回復なしに

は達成されない。

そして、赴任先を見て気づく。

サイド3ジオンが無いことに。

「ジオンは残すのですね？」

「今、あそこを占拠しても待つているのは泥沼のゲリラ戦だ。

それだったら、傀儡政権を作って操った方が楽だろう？」

ゴツプ大將は笑いながら、重大なことをさらりと言った。

それがこの通信を送れる理由だったか。

「先ごろ、ジオン軍地球司令官ガルマ・サビ少將が降伏を宣言した」

ガルマの統制力 100でガルマ様ばんざい。

99

「彼の降伏宣言で、地球各地で交戦していたジオン軍が次々と降伏してきている。

従わずに夜盗化した連中も出るだろうが、現成の戦力でどうとでもなる。

ここで負けても、戦争の勝利はもう揺るがないという訳だ」

仕掛けたのマ・クベ中將だろうなあ。

つまり、ガルマ・ザビで傀儡政権を作るといふ訳だ。

これでこの戦争は終わったな。

「なるほど。」

だからこういう通信ができる訳ですね」

「私は臆病だからね。」

安全が確保できないと出てこないのさ」

モニターが切り替わり、宇宙に打ち上げられている連邦艦艇が見える。

ついに出てきたサラミス改級とマゼラン改級が打ち上げられているのが見える。

「コリニー提督に増援艦隊を率いさせている。」

サイド5に直進してそのままサイド3に向かわせている。

あと、ワッケイン提督のルナ2守備隊をそっちに送ったから好きに使うといい」

これが連邦の底力。

レビル艦隊が壊滅しても更に増援が控えている。

コリニー艦隊

マゼラン改級 5隻

サラミス改級 45隻

コロンプス級 17隻

サイド3到達時間 8日

ワツケイン艦隊

マゼラン 3隻

サラミス 12隻

コロンプス 14隻

サイド3到達時間 4日

「なるほど。」

「サイド3の生産設備は壊すなということですね」

「察しが良くて助かるよ。」

「イデオロギーや個人的感傷で生産設備を破壊する余裕はもう連邦には残っていないんだよ」

「それを唱えているの、ゴツプ大将だけでしょう?」

「ああ。」

「だからこそ、ニューソクデ君には残ってもらわないと。」

私の中の席座つてみるかい？」

「悪くないですな」

派閥争いで色々な所からお誘いや足の引つ張りがあつたのは理解している。

その中で、軍政畑で物流面を掌握しているゴツプ派閥は一番まとまな所だし。

「というわけで、少し個人的なお願いだ。

サイド3に被害を出さずに、ア・バオア・クーで遊んでいるレビル君を死なせないでくれ」

「また、難しい事を」

「だから君に頼むんだよ」

俺はため息をついて敬礼した。

ゴツプ大将も敬礼を返す。

「サイド7を。」

あそこは私が作つたようなものです」

「後ろは任せたまえ。」

ニューソクデ『総督』

だからその役職は早いと……

「コロニーレーザーは撃てるか？」

コロニーレーザーチャージ24%

ア・バオア・クーまで届くチャージ57%

チャージまで1日

危険性のあるトラブルレポート23件

「調べた所、現在のチャージは24%。

ア・バオア・クーまでの射程でチャージを考えると57%は欲しい所です。

あと1日あれば、多分届きますね」

すごいな。コロニーレーザー。

連射が可能とはと感心したら報告してくれたマシユが渋い顔をする。

もちろん、欠点もある訳で。

「ただ、構造上連射は想定していないので、砲身が持つかどうかは怪しい所です。

現在、危険性があるトラブルレポートが23件報告されています」

つまり、暴発の可能性がある銃の近くに屯しているという訳で。

勝ち戦が確定しているのに、これに命を賭ける必要性は俺にも連邦軍にもなかった。

「じゃあ、次善の手を使うか。」

次の通信を周辺宙域にフルオープンで流してくれ」

『アルテイシア・ソム・ダイクン。ホワイトベースに乗艦しているアルテイシア・ソム・ダイクンは何処にありや。全世界は知らんと欲す』

衝撃度 1000ほどシヨック

連邦軍 25

ジオン軍 40

知っているというのはいかようなことだ。

ホワイトベースに乗艦しているアルテイシア・ソム・ダイクンことセイラ・マスがホワイトベースに乗っているのは乗員名簿を取り寄せて確認している。

連邦軍は『何言ってるんだこいつ?』の反応だが、ジオン軍にはテキメンに効いた。

特にニュータイプが磨かれつつあるシャアならば、セイラの反応を探ることは可能なわけだ。

それは暴れているジオンNT部隊の足が止まる事を意味していた。

ジャブローからの後退命令 低いと無視 +アルテイシア電報の衝撃

96+25

ギレン艦隊の追撃 —アルテイシア電報の衝撃

52—40

「レビル艦隊、戦闘宙域から後退していきます！

ジオン軍の追撃はまばらです!!」

MSパイロットが人間である以上、疲れもすれば眠りもする。

ギレン艦隊はギレン総帥の天才的指揮でア・バオア・クー正面前まで引つ張ってこれたのだが、将兵たちの疲労が限界に来ていた。

きっと、ア・バオア・クーの射程に入った段階で、艦隊を休憩させて要塞主砲と守備隊MSに交代させる予定だったのだろうな。

ギレンの察し判定 91

91以下で生存戦略 46



「ア・バオア・クーより多数の艦艇が逃げ出しています！

これは……地球軌道圏外に向かっています!!」

予想通りだ。

政治的・軍事的に詰んでいるのにギレン・ザビが気づかない訳がなく、こちらがわざとすきを作ったことに感づいたらしい。

地球連邦は傀儡国家として独立させるジオン共和国との講和を急いでいたし、ガルマ・ザビが政府首脳部に入るだろうジオン共和国は連邦へのけじめをつける為にギレン・ザビの首を狙わざるを得ない。

ジオンが政治的内戦が確定してる中、再建された戦力に接收確定のソロモンやア・バオア・クーやコロニーレーザーがあるので、何かやらかしたら今度こそまとめて潰すことができる。

何よりも素敵なのが、あれだけ見事な指揮を見せたギレン・ザビが逃亡した事で、連邦内部の派閥争いが一旦収まるという所が素敵である。

テイターンズとエウーゴの発生フラグ？

できて当然だろうが、そこまで俺の仕事ではないし、できた時には退役しているはずだ。

ついでに、テイターンズの拠点となるグリプスに総督として俺は赴任する予定だし。

「レビル艦隊が見えました！」

結構やられているみたいですよ」

「我が艦隊はレビル提督の指揮下に入る。

あとは向こちらの指揮に従え」

マシユに指示を足したら、叢雲が側に乗ってきた。

こういう時にこういう事を言うてくるのは、叢雲との付き合いが長い証拠。

だから、俺は叢雲を抱きしめてキスする。

「終わったわね」

「ああ。

あとは、この世界の人間の仕事だ」

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れて一年戦争を乗り切るようです リザルト

評価

317+ルウム攻略100+グラナダ無血開城1000+サイド3攻略1000+コロニーレザー確保100+終戦関与300+ゴツプ提督のミッション達成300 || 2217

愛人風評被害40—裏工作(マ・クベ提督とサイクロプス隊利用) 500—裏工作(シーマ艦隊助命) 300—艦艇損害数マゼラン5×10+サラミス3×14+コロンプス2×3+MS110 || 1048

2247—1048 || 1169

サイド7

一年戦争後、月面都市やサイド6に次いで繁栄する事になったコロニー群。

ルウム戦役での反ジオン避難民を中心にした事もあって、反ジオン感情が強い。

サイド1とサイド4のコロニー残骸を再生させてその数を増やしているが、数は数基

と少ない。

連邦軍基地となったソロモンと元からの拠点であるルナ2の連邦軍将兵の家族がここで生活している他、連邦軍直轄の為に空気が無いのでアナハイムエレクトロニクス等の企業が進出し経済的発展が進みつつある。

地球圏の治安の回復100で回復

86

一年戦争が終戦したのはいいが、艦隊が温存されているのとソロモンやア・バオア・クーを無傷で接取したこと、ジオン共和国国防大臣となったガルマ・ザビのカリスマによって、地球圏の治安は急速に回復しつつあった。

また、このあたりの手配に奔走したのが、ジオン共和国首相に連邦から指名を受けたマ・クベ氏というのは言うまでもない。

そのおまけなのだろう。

エルラン將軍はグラナダの総督としてジオンを監視している。

逃亡ジオン軍の逃げた先

- 1 アクシズ
  - 2 アクシズ
  - 3 アクシズ
  - 4 火星
  - 5 火星
  - 6 木星
- 結果 2 アクシズ

逃亡した残存ジオン軍は、ドロスとドロワを中核としてアクシズに逃げ込んだ。

いずれ再起を目指すのだろうか、連邦軍は各基地に相応の艦隊を配備して睨んでおり、そのすきは今の所ない。

連邦議会が再開し、戦争英雄として首相の座についたレビル氏は地球圏の再生と融和を掲げてアクシズと対峙することになる。

そして、アクシズ侵攻時にその矢面に立つのがジオン国民に高い人気のガルマ・ザビという訳だ。

シャアの行く末

- 1 シャアとしてアクシズに
  - 2 シャアとしてアクシズに
  - 3 クワトロとして連邦に
  - 4 クワトロとして連邦に
  - 5 キヤスバルとして政界に
  - 6 キヤスバルとして政界に
- 結果 5 キヤスバルとして政界に

ジオン軍逃亡の際にきれいに忘れ去られていたのが宇宙要塞ソロモンである。

ギレンとウマが合わない連中は逃亡の際に離脱し、このソロモンにて降伏と武装解除を受けていた。

そこに、シャアが率いるNT隊の姿もあつたのである。

あれだけ派手にアルテイシア・ソム・ダイクンの名前を出していたので彼女が政治の駒として利用されるのは目に見えている。

そのため、彼は妹を守るためにキヤスバル・レム・ダイクンとして政治家の道歩むことになる。

今は、グラナダ選出の連邦議会議員として政治を学んでいる事だろう。

もちろん、彼の政界入りを強烈に支援したのは俺であり、友でありライバルであり良人だったガルマ・ザビだった。

なお、シヤアは政界入り後にララア・スンと結婚。

ガルマもイセリナ・エツシエンバツハと結婚するのだが、これも強烈に支援したのが俺だったりする。

アムロは、少なくとも世間に出ていない。

それが良いことか悪いことかはわからないが、本人にとっては幸せな事だろう。

こんな感じで、俺の関与した宇宙世紀は続いてゆく。

『お疲れさまでした。』

という訳で、クリアボーナスですが、魂の移動が可能なオボロはこっちのデータをメガテン世界に移しておきますね。

これが第一のクリアボーナスです。

で、功績1000点の中で好きなのを選んでください』

「ん？」

10000点？」

『端数を消すついでにシヤアとガルマへの支援分を引いています』

「なるほど」

宇宙関連技術 コロニーやMS技術 500点

海洋艦船

ヒマラヤ級空母 艦船データはひゆうが型護衛艦を流用 300点

モンブラン級ミサイル駆逐艦 艦船データはアーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦を

流用100点

人間

シーマ艦隊全員 500点 海兵隊+艦船乗組員+パイロット&整備員

シーマ中佐のみ 100点

サイクロプス隊 100点

「人間はこれどういう扱いなんだ？」

『人間を持つていくのではなくて、この世界の人間のコピーデータをメガテン世界に持つてゆく形になります。』



経歴とかもメガテン世界に合わせた上で、最初から生活している形で登場させますよ。

つまりその分海自隊員が増えます。

ザンジバル三隻とムサイ一隻だから、大体2000人ぐらい。

ただし、馴染ませるので好感度はリセットで』

「さすが女神様。

ここまでくると何でも有りである。

コロニーや宇宙関連技術がお手頃価格なのは？」

『あの閻鍋世界、学園都市があるし麻帆良学園経由で火星に行けるでしょ？

宇宙世紀に結構手が届くのよ』

「宇宙関連技術とシーマ艦隊できれいに使い切れるのはおすすめという訳だ？」

『最初は宇宙関連技術だけ渡すつもりだったけど、感想からのネタで』

「わかった。

じゃあ、その2つをもらおう」

『はい。

では目覚めるのです。

入即出やる夫よ……』

目が覚めた。

見慣れた護衛艦むらくもの自室。

裸の女たちの数を数える。

……たしかに一人増えていた。

という訳で、自己紹介をしてもらおう。

「海上自衛隊所属甲賀隴二佐です。

あなたに征服されたこの身体、嫌になるほど私に馴染むわ。

彼女は軽蔑するでしょうね。

私があの子みたいになっちゃって。

あとどれだけ存在できるか分からないけど、わたしはずっとあなたの女よ」

こういう時クローン体持ちの隴は便利である。

なお、顛末を知った甲河隴二尉と話し合って、双子設定にするとかなんとか。

横須賀基地を叢雲とステンノとマシユを歩いたら、お目当ての人物に出会えた。

ああ。向こうは知らない設定なので、生真面目に敬礼する。

「海上自衛隊横須賀基地所属、雅羅派詩舞二佐と申します。」

……何か御用でしょうか？」

待遇だけは約束しよう。

何しろ、この世界の自衛隊は、人手不足の極みだからな。

俺は敬礼して意味もなく笑った。

「ただの挨拶だよ。」

気にしないでくれ」

おまけ

「私、連れてつてもらえなかったー……ぐすん……」

おねーちゃん太陽神をなだめるのにえらく時間がかかったのは内緒だ。

## 閑話 小ネタ劇場 その8

「やあ。マスター君。

この姿では久しぶりだね」

叢雲艦内にあるロリンチちゃん工房に顔を出すと、ロリンチちゃんがダヴィンチちゃんに変わっていた。

これぐらいで驚いたのでは身が持たない。ダヴィンチちゃんだし。

「で、何でその姿に？」

「ひどいなあ。

もう少し驚いてくれてもいいじゃないか」

そんな事を言いながら、ダヴィンチちゃんは理由を語る。

案の定、駄女神様だった。

「君、別の世界に行つて、その世界の根幹技術をもらつてきたよね？」

それを君の女神様は記憶媒体よろしく、私の中に押し込めたんだよ。

おかげでキャパが足りなくなつてね。

慌ててこの体を起動させたという訳だ」

作っていた訳だ。元の体を。

そりや、蒼崎橙子やアリス・マーガトロイドやエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルなんかと知り合えば、体なんてどうにでもできるからなあ。

クローン技術が完成している対魔忍世界やニンジャスレイヤー世界ともつながっているし。

「じゃあ、元の体は？」

「とりあえず眠らせているよ。」

シヤドウ・ボーダーを単体で走らせることもないけど、バックアップ体としてここに置いておくことにする予定さ。

壊れたらまた元に戻って作り直すさ」

へらへらと自分のことを語るダヴィンチちゃんだが、ここから先は真顔になる。

それは、天才ゆえの警告。

「で、だ。」

私の中にあるこの理論たちだが、理解しているのかい？

人が、ついに星の海に乗り出すための人類の夢の具現化さ。

出せばとんでもない事になるよ」

「だから、あの駄女神様はデータ記憶媒体としてダヴィンチちゃんに預けたのだろうさ。」

俺じゃあ知っていても、その理論体系を現実化させるのに苦勞するからな」  
文字通りの天才であるレオナルド・ダ・ヴィンチに不可能はない。

ましてや完成された理論体系ならば、別世界の理ですら可能にする。

それぐらいのことができるから、彼女は人類史に英霊として刻まれたのだ。

「せっかくだから、話しておくか。」

その世界で、その理論で、人がどういう戦争をやらかしたかをさ」

という訳で、一年戦争を軽く語る。

コロニー落としやコロニーレーザーのあたりでダヴィンチちゃんも頭を抱える。

百億近い人間がわずか一月で消えたという惨状に第二部をある程度知っているダ

ヴィンチちゃんですら、こんな言葉を吐かざるを得ない。

「ねえ。マスターくん。」

守らないとという決意は今でも変わっていないが、私たちの汎人類史は本当に……」

その先を言わなかったのはダヴィンチちゃんの最後の良心なのだろう。

それを尊重した俺はそのまま流す事にした。

「学園都市はもうすぐ軌道エレベーターの建設に踏み切る。

完成は多分21世紀になるし、建設には魔術的な裏がある。

けど、この理論を握っているとその計画どうなるのだろうな？」

「君は、この世界でも君が見てきた光景を見たいのかい？」  
「まさか？」

強いて言うならば、ああなつても生き残れる人類存続のための手段を確保したいだけ  
さ。

扱いはダヴィンチちゃんに任せるよ。

どのタイミングで学園都市にその技術をばらすか好きにするといい」

後日談だが、ダヴィンチちゃんはこの技術を学園都市にすべて流した。

人類を信じ、未来を彼女は信じたからだ。

それを俺は尊重したいと思う。

なお、学園都市のセキュリティレベルが急上昇したのは言うまでもない。

年が変わる。

気づいてみたら1994年である。

年明けから宮内省が稼働し、技術統括審議官としての仕事が待っている。

という訳で、少しバカンスに行くことにした。

「いらつしやいでちー」

「……どうしたでちか？」

宿のロビーでの紅閻魔の一言で、口を押さえる俺と叢雲。

提督業をやっていると、いやなミームが頭をよぎるのだ。

「あれは終わった。」

終わった。

「うちはホワイト鎮守府だ」

「そうよ。」

オリヨクルはもう消えたのよ。

過労な潜水艦娘はもう居ないのよ」

「……けど、ゲージ回復と支援で削るために潜水艦で、ソロモンに出撃は言い逃れできな

いのでち？」

グサツツツツツツ!!!

司令官と秘書官は紅閻魔の致命的な一撃を受けた。

「すまなかつた。」

すまなかつた……大破進軍……ハイパー北上様……」

「ごめんなさい。」



ごめんなさい。

お仕置き部屋はもういやなの……

燃料が尽きて攻略をあきらめてごめんなさい……」

宿に泊まる前に、魔人大僧正に供養法事をしてもらったのは言うまでもない。

なお、紅閻魔判定だと、まだ地獄行きではないらしい。

「そうでちよ。

お客様、億の人の命を救ったでち。

彼らがお前様を救うでちよ」

あ。

ガンダム世界のやつもカウントに入っているのね。

この閻魔亭繁盛しているのだが、人でない皆様というのがまた。

滞在中に思ったのだが、ここを起点にすれば、切り離された後のカルデアとつながれるのではないだろうか？

そんなことを考えながら、のんびりと湯治を堪能したのだった。

え？

おねーちゃん？

「うう……なんでか頭があがらない……」  
「相変わらず愛情過剰すぎて旦那様を肥えさせる気でちか……」  
「<<ヘルズキッチンで成果を確認中」  
「<<キャス狐データを取り込んだせい」

## 始動

1994年。

宮内省始動。

霞が関の合同庁舎内で室戸次官の訓示を受けた後、本格的に仕事が始まる。

その仕事は、日本各地で発生しているオカルト事件の把握と対処だった。

「こんなにあるのか……」

「こんなにあるのね……」

「こんなにいるのね……」

八百万の神々の国日本。

そのオカルトがらみのトラブルは大から小にかけてこんなにあるのかと唾然とするしかない。

さらに唾然としたのは、それを個々の組織が連携なしで解決していたという現実。

宮内省とその下部組織である神祇院は、その案件を一元的に管理するために生まれた以上、これに対処する必要性に迫られたのである。

霞が関地下に作られた旧関東機関本部を接收し、神祇院本部となったその建物内では

電話が鳴り響き、ファックスが吐き出しを続け、最新鋭のパソコンに次々とデータが送られてきていた。

そこで働くのは、百人近いマシユ・茶々丸たちが信じられないスピードで情報を処理してゆく。

「まず情報をくれ。」

それをこちらで判別して、対処を決める」

完全に後手になる事を覚悟したうえで俺たちはこの方針を貫いたのは、各対魔組織の上に屋上屋を重ねたようなもので、各組織の忠誠がどこまでかわからないというのが一つ。

そして、もう一つこつちの方が重要なのだが、個々の事情に戦力を逐次投入した結果本命の世界の危機に対処する戦力がありませんでしたという事を恐れたというのがあ

る。「で、信頼できる戦力はどれぐらいだ？」

俺の質問にスーツ姿のマシユが答える。

ステンノもスーツで叢雲は海自制服である。

俺もここではスーツになっている。

「はい。」

横須賀基地側でシーマ二佐とその配下の部隊人員が使えるので、ハイデッカーとオイランロイドと対魔忍の皆様をこっちに移しています。

あと、ここを拠点にしていた関東機関の職員およそ50人もこちらで警備をしています」

シーマ二佐はちゃんと日本苗字があるのだが、言いやすいのでこっちで。

それはともかく、待遇改善を約束してひとまずの忠誠は買ったが、この関東機関の連中がどれだけ使えるかいまいわからなかった。

叢雲が懸念を告げる。

「いやなのが、横須賀までどうやって行くかなのよね」

車は却下。

電車は一般人の巻き込みを考えたら選択肢から外すしかない。

となるとヘリだが、飛行系悪魔や魔法があるのでどうぞ狙ってくれというものである。

ターミナルで繋ぐという考えも浮かんだが、つないだ結果敵に侵攻されましたというオチが見えるのでこれも選択肢から外した。

結果、俺たちは横須賀に待機し、ここは信頼できる人間に預けるしかないだろう。

という訳で、ここを任せるために引っこ抜いた苦勞人を肩を俺は叩く。

「という訳で、ここが君の城という訳だ。

存分に働き給え」

「……了解しました」

山本信繁元内務省公共安全庁調査第三部部长は、神祇院総裁としてこの場所から日本のオカルトがらみのあれこれを差配する事になる。

大抜擢なのだが、オカルト側の情報に精通している内務官僚な時点で彼の抜擢は規定路線だったといつていいだろう。

俺がその椅子に座るには外様過ぎたからこそ、その上の統括審議官という局長級待遇で飼い殺したからだ。

そんな心温まる光景を、那田蒼一郎旧宮内庁神靈班主任、現神祇院副総裁がうろんな目で見つめる。

初日という事で幹部があつまつての会議の席の一コマである。

「なかなか心温まる職場ですなあ」

『宮内省』特殊査察部執行官の入江省三が茶化すが誰も笑わない。

彼が、俺の監視であるの言うまでもない。

一方で、集まり出したデータを解析しだした時点ですでにいやな兆候が手元に届いている。

「メシア教とガイア教の介入が多いな」

第一次報告を持ってきた朔月陽代子神祇院参事官は、苦々しい顔で報告をする。

「手が回らない上に人口が多い都市部にかなり浸透していますね。」

世は新興宗教ブーム真つただ中で終末思想もはびこっていますから、報告されていない情報を考えたらさらにもっと多くの介入があると思いますよ」

一般人にはわからないアンダーグラウンドな事件だけに、介入した事件の多さを考えればいやでもこの結論に行きつかざるを得ない。

つまり、メシアもガイアも、オカルトがらみではこちらと一戦できるだけの戦力をすでに確保していると。

「仕方ないな。」

更に戦力を増やすか」

「あてはあるんですか？」

「ないわけじゃない。」

使いたくはなかったけどな」

幹部連中の中に見ている中で、俺は携帯電話を操作する。

かけたのは、かつて取引をしたヴィクトリア・ザハロフ。  
「ああ。すまない。」

またビジネスをお願いしたい。

そつちで娼婦に堕ちた対魔忍、全員引き取りたい。

何人ぐらい居る？

そう。クローンですらないやつで、生きているならば四肢がもげて、箱でも問題ない奴だ」

しばらく待っていると、那田蒼一郎が低い声でつぶやく。

目に怒気が宿っていた。

「ずいぶん、ろくでもない言葉が聞こえてきましたか？」

「彼女たちを買い取って治療するのさ。」

その昔からこの国の魔を討ってきたものたちだから、治療すれば戦力化に寄与する。

その治療費はこちらが出すよ」

そのまま視線を山本信繁に移す。

対魔忍の惨状は彼が一番よく知っているだけに、彼だけは俺のすることに異を唱えな  
い。

「対魔忍育成学校の五車学園を麻帆良学園に移設したる？」



麻帆良も麻帆良で問題があるが、対魔忍はそれ以下だ。

あそこを立て直さないと、戦力化と状況の安定は望めんよ」

「その戦力化と状況の安定は期待してもよろしいので？」

入江省三が楽しそうな声で確認するので俺も笑顔で返事をする。

なお、年が明けた麻帆良学園には『文部省』の入江省三が監察官として赴任しているはずである。

麻帆良学園の主権をメガロメセンブリア元老院から奪い返すのが彼の使命である。

「まあな。

……もしもし、615人。

一括で買おう。

価格は？

300億、まけてくれ。

どうせ半分以上は使い物にすらならない連中なんだろう？

150……仕方ない。175億でいい。

今日中に麻帆良学園都市に搬入してくれ。

受け入れ準備は、こつちでする」

電話を切って、再度かけなおす。

かけるのは、学園都市の絡繰茶々丸。

「やあ。

授業中すまない。

ちよつと急ぎの仕事を頼む。

君の主のダイオラ魔法球を借りたくてね。

あと、超鈴音くんに連絡を頼む。

向こうから電話をかけてくれると助かる」

エヴァの持つダイオラ魔法球のすばらしい所は、中に入れば時間がずれるという事だ。

具体的に言うと、外の一時間がダイオラ魔法球の一日になる。

つまり、中で長時間治療が可能という訳だ。

具体的に言うと、メイディアリイの『修補すべき全ての疵』撃ち放題。

「……どうしたの?」

「別に」

ふと見ていたのに気づいた叢雲が声をかけてくるが、俺は適当にはぐらかす。

叢雲を見たのは、宇宙開発技術を学園都市に渡した結果、この世界の宇宙開発が加速して、ある船のアンロックが確認できたからだ。

## 村雨型宇宙巡洋艦 ムラクモ

つまり、叢雲を宇宙船化して木星のプラントを確保に行けるのだ。

時間さえあるならば。

その時間が、現在の所決定的に足りない。

「っ!？」

何事だ!？」

初日からこれである。

木星までの往復でどれぐらい時間がかかるか？

半年もあけていたら、人類滅んでしまいましたになりかねないのがこの世界の怖い所である。

緊急連絡のスピーカーから慌てた声が響く。

「こちらエコービルのターミナル実験施設。

所属不明の勢力の攻撃を受けて防戦中！

支援をお願いします!!」

敵勢力

1 超人 ドウマン レベル15

2 キヤスター・リンボ レベル90

2 キヤスター・リンボ レベル90

## 守備隊

八意思兼神 高位分霊 レベル130

90:130||4:6

1 キヤスター・リンボ勝利 エコービル制圧 八意思兼神消滅

2 キヤスター・リンボ勝利 エコービル制圧

3 キヤスター・リンボ勝利

4 交戦中

5 八意思兼神勝利

6 八意思兼神勝利 キヤスター・リンボ撤退

7 八意思兼神勝利 キヤスター・リンボ撤退

8 八意思兼神勝利 キヤスター・リンボ撤退

9 八意思兼神勝利 キヤスター・リンボ消滅

10 熱烈歓迎

結果 8 八意思兼神勝利 キャスター・リンボ撤退

「落ち着け。」

状況はどうなっている?」

マイク越しに俺が問い返すと、前に聞いた事のある声が変わる。

交戦していた八意思兼神らしい。

「敵はターミナルから出てきて私と交戦。」

これを撃退しました。

そのままターミナルの中に入って逃げた所です」

カメラにはしっかりと戦っている八意思兼神の姿とキャスター・リンボの姿が見え

る。

「ここ、本来のボスは超人ドウマンだからなあ……」

「あれだけ世界を渡っていたら、向こうも気づくでしょう?」

ステンのノの楽しそうな突っ込みに俺は黙るしかない。

ああいうのが出たという事は、魔術王や向こうの神も気づくという事で。

という訳で通信を冬木とプリズマ・ゴーズの方に向ける。

「こつちには来ていませんよ?」

「こつちも来ていないわよ」

冬木のターミナルを守護する八衢比売神とプリズマ・コースを管理する悪魔ほむらはそれぞれ返事をする。

ターミナルから出てそこから逃げたとすると後は……

俺は地図を見てため息をつく。

このターミナル実験で科学側の提供をしているのは学園都市。

その為、学園都市にもターミナル端末が置かれている。

治外法権の学園都市。

この組織の穴に逃げ込まれた手際にこちらは感心するしかない。

「この件は室戸次官に報告する。」

アポイントメントを頼む。

あと、吉祥寺周辺に戦力を投入する。

人員は任せるが、ああいうのと当たるのを考慮すること。

以上だ」

おそらくは『真・女神転生』のシナリオも始まっている。

どこまで戦力を確保できるか？

どこまで世界と物語が闇鍋になっているのか？

それを考えてもきりがないので、報告書ができるまで俺は与えられた部屋の机に座つ

て盛大にため息を吐くことしかできなかつた。

なお、615人の対魔忍は翌日に回復し、240人が即戦力として組み込まれた。残りは治療と再教育で3日の時間が必要になった。

# 学園都市暗闘 その1

学園都市内部の混乱

37

統括理事会の制御＋宇宙開発技術譲渡ボーナス30

30＋30

他勢力の介入

25

日本政府の介入

79

学園都市修正

『とある系』学園都市キャラに28%のバフ

エコビル襲撃事件は当事者である日本政府の強硬な反応を引き出した。

事実、キャスター・リンボという厄介な化け物を高位分霊だった八意思兼神でしか相手ができなかったのだから、さもありなんという所である。



統括理事会はセキュリティレベルを急上昇させて対処していたが、こちらはそれをはいそうですかと納得するわけに行かず、キャスター・リンボ討伐の間合同捜査と討伐部隊の駐留を認めさせたのである。

その討伐部隊というのが俺な訳で。

霞が関で椅子を温めるにはキャスター・リンボは強すぎる。

かなりのガチ編成で行くことにした。

やる夫

叢雲

ステンノ

マシユ

オイランロイド

80人

対魔忍＋クローン対魔忍＋元対魔忍

7人＋20人＋240人

甲賀隴

天ヶ崎千草

桃条千影

ダヴィンチちゃん

モードレッド

クー・フリーリン

悪魔

妖精 ハイピクシー 1 v 1 0

妖精 ジャックフロスト 1 v 1 5

妖精 チルノ 1 v 3 2

神獣 ゲンブ 1 v 4 3

大天使 イスラフィール 1 v 4 2

女神 スカアハ 1 v 3 6

天津神 菊理姫 1 v 8 5

COMP外悪魔

鬼女 文車妖妃 1 v 1 2

魔神 大淫婦バビロン 1 v 6 9

万一を考えて、ジャンヌ・ダルクとドレイク船長は横須賀でお留守番。

回復して間もないうえに行き場が決まっていなかった元対魔忍をこれ幸いと戦力化する。

「しかし、彼女たち使えるのかい？」

バス10台を連ねての学園都市への移動。

表向きは旅行社のツアーという事になっている。

ダヴィンチちゃんの質問に俺は書類を見ながら答えた。

「使えるようにするんだよ。」

彼女たちだけでも、低級悪魔を抑えられる力はある。

それが六百人だ。

そして、それでも足りないのが八百万の神々の住まう国日本なんだよ」

『真・女神転生』あたりのシナリオが始まると、当たり前のように悪魔が出てくるし。

潰せる戦力とはにかくなんとしても確保しておきたい。

「で、だ。」

あのキャスター・リンボ。下総のあれだと思おうか？」

「あの画像だとそうとしか見えなかったね。

あれがどういう経緯で出てきたか、こつちも調べないと。  
ダヴィンチちゃん。

目の前に、大量に餌があるけど、食べ過ぎないように」  
「わかっていきますって。

マスターくん」

本音を言うのと討伐は二の次で、何でキャスター・リンボが出てきたのかの究明が理由である。

魔術王やあの神あたり出てくるとややこしい事になりかねないからだ。

バスが止まり、正面ゲートに到着する。

すでに迎えがこつちに出向いていた

「またあなたか。

今回は役職が違うがよろしく頼むよ。

テレスティーナ・木原・ライフラインさん」

「ええ。

学園都市の技術を貴方は高く評価してくださいさる顧客の一人ですから。

入即出やる夫統括審議官殿」

第三学区の外務省研修施設に入る。

実質的な日本大使館であり、その施設内には俺の連れてきた人員を収容するだけの大きさを持っていた。

「とりあえず、中のチエックだ。」

科学に魔術両方から調べること。

こつちには、超天才が居るから、隠しても無駄だという事をわからせるように徹底的に頼むよ。

「ダヴィンチちゃん」

「任された」

一方で今回連れてきた対魔忍連中を指揮するのは甲賀隴に任せている。

また、元対魔忍連中の中に、名前ありキャラが出たので彼女たちに隊長になってもらいハリビリと実戦をしてもらう予定である。

具体的には、スキルアウト連中相手に遊んでくれるだけでいい。

その最中で大物が出たら逃げてこちらに報告する。

俺からすれば求めるのはたったそれだけなのだ。

その意図を説明した対魔忍連中は甲賀隴以下渋い顔をする。

「もう少しお役に立ちたい所なのですか……」

「キャスター・リンボみたいなのが出てきたら、勝てる訳ないだろう?」

あの画像はちゃんと全員に見せて格の違いはちゃんと判らせている。

こちらが求めるのは、そういう戦いに余計な戦力を取られないための雑魚掃除のみ。ぶつちやけると、逃げて情報を持ち帰るだけでいい。

最悪帰らなくても、『何かいる』という情報は得られる。

その数が大事なのだ。

という説明をこんこんとした結果、なんとも言えない娼婦……じゃなかった元対魔忍の面々。

名前ありキャラの人数 6人

雨垂ナツメ

美坂智代

美戸理珠奈

八津愛子

東堂紗也子

## 九十九里紫音

彼女たちは元ゲームではBB……ベテラン扱いだが、この時期はまだ麗しい花の十代というやつで、すでにエロの経験値がふり切れているあたり、対魔忍というのがどういふものが、よくわかるうというものである。

「失礼ですが、なぜ私を今回連れてきたのかご説明をお願いしたいのですが？」  
今回連れてきた桃条千影が俺に質問をぶつける。

彼女が所属していた関東機関から連れてきたのである。  
という訳で、俺は彼女にぶっちやける。

「一つは、異物を入れたかった。

見ればわかるが、対魔忍というのはああいふものでね。  
あれの戦力化と損害の出ない戦術構築が今回の目的の一つだ。  
君の下にも対魔忍たちをつけるからうまく使いたまえ」  
少し口を閉じて続きを口にする。

ちらりと甲河隴二尉を見ると、彼女もこちらに微笑み返す。

「もう一つは、中の監視だ。

私が引き抜かれて内務省派閥、元からの対魔忍が自衛隊の情報局でね。

仲良くお仕事をしていたら、足を引っ張られましたでは話にならないからな。

君の関東機関は元大蔵省だ。

立ち位置とコネが違うから、掣肘してくれ」

「そういう事でしたら。

それにしても統括審議官はずいぶんと女性がお好きなようで」

真つ向から皮肉を言ってくれる当たり、彼女の感性はかなり真つ当だ。

孤児出身で人体実験の被験者でもあるのだが、治癒を申し出たら断られたあたり、俺ともある程度距離を置きたいのだろう。

それに俺は苦笑して肩をすくめた。

「それぐらいのおまげがないとやってられんよ。この仕事はね」

情報収集 100でやばい

48

1 キヤスター・リンボ関連

2 キヤスター・リンボ関連

3 キヤスター・リンボ関連



- 4 キャスター・リンボ関連
- 5 木原一族関連
- 6 絶対能力進化関連
- 7 絶対能力進化関連
- 8 ノマド・アンブレラ関連
- 9 ノマド・アンブレラ関連
- 10 熱烈歓迎
- 結果 8 ノマド・アンブレラ関連
- カウンター 48以下でバレル。
- 48
- 相手の反応 100で過剰反応
- 73
- キャスター・リンボの暗躍
- 79

「スキルアウト連中を中心に情報収集をしたのですが、ノマドとアンブレラの研究員が彼らを大量に雇用しているみたいなんですよね。」

で、彼らに雇用された連中は姿を見せていないと」

その日の夜。

キャスター・リンボ関連の情報を漁っていたのに、出てきたのはノマド・アンブレラ関連の情報である。

しかも、どう考えてもゾンビや生物兵器の実験体のお誘い。

「どうします？」

深く探りますか？」

甲賀隴の報告に俺は頭を抱える。

ここがミレニアムと繋がっているのを知っているのは俺だけだ。

そして、その足跡を各国諜報機関が必死に探しているのに、このタイミングで俺の所にポンと出た。

その意味する事は？

「畏に引つかかったな……」

キャスター・リンボの策謀かアレイスターのプランか知らんが、俺たちが畏にかかった事だけは確認できた。

そして、その確認はすぐに証明される。

天ヶ崎千草と桃条千影同時に入ってきて報告したからだ。

「入即出はん！」

結果が破られましたえ!!」

「たった今、バイオオハザード警報が発令されました！」

アンブレラの研究施設から火災が発生して研究生物が逃げたって……」

今夜は長い夜になる。

それだけは、確信できた。

## 学園都市暗闘 その2

「迎撃準備。」

モードレッド、クー・フリーン。

頼む」

「よっしゃー！」

「任せなー！」

という声だけ残して出撃するモードレッドとクー・フリーン。

サーヴァントにはサーヴァントだが、だからといって悪魔が通用しない訳ではない。という訳で、追加の増援を送り出す。

「イスラフィールは上空から、大淫婦バビロンは好きに動け。

菊理姫はこの場で支援」

アマテラスおねーちゃんが呼び出した高位分霊だけに、できる事が色々ある後方支援タイプである。

何かやらかしても負けないだろう。多分。

一方で、学園都市のバイオハザード警報の方にも警戒しなければならない。

「アンブレラとノマドの研究所で爆発と火災が発生。

実験生物が逃げ出した為に、安全な所に避難をと呼びかけています」

「場所は？」

「ノマドが第10学区。」

アンブレラが第19学区です」

第10学区はスキルアウトの根城であり、スラムみたいな所がある治安の悪い場所だ。

第19学区も再開発に失敗してさびれた場所である。

その研究所のバイオハザードという事は、学生の避難はまじめに行われない可能性が高い。

「アンブレラのウイルスは下手すれば広がるな。これは。

ダヴィンチちゃん。

前のタンカージャックのデータを元にワクチンは作れるかい？」

ワクチン開発 100で完璧 +30 (スキル天賦の叡智EX) +30 (ハン

ターのデータ習得)

62+30+30=122

学園都市統括理事会のやる気

23

「私を誰だと思っっているんだい？」

もう日本政府の技術提供という形で、学園都市の医療機関にデータを送っているよ。

ただ……」

あつ……

ダヴィンチちゃんの言葉の詰まりですべてを察する。

さすが学園都市。

「向こう側の対応が思った以上に遅いんだ。

データ提供後、生産報告を出したのが第7学区の病院だけだね」

そうだと思ったよ。畜生。

さすが学園都市。

一般人に容赦がない。

「対魔忍およびオイランロイド達は館内警備。

常に複数で動け。

オイランロイドは外に出して警戒させろ。

ウイルススチェックは常時行い、怪我をしたらすぐにダヴィンチちゃんの所に行くこと。

ウイルスは、敵の体液を摂取することで感染するぞ」

学区の閉鎖 23以下で成功

第10学区 43

第19学区 91

「駄目だ。

感染が止まらない。

周辺学区に広がりつつあるぞ」

ダヴィンチちゃんがモニターを見ながら叫ぶ。

俺たちがいるのは第3学区。

アンブレラの研究所があった第19学区とは一つ学区を挟むのみだから、初期の封じ込めに失敗した以上、こっちにやってくる可能性は高い。

「うちのターミナル研究をしていたのは、どこの学区だった？」

「第22学区だね。

セキュリティは最高レベルだから、そっちは大丈夫だと思いたいね」

(マスター！)

キヤスター・リンボを見つけた！

今からぶつ潰す！)

(待て！)

マスター！

あいつ一人じゃない!!

サーヴァントを連れてやがる!!)

1 セイバー

2 アーチャー

3 ランサー

4 キヤスター

5 アサシン

6 ライダー

7 バーサーカー

8 エクストラ



## 3 ランサー

星1 該当なしなので、召喚事故発生。

(違う！)

あれはサーヴァントではない!!)

念話に強引に割り込む大淫婦バビロン。

その声が真面目なのがまた緊迫感を強める。

カメラに映るは鎌を持った骸骨騎士。

いやな名前が浮かぶが、聞きたくない名前を大淫婦バビロンから告げられる。

(あれは魔人ペイルライダー！)

黙示録の四騎士が一騎よ!!)

何でそんなものが出てきた!?

というか、何でそんなものがキャスター・リンボと一緒にいる???

「可能性としてはバイオハザードなんだろうけど、詳しい所は分からないな」

「キャスターがサーヴァントを召喚するケースは無い訳ではない。」

おまけにここは学園都市だ。

何が出て来てもやっぱりなと思うしかないよ」

しゃべっている俺とダヴィンチちゃんの顔から汗がたれる。

周囲の被害なんて気にしない英霊と悪魔と魔人の宴はまだ始まったばかりだった。

キャスター・リンボ 90

魔人 ペイルライダー 95

モードレッド 90

クー・フリーン 70

大天使 イスラフィール 42

魔神 大淫婦バビロン 69

90 + 95 = 185

90 + 70 + 42 + 69 = 271

185 : 271 = 4 : 6

1 キャスター・リンボ勝利 サークヴァント・仲魔消滅(ランダム) 疫病拡大

2 キャスター・リンボ勝利 サークヴァント・仲魔消滅(ランダム)

3 キャスター・リンボ勝利 サークヴァント・仲魔撤退

4 引き分け

5 モードレッド勝利 キヤスター・リンボ撤退 ペイルライダー撤退

6 モードレッド勝利 キヤスター・リンボ撤退 ペイルライダー撤退

7 モードレッド勝利 キヤスター・リンボ消滅 ペイルライダー撤退

8 モードレッド勝利 キヤスター・リンボ消滅 ペイルライダー消滅

9 モードレッド勝利 キヤスター・リンボ消滅 ペイルライダー消滅 疫病鎮静化

10 熱烈歓迎

結果

3 キヤスター・リンボ勝利 サークヴァント・仲魔撤退

統括理事長介入判定

23+50=73

「駄目だ。マスターくん！」

周囲の被害が大きすぎる!!」

苦戦理由は学園都市という都市部戦闘そのものだった。

あまりに破壊力がありすぎる、モードレッドの宝具『我が麗しき父への叛逆』は撃て

ばそのまま学園都市に被害が出る為に撃てない。

ここで学園都市相手に被害を出して外交面にダメージを与える訳にはいかなかった。  
「撤退する。」

令呪を……」

言いかけた時にまさかのビームが戦場で炸裂する。

カメラの先には常盤台中学の制服を着た長髪の少女が。

あれ？

レールガンにしては年代が合わない……

「こんなに騒がしいと、眠れないじゃないの。」

だから、ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

あー。

お嬢様設定あったなあ。

麦野沈利。

麦野の戦意

60

キャスター・リンボの戦意

5

やる夫の説得 60以上で成功

73

キャスター・リンボとペイルライダーはいつの間にか姿を消していた。

とりあえず、第一戦はこちらの敗北という所だろう。

負けた事よりも、アレイスターⅡクロウリーが見ている状況をコントロールしているというのがわかったのは、収穫の一つにあけていいだろう。

あ。

麦野沈利は、賄賂として用意したシヤケ弁で勘弁してもらいました。

運よく大妖精と化したフェアリーが鮭を持っていたので、捌いてできたてホカホカのシヤケ弁に変換できたのが大きい。

マシユがヘルズキツチンを経験してくれたのも助かって満足な味だったらしい。

「お。たしかに美味しそうだな」

「はい。」

皆様の分もありますよ」

パクリ。

たしかに美味……冴えた頭がこんな質問をこぼした。

「なあ。マシユ。」

なんで大妖精はこの鮭を持っていたんだ？」

「はい。」

ダヌ様からもらったそうですよ。

チルノちゃんにあげるはずだったけど、合体でいらなくなつたとか」

「……」

「……」

ただ黙って黙々と美味な焼き鮭をいただく俺とダヴィンチちゃん。

いろいろと冴えわたった頭は、沈黙を最適解とした。

# 学園都市暗闘 その3

バイオハザード拡大 11

学園都市の抗議 11

翌日。

こちらへの襲撃事件もバイオハザードも何事もなかったかのように学園都市は平穏な朝を迎えた。

これぐらいは学園都市にとって日常茶飯事という事なのだろう。

学園都市側からは襲撃事件と戦闘について形だけの抗議が一つあったのみ。

見事に肩透かしを食らう俺たちだが、そんな中やってきたのは麦野沈利だった。

「あんたら、何かした？」

シャケ弁バフ

1 レベル6に

2 レベル6に

3 レベル6に

4 ケルト神属

5 ケルト神属 転生者扱い

6 どないしょ

5 ケルト眷属 転生者扱い

「……という訳で、君のシヤケ弁のシヤケは最高級どころじゃない、ケルトの知恵の鮭だったという訳だが、見事に開花してみたいだね。

アナライズしたら、君、ケルト神族にカテゴリーされているが？」

こういう時の説明役としてのダヴィンチちゃんは便利な事この上ない。

魔法と科学の両方からアプローチできるから俺たちも聞き手に回っている。

「ケルト神族？」

「レベル6のさらに先という事だよ」

そうなのかと完全に置いてきぼりの俺たちにたいして、ダヴィンチちゃんは語る。

語っているのは、盗聴器の先にいる木原一族とその先にいるアレイスターに向けてだ  
と後で知った。

「この都市は、『人間に神様の計算はできない。ならばまずは人間を超えた体を手にしなければ神様の答えには辿り着けない』というのを理念にしているのだったかな？」



当然、そのアプローチの手段としてこの都市が選んだのが超能力という訳だが、魔法サイドから見ると、これは神化に他ならない訳でね。

人間が自分の手で神化するのは難しいけど、魔法側から見て神化というのは結構簡単なのだよ。

そんな一つが、主神による眷属化というやつさ。

神話が体系的に整えられてゆく過程で、その地の英雄や偉人が神化している。

それを君はなぞった結果、ケルトの神族となった訳だ。

おめでとう。レベル6。

たとえ学園都市が否定しても、人類史の天才レオナルド・ダ・ヴィンチが保証しよう。

君は、この都市の理念を達成したのだよ！」

麦野の反応 100で怒る

32

聞き耳連中の反応 100で大事

66

麦野沈利のレベル

転生者補正

30 + 63 = 93

「ふーん。

そうか。なっちゃったんだ。レベル6。

けど、なんか嬉しいというか、怒るとかの前にあっけないというかなんというか……」  
なお、ここでさらなる厄介ごとである麦野相手にドンパチなんてしたくないので、このダヴィンチちゃんの褒め殺しに俺も便乗する。

常盤台中学の制服姿なので、暗部に絡んでまだ日も浅いあたりだろう。

「で、私、何ができるの?」

「こっちで調べた限りでは、ケルト神話の女神リアンソンみたいだね。

何者も追いつけない魔法の馬に乗り、七つの地方すべての食べ物と飲み物を収めても一杯にならない魔法の袋を持つ女神だよ。

これは多分、君の超能力を神話に当てはめた形になるのだろうね」

その説明でなんとなく納得する俺。

麦野沈利の通り名は『原子崩し』。

魔法の馬あたりは速さの隠喩で、たしか『0次元の極点』という特殊空間理論もあつたな。こいつ。

それが魔法の袋に転換されたか。

「まあ、こちらとしてはその成果をかつさらうのもやぶさかではない。

見た所、君はまだ中学生だ。

それであんな所に出てくる理由があるのだとしたら、俺の方でそれを処理してあげよう」

「そんな事できるの?」

麦野の厄度 100でやばい+レベル分

58+93=151

「優しくはないが、かといってできないという訳でもない」

俺はそんな事を言うがもちろん嘘である。

こんな最高のモルモットを学園都市が手放す訳がない。

とはいえ、モルモットであるがゆえに、こんな場末の戦場に投入される事はなくなるだろう。

絶対能力進化実験は一方通行が中心となるはずで、彼女の神化はアレイスターのプランには入っていないだろう。多分。

本当にやばくなったら、引き取って麻帆良学園にでも押し付けよう。

麦野の好感度判定

60

介入判定 60以下で成功

75

「まあ、いいわ。

あんたたち結構気に入っているから、何かあつたら連絡頂戴。

助けてあげるわ」

そう言つて、麦野沈利は去つていった。

帰つたのを確認して俺とダヴィンチちゃんは盛大にため息をつく。

「まだ来て早々というに、学園都市イベントあり過ぎだろう……」

「とりあえず、昨日の襲撃者の追跡と、バイオハザードの調査をしないと。

で、マスターくん。

この都市の上への説得ネタはあるのかい？」

「それこそ無制限に」

俺は笑う。

せつかくダヴィンチちゃんに来てもらっているのだ。

最高のネタがあるのでまずはそれから提案する事にしよう。

「『樹形図の設計者』の修理に協力するのさ」

キヤスター・リンボ搜索

29

バイオハザード関連探索

31

学園都市イベント

74

他勢力介入イベント

73

介入勢力の厄度

63

「研究会への招待、公演の依頼、引き抜きに、研究協力……」

学園都市ってのは、節操がないな。ほんと」

『科学ノ進歩、発展ニ犠牲ハツキモノデース』ってね」

麦野にしこまれていた盗聴器はかなりの人間が聞いていたらしい。

で、己の研究が捗るならばと悪魔に魂を売る連中がゴロゴロ居るのがここ学園都市である。

そりや、接触しようとするわな。

「所で気になったのだが、ダヴィンチちゃん名前がアンジェラになっているのはどうしてだ？」

「そりや、この体でレオナルドはないだろう？」

「ごもつともで」

そんな雑談をしていたこの日の結果だが、あまりよくない報告しか出てこなかった。

叢雲がその日の結果を報告する。

「キャスター・リンボの情報は無し。

バイオハザードについては解決済みという報告を学園都市はよこしてきたわ。

これ以上の介入はしてほしくないという所かしらね」

「先輩。

先進教育局の木原研究所所長、木原幻生氏がお会いしたいと連絡が来ていますが」

マシユの報告に露骨に顔をしかめる俺。

いずれは会わないといけないだろうが、キャスター・リンボとバイオハザードの経過を確認するまでは他のイベントに関与はしたくない。

「婉曲にお断りしておいてくれ。」

で、ステンは何を持っているんだ？」

「えっと、貴方のお友達のターニヤさんからメッセージだそうよ」

学園都市の動向米国も注視しているらしく、それなりにスパイを配置しているらしい。

そんな一人が接触してきたという訳だ。

「……全世界規模でネオ・ナチの活動が活発化しているらしい。」

何でも英国で聖杯。こっちの聖杯ではなく、本物の聖杯がUボートから出てきたとかで英国情報部とネオナチが激しくやりやっていると。

俺が聖杯を用いた神様召喚をやった事で、彼らが何かを呼び出そうとしているのではと考えているらしい」

つまり、ネオナチの連中は冬木の大聖杯を狙う……待てよ。

なかつたか？

ここ東京に聖杯があった世界線が。

「……やばい」

何でキャスター・リンボが出てきた？

聖杯があつたからというのが、一番楽な答えだ。

そんな聖杯をこの学園都市を作ったアレイスターが見逃す？

ある訳ないだろうが！

手の令呪を見る。

まるで聖杯を感じたかのように、赤く光っていた。

こうして、科学の都市で行われる魔術儀式である聖杯戦争の幕が開かれた。



## 学園都市暗闘 その4

聖杯戦争発生の可能性。

俺の報告が各勢力に衝撃を与えたのは言うまでもない。

また、公共機関である神祇院は、お役所仕事という事でこの件に関する情報は基本公開することにしたからだ。

それは、聖杯戦争に絡む魔術協会と聖堂教会の看過しえない事でもあった。

魔術協会の圧力

5

聖堂教会の圧力

11

学園都市の政治力

78

「『学園都市統括理事会は、諸勢力の介入に対して断固とした対応をとる』ですって」

叢雲の報告に俺は苦笑する。

この決定は俺たちにも当てはまるのだが、俺たちは最初から聖杯戦争に絡むつもりはない。

だが、キャスター・リンボの討伐と同時期に発生したバイオハザードに対する対応で足場を築いているからだ。

最終的には絡むだろうが、すでに学園都市内部に拠点のある利点を享受するとしよう。

「にしては、魔術協会なり聖堂教会なりの対応が鈍いな」

「今、欧州はネオナチ系組織の暗躍でてんやわんやですからね。」

何でも、聖杯が奪われたとかで、各組織や機関がその行方を追っているとか」

マシユの報告に俺はさもありませんという顔をする。

本物の聖杯が出てきた上に、第二次大戦の亡霊が復活しつつあるのだからそつちに戦力を回すのはある意味当然だろう。

そんな中で、マスターになりにくる輩は、よほどの馬鹿か聖杯でないと願いが叶えられない詰んでしまった者だろう。

「そろそろお客さまがお待ちだと思っただけど？」

ステンノの声で俺は立ち上がる。

そんな馬鹿兼詰んだ人間でも米国の人間でかつデグ様の紹介状つきならば会うしかない訳で。

「やあ。」

お待たせしてすまないねオランダ・リーヴさん。

カンパニーでの役職については知らないのご容赦を」

「構いませんよ。」

先の聖杯戦争の勝者。入即出やる夫宮内省統括審議官殿」

握手の際妙に力を入れられたのそれ相応の意図があるのだろう。多分。

そして、マシユがお茶とコーヒーを持ってきた所で楽しい政治の話に入る。

「この聖杯戦争という『テロ行為』において、合衆国は日米安全保障条約の範疇内で協力する用意があります」

「それについては感謝を。」

問題はこの都市の支配者である統括理事会がそれを許容するかという所でしょうな」

「おや？」

日本の一都市でしない街が国家方針に対して異を唱えると？」

「時間も惜しいので政治的表現はバツサリと切って話しましょう。」

その建前で学園都市に武力介入をするのならばどうぞ。

現状では返り討ちにあうのが関の山でしょうからな」

そう言つて、モニターにキャスター・リンボ戦と自前のチームで介入した麦野沈利を見せる。

表面上は平静を務めているようだが、俺の一言で彼の顔に動揺が走る。

「そつちに映るチーム中学生。

彼女は聖杯戦争参加者でないのでご注意ください。

彼女は学園都市ご自慢の超能力者というやつですな」

こんなのがゴロゴロ居るのが学園都市である。

そんな場所で聖杯戦争をおっぱじめの輩を馬鹿と言わずしてなんとすべきか。

「さてと、その上で交渉と行きましようか。

つまるところ、貴国はどこまでこの聖杯戦争を考えているのか？

貴方はどこまでこの聖杯戦争に賭けているのか？

お聞かせ願いたい」

1 情報収集

2 情報収集

3 情報収集

4 戦争勝利

5 戦争勝利

6 戦争勝利

7 聖杯奪取

8 聖杯奪取

9 聖杯奪取

10 熱烈歓迎

米国方針 7 聖杯奪取

オランダの方針 10 熱烈歓迎

「米政府の方針としては、この聖杯の奪取まで視野に入れてみると。

私、個人としては、その方針に従うのみですよ」

オランダの後ろに控えていたステンノが薄く笑った。

その言葉に隠された何かに反応したのだ。

米国のオーダーが、聖杯奪取にあるのなら、この男の望みはその先にある。

とてもじゃないが組めない。

「わかりました。」

日米安保条約の範疇で協力できるところは協力しましょう。

とりあえずは、情報収集と双方の不戦。

物資補給と外交ルート経由の退路の確保でどうです？」

「失礼だが、貴殿が持つ戦力の投入については？」

「お断りしたい。」

今回の滞在は、あくまで吉祥寺のビル襲撃事件の犯人捜査に限られている。

我々は、この地で聖杯戦争がらみのドンパチは起こしたくない。

そつちの事件が解決するならば、我々はこの街から去るつもりなのだから」

互いに沈黙する。

とはいえ、向こうも戦いに来た訳ではない。

オーランドの顔が笑顔になるのに、十数秒の沈黙があった。

「いいでしょう。」

この場ではそれで満足しましょう」

「(〆)配慮に感謝を」

交渉成立の握手の際、目が物を言っていた。

(日本政府を動かして、こちらに協力させる)

と。

そういう事をされると断れないのが、偉くなつた代償でもある。

まあ、デグ様の面子もあるし、彼が破滅しない限りは協力してあげるとしよう。  
オーランドが率いる米国諜報員人数

28人+33人

彼の召喚した鯖

1 セイバー

2 アーチャー

3 ランサー

4 キャスター

5 アサシン

6 ライダー

7 バーサーカー

8 エクストラ

6 ライダー

星 5

1 ドレイク

2 オジマン

3 アキレウス

4 エウロペ

3 アキレウス

拠点  
???

学区数字24なので、23学区の中でこちらに情報を渡していない判定

「あの人。

アキレウスを引いたそうよ」

その日の夜。

裸のステンノが耳元でささやく。

米国のガチさがわかる。

キャスター・リンボを潰すなら、それぐらいの戦力は必要だろう。

「そのくせ、向こうの拠点は秘密ですって。

ずるくない？」

シヤワーから出た叢雲が体をふきながら愚痴る。

日米安保条約を持ち出されると指揮権うんぬんで米国主導にならざるを得ないのが、この国のこの時期の自衛隊であった。



それも若狭湾ミサイル誤射事件や八丈島沖タンカージャック事件でだいぶ怪しくなっているのだが。

「最後までかかわって、貧乏くじは引きたくないからな。」

ちなみに、今日の報告だが何かわかったか？」

俺の上に乗っているマシユが喘ぎながら報告する。

キヤスター・リンボ関連

14

バイオハザード関連

11

「まったく手掛かりなしか……」

「はい。」

バイオハザードに伴う外出禁止令が発令されて、情報収集そのものに制約がかかっています。

聖杯戦争が始まるのなら一つの案ですが、学園都市を出て学園都市外で対応するのも一つの手法と」

俺の隣で裸の甲賀隴が今までの情報をまとめて指針を提示する。

当事者になる気が無いのならば、ここの規模を縮小してその周囲で警戒するというの  
はあながち間違いではない。

何よりも学園都市外ならば、日本政府高官という役職が色々使えるのだ。

今日のイベント 100ほど派手

82

1 聖杯戦争がらみ

2 同上

3 同上

4 同上

5 バイオハザードがらみ

6 同上

7 同上

8 両方

9 それ以外

10 熱烈歓迎

## 結果 7 バイオハザードがらみ

「大変です！入即出統括理事官……失礼しました」

今日の警戒要員である桃条千影が、ドアを開けて背を向く。

慣れてもらわないといけないので、服を着ながら報告を聞く。

「気にするな。」

基本毎夜やっている。

で、報告は？」

「はい。」

学園都市からですが、バイオハザードの鎮圧に向けて第一級警報が発令され、営業部隊（ユースフルスパイダー）の投入が決定されたのですが……」

バイオハザード

52

営業部隊（ユースフルスパイダー）の戦力

17

ペイルライダー 52以下で登場 25

「……無線を傍受したのですが、営巣部隊は鎮圧に失敗。

おまけに、髑髏の騎士というワードが出ており……」

着替えながらため息をつく。

これ、出ないとまずい奴だろうな。

多分、バイオハザードを鎮圧するのを、ペイルライダーが邪魔しているのだろう。

放置して他の黙示録の四騎士がそろったらメガテンの目も当てられない。

そのままトランペッターとか黙示録の獣に……あー、ここアレイスターのおひざ元だったな。

「うちを攻撃してきたペイルライダー討伐で、統括理事会に出撃報告を出せ。

出撃要員と、ここの防衛人員を選抜する」

多分これで終わらないな。

それだけは確信できた。

## 学園都市暗闘 その5

聖杯戦争というものは、究極的にはマスターとサーヴァントさえあれば戦える。

とはいえ、拠点は必要で物資もあるにこしたことはない訳で。

何が言いたいかというと、拠点防衛用の戦力は確保しておいた方がいいという事だ。他勢力からの横殴りは聖杯戦争あるあるである。

「モーさんは拠点防衛。」

大淫婦バビロンもここに残ってくれ」

「えー」

「何故じゃ?」

露骨に不満そうな顔をする二人だが、俺はその理由を話す。

他にも、対魔忍部隊や文車妖妃はお留守番として甲賀臙指揮のもと残ってもらおう事にする。

「こいつが、バイオハザード対策だからさ。」

本命のサーヴァントがここを襲ったら俺たちの帰るところがなくなっちゃまう。

何しろ、サーヴァントの全員が出そろっていないんだ。

暴れるのはその後でもいいだろう?」

「わらわが残るのはどういう理由じゃ!」

「そつちも同じで、この騒動のはてに他の三騎士が出たら目も当てられん。

現状の方針として、俺たちはこの聖杯戦争に深く関与するつもりはない。

手札をあまり晒したくないんだよ」

そして、留守部隊指揮の甲賀臈に指示を出す。

こういう時に、正規教育を受けている佐官がいるという安心感たるや。

「明日になれば、残っていた二元対魔忍の連中が学園都市に送り込める。

戻らなかつた場合は、そいつらを入れた上で情報を収集して一週間後に撤退する事」

「実際、帰ってこれない確率はどれぐらいで見ているのですか?」

「三割って所だな。

移動とバイオハザードがらみだから検疫の方で捕まりかねん。

という訳で、学園都市のコネを使わせてもらうさ」

そんなコネが拠点である外務省研修施設の前に到着する。

テレスティーナⅡ木原Ⅱライフラインが指揮する先進状況救助隊である。

「すいませんね。

テレスティーナさん。

こちら側のわがままにつき合わせてしまつて」  
「構いませんよ。」

我々もバイオハザード鎮圧の指令を受けていた所ですので。

ご注文のトラックとNBC偵察車をお渡しいたしますわ。

あと、これは私からの好意として、駆動鎧を数体貸与させていただきます」

互いに笑顔だが目はまったく笑っていない。

テレスティーナにとつて、これらの提供の代わりに戦闘データが得られるという打算があるし、こっちはその打算につけこんでこれだけの武装を用意させたのだから。

しかしさすが学園都市。

開発が2005年の車がすでにこの街で走っているのだから、科学技術が世界より三十年は進んでいるのは伊達ではない。

「了解した。」

桃条千影は運転手を頼む。

叢雲と天ヶ崎千草とダヴィンチちゃんは俺と一緒にこの車へ。

マシユは後ろのトラックで、オイランロイドの指揮を任せる」

いつの間にかいなくなっているステンノとクー・フリーンは霊体化してついてゆく訳で。

このあたりの手札のかく乱も忘れない。

「で、テレスティーナさん。」

我々の行き先は？」

- 1 第10学区 ノマド研究所調査
- 2 第10学区 ノマド研究所閉鎖
- 3 第19学区 アンブレラ研究所調査
- 4 第19学区 アンブレラ研究所閉鎖
- 5 ペイルライダー討伐
- 6 どないしよ
- 3 第19学区 アンブレラ研究所調査

「第19学区のアンブレラ社研究所の調査です。」

爆発事故とその後の火災は鎮火したのですが、バイオハザードの騒動で調査が行われていなくて……」

いきなりのド本命である。

ある意味対策が取りやすいともいえるので、俺たちの拠点がある第3学区から遠回り



をして、第7学区の病院に行つて全員ワクチン接種を行う。

少なくともこれで、ゾンビになる確率は大幅に低下したと言えよう。  
で、第19学区に到着。

アンブレラの研究所は爆発と火災で地上構造物は黒ずんでいた。

- 1 誰もいない
- 2 同上
- 3 同上
- 4 ゾンビ犬
- 5 ゾンビ犬
- 6 ゾンビ犬+カラス
- 7 ゾンビ犬+カラス
- 8 ゾンビ犬+カラス+ゾンビ
- 9 サークヴァント
- 10 熱烈歓迎
- 2 誰もいない

「周囲に生物反応はないみたいだね。マスターくん。」

大気も今の所問題はないみたいだ」

ダヴィンチちゃんが報告する。

すでに、オイランロイドや防護駆動鎧を着た先進状況救助隊が周辺調査を始めている。

このまま空振りなら恩の字なのだが。

調査 100ほど何か見つける

64+ダヴィンチちゃん修正30||94

「地面の調査を念入りしてくれないかい？」

ダヴィンチちゃんが指示を出す。

それにあわせてオイランロイドが調査器具を使って調べると、地下に何かの空洞があるのが分かった。

そういうえば、バイオハザードの映画版は地下研究施設だったなあ。

「多分これだね」

「瓦礫をのけてくまなく探してくれ。

おそらく地下への入り口がある」

当てがあると調査も捗る訳で。

地下に搬入用のケープルカーを見つけた時に、喜び半分ため息半分の表情になる。

「なんとも言えない表情ね？」

「ここまでは仲良くできるからな。」

ここから先は、テレスティーナさえも敵になりかねん」

おそらくは学園都市に無許可の地下施設。

隠ぺいはアンブレラだけでなく、学園都市側でもしたくてたまらないだろう。

ゾンビやサーヴァントにかこつけて俺たちを口封じに来る可能性もない訳ではないのだ。

（クー・フリーリン。

秘密指令だ。

霊体化したまま地下に潜って様子を探ってこい）

（わかった。大将。

救助者を見つけたら？）

（報告だけは絶やすな。

あとは現場の判断）

1 証拠完全隠滅 生存者なし

- 2 証拠完全隠滅 生存者あり ゾンビたちと戦闘中
- 3 データ残存 生存者なし
- 4 データ残存 生存者あり ゾンビたちと戦闘中
- 5 データ残存 生存者あり ゾンビたちと戦闘中 マスター発見
- 6 証拠完全消滅 マスターのみ ゾンビとサーヴァント戦闘中
- 7 データ残存 マスターのみ ゾンビとサーヴァント戦闘中
- 8 データ残存 マスターのみ 他サーヴァントと交戦中
- 9 地下施設水没 調査不能
- 10 熱烈歓迎
- 8 データ残存 マスターのみ 他サーヴァントと交戦中

(大将！)

やばいぞ!!

この中で、サーヴァント同士が争ってやがる!!!

(サーヴァントは分かるか?)

クー・フリーンの調査

20

交戦サーヴァントの感知 20以上で発見される

28

(ドジった!)

大将。撤退する!!)

クー・フリーンはF G O準拠だと生存力が高い鯖だ。

こういう時に逃げ帰って情報を持ち帰れるのが彼の強みだろう。

攻撃サーヴァントの反応

1 施設内サーヴァントとの交戦継続

2 同上

3 撤退

4 撤退

5 クー・フリーンへの追撃

6 どないしよ

5 クー・フリーンへの追撃

(あいつ、こっちを追いかけてきやがる!?)

「地下通路内で音が!？」

「何者かが近づいてきます!!」

「交戦準備。」

サーヴァントと仲魔で押す。

向こうも下げさせろ」

そして、地下通路出口にライトが向けられ、その中からサーヴァントが姿を現した。

出現サーヴァント

1 セイバー

2 アーチャー

3 ランサー

4 キヤスター

5 アサシン

6 ライダー

7 バーサーカー

8 エクストラ

2 アーチャー

星5

1 オリオン

2 アルジュナ

3 ナポレオン

2 アルジュナ

「サーヴァント、アーチャー。アルジュナと申します。

私はこの場での休戦とマスターの保護をお願いしたい」

また大物が出てきたと俺は頭を抱える。

テレスティーナの部隊に絶対に手を出すと厳命したうえで、俺はマイク越しに口を開く。

「スピーカー越しですまない。

こちらは、まだ聖杯戦争に参加していないサーヴァントとマスターだ。

その提案について考えてもいいが、それならば貴殿が戦っていたサーヴァントのクラスぐらいは教えてもらえないだろうか？」

アーチャーと交戦していたサーヴアント  
アーチャーが出たら下にずれる

1 セイバー

2 アーチャー

3 ランサー

4 キャスター

5 アサシン

6 ライダー

7 バーサーカー

8 エクストラ

7 バーサーカー

星4

1 ヘラクレス

2 ランスロット

3 タマモキヤット

4 フランケンシュタイン

5 ベオウルフ



- 6 茨木童子
- 7 エルドラドのバーサーカー
- 8 アタランテオルタ
- 4 フランケンシュタイン

「バーサーカーのフランケンシュタインです」

ああ。

なんとなく状況が読めてきた。

バイオハザード発生時に、アンブレラはこの施設をまとめて廃棄処分したのだろうが、その中にマスター適正者が居たと。

一人はアルジユナを呼び出し、もう一人はフランケンシュタインを呼んで……下手するともう一人のマスターすでに死んでいるかもしれないな。

「いいだろう。」

休戦に応じるし、マスターの保護も保証する」

「入足出さん!?!」

回線に割り込んだテレステイナに俺はお手上げのポーズをとる。

実にわざとらしく。

「彼一人で、この部隊を全滅させる力がありますよ。」

バイオハザードが発生したのにこうして彼が五体満足で生き残っているのが何よりの証拠でしょう？

私ごと証拠隠滅に動いてもいいですが、私の戦力見積もりはともかく、あれを見積もっていないでしょう？

します？

「証拠隠滅？」

テレステイナのやる気

28

やる夫のはったり 28以上で成功

69

「貸しーで」

「結構。」

アーチャー。

君のマスターを教えてください」

出てきた名前にある主納得する俺。  
なるほど。

無能力者でアルジュナを呼べた人格となるとぴったりだな。  
黒妻綿流は。

フランケンシュタインのマスター

1 生きている

2 死んでいる

3 ？

3 ？

アンブレラのデータのやばさ 1000でやばい

8 1

地下研究施設内の調査が進められたが、アルジュナが居る状況でゾンビだろうかハンターだろうかどうとでもなる訳で、地下データルームに籠城していた黒妻綿流を救助できたのは朝日が昇るころだった。

一方で、フランケンシュタインとの交戦のおかげだろう。

データ消去が不完全な形でしか行われず、アンブレラ社がミレニウムと繋がっている証拠を入手できたのは大戦果と言っていいだろう。

だが、残った死体を調査した結果、フランケンシュタインのマスターらしい人間はついに見つからなかった。

という事は、マスターは別にいる訳だが、誰で何の目的なのかはついにわからずじまいに終わった。

ノマドの施設の状況 100でやばい

35

ノマドの施設の方も、封じ込めに成功してみたいでバイオハザードについては鎮静化が見込めるだろう。

そうなると、出たペイルライダーがどこに行くかわからないという事もある訳で。

学園都市の朝日を見ながら、状況がまだ半分もわかっていない事実に俺はため息をつくしかなかった。

## 学園都市暗闘 その6

「一時撤退する」

学園都市滞在四日目。

俺はこの時点で撤退を決断した。

状況が煮詰まる前に、逃げられるところに逃げたおこうという判断である。

「ずいぶん後ろ向きですね？」

桃条千影が少し糾弾する感じの声で質問する。

関東機関の身売りはともかく中の連中の人心掌握まで手が回っていないのでこの対応は当然ともいえるだろう。

「学園都市統括理事会との折衝だけでなく、米国の協力要請まで今回の聖杯戦争は視野に入ってきた。」

少なくとも俺のいる場所は会議室であって、戦場ではないよ。

それだけ、偉くなっちゃった」

「で、現場はどうするおつもりで？」

「放置する訳にもいかないから、君が残って監視したまえ。」

オイランロイドとクローン対魔忍を残してゆく。

直通の携帯電話及び無線、使い魔通信を渡しておくので連絡だけは絶やさないようにしてくれ」

「了解しました」

「確認なのだが、我々の扱いはどうなっているのか確認がしたい」

ここでアルジュナが主である黒妻綿流に代わって発言する。

彼は超能力開発と英霊召喚による魔法の合併症状に苦しんでいた。

合併症状 100ほどやばい

80

「生きてるのが奇跡だね」

とは診察したダヴィンチちゃんのセリフ。

事実危なかったので、第7学区のカエル顔の医師の所に送り込んで、ダヴィンチちゃんと共に手術しないとやばかったらしい。

あの時点でアルジュナが休戦を提案してこちらに出向いたのは彼の持つ千里眼が黒妻綿流にとっての最善の未来を手繰り寄せたのか。

「Tーウィルスを投与されていた事も、彼の件に関しては運が良かった。

あれの症状の一つに体内の全細胞が活性化がある。

あれで体がゾンビ化寸前になっていなかったら、彼は助からなかつたろうね」

### 黒妻綿流の治療

- 1 完治 魔術超能力両方なし
- 2 完治 魔術適正
- 3 完治 超能力適正 アルジュナマスター運用にマイナス修正
- 4 ゾンビ化 最終手段メデイアリイで完治 魔術超能力両方なし
- 5 超人化 魔術超能力適正あり
- 6 どないしよ
- 6 どないしよ

「……まあ、その過程はともかく、治療結果を考えてあれはどうかと思うがね」

俺は口を閉ざす。

体のゾンビ化に伴って早急に脳の保護だけはしたが、今度はアルジュナの魔力負担が彼にダメージを与える。

体の再構成を行うには時間があまりにも足りなかったのだ、緊急避難としてオイランロイドの一つに彼の脳を移植させたのだ。

メディアアリリイという最終手段を使う事を考えたのだが、ダヴィンチちゃんがそれを押しとどめた。

(少なくとも、アレイスターが見ている前で、あの究極切り札を晒してはいけないよ。マスター)

かくして、TSF美少女オイランロイドとなった彼女は今だ第7学区の病室で眠りについている。

なお、このオイランロイドは初期体の一つだから、オムラ・インダストリーのバックドア削除に伴ってダヴィンチちゃんや蒼崎橙子が好き勝手魔改造した一品となっている。

性能だけなら人間以上、対魔忍すら超えかねない。

(これ、最善の選択だが、ダヴィンチちゃんの趣味が入っているのでは……)

それを言うほど俺は愚か者ではない。

少なくとも、脳細胞の復旧の際に取りられた細胞をクローン化して元の体を用意するアフターケアもしている訳だし。

聖杯戦争中にそれは間に合わないだろうが。



ダヴィンチちゃんの説明

16

アルジュナのおコ度 16以上でオコ

6

千里眼を持つアルジュナがそれに異を唱えなかったのは、少なくとも彼にとって、アルジュナにとってある程度許容できる未来だったと信じよう。うん。

当人目を覚ましたら驚くだろうな……

黒妻綿流 女 レベル 48

「おい。」

何でこいつ下手したらサーヴァント殴れる体になっっているんだ？」

俺の突っ込みにダヴィンチちゃんはおつきり。

「その鯖に殺されないようにする為だよ。」

「当り前じゃないか」

納得。

そんな訳で、アルジュナとの休戦は継続だが、彼は第七学区の病院から離れない事に。桃条千影を残して監視を続ける外務省施設が第三学区なので、アルジュナがらみの戦闘を避けたという見方もできなくはない。

撤退を邪魔する判定 12

学園都市からの撤退は驚くぐらいスムーズに行われた。

何か仕掛けてくるかとも思ったが、ついにそんな勢力は現れなかった。

「あてが外れたわね。」

仕掛けるならここだと思ったのだけど？」

学園都市を出たのを確認して叢雲が警戒を解く。

この意味する所は、見逃したか、見逃されたのか。

集めていた元対魔忍以下の戦力を学園都市周辺に展開させながら、俺は叢雲に返事をした。

「まあ、死地から逃げ出したことを喜ぼう。

ここからは会議室での戦争だ」

この学園都市での聖杯戦争は各勢力が水面下で激しく動いており、それに否応なく日本政府は決断を迫られていたからである。

米国の介入要請

94

政府の対応 94以上で拒否

15

さすデグ判定

99

霞が関に戻ってみると、米国がこの聖杯戦争に恐ろしいほど圧力をかけていた事が分かる。

政府側も米国の要請に乗る形で俺を切り捨てるつもりだったが、それを押しとどめた人間が居た。

デグ様である。

秘密通信で会話を求められた結果、彼女はこんなネタバレをしてくれた。

「彼は日米友好の懸け橋になるべき人材です。」

対日関係が悪化しつつある今、ここで彼のような人間を使いつぶすのはもったいない

「と思いますか？」

「さすデグである。」

「デグさまのフォローが無かったら、学園都市から出るのは難しかっただろうなあ。」

「そんなデグ様に、アンブレラ社とミレニウムがつながった証拠を渡したのは言うまでもない。」

「モニター越しの彼女の笑みが実に獲物を見つけた獣みたいになっていたのだが、言わぬが花だろう。」

「もちろん、俺を使いつぶそうと米国政府に圧力をかけた連中の中に、アンブレラ社の連中が居たの言うまでもない。」

「とりあえず、お前の手足を縛ろうとする連中の口は塞いでおいたが、今後どうする？」

「どつちにしろ絡まざるを得ないとは思っていますよ。」

「東京の西隣で130万人を犠牲者にする大災害なんて起こしたら政権が持ちませんよ」

「それはそうだな」

「こつちに戻ってきたのは、現場指揮官ではない各勢力の動きを確認するためである。特に、米軍の動きが予想以上に強い。」

「そのあたりをデグ様に問うと、頭を抱えるような答えが返ってきた。」

「例の聖杯の絡みで、ネオナチと英国情報部がやりやっただのは知っているだろうか？  
その流れで聖杯戦争発生の可能性だ。

過激になるのは当然だろう？」

そこからまた顔をしかめるデグ様。

顔表情が豊かなお方である。

「ソマリア内戦なんだが……」

100でさすデグ

36

100でさすメアリー

47

ソマリア内戦 36+47=83以上で苦戦

74

「なんとか抑え込んでいるが。

予断を許さない状況だ。

で、再編成のために部隊の一部を返したんだ」

あー。なるほど。

煽ったのは、デグ様の政敵のあのお方でしたか。

メシア教のガチ度

100

「メアリー・スー。

大佐になった彼女は、トールマン大使の招きで、日本の米軍基地に訪れて色々しているらしい。

その流れで、米軍部隊も入れ替えられている。

おそらくは彼女の信奉者がかなり入り込んでいると思え。

何でか知らないが、この話神殿協会も絡んでいてな。

ランデイル・シア・エムネス枢機卿とその配下の騎士団が訪日している」

聖杯戦争のマスターに名乗りを上げるのは近いな。これは。

下手すれば彼女の下で働かねばならなかったと思うと本当にさすデグである。

……本気で助かった。

「ほかに絡んでいる連中は？」

「いるぞ。」

聖堂教会はこの聖杯戦争の監督役としてハンザ・セルバンテスを送り込むことにしている。

もうしばらくしたら、横田基地に到着するだろうよ。

特務機関イスカリオテもエンリコ・マクスウエル以下総動員だ。

十字教もローマが後方のアックアが動くらしい。

イギリス清教はオリアナ・トムソン。

ロシア成教からはスクーグズヌフラ。

総動員だな。これは」

メガテン原作だといつハルマゲドンが起こっても問題がないのだが、これはちと整理過ぎていて。

という事は……

俺はデグ様を睨む。

「聖杯戦争にかこつけて邪魔な連中を全部東京に押し付けましたね？」

「思った以上にミレニアムの足取りがつかめなくてな。

その背後にこいつらの影があったので、たきつけたまだけだよ。

事実、首都の隣に主権の及ばない国家同然の組織があったら邪魔だろう？」

否定ができないのがまた困る。

このあたり、所属国家の違いというのが露骨に出る。

日本にとっての最善と米国にとっての最善が違えば、デグ様は米国にとっての最善

をとるのだ。

「もちろん、アフターフォローも忘れていないさ。

だから、貴官をフリーに動けるようにしている。

あと、横須賀については私が手配しているので妙な連中は入り込んでいないはずだ。何かあったらユーリア・ブラッドストーン大佐を使え。

日米安保の範疇ならば対応できるように手を打ってある」

「となると、共食いさせてからの横殴りですね？」

「当然だろう？」

それで学園都市統括理事会までぶん殴れるならば最高だけだな」

そうなると、当然次の疑問が出る。

聖杯戦争は大聖杯と小聖杯のセットで行われる。

おそらく、学園都市にあるだろう大聖杯に呼応する小聖杯に本物の聖杯を使うつもりなのだろう。

それをめぐって争っているどの勢力が本物の聖杯を持っているかだ。

1 染井芳乃

2 染井芳乃

3 ネオナチ



4 ネオナチ

5 アーカム

6 どないしよ

4 ネオナチ

「本物の聖杯の行方だが、ネオナチ内部でも争われて、ボー・ブランジエと他のネオナチの入国は確認している。

だが、彼らが聖杯を持っているとは思えん。

彼らが聖杯を持っているなら、すでにその聖杯で事を成しているだろうからな。

私は、あのタンカージャックで貴官が出会ったグルマンキン・フォン・シユティーベルじゃないかと思ってるが？」

「つまり、アーカムも絡むという訳ですね？」

俺がため息をつくどデグ様も苦笑する。

「絡ませるだけ絡ませて、学園都市に始末させるいい機会だ。

とはいえ、メシア連中がガチなのは少し読み誤った。

すまない」

そりゃ、メアリー・スーですから。

あれ、現代の聖女だからなあ。

「いいですよ。」

安保範疇内で米国はこちらを助けてくれる。

それを期待しますよ」

通信を切ろうとした時に、さも忘れたぐらいな声でデグ様が付け足した。

デグ様にとっては、どうでもいい事で俺も終わった事なのだが、当人にとってはこの機会を逃す訳もない訳で。

「ああ。そうだ。」

C I A 情報だが、アインツベルンを見張らせていた連中が襲撃を受けて、監視網に穴があいた時間ができたらしい」

来るのだろうか。

衛宮切嗣は。

彼は何になろうとするのか、そんなことをちらと考えて、俺は通信を終えた。

## 学園都市暗闘 その7

聖杯戦争には裏ルールというか予選みたいなものがある。

まずマスターに選ばれるのに、魔術師たちが争うからだ。

聖杯が選ぶことがあるが、全てを選ぶことという事はなく、あまり杵みたいな所をその場にいる魔術師で片づけてしまうのだ。

俺が学園都市から撤退した理由の一つである。

とはいえ、霞が関地下の俺のオフィスにこられたこの御仁はそれを知っていて俺に協力を要請してくるのだからたちが悪い。

「関与はしましょう。」

「ですが、参加はするつもりはありません」

「何故です？」

「その強大な戦力と我々の支援があるならばこの戦争の勝利は間違いないでしょうに？」

駐日米国大使ハリー・トールマンの協力要請を俺はいなす。

メシアの総攻撃に近いこの状況になったのも、ガイア勢力の著しい退潮があげられる

というかそれを推進したのが結果的に俺だったという訳だ。

ある意味ガイア勢力だったファントムソサエティの勢力失墜に、同じくガイア側だった対魔忍世界のノマドや汚職政治家が政権交代で失墜。

後藤一佐や石馬雪緒陸将補等の自衛隊クーデター勢力を左遷させて神祇院という退魔組織の一元化にかこつけて、組織内で怪しい連中をパージしたつげがここに出ている。

「ならばお聞きしましょう。」

行方不明になった、衛宮切嗣は何を呼び出したのかそちらは掴んでいるのですか？」

米国調査能力

80

衛宮切嗣召喚鯖

1 セイバー

2 ランサー

3 キャスター

4 アサシン

5 エクストラ

6 バーサーカー

3 キャスター  
星 1

「あいにく、我が国の調査能力はそこまで劣ってはいない。

アインツベルンに運ばれた物品は基本、宛名をチエックしている。

そんな中、最近運ばれたものの中にモーツアルトの楽譜というのがあった」

キャスターアマデウスか。

ある意味、セイバーアルトリアを引かれるより厄介かもしれん。

キャスターは基本引きこもり戦術で戦う。

聖杯戦争が暴露されてアインツベルンの拠点が使えなくなつた衛宮切嗣にとって、拠点確保のサーヴァントと割り切っているのだとすれば、別に本命がいる。

「なるほど。」

それで彼は今、何処に？」

「前の聖杯戦争で彼に撃たれたのはお察ししますが、ここは私情をはさむべきではないと思いますか？」

俺は押し黙る。

彼の意味するところは一つだ。

衛宮切嗣はおそらく、米国と手を組んだ。

すでに入れているオーランド・リーヴと、勝者予定のメアリー・スーを入れて三騎。悪くはない。

かといって良くもないのだが。

「ならばなおの事、私はいりませんな」

「そうは言っていないです。」

学園都市外で伝のある貴方の協力は必要だ。

それぐらいは日米安保の協力の範疇では？」

俺はため息をつく。

このあたりが落としどころだろう。

「くれぐれも我が国の主権を脅かす事だけは慎んでもらいたい」

「もちろんですとも。」

では、よい聖杯戦争を」

トールマン大使の退室後俺は椅子に体を預けてため息をつく。

会議室の戦争というのはこういう事である。

「お疲れの所悪いのだけど、次のお客様がお待ちになっているわよ」

ステンの声に俺は叢雲が入れてくれたコーヒーを口にする。

香りで少しリラククスした後、その客人の名前を確認する。

マシユは、その客人の名前をこう言ったのだった。

「えつと……ネコソギ・ファンドの片倉富士雄様ですね。」

ヨロシサン製薬の古奈牙柳魅様からの紹介です」

あー。

奴らの本拠、所沢だったな……

「どうも。」

入即出技術統括審議官殿。

ネコソギ・ファンド、ファンドマネージャーの片倉富士雄と申します」

「どうも。」

入即出やる夫と申します」

挨拶は大事。

古事記に書かれて……ないよな。ふつうは。

「単刀直入に申しましょう。」

我々と組みませんか？」

テーブルにつつましくおかれる白紙の小切手。

ここまで堂々と賄賂を出してくるところこちらもさきつさと追いつ返すのも忍びない。

さすがに受け取れないが。

「組むメリットが見えないのですが？」

互いにニンジャならばここで戦闘となるだろうが、俺はニンジャではなくかといってニンジャリアリティーショックが発生しない程度にはニンジャは跋扈しているこの世界である。

対魔忍とか。対魔忍とか。

「我がネコソギ・ファンドは、学園都市の技術を本土に売り込むことで利益を出しています。」

今回学園都市水面下で発生している聖杯戦争というものに我々と組むことで、その技術を世界に還元出来たらと、CEOの老元寛は考えております。

その際の還元に入即出統括審議官のお力を借りれたらと」

「およしなさい。」

あれを還元して何を成すというのですか？」

俺の否定に片倉は容赦ないブーメランを放つ。

その一言に俺は絶句するしかない。

「アマテラス様の召喚。」

あれでどれだけの利益があなたに転がり込んできましたか？」



「……数千億。

欲をかけば兆まで届きますな。

なるほど。

そういう話ですか」

危ない橋だが、アマテラス様召喚というハイリターンを考えれば、手を出したい及び組みたいと考える輩が出るのは当然のことだ。

俺は無駄と思いつながら、職業義務感から忠告だけはしておいた。

「とはいえ、古奈牙さんからの紹介だから手ぶらで返すのも悪いでしょう。

今回の聖杯戦争は米国がかなり関与している。

お気を付けを」

「それを聞かせていただいただけでも来たかいはあるというもの。

その小切手はどうかお受け取りください。

何かありましたら、私の名刺に電話をかけていただければ最大限に協力しましょう」

帰る間に、片倉は大事な一言を告げる。

多分、これを言いに来たという所だろうか。

「我々に協力している研究機関がバーサーカーの召喚に成功しました。

また、京都のとある勢力も接触してくるかもしれません。

「ご注意のほどを」

片倉は情報の入ったマスターの紙をさも落としたように見せかけて部屋から出てゆく。

バーサーカー、フランケンシュタインのマスターはある意味うってつけの配役だった。

イモータル・ニンジャ・ワークショップ実験体

ニンジャネーム ジエノサイド

桃条千影からの聖杯戦争報告

1 何もなし

2 同上

3 交戦後双方消耗

4 交戦後片方脱落

5 不明勢力判明

6 同上

7 大規模交戦周囲消耗

- 8 大規模交戦被害者多数
- 9 聖杯災害発生
- 10 熱烈歓迎
- 3 交戦後双方消耗  
交戦勢力
- 1 セイバー
- 2 アーチャー
- 3 ランサー
- 4 ライダー
- 5 キャスター
- 6 アサシン
- 7 バーサーカー
- 8 エクストラ
- 5 キャスター
- 8 エクストラ

「……………報告よ。

昨日深夜、キャスターの陣地にエクストラのキャスター・リンボが襲撃をかけて、双方消耗して撤退したそうよ。

キャスター・リンボはこれでエクストラと確定した訳ね」

叢雲の報告に俺は少し疑問を感じる。

キャスター・リンボがエクストラクラスとしたら、たぶんアルターエゴのはず。

アルターエゴならばキャスターに対して攻撃の優位がとれるし、衛宮切嗣のキャスターは星1のアマデウスだ。

よく生き残ったものだと思つたら、ステインノが楽しそうに報告の続きを口にした。

「まあ、米国も捨て駒のつもりでの協力みただから、たいした支援はしなかつたみたいだけど、彼は手袋をつけて何かした結果、どこからともなく魔物が表れたそうよ」  
なるほど。

これが彼の切り札か。

## INTERMISSION その1

衛宮切嗣はこの聖杯戦争に関与するつもりはなかった。

冬木の大聖杯は既に魔力が使われた上に、日本政府や他の機関が嚴重に監視と研究をしている。

ならば、学園都市にあるらしい聖杯は何なのだ？

聖杯戦争御三家であるアインツベルンに居たからこそ、彼はこの聖杯戦争が別物である事を理解してかわかる事を拒否したのである。

もつとも、衛宮切嗣もアインツベルンも世界唯一の超大国米国の本気を見誤っていたという事になるのだが。

## 第5学区。

大学生をメインとした学区で成年向けの施設も多い。

そこにあるラブホテルが衛宮切嗣の最初の拠点だった。

キャスター・リンボの襲撃によつてはやくも第二拠点に移ることになったのだが。

「よくやってくれた。

貴重なデータを提供してくれて助かる」

電話越しに嬉しそうなオーランド・リーヴに衛宮切嗣は淡々と返事をする。

「それで、襲ってきたやつのは正体は？」

「ああ。」

日本の機関にデータがあった。

キャスター・リンボ。

井の頭公園のエコービル襲撃の実行犯だ」

ちらりと衛宮切嗣は己が召喚したキャスターであるアマデウスを見る。

だとしたら、あのキャスター・リンボはキャスターではない。

これはかなり大きな情報である。

「そのビルはどうして襲われた？」

「……えらくセキュリティランクが高くてアクセスに時間がかかる」

日米安保があるのにも関わらず、セキュリティランクが高くて弾かれるゲースというのはほぼ間違いなく学園都市がらみだ。

そこから考えると、やはりこの学園都市には何かがあるのだろう。

「わかった。」

所詮僕たちは囷だ。

クライアントが報酬を払った以上、僕はそれに従うつもりだ。

で、今後は？」

「まだ、セイバー、ランサー、アサシンが分からないらしい。

そいつらが分かったら一気に押し込むという話だ。

しばらくはそちらにも攻撃が行くだろうが、サポートはするので耐えてくれ。

以上だ」

そして電話を切る。

呼び出したキャスターアマデウスとはろくな会話もしていないが、向こうもこちらに話しかけていないのでまだ関係は破綻していない。

むしろ、前回の戦いより戦いやすいと言えるだろう。

(……セイバー、ランサー、アサシンがわからない？)

どういう事だ？)

「どうしたの？」

切嗣？」

「なんでもないよ。アイリ」

シャワーを浴びてバスタオル姿のアイリスフィールが尋ね、衛宮切嗣は笑顔で思考を打ち切った。

あの聖杯戦争で衛宮切嗣は小聖杯を確保したが、それは同時にあの聖杯戦争のログを

入手したといっても良かった。

そして、その小聖杯に残っていたアイリスファイルの魂を取り出して新たなホムンクルス体に移す技術をアインツベルンは持っていた。

「で、どうだい？」

「だめ。

私から呼びかけても反応がないわ。

何か魔術的なもので遮断されているのか、それとも……」

この聖杯戦争に参加したのは、アイリスファイルの存在がある。

彼女がいるおかげで、聖杯の情報了他陣営より知ることができるのだ。

米国と取引ができたのは彼女の存在が大きい。

彼は米国提供のファイルを取り出し、その情報を丹念に読み込む。

「入即出やる夫。

前の聖杯戦争時には海自将官、今は日本国内に新設された宮内省のN03。

米国にも太いパイプがあるという、彼の手駒にステンノとモードレッドが居るのは分かっている。

にもかかわらず、彼はこの聖杯戦争に乗ってきていない？」

魔術師殺しとして魔術師から離れた思考をもっていたとしても、ある意味テロリスト



に近い活動をしていた衛宮切嗣の限界と言ってよかった。

日米関係の軋轢や内部派閥の相克などを耳にするには彼のコネは限られていた。

「入即出やる夫が出れば二騎、僕も入れて四騎。

制圧ができない事はない。

他の参加者を始末したあとで僕とオーランド・リーヴを潰して手持ちの一騎を消せば

聖杯に手が届く」

携帯が鳴り衛宮切嗣は通話ボタンを押す。

調査に出ていた久宇舞弥だった。

「確認しました。

麻帆良学園都市に在籍しています。

名前は、クロエ・フォン・アインツベルン。

朔月陽代子神祇院参事官が保護者として登録されています。

今の所、彼女は動いてはいません」

聖杯にアクセスできるアイリスファイルの能力はかなり便利であり、大聖杯経由でク

ロエの存在を探り出したのも彼女である。

世界線が違うのだが、アインツベルンだしてガバ登録する大聖杯も問題があると思う

が、とにかくクロエの存在暴露はアインツベルン陣営を慌てさせた。

彼らがこの聖杯戦争に出てきた最大の理由である。

「わかった。」

一旦引き上げろ。

それとなく、情報を他勢力に流して入即出やる夫を遠ざけておけ」

クローエの存在は聖杯戦争において切り札になるゆえに、その防衛に戦力を割かなければならない。

または、これを米国が知って日米安保の協力として提供させてもこちらは懐は傷まない。

「アイリ。」

今回の戦いは君の力が全てだ。

前回とは逆で、僕がマスターとして振る舞うから、君がサマナーである事を隠すんだ」  
「ええ。わかってるわ。」

切嗣」

悪魔召喚は己のレベル以上だとこちらの命令に従わないだけでなく、裏切り襲いかかる事がある。

所詮魔術師でしかない衛宮切嗣は、キャスターアマデウスを召喚すると同時に、メシア教団と交渉し性能の悪い一体しか仲魔にできないCOMPを一つ用意させていた。

そのCOMPを衛宮切嗣は迷うことなくアイリスフィールに与えたのだ。

聖杯と一体化したその体は高位の悪魔召喚を可能とした。

彼女が従える悪魔は、

大天使　アールマデイ　レベル76

大聖杯がアンリマユで汚染されたあとで浄化されていなければ、アイリスフィールが大聖杯と一体化したあとに魂を分離されたので霊核が強化されていなければ、この悪魔が居なければ、衛宮陣営はキャスター・リンポに敗北していた。

(けど、どこまで持つかな……)

アイリスフィールの存在は切り札であると同時に他勢力の集中攻撃を食らうことを意味する。

そして、終盤になれば、いらぬ駒としてオランダ・リーヴも切り捨てにかかるだろう。

聖杯戦争は、そういう意味では同盟が組みにくいシステムになって……

(待てよ!?)

米国の連中はどうしてここ学園都市で聖杯戦争に介入するんだ？

あの広い北米大陸、冬木なみの霊地は探せば必ずあるはず。

冬木の大聖杯は違うのはアイリが確認した。

じゃあ、聖杯は誰が持っているんだ？

彼のつぶやきは、ついに声にまで出てしまう。

アイリスフィールがそれに振り向いても彼は気づくことはなかった。

「……いや、米国はどうしてこの聖杯戦争に大戦力を投入する決定を下したんだ？」

## INTERMISSION その2

黒妻綿流の目が覚めた時、己の体が女になっていた事に混乱しなかったといえれば嘘になる。

とはいえ彼というか今は彼女だが、学園都市の学生であるゆえに、実験体になって命があるだけ儲け物。

混乱から落ち着けば、女になったぐらいならば許容範囲内かなと考えてしまいうぐらいのズレはあったのである。

「で、マスター。

今後の方針なのですが」

「ねえよ。んなもん。

俺はあの最低の実験施設から助けを求めて、それにお前が応じた。

だから、お前の都合だ。

アル……アーチャー。

お前が決めろ」

ある意味、アルジュナにとって最も運の良いマスターを引いたとも言えるだろう。

これが普通の聖杯戦争ならば。

だが、彼の千里眼にはろくでもない結末ばかりが見えていた。

「マスター。

おちついて聞いてください。

この聖杯戦争。

私が見える未来において、八割近くがこの都市が吹き飛ぶことによつて終わつています」

「……え？」

「それを、助けてくれた人たちに伝えられなかったのは、彼らが国家という大きな組織に属しているからです。

大きな犠牲を回避する形でこの都市の破滅を許容するどころか、推進する可能性があります」

助けてくれた入即出やる夫には害意は無いが、彼は日本という国家の紐付きの上、安保条約を結んでいる米国の介入を受けやすい立場だった。

その上、独立自治権を有して世界トップレベルの科学技術を有している学園都市の存在を日本政府は決して快くは思っていないかった。

「今の所、吹き飛ぶ未来はだいたい見えなくなりましたが、その分幅が広がりました」

「幅？」

黒妻綿流の女性らしい声に、アルジュナは言い切る。

穏やかな表情で。

「良いことと悪いことには天井も底も無いんです」

黒妻綿流は気づく。

その良いことと悪いことをアルジュナが言わなかつた事を。

それが、彼の立ち位置を露骨に表していた。

インターホンが鳴ったのは、そんな時だった。

「黒妻綿流さん。」

お客様がお見えになつていますが？

オーランド・リーヴさんと名乗っており、入即出やる夫さんのご紹介だとか」

黒妻綿流が口を開く前にアルジュナは返事をする。

その顔からはここが戦場であるという緊迫感が漏れ出していた。

「マスターはまだお疲れです。」

お断りしてください」

これが聖杯戦争なのだろう。

黒妻綿流はなんとなく思った。

「そうですか。」

名刺を渡しておきますので、『困ったときには連絡を』とお願いします」

病院受付から玄関に向かい病院を出る。

霊体化したアキレウスがぼやく。

（なんだ。マスター。）

一戦しないのか？）

（ここで一戦してみろ。）

横殴りがどれだけ飛んでくるかわからんぞ）

（俺はそれこそが楽しみなんだけどな）

病院のナースには対魔忍が潜んでおり、逐次警護と情報が入即出やる夫に流れるようになっている。

拠点のバレは他勢力の集中砲火を食らうという良い例だろう。

だから、こんな声を彼は中学生からかけられる。

「おい。おじさん。」

この病院に何か用？」

常盤台中学の制服からはちきれんばかりの体を晒しながら、麦野沈利は気だるそうな



顔で質問をする。

そんな態度なのは、どこからでも彼女の武器であるビームが出せるからな訳で。

「ああ。すまないね。

ちよつと見舞いに来たのだけど、まだ安静と断られてね。

私の名前は、オーランド・リーヴ。

入即出やる夫氏の知り合いだよ」

「なんだ。

あのおっさんの知り合いか。

この病院、最近物騒だから、見張っているんだよね。

変なちよつかい出したら、おっさんの知り合いといつても容赦しないよ」

「分かっているよ。

お詫びに、シヤケ弁を届けさせるから勘弁してくれ。

おじさんも仕事で来ているから、世間のしがらみが色々あつてねえ……」

もちろん、麦野沈利とのエンカウントは想定範囲内だから、入即出やる夫から引き出した情報によって戦闘を回避する。

そんな交渉中に、しっかりと念話でアキレウスに戦力判定をさせるのを忘れない。

(で、ライダー。

これ勝てるか？

多分、やってる時に確実にアーチャーが横殴りしてくるが？)

(きついな)

アーチャーの真名がアルジュナならば現時点で俺と互角。

目の前の嬢ちゃんも、何をやったか知らんがペンテシレイアとタメを張れる力を持つてやがる。

大暴れしていいのなら別だが？)

アキレウス召喚に際して、オーランド・リーヴは令呪を切つて命令遵守を命じたのである。

大英雄を組織的行動に組み込ませる事を最初に考えるあたり、オーランド・リーヴが米国の組織の人間であるという事が分かる令呪の切り方である。

(よせ)

ここで戦闘になって、真つ先に脱落するのは良くない。

セイバー・ランサー・アサシンの三騎がわからない以上、まだ自重しろ)

(へいへい。了解つと)

「……まあ、あのおじさんの知り合いでシヤケ弁くれるなら悪い人ではないでしょ。

一つ忠告。

私や、あの病院に寝ている患者目当てに、レベル5が動いているから気をつけな。

学園都市の暗部は結構深いよ」

ある意味、当然の事態だった。

まだ学園都市は麦野沈利を公式のレベル6とは認めていないが、その能力の超発展は次の検査でレベル6と認めざるを得ないだろうと既に噂されていた。

そうなる、どうして彼女が突如レベル6に成ったかを知りたがる訳で。

それは必然的に、この学園都市で行われている聖杯戦争という魔術儀式をクローズアップさせようとしていた。

「特に、白髪のカギとチャライ学生が突っかかってきたら、迷わず逃げな。

あいつら、もうすぐ二位と三位になるし」

それが一方通行と未元物質の事を指しているのはオーランド・リーヴでも分かった。思った以上に、この病院の危険度は高い。

「……肝に銘じておこう。」

では、失礼するよ。お嬢さん」

おじぎをしてこの場から退去するオーランド・リーヴ。

念話でアキレウスがこんな事を言ったのはその時だった。

(で、俺達の会話を監視していた輩はどうする?)

もちろん、病院内のアーチャーではない)

(ひとまずは放置だ)

この情報を持って帰って、司令部の判断を仰ぐ)

病院からかなり離れたビルの屋上より、片倉富士雄ことダークニンジャはニンジャ視力と聴力を持つてして麦野沈利とオランダ・リーヴの会話を聞いていた。

ダークニンジャのニンジャ思考力は、病院内と近くでアンブッシュしているサーヴァントにこの身がバレていると判断していたが、同時に彼に攻撃する事はアブハチとらざるになると理解しての行動である。

そんな彼の近くに影が落ち、その影はオジギをした。

「ドーム。ダークニンジャサン。シルバーカラスです」

「ドーム。シルバーカラスサン。ダークニンジャです」

互いに挨拶を交わす。

彼らの古事記には大事と書かれているのだから仕方ない。

「で、俺みたいな奴まで雇って、あの病院を襲えつてののか?」

「状況が変わった。」

もうしばらくはアンブツシユを続けてほしい」

それは、彼らのニンジャ第六感が感じている怯えにも似たものだった。

神代の古のニンジャにも匹敵する力が互いに水面下で睨み合っていた。

そこにサンシタニンジャを突っ込ませても、ただバクハツするだけである。

サーヴァントを相手にするには、サーヴァントをぶつけるべし。

ニンジャ相手にニンジャをぶつけるように。

## INTERMISSION その3

麻帆良学園。

近年は関西呪術協会を始めとした侵入者の撃退が激変し、今やそのセキュリティは魔法と科学にて強固なものになっていた。

「で、今日の馬鹿はどうだ？」

米国の工作員か？

ナチの馬鹿どもか？

魔術協会の命知らずか？

神殿教会と聖堂教会の狂信者か？

アーカムやトライデントの金の亡者か？」

学生生活を謳歌しているエヴァンジェリンA・K・マグダヴェルにとって、この警備業務はただの面倒事なのだが、今日の相手はその中でも飛び切りの面倒事だった。

タカミチ・T・高畑は彼女に向けて、その相手を淡々と告げた。

「ニンジャだ」

「忍者!?!」

「いや、ニンジャだ」

日本語のニュアンスは難しい。

とりあえず、そのあたりの問答を経て、二人の話は先に行く。

「ほら。」

対魔忍育成機関の六車学園を麻帆良に設置しただろうか？

対魔忍はその容姿もあって、捕まると魔物たちに凌辱されてね。

口の悪い輩は『魔物相手の娼婦』なんて言っている奴もいる。

そんな彼女たちを狙っているのが、ニンジャという訳だ」

「すまない。」

私もかなり日本に長く住んでいるのだが、いつの間にかこの国はそんな愉快なことに成り果てて居たんだ？」

「さあ。いつからなんでしようねえ？」

私としましてはそつちもそうですが、この学園の防衛体制にも懸念を持ちたい所なんですけどねえ」

さも当然に話に加わるのは、着任したばかりの入江省三麻帆良学園監察官。

文部省の入江シリーズで、この麻帆良学園都市の主権を日本国に戻すのを目的としている。

そのあたりを隠そうともしていかないから、当然先の二人も警戒感バリバリである。

「こういうトラブルは上位組織に報告して、その上で対処していただくのが筋なのですが、現場判断で対処した結果報連相がなおざり。

よくある事ですな」

「御高説」もつとも。

その御高説が今夜の襲撃にどのような役に立つか、お教えいただくとありがたいのですが？」

エヴァの慇懃無礼な質問にも入江省三の顔色は変わらない。

そもそも、理由があるから現状がある訳で。

その理由に触れずに現場判断を繰り返す以上は、理由を潰すのが一番手っ取り早い。「ええ。」

今回のニンジャ、その組織を束ねているのは所沢に本社があるネコソギ・フアンド社というのですが、前政権やノマドと癒着して色々とやっていたみたいですね。

それが政権交代で甘い汁が吸えなくなりました。

これが一つ」

多国籍企業であるノマドにとって、どうしても国内優先という訳にはいかない。

対魔忍を娼婦化した売却先の一つがこのネコソギ・フアンド社であり、ここの娼婦は



オイランと呼ばれて政財界の暗部にブランドとして知名度を誇っていた。

そんな娼婦供給ラインが去年の秋口あたりから壊滅した。

製造していたノマドはどこぞのカレー好きシスターの猛攻撃で国内拠点の大半を失う大ダメージを受け、野良や元を含めた対魔忍を先ごろまとめて買い漁ったのが入即出やる夫である。

つまり、現場の娼婦の供給が追い付かなくなりつつあったのである。

何しろ魔物やニンジャを相手にする娼婦はただの人ではすぐ壊れてしまう。

そういう意味で、対魔忍というのは格好の娼婦素材だったのである。

無いならば、奪ってくるしかない。

「もう一つは、向こうのご挨拶というやつですな。

三下を出して様子を見た上で、今後のお付き合いを考えようという所でしょう。

何しろ、ネコソギ・ファンド社は学園都市の技術を転売することで巨利を得ています。

同じことを麻帆良学園都市でも考えるのは自然でしょう？」

さりげなく入江省三は、学園都市で起こっている聖杯戦争にニンジャが絡んでいる事を伏せた。

いずれは分かる事だろうが、そのあたりの対処を含めて麻帆良学園首脳部の動きを知りたいという理由である。

それに気づいている二人は、ネコソギ・フアンド社の狙いに気づく。

「こつちで研究している冬木の大聖杯のデータか」

「学園都市で聖杯戦争が起こっているらしいですからね。」

「だったら、冬木の聖杯戦争も調べますな。」

襲ってくる連中の狙いはこれです」

冬木の大聖杯の研究は、ここ麻帆良学園都市にデータが送られて調べられている。

その調査解析の中心にいた人物こそ、超鈴音だったりする。

襲われる理由はいくらでもあった。

「そろそろ仕事の話に戻りましょうか。」

現在の警備は、貴方たち関東魔法協会に入即出統括審議官がつけてくれた対魔忍が中隊規模。

さらに自衛隊の対魔小隊が配置についています」

政権交代でその大義を失った自衛隊のクーデター戦力の一つであるガイア系自衛隊員だが、左遷先の一つがここ麻帆良学園だった。

彼らは麻帆良の現状を正しく認識し、日本政府への麻帆良の主権返還を目標に入江の良い手駒に成り果てて居た。

シヨック療法と言ってはいけない。

「で、相手は？」

「ただのサンシタみたいですね。」

向こうは主力のシックスゲイツを学園都市に投入するでしょうし、聖杯戦争もまだ序盤戦です。

ただ、進めば進むほどどこも後方ではいられなくなるのでご注意ください」

現代戦争に後方なんて文字はない。

あるのは総力戦であり、それに勝ったからこそ米国は超大国の地位に居座っていられるのだ。

仮にも戦争と名がつけられた以上、国家というものがどう動くかというのを他の勢力は理解していなかった。

後日、警備の為に自衛隊員の増派が行われ、メガロメセンブリア元老院との決別に向けて麻帆良学園首脳部と暗闘を繰り広げるのだが、麻帆良学園はその動きをまだ理解していなかった。

## 学園都市聖杯戦争 その1

東京ジオフフロント。

かつては地下都市ヨミハラと名乗っていたこの街は一人のカレー好きシスターによつてその勢力が駆逐され、特区扱いで政府管理下にある。

とはいっても、実際の運営は東京ジオフフロント連絡会なるものが担い、政府はそこから甘い汁を吸うだけに留めているのだが。

そんな東京ジオフフロント連絡会の議長を務めるのは、ダーニック・プレストーン・ユグドミレニア。

今、俺の前に居る人物である。

「ようこそ。入即出統括審議官殿。

歓迎はしたくないが、敬意は表させてもらうよ」  
「それはどうも。」

では、今回の訪問の目的は察しているのでは？」

聖杯戦争参加意欲 100で参加

「統括審議官。

私は、あの学園都市の聖杯戦争に絡むつもりはないよ」

「おや？」

かつての聖杯戦争の参加者だった貴方が参加しないとは」

「それを言ったら、前回の聖杯戦争の勝者である貴方が出ないのはどうしてかと返してみましようか」

「はは。

一本取られましたな」

出ない理由

- 1 聖杯が信用できない
- 2 他勢力が絡みすぎている
- 3 すでに一族の人間を出した
- 4 他勢力の支援をしている
- 5 魔術協会への復讐優先

6 どないしよ

3 すでに一族の人間を出した。

「まあ、こちらにまで来られた上に、聖杯戦争に参加していないという貴方のスタンスに敬意を表して、一族の者を出したとだけ伝えておきましょうか」

まあ、さすがに一族の人間を出してはいたか。

この時期で、聖杯戦争に絡めるとするならば、ゴールド・ムジーク・ユグドミレニアか、セレニケ・アイスコル・ユグドミレニアのどちらかだろうか。

1 ゴルド・ムジーク・ユグドミレニア

2 セレニケ・アイスコル・ユグドミレニア

1 ゴルド・ムジーク・ユグドミレニア

「ゴールド・ムジーク・ユグドミレニアの方だよ。」

一応、この東京ジオフロントの下層に工房を用意して、そこを拠点として動くつもりだ」

「……また随分情報を晒しますね?」

いわれる前に答えるダーニツクに俺は怪訝な顔をする。

ただより高いものはないからだ。

案の定、ダーニツクは等価交換とばかりにこう告げてきたのである。

「もちろん、ただではない。」

代金として、彼が呼び出すサーヴァントのアドバイスをお願いしたいのだ」  
なるほど。

怪しい聖杯に保身はするが、勝つ努力は惜しまないという所か。

代金とばかりに確認してきたサーヴァントの情報を知ったダーニツクが渋い顔をす  
る。

「アキレウスにアルジュナか。」

また大物がでてきたな」

「フランケンシュタインも侮れない。」

キャスターリンボ。

こいつの後ろがわからないが多分ろくでもない輩なのは間違いない。

キャスターのアマデウスは陣地に籠られる前に潰すことをお勧めしますよ」

ここで重要なのは、いまだセイバーとアサシンが空いているという点。

俺が参戦を決意したら、モードレッドとステンノを送り込めるといふのを各勢力は警戒していた。

それを知っているので、ダーニツクにさらりと振ってみる。

「何なら、参戦しない事をセルフギアスクロールにしたためましょうか？」

「まさか。」

時計塔の老害どもはともかく、あれには作ろうと思えばいくらでも逃げ道がある。

ましてや、この国の政府高官となった貴方相手にそれを求めるデメリットを私が考慮しないでも?」

現在の俺の立ち位置は、『ソウルハッカーズ』の西次官に近い。

その気になれば、この東京ジオフロントを支配下における権限と戦力を有しているのだ。

少なくとも同じ政府組織内の人間として、ダーニックと俺は政治的妥協が結べる関係だった。

それをわざわざセルフギアスクロールなんてもので信頼と妥協を破壊する必要もない。

「いいでしょう。」

何かあったら学園都市の外務省研修施設に逃げ込んでください。

安全に外に出しますよ」

「……米国の邪魔が入らない限りですな」

詰まる所、この巨大すぎる最大勢力がいる為に俺たちは妥協ができる。



それを俺もダーニツクもとてもよく理解していた。

ゴールド・ムジーク・ユグドミレニアの鯖

1 セイバー

2 ランサー

3 アサシン

1 セイバー

星<sup>2</sup>

召喚事故発生

1 ホワイトライダー

2 ブラックライダー

3 レッドライダー

1 ホワイトライダー

ゴールド・ムジーク・ユグドミレニアの末路

1 生存

2 同上

3 同上 ジオフロントに被害

- 4 同上 ジオフロントに壊滅的被害
- 5 死亡
- 6 同上 ジオフロントに被害
- 7 同上 ジオフロントに壊滅的被害
- 8 ゴルドだけでなくダーニツクも死亡
- 9 同上 ジオフロントに壊滅的被害
- 10 熱烈歓迎
- 1 生存

その日の夜。

切羽詰まったゴルド・ムジーク・ユグドミレニアにたたき起こされた俺は、彼の召喚失敗事故とそれに伴う呼んでしまった何かの映像を見せられることになる。

ホワイトライダー召喚。

終末の四騎士のうち二騎がそろってしまっていた。

「被害は？」

「私は無事で、工房は滅茶苦茶だがとりあえず奴はどこかに去った。

ユクドミレニア当主はジオフロント全域に搜索の手を伸ばしているが、いまだ見つ

かっていない」

「探し出したら手を出すな。

生半可な奴だと返り討ちにあうぞ。

私が出る」

けど、うつすらと確信していた。

多分、ホワイトライダーは学園都市に行ったのだと。

そこまで考えて、いやなことに気づいてしまう。

(メシア側のシナリオとして、聖杯戦争ではなく聖杯戦争を利用した終末の四騎士召喚が本命だったとしたらどうする?)

それを否定する根拠も証拠も、今の俺は持っていないかった。

この失態に関して、俺はユクドミレニアを庇うことで彼らに貸しを作った。

特に、ゴールド・ムジーク・ユグドミレニアの持つホムンクルス技術と壊れた工房は修復して、喫緊に迫っているだろう『第二次あしか作戦』とメガテン東京壊滅シナリオ用戦力としてフル稼働する事になる。

ホムンクルス 稼働日数  
生産規模 月産58体  
29日

# 学園都市聖杯戦争 その2

桃条千影からの聖杯戦争報告

- 1 何もなし
- 2 交戦後双方消耗
- 3 同上
- 4 交戦後片方脱落
- 5 不明勢力判明
- 6 同上
- 7 大規模交戦周囲消耗
- 8 大規模交戦被害者多数
- 9 聖杯災害発生
- 10 熱烈歓迎
- 5 不明勢力判明

1 セイバー

2 ランサー

3 アサシン

3 アサシン

星4

1 ステテンノ

2 カーミラ

3 エミヤ

4 新宿のアサシン

5 不夜城のアサシン

6 アサシンパライツ

7 どないしよ？

6 アサシンパライツ

マスター特定イベント発生

「アサシンが分ったって？」

「はい。」

巻き込まれてマスターになったそうです。

名前は矢本古希。

女子高生だそうですよ」

京都生まれで色々あってニンジャの力に覚醒。

ノマドに捕まって、学園都市に実験体として売られた際に逃げ出して、スキルアウトとして生活していた。

アサシンの召喚は最近で、彼女の導きで学園都市に散った対魔忍に接触。保護を求めてきたという訳だ。

「で、その彼女の機嫌がよろしくなさそうなのだが？」

モニター越しの彼女は固い表情の下にむすつとした表情である。

桃条千影も保護した対魔忍もその胸は豊満であった。

あえて何も言うまい。

「アサシン・パライソと申します。

新たなお館様である矢本様に忠誠を。

真名ならざる忌名にて、失礼」

あー。

ニンジャがらみで召喚されちゃったかー。

とりあえず裏がなさそうな主従でひとまず安堵する。

「入即出やる夫だ」

で、保護をと来たが、誰からだ？」

まずはこれの確認。

大体察していたが、案の定であった。

「ネコソギ・ファンド社から。」

彼らは、お館様の持つニンジャの力を取り込まんとしております」

それだったらどうにでもなる。

問題は、アサシンパライソの方だ。

ほぼ間違いなく、キャスターリンボの仕掛けがある。

ここでそれを言うつもりはないが。

「それについては可能だ。」

アサシンよ。

お前が聖杯に託す願いと、彼女の保護との整合性をどうとるつもりだ？」

「え？なに？」

どういうことですか？」

矢本古希がきよんとした顔で声を漏らす。



そのあたりをアサシン。パライソは言っていないのか、言えないのか。「もちろん、聖杯戦争に召喚された身なので、願いたい事はありません。」

「そのためにはお館様を守らねばならず、我が身一つでお館様を守り切れるほど自惚れてはおりませぬ。」

「まだ本格的に始まっていない今ならばこそ、我が身を高く買っていただけるか」と

「ほう。」

「高く売れるものがある？」

「はっ。」

「忍びとして他のサーヴァントの情報は集めておりましたゆえ」

「提供できる残りの鯖情報」

「1 騎」

「1 セイバー」

「2 ランサー」

「2 ランサー」

「星 3」

「1 クーフリーン」

- 2 クーフリーン プロト
- 3 ロムルス
- 4 ヘクトール
- 5 デイルムツド
- 6 宝蔵院胤舜
- 7 どないしょ?
- 5 デイルムツド

「ランサーの姿をお見掛けしました。

紙に絵を写し取りました故」

このあたりの情報のやりとりは忍だなあと思ったり。

その絵でランサーがデイルムツドであるとわかった。

誰がマスターかまで分からないが、これではセイバーのみとなった。

「いいだろう。」

保護については受け入れる。

とりあえず、拠点を用意するので、そこで活動してくれ。

ネコソギ・ファンド社については、俺の方から圧力をかけておく」

アサシンパライソが抱えている呪いが爆発したら色々とまずいことになるので、ひとまず第十九学区のアンブレラ社の研究施設を拠点として二人に提供する。

テレビ通話を切って俺はため息をつく。

「予想はしていたが、キャスターリンボは鯖に仕掛けてきたな。」

状況が膠着したら、派手に炸裂させて場をかき乱すつもりなんだろう」

「あらあら。」

じゃあ、あのアサシンは救わないの？」

隣でくつろいでいたステンノの声に俺はぼやく。

序盤だからこそその悩みである。

「救おうと思えば救えるが、懸念点が2つある。」

一つは、救おうとした瞬間に呪いを発動されて、俺たちもやられかねない」

厄介なのが、カルデアで奮闘している藤丸立香の所に酒吞童子が居たはずなのだ。

バーサーカー・衆合地獄に変えられて起爆がキャスターリンボにできるかもしれないのがこの話をややこしくしている。

「もう一つは、呪いの解体後の話だ。」

アサシンパライソの呪いを解除するのはいい。

問題は、それによってアサシンが消えてしまう可能性がある。

そうだったら、またアサシンが呼び出されるかもしれない」

アサシンパライソの呪いは座に刻まれた形なので、解呪をする場合アサシンパライソの霊基から解体する事になる。

つまり、この時点で聖杯に入るアサシンがなくなる事を意味する訳で、アサシン再召喚なんてなったら水面下で鞘当てをしている各勢力の争いが過熱しかねない。

「どつちにしろ、助けるにせよ序盤は動けない。

後はセイバーがどこにいるかなんだが……」

### 桃条千影からの聖杯戦争報告

- 1 交戦後双方消耗
- 2 同上
- 3 同上
- 4 交戦後片方脱落
- 5 不明勢力判明
- 6 同上
- 7 大規模交戦周囲消耗

8 大規模交戦被害者多数

9 聖杯災害発生

10 熱烈歓迎

4 交戦後片方脱落

1 セイバー

2 アーチャー

3 ランサー

4 キャスター

5 アサシン

6 ライダー

7 バーサーカー

8 エクストラ

交戦鯖

4 キャスター

1 セイバー

脱落鯖

1 キャスター

2 セイバー

1 キャスター

セイバー

星<sub>3</sub>

1 カエサル

2 ジル

3 フェルクス

1 カエサル

「キャスターがセイバーと交戦して、キャスターが脱落したみたいです。」

セイバーの画像はこちらです」

翌日。

桃条千影からの報告で、最初の脱落が出た。

キャスターアマデウス。

彼を潰したのはセイバーカエサルだった。  
それを見た俺はつぶやく。

「……………ん？」

メアリースーは何を召喚したんだ？

いや、最初から聖杯戦争そのものが囮なのか???

## 学園都市聖杯戦争 その3

サーヴァントが大体出そろった今回の聖杯戦争だが、そろそろ本格的な介入を考へる。

サーヴァントが出そろわないと動けなかったので、やっと本格的に動けるようになったという訳だ。

まずは、同盟国であり派手に介入している米国の意図から探る。

さすデグチエツク 100でさすデグ

100 クリテイカル

「決まっているだろう？」

米国の本来のドクトリンは敵を解析し、大量の物量で押し込む事だ。

じゃあ、聖杯戦争という戦争において、そのドクトリンをどういう風に用いるべきか？

モニター向こうのデグさまは楽しそうに笑う。



米国の秘密通信回線だから、メアリー・スー側に丸見えなのだが、それを踏まえてもデクさまに話をしておく必要があった。

つまり、俺の立ち位置の表明というやつだ。

「マスター間の同盟でタコ殴り？」

「30点。」

もちろん100点満点でだぞ。

それだと最終局面で対決待ったなしだろうが。

聖杯戦争というシステムが勝者を一人と一騎と規定するならば、同盟なんて愚の骨頂だ。

正解は『盤外から圧倒的戦力をもって殴る』だ」

「待ってくれ。」

奴ら、少なくともオランダ・リーヴと衛宮切嗣、それに俺を加えようとしていたぞ？」

俺の質問にデグさまは実に意地悪そうに嗤う。

今日も顔芸が実によい感じだ。言うつもりはないが。

「だから、その三者とも必要ならば全部切り捨てられるだろうが？」

もちろん、聖杯戦争という戦術面でも手はぬかんよ。

それを行えるだけの国力を我が国は持っているからな。

だが、考えてもみろ。

マスターになるという事は、英霊召喚というガチャを行わねばならない。

ここでの引きで勝敗が左右されるなんてばかばかしいだろう？」

もちろん、最終局面での聖杯強奪なんて普通の聖杯戦争ならば発生しにくい。

サーヴァントの力がそれを抑え込めるからだ。

だが、ここは闇鍋世界。

サーヴァント以上の力を持つ色々な存在が普通に跋扈していた。

「少し意地悪な見方をするとだ、奴ら、怖くなったのさ」

デグさまが楽しそうに何よりです。

そんな事を思いつつ彼女のお言葉を拝聴する。

「多分、実験として最初に呼んだのが、オーランド・リーヴのアキレウスだったのだろう。

ここで、本命であるメアリー・スーがそれ以下の格の英霊を呼びだしてみろ。

計画が完全に崩壊しかねん。

だから、盤外からぶん殴る方向に切り替えた」

たしかにアキレウスは最高級の当たり鯖である。

それを切り捨て要員が持つてしまった故に、今回の喜劇に近い状況が発生していた。

「何でここで衛宮切嗣を脱落させたと思えますか？」

「あれは君の推測通りの捨て駒だ。」

「その捨て駒を序盤に捨てさせた意味を考えるべきだろうな」

「米軍ですか？」

「デグさまは本当に楽しそうだ。」

「お気楽なと思いたいが、彼女は彼女で対アンブレラとミレニアムの対策に追われて俺以上の修羅場になっているのを知っている。」

「それでもこうやって時間を作ってくれるあたりありがたいことこの上ない。」

「いや。」

「カエサルさ。」

「気を付けたまえ。」

「サーヴァントの能力に目を向けると足をすくわれるぞ。」

「彼はローマでも随一の將軍であり政治家だ。」

「私や君みたいに会議室の戦争で輝ける逸材だぞ。」

「その彼が、真っ先に捨て駒を叩いた意味を考えたまえ」

「……そのカエサルのマスターを知っているのですね？」

1 科学サイド

2 同上

3 魔術サイド

4 同上

5 介入勢力

6 どないしよ？

1 科学サイド

そのまま、モニターに一人のデータが送られてきた。

科学サイドである木原一族の魔術師木原加群。

またの名を魔術結社『グレムリン』の正規メンバーの一人ベルシ。

「こんな楽しいお祭りを他の勢力が手をこまねいて見て居る訳ないだろうが。

ランサーの方も判明したから教えておこう」

1 ボー・ブランジエ

2 同上

3 染井芳乃

4 同上

5 ラオモトIIカン

- 6 どないしょ?
- 6 どないしょ?
- 1 ファンブル
- 2 クリティカル
- 1 ファンブル

モニターに出てきたのはホストっぽい外見だがデータには公務員と書かれている。  
さすが聖杯戦争。

こういう時によそ者が遠慮なく入ってくるのがたまらない。

「麒麟遊人。」

区役所の職員らしいな。

見たところ、怪しいそぶりはなさそうだが……?」

「そいつ、冬木で大暴れした桜塚星史郎のお仲間の一人ですが、まだ話を通じますね。  
こういうデータが出たという事は……」

「ああ。」

エージェントが接触する前に、たまっていた有給休暇を申請して雲隠れ中だ」

そして、米国の諜報力をもってしても、まだキャスターリンボのマスターが誰かわ

かっっていない。

ある程度全体像が見えたからこそ、このゲームの構図が浮かび上がってくる。

「聖杯戦争とその聖杯を聖杯戦争終了後にかすめ取ろうと考えているやかからも居るから、聖杯戦争とその介入勢力の殴り合いが待っている訳だ。

あの都市の主であるアレイスターⅡクロウリーも君やメアリー・スーと同じ介入側だろうな」

通信を切った後、疑念が頭をよぎる。

ここまで、好き勝手している状況で、学園都市の主であるアレイスターⅡクロウリーの手が見えないことに。

奴は、何を考えている？

その問いに対する答えは、出ることはなかった。

桃条千影からの聖杯戦争報告

1 交戦後双方消耗

2 同上

3 交戦後片方脱落

- 4 同上
- 5 背後勢力交戦 消耗
- 6 同上
- 7 大規模交戦周囲消耗
- 8 大規模交戦被害者多数
- 9 聖杯災害発生
- 10 熱烈歓迎
- 2 交戦後双方消耗
- 1 セイバー
- 2 アーチャー
- 3 ランサー
- 4 ライダー
- 5 アサシン
- 6 バーサーカー
- 7 エクストラ
- 5 アサシン
- 1 セイバー

カエサルスキルによるイベント発生

カエサルの『軍略B』『カリスマC』『扇動EX』発動。

交戦意思 100でバリバリ

1 クリティカル扱い

「桃条千影から緊急報告です。

アサシンのアジトにセイバーが急襲。

……降伏を申し込んできたそうです」

何が起こった!?



## 学園都市聖杯戦争 その4

セイバーの降伏。

第三学区の日本政府施設にあるカメラから撮られているカエサルは実にふてぶてしかった。

ああ。こいつはセイバーではない。  
政治家だ。

「はじめまして。

まずは降伏に伴う寛大な対応に感謝を。

私の名前は言わなくていいだろう？」

「ええ。

ガイウス・ユリウス・カエサル。

あなたをセイバーだなんて呼びたくありませんな。

入即出やる夫。宮内省統括審議官。

あなたの知っている役職で、一番わかりやすいので言えば……属州総督でしょうな」

「これはまた大物だ。

その前職は、執政官かね？法務官かね？」

「法務官ですよ。」

ローマ外の属州生まれが後援者を得て、財務官、法務官と経て属州総督に。

野心があるならば、執政官にという所なのでしょうが」

「素晴らしいじゃないか。」

私なら、迷うことなく君を執政官に推挙するよ」

「そうやって何人誑かしたのですか？」

「そうだな。」

ローマが傾くぐらいかな？」

「はっはっは」

「はっはっは」

小粋なローマジョークの挨拶も終わって、そのまま本題に入る。

あくまでこつちが勝者であり、向こうが敗者なのだ。

とはいえ、このペテン師は簡単にそれをひっくり返しかねないのが怖い。

「なんでうちに逃げ込んだのです？」

「簡単な話だよ。」

今回の聖杯戦争は、背後勢力の潰しあいがメインだ。

つまり、サーヴァントが残っている間に、背後勢力を潰した所が勝者となる」  
あつさりとの聖杯戦争の本質を見切るあたり、彼の政治能力は本物だ。

多分、これに気づいているのは、ライダーのアクレウスとアーチャーのアルジュナぐらいだろう。

そしてそれは、サーヴァントの意味が変わる事を意味する。

サーヴァントという『戦力』が『タイマー』に。

「それを分かっているながら、あなたアマデウス潰しましたよね？」

「そりゃ、ここに転がり込むための手柄の一つという事だよ。」

何よりも、奇数より偶数の方が手を結び易いだろう？

今頃は我々の提携に泡を食って、水面下で楽しいことになっているだろうな」

「その水面下で動いている黒幕らしいキヤスター・リンボについて何か？」

セイバーの推理＋マスターの学園都市知識補正30

99 クリテイカル＋30 || 129

「まあ、ある程度の説明はできるが、ここから先は取引というやつだな」

いいようにカエサルの中車に乗っている自覚はあるのだが、現状その水面下にて蠢く

勢力を武力討伐する場合どれだけの手間がかかるか分からない。

降伏の時点で、俺にはカエサルの口車に乗るしかなかった。

このローマ最高の政治家の一人は、大ほら吹きであると同時に、互いの妥協線を作り上げるのがとてもうまい男だったのだから。

「で、こちらには何を求めて?」

「私個人としては色々があるが、とりあえずはこの聖杯戦争からの安全な脱落を望むね」  
聖杯戦争に参加するサーヴァントは、聖杯に望みがあるから出てきている。

それにも関わらず、彼はためらうことなく聖杯戦争からの脱落を望んだ。

そのの意味することは一つだ。

「『聖杯を完成させるな』……か。」

冬木の汚染された聖杯よりたちが悪いみたいだな」

「あれが聖杯だつて!？」

とてもじゃないが、そんな代物ではないよ。

少なくとも、呼ばれたあれは聖杯などと呼びたくない何かだよ」

つまり、大聖杯は『F a t e / K O H A | A C E 帝都聖杯奇譚』に出てきた八一号聖杯爆弾で確定と。

待てよ?」

そうなるよ、現在行方不明の本物の聖杯とメシア勢力の狙いは何だ？

「あれが爆発したとき、何か起こるか正直見当がつかん。

この世界の核か。

あれよりもたちが悪いと、私は思っている」

考え込む俺の思考がカエサルに誘導される。

嘘は言っていないのだから、実に腹立たしい。

そこから導かれる答えに行きついたからだ。

「悪魔の出現は核戦争の後だったと言われているが、核爆弾ぐらいで悪魔が出現するのなら、地球上にはもつと悪魔がはびこっている。

今までどれだけの核実験で核爆弾が地球上で爆発してきたと思っているんだ？」

「そういうことさ。

私も名声や富や快楽を十分に堪能したが、それでもローマという人類の揺り籠を壊したりはしなかった。

悪魔という蛮族相手に、自ら防壁を崩そうとする愚か者と手は組みたくないという訳でね」

メシアの狙いはわかった。

この聖杯爆弾を炸裂させて、この地上に悪魔を跋扈させて千年王国へという筋書きな

のだろう。

「ん？」

待てよ。

魔界への穴はすでに開いているのに……ああそうか。

その穴を広げる為の聖杯爆弾か」

「そこまでわかるならば、この聖杯戦争の筋書きが見えてくるだろう？」

誰が用意したか知らないが聖杯爆弾が学園都市にあり、その爆弾が炸裂するのは東京  
ジオフロントと呼ばれている地下都市ヨミハラ。

つまり、メシア側としては聖杯爆弾を都心に運ぶ必要がある。

「……その過程で最も邪魔なのは俺か」

「だから、君を相手に選んだという訳さ。

手を組んでくれるだろう？」

「ああ。

カエサル殿については分かった。

だが、マスターは賛同しているのかな？」

俺の確認にカエサルはにやりと笑う。

すでにカエサルの術中にはまっているが、こまったことにそれが心地よい。

「それも条件に入れておこう。

マスターの願いは、木原病理への復讐なのだが、君と組んでいると勝手に成功するのだよ」

ん？

どういう事だ？

そんな顔をした俺にカエサルは楽しそうに言い放った。

「君の所のダヴィンチ女子。

彼女、可能性の塊じゃないか。

彼女が学園都市の研究者にアドバイスし続ければ、木原病理が司る『諦め』は簡単に破綻する。

それも君の所に転がり込んだ理由の一つさ」

そういう事か。

こいつ、計算づくで逃げ込んだ。

その意味することは……

「さすがカエサル。

俺の所に逃げ込んだのを全勢力にばらまいたな」

「そして、安全に脱落させるためには、我々を学園都市外に出さないといけないだろう？

ほら。

戦場を限定できた」

うん。

こいつは英霊になってもカエサルだ。

セイバーなんてクラスにおさめきれない器に俺は苦笑するしかなかった。



## 学園都市聖杯戦争 その5

戦場は限定できた。

次は、敵味方の選別である。

「手慣れていますな」

俺の皮肉にも画面向こうのカエサルは肩をすくめてこう返しただけだった。

「たいしたことではないよ。」

ガリア人相手に戦い続けるよりはね。

精々今の状況は、アレシアの包囲戦よりは楽だからな」

……なんでこの人を星3なんぞに置いたんだろうなあ……

そんな事を考えながら、俺はカエサル劇場の観客に徹することにした。

「米国には今回の聖杯戦争がテロ組織のテロであるという情報は届いているのか？」

「……いや。」

そのお話は初耳ですな？」

俺の電話会談を受けてくれたトールマン大使は、慇懃無礼に俺の言葉をかわす。

なお、そのテロ組織メシア教って言つて、トールマン大使がその構成員というのを分かつたうえでこのセリフである。

こういう策を提示するあたり、そーいうところだぞ。カエサル。

「ええ。

情報ソースは秘匿させてください。

今回の事件、学園都市にある聖杯を爆弾、つまり冬木市で発生したような溶岩流出事件を起こすために使い、都心でテロを仕掛けるのではないかという話なのです。

この情報を我が国は関係機関に流し、情報の裏取りを進めています。

同盟国として、今回の事件に対して協力をしてくださっている米国の協力への感謝と  
思っていただけだとありがたい」

「それはそれは。

我が国はいつでも同盟国として支援する用意がありますぞ」

まずは最大勢力のメシア教と米軍の連携に楔を打ち込む。

マスター陣営が切り捨て要員だからこそできる、本体へのダイレクトアタックにトールマン大使は電話向こうの語気は変えないが、焦っている事だろう。

「助かります。

すでに、米軍にも横須賀基地のユーリア・ブラッドストーン大佐に伝えており、この

テロ組織への警戒を促している所です。

何も無い事が一番なのですがね。

ああ、メアリー・スー大佐に伝えておくべきでしたか？」

つまり、デグさまことターニャ・デグレチャフ少将にも伝えているという事で、現在ワシントンで行われているアンブレラ社パージにかこつけてメシア教パージも行うという事だ。

彼らに選択肢があるように見せて追い込む。

動くか、動かないかを。

トールマンの反応 100で政治的に判断

95

メアリー・スーへの反感 100で好感情

15

「いいえ。

私は米国駐日大使として、権限を有している。

入即出統括審議官のお手を煩わせる必要もないですよ。

私の方から伝えておきましょう」

「各個撃破は戦争の基本だよ。

ましてや、大勢力になればなるほど、中の意思疎通は滅茶苦茶になる。

考えてもみたまえ。

現代のローマである米国の中が、果たして一枚岩なのかね？」

それであつさり分裂にもってゆくというか、そうやって貴方元老院とポンペイウス潰しましたね。

実験があると違うなあ。ほんと。

これで、メシア教と米軍に楔を打ち込んだ。

「ん、本気を出せ……？ よろしい、そのオーダーに応えましょう！

この研究についてはこう……この論文のポイントはこう……この理論については……」

ダヴィンチちゃん大活躍である。

木原加群のアドバイスの元、木原病理が諦めさせようとしていた研究に徹底的にテコ入れる。

というか、モニター向こうの木原加群に一喝してみせたダヴィンチちゃんはさすがダヴィンチちゃん。

「なんだい！なんだい！」

そんな事で君は諦めたのかい？

私を見たまえ！

死んで英霊になってもなお諦めきれず、この美女になつてまだ見ぬ未来を追い求めている。

そう、キミたちはあらゆる困難を乗り越える。その証左を今示そう！

『境界を超えるもの』！——さあ。行けるトコまで、行つてみよう!!」

いや、それロリンチちゃんのセリフ……聞かなかったことにしよう。

今のダヴィンチちゃんは学園都市研究という極上の餌に貪りついている可能性の獣だ。

というか、カエサル。

隣にいたのだろう。しつかりセリフが聞こえているんだよ。

「なんだ。マスターもそんな風に笑えるのではないか」  
って。

学園都市統括理事会の支援 100で好反応 +ダヴィンチちゃん支援30

69+30=99

アレスターの行動 100で行動 0で黙認

7

学園都市の権力者は超能力者ではない。

それを生み出す研究者こそ、権力者であり、金を持っている連中の多くは、それゆえに現在に満足して留まってしまふ。

そして研究者から権力者に姿を変えてゆくのだが、そんな行き詰った権力者たちにダヴィンチちゃんは容赦なく刺さった。

そのうえで、正論で押し通してゆく。

「こちらは、そちらの自治を尊重したうえでお話をしているのだが、学園都市内部にそういう事をせずに好き勝手する連中がいるみたいですか？」

アレスターの反応だけが気かりだったが、彼はついに動かなかった。

という事は、彼にとつてもメシアのハルマゲドンに迷惑でしかなかったという事なのだろうか。

そのあたりの事情はいまいち読み取れないが、少なくとも学園都市側から敵対行動を

とられなくなったという事で、敵を絞ることができた。

「ノマドが行っていた、クローン対魔忍製造の件なのですが、その部門をヨロシサン製薬に移して独立させようという動きが通産省の中にあります。

どうです？

一口乗りませんか？」

ラオモト・カンの利益 1000で利益

9

ラオモト・カンの執心 1000で執心

3

思った以上に、ラオモト・カンは乗ってこなかった。

というか、よせばいいのに麻帆良学園に移した五車学園に手を出そうとして、麻帆良の連中に目をつけられたからだ。

彼らの正義にラオモト・カンは防戦に追われ、政権交代で一緒に甘い汁を吸っていた政治家が失脚した今、体制立て直しの為に早急な手打ちを急かされていたのである。

まあ、東京が爆発四散した時に、所沢も無事なわけないしな。

この手打ちにて、ネコソギ・フアンド社は損切りをしてジェノサイドとバーサーカーもこちらの影響下に置くことに成功した。

個人的に一番うれしかったのは、雇われていたシルバーカラスⅡサンの契約を俺が引き継いだ事で、矢本古希に居合いのイニシエーションを伝えられることだろうか。

せつかくの閻鍋世界だ。

本物の剣豪英霊あたりも今度呼んでやろう。

とにかく、こうしてニンジャも舞台から降りた。

東京キングダム跡地。

現在ここに建設中の火力発電所は絶賛工事中である。

施設完成度 100で完成+ダヴィンチちゃん補正30+学園都市補正+10

53+30+10=93

「施設はほぼ完成ですね。

24時間突貫工事。

学園都市の技術支援があつたとはいえ、よくこれだけの期間で完成させましたよ」

工事関係者のぼやきを俺は適当に聞き流す。

なお、こういう工事大好きなダヴィンチちゃんが学園都市技術を流用して工事スケ



ジュールを超短縮させたのだが言うつもりはない。

とにかく、英雄王はこの地にて十全に動くことができる。

「遅いぞ！道化！！」

待ちくたびれたぞ！」

いや、半年で巨大発電所を建設するという力業は本来無理ですから。

とはいえ、それをいった所でこの王様聞かないだろうし。

「王にお喜びいただけましたら何よりです」

「約束どおり褒美をとらそう。」

と、言いたい所だが、こちらに来た目的、すでに察しておる」

さすが千里眼の持ち主。

こういう所でこの人は敵に回してはいけない。

「よかろう！」

あの雑種が出るかもしれんというだけで、我が出る理由になる。

このような三文芝居の脚本を書いた、あれに感謝するのだな」

万一に備えて英雄王参戦確定。

敵を減らし、味方を増やして各個撃破。

見事な手並みを三文芝居と言い切れるところに、この英雄王の凄味がある。

そして、雑事は俺の仕事。

ここは英雄王の力の源であり、弱点だからだ。

「警備は対魔忍とPMCに任せろ。

たしか室戸次官が雇ったロシア人のPMCがあつたら。

あれだ」

敵は分散させ、味方は集中させる。

だから、発電所出口で待っていたあのお方が居るのもあのカエサルのシナリオの内なのだろう。

「もちろん、私も連れてつてくれますよね♪」

周囲の空き地に草を生え散らかして待っていたアマテラスおねーちゃんの隣ですべてをあきらめたような目になっている鬼咒嵐を俺は見なかったことにした。

なお、俺の目も彼女と同じようになってるなんて言っではいけない。

## 学園都市聖杯戦争 その6

この聖杯戦争の決戦にちかいカエサル主従の脱出。

それは二正面作戦になる。

まずは学園都市に居るカエサル・木原加群と矢本古希とアサシン・パライソとジエノサイドとフランケンシュタインの三騎を学園都市入り口に向ける。

そして学園都市を出ると俺たちが出迎えて麻帆良学園都市に逃げ込むという形だ。

つまり、学園都市ゲート前までで学園都市内部勢力が動くし、俺たちが学園都市に行く前に外部勢力が襲ってくるという事だ。

「もう一つあるわね。

この瞬間、学園都市内部で決着をつけて動くという事よ」

実質的な決戦であるために夜通し準備が進められ、司令部を麻帆良学園都市に俺の隣で叢雲が懸念を表明する。

その言葉にマシユが口到手を当てて可能性を考えてゆく。

「その可能性は高いと私も思っています。

今、私たちは三騎のサーヴァントを支配下に置いているようなものです。

まだ、聖杯戦争において勝利をあきらめないのならば、この三騎の同盟が機能する前に各個撃破を狙える今日が多分最後のチャンスです」

大戦力を展開できるが、裏返せば守る場所が多いことを意味している。

麻帆良学園都市に司令部を置いたのは、麻帆良学園の戦力を当てにしていると同時に、クロエや朔月美遊を守る為でもある。

同時に、大戦力を麻帆良学園側に見せつける砲艦外交も視野に入れていたり。

「しかし、持ってききましたねえ」

俺の所にやってきた入江省三麻帆良学園監察官が集まった戦力を見てぼやく。

学園都市製トラックとNBC偵察車を司令部にして麻帆良学園都市郊外の森に司令部を置いた俺たちの戦力は以下の通り。

入即出やる夫

叢雲

ステンノ

マシユ

甲賀隴

天ヶ崎千草

ダヴィンチちゃん

モードレッド

クー・フリーン

対魔忍

375人

マシュ・茶々丸

26体

悪魔

妖精 ハイピクシー 1v10

妖精 ジャックフロスト 1v15

妖精 チルノ 1v32

神獣 ゲンブ 1v43

大天使 イスラフィール 1v42

女神 スカアハ 1v36

天津神 菊理姫 1v85

COMP外悪魔

鬼女 文車妖妃 1v12

魔神 大淫婦バビロン 1 v 6 9

天津神 アマテラス

万一を考えて、ジャンヌ・ダルクとドレイク船長は横須賀で留守番。回復が遅れていた対魔忍を受け取るのも今回の目的の一つである。

月産82体のマシユ・茶々丸シリーズもこの事態に完成していた26体を受け取って、司令部要員として指揮通信を任せている。

対魔忍は中隊編成で武装させて甲賀臈に一任させている。

これとは別に麻帆良学園都市が誇る警備陣が敵を迎え撃つ予定である。

「で、何でこんな夜中に居るんだ？ちびっこ？」

「こののーさつボディをみてそれを言うの!？」

アチャ娘ボディで悩殺ポーズを取るメスガキ……じゃなかったクロエ・フォン・アインツベルン。

似たような格好でポーズをとる魔人ヴィゼータと共にエロイというより腹が立つ感じが実にメスガキっぽい。

「こんな面白そうないイベントに呼ばれないなんてひどいから参加しにきました！」

「帰れ」

「えー!?!」

ほとんどお祭りに行きたい子供なのだが、ヴィゼータと仲良くなつてとうか精神年齢が同じ……

「何考えているの?」

「何も。」

遊ぶなどは言わんが危なくなつたら逃げるか応援を呼べよ」

「はーい♥」

そんなやりとりをする二人をげんこつで小突いて雪姫姿のエヴァがたしなめる。

彼女が学園結界に呪いがリンクされたのを利用した学園監視網はまだ生きていた。

「じゃれ合っているのは、そこまでにしてあげ。」

来たぞ」

敵戦力の規模 100で大規模

59

1 COSMOS

2 同上

3 同上

4 1+ハンターα

5 同上

6 同上

7 テンプルナイト

8 同上

9 7+メアリー・スー

10 熱烈歓迎

結果 4

COSMOS+ハンターα

「麻帆良学園都市コンピュータネットワークに障害発生。

何者かが攻撃を加えてきています」

「麻帆良学園都市送電線網に障害発生。

都市内部の発電に切り替えます」

「周辺部のカメラが次々に潰されています。

カメラに映った最後の画像がこれです」



カメラに映った巨大な両生類の姿は見覚えがあった。タンカーで戦っているのだから間違いない。

「これ、ハンターを操っている人間がいるな?」

「電気、コンピュータ、監視カメラの潰し方。

明らかにプロの人間ですね。これ」

「私たちを潰すというより、足止めが狙いかもしれません。」

麻帆良学園都市の都市機能が落ちたら、我々は支援せざるをえませんからな」

俺の呟きに甲賀臈が応じ、入江省三が補足する。

我々を潰さなくても、足止めして学園都市側で状況を動かしてしまえという事なのだろう。

「モーさんとクローフリーン。出撃。」

ハンターを蹴散らしてきてくれ。

神獣ゲンブと一緒にいってフォローする事。

大天使イスラフィールは上空から偵察。

対魔忍は麻帆良の警備員と協力して、都市要所の警備」

「市内に凶悪犯が逃げ込んだことにして、警察から外出禁止の要請を出します。

大宮の自衛隊は使いますか?」

入江省三の言葉に、俺は少し躊躇う。

自衛隊の介入。省が違う現状においてそれは厄介ごとになるからだ。  
とはいえ、俺は決断する。

「お願いします。」

あと、入間からヘリを回してください」

知らず知らず、俺はある副指令の言葉をぼやく。

その作品はまだ生まれていないのだが。

「やはり、最後の敵は同じ人間だったな」と。

ハンターα19体排除の結果

1 危なげなく排除

2 同上

3 同上

4 増援出現

5 同上

6 同上

7 苦戦

8 苦戦

9 苦戦の上増援出現

10 熱烈歓迎

結果1

危なげなく排除

(マスター)。

あの爬虫類の化け物を排除した。

操っている人間は見えないからこっちは完全に囲みたいだ)

COSMOSの侵入率

18%

交戦時の損害 損害5人

COSMOSの狙い

1 司令部

2 同上

3 同上

4 都市インフラ

5 同上

6 同上

7 世界樹

8 同上

9 同上

10 熱烈歓迎

結果 7

「こちら麻帆良大橋。

正体不明の兵士と交戦中。

損害は5人。

何人かが世界樹の方に向かった模様。

そちらの排除をお願いしたい」

世界樹？

奴ら、何であんなものに？

首をひねると、アマテラス様がぼんと手を叩く。

「ああ。

あの木、メシア側にとつても邪魔でしようからなるほど。そういう事か。

クロエとヴィゼータとエヴァの方を向いて俺はお願いする。「聞いている通りだ。」

敵の排除をおねがいしたい」

「まかせて♥」

「ええい！少しは緊張せぬか!!」

COSMOSの工作 成功率18%

1 クリテイカル

閃光と轟音が轟いたのは、クロエたちに迎撃を命じてから一時間も経たないあたりだった。

その破壊力の大きさは振動と爆風で俺たちは地面に付せざるを得ない。

「世界樹付近で爆発が発生!」

「放射能は検知されていません!!」

「あちこちでガラスが割れて、被害者の報告が……」

「麻帆良学園都市周辺部でも大規模爆発が……」

「クロエーヴィゼータ！エヴァ！無事か!？」

1 三人とも無事

2 同上

3 同上

4 エヴァ負傷

5 同上

6 同上

7 4 + クロエ負傷

8 同上

9 三人とも負傷

10 熱烈歓迎

結果8 エヴァとクロエ負傷

（やる夫！やる夫!!助けて！

エヴァが私たちを庇って爆発を……）

（ええい騒ぐな！

たかが爆発で吸血鬼は死なんと……もう吸血鬼ではなかったか。

おかげでこのざまよ)

(私は、ギリ異界に転移して逃げたから無事だけど、このあとどうする?)

(とりあえず、二人をエヴァの家に運んでくれ。

そこで治療する)

「……周辺自治体にも被害が出ているみたいですね。

核並みの破壊力じゃないですか」

入江省三のぼやきに思い当たる爆弾に俺は当たりをつけていた。

あのタンカージャックで使われようとしていた秘密兵器は、自衛隊と米軍の管理下に置かれているはずである。

管理されているならば。

「……テルミット・プラス」

そんな呆然としている俺の前で肩こりが取れたような運動をするアマテラスおねーちゃん様。

実にすつきりとした顔をしていらっしやる。

「ええ。とてもすつきりしていますよ。

あの爆発の後から、あの世界樹に吸われていた龍脈が私の所に届くようになっていきますから！

「どんな敵もおねーちゃんに任せてください♪」

つまり、世界樹への供給が止まったことを意味している訳で。

そのうち枯れるだろう世界樹とその前で元気に体操なんかしているおねーちゃん様を見つつ、大敗北を受けいれることにした。



## 学園都市聖杯戦争 その7

麻帆良学園の襲撃が終わって被害確認に入る。

調べてゆくとろくでもない被害にこちら側は真つ蒼になる。

「要石が破壊されただど!？」

要石。

日本の龍脈を制御する古代人の遺跡。

麻帆良学園の世界樹はその要石を利用して世界樹にエネルギーを供給していた。

だから、おねーちゃんことアマテラス様の肩こり……じやなかったパワーアップに繋がった訳で。

治癒魔法を用いて体は治したけど、疲れまではとれなかったらしいエヴァはベッドの上で点滴を受けながら状況を話す。

「ああ。

奴らの狙いは世界樹というよりも要石の方だったらしい。

派手にぶつ飛ばした後、波が引くように撤退していきやがった。

多分、麻帆良周辺のパワースポットもこの分だと軒並みやられているな」

『スプリガン』の話だ。

要石を破壊して龍脈を暴走させて日本を沈没させようという話があったのは。そして、『女神転生』ではよく東京は沈没している訳で。

そりゃ、メシアが仕掛けてくる訳だ。

「とはいえだ。

それであのアマテラス様がパワーアップするなら本末転倒じゃないのか？」

「そう一概にも言えない所があるのネ」

横から割り込んできたのが超鈴音。

深刻そうな顔から、事がかなりやばいと自覚せざるを得ない。

「元々、あの女神様は女神様だった訳ではないネ。

そして、あの高い神格。

別の神様に書き換えが可能だとしたら？」

「ああ。なるほど。

とはいえ、地域補正MAXのあの神様へのハッキング……そうか。

日本を沈没させる腹か。メシアの奴ら」

アマテラス様という『神様』をメシアの神に書き換える。

その為に地域補正の弱体化と神話再現を兼ねて日本を沈没させる。

その後で、アマテラス様をメシアの神なり天使なりに書き換える。

重要なのはできるかではなく、メシアの奴らができると考えているかな訳で。

この闇鍋世界は超古代文明とかも混ざっているから、できそうなのがすげー怖い。

「そうなるよ、龍脈がらみの要石とかの防御は必須か。」

警察じゃ手におえないな。

自衛隊にも出張つてもらわないと」

後の調整に俺の頭は痛くなるが、それを我慢して俺は話を続ける。

「で、世界樹が枯れそうになっている麻帆良学園側とメガロメセンブリア元老院は？」

100でガチギレ

麻帆良学園

2

メガロメセンブリア元老院

100

「麻帆良学園側はこちらが誠意を尽くしていた事を見ていたから冷静だけど、魔法世界のメガロメセンブリア元老院は大パニックみたいネ。」

世界樹を枯らさないようにと大部隊の派遣を決めたみたいだけど……」

「それを日本政府とアマテラスおねーちゃんが許す訳がないか。」

畜生。

余計な所で余計な火種が発火しやがった」

しかも、米国特殊部隊の一つであるCOSMOSが犯人と分かっていたら、悪化している  
対米関係の国民感情がどう爆発するか分かったものじゃない。

そこまで見越してこの一手を打ってきたのなら、メシア側にも相当の切れ者が居る  
な。

桃条千影からの聖杯戦争報告

- 1 交戦後双方消耗
- 2 同上
- 3 交戦後片方脱落
- 4 同上
- 5 背後勢力交戦 消耗
- 6 同上
- 7 大規模交戦周囲消耗
- 8 大規模交戦被害者多数

- 9 聖杯災害発生  
10 熱烈歓迎  
9 聖杯災害発生  
規模50で冬木市原作の規模  
3  
学園都市対処能力  
77  
聖杯災害発生学区  
第18学区

「ん?」

今、揺れたか?」

地震かと思う揺れ。

とはいえ、震度は1ぐらいかなんて思っていたらドアが開けられて叢雲が飛び込んでくる。

「大変よ!やる夫!!」

桃条千影からの報告で、学園都市の第18学区で聖杯災害が発生したわ!

今、学園都市の営巣部隊が対処してるとかで……」

ああ。あの揺れはそれか。

納得した俺はため息を漏らす事しかできない。

こちらの足止めは読んでいたが聖杯災害を起こすとは予想していなかった。第一報だけに詳しい事がほとんどわからない。

「今、こっちで動かせる戦力はどれぐらいだ？」

入即出やる夫

叢雲

ステンノ

マシユ

甲賀隴

天ヶ崎千草

ダヴィンチちゃん

モードレッド

クー・フリーリン

対魔忍

370人

マシユ・茶々丸

26体

悪魔

妖精 ハイピクシー 1v10

妖精 ジャックフロスト 1v15

妖精 チルノ 1v32

神獣 ゲンブ 1v43

大天使 イスラフィール 1v42

女神 スカアハ 1v36

天津神 菊理姫 1v85

COMP外悪魔

鬼女 文車妖妃 1v12

魔神 大淫婦バビロン 1v69

天津神 アマテラス

これに麻帆良学園の戦力と大宮からやってくる第32普通科連隊から派遣される部隊が現状の戦力である。

COSMOSの攻撃はないと思うが、後から来るだろうメガロメセンブリア元老院の部隊の為に最低限の戦力は残しておく必要があるだろう。

「甲賀隴二佐とダヴィンチちゃん、護衛の対魔忍を小隊規模ここに残す。

自衛隊や学園理事会との折衝は朔月陽代子神祇院参事官に任せる。

文車妖妃も参事官の補佐として残れ。

やばくなったら、東京ジオフロントに逃げ込め。

あそこのダーニック・プレストン・ユグドミレニアとはまだ話ができる相手だ」

退路の準備+ダヴィンチちゃん補正+30

15+30=45

隠蔽力

55

急場しのぎの対処だが、とりあえず手がないう事はなくなつたはずである。

これで学園都市に行ける。

「へりを用意させています！」



所沢のヘリポートを抑えているので、それで。

後続はトラックで向かわせます！」

マシユの声に頷いで、俺たちはエヴァの部屋を出ることにした。

この長い夜はまだ続くというか、これからが本番である。

## 閑話 小ネタ劇場 その9

冬木市。

聖杯戦争が終わったその地に一人の英霊が姿を現した。

「……………ふむ。」

この姿で出たという事は、今は何時だ？」

慣れた手つきで公園のゴミ箱をあさる。

はたから見れば長身イケメンの外人がゴミ漁りをしているのだから目立つことこの上ない。

それでも彼はお目当てのものを見つける。

新聞に書かれている日付だ。

「1994年、2月1日か。」

大体、それぐらいの日時という事は、本来の私は時計塔に帰ったあたりか？

さてと、マスターに合流するためには……………」

新聞をゴミ箱に投げ捨てて、彼はしばらくベンチに座って待つ。

己が目立つことをしている自覚はあった。

だとしたら、次に来るのは大体想像がつく。

「Excuse me?」

巡回中のパトカーとそこから降りてきた警官による職務質問。

穏やかかつ合法的な接触こそ彼が望むものだった。

「助けてほしい。」

旅行中に、荷物を取られて……」

警察署に行き、事情聴取の間に情報を入力する。

彼にとっては過去の事だが、彼のマスターにとっては未来の事なので少し新鮮味があると言ったら嘘になるだろう。

「なるほど。」

大学時代の知人に会いにいらっしやった。

それでパスポートを含めた荷物一式を失って途方に暮れたという訳ですね？」

「ええ。」

お恥ずかしい話ですが、自販機で飲み物を買う為に荷物を横に置いてしまった際に置き引きにあつてしまい……」

流暢な日本語で事情を説明すると、警察官も警戒心を下げる。

元々冬木市は外国人が多いこともあって、こういうトラブルにもある意味慣れていた

というのもある。

「で、失礼ですが、どなたに会いに来られたのですか？

その方に身元保証をしていただけなら、ここからお出する事もやぶさかではないのですが？」

その言葉を待っていた彼は警察官にその名前を告げた。

「はい。」

入即出やる夫という人なのですが？」

笑顔を作っていた警官にはつきりと緊張の色が一瞬浮かんだのを彼は見逃さなかった。

まずい事を言ったかとも思ったが、マスターの話だと穏便に解決したという話だったのだが？

「少しお待ちしていただいてよろしいですか？

担当の者を呼んできますので」

席を外す警官が出たドアを眺めて、彼はため息をつく。

さて、鬼が出るか蛇が出るか？

それほど分の悪い賭けではなかったはずだが？

そんな事を考えていたら、ドアが開いてスーツ姿の男が入っている。

「おやおや。

ようやくのお出ましですか。孔明殿」

「貴殿も来ていたとはな。

で、説明をしていただけるのだろうか？

陳宮殿」

同じマスターに仕えた軍師としての再会を祝福するような様子もなく、緊迫感すら漂わせて陳宮は孔明ことロードエルメロイ二世の前に座る。

「実を言うと私も同じ口でしてね。

呼ばれて来たはいいが、今、我が主は聖杯戦争の真つ最中でして。

会いに行くにはタイミングが悪いという訳で、ここで状況が落ち着くのを待っている次第にて」

「警察内部に入り込むのにどういう手管を使ったのやら……」

「たいした事ではないですよ。

貴方がマスターに自分の身分保障をさせる前に、私は華僑を頼った。

そこからは堂々の中に」

華僑社会は外に対する警戒の裏返しとして身内に対する保護によって成り立っている。

中華街に行つて、チンピラあたりを暗示魔術で仲間と誤認させて戸籍等を確保したら、その才覚でどうとでもものし上がれるだけの才能がなければ軍師なんてできはしない。

「聖杯戦争？」

冬木のは終わったのだろうか？」

「ええ。

今行われているのは帝都、この国の首都である東京での聖杯戦争ですな。

ありとあらゆる勢力が入り乱れて複雑怪奇な状況になつてるので、場に出る事自体が悪手となつてるので、ここで静観するしかないという次第にて」

野良サーヴァント扱いの彼らが帝都に行つてキャスター認定されるのを恐れたともいう。

そして、その流れでどの勢力がキャスターとして陳宮を使うかという事が読めないから、陳宮はここでおとなしくしていたという訳らしい。

「で、我がマスターは勝てるのか？」

「勝つ勝たないのレベルはすでに超えています。孔明殿」

陳宮のその声には、マスターに対する期待と確信がある。

入即出やる夫というマスターは聖杯戦争の勝ち負けに拘らなかつた。

それよりも高所から聖杯戦争そのものをぶっ壊すタイプのマスターだったのだから。

「まあ、マスターが聖杯戦争に絡んでいいる間、背後の守りを固めるのは軍師の役目。

孔明殿も協力していただけると嬉しいのですがな?」

「……協力しなければここから出られないようにしてよく言う?」

「当たり前じゃないですか?」

我々はそういう生き物ですよ?」

吐き捨てるように言った孔明に対して陳宮は白々しく苦笑する。

そして真顔になって、本題に入った。

「私というサーヴァントは中国異聞帯になって登場した」

「っ!」

うちのマスターは人理焼却を阻止した時点でカルデアを離れたはずだぞ!」

「そう。

この世界ではまだ漂白が行われていない。

最も、それ以上に厄介であると言わざるを得ないのですけどね。

まだ、人理焼却に対抗するカルデアが残っていますしね」

その説明を理解できない孔明ではない。

椅子にもたれかかって額に手を当てて嘆く。

「……シユレーディングアの箱庭か。ここは……」

「そのとおり。」

生きているか死んでいるかは箱を開けねば分からない。

孔明殿。

我らはその箱の鍵になりかねない。

だからここでおとなしくしているべきなのですよ」

「了解した。」

「ここは貴殿の言うとおりにしよう」

陳宮は立ち上がってドアを開ける。

見ていた警察官が陳宮に向けて敬礼しているあたりかなりの地位を得ているらしい。

「一体どのような手管でその地位を手に入れた？」

警察署を出てから事が事なので孔明は小声で陳宮に尋ねる。

帰ってきた陳宮の台詞はろくでもないものだった。

「自殺したキャリア官僚の籍を頂きましてね。」

こういう時の華僑のネットワークは偉大ですな。

こちらでは別の名前になっているので、陳宮と呼ばないでくださいよ」

背乗りと呼ばれる行為を晒しながら、さらに陳宮は続ける。



少なくとも歪みながらもマスターに対する信頼はあるのがこの男なのだ。

「あとはマスターのコネを勝手に使用させてもらいましたよ。

うまく使つて、マスターに届かぬように周りを忖度させるのは都から離れた地方の常套手段の一つ。

法も官僚も我らが居た時代より整っているこの国において造作もない事です」

そこで言葉を区切り、陳宮は孔明にマスターの現役職を教えてやった。

「宮内省統括審議官。

我らが居た漢の役職に当てはめるならば、この国の九卿ぐらゐまで上り詰めようとしていますよ。

我がマスターは」

## 学園都市聖杯戦争 その8

学園都市手前にある所沢までヘリが飛ぶ。

残っている背後勢力は、米軍過激派・メシア教徒・ネオナチ・学園都市あたりか。

桜塚星史郎が麒麟遊人と組んでちよつかいをかけてくる可能性が無いわけではないし、黙示録の四騎士二騎を連れているキャスター・リンボの出方も分からないが、最悪の事態になる前に聖杯が起動して聖杯災害が発生した事でとりあえず、負けの目は大分すくなくなつた。

どうせ、今夜の襲撃で数騎落として起動という狙いだつたのだろうが、起動前まで各陣営が粘ってくれたのが大きいのだろう。

「見えたわ！」

所沢ヘリポート!!

着陸する！」

さあ。

鬼が出るか蛇が出るか。サイコロを開けてみよう。

米軍過激派＋オーランド・リーヴ&ライダーアキレウス

1 他鯖陣営攻撃

2 同上

3 同上

4 背後勢力攻撃

5 同上

6 同上

7 複数同時攻撃

8 同上

9 撤退

10 熱烈歓迎

4 背後勢力攻撃

メシア教徒

1 他鯖陣営攻撃

2 同上

3 同上

- |        |    |    |        |    |    |        |      |    |      |    |    |        |    |    |        |
|--------|----|----|--------|----|----|--------|------|----|------|----|----|--------|----|----|--------|
| 7      | 6  | 5  | 4      | 3  | 2  | 1      | ネオナチ | 9  | 1    | 9  | 8  | 7      | 6  | 5  | 4      |
| 複数同時攻撃 | 同上 | 同上 | 背後勢力攻撃 | 同上 | 同上 | 他鯖陣営攻撃 |      | 撤退 | 0    | 撤退 | 同上 | 複数同時攻撃 | 同上 | 同上 | 背後勢力攻撃 |
|        |    |    |        |    |    |        |      |    | 熱烈歓迎 |    |    |        |    |    |        |

8 同上

9 自爆テロ

10 熱烈歓迎

2 他鯖陣営攻撃

学園都市

1 他鯖陣営攻撃

2 同上

3 背後勢力攻撃

4 同上

5 同上

6 複数同時攻撃

7 同上

8 聖杯災害鎮静作業

9 同上

10 熱烈歓迎

2 他鯖陣営攻撃

桜塚星史郎＋麒麟飼遊人＆ランサーデイルムツド

1 他鯖陣営攻撃

2 同上

3 同上

4 背後勢力攻撃

5 同上

6 同上

7 複数同時攻撃

8 同上

9 自爆テロ

10 熱烈歓迎

2 他鯖陣営攻撃

キヤスター・リンボ＋黙示録の四騎士二騎

1 他鯖陣営攻撃

2 同上

3 同上

4 背後勢力攻撃

5 同上

6 同上

7 複数同時攻撃

8 同上

9 自爆テロ

10 熱烈歓迎

1 他鯖陣営攻撃

まとめ

米軍過激派＋オランダ・リーヴ&ライダーアキレウス

背後勢力攻撃

メシア教徒

撤退

ネオナチ

他鯖陣営攻撃

学園都市

他鯖陣営攻撃

桜塚星史郎＋麒麟遊人＆ランサーデイルムツド

他鯖陣営攻撃

キヤスター・リンボ＋黙示録の四騎士二騎

他鯖陣営攻撃

所沢のヘリポートに降り立つ前、学園都市方面を見ると中心部が赤く燃えていた。

派手にやっているみたいで、ヘリから出ると桃条千影から報告が入る。

「第七学区の病院近辺で大規模戦闘発生中！

複数サーヴァントの存在を確認していますが、戦闘が激しくて近づくことができません！！」

これは後で分かった事なのだが、俺の影響下にあるセイバー・アサシン・バーサーカーを攻撃して連携を取られるよりはと、他勢力から浮いていて場所が分かっているアーチャーがターゲットに選ばれたらしい。

当然、アーチャーアルジュナと黒妻綿流、見張っていた麦野沈利が迎撃に出る訳で。

この攻撃を行ったのはボー・ブランジェ率いるネオナチ勢力である。



彼らは鯖も持たず、正々堂々と突っ込んで見事壊滅した。

そして、彼らの勇敢なる愚行が呼び水となって、横殴りが連鎖的に発生。

桜塚星史郎と麒麟遊人&ランサーデイルムッドが横殴りに出れば、自動的に彼に因縁があつた英雄王ギルガメッシュが『ヴィマーナ』に乗つて学園都市に突っ込み、聖杯を起動させたキャスター・リンボ+黙示録の四騎士二騎が、聖杯にエネルギーを供給する為に更なる横殴りにやってくる。

これが俺たちが麻帆良で防戦していた間に学園都市で起こつた大規模戦闘の流れである。

#### 同時多発戦闘の結果

- 1 交戦後全勢力消耗
- 2 同上
- 3 大規模交戦後複数脱落
- 4 同上
- 5 同上
- 6 同上
- 7 同上

8 大規模交戦複数脱落&被害者多数

9 聖杯災害発生

10 熱烈歓迎

5 大規模交戦後複数脱落

脱落鯖 1騎

1 アルジユナ

2 デイルムツド

3 キャスターリンボ

4 ギルガメシュ

5 黒妻綿流・麦野沈利・ポー・ブランジエ・桜塚星史郎・麒麟遊人等

6 どないしよ?

2 デイルムツド

聖杯へのエネルギー供給

3 + 8 || 1 2

「お待ちしてりました。

ご命令を」

通信機越しに、桃条千影の声が聞こえる。

ここに来る前にディルムツッドが落ちていたが、桜塚星史郎と麒麟遊人の動向は不明だった。

英雄王そのあたりは斟酌しないだろうからなあ。

もつとも、アルジュナとキャスターリンボと黙示録の四騎士相手にそこまで手が回らないという所か。

「ん？」

オーランド・リーヴとライダーアキレウスは何をしているんだ？」

米政府圧力判定 100でガチ

56

さすデク判定

16

日本政府反応 56—16—40以下で拒否

19

「やる夫。電話。

室戸次官から」

叢雲が俺に携帯電話を差し出す。

とても嫌なタイミングで、取りたくはないのだがお役所ゆえに取らねばならない。

「もしもし?」

入即出です」

「室戸だ。

たつた今、米国トールマン大使から外務省へ緊急の会談要請があり、『米国は麻帆良学園都市でのテロに対して同盟国として支援をする用意がある』そうだ」

あのテロが米軍特殊作戦部隊COSMOSの仕業である事は分かっているのだが、実際小型核爆弾に等しい爆発が発生した事で埼玉県を中心に混乱が収まっていなかった。

つまり、彼らの言いたい事は一つ。

『この件から手を引け』

つんつんと肩をステンノにつつかれる。

学園都市製の携帯を握ると、テレスティーナ・木原・ライフラインの悔しそうな顔芸声が響く。

「入即出統括審議官。

そちらに米軍のクソどもも来ていませんよね?」

「まだ学園都市に我々は入ってすらいらないのだが何があったのかお聞きしても?」

「18学区研究室で保管されていた聖杯を奴らが襲撃して奪っていたのよ!」

畜生！

先進状況救助隊も営業部隊も警備員もあの時代遅れのコスプレ男が全部蹴散らしていきやがった!!」

なるほど。

派手な戦闘で聖杯がお留守になったのを良い事に、それを搔っ攫っていったか。

すでに起動している聖杯を持ち運び……できそうだな。アキレウスなら。

畜生。

これゆえのトールマン大使の圧力か。

「たつた今、米国のトールマン大使から我が国に対して『手を引け』と圧力がありましたよ。

我が国は、これを受諾する方向みたいですね」

さらに切れ散らかすテレスティーナ・木原・ライフラインとの通話を切つて、室戸次官との通話に戻る。

奪取された聖杯の行方だが、下手すると日本国内からもう出ているかもしれん。

聖杯の危険度 100ほど危ない

聖杯の行方 100ほど判明

74

アキレスの令呪消費

2

「室戸次官。

米軍の緊急申請した飛行機とかありますか？」

「……横田から二時間ほど前に飛び立った輸送機があるな。

既に太平洋洋上に出ているが、これか……」

全ては遅すぎた。

というより盤上に上がる前に勝負を決めやがった。

さすが米軍と脱帽するしかない。

「了解しました。

もう後始末の領域ですから、こちらは手を出しません。

学園都市と麻帆良学園都市、双方ともしばらく揉めますがどうしますか？」

「それも後日話さねばならんな。

後始末については任せる」

ため息をつきながら後始末の為に頭を抱える。

少なくとも、こっちの動きは邪魔されないうから、今のうちにサーヴァントを含めた全戦力を学園都市から撤収する事にした。

後は、俺自身が第七学区に出向いて、戦いの後始末をして撤収するのみである。

病院での戦闘その後

- 1 交戦後全勢力消耗
- 2 同上
- 3 同上
- 4 同上
- 5 同上
- 6 同上
- 7 同上
- 8 大規模交戦複数脱落&被害者多数
- 9 聖杯災害発生
- 10 熱烈歓迎
- 6 交戦後全勢力消耗

生存判定

1 死亡

2 生存

3 不明

ボー・ブランジエ

2 生存

桜塚星史郎

3 不明

麒麟遊人

2 生存

第七学区での戦闘は聖杯の奪取という想定外の事態によって、急速に鎮静化した。

キャスターリンボと黙示録の四騎士はいつの間にか姿を消し、ギルガメッシュと激しくやりやっていた桜塚星史郎はいつの間にか姿を消していたそうで、そりや生きているよなあ。多分。

麒麟遊人は我々か到着すると降伏し、ネオナチ勢力が壊滅した中でもボー・ブランジエは生き残った。



そりや、冥途返しにいる病院の前での戦闘だからなあ。

## 学園都市聖杯戦争 あとしまつ その1

聖杯を奪取された以上、今度は聖杯にくべられるサーヴァントを減らす必要がある。アーチャーについてはひとまず放置するとして、セイバー・カエサル、バーサーカー・フランケンシュタイン、アサシン、アサシンパライソの三騎を安全に脱落させる必要があった。

そして、その脱落作業は早ければ早いほどいい。

そういう訳で、夜が明け始めた平崎市のホテル業魔殿の地下で悪魔合体を行う事にする。

「英霊が奪われた聖杯を通じて座に帰ると、いろいろとやばい事になる。

ならば、悪魔合体で英霊を悪魔に変えてしまった方が後々の処理も楽になるという訳さ」

という訳で、その最初の処理に入る。

最初はカエサルと大淫婦バピロンの合体である。

黙示録の四騎士のうち二騎が闊歩している現状で、こいつの強化はリスクとリターンの両方があるのだが、最終的にカエサル自身の決断によって行われることになった。

「現世に留まりたくないと言えば嘘になるが、あの聖杯の元に行くのはお断りだね」  
「本音は？」

「TSFって一度やってみたくてな」

うん。カエサルはカエサルだった。

なお、ネロちやまの正式名称は、『ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクス』という訳で。

1 大淫婦バビロン レベル90

2 同上

3 TSFカエサル レベル90

4 同上

5 水着ネロ レベル90

6 同上

結果3

TSFカエサル レベル90

「来た！見た！勝った！！」

堂々と肢体を晒す水着ネロじゃなかったTSFカエサル。

まさか、カエサルがバ美肉するとはなあ……

元マスターの木原加群が固まってやがる。

「しかし良かったのか？」

今更だが、マスター権と令呪は高く売れるし、こちらは高く買い取るつもりだったのだが？」

「構わんさ。」

学園都市の木原連中が、ダヴィンチ女史によってきりきり舞いしているだけで俺は十分だ。

どうせ学園都市をこのまま放置するつもりもないのだろうか？」

木原加群の言う通りで、そもそもその介入のきっかけがキヤスターリンボの討伐であり、その過程で聖杯戦争に絡んだという形になっている。

で、聖杯戦争はともかくキヤスターリンボ討伐についてはまだ続行中という訳で。

というか、麻帆良学園都市のテロ事件で責任を取られかねないから、まだ終われないというのが本音だ。

立ち上がりの新興組織だけに、足を引っ張ろうとする輩は霞が関だけでなく市ヶ谷や永田町にもたくさんいる訳で、せめて取り繕う功績を用意しないと捜査が終われないのである。

「まあ、学園都市との交渉次第だが、とりあえず聖杯戦争うんぬんの後始末でいろいろする予定だ。

で、あれはどうする?」

T S F カエサル の 今 後

1 やる夫の仲魔のまま

2 同上

3 同上

4 木原加群のサーヴァント扱い マスター制御不能

5 同上

6 どないしょ?

5 木原加群のサーヴァント扱い マスター制御不能

「余はマスターについてゆくぞ。

何しろ危なっかしいからな」

復讐を誓ってそれだけに邁進していた木原加群はただでさえ、それが成就しようとしてその先を考えていかなかった。

何をするにせよ、カエサルと木原加群はそれを考える時間ぐらいは与えてもいいだろう。

どうせ、何かあったらカエサルが俺に接触してくるだろうし。

「では、短い間でござったが、主殿に仕えた事を感謝しますぞ」

アサシンパライソはカエサルとはある意味逆で彼女の身に宿っているオロチの呪いを純化させて、オロチとして出す事を目指す。

何しろ、『亜種特異点3 屍山血河舞台 下総国』の鯖だから、キャスターリンボに何か仕掛けられているだろうからだ。

また、カルデアに酒吞童子が居るので、因縁が爆発したなんて事がないようにという対策である。

そこから性別が同じ上に竜王属性である乙姫あたりに収まれば御の字だろう。

- 1 竜王 オロチ レベル24
- 2 同上
- 3 同上
- 4 竜王 乙姫 レベル38
- 5 同上
- 6 どないしょ？
- 5 竜王 乙姫 レベル38

「わらわは竜王乙姫。

今後ともよろしく……」

彼女は矢本古希の仲魔としてC O M Pを与えることにする。

レベルが低くて俺が使うのには少しもつたいないし、矢本古希自身はニンジャになりかかっているから麻帆良学園都市に移した六車学園に通わせようと考えているからだ。

彼女ははまだ学ぶ年であり、戦場に出す年ではないだろう。

「矢本君。

我々は君の住居と戸籍を用意して、学ぶ場所提供する用意がある。

まあ、ニンジャについてはある程度学んでもらう事になるだろうが、それでも君は日常に帰れるなら帰るべきだ」

俺の言葉に少女の目から涙が流れる。

それは、逃亡者として安住の地がなかった彼女の安堵の涙。

「わ、わたしは、学校に行つていいのでしょ……うか？」

そういつて泣く矢本古希を乙姫が抱きしめる。

カエサルに次いで楽だったアサシンパライソの処遇もこうして終わった。

「さてと、問題は……」

「……ウウウウウウ」

冷凍保存されて運ばれたゾンビニンジャであるジェノサイドとその鯖であるバーサーカーフランケンシュタインのコンビ。

ゾンビ故の記憶障害で意思疎通に難がある上に呼び出したのがある意味縁召喚であるフランケンシュタインである。

聖杯戦争から手を引いた老元寛から受け取ったはいいが、いくつかの選択肢がある。一つは、ジェノサイドを治癒したうえでフランケンシュタインを悪魔合体させる案、一番穏便な奴だ。

次にジェノサイドとフランケンシュタインを悪魔合体させて悪魔人として構成させる案。

最後はジェノサイドを処分して、フランケンシュタインを悪魔合体させる案だ。

ポイントはマスターであるジェノサイドにかかっている。

「こいつ、生前殺し屋っぽいんだよなあ……」  
ためらっているのはそこだ。

ついてきたイモータル・ニンジャ・ワークショップのデータによると、『ジェノサイドは基本的には自分から相手に手を出すことはないが、自分にとって邪魔な存在を抹殺するためならば周囲に幾ら被害が出ても顧みない戦法をとる』とある。

下手すると敵が増える……今更か。



「ウ？」

「バーサーカー。君が決めるといい」

1 ジエノサイド治癒

2 同上

3 ジエノサイドと合体

4 同上

5 ジエノサイドを処分

6 どないしょ？

4 ジエノサイドと合体

「ウウー、ウウ……」

「合体か。」

「それもいいだろう」

1 ボディコニアン レベル7

2 同上

3 造魔の素ドリー・カドモン

4 同上

5 造魔

6 どないしょ？

3 造魔の素ドリー・カドモン

合体の後出てきたのは悪魔ですらなく造魔の素ドリー・カドモンだった。

両方とも作られた命みたいなもので、ある意味正しい結末と言えよう。

俺は造魔の素ドリー・カドモンを手に取る前に手を合わせてジエノサイドとフランケンシュタインの冥福を祈ってやった。

「やっつと。」

最低限の仕事はしたな。

後は、アルジュナか……」

彼クラスの英霊ともなると、鯖二個分とかありそうで困る。

手持ちの爆弾は解除したので、残りの爆弾解除のために俺はまた学園都市に戻ることになるのだった。

# 学園都市聖杯戦争 あとしまつ その2

『おはようございます。』

今日のニュースです。

埼玉県麻帆良学園都市で発生した大規模テロ事件において、警察と自衛隊の合同捜査が開始されました。

このテロの実行犯は未だ逃亡を続けており、警察は関東一円に検問を敷いて犯人確保に尽力を尽くすと発表しています。

また、自衛隊は埼玉県知事からの出勤要請を受けて大宮駐屯地の第一師団第32普通科連隊の一部を麻帆良学園都市に送る事を決定。

政府は内閣官房長官が「冬木市及び東京湾に次いで麻帆良学園都市でもテロが発生し国民の生活に不安を与えてしまった事について謝罪し、事態解決の究明に努める」と発表……』

カーラジオから流れる実に面白くないニュースに俺は顔をしかめる。

後処理からまだ眠れていなので学園都市に再度入ったら学園都市の施設でひと眠りさせてもらおうなんて思いながら、俺と叢雲とステンノとマシユは学園都市の入り口を

くぐったのだった。

「メシアの連中が居ない?」

昼まで寝た後、全員撤収後に報告の為残っていた桃条千影からいやな報告を受ける。

米軍とメシアの繋がりは楔を打ち込んでいたが、聖杯奪取という新展開によりを戻すのだろうかと俺は察せざるを得ない。

「ええ。」

ここに投入されていたメシアの戦力が綺麗さっぱりと。

うちと同じく、完全に撤退していますね。これ」

なお、撤収させた対魔忍等の戦力は、休憩と交代をした上で麻帆良学園都市テロ事件の捜査に協力している。

相手が米軍特殊実験部隊COSMOSなのは掴んでいるので、今頃は横田基地に逃げ込んで逃亡しているのは分かったうえで、捜査の後迷宮入りする事までが既定路線である。

そして、若狭湾ミサイル誤射事件や八丈島沖タンカージャック事件等によつて成立した新政権は対米感情が実によりしくないので『主権の侵害』と騒ぎ立てるのも時間の問題だろう。

『真・女神転生』だと、自衛隊のクーデターに対して米国大使館は海兵隊を送り込んで

いたな。

自衛隊内部のクーデターの芽を俺が潰したから、メシアの行動が掣肘しにくくなっていった。

比較的友好的だった関東魔法協会もバックのメガロメセンブリア元老院が出張ってきた事であればはくは使い物にならないだろう。

「後が面倒だが、とりあえずは仕事にかかるか。」

第七学区の病院へアポイントメントをとってくれ」

学園都市のアルジュナへの評価

22

こちらの出したアルジュナの処遇提案―20（聖杯奪取されたマイナス補正）

49

第七学区の被害

57

黒妻綿流（女）のレベル認定―1

2―1Ⅱレベル1

能力の汎用性 100ほど高い

「お待ちしていました。

今回の結果に、私は満足していますよ。

この聖杯戦争はもつとひどい、この街が紅蓮の業火に包まれるような結末の可能性の方が高かった。

それを、このような形で終わらせようとしている事については、私に異存はありません」

死者こそこの病院の主である冥土返しのおかげで居なかつたが、多数の負傷者と周辺建物倒壊をはじめとした周辺被害をアルジュナは許容した。

ある意味、話の早い英霊である。

「学園都市だが、マスターである黒妻綿流くんについては手打ちを済ませた。

君は肉体再生レベル1の生徒として登録される事になっている」

レベル6に達した麦野沈利が対等に戦えたのも大きいし、マスターとサーヴァントというペアがマイナス評価を与えたのも大きい。

いくら凄い英霊でもマスターを潰されるとどうしようもない訳で、そういう意味からも麦野沈利の評価が急上昇しており、聖杯戦争の不手際を打ち消して俺の後始末を黙認

する流れになっていた。

もつとも、出し抜いた米軍を容赦するつもりはないみたいで、近く報復部隊が送られるのだろうが、そこまでは俺は知らないし知ったことではない。

「肉体再生？」

彼、じゃなかった彼女のソプラノ声に俺は苦笑する。

詰まる所、その体を科学側はかろうじて許容したという事なのだが、それを彼女に言うつもりはない。

「その体は特注品でね。

色々秘密があるのだよ。

とりあえず、君の処遇についてはこちらに一任されている。

元の体に戻るもよし、その体で青春を謳歌するもよしだ」

黒妻綿流（女）の選択

元の体に

1 戻る

2 戻らない

3 どないしよ？

3 どないしよ？

「なあ。

俺も、なれるのかな？

あのビームを撃っていた女みたいに？」

この学園都市に来た連中は皆能力者に魅かれた連中だ。

それは無能力者として燻っていた彼女も同じらしい。

「いいでしょう。」

私もこのまま聖杯には帰れない身。

最後の仕事として、貴方の力になりましょう。

ですから、悪魔合体で私の力を受け取ってください」

かくして、また平崎市のホテル業魔殿にとんぼ返りをして悪魔合体を行う事にする。

造魔の素ドリー・カドモンも混ぜてしまおう。

1 ペルソナ アルジュナつき

2 同上

3 悪魔人

4 同上

5 同上

6 どないしよ？



6 どないしょ？

1 クリティカル

2 ファンブル

1 クリティカル

「あんまり変わったような感じがしないんだが……」

出できた黒妻綿流（女）の姿は変わっていないように見える。

という訳で、アナライズしてみた。

黒妻綿流（女） 転生体 ラクシユミ レベル64

頭を抱えたいのだが、ぐっと我慢する。

まだ頭を抱える所が残っているからだ。

アルジュナが入っていた所に、残っている弓一式。

炎の神アグニから賜った神の弓、本来、定命の者たる人間には扱えない炎の弓だろうな。あれ。

で、ラクシユミの転生体になった黒妻綿流（女）はあれを撃てる訳で……

新たなるレベル6の誕生に、俺は学園都市との交渉が楽になったなどため息をついたのだった。

## 学園都市聖杯戦争 あとしまつ その3

学園都市の評価＋黒妻綿流（女）の補正 100で満足

16+82=98

「では、そういう事で」

「これからも協力をよろしくお願いします」

学園都市第三学区の高級ホテルにて、今後の捜査継続と双方の取り決めの覚書が締結される。

日本政府代表と学園都市統括理事である親船最中がインタビューに答えているのを横目に眺めていたら、美人が浮かべていい笑顔じゃない笑顔を見せながらテレステイナー・木原・ライフラインがやってくる。

「せっかくの席です。」

もう少しマスコミ向けの顔をしてバチは当たらないと思えますが？」

「よくまあ、口が回りますこと。」

失敗を新たなレベル6登場で上塗りしただけじゃない」

「まったくその通り。」

けど、お役所仕事ってのは、評価や期日ってのに厳格でね。

手っ取り早く上塗りするにはあのレベル6は都合が良かった」

殺意すら浮かべる視線をテレスティーナ・木原・ライフラインが俺に投げかけてくるのは、黒妻綿流（女）の保護者をあの冥土返しの所にした上で、日本政府の非公式職員という形で俺が保護をかけたからだ。

第二のレベル6に対する非人道的な実験が禁止されただけでなく、現在できたレベル6である麦野沈利に対するカウンターを日本政府が握った事で、木原一族をはじめとする研究者連中から俺は派手に恨みを買う事になった。

で、その研究者兼木原一族であるテレスティーナ・木原・ライフラインがとてもいい顔芸をしてきている訳で。

「まあ、木原一族も大変だろうからそこは同情するよ」

「それを裏で操っているのは、あんたの所のアンジェラじゃないの!」

アンジェラことダヴィンチちゃんが無双によつて学園都市の研究は飛躍的にかつ雑多に急速に進みつつある。

木原一族としてはそれが面白い訳がないが、目の前の彼女は研究者であると同時に権力者である。

仮にも木原の名前持ちとのコネは残しておいて損はないだろう。

今後も学園都市が舞台で色々起こるのだから。

「まあ、こちらとしては木原うんぬんはひとまず置いておいて、テレスティーナさんについては色々便宜を図っていたいただいた恩もあるので、それとなくお礼をと思っていた所なのですよ」

控えていたスティーナが女神の微笑でケースの中から書類を取り出してテレスティーナ・木原・ライフラインに手渡す。

紙に書かれたある計画を眺めていた彼女の目が驚愕から欲望に変わるのとはそれほど時間はかからなかった。

『樹形図の設計者』修復計画……」

「うちのアンジェラだけでなく、麻帆良学園都市の研究者とも連携する形になりますがね。」

進んでいないんでしょう？

あれの修復？」

かくして、学園都市における手打ちは終了した。

少なくとも、学園都市の聖杯戦争はこれで一応の終結という事になる。

暗躍したキャスターリンボの行方がかめなかったのは痛い、再戦があるだろうという事で俺たちは学園都市を後にした。

日本政府の評価 100で満足

97

他の悪魔がらみの事件の対処 100で十二分に機能

97

宮内省にて報告をあげた俺について、室戸次官はしばらくの沈黙の後こう告げた。

「本来の目的であるキャスターリンボ掃討については失敗だが、学園都市と麻帆良学園都市にこれ以上ない楔を打ち込んだ。」

キャスターリンボという事件について目をつぶっておつりがくる功績だよ。

他の事件についても、君が用意した戦力が十二分に機能している」

なかなか高評価らしい。

麻帆良学園都市はあのテロによって自衛隊とメガロメセンブリア元老院が対峙する状況になり、麻帆良学園都市の自治権問題にまで発展。

日本政府側が容赦なく関東魔法協会理事長でもある近衛近右衛門に詰め寄っていた。

一方で学園都市にはついにレベル6が二人登場し、そのうちの一人が俺の庇護下だった事で学園都市の暴走が防げるという評価になったという訳。

学園都市の闇はもつと深いのだが、今はここでそれを言っただけで自分の評価を下げる必要もあるまい。

「一旦、君は下がりましたまえ。」

次に何が起こるか分かんないが、君の体は一つで、麻帆良と学園都市の二つは対処できない。

今回の件はそれが全てだ」

「はっ。失礼します」

室戸次官の部屋を出る。

廊下を歩きながら、横に居た叢雲がぽつりと漏らす。

「もつとお小言とか言われると思ってた」

「俺もだよ。」

とはいえ、宮内省はできたての組織で、あちこちに敵が多い。

ここで俺が失脚すると、宮内省そのものにもダメージが入りかねない。

だからこそ、失敗を糊塗する功績を出してきた俺に乗ったという訳だ」

「で、この後どうするつもり？」

少し立ち止まって、この後について思いをはせる。

『樹形図の設計者』修復計画の為に、宇宙船が必要なんだよなあ。

今、叢雲を宇宙船にするのは目立ちすぎるから、米国あたりに恩を売ってスペースシャトルを借りるかな」

そのまま叢雲を抱きしめる。

ついでに後ろに居たステンノとマシユも抱く。

「だから、少し休息として英気を養うさ」

## インターミッション その1

麻帆良学園都市。

爆発テロが発生した割に生徒たちの空気がそれほど悪くなつてはいないのは、犠牲者が出なかったという点が大きいだろう。

それでも空気がひりついているのは、交差点に立っている自衛隊員の存在によるものだ。

メガロメセンブリア元老院は世界樹防衛と治癒の為にアリアドネー魔法騎士団を派遣したまでにはいいが、その活動を完全に阻害されていた。

「駄目です。

日本政府の奴ら、聞く耳を持っていません」

教師でもあるガンドルフイーニが関東魔法協会理事長でもある近衛近右衛門にぼやく。

事が、表向きは学園都市聖杯戦争に伴う日本政府と米軍特殊部隊との交戦の余波なだけに、暴露する訳にもいかず。

暴露したら今度はメシア教の暗躍と麻帆良学園都市にそびえる世界樹の事を明かさ



ないといけない訳で。

テロリストの捜査と治安維持という名目で居座っている自衛隊を麻帆良学園都市は排除できなかったののである。

「はて？」

テロリストを警戒し、埼玉県知事の正式要請によって展開している自衛隊に何か問題でも？」

魔法先生たちのきつい視線なんて気にする様子もなく、入江省三監察官が笑顔で言い切る。

麻帆良学園都市の主権をメガロメセンブリア元老院から日本政府に奪還するのが彼の仕事なだけに、この現状は喜びこそすれ、困りはしない。

「そもそも、この麻帆良学園都市が何故か襲撃を受け続けているという事がおかしいのですけどね」

それを言われると、魔法先生も黙らざるを得ない。

世界樹の防衛、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを狙う賞金稼ぎ、関東魔法協会に対する攻撃など狙われる理由はいくつもあったのだ。

それらの襲撃も、これだけ自衛隊が表に出ると鎮静化せざるを得ない。

「五車学園に対する襲撃については既に手打ちが成立しています。」

向こうは麻帆良学園都市の生徒に手は出さないと約束してくださいました」

「それをどこまで信用できるのかね？」

ガンドルフイーニの確認に入江省三はあっさりと言い切る。

笑顔でためらいなく。

「できる訳ないでしょう。」

で、その上で所沢を拠点とする彼らネコソギ・ファンド社、いや、ソウカイ・シンジケートにあなた方は全戦力を投入できるので？」

それに答えられない現状が今の麻帆良学園を端的に表していた。

各地で頻発する悪魔絡みの事件、それに対処する為に設置された宮内省とその実行部隊である神祇院の中核部隊として、クローン対魔忍とオイランロイド・ハイデッカーは手放せないものになりつつある。

それと深く繋がっていたのがソウカイ・シンジケートであり、ノマドが国内で打撃を受けた今、その供給について話を持ち掛けたという裏もある。

なお、麻帆良に展開した自衛隊の部隊員の中にも、これらオイランロイドとハイデッカーが試験的に配備され始めていた。

「そして、メガロメセンブリア元老院はアリアドネー魔法騎士団を派遣したまでではないが、一戦する覚悟がない。」

そりやそうでしよう。

向こうは大分裂戦争の傷が癒えていないのでしよう?」

魔法世界を二分した大分裂戦争。

それが終わったのが1983年である。

まだ10年ほどしか経っておらず、その復旧の為にもこちらの世界の繋がりは必須だった。

黙り込む一同を見て当り前のようにいるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが  
嗤う。

「ふんー」

10年も経てば、そのあたりの感覚がさび付いてるのだろうさ!

じじい。

先に言っておくが、この状況さらに悪化するぞ。

どっちにつくか考えておくんだな!!」

そんな不毛な会議が終わると、エヴァと入江省三が並んで歩く。

敵意も害意もこの二人に意味がない。

「あなたも素直じゃない。

あれじゃあ、メガロメセンブリア元老院が暴発するじゃないですか」

「貴様の仕事の肩代わりをしてやったまでだ。」

派遣されたアリアドネー魔法騎士団が潰されたら完全に麻帆良は日本政府の影響下に落ちる。

かといって、アリアドネー魔法騎士団が自重したとしてもその失墜は免れない。

で、自衛隊とアリアドネー魔法騎士団が交戦でもしようものなら、魔法世界のパワーバランスが崩れて大戦争再びだ。

今のこの国は、魔法戦力を急速に整えているぞ」

「私だって、戦争狂じゃありませんよ。」

仮にも文明人なんですから話し合いで片付くならその方がいいでしょう?」

冬木の聖杯戦争では関東魔法協会は入即出やる夫と組んで、勝ち組に回った。

やる夫の手腕を関東魔法協会は良く知っていた。

メガロメセンブリア元老院を見限るといふ考えが浮かぶ程度には。

「エヴァちゃん!」

エヴァの同級生が手を振って駆けて来る。

彼女の表はこの麻帆良学園の女子高生である。

その表の顔を潰さないぐらいの気遣いぐらいは入江省三でもできた。

「では。また改めて」

「ああ。そう遠くないうちに」

日本人社会人によくあるお辞儀をして入江省三が離れてゆく。

寄つてきた同級生が入江省三の方を見たので、エヴァが先に言い訳をした。「知らないおっさんさ。道を尋ねられたので、案内していた」と。

## インターミッション その2 前編

草木も眠る丑三つ時。

その時間はニンジャのためにあつた。

だが、この世界はニンジャの為にある訳ではない。

ある者は潜み、ある者は覗き見、またある者は堂々とそのインスタラクションに触れようとしていたのである。

『少し明るい海』。生産中止と聞いていたんだがね」

「忘れちゃいけない。

少し前まで、たばこは専売だったのだよ。

だつたら、これぐらいの願いはできる程度のコネは、国ならばあつて当然だろう?」  
フリーランスのニンジャであるシルバーカーラスは、胡散臭そうに封の切られていないたばこ一カートンを手に弄びながら、新しいクライアントと対面する。

派手な男だった。

三人もの女を侍らせながら、カチグミのサラリマンめいたムーブで話を進める。女の一人は長物使い。長刀か？

もう一人の女は盾だな。真ん中の男を庇うそぶりを隠そうともしない。

気になるのは最後の女。一番無害な顔をしているくせに、一番手が読めない。

「君のカルテについては、ヨロシサン製薬から提供してもらった。

先は長くはないのだろうか？

だからこそ、笑い翁氏に頼んで君を譲り受けたという訳だ」

「先がないオタツシヤな俺に何をさせようど？」

金が払われたのならば、彼がボスである。

先の無い彼に男の名前はボスで十分なのだろう。

そんなボスは、ただ淡々とミツシオンを説明したのだった。

「大したことじゃない。

まずは、君のツジギリ雑誌を次代に残してほしいという事。

これはついで見たいなものなんだが……」

男は楽しそうに笑う。

まるで、彼を娯楽のように眺めながら。

「知りたいのさ。

君のツジギリ雑誌がどこまで通用するのかね」

「ドーモ。カギ・タナカです」

「ドーモ。ヤモト・コキです」

「どうも？井河アサギです」

「どうも。葛葉刀子と申します」

麻帆良学園の武道館で胴着姿の四人がそれぞれお辞儀をする。

純粹にカラテを知らぬのは矢本古希のみ。

残りの三者は挨拶から既に互いの力量を図ろうとしていた。

「今回は、うちのボスに言われて、この娘っこにカラテを教えるという事なんだが、あんたら二人はつきそいかい？」

「私は、上に言われて彼女と一緒に受けるようにと」

井河アサギは口を開くが、対魔忍であると同時に『逸刀流』の剣術の使い手でもある。

その彼女をして、彼と会話しただけなのに汗が畳に落ちた。

今、立ち会えば死ぬ。その間合いに入っているという事を彼女は自覚していた。

「この許可を取ったのは私です。」

一応監督という形で来ていますので気にしないでください」



神鳴流の使い手である葛葉刀子は心を乱さない。

それだけの修羅場は潜っているし、ここから相手を切れる手も策も無い訳ではないが油断はしていない。

話しながらも彼との距離は己の刀の間合いに収めていた。

「じゃあ、始めるか」

彼は差し向かいに正座して座る三人を見る。

武道館にはちらちらと人がいる。

明らかに背筋のよいスーツ姿の男たち。

獲物は分からないがカタギではないスーツ姿の女たち。

天井には監視カメラ。

「仕事だからな」

彼は木刀を持つ。

その三人の前で、何人もの命を絶ってきたイアイージツを披露する。

空気が絶たれ、その波紋が武道館に広がる。

「俺のインストラクションは突貫工事もいいところだ。

先は、自分で掴んでいけ」

「うん」

何も知らない、分からない矢本古希は頷く。

こうして、男のインスタレーションは始まった。

「助かりたいか？だと？」

ヨロシサンの医者ですら、オタツシヤ案件と言ったのに？」

男のインスタレーションから数日後、ボスは男にこんな事を言った。

男はボスから与えられた『少し明るい海』を部屋でふかすが、ボスはたばこは吸わない男らしい。

灰皿は男の前にしか置かれていない。

「まあ、色々と手はあるという訳だよ。

持つべきものは金とコネという訳だよ」

男の側には前と同じ三人の女が侍っている。

戯れで斬ろうとしても、返り討ちに合う未来しか男の頭には浮かばない。

「なあ。ボス。

このシルバーカラスは卑しいニンジャだよ」

男は紫煙と共に吐き出す。

既に煙草も吸えない体なのだが、習慣はそれを必要としていた。

彼の砂時計はもう残り少ない。

「戦い方も知らぬ罪なき市民を、鳥でも撃つように殺めて来た。イクサではない。ツジギリだ。誇る物など何も無い殺しだ。

ただ己のカネの為に殺してきた。無益なカネの為にな」  
だから問う。

問わねば、その先の答えが出せない。

「つまり、俺は誰を斬ればいいんだ？」

ボスはため息をついてその名前を告げた。

男はそれを是とする。

今までと同じように。

## インターミッション その2 後編

東京ジオフロント。

かつては、ヨミハラと呼ばれていたその街は秩序が整いつつあったが、その本質は未だ変わらない。

歓楽街。いや、退廃の都と言った所だろうか。

そんな地下都市の法の及ばぬ裏路地の一角。

血まみれの中に少女が佇んでいた。

この街ではよくある光景ではある。

だが、よくある光景ではないのは、血の海の源が倒れているオークたちであり、佇んでいる少女の手に安物の包丁が握られていた所だろうか。

「……あはっ♥」

啜う。

それは必死に生を生きてきた彼女が初めて味わった快樂。

命を奪うという行為は、生物としての本能の一つであり、その行使による原始的な快樂が少女に刻まれた。

ぴちやり。

血の池に足音が響くが、幼女は啗ったまま。

己の獣性が新たな獲物を殺せと叫んでいる。

ただ自然に、幼女は包丁を構えた。

「あー。これはダメだな。」

ソウルが飲まれてる」

まるでニンジャソウルが元の魂を食らうがように。

半妖の幼女は殺しという快楽に飲まれて我を忘れていた。

そして、その妖のポテンシャルはかなり高い。

襲おうとしたオークたちを返り討ちにした程度には。

でも、幼女は動かない。いや、動けない。

侵入者の力量を本能が悟っているからだろう。

侵入者が獣であり、幼女が獲物という自然界によくあるシンプルな図式を。

「ドーマ。」

シルバーカラスです。

これもビズでね。とりあえず死んでくれや」

そう名乗った侵入者から殺気が溢れる。

幼女の顔が歪む。

快樂に溺れた恍惚の笑みが恐れと恐怖に歪み、涙が血の池にこぼれる。

シルバーカラスは獲物である『ウバステ』に手をかけようとして止まった。

彼の背後に気配が二つ。

それは短いながらも教えた教え子のもの。

「アンブツシユはもつと潜んでするものだ。

ましてや、仕掛ける前にばれるなどウカツに過ぎる」

「で、でもっ！」

井河アサギは叫ぶ。

対魔忍の欠点。

身体能力の優越ゆえに大概の事に対処できるから、論理的ロジックエラーの対処に露

骨に弱くなる。

たとえば、教えを受けた師匠が別の仕事で幼女を殺そうとする場面に遭遇した時と

か。

ついでに、その師匠の仕事を止めるように命令されているとか。

もう少し調べたならば、シルバーカラスと彼女たちの命令が同一者である入即出やる

夫から出ている事がわかるのに、そこまで頭が回らない。

「……」

矢本古希は黙っている。

目の前の仮面をつけたニンジャが麻帆良学園都市でイントロダクションを導いてくれた師匠であるという事は分かる。

そして、その師匠がビズと称して視線の先に居た幼女を殺そうとしているのも分かる。

その二つが現実であるという事が彼女の中で繋がらないのだ。

「っー」

「おっと」

金属音が路地裏に響く。

幼女が持っていた包丁でアンブツシュを狙ったのだが、備えていたシルバーカラスはそれを一蹴する。

ばちやりという音と共に、幼女が血の池にて倒れこむ。

「どうするっ？」

俺はここであれを殺す？

ビズだからな。

お前たちはそれを止めるのだろうか？」

幼女にザンシンを残しながら、シルバーカラスは二人に問う。その問いに対する答えはついに出来ることはなかった。

なぜならば、シユーという異音が裏路地に響き渡ったからだ。

「っ!？」

ウカツ!!」

幼女が持っていたはずの包丁が幼女から消えていた。

先ほどの一撃をはじいた際に離れ、いや、計算して配管に刺したというのか!？」

オイランたちがビズをする歓楽街の大きな配管は大体ボイラーと繋がっている。

その意味する事は一つだ。

「逃げろっ!!」

その瞬間配管が割けて、高熱の蒸気が裏路地を埋め尽くした。

それはボスが不治の病の治療条件に対して、彼の出した答えだった。

「……やめておこう。」

好き勝手に生きて、好き勝手に死ぬ。

卑しいニンジャにふさわしい末路だと思わないか?」

「否定はしないよ。」



むしろ羨ましくもある。

けど、いいのか？

あの二人に阻止の依頼を出して」

「かまわんよ。

どうせあんたもこんな条件でこいつを殺せと命じているのだから、本気じゃないのだから？

だったら、少しはおれの授業につきあってももらってもばちは当たらんだろう」

『ニンジャの魂は増えぬ。

なぜなら、ひとりのニンジャ生かすに、ひとりのニンジャの魂を吸う』か」

「なんだそりゃ？」

「おとぎ話のサムライの言葉。ニンジャの所が元はサムライだったけどね」

「だとしたら、ちょうどいい。」

依頼の幼女を殺し、俺が殺されれば魂は二つだ。

あの二人が何かを掴んでくれる事をあんたも祈ってくれ」

幼女は逃げた。

地上へ。

世界はこんなにも厳しい。

それが獣の掟でもある。

逃げるように地下水路を歩く。

その出口の前に、ひとりの剣士が佇む。

「血に魅入られたか……哀れな……」

葛葉刀子は刀を構える。

この幼女を出してはいけない。

獣に、妖になりかかっているこの幼女が世に出たら、今度は人の血を浴びねば生きられぬだろう。

シルバーカラスのバックアップという形で入即出やる夫の依頼のフォローをした彼女は、この幼女の背景をつかんでいた。

母は元対魔忍で既にこの世におらず、父親は分からぬがおそらくは妖のたぐい。

更生も考えない訳ではないが、今の幼女は血に酔い、妖の力が強まっている。

それを抑えねば、そこまで考えて彼女は持っていた刀で飛んできたナイフをはじく。

ぽちゃんとな이프が水路に落ち、命を削りながら歩く音が地下水路に響く。

投げたのは、幼女の後ろまで追いついたシルバーカラス。

「邪魔はしないでくれ。」

これは俺の最後のビズにしてイントロダクションなんだ」  
「気づいています？」

仮面の向こうの貴方の顔、前のこの子と同じになっていますよ？」  
「ハハ。」

かもな。

インガオホーってな。

それでも、そんな卑しいニンジャにも通ず筋つてのがあつてな」  
ビズの付帯事項にちゃんと記載してある。

『襲ってくるものがいたら実力で排除せよ。生死は問わぬ』と。  
つまり、ボスはこうなる事をどこか分かつていた節がある。

「知りたいのさ。」

君のツジギリ||ジツがどこまで通用するのかをね」

やつと繋がる。

ならばこれもビズの一つだろう。

ジルバーカラスは構える。葛葉刀子も構えた。

真ん中に幼女を置いて方や殺そうとし、方や守ろうとする変則的な立ち合い。

勝負でなく、イクサとはそういうものだろう。

「神鳴流。葛葉刀子。

参ります」

「シルバーカラス。

卑しきニンジャ」

井河アサギと矢本古希は見た。

幼女を中央に置いて、二人の剣豪が立ち会おうとする姿を。

そして聞いてしまった。

全てを台無しにする極まった果ての飢えを。

「ああ。美味しそう」

そして、ジェットスキーが駆けていき、五者は皆等しく死ぬほど痛い痛みを受けて気絶したのであった。

目が覚めた。

知らない天井。体が軽い。

シルバーカラスは起き上がろうとするのを誰かが押さえた。

ノナコだ。

「まだ寝てて。」

ドクター呼んでくる」

「たばこ」

「後で」

ノナコが出てから、シルバーカラスは改めて起き上がる。

思い出すのは、あの地下水道の最後の一瞬。

ジェットスキーにまたがった対魔忍みみたいな輩が全てを叩き伏せていった姿だった。

井河アサギと矢本古希は一撃も耐えられなかった。

幼女も同じく水の中に沈んだ。

動けたのはシルバーカラスと葛葉刀子のみ。

それでも、ジェットスキーの機動力とスポーツチャンバラのぼこぼこ剣二刀流に二撃目を耐えきれなかったのだ。

ノナコと医師と一緒に入即出やる夫も入ってくる。

当り前のように三人の女連れでだ。

「で、どこまでが、ボスの仕掛けだ？」

「最後のあれは出ればいいと思っただぐらいさ。」

葛葉刀子にどこまで通じるかが分れば御の字だと。

怪我はないはずだ。スポーツチャンバラだからな」

「肺のオタツシヤが消えているんだが？」

「知らんよ。」

誰かのお節介じやないのか？」

入即出やる夫は面白そうに笑い、ノナコは顔を赤めて視線をそらした。

なお、シルバーカラスのオタツシヤ案件をばらしたのは彼である。

もちろんそれを言うつもりはないが、シルバーカラスはニンジャ洞察力で察していた。

「まったく派手に暴れてくれたよ。」

あの地下水路は全壊で、俺はお小言をもらい始末書を書かねばならぬ。

セツプクしないだけましだがな」

「だったら、あんな茶番をしなくてもよかつただろうに」

やる夫は『少し明るい海』を投げる。

シルバーカラスはそれを口に啜えるがライターがない。

ライターに手を伸ばそうとした所をノナコの手がライターをとる。

火のつかないたばこを啜えたまま、彼はやる夫の話の話を聞くことになった。

「あの幼女。月詠というらしいが、未来に中々困った事をする娘になるらしくてね。で、あのとおり、まず生きるために獣にならざるを得なかつた輩だ。

話を聞くためにも、という訳だ。

フオローに葛葉刀子をつけたのもそういう理由さ」

「……最後のあれはなんだ？」

シルバーカラスの一番聞きたかつた事をやる夫は目をそらして答える。

珍しく、口調が重たい。

「来るかとは思っていたが、ああいった形で来るとは思つて無くてな。

一応水着剣豪というやつらしい？」

「水着剣豪？」

「对魔忍じゃないのか？」

「言わないでやってくれ。

彼女も気になっているらしい」

つまりそれを言えという事か。

視線で確認したら、やる夫もニヤリと笑つた。

「さてと。」

邪魔者は帰るよ。

次の見舞客が待つているみたいだからな。

しばらくは南の島でのんびりするといい。

契約は解除する気はないから、戻ったらビズをしてもらうのでそのつもりで」

「ああいうのと当たるなら、ボーナスを要求したいな」

「それでやってくれるなら喜んで払うさ。

では、お大事に」

やる夫が医者と三人の女たちと共に部屋を出た後しばらくして病室のドアがノックされる。

予想はしていた。

ドアの先には花束とフルーツを持った井河アサギと矢本古希と葛葉刀子の姿が。

そして、あの地下水道でやりやった月詠という少女と一緒に。

「……」

もう一人いるのだが、誰も視線を合わせない。

そりゃそうだ。

昼間の病院内で、アメリカな水着で豊満なものを晒して歩くなど対魔忍でもせぬ所



業。

「だけど気にしない。バーサーカーだから。」

「もつとも、周りは気にする訳で。」

「かくして、水着剣豪は見事なまでに土下座した。」

「すみませんでした……」

「ほんと、すみませんでした……」

「ほんと……すみませんでしたああ……」

後に、麻帆良学園に田中鍵という教師が現れ、居合術を教えるようになる。これはその前の話。

なぜか麻帆良の武道館にて、恐ろしく強い剣豪たちが立ち会っていたりする事をみるようになる前の話である。

## 入即出やる夫のバカンス その1

「そういえば、学園都市の航空宇宙産業ってどうなっているんだ？」

衛星軌道上で壊れたままの『樹形図の設計者』。

そいつの修理の為に米国からスペースシャトルでも借りるかなんて考えていたのだが、その前に学園都市の航空宇宙産業はどうなっているのかと気になって調べてみる。

軌道エレベーターなんてのを作ろうとする学園都市だから、その手の技術はあるのは分かっているが、ロケットは種子島か内之浦でしか打ち上げられないと思っていたからだ。

で、俺は忘れていた。

この世界、闇鍋だという事を。

「ロケット打ち上げ飛行機かあ……こいつは盲点だった。

学園都市なら、こういうのがあっても不思議はないわな」

ロケット打ち上げ飛行機とは、ロケットを飛行機に積み込んで成層圏まで上昇し、そこでロケットを分離・点火して宇宙に上げる仕組みである。

打ち上げ失敗で首都圏に甚大な被害がなんて起こったらたまらんなあと思っていた

ので、これだったら大丈夫という所で俺は気づく。

「何で学園都市の奴ら、『樹形図の設計者』の修理に難航しているんだ？」

という訳でダヴィンチちゃんに尋ねてみたら、答えは簡単な所にあった。

「単純な話さ。」

OSがやられたただだから、地上からデータの上書きでなんとかできるかもと試行錯誤していた訳だ。

我々が提案したのは、ハードごとの交換で費用も出す形にしているからそりゃ乗るさ。

もちろん、技術流用を恐れて統括理事会はこの提案を検討しているが……」

「……外に流れたら困る技術の最たるものだからな。あれ」

納得する俺は資料を眺める。

なじみがある企業がなかなか前衛的な飛行機を飛ばしていた。

「おおう。」

北崎重工あるのか。そりゃ、ここならば学園都市と手を組むよなあ」

学園都市の技術の恩恵を受けている企業がしつかりと隆盛していた。

そのうちゲーム機も出すかもしれないなあと資料をめくっていたら、さらに素敵なものを見つける。

「ニューコムもあるのか。」

軌道エレベーターを作るなら、そりやあるのかもしれないなあ……」

なお、起動エレベーター建設の宇宙側の作業場として宇宙ステーションの建設が進められており、そちらにロケットが使われているため修理用のロケットの手配が進んでいない事までわかった。

「あ。洋上メガフロートの建設が始まってやがる……ん？」

これ、潰したカテドラルの代替じゃないだろうな？」

という訳で、調べてみた。

結果から言うと黒だった。

このメガフロート出資者にメシア教の影がちらつくからだ。

「そういえば、メシア教が力を入れている政策が国会で進められているわよ」

調べていた俺に叢雲が書類をもって声をかける。

閣議決定にかけられる前の書類だが、閣議決定されるだろうと霞が関で噂になっている超巨大公共事業の名前は東京湾総合開発政策。通称『バビロンプロジェクト』。

地下都市東京ジオフロントが軌道に乗り、英雄王の魔力炉である巨大発電所が完成した事もあって、湾岸開発が一気に加速しようとしていた。

未だバブルが続いているこの世界の日本にとって、東京に新たな土地が生まれること

は利益になるのだ。

特に、麻帆良学園都市と学園都市という形で内陸部に治外法権で使えない土地があるこの世界の日本では。

「まあ、おとなしくしろという事だから、少しおとなしくするさ」

そんな事を言ったからか、テーブルの電話が鳴る。

フラグ回収早いなと思いつつながら受話器をとったら、相手はデグ様だった。

「おとなしくしろと言われたらいいな。」

だったら、一つ仕事をしてみないか？」

「今、そちらのあれやこれやで対米感情が悪化しているのですが、それでも得れるメリツトを提示していただけるならばどうぞ」

「そうだな。」

その対米感情の改善に、トライデントからPR活動の提案がある。

この仕事もトライデントからの提案だよ」

げんなりする俺の顔を見て、ステンノがとてもいい笑顔を見せる。

もちろん、電話だからデグ様はそんなやり取りは見えない訳で。

「トライデントの奴ら曰く、太平洋上に浮かんでは消える謎の島が出るらしい。

そこに巡洋艦を送るつもりだが、良かったらこないかというお誘いだ。」

異界、だったか？

貴国が管理しているその別世界の謎が解明できるかもという訳で、一口乗ればそれ相應の取り分はあると思わないか？」

「否定はできませんが、厄介ごことも多いでしょう？」

「否定はできないな」

少し間をおいてデグ様がぼやく。

念願の後方だろうにワシントンは魔境らしい。

「アンブレラの排除はうまく進みそうだが、メシアの排除に手間取っている。

教化した退役軍人たちが圧力団体として蠢うごいていてな。

学園都市から奪った聖杯の行方も、今の所不明だ。

アラスカの米軍基地に入った所までは分かっているんだが」

つまり、トライデントに恩を売ってメシア排除のテコ入れをする。

アーカムとかもあるのに米国政界は複雑怪奇なり。

「まあ、いいでしょう。」

貴方についていくと、苦労はするけどリターンも大きいでしょうから。

NASAに伝はりますか？」

「なくはないが、何をするつもりだ？」

「スペースシャトルを借りようかなと思つて」

数日後演習という形で俺の艦隊は出港する。

米軍のと合同演習という形にすることは、指揮系統やら先のミサイル誤射事件から避けられ、たまたま同じ場所で演習するという形におちついた。

米軍太平洋艦隊 ラリー・マーカスン大佐

巡洋艦 『バレイフオージ』

ノーマン・ライマン大佐

海上自衛隊 第70護衛隊 入即出やる夫海将補相当官

『叢雲』 艦長 東雲叢雲二佐相当官

副長補佐 新島義則三佐

『浜風』 艦長 マシユ・キリエライト二佐相当官

副長補佐 フランシス・ドレイク三佐相当官

『ジャンヌ・ダルク』 艦長 ジャンヌ・ダルク一佐相当官

副長補佐 雅羅派詩舞二佐

戦闘妖精少女  
搭載



## 入即出やる夫のバカンス その2

「……………出撃するわ！」

「行きます！どうか、主の御加護を！」

「駆逐艦、浜風、出ます！」

そんな掛け声とともに俺の艦隊は横須賀を出港した。

艦隊を動かすにはお金がかかる。

色々とおつて、自衛隊側に金銭的負担をかけたくない俺は、そのあたりの解決をドレイク船長と英雄王にお願いした。

まあ、英雄王は自前の発電所を持った上にバビロンプロジェクトが始まるので、すっかりプレジデントモードで金がうなるようにたまってゆく。

さすが英雄王。

で、ドレイク船長は、その英雄王から資金を受けるといふ形でこの艦隊の運営費を捻出した。

俺が公人としての側面が強くなったので、色々表に出せない金については、英雄王と

ドレイク船長におまかせするという訳だ。

なお、ドレイク船長のカリスマゆえか、他所の出資者も色々といたりする。

アーカムとか、トライデントとか、学園都市とか。

「いいじゃないか。

金に主義主張なんてありやしないんだろう？」

航海途中のTV会議の最中、そのあたり全部俺にぶん投げやがった。この人。

まあ、そんな活躍によって今回の航海は行われている。

「やらないといけない訓練が大量にあるのは否定しませんが……」

すっかり常識人ポジに収まったシーマ二佐が苦言を呈す。

この艦隊一番のデカブツである『ジャンヌ・ダルク』の管理運営は、艦のコントロールはジャンヌ・ダルク自身に任せればいいとして、彼女の下には戦闘妖精少女や8機のヘリが入る事になる。

なお、島の調査という事で、調査部隊も甲賀隼二佐指揮でハイデッカーやオイラン口イドやホムンクルスの混成中隊で持ってきている。

指揮系統に対魔忍を入れているが、基本使い捨て前提なのはゴールド・ムジーク・ユグドミレニアからホムンクルスを購入できたのが大きい。

中隊の半分以上が、このホムンクルスである。

ちなみに、叢雲乗員220人、浜風乗員239人、ジャンヌ・ダルク乗員627人の1086人の内、海自率はなんと半分を超えている。

これもガンダム世界でシーマ様一党を報酬としてもらったからで、横須賀基地の海自充足率はこれにハイデッカーやオイランロイドやホムンクルスを入れて一気に解消に向かう事になった。

まあ、それでもこの艦隊、他所に比べて明らかに女性率が高いのだが。

「こちらにはお移りにならないのですか？」

現在の艦隊は先頭叢雲・真ん中ジャンヌダルク・後方浜風という単縦陣で進んでいる。ジャンヌ・ダルクが指揮上から自らの船にと誘ったのを俺は首を横に振って拒否する。

「いや。」

俺はこの叢雲に命を預けているのでね。

ま、何かあつたらそつちでうまくやってくれ。

一応次席指揮官として、甲賀隴二佐、その次を雅羅派二佐とする」

「気にしなくていいのに。馬鹿」

小声で顔を赤めながら叢雲が悪態をつくが、頭の謎物体がピコピコ揺れているので、間違いなくうれしいらしい。

そんな叢雲を置いておいて俺は万一の命令系統混乱なんて悪夢は見たくないの、ちやんと序列はきちんと作っておく。

なお、この二人春の人事で一佐に昇進予定である。

俺が海将補相当官だから、万一はこの二人でこの艦隊を指揮してもらおうという海自の目論見に全面的に賛同した結果とも言う。

「はっー！」

「了解しました」

モニターの二人がそろって敬礼する。

叢雲艦内の魔術工房からモニターに映るダヴィンチちゃんが、今回のバカンスの説明をする。

「米国から提供されたデータによると、この消えたり現れたりする島ってのは、異界、我々の言葉でいう特異点じゃないかと思ってる。

まあ、何が出てもおかしくないから、秘密保持ができて、こちらで対処できる連中でここにやってきたという訳だね」

そういう事もあって、麻帆良学園に籠っていた超鈴音にも来てもらっている。

やばくなったら、ジャンプで逃げるといふ訳だ。

そのまま美野原首席幕僚がカメラに近隣の海図を映す。

「現在我々は東京湾を出て南東の方角に向かっている。

我々の100キロ先に、米軍タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦『バレイフオージ』が。さらにその300キロ先に、アーカム財団調査船『ロシナンテ』が目標地点に向かっています。

目的地への到着は3日後を想定しています」

「現在、米海軍ミサイル巡洋艦『バレイフオージ』とは相互に連絡を取り合っていますが、戦術ネットワークはリンクさせていません。

万一の際には、リンクする準備は一応していますが……」  
甲賀隴二佐が口籠る。

米軍との信頼関係はそこまで亀裂が走っているのだが、それでも友好的な同盟国であるというポーズは崩さない。今はまだ。

「万一、起こるのでしょうか？」

マシユじやなかった、浜風がモニター向こうで疑問を漏らしたのを、隣に居たステンノが凜とした声で断言した。

それは女神の恩寵であり、呪い。

「起こるわよ。」

だって、何も起こらないって退屈じゃない？」

トラブル

1 何もなし

2 何もなし

3 何もなし

4 バレイフオージとロシナンテの交戦

5 バレイフオージとロシナンテの交戦

6 どないしよ?

6 どないしよ?

1 クリティカル

2 ファンプル

2 ファンプル

女神の神託は的中した。

うれしくない事に。

「艦長。

良かったら司令と一緒に来てくれませんか？」

夜中、副長補佐で深夜勤務だった新島義則三佐に呼び出されて、俺たちは裸から慌てて服を着て艦橋に上がる。

臭いについては、気にしないでくれるとありがたいのだがと思つたが、そんな冗談を言える環境ではない。

「霧……か？」

「完全に先が見えないうえに、レーダーにも障害が発生しています」

「通信は？」

「応答ありません」

手の令呪に魔力を流す。

その感覚が衰えてはいないという事は、マシユ風とジャンヌは未だ無事という事なのだろう。

「ダヴィンチちゃんを呼んできてくれ」

「もう来ているよ。マスターくん」

異常事態に駆けてきたらしく、ダヴィンチちゃんの吐く息が荒い。

状況を察した彼女は弟子よろしくついてきた超鈴音と共にノートパソコンをいじりデータを解析してゆく。

「これ、可能性として世界のはざまに落ちたかな？」

「世界のはざま？」

ダヴィンチちゃんの言葉に俺はオウム返しで返事をする。

彼女は手を重ねて説明をする。

「特異点に対する一つの仮説さ。」

『ない』島が『ある』となった場合、その島にあった『ない』場所が世界事入れ変わっていると考えた場合……」

「その島と入れ替わりで我々は飛ばされたネ。

かといって、このままという事はないネ。

霧が晴れたら、何かわかるヨ」

明るい口調で超鈴音が後を引き継ぐ。

不安を抱かせないようという配慮からだろう。

その時間がくるまで、えらく時間が長く感じた。

「霧が……晴れるぞ！」

まるで幽霊のように霧が晴れると、視認距離に『浜風』と『ジャンヌ・ダルク』の姿を見つめる。

『バレイフォージ』と『ロシナンテ』の姿も見つかる。



そして、眼前に見える巨大空母にはためく星条旗。

「なあ。 主席幕僚。」

こんなところに、アメさんの空母って居たっけ？」

「居ないはずですな。」

しかもあれ、最新鋭のニミッツ級航空母艦じゃないですか」

艦橋に居る通信担当のマッシュ・茶々丸が緊迫した声で通信を繋ぐ。

それは、あの巨大空母から発信されていた。

「こちらはアメリカ海軍第2艦隊司令官ジミー・ハーデー中将だ。」

我々は未知の敵と遭遇した。敵の使用する怪光により、我が第2艦隊は旗艦たる本艦

『ロナルド・レーガン』を残し、全て壊滅!!

現在、本艦は約10kmの海域に閉じ込められ脱出は不可能!!

我々の残存兵力は本艦及びテスト中の新型ヘリ5機。只今より、飛行戦闘隊により未知の敵工場攻撃作戦に入る!

これは演習ではない。

繰り返す、

これは演習ではない。」

「位置確認しました！」

「ここは……カリブ海です!!」

「マスターくん！」

あの霧で我々は多分レイシフトしてる!!

今の時間は1984年!!!」

……『バンゲリングベイ』かあ……

## 入即出やる夫のバカンス その3

さて、ここで現在の序列を確認しよう。

厄介ではあるが、まだなんとかまとまる話である。

空母『ロナルド・レーガン』

ジミー・ハーディー中将 米海軍第二艦隊司令官

巡洋艦 『バレイフオージ』

ラリー・マーカスン大佐 米軍太平洋艦隊所属 トライデント本部長

ノーマン・ライマン大佐 『バレイフオージ』艦長

『叢雲』、『浜風』、『ジャンヌ・ダルク』

海上自衛隊 第70護衛隊 入即出やる夫海将補相当官

『ロシナンテ』

ステイブ・H・フォスター アーカム財団最高特別顧問

日本は米国と安保条約を結んでいるので、こういう時に指揮下に入るのもやぶさかで

はない。

トライデント本部長であるラリー・マーカスン大佐もここで我を押す愚はしないだろうと信じる。

問題は、完全民間扱いのくせにレーザー兵器とか積んでいるアーカムの船だ。

あれを戦力として組み込むか、民間船として保護するかでここからの脱出の難易度が変わる。

「で、どうします?」

「目的は一緒のはず。」

一時休戦はやぶさかではないですよ

ライマン艦長が当たり前のようにジミー・ハーディー中将の下につくと宣言したので、私にたいした力は残っていませんが?」

「ただ、動きにくくなるなあ」

第三者である俺を通じて、ラリー・マーカスン大佐とステイブ・H・フォスターアーカム財団最高特別顧問の通信会談が行われる。

『バレイフオージ』そのものはジミー・ハーディー中将の下につくことを決めたらしく、ラリー・マーカスン大佐はゲスト扱いという形でその力をかなり失っていた。

この通信と並行して、『バレイフオージ』経由でこちらのデータが渡されているはずで

ある。

俺の率いる船の特殊性や『ロシナンテ』の超技術あたりが流れるのは、この際別に良い。

問題は、ばれた事によってジミー・ハーデー中將が俺たちを取り込みにくくなるという事だ。

知らない方が、協力できるケースというのは多々ある訳で、これはそんなケースとも言えよう。

「何はともあれ情報が欲しかったので、うちのメイヴちゃんに飛んでもらって、情報を集めてもらっている。

データを送ろう」

まだ協力要請が来ていないのを見越して、戦闘妖精少女メイヴちゃんに偵察に出てもらった。

偵察判定 100でばっちり

100 クリティカル

現在のスクランブル機

2機

さすがが未来の高性能偵察機。

色々なものがぼつちり映ってやがる。

とりあえず、航空偵察写真だけをデータとして『バレイフオージ』と『ロシナンテ』に送る。

「飛行場の駐機スポットが小さいな。

二個の滑走路に、二機の駐機スポット。

スクランブルで上がったのは、F-14の2機と工場らしき所から運ばれているのはF/A-18か？

今のうちに、F-14は潰しておく。

このまま二機編隊が空に上がり続けたら、最後押し切られるからな」

「こつちのドッグで建造されているのはアイオワ級戦艦みたいだが……」

「M-1戦車にミサイル発射台つき高射砲台。

上陸して壊すのにも一苦労だな」

会話の裏で、ダヴィンチちゃんと超鈴音の天才二人が出てきたデータのすべてを用いて解析している。

その情報は筆談という形で二人からステノ経由で手渡されていた。

『レイシフトは可能。』

最悪、沖繩の時みたいにマシユに乗り込んで飛べば帰る可能性は高い。

サーモグラフィーカメラに、人間の温度反応らしいものが多数集められている施設が複数発見された。

捕虜かもしれない。

移動中のF/A-18のコックピットは空だった。

彼らがこちらの世界の兵器をコピーして使っているならば、多分操作システムを弄っていない可能性が高い』

つまり、『バンゲリングベイ』だけでなく『チョップリフター』むしろという訳だ。

こりや、ボーナスよろしく『ロードランナー』もあるな。

多分『ロシナンテ』には染井芳乃が乗っているだろうし。

メモを置いて、俺は最初の『レイシフト可能で俺たちだけ逃げ帰れる』を伏せて、残りのデータを出すことにした。

「航空偵察で分かった事が二つあります。

敵は、こちらの兵器をコピーして使っている。

つまり、その操作システムを弄っていないという事。

次に、サーモグラフィーカメラに人間の温度反応らしいものが多数集められている施

設が複数発見されました。

捕虜収容所の可能性があります」

「……っ！」

ラリー・マーカスン大佐がたまらず舌打ちを漏らす。

戦うなり逃げ出すなりはまだ選択が楽なのだが、捕虜救出となると格段に難易度が上がるからだ。

そして、覇権国家たる米国は基本捕虜を見捨てられない。

「私はジミー・ハーデーー中将だ。

すまないが君たちの会話を聞かせてもらっている。

貴国の情報提供に感謝するとともに、貴艦隊にこの事態への協力を要請したい」

割り込んだジミー・ハーデーー中将は安保条約云々を言わなかった。

後々面倒になるからこそ、自発的な参加という所でうやむやにする腹か、人類の危機だからと腹を割ってそのあたりをすっ飛ばしたか。

「お手伝いはしますよ。

ただ、独立裁量権はいただきたい」

「もちろんだ」

「俺はステイブ・H・フォスター。」



『ロシナンテ』船長兼アーカム財団特別最高顧問だ。

同じ合衆国市民として、中將に対して協力の用意がある」

こうして、最低限の指揮系統が確立したうえで、人類の反撃が始まった。

### 制空権判定

バンゲリング帝国空軍

F-14 2+1機

レベル20×3=60

F/A-18 1機

レベル 4

合計64

スーパーシルフちゃん

レベル12

メイヴちゃん

レベル56

シルフィールドちゃん

レベル56

フアーンちゃん

レベル23

フアーンIIちゃん

レベル32

合計179

戦力比 3 : 7

結果

1 バンゲリング帝国勝利 戦闘妖精少女撃墜判定

2 同上

3 同上

4 戦力拮抗

5 戦闘妖精少女勝利 バンゲリング帝国機撃墜判定

6 同上

7 同上

8 同上

9 戦闘妖精少女勝利 バンゲリング帝国機全機撃墜

10 熱烈歓迎

結果

9 戦闘妖精少女勝利 バンゲリング帝国機全機撃墜

バレイフオージミサイル先制攻撃

使用ミサイル攻撃目標4つの工場

使用ミサイル数 8発×4＝32発

工場の耐久力 ミサイル4発まで耐久

四つの工場の破壊確定

「相手が舐めている今こそ最大のチャンスだ」

ジミー・ハーディー中将はそう言って制空権奪取後に『バレイフオージ』に工場のミサイル攻撃を命じる。

その奇襲は完全に凶に当たる。

このバンゲリング界の島にある6つの工場の内、飛行場がある二つの島の工場を除いた4つの工場の破壊が確認されたのだ。

この奇襲は制空権の奪取が絶対条件だったから、現在飛んでいたバンゲリング帝国機の全機撃墜の為に戦闘妖精少女全力出撃までした一発勝負である。

そして、その賭けに中将は勝った。

「よー」

β島攻略作戦を開始する!!」

飛行場がある島で工場が二つある（一つは破壊済）島をα島、もう一つの島をβ島と仮称して、β島攻略作戦を開始する。

『バレイフオージ』と『浜風』は空母『ロナルド・レーガン』の護衛として残り、攻撃する哨戒艇の排除を命じている。

『叢雲』と『ジャンヌ・ダルク』と『ロシナンテ』はβ島攻略する為に艦隊から離れてβ島に向かう。

ジャンヌ・ダルクの頭上騒がしいのは、攻略部隊を受け入れるためにヘリが飛んでいるためだ。

『Navy SEALs』ボーマン少佐です。

作戦に参加する為に着艦許可を頂きたい。

お久しぶりですが、昔話は作戦終了後にでも」

本来は御神苗優と戦うために乗り込んだボーマン少佐は、作中では使われなかったN

avy SEALs小隊を率いて参加する事になった。

そして、もう数機が『ジャンヌ・ダルク』の上空で着艦許可を待つ。

『ロナルド・レーガン』より志願部隊を率いるターニャ・デグレチャフ大佐だ。

パイロットを含めた命知らずを小隊規模で連れてきた。

邪魔はせんが、作戦の頭は合衆国軍人が務めんと覇権国家のメンツが保てないのでご容赦を。

命令と全ての責任はジミー・ハーデーー中将がとるとのお言葉だ。

思う存分やってほしい」

なるほど。

こういう風に繋がるのか。

しかし、デグ様もあちこちに出て大変だなあ……

## 入即出やる夫のバカンス その4

制空権が取れた事を確認した上で、β島に対して上陸作戦を執行する。

AH-16 シーアパッチ5機と、SH-60J シーホークが8機、SH-60B シーホーク2機がβ島に向かう。

さらに、LCVP上陸用舟艇2隻に甲賀隴中佐指揮の部隊が乗り込んでいる。

「邪魔よっ!」

叢雲の68式50口径3in連装速射砲が火を噴き、β島のレーダーや高射砲台を破壊する。

工場周辺に展開していたM-1戦車はシーアパッチが潰し、β島の工場に10機のシーホークから日米の兵士が制圧に動く。

その中にダヴィンチちゃんが居るのは、工場の破壊でなく掌握が目的だからだ。

工場占拠状況 100で完璧+『天賦の叡智EX』30

84+30=114

「こちらダヴィンチちゃん。

工場のシステムは掌握した。

完全無人化の工場みたいで、システムを掌握したら後は楽だったよ。生産中のF-14は自動操縦ではなく、元の機体の完全コピー品だ。

ターニャ・デグレチャフ大佐が飛行場の制圧に動いている。

順調に行けば、この飛行場からF-14が2機ずつ飛んで制空任務につけるはずだ」

捕虜収容所制圧状況 100で完璧

81

解放人数

22×81%＝17人

「いちから甲賀二佐。

捕虜収容所を制圧し、捕虜を解放した。

襲ってきた骸骨兵士だが、あれの材料は米軍兵士だったという裏がとれた。捕虜収容所の解放は素早くする必要がある。

捕虜はシーホークで空母『ロナルド・レーガン』の方に送ります。

我々は、工場周辺の守備要員を残して、『ジャンヌ・ダルク』に撤収します。以上」

工場の完全破壊に動けなかったのは、この捕虜の存在がある。

工場の完全破壊でこの閉鎖空間が維持できなくなるという予想はついており、島のあちこちにある捕虜収容所を解放するためにも、工場の完全破壊という選択肢は取りたくなかったのだ。

「わかつていたが、時間との勝負になるな……」

俺の呟きに誰も反応しない。

状況が進行していてそっちに対処せざるをえなかったからだ。

「α島飛行場より敵機上がります。」

『バレイフオージ』が迎撃するそうです」

「β島飛行場より奪取したF-14の離陸は点検のため時間がかかるそうです。」

空母『ロナルド・レーガン』から追加の整備要員とパイロットをへりで送るそうです」

「こちら『浜風』。」

敵哨戒艇が接近。

攻撃し排除します」

α島より離陸した敵機



F-14 1機

F/A-18 1機

『バレイフォージ』の迎撃

撃墜に使用した対空ミサイル 1発

F/A-18撃墜 F-14生存

バンゲリング帝国Q型戦艦建造進捗 100で完成 出港

5 バンゲリング帝国α島工場の選択

1 兵器生産

2 工場復旧

3 工場奪還 100以上の数値を出しているので自動失敗

2 工場復旧

2 残存捕虜収容所

敵哨戒艇の数

4

浜風の排除数

5 (オーバーキル)

染井芳乃チエツク 100で黄金発見の代わりに撤収作業が遅延

73

「『バレイフオージ』の対空ミサイルで敵F/A-18撃墜。

敵F-14は未だ飛んでいます。

『バレイフオージ』のミサイル発射システムにトラブルが発生した為に追加が撃てないみたいで復旧作業中!」

「こちらは、ターニャ・デグレチャフ大佐。

今から、奪ったF-14で上がる。

敵機の排除はこっちで行う」

「α島敵破壊済工場に復旧の動き……」

その報告が途切れるほどの大爆発が立て続けに発生する。

振動を手近なものを掴むことで耐える。

「こちら浜風。」

接近していた哨戒艇を排除した結果、大爆発を起こしました！

本艦及び空母に被害なし。

自爆攻撃の可能性が高いです。

注意してください」

楽には勝たせてはくれないらしい。

そんな事を呟こうとしたら通信に場違いな歓声が飛び込む。

「やったあ！」

「凄い！金！金！！金塊の山だわ♥」

「これであたし大金持ちい♪」

「馬鹿！さっさと撤収するぞー！」

「こちら御神苗優。」

「この馬鹿は俺が責任をもって連れ帰るから、作戦を続けてくれ」

「そんな事を言われてもである。」

「艦橋の空気が何とも言えない事に。」

「ステンノが苦笑する。」

「彼女わかってやっているのかしら？」

「さあな。

民間人の協力ならばこんなものだろうか？

しかも、彼女はアーカムの所属ですらない」

金というのは重たい。

もちろん、彼女は邪魔にならない程度にするのだろうが、持ち運びに手間取るのは容易に想像できた。

残る捕虜収容所の数は2。

まだまだ、この作戦の先は長い。

次ターン 制空権判定

バンゲリング帝国空軍

F-14 1+1機

レベル2×2=4

F/A-18 1機

レベル 11

合計15

米軍

F-14 2機

レベル10×2＝20

シルフィードちゃん

レベル56

フアーンちゃん

レベル23

フアーンIIちゃん

レベル32

合計131

戦力比 1:10

結果

1 戦力拮抗

2 米軍機及び戦闘妖精少女勝利 バンゲリング帝国機撃墜判定

3 同上

4 同上

5 米軍機及び戦闘妖精少女勝利 バンゲリング帝国機全機撃墜

6 同上

7 同上

8 同上

9 同上

10 熱烈歓迎

4 米軍機及び戦闘妖精少女勝利 バンゲリング帝国機撃墜判定

撃墜数 1機

バレイフオージミサイル先制攻撃

使用ミサイル攻撃目標2つの工場

使用ミサイル数 5発×2＝10発

工場の耐久力 ミサイル4＋3発まで耐久

工場生存 機能一時停止

制空権は未だこつち側が握っている。

とはいえ、ガン逃げに徹したバンゲリング帝国機を落とすのは難しく、一機の撃墜に

留まるという結果に俺は顔を曇らせる。

さらに、『バレイフオージ』のミサイル攻撃が中途半端な成功に終わった事で俺は顔をしかめざるを得ない。

理由は分かっている。

敵工場の防御力の強化と、『バレイフオージ』のミサイルの残弾が尽きつつあったのだ。

航空作戦を指揮するデグ様と通信で話す。

「どうする？」

α島の敵工場二つを叩くか？」

「二つは潰しておくべきだ。

疲労を考えると、艦砲で潰してくれるとありがたいんだが」

当り前だが、人間というのは疲れるのだ。

それは戦闘妖精少女でもかわらないので、一番最初に全力出撃した彼女たちは一度休んでその間は『バレイフオージ』の対空ミサイルで対処、今は二人を休ませてという所まで状況は持ち直している。

奪取した敵工場から次もF-14二機が出る予定で、休ませた戦闘妖精少女2人とその二機と『バレイフオージ』の対空ミサイルで制空権を維持するという綱渡りを強いら

れていた。

俺は決断する。

「それはこつちでしよう。」

哨戒艇の自爆攻撃を考えると、今、空母から『浜風』を外したくはない。

β島の工場の破壊工作は？」

「既に終わらせている。」

万一、取り返しに來ても、自爆するように工作してある。

後は、こつちの撤収作業だな。

想定より遅れている」

β島の工場を制圧し、F-14をこちら側で飛ばすというのは悪い手ではないが、デメリットとしてβ島の防衛をしないとイケない。

綱渡りの制空権の維持にここの工場から出るF-14は大事だからだ。

いずれは奪還されるだろうし、工場を破壊しないとここから出られないので破壊のタイミングが重要になる。

「甲賀二佐。」

γ島攻略部隊の編制状況は？」

「撤収作業が遅れているのでもう少し時間をください」



ネットワークになっているのが、移動に使っているヘリだった。

この世界が壊れる際に、俺たちは元の世界に帰るので、ここで得た捕虜などは空母『ロナルド・レーガン』に送らないといけない。

そして、奪ったβ島にパイロットと整備要員を送るので、シーホークは四機がそれに使われていた。

ジャンヌ・ダルクのLCVP上陸用舟艇2隻が無かったらと思うとゾツとする。

「ただいま。」

戻ってきたよ」

そんな中、ダヴィンチちゃんがヘリで帰還する。

次の島であるγ島には捕虜収容所とQ型戦艦の建造ドックがある。

「おつかれ。」

バンゲリング帝国の技術はどうだった？」

「人類が理解できない技術ではなかったね。」

特異点みたいなものを作るのに、そういう超技術の痕跡は少なかった。

工場に設置されている発電施設が不自然なまでに大きい発電量なのは、この異界の維持に使われているからだろうね」

そこで、ダヴィンチちゃんが顔を曇らせる。

唯一の懸念状況に彼女も気づいていたからだ。

「問題は捕虜収容所に居るだろう生存者だね。

救うのはいいが、人数が数百人とかになると手が負えなくなる。

次のY島で建造中の戦艦はできれば無傷で入手して、捕虜収容の一助になってくれればいいんだけど」

「そういえば、アーカムの連中は結局金塊どれだけ入手したのだろうか？」

「試しに聞いてみたらダヴィンチちゃんも苦笑して答えてくれた。

「ああ。

あの娘、アーカムのスプリガンに叱られて、金の延べ棒二本で我慢したみたいだよ」

我慢して、二本に抑えたのか、叱られても二本は持つて帰ったのか。

後者だろうなあ。 染井芳乃だし。

## 入即出やる夫のバカンス その5

「追い詰めるわ。逃がしはしない！」

50口径76mm連装速射砲が火を噴いて、α島の工場を叩く。

この特殊空間はおよそ10キロぐらいで完結しているので、叢雲の火砲が届くのがありがたい。

その一方でγ島の攻略に着手する。

AH-16シーアパッチ5機と、SH-60Jシーホークが6機がγ島に向かう。

SH-60Jシーホーク2機とSH-60Bシーホーク2機の4機制圧したβ島の維持に使っているので、LCVP上陸用舟艇2隻に乗り込む甲賀隴中佐指揮の部隊が上陸できるかが焦点となる。

目標は、γ島の造船所と捕虜収容所。

造船所占拠状況 100で完璧+『天賦の叡智EX』30

37+30=67

「こちらダヴィンチちゃん。

造船所に侵入したが、敵の激しい抵抗を受けている。

敵も無策じゃないらしい」

捕虜収容所制圧状況 100で完璧

85

解放人数

156×85%＝132

「こちら甲賀二佐。

良い報告と悪い報告があります。

良い報告は、捕虜収容所を解放した事。

悪い報告は、解放した捕虜が百人を超える事です」

「よし分かった。

造船所の制圧が進んでいないが、応援に回せるか？」

「分隊を編成して、応援に回します。

捕虜の受け入れ態勢をお願いします」

喜ばしい報告だが頭を抱えざるを得ない。

百人以上の捕虜はまだ受け入れが可能ではあるが、あと一つa島の捕虜収容所が残っているからだ。

二個の工場に飛行場、さらに港湾まであるα島の捕虜収容所は、もちろん最大規模である事が想定されていた。

受け入れられるのか？

勝負はその一点にかかろうとしていた。

「ジミー・ハーディー中将へ。

こちらは入即出やる夫海将補相当官だ。

γ島の捕虜収容所を解放したが、捕虜の数が百人を超えららしい。

先の捕虜と合わせて受け入れ態勢はありますか？」

「大丈夫だ。

格納庫はシーアパッチの5機を除いて空でね。

短時間ならば、格納庫で収容させるさ」

「わかりました。

解放した捕虜の受け渡しをα島攻略前に行いますので、受け入れ準備をお願いします」

俺たちと空母『ロナルド・レーガン』は時代が違う。

そのため、解放した捕虜を俺たちの世界に連れてゆく事は後々厄介なトラブルになるのが目に見えていた。

そのためにも、解放した捕虜は今は『ジャンヌ・ダルク』で受け入れているが、空母『ロナルド・レーガン』に移さないといけなかった。

それには酷使し続けているヘリを使わざるを得ないので、さらに作戦が遅れることを意味する。

つまり、バンゲリング帝国が何かする隙を作ってしまう事を意味する。

マイクを戻して汗を拭うとステンノがタオルを差し出す。

「あら、いい顔ね。」

私、そういう顔も大好きよ。

悩んでいる顔、苦しんでいる顔、決断する顔。

男の顔には人生が表れるの」

「そりやどうも」

軽口を叩くが、口に出すと少し気分が楽になる。

状況はまだ我々の有利ではあるが、その優位が綱渡りである事を俺は理解した上で、その優位を手放さないように更に更に命令を出す。

「仲魔を増援に出す。」

造船所はなんとしても無傷で入手しろ」

いつもならば、大淫婦バピロンを出すところだが、彼女は今やTSFカエサルとして

俺の手を離れた。

という訳で、ハイピクシーこと大妖精とチルノと大天使イスラフィールという羽つき飛行可能悪魔を増援に出す。

大天使イスラフィールは前に出せるし、チルノと大妖精は組ませれば支援から近接攻撃までできる便利屋である。

ダヴィンチちゃんならば使いこなせるだろう。

「ターニャ・デグレチャフ大佐。

こちらは入即出やる夫海将補相当官だ。

γ島の攻略が遅れている上に、捕虜が百人以上見つかった」  
向こうの無線で舌打ちしようとして我慢したのが分る。

この場合の捕虜はバンゲリング帝国にとらえられていた米軍兵士なのだから。  
とはいえ、彼らの搬送に時間がかかるのも察したのだろう。

「β島の撤収についてはどうなっています？」

「当初の計画では、F-14をあと6機製造して工場を爆破、ヘリで撤収する予定だった。

計画がずれることは想定してパイロットは持つてきている。

更に+4機は作れると思ってくれ」

「こちら『ロシナンテ』」

話は聞かせてもらっている。

β島からの撤収についてはこちらで支援を行いたいがいかがか？」

「助かる。」

「そこらはγ島の攻略に全力を注いでくれ」

「了解」

染井芳乃チエック 100で黄金発見の代わりに撤収作業が遅延

50

敵哨戒艇の数

3

浜風の排除数

6 オーバーキル

バンゲリング帝国工場の反応

工場復旧 自動選択で兵器生産などはなし

「こちら御神苗優。」



β島工場や捕虜收容所からバンゲリング帝国の技術等を解析している。

データをそつちに送り次第、『ロシナンテ』に撤収しターニャ・デグレチャフ大佐の支援に回る」

「(「ちら」)浜風」。

艦隊に接近しようとした哨戒艇を排除しました」

それと共に轟音が轟く。

相変わらず哨戒艇は自爆特攻仕様らしい。

砲撃を終えた叢雲が俺の方を向く。

「司令官。

α島の工場の一つを完全に破壊したわ。

もう一つも機能を停止させている」

「よくやった。

とりあえずはγ島の攻略がこの先を分けるな」

「何か気になる事があるの?」

「まあな」

そこで俺は一度言葉を区切る。

『チョップリフター』も入っているなら存在が確認されているし、米海軍の任務部隊を

接收したのならば、あの船が居ない方がおかしいのだ。

「対潜哨戒を厳にするよう通達してくれ」

攻撃型潜水艦。

この時期ならば、ロサンゼルス級潜水艦がこの海のどこかに潜んでいる。そう考えて俺は対潜強化された叢雲の肩を叩いて彼女に任せただった。

# 入即出やる夫のバカンス その6

α島より離陸した敵機

F-14 2機

『バレイフォージ』の迎撃

撃墜に使用した対空ミサイル 5発 オーバーキル

F-14 撃墜

制空権確保

バンゲリング帝国Q型戦艦建造進捗 100で完成 出港

5+14=19

バンゲリング帝国α島工場の選択

1 兵器生産

2 工場復旧

3 工場奪還 100以上の数値を出しているので自動失敗

工場がダメージを受けているので、工場復旧を自動選択

ヘリのトラブルチェック

2機に軽微なトラブル 使用可能だが次回以降墜落の危険性あり

造船所占拠状況 100で完璧+『天賦の叡智EX』30

67+92=159

造船所完全制圧

制圧による損害 32人

死亡19人

占領した工場よりF-14 2機生産

「こちらダヴィンチちゃん。

Y島の造船所を制圧した。

被害は死亡19人を含めた32人だ。

中の戦艦はまだ建造途中で動かせる状況にない。

こいつを使って脱出させるためには、こっちで建造を続けなさいけない事が分かった。

捕虜との兼ね合いになるが、司令部にこれを伝えてほしい。

以上だ」

「今、飛んでいるF-14は空母に着艦させる。

スーパースィルフちゃんとメイヴちゃんと今からβ島を離陸するF-14二機で制空権を確保する。

トラブルが発生したヘリは整備に回せ。

負傷者はジャンヌ・ダルクに移して治療を。

死体も回収しろ」

明確な死亡報告に戦闘が一方的でないという事を思い知る。

被害が出たのはM-1戦車の損害で、シーアパッチが破壊するまで、造船所を守り、こちらの上陸部隊を蹂躪したからである。

上陸後の火力の不足は、この後でも課題になるだろう。

なお、死亡者の殆どがホムンクルスやハイデッカーといつても気持ちの良いものではない。

持ってきた中隊の内、一個小隊が使い物にならなくなったという損害報告は、最後の

本命であるα島の攻略に支障が出かねない。

「主席幕僚。」

γ島の戦艦、どうするべきだと思う？」

「維持するのは論外ですね。」

既にβ島の維持にヘリを4機使用している状況で、132人の捕虜が居ます。

アーカムの『ロシナンテ』号が搬送を手伝ってくれるとはいえ、こっちは補給が基本出来ない。

おまけに、居るかもしれない潜水艦の事を考えないといけません」

美野原主席幕僚は状況が書かれた地図を眺めつつ意見を述べる。

確認をしたかったので、俺は彼に質問する。

「潜水艦は居ると思うか？」

「司令官と同じ意見ですな。」

居ないと思って痛い目を見るならば、警戒していた方がましです」

潜水艦の強み。

それはこの存在のあいまいさにこそある。

居ても居なくても、その存在に艦隊が振り回させるのだ。

「現在解放した米軍捕虜がβ島の17人とγ島の132人で149人です。」

空母の甲板ならまだ千人ぐらいの捕虜を收容できます」

「またえらく断言するな」

「サイゴン陥落で米軍は経験がありますからね」  
なるほど。

この時期の米軍将校は経歴にベトナム戦争がある訳だ。

納得する俺に美野原主席幕僚は地図を指さしながら続きを口にする。

「あの戦艦が敵の切り札でしたら、潜水艦は敵の隠し札です。」

造船所を破壊して、戦艦が使えなくなったとしたら、居るのならば潜水艦はためらう  
ことなく出てきますよ。

対潜哨戒にはヘリの協力が不可欠です。

破壊後の撤収の際には、その事を忘れないでください」

叢雲艦橋から外を見る。

既に日は西に傾きつつあった。

日が暮れて夜になる。

「わかった。」

現時点をもって、γ島は放棄する。

造船所は破壊するが、その破壊時間は明朝とする。

シーホーク2機を対潜哨戒に当てる。

へりはこの戦いの生命線だ。

絶対に落とすなよ」

そう言つて、後を任せて部屋に戻る事にする。

機械と違い、こちらは腹が減れば眠たくなる人間である。

緊張が解けたのか、ベットに横になると一気に眠気が襲つてきた。

「もお……」

「おやすみなさい」

当り前のようについてきた叢雲とステンノの声を最後まで聞くことができずに俺は眠りに落ちていった。

睡眠中のトラブル 100で重大

24

目が覚めた。

当り前のように左右に叢雲とステンノが寝ている。

起き上がつて窓の外を見るとまだ暗い。



時計を見ると深夜1時だった。

夕方からの睡眠だとするとある意味妥当だろう。

「おはよう。司令官。」

緊急を要する重大な報告はないわよ。

γ島からは撤収済。

β島で生産されたF-14二機が上空を守ってくれているわ」

艦娘である叢雲の所には無線なりデータなりは常に入ってくる。

こういう時の報告として最適だった。

「γ島の造船所は早朝に時限爆弾で破壊される予定。

破壊されなかった場合は『バレイフオージ』のミサイルで破壊するそうよ。

で、同時にα島の攻略作戦を開始するそうよ。

叢雲・ジャンヌ・ダルク・浜風の三隻は上陸作戦を支援しつつ、敵潜水艦への哨戒を

お願いしたいそうよ。

β島の工場は明日一杯生産を行った後破壊されるので、それまでに作戦を終わらせな

いと帰るときに厄介なことになるってダヴィンチちゃんから」

ステンは明日の作戦予定を伝える。

ダヴィンチちゃんからの伝言で明日が決戦であると理解する。

「そういえば思ったのだけど？」

艦橋に向かう際にステンノが思い出したようにぼつり。

何だろうと思つて耳を傾けたら、こんな疑問だった。

「マスターつて、この島から何も得ようとしなのね？」

「そりやそうさ。」

次の島の方にお宝が眠っているからな」

対潜哨戒

95

潜水艦隠蔽

17

「あ。ちょうど良かった。」

司令官を起こそうと思つていた所なんですよ」

艦橋の人員に緊迫感が見える。

置かれた地図に、寝る前になかった目標を見つけた俺は、美野原主席幕僚の成果を聞くことになった。

「敵潜水艦を見つけました。

準備でき次第、攻撃に入りたいと思います」

# 入即出やる夫のバカンス その7

敵潜水艦の数 2隻

1 ロサンゼルス級

2 同上

3 同上

4 同上

5 オハイオ級

6 どないしよ

66 どないしよ

「潜水艦発見しました！」

「データがありません!!」

「この時点で味方とも思えないじゃない！」

「対潜戦闘準備!!」

叢雲の声に艦橋が潜水艦に対する攻撃をしようとする前に、回線に割り込む実にく

でもない声が。

「待った！」

攻撃しないでくれ。

機械は魔術以上に苦手なんだよ……

ああ。

久しぶりだね。カルデアのマスター君。

私はマーリン。人呼んで花の魔術師。

気さくにマーリンお兄さんと呼んでくれ。

堅苦しいのは苦手なんだ」

「目標。海中の潜水艦二隻。

あれは撃つても罰が当たらんし喝采する奴も多いだろうよ」

「分かった。

君はせっつかちなんだから。いいかい。攻撃しないでくれよ」

「敵潜水艦二隻の反応が消失しました！」

別の個所に潜水艦反応!!

我々の目の前です！

浮上します!!!」

あの二隻幻術のスキルなんだろうなあ。きつと。

ドン！という音と共に潜水艦が姿を現す。

その潜水艦は少なくとも、現代技術の船ではない。

同時に、駄女神さまによって知識が更新される。

「ノーチラス号……たしかに出るだろうが、あれ『ナディア』のノーチラス号じゃねーか」  
「だってマーリンよ。」

それぐらいできて当然じゃない？」

俺のボヤキにステンノが適当につこつんだが俺は何も返事ができなかつた。

潜水艦のハッチが開いて、ターバンを巻いた少年水兵たちがこちらに合図を送っている。

どうやらマーリンを乗り移らせたらしい。この忙しい時にだが、マーリンである。

あいつは人の話なんてはなから聞いていないくせに、ハッピーエンドの最適解を突っ走るのだ。

水兵たちの後に花の魔術師が花を巻き散らかしてハッチから出て来る。

「米艦に敵ではない事を伝えてくれ」

「了解」

「あの花、掃除大変そうだな」

「もう一人出てきましたね」

ん？

マーリン以外の誰か？

俺は双眼鏡でマーリンの隣に立つ少女を見る。

魔術師の杖を持つアルトリア顔。

アルトリアシリーズ、また増えたのか……

「こんにちは！ キャスター、アルトリアと申します！

実のところ、サーヴァントというのはよく分からないですが、

魔術なんかでお役に立てるなら遠慮なくお使いください。

え？ 魔術は『なんか』じゃない？

うわあ……こつちの世界ではそうなんですか？」

あと、この二人のついでに眼鏡っ娘ができてえらく叢雲に興味を持っている。

「な、なに？」

私の顔に何かついているの？」

「いえ。

貴方を見ていると『そういう手もあったのか』と感心している所で」

あ。

こいつ、人間じゃないな。  
うっすらと分かっていたが。

α島攻略作戦までまだ時間があった。

とはいえ、事が事だけに放置する訳にもいかず、美野原主席幕僚に指揮を任せて叢雲の艦内食堂に通しての話し合いである。

で、開口一番にグランドろくでなしはこうのたまってくれた。

「だって、こんな面白い世界、私が見ない訳ないじゃないか」  
知ってた。

その時点で頭を抱える俺とダヴィンチちゃん。

状況が分かかっていない叢雲は首をかしげ、状況が分かっているのでステンは満面の笑みである。

「お帰りはあちら。」

というか塔から出て来るなよ。

大体なんで今、この時にここに現れた？」

ぼやく俺にマーリンは傲慢そうにその説明をする。

それを聞いていた俺とダヴィンチちゃんは徐々に顔色が青くなる。



「まずは、そこから説明しようか。」

この世界が閻鍋なのは君も理解していると思うが、ここは属性がきれいにそろつていてね。

介入するのにうってつけだったという訳だ。

カリブ海の海上の閉鎖空間、バミューダトライアングル。

アトランティスがらみのワードでそろえると色々だね」

ああ。

そういえば、バミューダトライアングルの中に沈んだ古代帝国アトランティスがあるなんて話もあったなー。

ノーチラスの原作の海底二万里にもアトランティス出ていたし。

で、ノーチラス号を用意してやってきたと。

「で、まあ、マスターの思いを私は無下にするつもりはないが、向こうのカルデアのマスターも面白そうだから助けてあげようと思つてね。

ここにはこのアルトリアを置いてゆく事にするよ」

「ちよつと待つてくれ。

つまり、マーリンはこちらのカルデアに渡るために、この世界を経由するという事かい?」

「そのとおりさ。ダヴィンチちゃん。

この世界はあまりにも複雑で、かつ繊細だ。

それにも関わらず、こういう閉鎖空間でかつこちらが介入しやすいワードがそろって  
いた。

抑止力はある日不意に牙をむくから気を付けるに越したことはないからね」

こういう事をさらりと言えるから、このろくでなしはグランドキヤスターなのだろう。

彼の向かうカルデアに幸あれ。

胃薬を物資の中に入れておいてあげよう。

「で、だ。

お嬢さん。

貴方はこちらに残るつもりで？」

俺は一応無駄だと思いつつも聞いてみる。

案の定、帰ってきたのはこんなセリフだった。

「運命ですから。

望まれた事を望まれたように」

「失礼します。」

そろそろ作戦開始時刻ですので艦橋にお戻りください」

α 島攻略作戦の開始時間が近づき、美野原主席幕僚の声がスピーカに届く。俺たちは立ち上がって、食堂から出ようとして最後に声をかけた。

「とりあえず、この作戦の間はおとなしくしてくれ。」

まあ、敵潜水艦でなかった事はほっとしているよ」

艦橋まで歩いている間、ステンノが楽しそうに囁く。

「楽しいわ。」

マスター。

あの人、ここでもあなたを助けるつもりなのかしら」

ろくでなしでおせっかいで、ハッピーエンド至上主義者。

そんな彼が現れた事で、事態は悪くはないだろう。

艦橋に戻ると朝日が昇りつつあった。

この閉鎖空間、最後の一日がこうして幕を開けた。

# 入即出やる夫のバカンス その8

バンゲリング帝国空軍

α 島より離陸した敵機

F-14 1機

レベル12

F/A-18 1機

レベル12

米海軍航空隊

F-14 4機

レベル10×4 || 40

スーパースィルフちゃん

レベル12

メイヴちゃん

レベル56

## 戦力比

24 : 108 || 1 : 4

## 結果

1 バンゲリング帝国勝利 米空軍撃墜判定

2 戦力拮抗

3 米軍機及び戦闘妖精少女勝利 バンゲリング帝国機撃墜判定

4 同上

5 米軍機及び戦闘妖精少女勝利 バンゲリング帝国機全機撃墜

6 同上

7 同上

8 同上

9 同上

10 熱烈歓迎

3 米軍機及び戦闘妖精少女勝利 バンゲリング帝国機撃墜判定

撃墜数 2機

全機撃墜 制空権確保

バンゲリング帝国α島工場の選択

- 1 兵器生産
- 2 工場復旧
- 3 工場奪還 100以上の数値を出しているので自動失敗
- 1 兵器生産

ヘリのトラブルチェック

- 2 機に軽微なトラブル 使用可能だが次回以降墜落の危険性あり
- 2 機に深刻なトラブル 次回以降墜落判定

占領した工場よりF-14 2機生産

敵哨戒艇の数 工場の兵器製造で補正

8隻

浜風の排除数

1隻

叢雲の排除数

1隻

AH—16シーアパッチによる排除

3隻

「敵機全機撃墜！」

制空権は確保しました!!」

「敵高速艇接近！」

排除しきれません!!」

「数が多い！」

抜かれた!!」

敵も馬鹿ではないらしい。

工場の修理を諦めて兵器を生産し、哨戒艇でカミカゼ攻撃を仕掛けて来る。

今までうまく対処していたマシユ風はここにきて疲労が出たのか大半をとり逃し、俺が居る叢雲からは位置が悪く一隻しか沈められない。

結果、α島攻撃の準備についていたAH—16シーアパッチが排除に向かうが、それでも突破を許してしまうという大失態。

α 島攻撃は序盤から躓っていた。

哨戒艇の目標

- 1 空母『ロナルド・レーガン』
- 2 同上
- 3 同上
- 4 ヘリ空母『ジャンヌダルク』
- 5 同上
- 6 どないしよ
- 3・2 空母『レーガン』
- 6 どないしよ

「哨戒艇二隻の目標は空母レーガン！」

あと一隻が潜水艦ノーチラス号に向かっています。

ノーチラス号。急速潜航！」

「ノーチラス号に向かった哨戒艇はこっちで仕留めるわ！」

逃がしはしない!!」

叢雲が叫び、自動化された25mm三連装機銃が火を噴き、轟音と衝撃が叢雲の船体



を揺さぶる。

「被害報告！」

「各部異常なし！」

衝撃で軽症者が数人発生しています!!」

新島副長補佐が叫び、即座に報告が艦橋に届く。

近くでこれである。

直撃だとかなりやばい。

俺はマイクをとる。

「マーリン。」

ちよつと仕事を頼む」

「面倒だなあ……」

「乗船料だと思いたまえ。」

臨時でパスをつないでくれ」

「はいはい。」

ちなみに、何で彼女でなく私なんだい？」

令呪に力が宿り、マーリンとの臨時パスがつながるのが分る。

多分隣でキャストリアが居たうえでのマーリンの質問なのだろう。

俺は、令呪を切る前にその質問に答えてやることにした。

「まだ知り合った仲より、散々お世話になった貴方の方が酷使しやすくてね。

令呪をもって命じる！

マーリン！

空母レーガンに飛べ！！

その後幻術スキル発動！」

「お任せ。夢のように片付けよう！」

哨戒艇の爆発の威力

1 250キロ爆弾

2 同上

3 同上

4 500キロ爆弾

5 同上

6 どないしょ？

3・3 250キロ爆弾×2

空母の方から爆発音が二発轟くが、遠目で見る限りにおいては被害が無いように見える。

空母『ロナルド・レーガン』に安否を確認する。

「こちら叢雲の入即出やる夫海将補相当官。

そちらは大丈夫ですか？どうぞ」

「こちらはジミー・ハーディー中将だ。

衝撃で軽症者が出たが艦に異常はない。

あと、飛行甲板に不審者が居るが、あれは君の所の人間か？」

「艦を守った功労者です。あとで引き取りに行きますので」

あの格好で飛ばしたのだから、良くて監禁、悪くて営巢入りだろう。

最悪、令呪で戻せばいいかと割り切って、俺は本題に入る。

「それよりも上陸作戦ですが、遅延は確定ですね」

「ああ。

上陸支援をする予定だったシアパッチまで迎撃に使ったから、空母に戻して再整備をさせている。

上陸作戦は正午から行いたい」

「だったら、我々の艦隊が前に出ます。

空母は少し下がってもらいたい」

八面六臂の活躍をしている巡洋艦『バレイフオージ』だが、そのミサイルの消費が問

題なりつつあった。

今まで使ったミサイルの数は43発。

大雑把に搭載ミサイルの1/4を消費した計算になる。

あくまでここでの戦闘は巻き込まれたトラブルであり、本来の任務でないのでこれ以上のミサイル消費はというのが頭をもたげる頃合いだろう。

現代兵器は補給と整備の問題からは逃れられない宿命にある。

「感謝する。」

へりの方も消耗が激しい。

シーホークは現在2機を整備に回して8機とLCVP上陸用舟艇2隻で上陸作戦を行う予定だが、敵も死に物狂いでやってきている。

貴国の貢献を合衆国は忘れない」

ジミー・ハーディー中将が感謝の言葉と共に通信を切る。

なお、現在制圧下にあり航空支援を行っているβ島との連絡は、アーカム財団の『ロシナンテ』号におねがいしている。

あの船が無かったら、解放捕虜の収容や移送で更にへりが酷使されていただろう。

「かといって、時間は基本的に敵の味方な訳で……」

遠くの島から爆発音が轟く。

放棄したY島にしかけた時限爆弾が爆発したのだろう。

これで、α島捕虜を解放して、残った工場を全部破壊すれば、この結界は壊れるだろう。

「ダヴィンチちゃん。

ノーチラス号に通信はつなげるかい？」

「まっかせて！」

キャプテンの友好度 1で警戒100で信頼

15

「何?！」

声で分かる露骨な警戒の色。

プロフェッサーは先の襲撃前にノーチラス号に戻ったので、あの船にはもうここに居る必要はない。

かといって、帰るためには結界を壊さないといけないのだが。

「プロフェッサーくんに挨拶はしたが、入即出やる夫海将補相当官だ。

うちのろくでなしを乗せてくれて感謝する」

「色々言いたい事はあるけど、まあいいや。」

「こちらもめずらしいものを見せてもらったし」

「あのろくでなしはあとで問い詰めるとして、ここを出るまでいい。

協力してくれないか？」

説得判定 15以下で成功

結果 12

「……まあ、自力で脱出できるけど、貴方とは縁があつたかもしれない身だ。

協力させてもらうよ。

で、何をすればいい？」

「データを送る。」

「ここを攻撃してくれ」

「了解」

送ったデータの攻撃目標はα島の飛行場滑走路。

陽動作戦としては悪くないだろう。

しばらくして、海中からミサイルが数発発射されてα島の滑走路が離陸不能になる損害を受けた事を確認して、更なる陽動を加える。

「ジャンヌダルクは空母『ロナルド・レーガン』について警戒と上陸作戦の支援！

マシユ風は叢雲について来い！」

「はい！先輩！」

マシユ・キリエライト……じゃなかった、浜風はどこまでもお供します!!」

「で、何処を攻める訳？」

俺は、 $\alpha$ 島の港湾区画を指さす。

「港があるという事は、座礁はしないだろう。」

突っ込んで橋頭保を確保する」

バンゲリング帝国守備隊

1 歩兵中隊規模

2 同上

3 同上

4 同上+陣地構築済み

5 同上

6 歩兵大隊規模

7 同上+陣地構築済み

8 同上

9 同上+戦車小队

10 熱烈歓迎

結果 2 歩兵中隊規模

どうやら、敵も駆逐艦二隻が港に突っ込んでくるとは思っていなかったらしく、それほど警備は厳重ではないみたいだった。

陽動目的という形でジミー・ハーディー中将には許可をもらっている。  
遠慮なく暴れさせてもらおうでしょう。

「モーさん。」

令呪をもって命じる。

敵を蹴散らしてこい」

「待ってましたあ！

ヒヤッハー!!」

更にクーフリーンや、神獣ゲンブ、大天使イスラフィールを出して突っ込ませる。

「マスター！

お願いします。



私も出させてください!!」

いつの間に艦橋に来たのかしらないがキャストリアが俺に向かって出撃を志願する。たしかに、この状況で使わない理由もないな。

「危なくなったら、ちゃんと後退するように」

「はい！」

白兵戦、行きます！」

もちろん支援攻撃も忘れない。

「叢雲、浜風。」

主砲撃て！」

「邪魔よっ！」

「お相手しましょう。来なさい！」

バンゲリング帝国守備隊

歩兵中隊規模 目標200

モードレッド レベル90＋クー・フリーン レベル43＋神獣 ゲンブ レベル4

3＋大天使 イスラフィール レベル42＋キャストリア レベル90＝308

完全制圧

制圧ボーナス 1000で良いもの

95 クリティカル

「マスタ―！」

港湾地区は完全に制圧した。

攻撃を中止してくれ。

倉庫に色々使えそうなのがあるぞ!!」

あれ？

陽動のつもりが制圧成功した？

## 入即出やる夫のバカンス その9

制圧ボーナス

1 金塊

2 同上

3 同上

4 戦車

5 同上

6 同上

7 高速艇

8 同上

9 同上

10 熱烈歓迎

1 金塊

「モードレッドだ。」

倉庫の中に見たこともない量の金塊が積まれてやがる。

持って帰れたら一財産だな」

「なんですって!?!金塊!!」

あ。

染井芳乃が食いついた。

現状ではだからどうしたという物なんだが。

「とりあえずハイデッカーで陸戦隊を編成する。」

敵戦力をこつちにひきつけながら、本隊の收容所攻撃を待つか」

「で、金塊はどうするの?」

叢雲の意地悪そうな質問に、俺はさも当然という風に答えた。

「現代兵器を動かすには金が必要だね。」

遠慮なくもらってゆくさ」

バンゲリング帝国陸軍

1 小隊規模

2 小隊規模

3 中隊規模

4 中隊規模

5 大隊規模

6 大隊規模＋戦車

1 小隊規模

判定なしで勝利

金塊回収率

81%

延期していた收容所解放作戦の開始時、敵は小隊規模の戦力しか投入せず、編成した陸戦隊の主な仕事は金塊の回収となった。

おかげで、八割近い金塊を叢雲の艦内に積み込むことができた訳で。

作戦開始時刻になった事で、島に接近するヘリとLCVP上陸用舟艇がα島に近づく。

「こちら、ターニャ・デグレチャフ大佐。

現在β島は放棄し人員は『ロシナンテ』号にて、空母『ロナルド・レーガン』に向かっている。

また、製造したF-14の整備は以後空母『ロナルド・レーガン』で行い、4機のF-14は空母に着艦させている。以上だ」

ここに至ってほぼ勝利は間違いない訳で、あとは安全にそれぞれが元の世界に帰れるかというのが問題となる。

つまり、捕虜収容所にどれだけ捕虜が居るかという事だ。

当然のようにモードレッド・クーパーリン・キャストリアをこちらにも投入する。

捕虜収容所制圧状況 100で完璧

38+希望のカリスマ20%||45

解放捕虜668×45%||300

損害 20人

死亡 13人

現代戦において最後迄の抵抗というのは微弱である。

基本それまでで戦力を出し切る訳で、ラスボスが強力というパターンはおよそ存在しない。

その戦力をもつと前に出せよという事だ。

それは、この戦場でもそうだったらしく、20人の死傷者を出しながら終結し、30人も捕虜の解放につながった。

既にα島の2つの工場は叢雲と浜風の砲撃で破壊済であり、あとは占領下のβ島の工場をミサイルで破壊したら終了するだろう。

かくして、その終了に向けて最後の準備が占領下のα島の港において行われる。

この戦いで出た戦死者の回収と葬儀、さらに臨時で指揮下に組み込んだ俺たちへの感謝とつじつま合わせである。

これまで無線でしか声を聞いていないジミー・ハーデイ中將に誘われて、俺と叢雲とステンノとマシユは空母『ロナルド・レーガン』に足を運ぶ。

また、ラリー・マーカスン大佐、ノーマン・ライマン大佐、ステイブ・H・フォスター船長も招かれていた。

出迎えた米軍将兵が一齐に敬礼する。

それに俺たちも敬礼で返した。

ジミー・ハーデイ中將の印象 100で好印象+救出捕虜の1/10  
57+44=101 クリティカル

「入即出やる夫海將補相当官、ラリー・マーカスン大佐、ノーマン・ライマン大佐。  
ステイブ・H・フォスター船長。」

諸君らの協力と貢献に感謝する。

この事を米国は決して忘れない」

捕虜を空母『ロナルド・レーガン』に移し、使用していたヘリをそれぞれの船に戻し、金塊に目がくらんだ染井芳乃を御神苗優が引っ張ったりしているが、おおむね撤収作業は順調に進んでいる。

また、ダヴィンチちゃんと超鈴音が使えるようなものがないか漁っていたり。

バンゲリング帝国の技術 100でばっちり+『天賦の叡智EX』30

31+30=61

「いくつかの技術については解析が終了しています。

そのデータは同盟国として提供いたしましょう」

「感謝する」

ステンノが俺に手渡したファイルをそのままジミー・ハーディ中将に渡す。

こちらの共闘の経緯だったり、技術内容はこの異界についての調査レポートだったり、工場の自動化とかのレポートなので、米国の未来も少し良い方向に行くのではと思ったり。

こうして、時間軸の違う日米共闘は終了する。

「邪魔よっ!」



「相手にとつて、不足なしです！」

それぞれ別れた後、叢雲と浜風の主砲がβ島の工場を破壊する。

その破壊が確認できたと同時に、霧が俺たちの周囲を包み込む。

その晴れるまでに半日ほどかかった。

「これは……凄いな……」

どうやらちゃんと1994年に戻ってきたらしい。

場所も、目的地手前の海域あたりで、衛星からのネットワークもリンクしていた。

ただ、目の前には米海軍の大艦隊が広がっていた。

「あーあー。聞こえるかね？」

入即出少将。

こちらは、第50任務部隊ターニャ・デグレチャフ『中将』だ。

わたしにまったくおぼえないのだが

1984年のお礼がしたくてこうして待っていたという訳だ。

ジミー・ハーデイ『大将』も会いたがっていたが、太平洋艦隊司令官の椅子から離れ

る事ができなくてな。

後でヘリを迎えに寄こすから、色々と説明をしてくれると嬉しい」

見ると、デグ様が乗っているのだろう艦娘空母イントレピットに、さつきまで共闘し

ていた空母『ロナルド・レーガン』の姿も見える。

へりしか甲板になかった空母『ロナルド・レーガン』の甲板には、大量のF-14とF/A-18が並んでいる。

その空母を取り囲むように20隻以上の護衛艦が輪形陣を組んでおり、叢雲が海面を指さして手でVサインを見せる。

潜水艦も2隻と。

「良い事なんだろうなあ……」

戦力が増えるし、トライデントも無茶ができなくなる。

だが、加速度的に増えた政治的説明責任に俺はただ苦笑する事でこの場をごまかすことにしたのである。

## 入即出やる夫のバカンス その10

幽霊島の調査 1000でばっちり+『天賦の叡智EX』30+バンゲリング帝国の技術解析61

85+30+61=176 クリテイカル

「……これ、バンゲリング帝国の技術と同根ほいんっだよなあ。」

多分解析できるけど、集めたエネルギーが暴発しかかっているね」

調査の結果ダヴィンチちゃんの初手解説がこれである。

ガーディアンが居たのだが、サーヴァントって便利だね。

モーさんとクローリンが粗方叩き潰してましたが何か。

なお、この幽霊島の秘密を巡ってアーカムとトライデントの暗闘が本来はあったのだが、『何でか』両方をにらんで手を出させなかったデグ様によって不発に終わった。

まあ、この島で太平洋戦争時の米軍製原爆なんてものが見つかったら、そっちの回収が最優先になるのは当然な訳で。

「よし」。

まずは安全確保からだ。

この島、異界化させた『プリズマ・コース』にくつつけてしまおう」

異界の維持にもエネルギーが要る。

今は女神まどかと悪魔ほむらによって賄われているのだが、自前でそのあたりが賄えるのならばそれに越したことはない。

という訳で、空母イントレピッドに移動してのその後の処理についてアーカム・トライデント・米軍を交えた話し合いに移る。

トライデントの主張 100で強硬

1

アーカムの主張 100で強硬

5

やる夫の説明 100で言いくるめ

45

さすデグ

27

「こっちはそれで異存はないですよ」

「いいんじゃないか」

「……だそうだ」

あれ？

随分早く片付いたな？

拍子抜けする俺にデグ様が笑う。

「調査前にある程度根回しはしておいたのさ。」

私の根回し前に双方ともにやる気が無かったというのも大きいが」

デグ様のぶっちゃけに、ラリー・マーカスン大佐もぶっちゃける。

「こちらも妥協できるだけのものは頂きましたしね。」

バンゲリング帝国との戦闘データは貴重なものですし、そちらとも手は組んだままだ。

それ相応のものは期待しても構わないのでしょうか？」

それに合わせるようにステイーブ・H・フォスター船長も苦笑する。

「ここちからすれば、あの島についても何だかの処置はしたいし、ヤバイ以上はそっちの提案に賛同するしかないさ。」

それに、カリブ海で戦った仲で、そのままここでは敵味方に分かれるつてのはな」

昨日までの味方が今日は敵同士というのは感情で割り切れないものである。

ましてや、対立しているトライデントだけでなく俺たちまで敵に回る可能性を考えれば、こっちの穏便な解決手段に乗ったというのは悪い話ではないという所か。

話し合いの席で俺は無線機をONにした。

「じゃあ、それで片づけてしまうか。

ダヴィンチちゃん。

やってくれ」

「まっかせて!」

かくして、本来の目的である幽霊島はプリズマ・コースとくつつく事になった。で、本番の歴史改変の確認である。

駄女神のがんばり 100で頑張った

97 クリテイカル

デグ様の話を聞くと、駄女神様の頑張りで基本的な流れは変わっていないらしい。

とはいえ、デグ様が上司に恵まれた上に、中将に昇進して空母二隻を運用する偉い人になっているのだからプラスなのは間違いない。

「今回の出迎えに編成した部隊だからな。

この航海の後、この艦隊は大西洋に戻ってミレニアム相手に暴れる事になる」

メシアの連中が聖杯を北米に持ち去り、アンブレラとミレニアムのつながりが分かって排除が進む今、アーカムとトライデントの去就が注目される事になる。

言下でそれをラリー・マーカスン大佐とステイブ・H・フォスター船長に向けてデグ様は笑う。

「諸君らの上の賢明さは知っているつもりだが、間違った選択をしないようにと諸君からも釘を刺してもらおうと私としても嬉しい」

こういう所で顔芸を披露しながら釘を刺すのはデグ様だなあと感じずにはいられなかった。

「ああ。

入即出少将。

ちよつと残つてくれ」

そんなデグ様に呼ばれて俺はデグ様の執務室に。

そういえば、米軍ではデグ様のおかげで俺は少将扱いなんだよなあ。

デグ様の話の厄さ 100ですごく厄い

「ミレニアムについてだが、アンブレラ経由で排除を進めているが、多分間に合わないだろう」

「こういう時に最悪のケースを想定して話をするあたりさすがデグ様。」

「ジト目で俺が突っ込む。」

「理由をお聞きしても?」

「永遠の命を餌に悪魔と契約をする輩が多くてな。」

「私や貴官をみてなとお欲しいと思うのかね。まったく」

「ため息をつきながらデグ様は続きを話す。」

「ミレニアムが狙うのは英国であり大西洋な訳で。」

「基本俺はその流れに関与できない。」

「アンブレラは米国有数の製薬会社でワシントンに大規模なロビーをばらまいていた。」

「その一つ一つの精査を終える前にミレニアムが動く方が多分早い」

「で、それを私に伝えた上で何をお望みで?」

「貴官もある程度自由に動けるようになったみたいだし、色々と話ができると思ってたな。」

「少なくとも東京に核を撃つ馬鹿どもは、私とジミー・ハーディ大將が太平洋艦隊から」

「排除したはずだ」



交渉の前提条件をちゃんと処理して話を持ってくるからさすデグと呼ばれるのだ。

同時に、そういう便利屋を現場が手放したくないというのをデグ様が忘れていたあたしもさすデグなのだが。

「ミレニアムとアンブレラが何かした時に手を貸せと」

「その通りだ。」

ワシントンでのゲーム次第では、足を引っ張られるどころか真珠湾もかくやの奇襲を食らいかねん。

貴官とその幕僚のみを飛行機で運べば、三隻の船が大西洋にやってくるのだろうか？  
だったら、遠慮なく使わせてもらおうという訳だ」

壁にかけられた世界地図を眺める。

ミレニアムの襲撃を考えると戦力の集結地点は……

「ジブラルタル」

「ミレニアムの奴らの狙いは英国か。」

イタリヤのガエータ軍港はダメなのか？」

イタリヤのガエータ軍港には米国第六艦隊の母港であり、地中海と東大西洋を管轄していた。

現在はボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の激化に伴って、戦力が強化されつつあった基

地である。

「空母『ロナルド・レーガン』はそこでもいいでしょう。」

ですが、戦力を集中させるとボスニア・ヘルツェゴビナ紛争に使われます。

それが一つ」

「なるほど。」

その他の理由は?」

「イタリアという土地そのものです。」

具体的にはローマ」

「なるほど。了解した」

『ヘルシング』ではイスカリオテ機関が十字軍を編成して英国に攻め込んだ。

『とある』世界だとクーデターの上に十字教がやっぱり英国に侵攻している。

その本拠であるローマのあるイタリアに英国支援の戦力を置いておくことは、妨害される可能性を排除できない。

「英国にはNATOの縁でコネがある。

ジブラルタル港に基地を用意しておこう。

で、ミレニアムがいつ動くと貴官は考えているのかな?」

話は終わりとばかりのデグ様の質問に俺は苦笑しながらドアを開けた。

「それぞ神様にでも聞いてくださいよ」

数日後。

横須賀に帰港した日米合同艦隊の演習報告という表向きの理由を携えて、俺は室戸次官にバカンスの報告をする。

室戸次官はただ黙って一言。

「なかなか充実したバカンスじゃないか」

「ええ。」

たまにはこういうのも悪くはないですな」

## まだまだ続く猫の手の確保 その1

政権交代と省庁再編が行われたこの世界の94年が始まっておよそ三か月ばかり。バカンスを楽しんでいた俺だが、仕事が本格的に溜まってきたので処理を始める事にする。

「この書類は……この折衝は……予算について……」

ありがとう。諸葛亮。サンキュー諸葛亮。

冬木からやってきた彼を宮内省特別参与として霞が関に送り込んだ結果、見事に活躍する彼の姿が。

さすが一国の宰相をやった男。

行政組織においてかがやくことこの上ない。

その有能さを室戸次官が放置する訳もなく、現政権はかつての野党大連立という事で国会が既に混乱しているので、連立政権の党務側を支えているキングメーカー澤田議員も接触しているあたり笑うしかない。

オカルト事件への対処

「現在の日本国内のオカルトが絡む事件の対処については、おおむね順調に進んでいます。」

理由として、情報の集約に伴う戦力の適切な投入があり、組織としてはこの状況を維持できるかについては……」

宮内省の会議の席で諸葛亮が淡々と報告する。

宮内省の実務部隊の有用性が実証されている事もあって、室戸文明次官も山本信繁神祇院総裁もこっちに出席していた荒巻大輔内務省公共安全庁長官（出世したらしい）も淡々と聞きながらも安堵の空気を隠してはいない。

「学園都市で発生した聖杯戦争及び一連の事件などの対処が難しい事件については今後も入即出統括審議官の出馬をご足労願いますが、現在はその予兆をとらえる事で火種が燃え上がる前に対処する予防に力を注ぐ体制を……」

メシア教の暗躍 100で色々やっている

87

ガイア教の暗躍 100で色々やっている

38

ミレニアムの介入 100で色々やっている

1

「各勢力の動向ですが、メシア教が勢力を拡大しています。

現在のオカルト事件への対処の理由の一つにメシア教徒の協力があり、それがガイア勢力への牽制となっているという裏事情があります」

麻帆良学園で聞いた未来のダヴィンチちゃんの言葉を思い出す。

結局のところ、この世界で大洪水が発生したのは、クーデターを潰すのに奔走してメシア側の勢力を削れなかった事があげられる。

そして、そのメシアの勢力が削れない理由が既に現れていた。

「もつとも、メシア教が協力関係にあるのは裏で色々とやっている事もあるのですがね。少なくとも、学園都市の聖杯戦争では米国を動かして内政干渉に近い動きをしています。

彼らが善意でこちらに協力している訳ではない事には留意が必要です」

なまじかつての政権が対魔忍世界だったこともあって、私利私欲繋がりでガイア教との関係が深かったというもあり、現政権のメシア教の影響力はかなり強い。

学園都市の聖杯戦争で最後米国がらみの介入に折れたのは、このメシアの影響力もあつたのだろう。

諸葛亮の報告の後で、参加していた荒巻長官が立ち上がって報告する。

「ここで気を付けてほしいのは、メシア教を一つで見えてはいけないという点だ。過激派も居れば穏健派も居る。

暗躍しているメシア教過激派を叩きつつ現政権へのダメージを最小にすることが望ましい」

そういう前置きと共に、荒巻長官は会議参加者に資料を手渡す。

「メシア教テンプルナイト。

現在急速に戦力を整えている勢力の一つです」

テンプルナイトの規模

1 小隊規模

2 同上

3 中隊規模

4 同上

5 大隊規模

6 同上

7 連隊規模

8 同上

9 旅団規模

10 どないしよ？

3 中隊規模

「表立って武装については我々の取り締まりを避けるためか、表立った武装は見えませんが、組織内部に武器が隠されているとの情報があります。」

それよりも、中隊規模の彼らは全員『天使』と呼ばれる悪魔を使役しており、後方支援等の協力によって我々を懐柔しようという動きが見えます」

これが『天使 エンジェル』ならばレベルは10台前半なので、必然的にテンプルナイトのレベルがなんとなく見えて来る。

もちろん、それ以上の高能力者が居るだろうから、気は抜けないがこのレベルは現在のオカルト事件の対処に使っている対魔忍と平均レベルが同じぐらいと言えばテンプルナイトの戦力が侮れない事が分るだろう。

「米国に持ち去られた聖杯を用いた聖杯戦争の可能性とそれに介入するオプションは



？」

米国内政治情勢 100で混乱

82

「おすすめはしませんな。」

現在、米国内では巨大企業アンブレラ社のミレニウム関与に伴う捜査が大詰めに入っております。

アンブレラ社が倒産まではいかないにせよ、分割と他社による買収は避けられず、アーカムやトライデントが救済を名目に激しく鞆当てをしています。

米国内でのミレニウムパージが終わるまでは、米政府との協力もできないというのがこちらの結論です」

(なるほどな。)

米国内部でのミレニウムとアンブレラパージに先手を打って施設や人員の補充先にこの国を選んだな……)

ミレニウムと大天使ミカエルのつながりを知っている俺は、黙ってそう結論付けた。

そうなる、メシアの拠点がどこかという事になるのだが、現在のメシア教は既に拠点を構築していた。

品川大聖堂。

こりや、大天使ハニエルが現界しているっぽいな……

## まだまだ続く猫の手の確保 その2

「君は何を着ても似合うな」

「人の見た目の判断というのは存外馬鹿にできないものでしてね。

ましては人を相手にするのが軍師という仕事です。

この時代で言うならば、参謀というのでしたっけ？」

孔明と一緒に来た軍師が陳宮である。

迷うことなく霞が関に送り込んだ孔明と違って、陳宮は孔明を連れてきた事を奇貨にして俺たちに自らを売り込みに来た。

というか、偽造国籍を使って警察のキャリア官僚になっているあたり凄いなというかなんというか。

スーツ姿はまさに鬼畜眼鏡である。

「司令官。

で、この人は使えるの？」

叢雲は懐疑の視線を陳宮に向け、

「あらあら。

マスターは男にもモテるのかしら？」

ステンノはいつもの笑みで陳宮を眺め、

「私は会った事はないのですが、こうして先輩を助けてくれるのですから悪い人ではないと思います」

マシユはよくわかっていない顔で陳宮の履歴書を確認する。

「能力把握の為に出した、陸自の指揮幕僚過程試験98点。

海自の指揮幕僚過程試験81点。

空自については自ら試験辞退。

たしかに軍師としての才能はあるみたいですけど」

「警察ではキャリア警部として冬木市に出向。

その仕事は真面目かつ優秀で、本庁帰還後に警視に昇進。

人事評価については何も文句はありませんね」

甲賀隴と甲河隴の疑似双子姉妹が陳宮の成績を確認する。

さらりとマイク越しにこの会話をダヴィンチちゃんにも聞かせていたり。

「で、俺に売り込むとして、何を売り込むんだ？」

俺の質問に陳宮はニヤリと笑う。

この手の会話戦は軍師の独壇場である。

「それは色々ありますが、一番役に立つと思われるのは『効率良い味方の殺し方』ですな」

最初の一言で主導権を持っていかれる。

この鬼畜眼鏡は一回も出会っていないのだが、まるで見てきたかのように俺の事を語る。

「軍隊というのは詰まる所『効率よく敵を殺す』他に『効率よく味方を殺す』事が良い将であると言えます。

戦争には相手が居る以上、全ての策が成功し全ての城が守れるという事は絶対にありません。

マスターは子房殿を目指しているみたいですが、私が見た所戦場に出られている。

いつか全てを守ろうとして何進大將軍のように討たれましょうぞ」

ぐうの音も出ない正論に黙り込む一同。

とはいえ、三国志時代の軍師による評価として何進というのは褒められているのか貶されているのか……

「折角だ。

その設定を使わせてもらおう。

陳宮。

俺を宮殿に行かせないようにするならば、どう献策する?」

「そうですね。」

詰まる所、あの件は宦官を殺すか大將軍が殺されるかの二択でした。

だったら、その下の曹操殿と袁紹殿をたきつけて、先に宦官たちを殺しますな。

勝手に動いた責はこの陳宮が背負いますとも」

なるほど。

曹操と袁紹は何進を説得しようとして失敗した。

軍師は君主のその人となり知らねばうまく働かないか。

「なんとなく見えてきた。」

曹操の元を離れたのは、曹操が全てを守ろうとしてしかもそれができてしまったから

だろう?」

俺は陳宮との会話の核心に迫る。

どうして陳宮は曹操でなく呂布を選んだのか?

俺の言葉に陳宮はニヤリと笑った。

「晴れた日に傘をさしても、道行く人は奇人変人と見るしかないでしょう?」

あの人材マニアの曹操の事だ。

その将を必要な犠牲として斬り捨てる策を取りたくなかったし、それを前提として戦

略の完遂を求める陳宮とではそりや相性が悪かっただろう。

「とはいえ、俺も曹操と似たようなものだろうに……何でお前は俺を曹操ではなく何進に例えたんだ？」

「才能うんぬんではないだろう？」

俺がこの会話の核心に迫る。

それは、陳宮の策に俺がハマる合図でもあった。

「何進殿は何皇后が全てでした。」

マスターも同じく四人の何皇后がいらっしやる。

逆に言えば、この四人とそれ以外をちゃんと秤にかけて、その四人をとるように常に心掛けている。

ほら。

私が仕えるにふさわしいお方だ」

こいつは、自分が切り捨てられる事も前提に作戦を立てているという訳だ。納得しようとした俺にマシユが声をかける。

「陳宮さん。」

質問なのですが、この宝具の『掎角一陣』というのは……」

「それは……」

その効果と性能にドン引きする女たち。

たまらず俺は苦笑する。

「さすが軍師だ。

『切り捨てられる』ことと『生き残る』ことは別か」

「そうでないと、軍師なんてやってられないでしょうに」

俺は笑って採用確定とばかりに両手をあげた。

現状のオカルト絡みの対処はうまく行っているが、現状は全てを守ろうとしての状況に近いとこの会話で思い知ったからだ。

いずれ、メシアとガイアの衝突や学園都市のあれこれやミレニアムがらみで取捨選択が迫られるだろう。

その時に陳宮は軍師としてきっちりと『必要な犠牲』を提示してくれるに違いない。「わかった。

とりあえず警察からの出向という事でこっちの組織に入ってくれ。

仕事は、与えなくても見つけるだろう？」

「仰せのままに」

面接終了後、俺は最後に陳宮に尋ねる。

さっきまでの会話と、陳宮の最後が微妙にずれていたからだ。



「ついでだから教えてくれ。

曹操の事だ。

徐州の戦の後でも助かろうと思えば助かっただろうに。

どうして自ら斬られたんだ？」

「……簡単な話です。マスター。

あの時のあの人の陣に私の居場所はなかった。

知識だけの語りになりますが、私は徐庶殿みたいになるのはいやだったのですよ」

ああ。

あの綺羅星の陣営の中に彼の居場所は確かになさそうだ。

その後、陳宮は宮内省の管理官として退魔組織の指揮運営に注力し、効率の良いオカルト事件の処理に邁進する事になる。

なお、孔明とはなんだかんだでうまくやっているらしい。

## まだまだ続く猫の手の確保 その3

「私はカルデアの方に行くよ」

あつさりというグランドろくでなし……じゃなかったマーリンだが、現在のカルデアはこんな感じである。

- 1 オルレアンクリア
- 2 ローマ攻略中
- 3 ローマ大詰め
- 4 ローマ攻略
- 5 オケアノス攻略中
- 6 どないしよ
- 6 どないしよ
- 1 クリテイカル
- 2 ファンプル
- 2 ファンプル

「ちようど良かったわ！」

助けてほしいの!!」

という訳で、マーリンを連れて都内セーフハウスに滞在しているオルガマリー・アニムスフィアに連絡をとったら、第一報がこれである。

「何があつたんです?」

「見た方が早いわよ……」

という訳で、カルデアからの回線を回してもらってみるとその理由が分かった。冬木はクリアしたのだが、その次がオルレアンでなかったのだ。

「……湖かな?」

「建物から見て、これ日本のどこか?」

「あらあら。」

「こんな所で何をしているのかしら?」

「先輩!先輩が居ます!!」

二人!?!」

画像を見て俺が眩き、叢雲が建物を見てあたりをつけて、ステンノが楽しそうに笑い、マシユが特異点先の俺を見て驚く。

幾人かのサーヴァントらしきものが水着になっていた。

あ。

これは水着イベに巻き込まれたみたいだが、俺はこのイベントを知らない。

「現場の混乱を考えて通信は最低限に押さえさせているけど、向こうで傍受した通信には明らかに私たちの知らないカルデアと通信していたそうよ」

多分、世界線が混乱している。

そうなっただろう原因らしきものに俺は説明を求める。

「説明、してくれるよな？」

こういう事になりそうな理由を知っていそうなマーリンに話を振る。

何しろ、わざわざ接触してきたこいつの事だ。

こうなる理由を知っていいそうではある。

「まあ、隠してもしょうがない事だからね。話すよ。

簡単に言うのだね、この世界線は最後諦めちゃったじゃないか。

それは おもしろくないだろう？」

意味が分からないオルガマリー・アナムスフィアに対して、分かっているだけに絶句する俺。

この世界のカルデアがバビロニアで諦めたのを知っているのは俺たちだけだ。

そして、そのバビロニアに出て来るのがこのマーリンである。

「勘違いしないでほしい。

私はね、彼女の努力と旅路を否定するつもりはないのだよ。

ただ、あの時は盤外にあまりにも理不尽なタイムリミットがあった。

運を天に任せるにしても、せめて五分五分にならないと不公平だろう？」

「大体、博打つてのは胴元が勝つようにシステムが組まれているだろうに……」

「だから、それを是正するためにイカサマをするという訳だよ」

とてもいい笑顔でマーリンが笑う。

このろくでなし。まるでカジノでも大暴れしたかのようなはっちゃけである。

「現在と未来は基本繋がっている。

過去と現在も同じく繋がっている。

だから、時の流れという見方だと、過去―現在―未来は一本の線となる訳だ。

カルデアが対処しようとしている特異点とか異聞帯とかは、その流れが止まるととり

あえず定義しておこうか。

で、だ。

未来に自分たちが観測された場合、現在の私たちはその未来の影響を受けると思わないかい？」

何を言っているこいつと思つて首を捻ったら、我慢できなくなったらしく画像が浮か

んでカルデア側のダヴィンチちゃんがあきれ顔で突っ込んでくる。

「つまり、夏休み初日に最後まで日記を書いて、当日までその日記通りに行動させようという訳だね？」

呆れたものだ……」

とはいえ、あながち間違いでしかないのが困る。

マーリンが今やっているのは、F G O 第二部水着イベントをクリアさせる事で、この時間軸で『カルデアがF G O 二部まで行く』という事実を未来に刻もうとしているという事だ。

未来が確定した結果、現在がそれに引つ張られないとタイムパラドックスが発生する訳で。

グランドキャスターにふさわしい大魔術と言えなくもない。

「で、日記通りに彼女たちを動かすためにも現場に出ないという訳でね。わざわざこうして出向いたという訳さ。

この件も夢のように片づけよう」

「私たちを手伝ってくれるのですか!？」

胡散臭い笑顔でマーリンが手を差し出すと、彼の本質を知らないオルガマリー・アニムスフィアは手をとった上に涙まで流している。

真実を言つて水をさす必要もない。

厄介払いともいうのだが。

「という訳だ。」

あとはこの花の魔術師にお任せするでしょう。

……ん？

丁度戦っているな」

モニターではちょうど藤丸立夏がマシユと沖田総司とアーチャーエミヤと茨木童子とキャスタークーフリーンと謎の槍水着サーヴァントを連れて戦闘をしていた。

「ん？」

彼女は？」

「ああ。」

貴方が知らないのも無理はないわ。

彼女は芥ヒナコ。

Aチームの魔術師で優秀……」

「イマジナリー 項羽様 展開！」

「……」

「……」

何か訳の分からない言葉を言って、ポールダンスで敵を倒すAチームの魔術師の先輩。

俺は何も言わず説明をオルガマリー・アニムスフィアと画面のダヴィンチちゃんに求め、二人は視線をそらせる事で、回答とした。

なお、ひとりグランドろくでなしは大爆笑していた。



## まだまだ続く猫の手の確保 その4

「色々とお世話になりました」

「構わないさ。」

「ここで得た技術をこの国の為に使ってくれ」

時間移動が可能になった事で、流れてきた漂流者の帰還ができる事になった。

具体的に言うと、『ジパング』の草加少佐、『戦国自衛隊』の演習参加部隊、そして『ジパング』繋がりで来た海上護衛艦『みらい』の乗員一同である。

で、草加少佐は艦娘叢雲を入手しており、『みらい』の連中は核ミサイルに対抗できるイージス艦であるから帰す訳にもいかず、立場が浮いていた彼らを帰すというある種の実験を行うことになったのである。

「実験？」

今回の計画にがつつりかかわっているのが、木林である。

彼らの帰還実験に対して、タイムパラドックスからの危険性に真っ先に気づいたのが彼だったりする。

横須賀港では、その実験に向けて色々準備が行われていた。

「あまり感心はできませんな。

時間というのは元々繊細なものだ。

ましてや、この世界はシュレインガーの猫の遊び場みたいになっていないですか。

現状のおおむねうまくいつている世界線を変更させてまで、これを行うには少しリスクが高いと思いますが？」

「まあな。

とはいえ、家族や思い人と離れてある種の異世界で暮らせと言われても『はいそうですか』とならんだろう？」

木林には言えないが、この世界線このままだと大洪水が発生するのだ。

そして、その発生の元凶であるメシア勢力が現政権にかなり食い込んでいて排除するのが難しいというのが裏事情としてある。

若干、俺たちの立場を下げてでも、メシアを牽制する必要があった。

「で、具体的には何をどうするので？」

「伊庭義明三尉に色々肩入れするのさ。

具体的にはこれ」

という訳で、バンゲリング帝国から頂いてきた黄金を見せる。

金と時代の方向性を間違えなければ成功する可能性は高いだろう。

そして、成功者となった伊庭三尉を使って、色々な諸問題を解決できればなあという訳だ。

木林が不思議そうに首を捻った。

「だったら、大戦中の草加少佐を戻した方が良かったのでは？」

「あそこまで戻すと、こっちの把握すらできなくなるからな。」

戦争が終わって、一定の方向性が見えているからこそその実験だよ。

ここならば、立場が悪くなってもどうとでも直せるからな」

もう一つからくりがあつて、この帰還実験は俺たちが送る事で観測者になる。

つまり、レイシフトを行うマシユ風に乗るジャンヌダルクと叢雲に色々詰め込んでという事が可能なのだ。

状況変化の大体の対処についてはこれで可能なのは内緒だ。

それと、プリズマ・コースは時間から切り離された特異点なのは確認できているので、あそこの連中とは繋がれるというのも強みである。

という訳で、連れてゆく人材は以下のとおりである。

叢雲・ステノ・マシユ風・ジャンヌダルク

鯖

モードレット・ドレイク・ダヴィンチちゃん・クー・フリーリン  
仲魔

妖精 ハイピクシー 1v10

妖精 ジャックフロスト 1v15

妖精 チルノ 1v32

神獣 ゲンブ 1v43

大天使 イスラフィール 1v42

女神 スカアハ 1v36

天津神 菊理姫 1v85

### COMP外悪魔

鬼女 文車妖妃 1v12

天津神 アマテラス 1v173

### 戦闘妖精少女

FFR|31MR スーパーシルフ “雪風” ちゃん

FFR|41 メイヴ “雪風” ちゃん

FFR|31シルフィードちゃん

FA|1ファーンちゃん

FA-2 ファーンIIちゃん

オイランロイド

80人

クローン対魔忍

20人

ハイデツカークローン

400体

マシユ・茶々丸

100人

甲賀隴・超鈴音

雅羅派詩舞二佐

指揮下海自隊員 2000人 (女神特典)

持つてゆくものだけでも結構な数である。

海自側はシーマ二佐以下を目付としてつけるが、こっちは彼女とその指揮下が女神特典なのは知っているので連れて行く訳で。

で、ここでアマテラスおねーちゃんを置いていくと何を言われるか分からなかったの

で、必然的に連れてゆく事にした。

タイムパラドックスの影響

89

女神さまの頑張り

49

差分

40

1 クリテイカル

2 ファンブル

1 クリテイカル

何が変わった？

1 メシア勢力弱体化

2 同上

3 同上

4 同上

5 護国組織大幅強化

6 同上

7 同上

8 アマテラスおねーちゃん卑弥呼化

9 同上

10 熱烈歓迎

「さてと。」

送り返して、横須賀に帰ってきた訳だが」

「あ。」

「今なら、弟君の言う事全部聞けるかも？」

「言い返そうとした俺が固まる。」

「ついでに言うとうと、叢雲もマシユも固まる。」

「ステンノは微笑んでいた。さすが女神様。」

「えーと。どちらさままで？」

「見て分らないの？」

「アマテラスだよ。ア・マ・テ・ラ・ス。」

あっ!?

なんか姿変わってる!？」

アナライズしてみると、天津神アマテラスと卑弥呼の良い所とりのスーパーおねーちゃんになり果てていた。

俺たちは、見なかったことにした。



## まだまだ続く猫の手の確保 その5

そろそろ組織の育成を考えて、スカサハ師匠を呼ぶことにする。  
もちろん、クーフリーンは懸念の声をあげる。

「大丈夫か？」

前も失敗しただろう？」

「言うな。」

言霊となつてまた失敗したらどうする？」

前回、スカサハ師匠を呼ぼうとして、ダヌ様を呼ぶという大トラブルを引き起こして  
えらい事になったのである。

という事で、万一を考えてダヌ様も連れての召喚である。

前回と同じくスカアハを購入して聖杯を混ぜ混ぜして……

「あっ」

おい。前回は聞いたぞ。

ヴィクトルよ。

最大限の警戒を皆がする中、こんな言葉と共にカツカツとヒールの音が。

「というわけで、新たな装いだ。

これは……そう、バニーガールというものだな。

前々より興味はあつたが、なるほど……。

実に動きやすいな、これは」

なんだこれ は？

見なかつたことにしたかつたが、能力は優秀なので麻帆良学園に送り込むことにした。

あそこならば問題ないだろう。バニーぐらいは。

なお、「ちゃんとした服を着てください！」と麻帆良学園風紀委員からおしかりを受けた結果、マント露出痴女とおっぱいタイツ師匠のどちらがいいという斜め上の返答が返された結果、お目付け役の入江省三から正式に抗議が届いたことを報告しておこう。

「助けて！」

また変な特異点に捕まっちゃって……」

1 ローマ攻略中

2 ローマ攻略後

3 オケアノス攻略中

4 オケアノス攻略後

5 ロンドン攻略中

6 どないしょ？

4 オケアノス攻略後

グランドろくでなしことマーリンが加入したカルデアはその攻略の速度を進めたらしく、オケアノスまで突破したらしい。

このあたり、時間軸がずれているのだなというのが分ったが、そんなカルデアがみようちきりんな特異点に捕まったそうさ。

で、オルガマリー・アニメスファイアから送られた画面を見ると、見慣れたというか見なくなかったSAN値直葬の建造物が。が。

「なにあれ？」

呆然としている叢雲に俺とステンノとマシユは頭を抱えながらハモった。

「「チエイテピラミッド姫路城」」

見たくなかったというか、トラウマになっているというか。

メンタルをリセットして、ぐだ子を探すと……

「なんか、サーヴァント増えてね？」

「それも相談したかったのよ。」

いつの間にか増えていて……大丈夫なの？」

「サーヴァントについては大丈夫でしょうよ。」

彼女は、そういう意味でも強い」

というか、もつと増えないとこの先困るのだ。

という訳で、頑張れ……ん？

「何だかえらく日本鯖が多いな？」

伊吹童子まで居るのか。

たしか、茨木童子と酒吞童子も居たな。

最初に呼んだのが沖田さんだった……目の錯覚かな？

沖田さんも二人いるぞ???

「彼女、魔人さんって名乗っているんだけど、沖田総司なのよね」

メガテン世界で魔人は凄くまずいのだが。

とはいえ、言つてオルガマリィ・アニメスファイアの胃を痛める必要もないだろう。

あ。誠の旗が立った。

「俺が新選組だあああ!!!」

土方歳三だけでなく斎藤一も居るのかよ。

というか、あそこで暴れているの、天狗のような気がするが……

「あの人、鬼一法眼さんと言って、牛若丸の師匠なんだって。

この特異点の攻略に協力してもらっているんだけど……」

すつとデビルアナライズを向けた。

こんな文字が出てきた。

『幻魔 クラマテング レベル80』

「大丈夫ですよ。

きつと」

俺は見なかったことにした。

けど、相手の方が一枚上手だった。

「ほう。

こちらは中々偉くなっておるではないか。

弟子よ」

どこから湧いてきたというか、できるよなあ。このぐらい。この人なら。

画面を見てみると、画面の中でも鬼一法眼がこちらのカメラに手を振っていた。

「向こうに全力を注いでくださいよ。師匠」

その呼び名は自然と出た。

向こうとある意味同存在だからこそ、こういう場所でデータのフィードバックが発生

するのだ。

で、それにこの師匠は気づいたと。

「弟子を取ると言った以上、一人も二人も同じだ。

ましてや、世界は違うが同存在ならば、君も僕の弟子だ。

という訳で、コンゴトモヨロシク」

これも麻帆良学園に投げよう。うん。

心の中でそう決意したのだった。

なお、麻帆良学園においての評判は初等部を中心に偉く良かったらしい。

帰り道、ランダムエンカウントで悪魔に出くわす。

俺ぐらいの厄持ちになると、悪魔の方が近寄ってこないのです、寄ってくるのは特級の

厄ではない訳で。

鬼一法眼が楽しそうに笑う。

「ここは弟子の手前、僕のかっこよい所を見せておこうか……」

「待て待て。」

「わえは争うつもりはない」

『わえ』……………だど……………?」

嫌な予感がびんびんするのも関わらず、目の前の悪魔は楽しそうに自己紹介をす

る。

「わえはヴリトラじゃ。」

まったく……いや、わかつてはおる。

貴様はただ、信じておるだけなのじやろうな。

何をか、誰をかは定かではないが。

確かなのは、その信が潰えたとき、人は魔に喰らい尽くされるといふことじや。

後悔せぬように、せいぜい必死に足掻いてみるのじやな。き、ひ、ひ、ひ、ひ！」

呆然とする一同を尻目に、それが分るステンノが翻訳してくれた。

「つまり、貴方の所に特大の厄があるから、特等席で見物させてねって事」

「言うなよ。」

「自覚しているんだから……」

俺が天を見上げて黄昏るが、目の前のウリドラは帰る気配がなかったというか、やっぱりついてきた。

その厄の意味は霞が関のオフィスにて判明する。

頼りになるスーツ姿の孔明先生と陳宮先生が暗い顔で報告してくれる。

その報告後俺も同じ顔になったのは言うまでもない。

「メシア教徒の過激派が日本の新興宗教の施設を襲撃。」

死傷者を出したのだが、その新興宗教で崇められていた少女の行方が分からない」  
「現在のメシア教の過激派の考えを推測するに、その少女が本物で彼女を聖女に仕立て上げるのではというのが我々の結論だ」

その連れ去られた少女のファイルがテーブルに置かれる。  
名前の欄に殺生院キアラと書かれていた。



## 猫の手を押し付けられた麻帆良学園の一日

麻帆良学園都市の朝は早い。

夜に侵入しようとする侵入者の対処が終わるのが、一日の始まりと言っていていいだろう。

朝5時。

それがこの街の朝の始まりである。

「にゃー！」

お仕事終わったあああ!!!」

背伸びをするかつここと魔神ヴィゼータ。

侵入者側なのだが、やる夫と取引したのが運の尽き。

二重スパイとして働けと警備員の真似事をする羽目に陥っている。

「中にいれば情報は取り放題だろう？」

どうせ困るのは麻帆良学園の妖怪じじいだ」

というのが彼女の身分保障をしたやる夫の言い分である。

もちろん、反対意見は出たが今度は入江省三監察官が中からつく。

「そもそも、学園の全体警備の要は復学したエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんが担っているのでしょうか？」

学園の一生徒にそのような重大任務を任せるだけの理由をお教えいただきたい」

かくして、ここでも敗北した麻帆良学園都市側は警備についての見直しに着手する。

テロ事件を名目に駐屯し続ける陸上自衛隊の退魔部隊指揮官である後藤一等陸佐は、治安維持警備を名目に、麻帆良学園都市の武装解除を進めていた。

「お疲れ様。嬢ちゃん

とりあえず少し寝てから学校に行くことだな」

「嬢ちゃん言うな！

あたしはこれでもあなたより年上なんだからあ!!!」

「そういうことを言っている間は、まだまだ嬢ちゃんだよ」

ヴィゼータをからかうのは、田中鍵ことシルバークラス。

なお、付き合いは某水着剣豪がまたやってきて暴れた際に、ともに気絶した仲という関係である。

「あれが一番の問題じゃないの？」

とは、ぶっ飛ばされたヴィゼータの文句なのだが、その文句の行き先であるやる夫は視線をそらせて沈黙する事で答えとした。

ときおり現れるあの水着剣豪なる対魔忍もどきにぶっ飛ばされた連中は数しれず。そのくせ人死には出していないのだからたちが悪い。

「しっかし、この広い街の警備をあのムチムチお嬢様一人に任せていたって言うのがこの街の歪みよね」

「それでこの街を守っていたというのが凄みだよな」

復学したムチムチJK詐欺ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが警備から外れた結果、警備体制の強化はマンパワー、つまり大幅な増員によってもたらされた。

陸上自衛隊の対魔部隊にこの地に移った対魔忍、さらに影響力確保のために駐屯しているアリアドネー魔法騎士団にいままでの警備をしていた麻帆良学園教師陣。

魔法生徒も基本的には参加させない方向だが、参加させる場合は大人の補佐という形にしている。

今回のヴィゼータとシルバーカラスはそんな事情でできたコンビである。

「で、だ。」

どうでもいい話だが、あれお前のところの組織に伝えるのか？」

「もう伝えたわよ。」

で、頭抱えている。

どこの世界に『影の城をくつつけたバニーと天狗がやってくる』というのよ!？」

天狗はまだいい。

この国の妖怪というカテゴリーだからだ。

なお鞍馬天狗で鬼一法眼なのは見ないことになっている。

問題はバニーだった。

麻帆良学園都市の霊脈とやる夫が管理しているプリズマ・ゴーズ異界を繋げるために、己の影の城を持ってきたのである。

結果、枯れようとしていた世界樹の魔力供給が異界経由で行われてしまい、世界樹の管理権限があゝの異界で匿われていたダヌ様に移るといふ本末転倒ぶりが。

この顛末に日本側もメガロメセンブリア元老院側も怒るに怒れなかった。

だってダヌ様だし。

なお、唯一怒る資格を持つアマテラス様は世界樹の管理権限移動がある種の異界取り込みであり、地脈にたいする影響が軽微と分かると一言。

「まあ、いいか」

多分ダヌ様のシチューに買取されたのではないと思う。

ついでにいうと、ごはんにシチューをかけて鍋が空になるまで食べ尽くしたなんてことは秘密である。

プリズマ・ゴーズ内では、対悪魔対策兵器の開発と実験が進められており、それがこ

の国の悪魔大量発生を防いでいる原因の一つとなっている。

更に、量産され続けているハイデツカーにオイランロイドにクローン対魔忍の育成にうってつけの人材として鬼一法眼とスカサハがやってきた訳で。

話がそれた。

「さあ。時間だ。」

「行った行った」

「いつかけちよんけちよんにやっつけてやるんだからあ！

まったねー」

ヴィゼータが去るとシルバーカーラスはタバコを口に啜える。

同棲しているノナコが嫌がるので、最近は啜えただけにしている。

「火、貸しましょうか？」

「結構ですよ。高畑先生」

先生の場合、交代後も生徒の通学まで見る必要があるので負担がすごい。

バニーだろうと天狗だろうと先生というか教師が増えることは大歓迎なのだった。

なお、鬼一法眼先生は初等部の人気教師に成り上がり、スカサハ先生はその容赦ない指導で対魔忍たちを扱き上げていた。

「まだ見つからないようですよ。彼」

「そうになると、麻帆良学園都市周辺に潜んでいる可能性が高いな。

探るならば、色々と上に話をせねばならぬ」

二人の会話は途切れる。

朝の通学時間が始まり、その話題にしていた生徒から挨拶されたからだ。

「おはよう。センセ。」

夜ふかしはだめよ」

「おはようございます。高畑先生。田中先生」

麻帆良学園都市周辺で衛宮切嗣を見かけたという情報が入ってから、入即出やる夫はできる限り搜索の網をかけたのだがまだ見つかっていなかった。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

1

宇宙世紀0087年。

月方面艦隊艦隊司令長官兼フォン・ブラウン駐留艦隊。艦隊司令官というのが今回の役職である。

「ニューソクデ大将。

そろそろ去就を明らかにしていただけるとありがたいのだが」

「ありがたいも何も、ジオン残党がまだ跋扈しているのに、内輪もめの火に油を注げと？」

争うならば好きにしまえ。

だが、私がティターンズなりエウーゴに参加するという意味を君は理解しているのかね？」

地球連邦軍大将である。

月方面艦隊司令長官である。

誰がここまで偉くしろと女神に文句を言いたくなかったが、改ざんされた記憶だとア・バオア・クーの英雄らしい。

前半の功績はそのままに、レビル將軍がコロニーレーザーに消え、そのままア・バオア・クー戦になだれ込んで上位将官がのきなみ戦死した中で、残った俺が功績総取りとなった事になっている。

0083まわりは改変が入り、シーマ中佐を引き抜いたので星の屑作戦が失敗に終わり、ジョン・コーウエン少将にシナプス中佐を引き取っている形なので、艦隊維持についてはそれほど問題ではない。

MS隊だが、ヤザン中佐とライラ少佐はそのままの上、シーマ中佐が入るので多分大丈夫である。

### 月方面艦隊

マゼラン改 70隻

サラミス改 201隻

コロンプス 221隻

MS 多数



大戦力である。みかけ上は。

艦隊の全てがフォン・ブラウンにいる訳もなく、グラナダやアンマン等の月面都市の港に分散配備されており、ここからグリプス戦役お約束の仲間割れが発生する。

テイターンズ所属

マゼラン改 39隻

サラミス改 88隻

コロンブス 27隻

エウーゴ所属

マゼラン改 5隻

サラミス改 4隻

コロンブス 4隻

テイターンズの勢力は順調に伸びているのに対して、エウーゴが伸びていないのは俺が今だ中立を維持しているからだろう。

ジャミトフ大將及び、ワイアット大將（星の屑が失敗したので無事生き残っている）と俺の三すくみというのが今の連邦宇宙軍の実情である。

「で、司令官。ここからどう動くの？」

旗艦『ムラクモ』艦長の叢雲が微笑んで尋ねる。

もちろん、副長はマシユ風である。

この二人に艦を任せると、まず沈まないから安心である。

「まあ、のんびりと基地を見物しながら考えるさ」

叢雲・マシユ・ステンノ・オボロの四人を連れて基地内を探索する。

前から雇った娼婦連中もついてくるから、誰が呼んだか『花魁道中』とはうまいこと言ったものである。

まずは宇宙港から。

「さすがにこの港でテイターンズカラーやエウーゴカラーの船は見ないか」

「そんな命知らずがこの基地にいるとは思いませんが」

俺のぼやきに案内していた基地司令が苦笑する。

マ・クベ中将。

どうやら劇場版設定で生死不明あたりを使って俺に降伏した形になっている。

その流れか、レビル將軍が消えたのを良いことに、軍事法廷待ちだったエルラン中將も助けて配下に加えていたり。

消えた人材をかき集めた結果、俺自身が派閥のトップになっているのはなんといつか、まあ……

「MSはジムⅡだったかな？」

「ですな。」

テイターズ側はハイザックを導入しているの、同数なら負けるでしょうな」

まだテイターズの化けの皮がはがれていない時期である。

現在、連邦宇宙軍において、最も戦意と練度が高い最精鋭部隊である事は間違いがなかった。

なお、戦意と練度が最も低いのは俺の月方面艦隊なのは言うまでもない。

「で、どちらにつくのですかな？」

マ・クベが危ない話を振る。

すでにテイターズ及びエウーゴ両方から誘いが来ている現状、わざと振る事で周囲に聞こえさせることで俺の方針を伝えたいのだろう。

「つくにはちと身体が大きくなりすぎた」

「否定はできませんな。」

よそでは給料の遅滞や物資の欠乏も発生しているとか。

閣下の所が異常なのでしょうな。

物資にせよ、給料にせよ滞りがない。

閣下の下で戦争をしていたら、さぞ楽だったでしょうな」

「まあ、そのせいで動けないんだよな」

ラプラスの箱がらみでビスト財団にコネがあるのと、政治家に転身したゴツプ退役大将の仕事を引き継ぎ、マ・クベを利用したジオン共和国とのコネを利用したジオン・月の交易を差配している事で、ある意味自給自足を達成していた。

別名軍閥ともいう。

「けど、エウーゴができた以上、対立は時間の問題では？」

「だろうよ。」

双方からのアプローチの激しさはその証拠だろうな」

まあ。腹は決まっている。

ここまで地位が高くなるとティターンズにつけない。ジオンがらみの人材を多く入れているので、アースノイド至上主義のティターンズに入れば自派の内部粛清を強制するだろう。

かといって、エウーゴにつくのもまずい。

この規模でエウーゴについてしまうと、連邦軍を二分しかねない政争に発展する。

グリプス戦役の厄介な所は、エウーゴ対ティターンズではなく、後から来るアクシズも絡んだ三つ巴の戦いという点で、後々を考えたら艦隊戦力を保持せざるを得ない。

双方共倒れの果てにアクシズに全部持つていかれたというのがZガンダムであり、

『ZZ』や『逆シャア』まで話を持っていくつもりもない。

「……」

「……あら」

オボロ中佐が何か報告を受けて、それを副官のステンノ中佐に伝える。  
彼女は俺の耳に睦言を囁くように、物語の始まりを告げた。

「グリーンノアで戦闘が発生したそうよ。」

「どうも、テイターンズの新型機を狙ったエウーゴのテロみたい」

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシュを連れてグリプス戦役を乗り切るようす その2

マゼラン改級戦艦はいくつかの種類がある。

一年戦争前にできていたマゼラン級戦艦は元々MS運用能力がなく、一年戦争時の改造でMS運用能力があるやつをマゼラン改と呼ぶケースが一つ。

もう一つは、『0083』での巨艦巨砲設定のやつで、『Z』時代はさすがにそれはないだろうという事で、MS運用能力があるものに統一改修されている。

ちなみに、艦首主砲を外して艦首部分にカタパルトとMS格納庫をつけたやつで、MS搭載能力は12機にも及ぶ。

「とはいえ、ジムIIでは戦えませんよ。大将」

ヤザン中佐の突っ込みに俺は両手をあげてしらを切る。

「訓練だよ。訓練。」

あくまで長距離航海と戦闘訓練の為の出撃。

戦う必要なんてないだろう？」  
嘘である。

グリプスでのティターンズとエウーゴの小競り合いが大火になるのを見越して、状況の確認と把握に出たのである。

で、ティターンズ側の司令官がバスク・オム大佐だけに話し合いが通じるとも思えず、交戦も視野に入れての対応なのは言うまでもない。

「最新鋭機相手に突っ込めなんて無理は言わんよ。」

だが、万一を考えて艦隊防衛の為の出撃訓練は頭に入れてよくように「そういう建前なのは了解しました。」

そのあたりはライラの方が適任なのでうまくやってください」

そんな演習艦隊の隻数は以下の通り。

マゼラン改級『ムラクモ』。他2隻

サラミス改級 9隻

MS搭載数 全機 ジムII

マゼラン改級 12機×3＝36

サラミス改級 4機×9＝36

計 72機

グリブス到着時の状況

エウーゴVSテイターズ

1 原作通り

2 同上

3 同上

4 テイターズ有利

5 エウーゴ有利

6 どないしよ？

5 エウーゴ有利

「前方の艦艇より救難信号です。

所属は……エウーゴのアーガマ級強襲用宇宙巡洋艦『アーガマ』です！」

「……やられた」

マシユの報告に俺は指揮官席でうめく。

エウーゴのやつら、こちらの出撃を知って、身分を明かして投降する事でこちらを巻き込むつもりなのだろう。



厄介なのは、テイターズもエウーゴも基本連邦軍内部組織なので、一応救難信号を出されたら助ける必要がある訳で。

「全艦戦闘準備。」

停戦信号を全周囲に流せ。

回線を繋げ。まずはアーガマの話を聞く」

ミノフスキー粒子下の通信はかなり不安定になる。

それでも、アーガマ一隻とそれを追いかけていたアレキサンドリア級巡洋艦とサラミス数隻の前に現れた12隻の大艦隊。

MSの性能で押せるかもしれないが、それをするとマゼランの主砲が両者をつぶせるといふ距離で両者とも砲火を納めざるを得ない。

「お久しぶりです。閣下」

「ブレックスくんか。」

いい船に乗っているじゃないか」

画面上のブレックス・フォーラ准将はそれ相応の礼儀をもって敬礼する。

さて、彼らを助ける為に出撃したように見えるこの形をどうやって崩したのか……  
「時間もないので、本題に入ろう。」

君たちが追われる理由を聞かせたまえ。

仲介の用意がある」

「バスク相手に仲介を？」

「その上と話をしても構わんぞ。」

それとも、君たちはここで内戦の引き金を引くのかね？」

グリプスからガンダムMk-IIIを盗んでいる時点で開戦しているようなものだが、第三者である我々を味方につけるといいう下心がそれを表に出せない。

「15分待とう。」

その間に、向こうの話聞く」

一旦通信を切って、今度はアレキサンドリアの方に繋げる。

バスク・オム大佐は画面からでも隠そうとしない尊大ぶりにこちらに命令してきた。

「我々はジオン残党の起こしたテロ組織への攻撃を行っている最中である。」

我々への協力を……」

バスクの口が止まる。

これまでも会口一番に命令していたのだろうが、『ティターンズでは一般の軍律は通用しない』や『ティターンズは一般軍人より1階級上として遇される』なんて言えない階級が出てくる事は想定していなかったらしい。

慇懃無礼に敬礼して、わざと相手を挑発する。

「やあ。大佐。

テロ組織という事だが、同じ連邦軍相手に実弾訓練とはなかなか熱心だな。

ジャミトフの耳に入れば、小言の一つ二つは漏れるんじゃないかね？」

直で会えばブライト中佐よろしく暴行されかねないのでこうやって離れて話をするに限る。

その上で、相手の要求を呑むふりをする。

「事情は把握している。

落しどころについては悪いようにしないから、ここは私に任せてくれないだろうか？」

バスク大佐の反応 100で激高

14

「……わかりました。

我々は新型モビルスーツを奪われています。

その返還交渉の仲介をお願いしたい」

「了解した。

30分後に再度通信する」

という訳で、再度アーガマに。

ブレックス准将に俺は要求を突き付けた。

「君たちがグリプスから奪ったものを返したまえ」

「……っ!？」

「まだ火遊びで納めてやる。」

そこから先は言わなくてもいいだろう?」

ブレックス准将の反応 100で激高

84

「ふざけないで頂きたい!

閣下はテイターンズが何をしたかご存じのはずだ!!」

「ああ。知っているよ。」

「で、テイターンズの非を責める為にテロを起こして、世論は納得するのかね?」

俺の一言にブレックス准将の顔が画面向こうで歪んだ。

第三者から見て『お前らテイターンズと同じじゃん』の一言は強烈に効いたらしい。

ブレックス准将の反応 84以下で承諾

「……わかりました。」

「ここは閣下にお任せします」

- 1 ガンダムMk-III二機とカミーユ返還
- 2 同上
- 3 同上
- 4 ガンダムMk-III二機返還
- 5 同上
- 6 どないしよ
- 4 ガンダムMk-III二機返還

結局、アーガマは奪ったガンダムMk-IIIを返すことになる。

ガンダムMk-IIIをムラクモに乗せてアーガマは逃走。

テイターンズは追撃よりもガンダムMk-IIIの回収を優先して、アーガマを追わなかった。

なお、母を目の前で殺されたカミーユ・ビダンにはアーガマに残ったらしい。

とりあえず、目の前での紛争勃発は鎮火させた。

だが、これで火が消えるとも思わず、俺の知らない場所で想定できないような形で火を噴くのだろうと確信せざるを得ず、ため息をつかざるを得なかった。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようす その3

アナハイムとの関係 100で親密

76

取引 76以下で成功

50

月方面艦隊の司令長官なんてやると、アナハイムエレクトロニクスとはうまくやっていく必要がある訳で。

既に発火したティターンズとエウーゴの抗争に戦力強化を考えて、取引を持ち掛けた。

フォン・ブラウン宇宙港でオサリバン常務が俺の手を握る。

「この度は、お手数をおかけしまして」

「CEOには苦言を言っておきたまえ。」

それとも、アナハイムは戦争をお望みかな？」

「まさか。」

これは、我々が戦争を望まない誠意でございます」

ハイザック 92機

ガーベラ・テトラ改 5機

次々と入港するアナハイム社所有のコロンブスから、大量のMSがおろされる。

ティターンズに優先納入されているハイザックが92機というのは生産を一手に引き受けているアナハイムエレクトロニクスの権勢をうかがい知ることができる。

そして、誠意というのがたぶんこれなのだろう。

ガーベラ・テトラ改。

『0083』で出た元はガンダム開発計画の一つであり、あの時から性能はとびぬけていたので今も現役で通じるMSである。

これがもう少し早かったらと思うと色々と思う所があるのだが、無事に終わったのでよしとしよう。うん。

「で、こいつの訓練にはどれぐらいかかる？」

MSの搬入作業を眺めながら、ついてきていたシーマ中佐に尋ねる。

とても抱き心地の良いムチムチ熟女になった彼女だが、MSに乗るには『肉がつき過ぎた』と今は艦からの指揮に専念している。

ヤザンとかライラが居るからこそその選択だろう。

「普通は三か月。突貫で一月。できる連中を選別して猛訓練で十日」  
「十日で仕上げろ。」

多分、それでも状況は待ってくれんだろうな……」

俺のつぶやきはいいやいやながらも的中する事になる。

- 1 テイターンズの逆襲
- 2 同上
- 3 同上
- 4 同上
- 5 エウーゴの攻勢
- 6 どないしょ？
- 5 エウーゴの攻勢
- 1 1日後



ギリギリこちらの精鋭連中の訓練が間に合ったその翌日、月航路の一つにて戦闘が発生する。

カミーユの父親であるフランクリン・ビダンとエマ・シーン中尉がティターンズを抜けて、ガンダムMk-IIIでエウーゴに亡命したのである。

当然ティターンズは追撃部隊を差し向け、エウーゴはアーガマを送って戦闘にという状況である。

「で、使えるMSは何機だ？」

ガーベラ・テトラ改 3機 ヤザン・ライラ・シーマ

ハイザック26機

「ハイザックが26機。ヤザン中佐、ライラ中佐は訓練済みです」

「よし全部乗せ……なあ。シーマ中佐。」

「なんで訓練終了者の所に君の名前があるのかな？」

「急ぎで使える人間との事なので」

「本音は？」

「閣下の上にはかり乗っていたら、飽きられると思ひまして」

なにこのかわいい熟女。

あとでたつぷり乗せてやろうと思いつつ、顔は真面目に出撃を命じたのである。

月方面艦隊

マゼラン改 『ムラクモ』 ガーベラ・テトラ改×3 ハイザック×9 計 12機

サラミス改 四隻 ハイザック×4 4機×4 計 16機

ティターンズ

アレキサンドリア ハイザック×12 計 12機

サラミス改 四隻 ハイザック×4 4機×4 計 16機

エウーゴ

アーガマ リックディアス×9 ガンダムMk-III×2 計 11機

1 エウーゴ有利 ティターンズMS隊壊滅 ティターンズ艦船撃沈

2 エウーゴ有利 ティターンズMS隊壊滅

3 エウーゴ有利 現在MS戦闘を行いつつ逃走中

4 戦力拮抗

5 ティターンズ有利

6 ティターンズ有利 エウーゴMS数機撃墜

7 同上

8 テイターズ有利 エウーゴMS隊壊滅

9 テイターズ有利 エウーゴMS隊壊滅 アーガマ大破

10 熱烈歓迎

4 戦力拮抗

エウーゴ MS 1機撃墜

テイターズMS4機撃墜

戦いは拮抗していた。

倍のMSで襲い掛かっているのに戦力が拮抗しているのはエウーゴ側のパイロットとMSの性能のせいだろう。

我々が到着するまでに、エウーゴはリックディアス1機の損失と引き換えに、テイターズのハイザック4機を撃墜していた。

エウーゴの反応 100で好戦的

22

テイターズの反応 100で好戦的

54

誤射判定

エウーゴ 22以下で誤射

62

ティターンズ 54以下で誤射

2 ファンブル判定

「よし。停戦信号を出しながら、前と同じく通信を……」

俺の声をマシユが遮る。

モニターには接近するティターンズMSが映っていた。

「ティターンズMS！」

発砲しながらこっちに向かってきます！」

「応戦準備！」

MS隊発艦始め！

撃ってきたら応戦して構わん!!」

こっちのMSがジムIIしかないの、まとめて潰そうと考えたのだろうなあ。

バスク大佐がジャマイカン少佐のどちらかは分からないが。

火の粉は払わせてもらおう。

ティターンズMS

2機

月方面艦隊MS

2機

こつちにやってきたMSは2機で、明らかに俺達をエウーゴと誤認していた。

とはいえ、こちらの練度で緊急発進に間に合ったのは2機のみで、その2機ヤザンとライラのガーベラ・テトラ改だったのが幸いした。

迎撃に成功し、モニターに二つ命が散った丸い灯りがついた。

「主砲発射用意！」

当てるなよ。

あくまで威嚇だ」

「ふふっ。いよいよ戦場ね」

ムラクモの主砲がアレキサンドリアの近くをかすめる。

停戦信号と通信は既に発信しているので、これ以上すればという訳だ。

エウーゴの反応

1 逃走

2 逃走

3 逃走

4 停戦

5 停戦

6 どないしよ

3 逃走

ティターonzの反応

1 逃走

2 逃走

3 停戦

4 停戦

5 交戦

6 どないしよ？

1 逃走

「ティターonz艦隊反転して撤退してきます！」

エウーゴも同じく撤退してゆきます！」

「あらあら。両方とも逃げちゃった」

マシユの報告にステンノが楽しそうに笑う。

今回の遭遇戦はこちら側が両者に対抗できる戦力を独力で用意した事、売られた喧嘩は買う事を見せつける形になった。

テイターンズにはいい薬になっただろうが、エウーゴをこのまま甘やかすのもよくない。

「オボロ中佐。月に戻ったら……」

帰還後。

オボロ中佐の工作でフランクリン・ビダンがアナハイム社員として愛人共々引き抜かれる事になる。

エウーゴの技術独占という形でなくアナハイム経由で技術を共有という形の手打ちに、テイターンズ強硬派は反発。

エウーゴ共々俺を排除しようと動くようになる。

一方のエウーゴだが、敵の敵はという事で本格的に俺を取り込みにかかろうとしていた。

4  
【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリブス戦役を乗り切るようです その

遭遇戦後の展開

- 1 エウーゴ優勢 勢力拡大 連邦議会支持拡大
- 2 同上
- 3 エウーゴ優勢 勢力拡大
- 4 同上
- 5 エウーゴ優勢
- 6 テイターンズ巻き返し
- 7 同上
- 8 テイターンズ巻き返し 勢力拡大
- 9 テイターンズ巻き返し 勢力拡大 連邦議会支持拡大
- 10 熱烈歓迎



10 熱烈歓迎

1 クリティカル

2 ファンブル

2 ファンブル

『今日のトップニュースです。』

連邦軍月方面艦隊を襲ったジオン残党勢力のテロについて、治安維持組織であるティターンズは声明を発表し、ジオン残党勢力を非難しました。

今回の事件は、ジオン残党勢力がグリプスにて連邦軍が開発中のMSを奪ったことから始まり、戦闘が発生。その応援に来ていた月方面艦隊のニューソクデ大将を狙ったものと推測されており、連邦議会内部ではジオン残党掃討の為にティターンズに更なる権限の付与をとという声が上がりつつ……』

やられた。

見事なまでにやられた。

ティターンズがマスコミを押さえているのは分かっていたが、ここまで露骨に情報操作に来ると思っていなかった。

「真実を公表すればいいのに？」

ニュースを見ていた叢雲がぼやくが、それをオボロ中佐がたしなめた。

彼女の顔は俺同様に険しい。

「公表すると、手打ちでおさめたエマ中尉とフランクリン・ビダン氏の事が蒸し返されません。」

何はともあれ、先にガンダムを奪ったのはエウーゴだから、非難はそっちに行くでしょう」

非合法な手段の欠点だ。

こういうマスコミを絡めた情報戦で印象が簡単にひっくり返る。

だからこそ、シヤアのダカール演説——演説内容よりその演説を証明するかのようになっているが容赦なく戦闘を継続した事——が政治的致命傷になった訳で。

「こりゃ、テロ捜査の名目でティターンズ権限の強化が連邦議会を通るだろうな」

乙ガンダムは客観的に通してみると、エウーゴが明らかにテロリストという形にならざるを得ない。

ティターンズの方がろくでもない事をしてるが法的権限を握っているのが彼らである以上、こういう形で引きずり出されると動きようがない。

「どうするの？」

色々探られるとまずいでしょ？」

ステンノの楽しそうな声に俺は苦笑する。

軍閥のトップとして汚い事も色々してこの艦隊を維持しているので、叩けば埃が出る身である。

捕まって拷問の上自白・自殺という最悪までもありそうだから怖いのだ。

ティターズズの強硬派の場合は。

「根回しをしておくさ」

向こうが情報戦で揺さぶってきたのなら、こちらは政治でひっくり返す。

まあ、それができなかつたからエウーゴはテロに走つたんだらうなと俺は心から納得したのだった。

「元氣そうじゃないか」

「そちらこそお変わりなく。ゴツプ議員」

画面越しに笑うゴツプ提督……じゃなかつた議員は相変わらずの笑顔を俺に向ける。

「ここに來て通信を繋ぐという事は、ティターズズの権限拡大の阻止かね？」

「相変わらず鋭いですな。」

懐を探られるとそれ相応に痛い訳で」

「ついでに、君からの献金で私も潰せると。」

「ジャミトフくんにしては悪くない策だな」

互いの現状認識の後、いくつかのデータをゴツプ議員に送る。こつちの方が本題だった。

「ジオン残党が逃げ込んだ小惑星アクシズの軌道データです。

エンジンをつけてこの地球に向かっていきます。

順調に行けばそう遠くない未来に彼らは帰還するでしょうね」

「そうだったら、ティターンズは止められないな。

君の艦隊とジャミトフくんの艦隊、さらにワイアットくんの艦隊で彼らを叩かねばならんが、その前に同士討ちなんて目も当てられん」

俺は意図的にやりたくないプランを出してみる。

「正直、ティターンズの権限拡大はまだ妥協できません。

ぶっちゃけると、今の段階でエウーゴを切り捨てても問題ないでしょう。

それで彼らが、アクシズ残党掃討に向かってくれるのならですが」

今ならば勢力が拡大していないエウーゴ切り捨て案である。

とはいえ、カミーユやクワトロ・バジーナあたりと戦う訳で、切り捨ての代償に甚大な被害がでるのは目に見えている。

『狡兎死して走狗烹らるる』。

チャイナのことわざだったかな？

エウーゴを潰した後、間違いなく君を潰しにかかるよ」

「ですな」

二人して苦笑しつつため息をつく。

という訳で、ゴツプ議員を動かしてジャミトフを掣肘するしかないのであった。

連邦議会勢力

ゴツプ派 36%

ジャミトフ派 28%

「しばらくは押さえて見せよう。

だが、このままだと長くは持たないぞ」

「金はアナハイムから出させますよ。

時間稼ぎをお願いします」

ゴツプ議員は懐かしそうな顔になる。

「君の時間稼ぎは本当にジオンにとって嫌だったらしいな。

私の娘がこぼしていたよ」

そういえば彼はイングリッド0を養女にしていたな。

どのあたりで迎えたのか分からないが、この世界では既に養女になっていると。

そんな事を思っていたら、ゴツプ議員が冗談を言う。

「君もそれだけ女を侍らせているのだ。

子供の一人でもさっさと作りたまえ。

子育ての愚痴もこぼしたいのだよ。私は」

それが彼流のエールであるというのを俺は十二分に理解していた。

ゴツプ議員に議会工作をお願いすると同時に、テイターンズに対しての妥協のサインとして、押さえていた月都市基地の一つをテイターンズに差し出すことにした。

拠点を持たせる事で月方面艦隊のテイターンズ派を一手に集める事と、この拠点をエウーゴに襲わせる事で、戦闘を俺の権限が及ぶ月内部で隠蔽する事が目的である。

テイターンズが要求した都市

1 フォン・ブラウン

2 グラナダ

3 アンマン

4 アナハイム

5 エアーズ

6 どないしよ？

6 どないしよ？

「都市はいらないだと？」

テイターンズの要求は俺の妥協のサインを理解した上での容赦ないやらしい一手だった。

オボロ中佐の声は淡々としており、それがこの一手のいやらしさを強調する。

「はい。」

月方面艦隊に監察官を派遣したいとの事です。

派遣されるのは、パプテマス・シロッコ大佐。

木星船団の責任者で、最近テイターンズに入ったそうです」

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

5

月面周回軌道にジュピトリス級超大型輸送艦が浮かんでいた。

全長2000メートルを超えるこの巨体は木星からヘリウム3を運ぶ巨大タンカーであり、往復四年の乗員の生活を支える移動コロニーでもあった。

中には工業区画もあり、シロツコはそこで自分の設計したMSを製造までしている。

「そりゃ、基地いらんと答えるな」

そんな巨艦から連絡用シャトルが宇宙港に着陸する。

俺はぼやきながら宇宙港でシロツコを出迎えた。

シロツコのニューソクデ大将への印象 100で好意的

98 クリテイカル

「パプテマス・シロツコ大佐です。」

この度、月方面艦隊監察官として赴任してまいりました。



一年戦争の英雄の下で働けるとは光榮です」

「たまたま生き残った俗物でしかないよ。私は」

「謙遜を。」

常に世の中を動かしてきたのは一握りの英雄です。

貴方にはその力がある」

侍らせた女たちには目もむげず、まっすく俺をだけを見てシロツコは手を差し出した。

握手をして執務室に入ると彼は本題を切り出す。

「テイターズの一部には、閣下を排除しろという声があります」

「知っているよ。」

てつきり君がその刺客かと思っていた」

俺の冗談をシロツコは白々しく吐き捨てた。

また、様になるから本心かどうかわからないのが困る。

「冗談を。」

私が刺客ならば、あんな杜撰な襲撃など企画しませんとも」

「まるで、君だったら成功していたかのような口ぶりだな」

「当然です。それだけの自負は持っているつもりです」

「ならば私は幸せ者だ。

君を敵に回さずに済みそうだ」

なお、背後にいる叢雲・ステンノ・マシユは殺気バリバリである。

ついでに言うと、オボロは重武装の警護兵とともに隣で突入準備をしていたり。

「世界の都合というものを洞察できない輩は排除すべきです。閣下。

少なくともあなたはそれを理解している」

「臆病なだけだよ」

シロツコはテーブルに命令書を置いた。

正規の監察官の任命書とその権限が書かれている。

「私を任命した上の目的は、エウーゴをつぶす間、閣下に動かれては困るので足止めしろという事です。」

特に現場に出られると、先日のようにテロに襲われかねません」

「で、私以外の将官だったらテイターンスズの権限で横紙破りを押し通すと考えた訳だ。

バスク大佐あたりかな？このやり口は」

「今だ、反政府組織に賛同せずに連邦軍の秩序を支えている閣下の尽力は、ジャミトフ閣下も評価しておいでです」

「ほほう。」

てつきりエウーゴ共々邪魔だから消そうと考えているのかと思ったよ」

とても生臭い会話なのに、互いに隙を見せない。

こっちはこれ以上の大事にしたくないし、シロツコの方は少なくともテイターズ強硬派のやり方を軽蔑しているからこそそのやり取りである。

「君の顔を立てよう。」

「ジャミトフくんによろしく言っておいてくれ」

「ありがとうございます。閣下。」

「ジャミトフ閣下には私の方から伝えておきます」

シロツコが去ったあとと皆で気を抜いたが、見えないところは汗でびっしょりだった。

ニュータイプのプレッシャー怖い。

あれ以上らしい覚醒アムロやシャアやカミーユやハマーンとは本当に会いたくないと心から思った。

1 テイターズ攻勢 エウーゴ艦隊壊滅 月面制圧

2 同上

3 テイターズ攻勢 エウーゴ艦隊撃退

4 同上

5 テイターンズ攻勢

6 戦力拮抗

7 エウーゴ反攻

8 エウーゴ反攻 テイターンズ艦隊撃退

9 エウーゴ反攻 テイターンズ艦隊壊滅 エウーゴ勢力急拡大

10 熱烈歓迎

9 エウーゴ反攻 テイターンズ艦隊壊滅 エウーゴ勢力急拡大

### 損害

マゼラン改 28隻

サラミス改 68隻

MS 882機

内 撃沈 3%

シロツコが月方面艦隊監察官に着任して俺の動きを縛ったあと、テイターンズはジャマイカン少佐の指揮のもとエウーゴ掃討の為に艦隊を派遣し見事なまでに壊滅した。

というより、ジャマイカン少佐の指揮に動員された連邦艦隊が次々と離反・降伏し作戦が大失敗するという惨状に見ていたシロツコも失笑を禁じ得ない。

「当然ですな。

マスコミはどうであれ、この月方面艦隊で閣下を襲ったのは誰が知らぬ訳ないでしょうに」

マ・クベ中将の感想も辛辣だが、ちよつとしたいやがらせとして派遣した月方面艦隊のティターンズ指揮官にジョン・コーウエン少将、参謀にエイパー・シナプス中佐を派遣したのである。

気づけば交代させるつもりだったがシロツコは黙認し、ジャマイカン少佐はティターンズの権勢しか見ていなかったので見事なサボタージュが発生。

MSもジムⅡがほとんどだったから、ティターンズのハイザックがカミーユやクワトロ・バジーナに軒並み叩き落とされると、出撃拒否が出る始末。

かくして、ジャマイカン少佐は監察官であるシロツコによって更迭され、シロツコはティターンズ内の地位を固めることに成功する。

そして、エウーゴの勢力は急拡大し、ほぼ内戦は不回避の状況となった。

「連邦議会か」

俺は呟く。

この惨状を打開するためにティターンズは次の連邦議会でティターンズの権限拡大を通そうとしており、エウーゴはこの成功を糧にして連邦議会への地保を固めようとし

ていた。

そのためには、指導者であるブレックス・フォーラがダカールに向かわなければならぬ。

次の戦場は大気圏を巡る衝突であると確定したのである。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

## 6

「閣下。どちらへ？」

「危ない話をしに行くのさ。」

大佐。君も来るかね？」

「仕事ですから。お供しましょう」

シロツコみたいな人間相手の接し方はフルオープンに限る。

極力情報を開示し、開示できない機密は「機密」と彼に伝えればそれ以上は表向きには接してこない。

そして、盤面は俺の方が握っているから、知れば知るほどドツボにはまる。

ちようどこんな風に。

「すまない。」

少し遅れたが、何か面白い話でもしていたかな？」

女たちとシロッコを連れて実にわざとらしく登場すると、エウーゴの使者であるクワトロ・バジーナ大尉とマ・クベ中將がとても良い感じでにらみ合っていた。

「閣下も人が悪い」

「それぐらいのいたずらは許してくれたまえ。大尉。」

何しろ、私は誰かのせいで結構な戦力を失ったのだからね」

クワトロ大尉のぼやきに、俺は皮肉で返す。

人的、艦的損失は少なかつたとはいえ、先の戦いで動員された戦力は月方面艦隊の指揮下からエウーゴ指揮下に移動した訳で、俺もそれ相応にマイナスをかぶっている。

なお、ジョン・コーウエン少將とエイパー・シナプス中佐の二人は派遣後こちらに帰還している。

そのままエウーゴに行っても良かったのだが、「助けてもらった恩をまだ返していない」との事で。

その台詞は目の前のマ・クベ中將も言っていたな。

ここで言う話でもないが。

「ブレックス准將からのメッセージを伝えます。」

連邦議会参加の為にダカールに降りるのだが、テイターンスの襲撃が予想されるので、その対処をお願いしたい」



「と、言っているが大佐。

テイターンズとしての意見を聞きたいところだな」

「我々は連邦軍内部において治安維持の権限を保持しております。

我々の治安維持活動を邪魔しないのであれば、問題なくダカールまで行けるはずですが？」

「おーおー。

NT同士がガンを飛ばしちやつて。

なお、クワトロ大尉にガンを飛ばしていたマ・クベ中將が別の話を切り出す。

「地球に向かっていているアクシズの到着時刻予定です。

大体半年ぐらいでしょうか。彼らは地球圏に到達します」

クワトロ大尉が俺にも分かるぐらい動揺した。

まあ、それが目的だったし。

「という事だ。

コップの中で遊べるのもあと半年。

彼らアクシズの帰還をもって、我が月方面艦隊は連邦軍本部の指導の下で全てに備えた行動をとる。

それを伝えたまえ」

私の言葉の意味をマ・クベ中将与シロツコ大佐は気づいて理解したが、クワトロ大尉は気づいていないらしく、それに気づいたシロツコが薄く嘲笑した。

この危ない話の本題は、半年後のアクシズ帰還時に連邦軍本部を抑えた奴に俺は味方するといっている事に。

その時、両者が連邦軍本部を掌握していなかったら、俺は両者を排除する選択肢を含めた行動をとると言っていることに。

「さてと、伝わるかな？」

帰り道、眩いた俺にシロツコは怜悯な笑みを浮かべて断言する。

「あのニュータイプのならりそこないはともかく、バスクには伝わらないでしょうな」

その言葉に俺は苦笑してこう告げざるを得なかった。

「奇遇だな。俺もだよ」

大気圏突入阻止戦

テイターズ

アレキサンドリア

マゼラン改 14隻

サラミス改 24隻

ガンダムMark 2 1機

マラサイ 84機

ハイザック19機

ジムII 161機

エウーゴ

アーガマ

マゼラン改 4隻

サラミス改 27隻

ガンダムMark 2 1機

リックディアス 9機

ネモ 2機

ハイザック2機

ジムII 142機

1 テイターンズ勝利 エウーゴ艦隊壊滅

2 テイターンズ勝利 エウーゴ艦隊撃退

連邦議会テイターンズ権限拡大付与

- 3 同上
- 4 ティターンズ勝利
- 5 戦線拮抗
- 6 エウーゴ勝利
- 7 エウーゴ勝利 大気圏突入成功
- 8 同上
- 9 エウーゴ勝利 大気圏突入成功 連邦議会エウーゴ派拡大
- 10 熱烈歓迎
- 5 戦線拮抗

大気圏突入阻止戦はバスク大佐が率いるティターンズ艦隊に、月での勝利に酔うエウーゴ艦隊が殴り掛かった所から始まった。

最新鋭MSマラサイを受け取りながらもティターンズ艦隊はエウーゴMS隊に大苦戦。

そして、その戦闘が大気圏を突入すると、その下には連邦軍本部があるジャブローがあつた。

「通信を頼む」

「どちらにかけるのですかな？」

俺の言葉にシロツコが反応する。

いちいち反応するので叢雲以下女たちの殺気が凄いことになっているのだが、シロツコが気にするわけもなく。

「保険をかけたこうと思つてね」

テイターンズの破壊工作

16

????  
の妨害

45

「ジャブローに水爆をしかけようとした馬鹿どもは排除しましたよ。閣下。

私もかつてはもぐらの一匹でしたので、勝手知ったるといふやつで」  
「助けておいて正解だったと我ながら思うよ。」

エウーゴ・テイターンズ分け隔てなく救助してやれ。エルラン將軍」

「了解しました。」

で、このジャブローはどうします？」

「水爆を使って放棄しようとしたものだ。

我々が再利用しても文句は言われんだろう。

アナハイムとゴツプ議員に話は通しておくから、君がそこを差配するように」

「その命令、了解しました。

ああ。それとエウーゴ指導者の乗ったシャトルはダカールへの降下軌道にのつたみたいで。

では」

これでバスク大佐も失脚コースだろう。

ここにいるシロツコなら、ちゃんと追い込めるが、彼自身の野心に火がつくかもしれない。

戦場はダカールの連邦議会へ移った。

それは地球においてティターンズ対反ティターンズの抗争が勃発する事を意味していた。

損害

ティターンズ

マゼラン改 12隻

サラミス改 24隻

MS 36機

エウーゴ

マゼラン改 3隻

サラミス改 5隻

MS 92機

連邦議会内部のエウーゴ勢力3%

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようす その

7

連邦議会勢力の変動

ゴツプ派	36%	+20%	56%
ジャミトフ派	28%	+3	31%
ブレックス派	3%		

連邦議会はテイターンズ対エウーゴの内戦が発生した事で、日和見勢力であるゴツプ派が過半数を取る事になった。

それは、内戦初動においてテイターンズの権限拡大が阻止された事を意味する。

同時に、エウーゴとカラバの反テイターンズ勢力の蠢動に合わせてジオン残党も活性化。

地球に戦局が動く事で、連邦議会に圧力をかけようという動きが発生したのである。



- 1 カラバ攻勢 連邦議会勢力拡大 テイターンズ戦力減少
- 2 カラバ攻勢 連邦議会勢力拡大
- 3 カラバ攻勢
- 4 戦力拮抗
- 5 テイターンズ攻勢
- 6 テイターンズ攻勢 連邦議会勢力拡大
- 7 テイターンズ攻勢 連邦議会勢力拡大 カラバ攻勢
- 8 ジオン残党蜂起 カラバ合流
- 9 ジオン残党蜂起 テイターンズ鎮圧
- 10 熱烈歓迎
- 9 ジオン残党蜂起 テイターンズ鎮圧

「……馬鹿どもめ」

「私にとつてはありがたいのですが、これが時代を読めなかった馬鹿どもの末路ですな」

俺の吐き捨てた罵倒に、監察官であるシロツコが苦笑する。

ジオン残党の蜂起はアクシズの帰還に合わせるには早すぎ、単独で情勢を打開するには戦力が少なすぎだ。

結果、ティターンズの政治的正当性を証明してしまう形になり、ジオン残党の名目でエウーゴ・カラバ狩りが横行することになった。

「で、馬鹿に巻き込まれた連中はどうするのかな？」

エウーゴ・カラバの次

1 地上制圧

2 同上

3 宇宙で戦力拡張

4 同上

5 議会工作

6 どないしよ？

5 議会工作

「彼らも馬鹿ではないようですな。」

議会にてティターンズの行動を訴えるそうで

議会が日和見のゴツプ派が掌握したのが大きい。

彼らを説得できれば、ティターンズの動きに制限がかかるからだ。

同時に、俺が抑えたジャブローから地球に降下したエウーゴパイロットが帰っている

というのもあるのだろう。

「まあ、地上は地上でひとまず置いておくとしてだ。

宇宙のテイターズは結局どうなった？」

宇宙のテイターズ

1 バスク大佐失脚 シロッコ後任

2 バスク大佐失脚 オットー・ペデルセン大佐後任

3 バスク大佐失脚 ブライアン・エイノー後任

4 バスク大佐留任 アポロ作戦発動

5 アクシズ先遣隊接近

6 どないしょ？

5 アクシズ先遣隊接近

「地球のジオン残党に影響を受けた連中がアクシズ先遣隊を名乗って集まっていますからね。」

それをなんとかしないとバスクを失脚させるのは無理でしょうな」

「同時に、バスクにとっては失脚回避のラストチャンスという訳だ。」

「使える手は全部使うのだろうか」

アクシズ先遣隊規模

チベ級 1隻

ムサイ級 17隻

「面倒だな。」

「こつちで片づけるか」

「とうとうと？」

俺のつぶやきにシロツコが楽しそうに口をはさむ。

なお、叢雲以下殺気バリバリなものも日常になっていたり。

「うちには元ジョンが多くてね」

バスク大佐の出撃

6

マ・クベ中将の政治力

4  
7

「アクシズ先遣隊なる艦隊は、ジオン共和国の新規戦力として登録される事になりました」

「老朽艦については、武装解除して輸送船登録にでもしておけ。

バスク大佐がそこまでする覚悟があるかどうか見ようじゃないか」

マ・クベ中将の報告に俺は補足をつける。

ジオン共和国への監査も俺の仕事なので、移動する為の艦艇の制限は守らせつつ、パイロットや乗員については見なかったことにするという妥協点にジオン共和国は遠慮なく乗った。

彼らとて、帰ってくるアクシズに権力を取られたくないのだ。

一年戦争終結のグラナダ条約は、全てをジオン公国、つまりザビ家に押し付けることでジオン共和国を戦争犯罪から切り離れた。

それは、逃げたアクシズを中心としたジオン残党をテイターズが叩く正当な理由ともなっているのだが、彼らの扱いは今だジオン公国残党なのだ。

という訳で、彼らの身分をテロリストから『ジオン共和国軍人』に経歴をロンダリングしてやる。

もちろん、向こうもながく残党というか海賊まがいで食っていた身分で、叩けば埃が出る身。

正規身分と法に怯えなくていいというこちら側の司法取引に、彼らはあつさりに乗った。

「あなたも中々お優しい」

「そうでもない。」

要するに、ルールの再確認なのだよ。これは」

シロツコが少し意外そうな顔をする。

このあたりの考えがないのが、Z以降の戦いの混迷に繋がっているのだろう。

「一年『戦争』は伊達じゃないのだよ。」

南極条約があり、グラナダ条約がある。

つまり、最後に守らないといけない一線はもう引かれている訳だ」

アクシズがジオン公国残党でいるのならば、連邦は南極条約の順守を宣言する訳で、つまり、ダブリンへのコロニー落としや、5thルナやアクシズ落としが非合法に変わる。

それは、ティターンズが行っている毒ガス攻撃も叩ける訳で、力が全てだろうがその力に建前をつけねば最後に溺れ自滅する。

ハマーン・カーンもシャアもそれで潰れたと俺は思っている。

「アクシズ先遣隊の事例はアクシズにとって選択肢となるはずだ。」

アクシズがジオン共和国の中に入るのならば、グラナダ条約の範疇で処理ができる。ジオン残党として一年戦争の継続を望むならば、南極条約に乗っ取って戦う事ができる。

我々としては、どちらでもいいのだよ。今はね」

「そして、バスクがそれを無視してジオン共和国を攻めた場合、条約違反を利用して閣下が敵に回ると」

「君の手を汚さずにといい配慮だよ。」

「いらなかったかな？」

何か言いたそうなシロツコに俺は楽しそうに笑う。

「時代の流れは理解しているさ。」

だが、その流れに巻き込まれる犠牲者は少ない方がいい。

我々はあまりにも同胞を殺し過ぎた」

「閣下。」

貴方はまた舞台に立つべきだ」

シロツコの言葉にお世辞はなさそうに見える。

彼は時代という舞台に俺を立たせたいのだろう。

「俺が立った舞台は一年戦争だよ。」

役の終わった俳優をいつまでも、舞台に引っ張らんでくれたまえ」

テイターンズは月と大気圏における損害から回復できず、格好のチャンスだったアクシズ先遣隊も誤報としてジオン共和国の戦力に組み込まれた。

バスク大佐は戦力を失った責任を取らされて左遷。

宇宙のテイターンズはオットー・ペデルセン大佐が管理する事になり、グリプス戦役は次の局面に移ろうとしていた。



【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

## 8

「おや。閣下。どちらへ？」

「秘密会談というやつだな。大佐。」

今回は置いておくことになるが、まあ、察してくれ」

ムラクモに乗り込む前にシロツコに見つかる。

まあ、万一を考えて十数隻の艦隊で行くからばれない方がおかしい。

「わかりました。」

留守はお任せください」

「マ・クベ中将とよろしくな」

という訳で、月から離れて現在は宇宙空間である。

シロツコが居ないので女たちも気が抜けていた。

「なんなのかな？」

「明らかに司令官を焚きつけていたし」

「叢雲がぼやくとステンノが楽しそうに笑う。」

「最初は私たちを落とそうとしていたみたいだけど、その前にマスターに落とされたんでしょ。あの人。」

「楽しいわ」

「マシユが赤くなったので、俺が苦笑して否定する。」

「恋愛関係というより尊敬とか忠誠とかそつちのやつだな。」

「男同士はそんな関係が成り立つ事もある」

「これで肉体関係あったら、私たちが黙っていませんよ」

「オボロ中佐がつっこみ、シーマ中佐がそれに乗る。」

「まあ、体を墮とされた私は何も言えないのですが」

「皆で笑った後、叢雲が代表して俺に聞いた。」

「で、目的地は何処なの？」

「コンペイトウ。」

「ワイアット大将の所さ」

現在の連邦宇宙軍は三つに分かれている。

一つはジオン残党掃討を担当するティターンズ。

一つは俺が抑える月方面艦隊。

そして最後は、ワイアット大將が指揮する連邦主力艦隊である。

主力艦隊と名乗っているだけあって、その規模は圧巻の一言で、星の屑作戦失敗で温存されたバーミンガムをはじめとした艦隊戦力は、俺やティターンズを纏めて叩き潰すだけの戦力を誇示していた。

まあ、俺の所と同じく、内部にティターンズとエウーゴがいて足を引っ張りあっているのだが。

「久しぶりだな。ニューソクデ大將。

相変わらずそうでなによりだ」

「そちらこそお元氣そうで。」

「良い地球産の紅茶葉が手に入ったので」

「うれしいな。」

「コロニー産の茶葉はどうも味がな」

「なお俺にはその違いは分からない。」

向こうの副官と叢雲たちが準備したお茶を味わった後で本題を切り出す。

「半年以内にアクシズが地球にやってきます。そちらはどれぐらい出せますか？」

連邦艦隊主力

バーミンガム 改造進捗 76

マゼラン改 2隻

サラミス改 210隻

コロンプス 184隻

アレキサンドリア 6隻

主力MS

1 ジムⅡ

2 ハイザック

3 マラサイ

4 ネモ

5 ジムⅢ

6 どないしよ？

2 ハイザック 371機

「ドゴス・ギアだったかな？」

あれと同じ改造を今バーミンガムに行っている。

アクシズ到着までには間に合うだろう。

マゼラン改が2隻。サラミス改が210隻。コロンプスが184隻だな」

「えらくマゼランの数が少ないな」

「そりゃそうだ。」

時代はMS戦に移ろうとしている。

マゼランの火力と搭載量は魅力ではあるが、改造に手間がかかる。

だったら、新造のアレキサンドリア級に切り替えた方がいいだろう？

代わりに、ハイザックの配備を進めている。

今の所、300機以上は出せるはずだ」

テイターンズとエウーゴの衝突が発生しても連邦軍の中心が両方につかなかった事

で、こうして連邦軍にも戦力拡張が進められていた。

まあ、アクシズ相手に一戦するには申し分ない戦力だろう。

「で、三番艦の建造も現在進められている。

君の所の旗艦にするといい」

「それはありがたい事で。

とはいえ、今のムラクモの乗り心地が良いので椅子を動かすつもりはないのですが」  
「相変わらずだな。君は」

そんな会話をしていると叢雲が赤くなっているのがかわいい。  
それはひとまずおいておこう。

「今のままならば、連邦軍本部の命令でアクシズに対処という事になるでしょう。

その時はどうかお願いします」

「最前線が君だから、心配はしていません。

観艦式で助けられた恩もある。

後ろは任せておけ……と言いたいところだが、気になる話がある」

ワイアット大將は目線で副官を下げさせると、俺も併せて女たちを下げさせる。

こういう話をするためにわざわざコンペイトウまで来たと言っている。

「ティターンズのやつら、コロニーレーザーを作っている節がある」

ワイアット大將の話に驚くふりをする。知っていたし。

「あまり驚かないのだな」

「ジオン残党掃討を大義名分にしているティターンズが、どうやってアクシズを落とすかと考えた時、破城槌としてうってつけですからね。あれ」

このコンペイトウ……もとい、ソロモンは連邦のソーラーシステムで焼かれて落とされたのだ。

考えない方がおかしい。

「もう一つは、かなりきな臭い話だ。

小惑星基地ペズンに駐留する地球連邦軍教導団の一部がバスク大佐にくつついたら  
しい」

ワイアット大将の言葉に俺の目は細くなる。

バスク大佐、転んでもただでは起きないと思っていたが、ある意味一番組んではいけない所と組んだな。

「教導団の反スペースノイド風潮を利用されましたな」

「仕方がないさ。

身内や家族を一年戦争で失って、それでもなお許そうと思えるほど、人は優しくはなれんよ。

はつきり言つてやる。君が異常なんだ」

ワイアット大将も一年戦争でそういう人たちを亡くしたのだろう。

そして、それを割り切りはしたが、許した訳でもない。

- 1 テイターンズ攻勢 連邦議会勢力拡大 テイターンズ権限付与
- 2 テイターンズ攻勢 連邦議会勢力拡大
- 3 テイターンズ攻勢 カラバ・ジオン残党と共に壊滅 宇宙逃亡
- 4 テイターンズ攻勢 内部にニューデイスイズ結成
- 5 戦力拮抗
- 6 エウーゴ攻勢
- 7 エウーゴ攻勢 議会勢力拡大
- 8 カラバ攻勢 ジオン残党を吸収
- 9 カラバ攻勢 ネームドキヤラ参加
- 10 熱烈歓迎
- 3 テイターンズ攻勢 カラバ・ジオン残党と共に壊滅 宇宙逃亡

バスク大佐が失脚したテイターンズは真面目に仕事をし、地球内の反テイターンズ勢力の壊滅に成功した。

エウーゴのパイロットが宇宙に帰った事と、地球のジオン残党が蜂起して正当性が確保された事、さらに強化人間とサイコガンダムへの投入がテイターンズの勝利を決定的にした。



これによって、グリップス戦役はニュータイプとオールドタイプという人種問題から、スペースノイドとアースノイドという地域問題に政治的軸が移ることになる。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです この世界線での星一号作戦

「光が……」

「フェーベの反応がありません！

艦隊は大混乱しています!!」

「あらあら。

どうするのかしら？」

グラナダ上空。

本隊がソロモン攻略後ア・バオア・クーへ向かい、ルウム経由でグラナダ攻略を命じられた俺の艦隊はマ・クベ中將を利用してグラナダ基地を無血開城で攻略。

なお、グラナダ攻略と同時にア・バオア・クー攻略戦を行う予定だったのだから、グラナダ無血開城にてタイムスケジュールが前倒しになった為、ア・バオア・クーに行ったキシリア艦隊を叩くためにア・バオア・クーへという所でこの閃光を目撃する。

あれ、発射タイミングがわかればまだマシユたちのバフで乗り切れなくもないが、超距離からの不意打ちだと、多分防げないな。

「艦隊各艦に動揺するなと伝える。

それと、戦力を再確認する」

ニューソクデ艦隊

マゼラン 11隻

サラミス 50隻

コロンプス 30隻

グレイフアントム

MS編成

コロンプス一隻 ジム?6 ボール?12

ジム×180 ボール×360

グレイフアントム

RGM-79SP ジム・スナイパーII×4

RX-77D 量産型ガンキャノン×2

「司令官。

「ジャブローから通信が」

この忙しい時にと思いながら通信を開くと、ジャブローに居たゴツプ大将が画面に映る。

明日の天気でもという他人事みたいな感じで会話が始まった。

「大変な事になってきているみたいだな。『大将』」

「私はまだ中将のはずですが……？」

この時期の昇進なんていやな予感しかしない。

で、それは的中した。

「今から君は大将だ。」

そして、艦隊をまとめ、ア・バオア・クーを落としてほしい」

「放置して、ジオン本国叩きませんか？」

何も決戦をしなくてもという顔でおれがぼやく。

既にマ・クベ中将を利用して、ジオン本国との交渉を進めようとしていた矢先だった。

「正しいことが常に通るとは限らないのが世の中でね。」

連邦議会が動揺しているんだ」

あれを見せられた上にレビル將軍が艦隊の三割と共に消えたとなれば、動揺しないほうがおかしい。

俺はゴツプ大将にしかめっ面で確認する。

「コロニーレーザーは講和条約で奪ってしまえばどうとでもなります。

分かっていますか？

ここで私の艦隊がア・バオア・クーに行ったら、この戦争負けますよ？」

「わかっているよ。

だからこそ、君を大将に据えるんだ。

君の提案した交渉は続けたまえ。

大将の箔もそのためというのが一つだ」

「では、ほかの理由は？」

ゴツプ大将は画面の向こうで笑顔を見せる。

少なくとも、彼にとつてはもう『戦後』が始まっていた。

「決まっているだろう。」

君だったら、死なないだろうと思ったからだよ。

コロニー落として最後まで殿をつとめ、ルウムでは指揮する戦隊を無傷で生還させ、オデッサでは上空でいらんで、ジオン軍をついに宇宙に上げさせず、そして今回のグラナダ無血開城だ。

混乱している連邦艦隊を現場でまとめられるのは君しかいないんだよ」

「……地球連邦軍も人材不足が決定的になってきましたな。

ただ、戦艦に乗りたかっただけの女連れの腐敗将校ですよ。私は」  
「まったくだ。

だからこそ、私の引退後は君に仕事を押し付けるのでそのつもりで」

それが彼のエールであるのがわかっているのて、俺はただ敬礼で返事をした。

「こっちは、この一戦ぐらいは議員を抑えて見せる。

君の好きに動き給え。大将。

終わった戦争で死ぬほど馬鹿馬鹿しいものはないぞ。

死ぬなよ」

ア・バオア・クー攻防戦は高濃度ミノフスキー粒子が漂う中、0079年12月31日0時00分に開始された。

ソーラ・レイの被害を受けなかった第二、第三大隊をNフィールドへ、被害を受けた第一大隊とホワイトベースをSフィールドに向かわせる。

このタイミングで俺の艦隊がア・バオア・クーEフィールドに到着する。

まず行ったのは、指揮権の掌握だった。

「私はヤルオ・ニューソクデ大将である。」

連邦軍本部の命を受けて、レビル大将の指揮権を引き継ぐ。

現状は個々に戦いつつも、司令部の指揮に従ってほしい」

派遣されたEフィールド別動隊を掌握すると同時に、艦船を派遣してNフィールドとSフィールドの指揮権を確保しなければならぬのが面倒な事この上ない。

これも、俺の艦隊が来る前に戦闘を始めたせいなのだ、この時の連邦艦隊はコロニーレーザーの二射目を恐れており、ア・バオア・クーで戦闘状態に入る事で同士討ちを避けてコロニーレーザーが撃たれないことを考えていたらしい。

……小説版だとためらうことなく撃つのだが。

閑話休題。

「Sフィールドを攻めているのはワツケイン提督で、Nフィールドの主力はダグラス・ベーダー中将か」

「両提督とも提督の指揮権を認めるとの返事が届いています」

俺の確認にマシユが返事をする。

コロニーレーザーでレビル將軍以下司令部が消えた結果、この作戦は現場指揮官とジャブローとの通信によって強行されたという経緯がある。

で、こりやまずいとゴツプ大将が俺を昇進させた上で司令官としてこの作戦を統括しろと言ってきた訳で。

「ニユーソクデ大将?」

「あの人また出世したのか」

「ルウムの英雄だろう!勝てるぞ!!」

「え?あの女連れ提督が来たの!?!」

『『ジャブローの火消し』のご登場か』

こちらに聞こえてきた通信に困惑というか苦笑というか安堵が入っているのは、この作戦がいかに無計画だったかを物語っている。

俺の艦隊次席司令官であるジョン・コーウエン准将に連絡を取る。

「グレイファントムを旗艦に臨時艦隊を組む。

マゼラン3隻、サラミス10隻、コロンプス5隻を渡すから、Eフィールドの艦隊を掌握しろ」

「了解しました」

Eフィールド分艦隊は戦力比で6対1にも関わらず、カスペン戦闘大隊等の活躍で第一次攻撃を跳ね返していた。

このあたりも司令部不在が響いているのだろう。

Eフィールド分艦隊



マゼラン9隻

サラミス32隻

コロンブス26隻

MS ジム・ボール含む 636機

「……なんだこれは？」

俺の艦隊がこのEフィールドの分艦隊と同規模はなのはよしとしよう。

問題は、詰込みに詰め込んだMSたちである。

そりゃ、統制なんてとれる訳もなく。

「ただでさえ、攻略の為に定数以上のMSを持ってきて、コロニーレーザーで打ち抜かれたものだから母艦が足りず……」

「おーけいわかった」

オボロ中佐の説明に頭を抱える俺。

マゼランやサラミスの甲板に露天係留みたいなマネしてMS持ってきたからなあ。

「大将。

ちよつと暴れてくらあ」

嬉しそうな声と共にヤザン少佐のガンダムが飛び立つてゆく。

一方で残ったライラ大尉に向けて、Eフィールドの全MS隊の統括をコーウエン准将と共に取らせるように頼んで、俺は戦況を見守ることにした。

### 戦況

1 ジオン有利

2 ジオン有利

3 ジオン有利

4 戦力拮抗

5 戦力拮抗

6 戦力拮抗

7 連邦有利

8 連邦有利

9 連邦有利

10 熱烈歓迎

Nフィールド 10

Sフィールド 10

Eフィールド 10

熱烈歓迎

熱烈歓迎

熱烈歓迎

「ん……何だかジオンの指揮が乱れてない？」

「通信もどうも混乱しているみたいで」

「Nフィールドの敵ドロス級巨大母艦が沈みますー！」

叢雲・マシユ・オボロの三人の言葉に俺は顎を触りながら一息ついた。

つまり、やってくれたのだろう。キシリア・ザビがギレン・ザビを殺した指揮系統の混乱だが、ここまで露骨に出るとは思っていなかった。

そして、それを見逃すほど連邦軍もお人よしではなかった。

「勝ったみたいね」

「問題はここからさ」

ステンののささやきに、俺は返事をしながらモニターを眺める。

何しろ、史実の退路上に居るのが俺の艦隊である。

死兵を相手にして、万一をもらう訳にはいかなかった。

「全艦隊に敵命。」

逃げる敵は追うな。繰り返す。絶対に逃げる敵は追うな。

捕虜の処遇は南極条約に乗っ取ることを確認させろ」

俺の命令に何隻かのサラミスが離れる。

ミノフスキー粒子下の戦闘では通信が不安定なので、こういう連絡も一苦労なのだ。「コレマツタ中佐の陸戦隊をSフィールドに送る。」

要塞内部を制圧させるんだ」

艦船やMSは大量に用意した連邦軍だが、要塞制圧のための歩兵が圧倒的に不足していた。

そのため、とりついた艦船から陸戦隊を編成して制圧させなければならなかったのである。

それを見越した制圧部隊を乗せたマゼランが護衛のサラミスを連れてSフィールドに向かつてゆく。

「艦隊の位置を下げる。」

退路を開けてやれ」

意図的に艦隊を下げて退路を開けてやる。

既にSフィールドとNフィールドからア・バオア・クーに連邦軍が取り付きつつある現在、その意味に逃げようとするジオン軍は気づくだろう。

実際、こちらの射程距離ギリギリをぬうようにしてジオン艦隊が敗走してゆく。

ジオン軍の特攻

- 1 なし
- 2 同上
- 3 特攻が出るも無事撃墜
- 4 同上
- 5 同上
- 6 同上
- 7 特攻でMSに被害が
- 8 特攻でMSだけでなく艦船にも被害が
- 9 旗艦ムラクモまで敵が
- 10 熱烈歓迎
- 3 特攻が出るも無事撃墜

MS何機かが支援なのか私怨なのか知らないが、艦隊に突っ込むが、護衛MSの十字砲火を浴びて星の屑となる。

こちら側が手を出さないことを察したジオン軍は次々と逃げ出してゆく。

それは、この戦争が終わったことと、次の戦争が始まることを明確に示していた。

艦内だけでなく、通信でもミノフスキー粒子が薄くなつて通信が回復しだす。

1812 【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマッシュを連れてグリブを乗り切るようです この世界線での星一号作戦

グラナダのマ・クベ中將から、ダルシア・バハロ首相が終戦協定の申し入れが発表されたという報告が届き、俺の一年戦争は翌日のグラナダ条約締結式に連邦軍代表に参加する事で終わった。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

## 9

エウーゴVSティターンズ

1 ティターンズ攻勢 連邦軍権限移譲 アポロ作戦

2 同上

3 ティターンズ攻勢 連邦軍権限一部委譲

4 同上

5 バスク決起 小惑星ペズンにてニューデイズ結成 独自行動へ

6 エウーゴ攻勢 議会工作進行

7 同上

8 エウーゴ攻勢 議会工作進行 ニューギニア基地攻略作戦

9 アクシズ接近

10 熱烈歓迎

5 バスク決起 小惑星ペズンにてニューデイズ結成 独自行動へ

ニューデイズ賛同勢力 100で大部分が参加

79

「現在のティターンズのやり方は生ぬるい！」

地球の反連邦勢力が壊滅し、アクシズというジオン残党が接近しつつある中、連邦宇宙軍は今こそこのジオン残党を討ち、ジオンの亡霊を終わらせなければならぬ！

にもかかわらず、連邦宇宙軍はジオンの残党と手を取ろうとしている。

これが許せるだろうか！

諸君！連邦軍軍人の諸君！！地球に住む有権者の諸君！！

家族を、友を、同胞を、故郷を、母なる大地ですらコロニー落として汚したジオン残党を許し、かりそめの平和を維持しようとする連邦軍の現状に我慢できない！！！！

私はここに『新たな決意』『反対』『反スペースノイド』を旗印とした『ニューデイズ』の結成を宣言する！！！！

連邦軍将兵たちよ！

この旗に集い、ジオンの亡霊を討つべし！！！！」



舐めていた。

バスクの扇動ではなく、アースノイドの反ジオン感情を舐めていた。

まあ、毒ガスによるコロニー虐殺にブリティッシュ作戦のコロニー落とし、さらに防いだ星の屑作戦の衝撃と憎悪を俺は舐めていた。

ワイアット大將が警告していたというのに。

とはいえ、これは抑えられないだろうなあ。

「グリプスはニューデイスイズの指揮下に入ると宣言しました。

月面のエアーズ市もニューデイスイズに賛同するとたった今放送が」

「ルナ2の連邦主力艦隊から多数の離脱艦がグリプスに向かっていきます！

ニューデイスイズ艦隊司令官にブライアン・エイノー提督が就任すると……」

「地球のテイターズ拠点だったニューギニア基地及びキリマンジャロ基地もニューデイスイズ指揮下に入ると宣言しています!!

テイターズの大部分がニューデイスイズに変わったようなものです!!」

次々と上がってくる報告にフォン・ブラウン基地司令部内で叢雲とマッシュとオボロが他の将兵たち叫びながら状況把握に躍起になっている。

ここまで大規模になるともはやクーデターと言った方が良いだろう。

ステンはそんな俺の隣で笑顔を絶やさない。

それが司令官席に座っている俺に落ち着きを与えてくれる。

「月方面艦隊のニューデイスイズへの賛同者はどうなっている?」

月方面艦隊のニューデイスイズ参加者 100で大部分が参加

1

「ほとんど居ないわ。」

前に月のエウーゴ掃討でティターンズ賛同者はあらかた出たのが大きいわね」

叢雲の報告に俺は安堵のため息をつく。

少なくとも、これで最悪月とサイド3をラインとしてニューデイスイズやアクシズと一戦できる事は分かったからだ。

モニターに映っている月周回中の巨大船を見つけて、ふと彼の動向を訪ねる。

「で、あの船の船長はどっちに?」

「それ、聞く必要あるのかしら?」

俺の質問にステンノが楽しそうに笑う。

わかっているが、非常時だからこそ間違っただけは許されない。

俺は通信を『ジュピトリス』に繋ぐ。

船長であるシロツコはいつもの笑みで俺のモニター前に現れた。

「大変なことになっているが、大佐。そっちはどうかかな?」

「木星航海は長期にわたるので、この手の反乱は起こさないように手を尽くしています。

あの程度のプロパガンダで寝返るような軟弱物は、このジュピトリスには居ませんよ」

「それは良いニュースだ。

で、悪いニュースだが、連邦宇宙軍の大部分がニューデイサイズに寝返った。

まともに戦えるのは俺の月方面艦隊と君のジュピトリスだけだ」

「閣下の勢力下に加えていただけるのは光栄ですな。

で、エウーゴやアクシズについてはどうなさるおつもりで?」

モニター向こうのシロツコの顔は『お手並み拝見』という表情を隠そうともしない。

ここで、全力でニューデイサイズとやりあつたらこれまでの対アクシズ戦略が完全に

ご破算になる。

「ジオン共和国やエウーゴとも話はするさ。

だが、ここでニューデイサイズと決戦するほど俺は愚か者ではないよ」

バスクの思考はなんとなく分かる。

連邦宇宙軍の大部分を指揮下に置いた現状で、残っている俺の艦隊は後でどうとでも料理できるし、この大戦力をもって失脚のきつかけとなったエウーゴを支持基盤から殲

滅したいのだろう。

「ニューデイサイズとエウーゴの決戦は中立で居るさ。

最も、月方面艦隊の管轄内での軍事行動については、それ相応の手続きを取ってくれ  
という条件はつけるがね」

「それを馬鹿正直に行うバスクではないでしょうに」

「奇遇だな。

私もだよ」

似たようなやりとりをしたなど二人して苦笑する。

俺は顔を引き締めてシロツコに宣言した。

「君は手続きを順守する限りにおいて好きに動きたまえ。

君が見たかった最高のものが見れることを祈っているよ」

「閣下も人が悪い。

一年戦争の英雄の手腕。

近くで学ばせていただきます」

通信を切ると、俺は矢継ぎ早に命令を出す。

「ニューデイサイズに加わっていない基地を確認する」

「月面ではエアーズ市以外の全都市がニューデイサイズ参加を見送っているわ。

ルナ2は多くの艦隊が脱出したけど、ワイアット大將が掌握しているみたい。ジオン共和国をはじめとした各サイドも沈黙を守っているわ。

アナハイムの秘密拠点になっている荊の園と、ラビアンローズは存在を確認」  
叢雲の報告と共にエウーゴの拠点がモニターに映る。

彼らとて無策ではない。

ここ最近の戦勝で支持者が増えてきた矢先のことだったのが痛い。

少なくとも、ニューデイスイズについた連中を再度引き離す必要があった。

「ゴツプ議員に連絡をとれ。

ジャミトフ大將を取り込むと共に、サイド1・30バンチコロニー毒ガス虐殺事件を公表する」

これは切り札だったのだが、ここで切らないとニューデイスイズに押し切られる可能性があった。

連邦及び連邦軍の正当性に致命的打撃を与えるから、できれば切りたくはなかったのだが背に腹は代えられない。

そして、引退していた駒を引きずり出す。

「ジャブローのエルラン将軍に連絡しろ。

北アメリカのシャイアン基地に軟禁されているアムロ・レイを連れだせ。

宇宙に上げたらMSガーベラ・テトラ改を乗せたサラミス改を一隻つけるから彼の好きにさせろ。

エウーゴに加わっても、ティターンズに入っても構わん。

命令書はゴツプ議員に協力して、正規のやつを連邦軍本部より発給させる」

彼がニューディサイズに行くことはないとだけはニュータイプではないが確信していた。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです ジャブロー基地宇宙港にて

ジャブロー。

かつて連邦軍本部があつたそこには、地下都市、宇宙港、生産工場という重要施設が全て揃つており、キリマンジャロ基地とニューギニア基地の二つで代替しようとしたテイターズは、ここを去るにあたり水爆で爆破して使用できないようにと企んだ。

この企ては失敗に終わったのだが、それは同時にそれらの施設が使用可能のまま第三者——つまりヤルオ・ニューソクデ大将——の手に渡るといふ事を意味していた。

後の史家は言うだろう。

この基地を彼に渡してしまったことが、すべての始まりだったと。

ジャブローの空港にガルダ級大型航空空母アウドムラが着艦する。

そこから降りてくる人員は全て宇宙に上げられることになっていた。

「失礼します。

アムロ・レイ大尉入ります」

アウドムラから降りてきたアムロは司令室に通される。

その指揮官の椅子に座っていた人物に思う所がなかったかといえは嘘になる。

「楽にしまえ。アムロ大尉。

一年戦争では色々あったが、私の方は気にしていないよ」

そんな事を言うエルラン將軍だが、それが嘘なのはニュータイプの勘を使わなくてもわかった。

「まったく、ニューソクデ閣下も困ったものだ。

君にサラミスを与えて好きにさせるだなんて」

エルラン將軍はわざと愚痴りながら司令室のモニターを眺める。

そこには、生産設備がフル稼働しているジャブローの姿があった。

「とりあえずサラミス改を百隻、ハイザックを500機、マラサイとネモをそれぞれ100機作らせている。

この施設の再稼働にはゴップ議員とアナハイムの多大な尽力があった。

まあ、君にはさほど関係がない話か。

たとえ、帰ってくるアクシズが何か企もうとしても、それを打ち破るだけの戦力をこ



こは生み出せる」

エルラン将軍は書類の入った封筒をテーブルに投げる。

アムロ絡みの連邦軍正規の命令書とここで作られているサラミス改の譲渡書類が入ったそれをアムロは無言で受け取って敬礼する。

「用が済んだら行き給え。」

ありがたくもあるが、ままならんものだな。戦争というものは」

エルラン将軍の愚痴をアムロは聞かなかったことにした。

彼の復権は連邦軍だけでなく連邦政府内部にも異論があつたが、それを押し通すだけの功績をニューソクデ大將は持つており、エルラン将軍もそれに応えてこのジャブロー爆破を阻止してみせたのである。

結果、彼の復権に誰も文句はつけられなくなつていた。

それは、『自由に動け』と言われたアムロにも適応されていた。

彼ら二人は立場も理由も違うが、このグリップス戦役にて復権を許されたと言つていいだろう。

それを本人たちが望んでいたのかどうかについては別問題になるのだが。

「アムロ。」

既にサラミスへの乗組は終了している。

後はお前だけだ」

待っていたハヤト・コバヤシとカツ・コバヤシにアムロは書類を見せる。

連邦政府承認の独立裁量権を持ったそれは、当のニューソクデ大将の命令すらはねのけるという強力なものだった。

これは、アムロをニューソクデ大将の下におきたくないという連邦軍内部の圧力と、それを見越したニューソクデ大将の妥協によって成立していたのだが、各方面からかえってスカウトが来る始末となっていた。

「これでやつと宇宙に上がれますね。

テイターンズも酷かったですが、ニューデイサイズのやり方ではきつと誰も幸せになりませんよ」

カツ・コバヤシの物言いにアムロとハヤトはなんとも言えない顔になる。

それは、一年戦争時の二人と同じだったのだから。

それを理解する程度には二人共大人になっていた。

「何をやっているのよ！

早く早く！」

サラミス改の入り口でベルトーチカ・イルマが手を振っていた。

このサラミス改はジャブローで製造された一番艦であり、その命名はエルラン将軍が名付けたという。

艦の名前は『バターン』。

一年戦争のオデッサ作戦。その連邦軍ビッグトレー旗艦の名前をつけた意味はエルラン将軍にしかわからないだろうが、良い意味ではないというぐらいはアムロもニュータイプの勘を使わずとも分かる程度には大人になっていた。

彼ら四人がこのサラミス改のパイロットであり、四人揃って格納庫に行くと乗機のM Sが四機格納庫に鎮座していた。

「凄い……最新鋭のネモが三機も。」

あの奥の機体は何ですか？」

「ガーベラ・テトラ改。」

アムロへの贈り物の一つだよ。

予備部品を手に入れるのに苦労するから壊さないでくれと、整備班から直々に言われたよ」

カッツが嬉しそうに新型のネモを眺め、ハヤトがその好待遇ぶりに苦笑する。

地球上では、ジオン残党の蜂起に伴ってテイターズズの弾圧が成功に終わり、ジオン残党とカラバが壊滅に追い込まれていた。

そんな両勢力の残党はここジャブローから宇宙に上がっており、ある者はジオン共和国に、ある者はエウーゴにと流れた結果、ティターンズの覇権が地球で確立してしまっていた。

あとは宇宙をどうするかだったのだが、地球のことしか頭になかった連邦政府高官たちはこれ以上のティターンズの伸張を望まず、バスク・オムが焚き付けたニューディイズ結成の支援を裏から行っていたのである。

それが当人たちの予想外の大成に終わり、実質的なニューディイズのクーデターになったあたり本末転倒すぎて笑うに笑えないのだが。

「まあ、アムロなら大丈夫でしょ？」

「よしてくれ。ベルトーチカ。」

僕がガーベラ・テトラ改で出て、後は二人がつく形にしよう。

常に一人は残って、艦を守るんだ」

「アムロ大尉！」

艦長がお呼びです!!」

整備兵の一人がアムロたちを呼ぶ。

彼らは独立裁量権を与えられたが、階級がそれを邪魔しかねない。

おまけに、正規の士官教育を受けておらず、これ以上の出世は組織的に見て問題があ

ると判断した連邦軍は、彼らの為に頭をという名前のお目付けを用意したのである。

「アムロ・レイ大尉以下着任しました。艦長」

アムロ以下四人は艦橋に入り艦長に敬礼する。

艦長オットー・ミタス中佐はしかめっ面で敬礼を返した。

「君たちに与えられた独立裁量権は理解している。

私はそれを邪魔するつもりはないが、艦の操作については口を挟まないでくれると嬉しい。

また、着任と同時に野戦任官で君たちの階級がこの作戦に限り上がるようになってくる。

アムロ少佐はMS隊の指揮を。

ハヤト少佐は副長についてもらう。

で、まもなく打ち上げだが、宇宙に上がった後何処に向かうのかね？」

オットー艦長の質問にアムロは答えた。

まるでニュータイプが次の戦場を察したかのように。

「月」

打ち上げから数時間後。

連邦軍の内部告発という形でテイターンズの毒ガス攻撃が暴露され、その指揮官とし

1828 【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシュを連れてグリブを乗り切るようです ジャブロー基地宇宙港にて

てバスク大佐の名前が取り沙汰される前の話である。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

10

毒ガス事件の内部告発 100で凄

連邦内部の動揺

14

参加将兵の動揺

76

中立勢力の動揺

1

サイド1・30バンチコロニー毒ガス虐殺事件を公表は、ニューデイサイズについては想定内の、それ以外には想定外の衝撃をもって迎えられた。

反スペースノイド感情や反ジオン感情で参加した将兵たちはこの事件が表沙汰に

なった事で衝撃を受け、参加取りやめや離脱が続々と出る始末。

一方で、連邦内部はこの事件を『バスク大佐個人の暴走』に矮小化させる事に成功した為に動揺は少なく、サイド6や月面都市などはどこ吹く風というか、ニューデイサイズにつける訳もないから、彼らの正義の正当性失墜となるこの事件の公表をもう手を挙げて歓迎したのである。

エウーゴVSニューデイサイズ

1 エウーゴ強攻 ゼダンの門攻略へ

2 同上

3 エウーゴ攻撃 エアーズ市攻略へ

4 同上

5 アクシズ接近

6 ニューデイサイズ攻撃 アポロ作戦

7 同上

8 同上

9 ニューデイサイズ強攻 月へのコロニー落としへ

10 熱烈歓迎



## 1 エウーゴ強攻 ゼダンの門攻略へ

「で、このチャンスのエウーゴは逃す訳がなかったと」

月面都市に隠蔽されていたエウーゴ艦隊が集結してゼダンの門に向かってゆく。

その数はアーガマを旗艦として百隻届くかどうかという所だろう。

エウーゴの膨張は目を見張るものがあるが、テイターンズと張り合うには不十分の戦力と言わざるを得ない。

それが内部分裂でニューデイサイズになった上に、毒ガス攻撃を暴露されたから格好の攻撃チャンスとなった訳だ。

「さてと、仕事をしよう」

俺は司令長官の椅子に座って戦艦ムラクモの発艦を感じる。

フォン・ブラウン港から出撃する月方面艦隊はマゼラン改10隻とサラミス改40隻の計50隻。

さらに後方からジュピトリスがついてくるといっておまけつきで、月面都市エアーズ市へ『訪問』するのだ。

『攻撃』でも『制圧』でもない。『訪問』。

月方面艦隊としては、身内扱いであるエアーズ市の攻撃は最後までしたくなかったと

いうのが建前。

実際は、エウーゴと同調する事を避けたというのが本音である。

「艦隊各艦は隊列を組みなさい。あくまで『訓練』よ。『訓練』」

「MS隊は出動準備をしつつ待機してください」

叢雲とマシュが艦隊に指揮を出してゆく。

ここにシーマ中佐が居ないのは、フォン・ブラウン防衛の為にマ・クベ中将と共に残つてもらつたからである。

今回の出陣は現存する月方面艦隊の四割程度の規模であり、整備や予備兵力温存と言つた理由の他に、この戦力でしかMSを確保できなかつたというのがある。

アナハイム・エレクトロニクスは俺達の所だけでなくエウーゴにもMSを供給しており、優先してもらえなかつたのだ。

なお、エウーゴ向けにネモを渡した結果、我々の方にはハイザックとマラサイがMSの中心になりつつある。

それでも全部に行きわたらずに、この出撃にも予備機扱いでジムⅡが配備されていたり。

ジャブローの工廠が稼働に持って行けたのは本当に大きいと言わざるを得ない。

「で、エアーズ市は我々の『訪問』についてどんな返事をくれたのかな？」

- 1 歓迎
- 2 同上
- 3 同上
- 4 拒否
- 5 拒否 徹底抗戦
- 6 内部分裂
- 3 歓迎

「カイザー・パインフィールド市長は『月方面艦隊を歓迎する』と先ほどメッセージを頂きました」

「あらあら。」

「さすがに無理とあきらめたのかしら？」

オボロの報告にステンノが楽しそうに笑う。

本来来るはずだったニューデイサイズ艦隊は来ず、彼らの大義は毒ガス攻撃で消えた。

親アースノイドではあったが、月面都市としては俺の多大な影響下にて繁栄していた訳で。

彼は正しく理念ではなく利益をとった。

だったらその期待には応じてあげるべきだろう。

「ニューデイスイズ賛同については俺の名前で赦免するように内々的に伝えてやれ。

連邦政府が何か言ってきた場合は俺が前に出る。

エアーズ市ですら許された。

ニューデイスイズからの逃亡者は加速するだろうよ」

「ずるい人」

「誉め言葉だなそれは」

ステンノの一言に俺は笑う。

エアーズ市への『訪問』兼訓練は成功裏に終わり、エアーズ市上空に整列する艦隊と、マラサイ・ハイザックという新型MSのお披露目は月面都市を誰が握っているかをこれ以上なくアピールする事になったのである。

「艦に接近するMSが一機！」

ジュピトリス所属のメツサーラです!!」

「マシユ。撃つなよ。

叢雲。動くなよ。

遊びに付き合っつてやる」

わかっているのにモニターに接近するMSが怖いと感じた。けど、俺は訓練から状況を動かさない。

俺の手にステンノの手が添えられる。

メツサーラは射程ギリギリ、訓練と言い訳が立つ所で方向転換をした。直後、彼から通信が入る。

「申し訳ございません。閣下。」

このMSを見せたくてはしゃいでしまいました」

「いかな。大佐。」

君も船団の長なのだから、ジュピトリスでどっしりと構えていたまえ」  
「まったくです。」

閣下の動じないお姿に感銘を受けました。

この失態はいずれ」

「気にするな。訓練だからな。訓練」

なお、汗びっしょりなのは言うまでもなかった。

ゼダンの門攻防戦

1 エウーゴ勝利 ゼダンの門攻略 ニューデイサイズ降伏

- 2 エウーゴ勝利 ゼダンの門攻略 ニューデイサイズ逃亡 ゲリラ化
- 3 エウーゴ勝利 ニューデイサイズ逃亡続出
- 4 ゼダンの門攻略中
- 5 同上
- 6 同上
- 7 ニューデイサイズ勝利
- 8 ニューデイサイズ勝利 エウーゴ艦隊追撃
- 9 ニューデイサイズ勝利 アポロ作戦発動
- 10 熱烈歓迎
- 10 熱烈歓迎
- 1 クリティカル
- 2 ファンプル
- 2 ファンプル

通信に大混乱が発生したのはそんな時だった。

「通信網に障害発生！」

「エウーゴの各施設からものすごい数の通信が発信されています!!」

「月面都市、サイド3、サイド6でも通信増大中!!!」

何かあったな。

それも悪い方に。

そんな事を思っていたらその理由がフォン・ブラウンのマ・クベ中將から秘密通信で伝えられた。

「たった今、ゼダンの門の背後に位置していたグリプス2よりコロニーレーザーが発射されました。」

狙いはおそらく、ゼダンの門攻略に向かっていたエウーゴ艦隊です」

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

11

コロニーレーザーでのエウーゴ艦隊の被害

36%

アーガマ判定 36以下なら撃沈 +カミーユ・クワトロNT補正

114 生存

「エウーゴ艦隊。次々に月面に帰還しています。」

アナハイムとグラナダに艦隊を集めて再編する模様です」

「損害については大体三割から四割という所でしょうか」

「アーガマも撃沈までに行っていないみたいですが、かなり損害を受けているみたいですね」

モニターには、ボロボロのアーガマが映っていた。



直撃は避けられたがカタパルトにまでMSや脱出ランチが乗っているあたり打撃の凄まじさを見て取れる。

なお、近代軍隊では三割の損害で全滅判定なんて言われて後方での再編成が必要とされていたり。

一年戦争のア・バオア・クー戦がいかにも無謀だったかよく分かる。

「あれ、絶対ジオンの内部分裂がなかったら負けていたよな」

「今、そういう感じになっているけどどうするの？」

俺のボヤキに叢雲が突っ込む。

まあ、それをなんとかするのが俺の仕事なんだが。

「毒ガスだけでなくコロニーレーザーまで撃つとこちらも反乱軍として対処しないといけないな。こまるな」

「先輩。棒読みです」

マシユのツツコミを俺は無視して、今後の方針を告げる。

まずは政治でニューデイズの正当性を剥ぎ取る。

「主の居なくなつたティターンズを乗っ取るのさ」

治安維持組織としてのティターンズは権限拡大が連邦議会で承認されていたが、そのトップのジャミトフ・ハイマンがニューデイズがらみのクーデターによつて全ての

公職から身を引いていた。

まずは、ここを掌握してニューディサイズを討つ正当性を握る。

「ただ、その為には一つ問題があるんだよなあ」

「あらあら。どんな問題なのかしら？」

ステンノの声に俺はモニターに地球を移す。

地球とグリプスとゼダンの門の位置関係を見ながら話を続ける。

「テイターンズの乗っ取りの為にはダカールの連邦議会に出向く必要がある。

ついでに言うと、ジャブローで生産中の艦隊とMSの打ち上げ先がゼダンの門の真ん前。

どうぞ撃つてくれと言わんばかりなんだよなあ」

更に言うと、月方面艦隊司令長官である俺の不在はエウーゴの本拠地である月都市攻撃のチャンスでもある。

艦隊の離脱や逃亡が起こっているニューディサイズは彼らの理念を達成するためにも残された時間で乾坤一擲の博打を打たねばならなかった。

「俺が出向いている間に、誰にこの月を任せるかな？」

シロツコは大佐の上木星船団という外様。

マ・クベは中将だけドフォン・ブラウン基地司令で元ジオン。

艦隊の次席司令のジョン・コーウエンは少将に降格している。

いかにこの艦隊が俺によって回っているかよくわかるとういうもの。

そりゃ、軍閥と陰口を叩かれるわな。

「ワイアット大將はコンペイトウから動かしたくない。

ダグラス・バーダー大將はルナ2から動けない。

となると……」

この世界線で生き残ってしまった提督に連絡を取る。

彼はレビルの後継者として連邦軍本部にて中將になっており、遠くない未来に大將になるだろうと皆が目していた。

「ワツケイン中將。久しぶりだな」

「お久しぶりです。閣下。

お元気そうで何より」

挨拶の後、即座に本題に入る。

互いに温和な表情だが目は笑っていない。

「近く地球に行くのだが、月方面艦隊の艦隊司令代理をお願いしたい」

「また唐突ですな。

理由をお伺いしても？」

「権限が拡大されているのに頭と手足がなくなったティターンズを乗っ取るのさ」

俺の企みに画面向こうのワツケインの口が歪んだ。

俺がゴツプ議員と懇意にしているのは知っている訳で、それは連邦議会で承認を求めらなければ通るだろうという事に気づかないと連邦軍将官なんてやっていない。

「艦隊司令代理の間好きに動いてもよろしいので？」

「そのぐらいの役得はあつてしかるべきだろう？」

とはいえ、私も使える連中は連れてゆくので、残った者で頑張り給え」

ハイザックとマラサイを載せたマゼラン改とサラミス改の艦隊およそ40隻については、アナハイム・エレクトロニクスと交渉して彼らの秘密基地である茨の園に隠すことになっている。

かわりに、残った艦隊を預かるワツケイン中将とどんな取引をしようとも俺は関知しない。

ワツケイン中将が月に着くと、アナハイム・エレクトロニクスの重役連中とエウーゴのブレックス・フォーラ 准将が接触する段取りになっている。

ワツケイン中将はしばらく無言の後、ため息を吐き出して了承する。

「相変わらず、閣下は一年戦争の頃から変わりませんな。

ルナ2で問題を起こして、それを処理していた頃を思い出します」

「そういえば、ずっと留守番を任せていたなあ。」

「ア・バオア・クー戦もある意味尻拭いだ」

「閣下の増援と指揮掌握がなければ、私もあそこで死んでいたかもしれません」  
「それは困る。」

「私の後始末を押し付ける奴が居なくなるじゃないか」

「そして二人して笑う。」

「事ここに至ってはテイターンズの乗っ取りと同時にいやでも政治に絡まざるを得なくなる。」

「動けなくなる月方面艦隊に信頼できる連邦軍将官は絶対に必要だった。」

「連邦軍本部の根回しはこっちでする。」

「後は任せた」

「拝命します」

月方面艦隊の欺瞞行動

56

ニューデイサイズの看破

48

ニューデイスイズが俺たちが地球に降りた事に気づいた時には、既にシャトルは大気圏内だった。

あれだけ戦艦に乗ることに拘っていた俺があっさりとシャトルで地球に降りるという選択を信じきれなかったのだ。

結果、俺達のシャトルは無事にジャブロー基地に到着する。

その後、ダカールの連邦議会にてテイターンズ総帥代理にニューソクデ・ヤルオ大將が就任する事と、テイターンズの治安権限拡大が連邦議会で承認。

ダカールの議場で俺は宣言する。

「議員の皆様にごえられた権限の重さに真摯に向き合い、この権限を地球圏の平和のために使いたい。

また、テイターンズの功績を評価しつつも、それに泥を塗り地球圏の平和を脅かす勢力の伸張を私は許容しない。

ここに宣言します。

テイターンズはその権限に基づき、ニューデイスイズを反乱軍として討伐する事を  
！

議場の万雷の拍手の中、ニューデイスイズはその政治的正当性を完全に失った。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

1 2

ヤルオ総帥代理のティターンズの反応 100で歓迎

5 2

ニューデイサイズの反応

2 3

俺のティターンズ乗っ取りだが、ティターンズは様子見、ニューデイサイズは反発と  
なった。

まあ、反スペースノイドを旗印にしているニューデイサイズにとって、スペースノイド融和政策を推進していた俺は邪魔以外の何物でもないのだろうなあ。

盤面が固まった訳で、戦いは俺の居ない宇宙で発生した。

1 ニューデイサイズによる月面コロニー落とし

2 同上

3 同上

4 エウーゴによるゼダンの門攻略戦

5 同上

6 同上

7 アクシズ到着

8 同上

9 同上

10 ニューデイサイズ コロニーレーザー発射

10 ニューデイサイズ コロニーレーザー発射

1 アクシズ

2 グラナダ

3 サイド2

1 アクシズ

ダメージ 22%

政治的影響 100で絶大



その日、夜空に一条の線が引かれた。

コロニーレーザーがまた撃たれたのだ。

今度の狙いはまだ遠いアクシズ。

観測データだとそこその被害を与えたらしい。

馬鹿に刃物ならぬ狂信者にコロニーレーザー。

外交的に実にまずい一手だが、地球市民はこの愚拳を口には出さないが歓迎したのである。

「そうよね。」

貴方みたいに地球にコロニーを落とした奴らを許せるほど人って寛大ではないもの」

ジャブローの寝室にてステンノが楽しそうに笑う。

一年戦争は人類史上最大の犠牲者を生み出した。

それからまだ10年も経っていないのだ。

「で、その上で地球で司令官はどう動くのかしら？」

叢雲が尋ねると俺は壁の地球地図を眺める。

オーストラリア大陸が一部丸く欠けているのが宇宙世紀なんだなあ実感させる。

「艦隊も戦力も温存して、アクシズに打撃もニューデイサイズが与えてくれた。手堅く行くさ。」

「キリマンジャロとニューギニア基地を掌握する」

「今度はマシユが疑問の声を口にした。」

「いいんですか？」

「宇宙に戻らなくて？」

「何が悲しくて泥仕合の修羅場に飛び込まなければならんのだ？」

「ジャブローの工廠が稼働したおかげで生産力は今だ地球が卓越している。」

「キリマンジャロとニューギニアのティターンズ基地を抑えて大軍で漁夫の利をとい

うのが一つ」

「一つ?」

「オボロが尋ね、俺は返事をする。」

「あまり使いたくない策だが、アムロやシャアやカミーユやハマーンやシロッコあたり

のニュータイプと当たる際には多分必要なる一手。」

「強化人間の確保さ。」

「研究は中止にするが、できたものは使わないともつたいないだろう?」

地球のティターンズ基地・施設の接收 52 以上で拒否

キリマンジャロ基地

22

ニューギニア基地

14

オーガスタ研究所

21

ムラサメ研究所

42

ティターンズの乗っ取りは内心はともかく、地球上の基地及び反発はついに発生しなかつた。

また、こちらもガルダに乗って各基地・研究所を訪問して慰撫に努める。

このあたりをおろそかして命令を出すとは大体反発されるのが目に見えている。

ティターンズの毒ガス攻撃をバスクの個人的犯罪に落とし込んで、ティターンズの権限が残っていたから解体するには手間が大きすぎるのだ。

「まもなくオーガスタ基地に到着します。」

シートベルトを」

ジャブローに配備されていたガルダに乗って数時間。

北米オーガスタ基地に併設されているオーガスタ研究所に到着すると、研究所所長であるエスコラ・ゲツダ大佐は歓迎の意を示した。

「ニューソクデ閣下の来訪を歓迎いたします」

「世辞はいい。」

強化人間を見せてくれないか」

こちらの空気を戦力確保と勘違いしたエスコラ・ゲツダ大佐は俺たちを研究棟に案内する。

待っていたの二人のニュータイプ。

敬礼に返礼して口を開く。

「楽にしている。」

ゲーツ・キャパ大尉とロザミア・バダム中尉。

とりあえず、能力を見たい」

ヤザン・ライラ

46+52||98

ゲーツ・ロザミア

68+31=99

という訳でうちのエース二人と演習を行う事に。

ヤザンとライラの二人である。

二人のガンダムMark 2に対して、ゲーツ・キャパとロザミア・バダムはギャプラン。

まあ普通に戦えば負けるだろうなと思っていたが、これが大善戦。

判定負けにはなったが、エスコラ・ゲツダ大佐は顔面蒼白である。

「で、説明してもらおうか？」

「は、はい。」

ニュータイプは感情面において問題が……」

なまじ感情を伝えられるが故の弊害である。

そして、ニュータイプの勘と新型機をもつてしてもまだオールドタイプの経験が戦える事をこの一戦では示していた。

「施設と身分は保証するが、このレポートはスポンサーであるアナハイム・エレクトロニクスに提示する。」

少なくともこれが解決しないと戦力として勘定できん。

あと、バスク大佐の個人的犯罪の後だ。

極力非人道的な研究は避けたまえ」

「閣下は一年戦争におけるニュータイプの戦果を否定なさるのか!？」

……失礼しました」

激高したエスコラ・ゲツダ大佐の謝罪を受け入れて俺は空を見上げる。

今頃はエウーゴによる第二次ゼタンの門攻略戦が行われているはずだった。

「否定はしないぞ。」

だが、ニュータイプの勘はコロニーレーザーを防げるのかね?」

UCまで行くと防げたりするのだが。

沈黙するエスコラ・ゲツダ大佐を後にして俺たちは二人のニュータイプを連れてオーガスタ研究所を後にした。

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

13

エウーゴVSニューデイズ

エウーゴ艦隊

アーガマ

MS搭載8機

マゼラン改 12隻

MS搭載12機×12 || 144機

アイリツシユ 6隻

MS搭載12機×6 || 72機

サラミス改 32隻

MS搭載4機×32 || 128機

合計MS 352機

ニューデイスイズ艦隊

ドゴスギア

MS搭載48機

アレキサンドリア 8隻

MS搭載12機×8 || 96機

マゼラン改 4隻

MS搭載12機×4 || 48機

サラミス改 40隻

MS搭載4機×40 || 80機

宇宙要塞ゼダンの門

配備MS 23機

グリブス2

配備MS 49機

合計MS 344機

ニュータイプ補正 搭載数以上の艦船で艦艇撃破



カミーユ・ビダン

16機撃墜

アムロ・レイ

40機撃墜

クワトロ・バジーナ

33機撃墜

合計 89機撃墜

エウーゴ352機VSニューデイスイズ344—89||255機

戦力比6:4

1 エウーゴ勝利 ニューデイスイズ壊滅 コロニーレーザー占拠

2 同上

3 エウーゴ勝利 ニューデイスイズ壊滅 コロニーレーザー破壊

4 同上

5 エウーゴ勝利 ニューデイスイズ敗走 コロニーレーザー破壊

6 同上

7 戦力拮抗

8 ニューデイサイズ勝利 エウーゴ艦隊敗走

9 ニューデイサイズ勝利 エウーゴ艦隊壊滅

10 熱烈歓迎

10 熱烈歓迎

1 クリテイカル

2 ファンプル

3 アクシズ先遣隊地球圏到着

3 アクシズ先遣隊地球圏到着

「フォン・ブラウンのマ・クベ中將から連絡。

アクシズの先遣隊がついに確認されたみたいよ。

具体的な戦力までは分からないみたいね」

ジャブローの地下司令部にて叢雲の報告に俺は顔をしかめる。

現在グリプスではエウーゴとニューデイサイズの死闘が繰り広げられていた。

アムロとカミーユとクワトロの三人のニュータイプが獅子奮迅の活躍をしていなが

ら、ニューデイサイズは崩れない。

ゼダンの門やグリプス2という拠点での防衛線というのもあるし、元々ニューデイサ

イズは連邦のMS教導団という事もあって練度は高い。

できれば、アクシズが来る前にニューディサイズが潰れてくれることを期待したのだが、ここでアクシズを放置するとサイド3のジオン共和国が動揺する。

「月方面艦隊のワツケイン中将は月方面艦隊を率いて出撃し、アクシズ先遣隊とサイド3の間に陣取るみたいです。」

同時に、コンペイトウのワイアット大将の連邦艦隊主力が出撃準備に入りました」

マシユの報告はある意味想定されたものだった。

まずはアクシズ。ニューディサイズはあくまで反乱軍扱いというのが連邦軍の基本方針である。

だからこそ、エウーゴに任せただけでなく月方面艦隊からも艦艇を分けて増強したのにこのざまである。

「ままならないものだな」

「あらあら。」

英雄つてそういうものでしょう？

お膳立てをしてくれると考えなさい」

ステンノの物言いにたまらず苦笑する。

という訳で、英雄のお仕事をしよう。

「エルラン将軍。」

ジャブローは任せた」

「お任せください」

エルラン将軍以下ジャブローの幕僚たちが敬礼して俺の退出を見送る。

廊下ではオボロが控えていた。

「シャトルの準備はできています。」

けど、艦艇に乗らなくて良かったのですか？」

ドックに入ると振動で少し通路が揺れる。

現在、ジャブローでは順次サラミス改が宇宙に打ち上げられていた。

その搭載MSはハイザックとマラサイというテイターズズの装備で固められ、現在42隻のサラミス改がジャブロー上空で待機していた。

コロニーレーザーの格好の的であるが、今の所コロニーレーザーは撃たれてはいない。

「わざわざ乗って撃たれる必要もあるまい？」

地球に降りてきたシャトルに乗り込んでシートベルトをつける。

衝撃の後宇宙に上がると、俺の旗艦『ムラクモ』が出迎えていた。

「おかえりなさい。閣下。」

荊の園に隠していた艦艇は閣下の作戦通りに動いています」

艦長代理をしていたシーマ大佐が敬礼する。

テイターンズ乗っ取りついでに昇進させたのである。

なお、『ムラクモ』以外は全部ジャブローから打ち上げられたサラミス改である。

「で、彼は信頼できるのですか？」

「信頼はしていないが、その才能は本物だよ。」

エウーゴ艦隊を囿にした上でのコロニーレーザー攻略。

おまけに、俺すら囿にするという度胸も気に入った。

だからこそ、成功するかもしれない」

「エウーゴ艦隊よりレーザー通信です！」

『コロニーレーザー周辺での戦闘でテイターンズの所属勢力が戦闘に参加して……』

「ほらな」

シロツコのジュピトリス単艦でのコロニーレーザー奇襲作戦は、その長大航続力を利用したコンペイトウルナ2経由の超迂回からの奇襲とあいなった。

コロニーレーザーが占拠できればよし。できなければ使用不能なまでに破壊してくれば、もうニューデイスサイズは無視しても構わない。

「という訳で、進路は月へ。」

アクシズと対峙するでしょう」

かくして、大艦隊を集結しつつある連邦軍はアクシズと対峙する。

なお、エウーゴとニューデイサイズの戦いは、艦艇を失ったエウーゴがジュピトリスで補給を継続した結果、MSをほぼ撃墜されたニューデイサイズ降伏という形で幕を閉じた。

完全な共倒れであり、首魁であるバスク・オムは旗艦ドゴスギアと運命を共にした。

## 損害

エウーゴ艦隊

艦艇 38隻 撃沈

MS 134機 撃墜

ニューデイサイズ艦隊

艦艇 29隻 撃沈

MS 182機 撃墜

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです 戦闘終了後のグリプスにて

「降伏した艦艇およびMSは動力を切れ！」

「ニューソクデ大将からの厳命だ！」

同じ連邦軍将兵として扱い虐待は厳禁だぞ！」

「負傷者はテイターンズ艦艇に運べ！」

「MSはもう収容できない！」

ジュピトリスが受け入れてくれるぞ!!」

戦闘が終わった後の後始末も戦闘と負けず劣らず忙しい。

エウーゴとニューディサイズの戦いは双方共倒れの果てに、シロツコ率いるテイターンズが漁夫の利を占めるという結果に終わった。

一応エウーゴは勝者のはずなのだが多くの艦艇を失って後始末のできる将官の多くを失い、この宙域を制圧しているのはジャブローから追加で送られたテイターンズ艦隊

である。

「勝つたには勝つたが……なんだこれは……」

アーガマに乗り込んでいたウォン・リーが呆然と呟く。

彼はエウーゴのスポンサーでありティターンズにも張っているアナハイム・エレクトロニクスの幹部なのだが、だからといって自分が乗っていたエウーゴが囹に使われて面白い訳がない。

「仕方ありません。」

参加艦艇51隻の内38隻が撃沈。

我々はティターンズ艦隊がなければ勝者になれなかつたのですから」

アーガマ艦長になったブライト・ノア大佐が怒りを抑えてぼやく。

マゼラン改級にアイリツシユ級の戦艦は全て撃沈され、指導者ブレックス・フォーラとヘンケン・ベツケナーの両者とも戦死となった。

月方面艦隊からの艦艇提供などで借りをつくつたのでこの二者とも前に出らざるをえず、戦死した結果エウーゴは実質的に脳死状態となったのだが、このあたりがエウーゴという組織の脆弱さを象徴していると言つていいだろう。

事実、ティターンズを吸収した形になった連邦軍はニューソクデ大将のティターンズ艦隊、ルナ2のグリーン・ワイアット大将の連邦艦隊主力、ワツケイン中将臨時指揮の



月方面艦隊の三つに分かれて誰が倒れても問題ないようにしている。

その上、ジャブローからの艦隊打ち上げでは自身を囿にしてコロニーレーザーの射線をずらす支援までしていた。

二人はそれを理解していたからこそ、漁夫の利を奪われた怒りをティターンズに向けられない。

そんな二人のいるブリッジに参加していたアムロ・レイとクワトロ・バジーナが入っている。

「お疲れ様。MS隊はどうだ？」

「艦艇に比べたら問題はないさ。」

後始末が大変だろうが、勝ったからこそその贅沢だよ。それよりもだ。ジュピトリスからの情報だ。

「アクシズがついに地球圏に接近した」

想定していなかった訳ではないがあまりにもタイミングが悪かった。

MSはまだあるがそれを運べる艦艇がなく、連戦にあるのでパイロットに負担がかかる。

何よりも、勝者であるエウーゴはこのグリプスを管理する義務がある。

実際はティターンズが行っているとはいえ、ここにエウーゴがいるからこそ彼らは下

請けに回ってくれているのだ。

「で、ニユーソクデ大将からのプレゼントだ。

ブライト・ノア『准将』。

残存艦艇をまとめてほしいそうだ」

テンプテーション艦長時代は中佐で、エウーゴ参加時に大佐昇進、准将もニユーソクデ大将の強力な後押しがあつた事があつたのは言うまでもない。

厳しい顔をして書類の一つをブライト・ノアに渡すクワトロ・バジーナにアムロ・レイが突っ込む。

「で、君はどうするんだい？

エドワウ・マス『准将』

「その名で呼ばないでくれ」

脳死状態のエウーゴ再建の為には将官が絶対に必要になる。

それを理解していたニユーソクデ大将は、偽名将官を用意するという荒業でシヤアを表舞台に立たせようとしていた。

それが分かっているシロツコは渡す時に軽蔑の視線でシヤアを見て、シヤアもそれに気づいていた。

「シヤア。気づいているんだろう？

エウーゴ艦隊は動けないが、僕には独立裁量権がある。

月に行けば、新型MSも受けとれるが、積み込む艦船の編成と指揮は将官が絶対に必要になる。

ブライトさんがここにいないといけない以上、できるのは君だけなんだ」

「わかつてるさ。アムロ。」

だからと言って、割り切れない感情があるんだ」

今から行つても間に合うとも思えないが、アクシズと連邦が戦闘を始めた時に合つかもされない。そんなタイミングだからこそ動かないといけない。

それはシヤアにも分かっていた。

「アーガマのパイロットを全員連れて行く」

「ああ。」

散々ホワイトベースを追い詰めた指揮に期待するよ。『准将』」

MSは置いてゆくがパイロットだけを連れてゆく。

月に行けばアナハイムの工場から新型MSが出て来るだろう。

それを乗せる為の艦艇の確保など、将官となったシヤアにはする事が山ほどあった。

「『バターン』が宙域を離脱します。」

独立裁量権に基づく独自行動だそうです！」

ジュピトリスの指揮席でその報告を聞いたシロッコは皮肉っぽい笑みを浮かべて言った。

「行かせてやれ。」

我々も引継ぎを済ませたら移動するぞ。

準備をしておけ」

「はっ。それで目的地は？」

オペレーターの声にシロッコは離れてゆく『パターン』とは違う場所を告げた。

「サイド3だ」

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

14

アクシズ戦力	
グワダン級	1隻
グワジン級	1隻
チベ級	2隻
ザンジバル級	5隻
ムサイ級	4隻
その他艦艇	20隻

「……思った以上に少ないな」

先行している月方面艦隊臨時指令であるワッケイン中将からの報告に俺は疑念の声を出す。

いや、一年戦争時の残存艦隊に星の屑作戦が失敗しているのを考えるとこんなものなの shouldn't ない。

その上、コロニーレーザーで打撃を受けていたはずだ。

「テイターンズとエウーゴが内戦なんてやってたから、漁夫の利が得られた訳だ。

こっちの艦隊はどうなっていたっけ？」

俺は視線を艦橋の窓に移す。

俺が率いているテイターンズ艦隊はグリプスに送った分を除いてサラミス改40隻

に、マゼラン改の『ムラクモ』一隻。

さらに荊の園に万一を考えて隠していたサラミス改とマゼラン改の40隻が合流し

て81隻。

その艦隊の目的地はサイド3ジオン共和国である。

「マゼラン改級1隻にサラミス改級13隻でこちらに合流するそうよ」

「こっちも少ないなあ……」

叢雲の報告に俺はため息をつく。

ニューディサイズ討伐に思った以上に戦力を持っていかれた。

おまけに俺が保険として戦力を荊の園に持って行ったので出せる戦力がなかったの  
だろう。

それでも連邦艦隊主力が温存されているのは運が良いと考えよう。

「で、こつちに来た理由は？」

ステンノの囁きに俺は苦笑して話す。

「簡単な話さ。」

ザビ家の帰還でジオン共和国内部の残党が蜂起するのを恐れたのさ」

一年戦争から今に至るまで、スペースノイドとアースノイドの対立は変わっていない。

グリプス戦役という漁夫の利があった事でアクシズの急膨張が始まった。

その戦力供給源は間違いなくこのサイド3である。

一応、占領という形をとっていたが、絶対ノリノリで戦力提供していたのだろうなと思ったり。

サイド3の空気 100でザビ家万歳

87

連邦への敵意 100で開戦決意

32

「サイド3のニュースだと、ザビ家の帰還に好意的印象を報道しているようです。

同時に、連邦への開戦意思は低いですね」

オボロの報告に最悪の事態は免れたと俺は安堵する。

戦えば負けない。とはいえ、戦う事自体が後に禍根を残しかねない。

これはそういうゲームである。

「マ・クベ中将を使つて、ジオン共和国を通してアクシズと交渉しよう。

まずは、彼らに選ばせる。

ジオンの亡霊か、そうでないかをな」

アクシズ的意思 100で開戦 +22 (コロニーレーザーの敵意)

30+22=52

アクシズは 月とサイド3の中間地点にてその動きを止める。

その場所はかつてア・バオア・クーがあつた場所でもあつた。

月への警戒を考へて、サラミス改級を30隻ばかりつけて月方面艦隊を月に帰還させる。

一方でグリプスからシロツコのジュピトリスがこつちにやつてきて、アムロ達が月に行つたことを知らされる。

「彼ら自身迷っているんだらうな」



アクシズの返事待ちの数日間、俺の艦隊はサイド3に留まっている。

まだ戦闘では政治の段階であり、その政治をハマーン・カーンが理解しているかが彼らの運命を決めようとしていた。

「どういう事？」

司令官室のベッドの中で叢雲が尋ねる。

暇なら気も緩むし、することをしようかという訳で。

シロツコが来ると、彼女たちもなぜか激しくなる。

「彼らにとっては地球帰還は悲願であったが、そこから先のプランはほとんどなかったのだからよ。」

ましてや、戦力で劣っているのが分かっている。

復讐するには時間がかかり過ぎ、狂うには距離が遠すぎた」

「じゃあ、彼らの選択を待ちましょう。」

「そう遠くないわ」

ステンノが俺に抱き着いて囁く。

その結果はその後出た。

アクシズの選択 52 以下で開戦

「ジオン共和国より通信です！

アクシズはグラナダ条約を受け入れるそうです!!」

マシユの報告に一同ほっとする。

これによって、一年戦争は完全に終わった。

少なくともアクシズがネオ・ジオンになるルートは完全に消えた。

全ての責任を一年戦争のザビ家に押し付け、まだ赤ん坊だったミネバ・ザビに責任がない事を保証した結果、ハマーン・カーンは戦争を避けた。

武装解除や艦隊とアクシズの処遇があるが、とりあえずZZの道はここで絶った事になる。

「さて、後始末か。

ゴツプ議員と汗をかかないとだめだろうなあ。きつと」

【短期集中リハビリネタ企画】やる夫は叢雲とステンノとマシユを連れてグリプス戦役を乗り切るようです その

15

アクシズのグラナダ条約受け入れでグリプス戦役は後始末の段階に入った。

政治面における俺とゴップ議員の頑張りの結果はこうなった。

連邦のアクシズへの反感 100ほど反発

37

反発は思った以上に出なかった。

というより、テイターンズからニューデイズとエウーゴの内戦が終わった事で無関心だったという言い方の方がいいのかもしれない。

グリプス戦役後の経済回復 + 連邦主力艦隊温存ボーナス 20

100ほど経済回復

63+20=83

グリプス戦役後の治安回復 | 連邦主力艦隊温存ボーナス 20

83 以上で治安悪化

36 | 20 || 16

かかった年月

6年

グリブス戦役終了によって経済は急速に立ち直り、治安は劇的に改善した。

テイターンズが地球上内の反連邦勢力を殲滅した事で地球の経済復興が経済立て直しに寄与することになった。

「地球環境への配慮はしないつもりか!？」

「その結果が一年戦争のコロナー落としだろうが」

連邦議会での環境保護派をこの一言で黙らせた俺とゴップ議員は経済回復を推進し、その経済回復が治安改善という効果に繋がり、さらに治安が戻るという好循環を生み出しつつあった。

皮肉な事に一年戦争のコロナー落としの結果、太平洋を中心に派手に人間が死んだ事で、地球の人間許容量は大きかったのである。

そして、人間が住める地球環境の再生はコロナー技術で応用が効く。

この地球植民政策は、連邦の権力強化と独立したサイド3やサイド6、独立傾向が強

い月面都市や他サイドとの差別化という副作用をもたらした。

独立による法的経済的障壁によって地球という巨大市場にアクセスしにくくなったこれらの勢力が政治的解決を求めて地球連邦にすり寄ってきたのである。

これらの政策実行と経済再生に6年の月日がかかった。

ニューソクデ大将の将来

1 地球連邦議員 首相就任

2 同上

3 同上

4 地球連邦議員 議会議長就任

5 同上

6 同上

7 退職 アナハイムエレクトロニクス天下り

8 同上

9 失脚

10 烈々歓迎

6 地球連邦議員 議会議長就任

ゴッブ議員と組んで動き回った結果、軍から政治家に転身するのはある意味必然だつ

た。

結果、ゴツプ議員の下で派閥を作り、それを受け継ぐ形で連邦議会議長に選出される。もちろん、連邦首相にゴツプ議員になってもらった上でだ。

「なんで君の花道を私が作らねばならんのかね？」

「だったら、ジャミトフに政権を渡しますか？」

「それは困る」

政治的取引でテイターンズから身を引いたジャミトフ・ハイマンだが、その影響力は経済界を中心に無視できないものがあつた。

彼の復権のきっかけが我々が仕掛けた地球移民政策なのだから、身から出た錆ともいう。

地球環境の悪化を危惧しつつも、経済政策によるアースノイドとスペースノイドの融和という現政策を進められるのは議会の先輩であるゴツプ議員しかおらず、俺という派閥継承者が居た事で最後の奉公とばかりに穴倉から引きずり出されたともいう。

オクスナー・クリフを首相補佐官に任命し、次の次の候補として育成すると同時に、ゴツプ>>俺>>オクスナー・クリフという政権移譲スケジュールの明確化による混乱防止と政策継承が連邦の安定化につながったのは言うまでもない。

シャア・アスナブルの未来

1 シャア・アスナブルとしてジオン共和国首相に

2 同上

3 エドワウ・マスとして連邦議会議員に

4 同上

5 エドワウ・マスとしてティターンズ指揮官に

6 同上

7 キヤスバル・レム・ダイクンとしてネオ・ジオン総帥に

8 同上

9 引退して歴史から姿を消す

10 熱烈歓迎

6 エドワウ・マスとしてティターンズ指揮官に

最大の波乱要因だったシャアの処遇だが、ジオンに帰ればハマーンがいる訳で、連邦軍将官エドワウ・マスとして生きる事に。

それを良い事に、政治家になった俺はティターンズを彼に押し付ける事にした。

「謀ったな！」

「その言葉、君の友人だったガルマも言っていたな。

因果応報を噛みしめたまえ」

この時のシャアの顔は怒りと羞恥と過去の悔恨の入り混じったなんとも言えない顔だったが、エウーゴは壊滅状態、ハマーンが帰還した事でジオンに戻れない、アムロやブライト・ノアの協力という名の押し付けによって受け入れざるを得なかったのが実情である。

縮小・再編成されて（それでもロンドベル隊よりは規模も人員も権限もある）購入したアクシズを拠点とした新生ティターンズ指揮官エドワウ・マス中將として、経済発展とスペースノイドとアースノイドの融和を眺めた彼は何を思ったのかは知らないが、ネオジオンという組織は生まれなかった事を記しておこう。

宇宙世紀0093年

「君にはもつと良い役を渡すつもりだったんだがなあ……」

「これでも大きすぎますよ。

私は英雄の誕生とそのふさわしい舞台に立つ瞬間を見たかったのです」

「呪ってやるぞ。

具体的には私の次の次の次あたりに」



「あのシヤアというニュータイプもどきが起きなかつたら、その呪いを引き受けましようか」

木星船団公社総裁。パプテマス・シロッコの木星赴任。

その見送りの席の話。

地球経済再生に伴うエネルギー需要は、その木星船団の権力を飛躍的に増大させた。

資源採取プラントだけでなく、生活環境改善のためにコロニーすら送り込んでの支援とあまりにも遠距離な為の自治権付与は、ゴツプ政権の目玉政策の一つとして推し進められ、この時はエネルギー生産地の木屋、工場などの生産地である月やコロニー、消費地としての地球という役割によって、バランスが取れていたのも大きい。

「で、この仕組みはいつまで持つのですかな？」

「よくて10年だろうよ。」

俺のやっている事は一年戦争前に時計の針を戻しているという批判も甘んじて受けるさ。

だが……」

ここで俺は言葉を切る。

眼下に広がる青い地球。

コロニー技術の応用による植林や環境改善計画は、この木星から送られてくるヘリウムあつてのものである。

「人類には癒しの時間が必要だった。

宇宙に飛び立つための癒しの時間がね。

そこから先は、子供たちに任せるよ」

「閣下、いえ首相のご活躍を木星よりお祈り申し上げます」

「まだ首相ではないよ。」

ダカールの議会演説の前だからね」

こうして、シロツコの乗ったジュピトリスが地球を離れてゆくのを見届けて、俺はダカールの議会に立つ。

引退したゴッフ首相の次の地球連邦首相として、宇宙世紀を良い方向に狂わせようとして、俺は議会にて、第一声をあげた。

「地球連邦首相。ニューソクデ・ヤルオであります……」

## 舞台と観測者

目が覚めた。

長い夢だったなあと思いつつ宮内省の自分の職場へ。

という訳で、やってきた彼の自己紹介をしてもらおう。

「NATO連絡武官のパプテマス・シロッコ大佐と申します。

夢の中ではお世話になりました。

立場と国が違えども、その忠誠は閣下に捧げましょう」

「ニュータイプだから記憶の持ち込みでもできたのかな？」

とはいえ、所属の旗を裏切れというつもりはないよ。

付かず離れず、夢と同じ程度の関係を築こうじゃないか。

よろしく。大佐。

あと、私の今の役職は宮内省技術総括審議官だ。

まあ、ティターンズでいうと、バスク大佐ぐらいだな」

「おや？」

「じゃあもつと上になげなければ」

こんなノリで互いに情報交換をする。

さて、こいつを送った女神様の努力はどんなものかと確認しなければ危なくて使えないのだ。

駄女神のがんばり 100でがんばった

63

「生まれはフランスで両親はアルジェリア出身です。

D G S E (対外治安総局) に所属しており、専門は対宗教関係です。

閣下に近づくために米軍のターニャ・デグレチャフ中将に接触しましたよ」

デグ様の事だから頭を抱えながら貸しとして送ってくれたのだろう。

対宗教関係って事は、十字教やメシア教や聖堂協会が闊歩しているこの闇鍋世界である。

それぐらいあっても不思議ではない。

なお、パプテマスというのは「宣教師」という意味である。

「閣下相当煙たがられているみたいですね。

いくつか排除の依頼が出ています。

私が潰しておきましたか。

まあ、手土産というやつですな」

控えていた叢雲とマシユの顔が険しくなり、ステンノが楽しそうに微笑む。

女三人を前にいけしゃーしゃーと言ってのけるこのニュータイプ。

そこに痺れる憧れる。

「まあ、出てくるとは思っていたけどな」

「閣下はこちらでも世界を動かせるお方だ。

当然ですな」

「で、狙っていたのは何処だ？」

シロツコの調査 100でばっちり

1 ファンブル

「それがさっぱり。

逆に潰したのを嗅ぎつけられてこっちに刺客がやってきたので逃げてきた次第で。

潰せるでしょう？閣下なら？」

おい。

それ、俺の所に刺客がやってくると言わないか？

女達の視線が殺気を帯びてきたのにシロッコは相変わらず平然としている。

こいつの場合、本当にしくじったのかわざと手を抜いたのか分からない所があるから困る。

「まあいい。」

とりあえず、セーフハウスを用意させるからおとなしくしている」

「ええ。」

何かありましたらお呼びください。閣下」

シロッコを下がらせて軍師二人を呼び寄せる。

こういう時に輝くのが軍師という生き物である。

頭は抱えているだろうが、平然としているのはさすがだろう。

「で、このシロッコを狙う暗殺者は俺を狙ってくるわけだが、どうするべきだと思う？」

陳宮の献策 89以下で成功

50

孔明の献策 自動成功

「この国が島国である事はありがたいですな。

港と空港に人を送って監視させましょう」

陳宮が即座に暗殺者を補足する為に案を出す。

ありがたい事に、ハイデッカーやクローン対魔忍やオイランロイド等で使い捨てられる人材は増えている。

それに対して孔明の方は、なかなかリスキーな案を出してきた。

「暗殺者には暗殺者をぶつけるべきでしょう」

孔明の言葉を聞いて少し考える。

その手は諸刃の剣だ。

ゴルゴ13あたりを入れられたら、対処のリスクが一気に跳ね上がるからだ。

俺がその事を考えて口を閉じていたら、孔明はその暗殺者の名前を出した。

「どうでしょう？」

衛宮切嗣をこちらに寝返らせるといふのは？」

「なかなか貴様の参謀もリスキーな案を出してくるな」

話をデグ様に秘密回線越しに振ると、デグ様の呆れ声が帰ってきた。

孔明の策である衛宮切嗣寝返りの為には、彼の背後に居るアインツベルンの事を探ら

なければならぬからだ。

欧州の錬金術の大家で、ラインの黄金持ちという厄満載のホムンクルス一族を相手にする前に、その欧州を地盤とするNATOに大きなコネがあるデグ様に話を振った結果、欧州もとても厄くなつていた訳で。

「ちなみに、俺を狙う奴つて誰です？」

暗殺者の強さ 100でゴルゴ13

53

「欧州を中心に暗躍している組織があつてな。

多分それだと私は思っている。

地理的にフランスに強い影響力があつて、我々としても潰したいが本国のアンブレラ排除のせいでそこまで手が回らないというのが実情だ。

正直に言うと、NATO内部にも奴らの信奉者が居るだろうと思つて、大急ぎでシロツコ大佐をそつちに送つたのだ」

「厄介ですな。

で、その組織の名前は？」



「ソルダ。知っているか？」

『NOIR』かよ。

対処は可能だと言おうとして、言葉が自然と出てきた。

「アンファンという組織はご存知ですか？」

デグ様が返事をするのに少し時間がかかった。

その間に調べたのだろう。

駄女神様のがんばり 100でぼっちし

43

「ああ。

南米ベネズエラとコロンビアに根を張る秘密組織らしいが、詳しいことは分かっていない。

貴様が振ったという事はそういう事か？」

「ええ。

下手したらナチ残党と繋がりがねませんよ」

話をしながら選択肢は二つに分かれた事を理解した。

南米に行くか、欧州に行くか。

その前に来る暗殺者を排除する事をメモしながら、俺はデグ様との通話を切った。

## 思考実験 対アーカード

「ちよつとした思考実験をしたい」

そんな思い付きでシロツコ、孔明、陳宮の三人を呼び寄せる。

今の所次の戦場である英国で発生するだろう地獄。一応味方なのだが対アーカードをあの少佐がどうやって潰すのかという奴である。

叢雲・ステンノ・マシユの三人と共に会議室を借りての席。

俺が覚えている限りのアーカードの情報を提示すると、シロツコが一言。

「核でロンドンごと焼くのは？」

「ありだ。」

最悪の事態にはそれを使う事を想定していた。

ある意味便利な兵器だよ。核って奴は」

孔明が考えながら口を開く。

「我々を呼んだという事は、そういう化け物相手に対抗できる英霊が居るかという事なんです。今の言葉で範囲が絞れましたな。」

要するに『ロンドンを核で焼く』程度の範囲攻撃ができるサーヴァントが、該当する

でしょう」

「となると、対軍宝具以上？」

「色々例外はあるでしょうが、それぐらいかと」

このあたりの色々はその時どっちの物語が強いかにかかっている。

『ヘルシング』の方が強ければ、対軍宝具でも殺し切れないという訳だ。

陳宮が口を開いた。

「少し視点を変えてみましょう。

おそらく、属性として吸血鬼、もしくは死霊系という事なので聖水などは効くのですか？」

「効くだろいな。殺せるかとなると微妙ではあるが。

だからこそ、核の一掃という選択肢が便利に見える。

そのあとの救助と復興は考えたくないがな」

何もアークカードを敵にする必要はないが、この閻鍋世界少佐の方が対アークカード攻撃のろくでもない手段を持っている可能性があるから困るのだ。

「たとえば、天使の軍勢が彼を仕留めに来た場合、彼は勝てない」

俺はここで口を閉じる。

『ヘルシング』 十字軍よりたちが悪い本物の天使たち。

これはアーカードでも勝てないだろうと判断している。  
シロツコが俺に質問する。

「どうしてなんです？ 閣下？」

「補正の差だ。」

欧米世界におけるハルマゲドンの天使。

その信仰強度は終末論もあってかなり強い。

で、ロンドンを潰す大災害が起こってみる。残った人間は間違いなく神にすぎるぞ。

かくして、信仰力を得た天使たちは容赦なく天使に従う者以外は皆殺しと」

話していてだんだんと思考が見えて来る。

この話、問題なのはロンドン壊滅ではなく『ヘルシング』原作では発生しえない天使たちの総取りという可能性なのだ。

特に、天使とあの少佐が組んでいるというか、分かってあの少佐踊ってやがる。

ハルマゲドンなんて戦争狂にとって最高の舞台だろうからなあ。

「面白そうな事をやっているではないか。弟子よ」

呼んだ訳もないし、いつから居たあんだと言いたいのだが、俺は鬼一法眼に突っ込んでも喜ぶしかないのが分かっているんで、そのまま話に加える。

「次の戦場である欧州での仮想敵に対する思考実験ですよ。」

次の話題はこいつの霊核を数百万のゾンビか死霊か吸血鬼か分らないものの中から見つけて貰えるかという訳で」

俺の次の言葉に鬼一法眼以外の人間が首をひねる。

鬼一法眼が笑顔で皆の疑問を口にした。

「つまり、その数百万の群れの中から一つを選んで、弟子が持つ槍兵の槍が届くかどうかという事じゃろう？」

簡単な事ではないか。

当人に聞いてみればよい」

という訳で、ランサーのクー・フリーンを呼んでくる。

当たり前のようにバニータイツ師匠もついてきたがいつもの事なので気にしない事にした。

『刺し穿つ死棘の槍』は、発動すれば確実に当たるぞ」

「ただ、その発動条件、満たすのは難しいがな」

クー・フリーンの返事に対するスカサハの突っ込みは事実で、槍そのものの距離まで入らないと発動しない訳で。

となると、近づくために数百万のとりまきをどうするかが問題となる訳で。

「そう案ずるでない」

さも当然のように、バニータイツ師匠は真顔で言う。

説得力はみじんもないが、彼女の言葉は俺たちが見落としていたある事を思い出していた。

「戦場がロンディニウム、いやロンドンなのだろうか？」

地域補正だったか、かの地に行けば私もこいつも宝具の一つ二つぐらい増えるだろうよ」

## 思考実験 対ロンドン

闇鍋だからこそ怖いケースが有る。

ロンドンが戦場になる。

つまり、複数の世界レイヤーが交わる訳で、F G Oのロンドンと混じったりしたらなんて考えてしまうのも困りものである。

せっかく集まった面子で、このまま思考実験として第四特異点が混じってソロモンあたりとカチ合うケースも考えてみることにした。

「まあ、大丈夫じゃろうて。

向こうの弟子にも儂がついておるからな」

気楽に言つてのけるのが鬼一法眼である。

今の藤丸立香ならば、鯖もそろっているし、突破は不可能ではない。

問題なのは、あの瞬間にソロモンをぶん殴る事が可能な訳で、R T A的にクリアできないかというそんな試みである。

俺の考えに、孔明が口を開いた。

「可能かどうかで言えば可能だろう。



だが、デメリットも複数存在する」

そんな感じで孔明がデメリットを提示する。

「たとえば、複数の世界レイヤーが交じるならば、第四特異点だけが交じるとは思えない。もつとひどいのが混じった場合、そっちの対処に追われて手が出せないなんて事もありえる」

そういうえば、拾ったという言い方はよくないが来ているんだよなあ。

メアリ・クラリツサ・クリステイ。

『漆黒のシャルノス』のロンドンが混じったら対処の全力がそっちになりかねない。

あれ、ニヤル様案件だし。

「それよりも魔法界がらみの驚異も気をつけたほうがよろしいかと」

すでに混じっているハリポタ世界だが、あれに驚異なんてあったかと首をひねったら、忠告してくれた陳宮がため息をついた。

『服従の呪文』。

あれはそれがあるだけで驚異となります。

裏切りのリスクが格段に上がります」

この呪文はかけられたかどうかの見分けが困難で、それゆえに英国魔法界に壮絶な疑心暗鬼を撒き散らしたといういわつくつきの魔法である。

たとえば『ヘルシング』ならば、吸血鬼になりたいもしくははしてもらったことである種の踏み絵を踏まされるのだが、この呪文にはそれが無いゆえに『服従の呪文にかかつていたんだ!』という言い逃れが可能という所が厄介なのだ。

「シロツコ大佐。」

NATOはそのあたり対策していると思うか?」

「していたら、私はここに来ていませんな」

俺の質問にシロツコが即答する。

そうなると外部から信頼できる戦力を供給し続けるしかないだろうと結論づけて頭を抱える。

「戦力集結地は十字軍が押さえているよな。当然」

『ヘルシング』の第九次空中機動十字軍だけで終わるわけがなく、メシア教の天使軍団に『とある』の十字教ローマ正教の連中も出てくるだろう。

あとと聖堂教会に、『お・り・が・み』の神殿協会も喜んで参加するだろう。

「あれ?」

これ、ガチでアーカード負けるんじゃない?」

俺のぼやきに地域補正でやる気十分のクー・フリーンとスカサハが同時に声をだす。

「大将。安心しろ。」

あの地で負けるほど、俺の力は弱くはねえ」

「同じく。」

我が影の城は天使ごときで抜けんよ」

うん。その言葉に勇気づけられるが、肝心なことを指摘しようと思つたら、シロッコが指摘してくれた。

「お二方の武勇を疑うつもりはない。

だが、お二方を含めた閣下をどうやって英国に運ぶかが問題なのだ」

元々の計画が、英領ジブラルタルから出港して、空母に送られるアーカードを回収して送り届けるという計画だった。

だが、ここまで閻鍋だと、アーカードを送る事自体がデメリットになりかねない。

それは、裏返せば、単独で英空母シージャックを対処しなければならぬ事を意味していた。

「そして、介入する場合、どうしても建前が必要になります。

現在の閣下の地位ならば、政治は切り離せないでしょう。

そのあたりの根回しをおろそかにすると、有象無象に引きずり降ろされますぞ」シロッコの指摘に俺は頷くしかなかった。

ステンノが楽しそうに微笑む。

「あらあら大変ね。英雄って人は」

「それも仕事さ。」

ターニヤ・デグレチャフ中将に連絡をとって根回しを始めておこう」

孔明が横から口を挟む。

「できれば、英国政府及び軍からの介入要請があつた方がいいだろう。

外交筋と軍はそれで黙らせられる」

「だったら、こちらに來たシエルビー・M・ペンウッド提督にお願いしてみては？」

「そうだな。マシユ。手配してくれ」

マシユの進言にOKを出すと、今度は叢雲が口を開く。

「一個気になっているんだけど、この問学園都市から持ち去られた聖杯。

あれロンドンに絡むってことないわよね？」

「……」

その質問に答えられる人間はこの場に誰もいなかった。

## 思考実験 対ミレニアム

思考実験は続く。

という訳で、一番厄介なミレニアムというかあの少佐相手の思考実験である。

「弟子よ。」

その少佐とやらはそこまで恐れる者なのか？」

鬼一法眼のツツコミに俺は肩をすくめながら答える。

何よりも少佐の特異性を理解しないと話が始まらない。

「『手段の為ならば目的を選ばない』。

つまり、英国上陸という手段を肯定するならば、何処の誰とでも組むんですよ。こいつは」

この闇鍋世界においてこれほど厄介な敵は存在しない。

つまり、ありとあらゆる英国の敵が少佐という旗印を利用して集まって、戦って、それぞれの目的を達成しようとする。

たとえば、メシア教あたりはその戦いを千年王国のきっかけにしたいだろうし、英国魔法界では『名前を言っではいけないあの人』ことヴォルデモート卿が三大魔法学校対

抗議合を利用して復活を企む訳で、アンブレラの技術が流れ込んでいる上に各地のネオナチ組織も接触しているのだろう。

というか、狼男にチェシヤ猫が居るからそっち系の戦力持つている可能性が高いんだよなあ。

『完全なる世界』も下手すると協力しかねんのだよなあ。

魔法・魔術的に要衝となった英国が潰れる事で魔法世界と繋がるゲートが崩壊できると考えるのならば実にめんどくさい。

「そこまでめんどくさい敵ならば、さっさと潰してしまえばいいのではないのか？」  
いい感じの脳筋提案をバニースカサハ様がしてくるので、孔明に振る事にした。

このあたり脳筋にも分かるような説明をしてくれるのでありがたい。

「敵の無限湧き」

「なんだそれ。最高じゃないか！」

あ。賢い脳筋ことクー・フリーン兄貴が喜んでら。

陳宮がさりげなくフォローを入れる。

「クー・フリーン殿の武勇は疑うつもりはないのですが、マスターの魔力が持たない。

また、魔力を別の力で代替したとしても、かの勢力がそれを狙わぬ理由がない訳で。

守る場所は多く、攻め手はいつでもどこでも攻められる。

これはそういう話でございませう  
さすが軍師。

このあたりの言い回しがとても上手い。  
そんな訳で、俺は白旗をあげた。

「俺一人じゃ勝てんな。」

素直に援軍を呼ぶか」

それでピンと来たのがシロツコである。

元NATO軍人なだけにすぐに察したらしい。

「イスラエルの諜報機関ですか？」

「ああ。」

あの少佐はアーカードしか興味がないだろうが、こと第三帝国となればあの国が黙っている訳がない」

『ヘルシング』における英国とヴァチカンのミスはイスラエルを無視した事だろう。まあ、米国にすらああいう仕掛けをしていたミレニアムだから、イスラエルあたりにも仕掛けをしていそうな気がするが。

とりあえず、デグ様経由でイスラエルの動きを確認してみよう。

イスラエル諜報機関の動向 100でガチおこ

97 クリテイカル

「あー。奴らだがぶちぎれたらしくて、最高のスナイパーを雇ったそうだ」

あつ……奴らもかわいそう……ん？

そこで気づく。

おそらく過程でミレニアムが潰されるのは理解できるのだがターゲットは誰だ？

1 少佐

2 同上

3 ワルター・フォン・オーベルト（ゴルゴ13）

4 ワイズマン（ヒットラーの復活）

5 ヒットラーのクローン（ヒットラーの復活 ゴルゴ13 スプリガン）

6 ヒットラーの魂の入った聖杯（スプリガン）

結果 6

「ヒットラーの魂が入った聖杯だぞうだ」



「え!？」

あれ、アーカム確保失敗したんですか!？」

「したらしいな。」

彼への依頼がそれならばそういう事なのだろう」

あー。

このあたりからアーカム内部の路線対立の混乱が発生するのか。

となると、確保してそのまま流されたな。

「上はどう動くので?」

『死人が生き返ってはならない』そうだ。

だからこそ、ネオナチ警戒で動くしかないし、こっちはアンブレラの処理で手一杯だ。

ラクーンシティに特別監査チームの派遣も検討している」

それ『バイオハザード』が始まるって言わないか?

俺の無言にデグ様は転生者特有の思考の欠陥を解説して見せる。

「正しい事をオールインで突っ込むには証拠が必要なんだ。」

特にウイルスのマスターデータ研究が行われていただろうラクーンシティの制圧はバイオハザードを起こさない為にも確実にかつ迅速な対応が求められる訳だ。

こっちは、それがらみで動く事ができんよ」

「ちなみに、学園都市から奪った聖杯どうになりました？」

1 スノーフィールド

2 同上

3 同上

4 アーカム

5 ラクーンシティ

6 どないしよ？

結果

5 ラクーンシティ

「何故かスノーフィールドに運ばれずに、ラクーンシティで消息を絶った。

特別監査チームを派遣する理由の裏がこれだよ」

厄介なのは国内なのでデグ様の所属する軍の出勤ができないという点。

出勤しても警察の特殊部隊が先でそのあとが州兵、デグ様の海軍の出番は基本回つて

こない。

デグ様との電話を終えて改めてみんなに告げる。

「という訳で、選択肢が二つある。

欧州か米国かだ」

「その前に、貴方を殺しに来る連中を返り討ちにするの忘れていない？」  
「あ」

叢雲のツツコミに俺は綺麗に忘れていたそれを思い出し、ステンノが俺の間抜けな声に失笑したのだった。

## 思考実験 対ゴルゴ13

「ちなみに、貴方がゴルゴ13に狙われたらどうするの？」

叢雲の質問に俺は両手を上げて降参する。

これだけは素直に勝ち筋が浮かばないからだ。

「まあ、無理だな。

素直に撃たれるさ」

ゴルゴ13の厄介さはあらゆるエキスパートだけでなく、きちんと事前情報を集めてその上で手を打ってくる用意周到さにこそある。

更に調べてゆくと、彼のスタンスというか立ち位置が見えて来る。

「彼は基本歴史の要人を狙わない。

狙うリスクが高過ぎるからだ。

かといって歴史が動く影の人物はターゲットに入る」

「あらあら。

じゃあ、貴方ピッタリじゃない」

「大丈夫です。

先輩は私が守ります！」

俺の説明にステンノとマシユが合いの手を入れる。

とはいえ、叢雲を入れたこの三人を使つてもゴルゴ13には勝てないだろうなと思つたり。

「ありがとう。マシユ。

まあ、そんな訳で、一番いいのはゴルゴ13に依頼しなくてもいいように失脚の穴をあけておく事だったりする」

ゴルゴ13への依頼は基本一回のみで、依頼主と再度会う事を彼は望まないからだ。彼への依頼料は20万ドルから300万ドルで、政府要人扱いである俺への依頼だと300万ドルの方だろう。

一ドル100円計算だとおよそ三億円。

政府要人への暗殺料金としてはなかなかの金額で、経費申告なんてできないこれを裏の金で用意する必要がある。

で、俺の失脚を企む連中でその目的が欲望ならば三億円をケチろうとするだろう。

頭があるならば、俺が用意した穴を突く方に行くだろう。

「失脚の穴って何です？ 閣下？」

シロツコが聞いてくるので俺は素直に告げる。

合法的に失脚させられるのならば、それに越した事はないからだ。

「今の俺の身分は宮内省の技術総括審議官だ。

新設組織でその上外様だ。

省庁の人事を考えると、数年で席を譲る事が確定しているんだよ」

もう少し言うとうと、室戸文明事務次官のスカウトという形だから彼が席を去れば必然的に席を去る事になる。

なお、彼の出世すごろくではもう内閣官房副長官に上がるか、立候補して議員となるか、そのまま退任して天下りの三つしかない。

そう考えると数年で去らねばならない椅子である。

「ちなみに、自衛隊の場合の席は？」

叢雲の質問に俺は考えながら答える。

叢雲とマシユ風の所有からここは絶対に離れられない所である。

「海将補相当官で、ここは動かないだろうな。

これは自衛隊側も手放したくないだろうから、守ってくれるだろう」

今年の人事で甲賀隴一佐と雅羅派詩舞一佐が誕生するし、デグ様とシロツコというコネもある。

一番守ってくれるのが多分ここだ。

「もう少し言うと、俺を暗殺する場合地位や金ではなくて、叢雲やマシユやステンノたちを得たいはずなんだよ。

そうになると、俺を殺す前に一手間が必要になる」

このあたりは俺との契約があるのでこれを破棄して奪い取る必要がある。

『破戒すべき全ての符』で奪い取るのは可能ではあるが、従うかどうかは別である。

まあ『お国の為に差し出せ』あたり言つてきそうな空気もあるが、この高レベルを従える代わりが見つかるとも思えない。

そういう所からも、俺を失脚させたい連中がゴルゴ13に依頼しにくい所なのだろう。

「あれ？」

ならば、どうして先輩を狙う暗殺者がやって来るんですか？」

マシユの疑問に答えたのは陳宮だった。

「それは簡単です。

依頼主にとって、あなた方の所有という価値に重きを置いていないのです」

このあたり知恵と欲が足りない連中の特徴ともいえる。

今の俺が持っているものの価値を理解できずに排除しようとしている訳だ。

まあ、仕掛けた連中がメシアとかそつち系だから、叢雲とかマシユとかステンノをと

るつもりはないのだろう。

「さてと、そろそろ現実に戻るとしよう。」

俺とシロツコ大佐を狙う暗殺者への対処だがどうする?」

俺の質問に陳宮が答える。

今までの話の間に策を考えていたらしい。

「この手のは守っていたら負けます。」

国内に入ってきた時点で攻めるべきです」

「任せた。」

現場指揮はシロツコ大佐。君がやるといい。

ハイデッカーとオイランロイドの兵を一個小隊用意するから排除してみせろ」

「了解しました」

暗殺者排除

ゾルダの暗殺者の工作

4 3

シロツコ指揮の襲撃

4 6



数日後。

シロツコ指揮の襲撃チームがソルダ暗殺者の排除に成功したという報告を受ける。

モブ暗殺者だった事でとりあえずは安堵するが、そのうちノワールを送り込んでくるのだらう……あ!?

こいつらの聖地、ピレネー山脈の麓じゃないか。

英国に渡る拠点であるジブラルタルとは目と鼻の先である。

これ、潰しておかないと駄目だらうな。きつと。

デグ様に進言してNATO軍内部の浄化と合わせてやってもらおう。

## 衛宮切嗣探索 その1

国内にとどまって麻帆良学園のクロエ・フォン・アインツベルンと接触したがっている衛宮切嗣対策を考える事にする。

こいつが国内に居るとどまっている事で、変な所で足を引つ張られかねないからだ。

衛宮切嗣の隠蔽能力 56

やる夫側の搜索能力 28

「……見つからないな？」

衛宮切嗣の搜索は国内の警察関係を利用して居そうな冬木市や麻帆良学園都市周辺を重点捜査していたが、空振りに終わる。

見つけて捕まえてお話というシナリオは最初から頓挫する事になる。

「さて、これをどう見る？ 陳宮？」

この件は警察出向組である陳宮が指揮を執っていた。

陳宮はあっさりと空振りの理由を説明した。

「この国の警察は優秀です。」

衛宮切嗣が裏社会を経由して入国しているのは間違いないとして、その動きを捕まえきれないのは、その裏社会に未だ留まり続けているからでしょう」

具体期には学園都市あたりだろうか。

また、異界に隠れているという可能性もある。

「あと、協力者が居ますな。」

向こう側に」

ここまで探して見つからないという事は、衛宮切嗣側に協力者がいる事は想像に難しくない。

「奴らが隠れている理由は？」

俺の質問に陳宮はあっさりと言う。

このあたり軍師系を得ると考えなくていいというのが便利である。

なお、孔明は行政官であり、シロツコは軍人である。

「マスターが居なくなつた後の方が動きやすいからでしょう。」

急ぐ必要がないというが一つ」

ここで切つて陳宮が実に意地悪そうに笑う。

こういう時の陳宮は実に楽しそうだ。

「もう一つは、麻帆良学園都市の警備が厳しくて手が出せないのでしょうか。」

あそこは今や学園都市以上の魔境ですからな」

現在の麻帆良学園都市はテロ事件の捜査による自衛隊の駐屯、メガロメセンブリア元老院から送られたアリアドネー魔法騎士団との摩擦が発生。

更に麻帆良学園都市の結界を利用した索敵を得意としたエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルに魔人ヴィゼータ、対魔忍にニンジャ、果ては水着剣豪まで現れる魔境である。

近づくだけでも一仕事なのは言うまでもない。

「陳宮。」

お前が衛宮切嗣側の軍師ならどうする？」

「とにかく混乱を狙うしかありませんね。」

問題なのは、その混乱の結果としての現状があるので、我々の警戒を解く必要があります」

現在の日本はかなりの厳戒態勢下にある。

若狭湾で発生したミサイル誤射事件や太平洋でのタンカージャックと来て、麻帆良学園都市でのテロである。

これらのテロによって政権交代が発生した結果、現政権はその厳戒態勢を緩めてはい

ない。

なお、その体制で裏側をしつかり見張っているのが俺が居る新設された宮内省であり、ここの稼働で裏連中がおとなしくなった事は現政権の評価に繋がっていた。

「……発想を変えよう。」

陳宮。衛宮切嗣を味方に引き入れるならばどういう手がある？」

「一番簡単なのは、アインツベルンを落とす事でしょう。」

かの地を落とし衛宮切嗣の希望となっているだろうイリアスフィール・フォン・アインツベルンを入手すれば、向こうから接触してくるでしょうな」

なお、アインツベルンの本拠地は欧州のドイツにある。

俺はわざと言葉を切つて確認する。

「この、時期の、欧州、に？」

「ついでに、日本政府要人の、マスター、が」

俺の口調を真似て陳宮が答える。

そして二人してニヤリと笑った。

「無理だな」

「そう言うと思っていました」

かくして、この時点での衛宮切嗣引き込みを俺は一旦放棄したのである。

「話を変えるが、俺が欧州なり米国なりに行った際の体制はどうなる？」

「孔明殿に感謝ですな。」

彼を残しておけば、少なくとも国が亡ぶという事はないでしょう」

孔明が生きている間は少なくとも蜀は残っていた。

そのぐらいの才能がある行政官だからこそ、官僚組織が整っているこの国の官僚として少なくとも俺の不利にはならない立ち回りをそつなくこなせるだろう。

胃薬は手放せないと思うが。

「ついでだ。」

俺は米国と欧州どちらを先に片付けるべきだと思う？」

米国 65

欧州 8

「米国でしょう。」

この国は米国との関係が深すぎる。

その上で、マスターから聞いた話では米国から核が撃たれる事になっていきます。

孔明殿の言葉ではないですが、魏を前に呉と蜀が争うようなものです」

それを三国ができる前の陳宮が語るといふこの違和感たるや。

それでも説得力があるのが軍師たる陳宮の凄みなのだろうが。

「あと、この国と米国は同盟関係にあるので、介入については欧州よりもやりやすい。

欧州で何かある時に米国が健在と健在でない場合は難易度が段違いです。

同盟国ならば、警戒はしつつもこちらから手を差し伸べて恩を売る程度の事はして置いて損はないでしょう？」

「そうなるよ、米国ラクーンシティのアンブレラ査察への関与だろう。

その方向で動くから手配を頼む」

「かしこまりました。マスター」

デグ様もいるし、ジミー・ハーディ大將も居る。

何とかなるかなと思っていたが一ついやな妄想がよぎった。

(……『ARMS』まわりが入ったりしないだろうな?)

サイコロ次第なので、俺にも多分女神にも分からない質問を俺は忘れる事にした。

## 鯖整理 その1

いろんなものが闇鍋になっているこの世界だが、俺たちの裏では選ばれなかった藤丸立香による人理修復作業が進んでいたりする。

同時に、カルデアスタッフの回復や鯖が増えたので、俺たちも状況確認をしようという事になった。

藤丸立香支持率 70%

現在攻略進捗

1 ロンドン

2 同上

3 同上

4 北米

5 キヤメロット

6 イベント

1 ロンドン

A チーム回復状況 100で全員回復



「お久しぶりです。先輩」

「お久しぶりというべきなんだろうな。」

「元氣そうだなによりだ」

麻帆良学園のダイオラマ魔法球で待ち合わせをする事になったが、いくつかの特異点を攻略した彼女は何時の間にかマスターの顔にすっかりとなっていた。

その隣にいるマシユともう一人……少し言葉に詰まったが双子のようなお二人に一応声をかける事にした。

「顔を合わせる事はありませんでしたが、はじめまして。先輩」

「よろしく先輩……って同時に喋るな！私!!」

つまり、鯖になる前の芥ヒナコと水着鯖になったぐっさんである。

これをアドバイスしたグランドろくでなしの言葉を借りるならば、先に水着ぐっさんが来て、色々暴露されたんで鯖になる前の彼女を起こしても問題ないだろうという感じだ。で起こした訳で。

事情を知った後、この二人同族嫌悪よろしく派手な大喧嘩をしてグランドろくでなし

を大爆笑させたらしい。

「一応、後輩は認めているし、協力もするわよ」

「条件もあるけどね」

その条件と言うのが、彼女のこの世界への残留。

この闇鍋世界ならばパイセンの思い人に会える可能性は高いからだ。

何なら、呼び出しも可能という事で、この世界とカルデアが繋がっている間は協力するという訳だ。

「顔見せも兼ねてだけど、少し迷っているのよ。

良かったら相談に乗ってくれない？」

この場所に来ていたオルガマリー・アニメスファイアが場を仕切る。

彼女かこちらの世界に残る事で、魔術資源やオカルト系希少アイテムの供給、スタッフたちへの生活・医療物資の供給が行われていた。

今では麻帆良学園に工房を用意し、いろんな世界の技術や知識吸収に忙しい彼女だがカルデアの所長としての責務は片時も忘れていない。

「あなたたちの情報提供で、次の特異点であるロンドンの座標は見つけたわ。

そして、ここで魔術王と会合する事になる……間違っていないわよね？」

オルガマリー所長の確認に俺は頷く。

迷っているのはここらしい。

「その際に魔術王にこちらの世界を観測される可能性があるわ」

その未来を考えなかつたと言えば嘘になる。

この世界はF G O側というかカルデアの観測からすれば特異点であり、最終的にカルデア側と切り離される事が確定している世界でもある。

そこから先は箱の猫であり、二部の人理漂白で消えるかどうかはサイコロ次第なのが、カルデア側からすれば一度人理焼却を逃れた世界をまた危険にさらすのかという意見も出たという。

その意見も我が身可愛さからこっちに逃れたいという裏事情があつたりするが、それを否定する事は俺はできないししたくない。

「ある程度の人理修復作業が進めば、魔術王が目をつける事は想定していた事です。

気にしないで人理修復作業を進めてください」

どうせ、マーリンというハッピーエンド至上主義者がこちらの都合を考えないでこの世界を捻じ曲げた後である。

魔術王にばれるのが早いか遅いかは誤差の範囲……ん？

「ロンドンっ！」

「そうなの。ロンドンなのよ。」

貴方たちの方で話題の」

どこその少佐が第二次アシカ作戦を企み、とある王室ではクーデターが勃発し、三大魔法学校対抗試合が行われるこの時期のロンドンである。

やばい。厄ネタしかない。

「理解はしました。

その上で、要求は？」

手をこめかみに当てながら俺は話を促す。

藤丸立香が意を決したように一歩前に出て告げた。

「先輩の持つ霊基データをお借りしたいのです」

現在の藤丸立香の鯖はこんな感じである

シールダー

マシユ

セイバー

沖田総司

アルターエゴ

沖田総司

バーサーカー

茨木童子

アサシン

酒呑童子

アーチャー

エミヤ

バーサーカー

土方歳三

セイバー

斎藤一

アサシン

鬼一法眼

キャスター

クー・フリーリン

バーサーカー

清姫

ライダー

ブーディカ

アーチャー

ダビデ

ランサー

虞美人

キャスター

マーリン

えらく日系鯖が偏っているが、ある意味最初の召喚があれだから仕方ないのかもしれない。

同時に、水着ぐっさん経由でクリプターの情報を知ってしまったカルデア側は警備強化に力を入れる事に。

こちらのホムンクルスやドロイドを種火と交換で警備として入れて新選組連中に率いらせる事で内部の反乱の目をつんだり、カルデアに残る芥ヒナコが残った鯖を使って種火や素材集めに精を出していたが、何かあるか分からないロンドンで動くにはまだ鯖が足りないと判断したのである。

「マーリンが居るのに？」

「マーリンが居るからなのよ」

俺の質問に即答するオルガマリー局長。

闇鍋世界だからこそ、『マーリンが望むハッピーエンド』と『カルデアの望むハッピーエンド』と『俺が望むハッピーエンド』が違うなんて事が起こりかねない。

少なくともロンドンではマーリン初期投入なんてリスクを取りたくはないというの  
は理解できた。

「あと私の鯖も欲しいのよ。」

具体的には項羽様」

知ってた。

パイセンの理由はそれで充分である。

## 鯖整理 その2

俺と藤丸立香の顔が強張りながら笑顔で譲り合う。

「これから大変だろう。

全て差し上げよう」

「いえいえ。これは先輩が苦勞して集めたものではありませんか。

ぜひ先輩が」

笑顔の押し付けあ……ゲフンゲフン。

そのネタとなつてゐるのは、エリちゃんシリーズである。

エリちゃんことエリザベート・バートリーは聖杯ゲッターであると同時に多くの鯖が複数存在するネタ鯖である。

今、俺が持っているエリちゃん鯖は具体的にはこんな感じ。

エリザベート・バートリー 槍

ハロウィン・エリザ 術

ブレイブエリザ 劍



シンデレラエリザ 騎

メカエリちゃん 一号・二号 分

「ほら。綺麗にサーヴァントの戦力を強化できるじゃないか。

何が不満だ？後輩よ?」

「それをいいですか!?先輩!!

エリちゃんを思い出したら、確定でハロウインに誘われるじゃないですか!!

先輩もあれを見たくないですよ?」

「よくわかってるじゃないか!後輩。

あれを見て頭を抱えた俺の気持ちはよく分かっただろうから遠慮なく持つてゆくと

いい」

「いえいえいえ。

そこは頭を抱えた苦勞こみでどうか先輩が封印していただけると……」

多分この場において、俺と藤丸立香の間で記憶がフィードバックされて、エリちゃんからみの情報が共有されてゆく。

あのハロウインの惨劇が実体験として刻まれているのだろう。

「ね。ねえ。

あなた達がそんなに譲り合っているものって何なの？」

俺たちの譲り合いにしびれをきらしたオルガマリー・アムスフィアが地雷を踏んでしまい、俺と藤丸立香の声がハモる。

「チエイテピラミッド姫路城」

その瞬間、カルデア側の全員に共有される『存在しない記憶』。

なお、何でかという仲間外れはいやなのだろう。叢雲もすっかりとそれを見た。彼女がおぞましい何かを見た顔で呟く。

「なにあれ？」

「……チエイテピラミッド姫路城よ」

「チエイテピラミッド姫路城です」

ステンは楽しそうな顔ながら目が泳ぎ、マシユ風は何か全てをあきらめた顔でそれを言うあたり、察してほしい。

もちろん背後にメカエリちゃんが立っている奴である。

あれはSANチエックが必要だと思うのだがどうだろうか？

「ところで先輩。

確認なのですが、今、エリちゃんはどちらに？」

「俺の世界だと、異界になったプリズマ・コースで遊んでいるはずだが？」

俺の首筋に冷や汗が垂れる。

藤丸立香の声が震える。

「じゃあ、あれ、何です？」

おかしい。

いつからこの話はホラーになったのだろう？

藤丸立香の指の先には……

「うん、と……九紋竜エリザー！クラスは、プリテンダー？よろしくお願いします！目指せ梁山泊！です！逆らう悪は、皆殺ちだわ！」

何が起こったかよく分からないが、俺たち二人には嫌でも理解した事がある。

つまり、エリちゃんがまた増えたという事だ。

なお、攻略は藤丸立香が行い、エリちゃんシリーズを全部押し付ける事に成功したのだが、エリちゃんたちは俺たち両方に絡むため負担はあまり変わらなかった事を記しておく。

## 鯖整理 その3

まあ、ほほえましい一幕から始まった鯖整理だが、そこからは比較的穏やかに進んだ。「こちら側が持つていかれると困るのは、ステンノ・マシユ・モードレッド・ドレイク船長・ジャンヌ・賢王様・ダヴィンチちゃん・孔明と陳宮ぐらいかな」

このあたりは純粹にこちらの世界で物語を作つてしまつた鯖である。引き抜かれると困るといふか情があるといふ奴で。

「じゃ、じゃあ……」

とオルガマリー・アニメスフィアが喜色ばんだ声をあげた所を、向こうに勝手に住み着いたマーリンの手が制する。

「忘れてはいけない。」

彼らの旅が成功したのは、彼とサーヴァントの絆が大きかつた事を。

彼のサーヴァントを使った結果、彼女の物語が彼の物語に変わつてしまつたら本末転倒だろう？」

マーリンの懸念ももつともだ。

俺は途中で離脱したマスターでしかないが、今の藤丸立香はまさに旅の途中である。

俺の物語としてエンディングが途中離脱に変わるの、ハッピーエンド至上主義のマーリンとしては許せるものではないだろう。

「一騎。

それ以上は影響が読み切れないからそれが限界だよ」

当たり前のようにいるマーリンが仕切るが、なんでこいつが仕切っているんだと突っ込んだらいけない。マーリンだからで片づけていい問題である。

多分これフレンド扱いなんだろうなあと思いつつ、候補はこんな感じになった。

劍

劍王・アルテラ・伊吹童子

弓

清少納言・水着王

槍

ブラダマンテ・エレシユキガル

騎

メイド王

術

キャストリア・紫式部・シエヘラザード・玄奘三蔵

暗

刑部姫

他

アマール・スペース イシユタル・魔王信長・シトナイ・沖田オルタ・メルトリリス・  
ジャツク ド モレー・水着BB・アビゲイル

1 劍

2 弓

3 槍

4 騎

5 術

6 暗

7 他

8 どないしよ

8 どないしよ

1 グッド

2 バッド

1 グッド

「うーん……」

「どれを選ぶべきか……」

オルガマリー・アニムスファイアと藤丸立香があーでもない、こーでもないと悩む事十数分。

その声が聞こえてきたのはある意味当然と言えよう。

「ちよつといいかしら?」

先輩面が入って来る水着虞美人だが、何気に怒っている顔から察する。

あ。ギャグの時間だ。

「何で項羽様が入っていないのよ!」

「そりゃ引いていないから」

「引きなさいよ!全力で!!」

じゃあ、引いてみようという事になった。

俺を召喚者に、出た鯖全部藤丸立香が持つて行くという事で。

「あ。光った」

虹である。

この時のピックアップは……あっ……

「……私を召喚したのですね。

バーサーカー、モルガン。

妖精国ブリテンの女王にして、汎人類史を呪い続けるもの。

それで問題がないのなら、サーヴァントとして力を貸しましょう。

私が女王である事はもう変えようのない事実。

おまえには、私の臣下としての働きを期待します。

それとも、夫として妻として扱ってほしいですか？」

「……誰？」

俺と藤丸立香の音がハモリ、マーリンが大爆笑していた。

「サーヴァント、ランサー。秦良玉と申します。

マスター、よろしくお願ひします……あれ？」



まるでついでの様に出てしまった秦良玉が申し訳なさそうな顔をして、水着虞美人が目をそらしていたのは見なかった事にした。

この二騎の他にカルデア側は以下の鯖を獲得した。

パラケルスス（術）・ロムルス（槍）・マンドリカルド（騎）・荊軻（暗）

「で、ホームズはどっちにつくんだ？」

俺が代表してホームズに尋ねる。

ホームズは顎に手を当ててしばらく考えて口を開いた。

「もうしばらくは好きにさせてもらいたい」

「理由は？」

「言える範囲でいいならば、下手についてしまう事で両方の物語に支障が出る可能性が出る事だ。これが一つ」

「一つね。」

「という事は複数の理由がある訳だ」

俺の苦笑にホームズも苦笑するが、藤丸立香にはまだこの苦笑が分からない。

マーリンは何か察したのだろうが、あの涼し気な顔からは何も読み取れない。

「次に、この世界の複雑さかな。

謎が謎を呼んで、解決されずに積みあがる。

そうなると、今度は推理がパズルになる。

解決した結果、この世界に害が及びましたは本末転倒だろうか？」

ホームズの言葉に何も言い返せない俺。

そんな俺を見てホームズは肩をすくめた。

「とにかく、全ての物語が英国に向かっている。

それを解決するまでは、自由にさせてもらおうよ」

そんな事を言いながらホームズは今出てきたモルガンを眺める。

俺と藤丸立香は、未来に何をやらかしたのかと互いに視線をそらすしかできなかつた。

## 聖杯戦線 その1

「訓練？藤丸くんと？」

鯖整理も終わって帰るかという所でのグランドろくでなしの提案。

あのろくでなしの事だ。訓練名目で最悪こちらと敵対する可能性も含めての提案なのだろう。言うつもりもないし、マーリンも言わないだろうが。

「サーヴァントも増えたがマスターは相変わらず貴重だ。

彼女にはもつと経験が必要だ」

「まあ、私も居て扱っているけど、後輩の手もみたいってのは本当」

芥ヒナコがやる気のない声でろくでなしの提案を補足する。

「こつちとしても彼女を鍛えるのにやぶさかでない。

「いいだろう。で、具体的なルールは？」

俺の質問にマーリンはあつさりと言。

「全力で。

「そうでないと彼女を鍛えられない」

という訳で、後日プリズマコース内全域を使った大規模訓練が行われた。訓練という事もあって、藤丸立香側は七騎の鯖を選出して水晶宮に陣を敷き、俺は風の海に艦隊を浮かべる。戦力はこんな感じ。

藤丸立夏

シールダー

マシユ

セイバー

斎藤一

バーサーカー

茨木童子

アサシン

酒吞童子

アーチャー

エミヤ

バーサーカー

土方歳三

キヤスター

マーリン

入即出やる夫

艦娘

叢雲

参謀 パプテマス・シロッコ

艦娘兼鯖

マシユ風

船長 フランシス・ドレイク

艦娘兼鯖

ジャンヌダルク

シーマ陸戦隊

戦闘妖精少女達

セイバー

モードレット

アサシン

ステンノ

ルーラー

卑弥呼

キヤスター

孔明

「相変わらずの閣下で何より」

今回の参謀役はシロツコである。

孔明をキヤスターとして前に出したのもあるが、軍人として正規士官教育を受けているのがポイント。

数で押すタイプの指揮はどうしても専門性が必要になる。

あと、艦娘にはちゃんと人員を乗せているのもポイントで、こういう時の為にハイデッカーやオイランロイドやクローン対魔忍をかき集めたのである。

もちろん、付き合ひのある新島三佐以下海自隊員たちは叢雲に乗せていたり。

「俺は何もできないからな。」

できる人間をかき集めてやつとこの盤面だ。  
部隊の指揮は任せた。

鯖はこつちでなんとかするよ」

当たり前のようにいる卑弥呼様とか。

もうあきらめているが。

開始の合図の光が中立地帯に上がる。

シロツコはためらうことなく俺にこう進言した。

「まずはご挨拶のミサイルを撃ち込みたいのですが？」

「許可する。派手にやりたまえ」

という訳で、戦闘妖精少女たちによるミサイル攻撃。

マーリンが居たので幻術を使ったのだろう。

目立った被害はなかった。

かくして、主戦場となる中立地帯への戦闘に移行する。

中立地帯の戦闘

やる夫側の進出

## 藤丸側の進出

45

「こちらシーマ陸戦隊。

モードレッドと共に上陸しましたが、中央に『誠』の旗が立っています。

指示を」

こちらが上陸しなければならないのに対して向こうは歩いて中立地帯に行けるのは織り込み済みである。

それでもこちらは艦隊を浮かべたかったのだから、許容すべきデメリットである。

「交戦は控えろ。

交戦が始まったら砲撃で支援する」

シーマ陸戦隊はおそらくモブ敵扱いだろうが、それでも対処するためには鯖を動かさないといけない訳で。

モードレッドとシーマ陸戦隊を潰す場合、艦隊の砲撃と戦闘妖精少女の航空攻撃を同時に受ける事になる。

藤丸鯖は近代日本鯖が多いから、砲火力の怖さを知って足を止めるだろう。

「で、ハハハからどう出るっ」



「閣下も人が悪い。」

この場所が戦場なのに、この場所にいらつしやる人を排除しなかった。取り込み合戦になるでしような」

「まあ、ハンデだよ。ハンデ。」

艦内に君みたくないイカサマを入れる為のね」

本当に本気ならばこれも番外から外すが、そこまで俺も鬼ではない。

このプリズマコーズ内に居る第三勢力は以下の通りだ。

#### 大図書館

パチユリー・ノーレッジと紅魔館勢

お菓子之城

アリス・マーガトロイドと赤おじさんと黒おじさん

深雪之城

メイヴ軍団

この三勢力を取り込めるかどうかで勝敗は変わるだろう。シロッコがマップを確認しながら淡々と語る。

「現状のポイントは制空権で、これは戦闘妖精少女たちのおかげでこちらが確保しています。」

ですが、この戦闘妖精少女は敵アーチャーによって撃ち落される可能性が高い。

開幕のミサイル攻撃は、敵アーチャーを本陣に固定させるのが狙いの一つでした」

マーリンが居るから初撃は防げるが、幻術回復の間はアーチャーで撃ち落としに来るだろう。

それは、アーチャーを本陣に張り付ける結果となり、アーチャーが中立地帯に進出して彼の弓で艦隊を直撃する可能性が減る効果になっていた。

「この戦場において、戦闘妖精少女を撃墜できる能力を持っているのは紅魔館のお嬢様がただ。」

こちらとしては早めに接触して、制空権を盤石なものにしたいですね」

シロツコの言葉に俺は頷く。

ありがたい事に艦隊の居る『大海原と竜の国』と『死せる書架の国』はお隣である。早めに接触して、味方もしくは好意的中立になってもらおう。

## 藤丸立香の行動

### 1 中立地帯の掌握

2 同上

3 『死せる書架の国』への接触

4 『雪華とハチミツの国』への接触

5 アーチャーによる戦闘妖精少女の撃墜

6 どないしよ？

2 中立地帯の掌握

(おい。マスター。

向こうの連中、突っ込んできやがったぞ。

戦っていいんだろ？)

(嬉しそうに言うな。嬉しそうに。任せる)

(そこなくっちゃ！)

中立地帯での戦闘に俺はステンノの方を見て頭を下げる。

彼女はいつもと同じように笑顔だった。

「女神様。どうか御出陣をお願いしたく」

「あらあら大変。

遊んでみるぐらいしかできないのだけど？」

# 聖杯戦線 その2

中立地帯の戦闘

藤丸側

参加鯖5騎

セイバー

斎藤一 80

バーサーカー

茨木童子 80

アサシン

酒呑童子 90

アーチャー

エミヤ 80

バーサーカー

土方歳三 90

合計	420
やる夫側	
セイバー	
モードレッド	90
シーマ陸戦隊	モブ扱い
支援砲撃(÷2で処理)	
艦娘	
叢雲	$175 \times 81\% \div 2 = 70$
艦娘兼鯖	
マシユ風	80
艦娘兼鯖	
ジャンヌダルク	90
アサシン	
ステンノ	100
合計	430

戦力比 ほぼ1:1

結果

1 藤丸側勝利 やる夫側大ダメージ 撤退

2 藤丸側勝利 やる夫側消耗 撤退

3 藤丸側勝利 やる夫側消耗

4 戦力均衡 戦闘継続

5 戦力均衡 戦闘継続

6 戦力均衡 戦闘継続

7 やる夫側勝利 藤丸側消耗

8 やる夫側勝利 藤丸側消耗 撤退

9 やる夫側勝利 藤丸側大ダメージ 撤退

10 熱烈歓迎

結果 4

戦力均衡 戦闘継続

「イ」ちらシーマ陸戦隊。

敵サーヴァント五騎が突っ込んできます！

今、モードレッドが突貫して行きました!!」

「支援砲撃！」

奴らを近づかせな!!」

無線からのシーマ中佐の声にシロツコが即座に艦砲射撃を指示する。

思った以上に藤丸側はガンブラーでこっちは即座に令呪を切った。

「令呪を持って命ず。

ステンノ。戦場に現れよ」

これが無ければ、こっちが押し負けていただろう。

暴れていた土方歳三と斎藤一を『魅惑の美声』と『女神の微笑』で抑えたのだから。

結果モードレッドが暴れる……という結果に終わらないのが聖杯戦争で。

「たいしてイケメンもおらへんなあ……」

酒呑童子の『果実の酒気』シーマ陸戦隊が魅了され崩すに崩しきれない。

現在の中立地帯はそんな状況になっていた。

「押し切りましょう」

「戦力の逐次逗投入は愚策です。

勝つならば全力で」

シロッコと新島参謀の言葉が同じなので俺も頷いで命ずる。

「艦隊を中立地帯に向けろ！」

一気に勝負をかける！

戦闘妖精少女も出撃させろ!!」

藤丸立香の反応

1 残りも出して決戦

2 損害覚悟で撤退

3 どないしよ？

3 どないしよ

「面白そうな事をしているじゃない!!」

「私たちも混ぜて♪」

大図書館から出てきた反応はレミリア・スカーレットにフランドール・スカーレットの二人の吸血鬼。

前回見事に暴れられなかったのにこんな面白い事したらそりや、出てきたくもなろう



と言うもの。

(死にはしないし、死なせることもないわよ。

まあ、付き合っただげて頂戴)

連絡を入れた。パチュリーもさじを投げていた。

「あの二人の吸血鬼は敵対勢力として扱え！」

全力で防空戦闘をしないと、艦隊が沈められるぞ!!」

## 結果

- 1 やる夫側勝利 消耗しつつも中立地帯確保
- 2 藤丸側勝利 消耗しつつも中立地帯確保
- 3 吸血鬼姉妹勝利 両者消耗しつつ中立地帯放棄
- 1 やる夫側勝利 消耗しつつも中立地帯確保

## 第三勢力の横殴り。

まず普通の聖杯戦線ならありえない事態の勝敗を決めたのは、投入戦力の差だった。

全戦力を投入して勝ちに来た俺たちは、吸血鬼姉妹の横殴りに耐えるだけの戦力があつたが、藤丸側にはその力は残っていなかった。

結果、遊び疲れた吸血鬼姉妹が去った後中立地帯に立っていたのは俺たちということになる。

とはいえ、代償はそれなりに大きく、シーマ陸戦隊と戦闘妖精少女は戦闘不能に追い込まれ、モードレッドも消耗。さらに令呪を一つ切つてジャンヌ・ダルクの『我が神はここにありて』で乗り切る始末。

それでも、序盤の山場は俺たちが勝ち、中立地帯を押さえた上に吸血鬼姉妹という駒が取り除かれた。

「さてと、要衝を押さえたはいいがここからどう出るかな？」

「互いに消耗したのは事実ですが、向こうも逆転の目がない訳ではありません。

向こうのアーチャーを消耗できなかったのは、少し痛いですね」

「敵の選択肢は二つです。

ここに再度突貫するか、中立勢力を味方につけるか」

「来たとしても私たちの砲撃でなんとかなるんじゃない？」

俺、シロツコ、新島参謀、叢雲の順に口を開く。

有利ではあるが勝ち切れない。

そんな状況だからこそ、盤面を整理する必要がある。

「中立勢力を押さえるか。」

無理せず互いに消耗していけば、戦力差でこっちが勝つ」

藤丸側は隣接するメイヴ軍団を取り込もうとするだろう。

ならば、こっちはアリス・マーガトロイドを取り込むのみ。

「無難な策をとろう。」

警戒しつつ体を休めてくれ」

（令呪は二画まで回復したが、藤丸立香が令呪を使わなかったと仮定した場合、一画余る令呪を誰の回復に当てるのだろうか？）

こうして、聖杯戦線の一日目は終了し、戦いは二日目の中盤戦に入る。